（財）大阪府文化財センター調査報告書　第106集

東大阪市所在

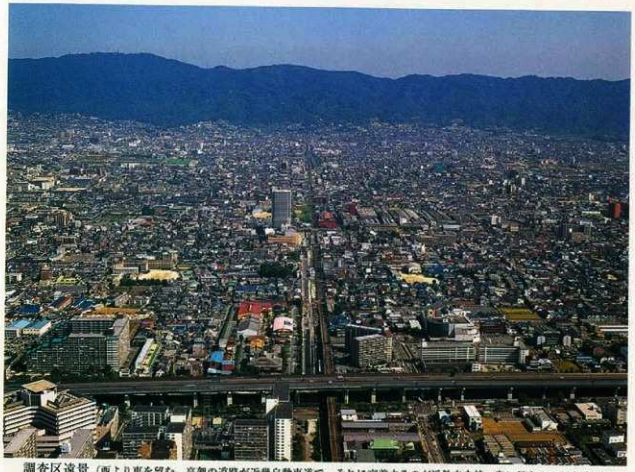
瓜生堂遺跡 1

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

―本文編―

2004年2月

財団法人　大阪府文化財センター



調査区遠景（西より東を望む、高架の道路が近畿自動車道で、それに交差するのが近鉄奈良線、奥に見えるのが生駒山）

99－4区弥生時代前期竪穴住居（西から）

01－3区弥生時代前期水田面（西から）

99－5区方形周溝墓（東から）

01－3区弥生時代中期方形周溝墓（南東から）

99－5区方形周溝墓S05240主体部（南から）

99－6区弥生時代後期遺構面全景（北西から）

99－6区中世遺構面全景（南東から）

弥生時代前期土器集合

弥生時代中期方形周溝墓出土土器集合

弥生時代後期集石遺構 1 出土土器集合

古墳時代埴輪集積遺構出土円筒埴輪集合

序　　文

瓜生堂遺跡の位置する大阪府東大阪市周辺は、遙か昔の縄文時代には海であった。それが次第に陸化し、大阪湾から河内潟へ、河内潟から河内湖へと変化を遂げたことはよく知られている。河内平野の扇状地付近にあたる湿潤な土地には水や食料を求めて人々が集まり、人間の活動も採集から生産へと変化を遂げてムラが形成された。弥生時代には盛んな生産や交易が行われていたことも、過去の調査成果により明らかになりつつある。地の利を活かした、いわば近世期の商都大阪の繁栄を彷彿とさせる萌芽がその数千年の昔からあったと言えよう。

瓜生堂遺跡は河内平野の遺跡の中でも、近畿地方の弥生時代を代表する遺跡と言っても過言ではない。中央環状線・近畿自動車道関連の工事を端緒に調査が行われ、瓜生堂２号方形周溝墓等の弥生時代一大墓群の発見は1970年代の考古学史上に残る出来事だった。その後現在まで三十年以上にわたって調査は継続され、弥生社会の様相解明に大きな功をもたらした。

今回の発掘調査は、近畿日本鉄道の奈良線立体交差化事業に伴うものであり、今まで調査のあまり及んでいなかった瓜生堂遺跡の北東部を解明する格好の機会となった。調査地の北側は東大阪市の道路再開発事業によりやはり発掘調査が行われており、あわせて東西１kmにわたる調査が可能となった。その結果、弥生時代前期から水田開発や集落造営がなされていたこと、弥生時代中期には方形周溝墓を主とする墓域や集落が形成されていたこと、その後も中世には集落が形成されるなど、連綿と人間の生活行為が行われていたことが明らかとなった。

これらの発掘調査および整理事業の実施にあたっては、近畿日本鉄道、大阪府八尾土木事務所、大阪府教育委員会などの関係各位のご協力とご指導の賜物と感謝する。

2004年２月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水野　正好

例　　言

1．本書は、大阪府東大阪市西岩田町３・４丁目、岩田町１丁目に所在する瓜生堂遺跡（うりうどういせき）の発掘調査報告書である。

2．調査は近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴い大阪府八尾土木事務所から平成12年１月14日～平成16年３月31日の間委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は（その１）から（その３）に分けて行った。（その１）が平成11年２月９日～平成13年11月30日、（その２）が平成14年１月16日～平成14年５月31日、（その３）が平成14年11月１日～平成15年３月28日まで実施し、整理事業は平成14年８月１日～平成16年３月31日まで行った。

3．調査は以下の体制で実施した。

〔平成11年度〕

調査部長	井藤　徹	中部調査事務所所長	赤木克視
調査第三係長	國乗和雄		
技師	秋山浩三	専門調査員	朝田公年

〔平成12年度〕

調査部長	井藤　徹	中部調査事務所所長	藤田憲司
調査第一係長	一瀬和夫	中河内調査班長	秋山浩三
技師	川瀬貴子	専門調査員	朝田公年

〔平成13年度〕

調査部長	井藤　徹	中部調査事務所所長	藤田憲司
調査第三係長	秋山浩三		
技師	川瀬貴子	専門調査員	朝田公年

〔平成14年度〕

調査部長	玉井　功	中部調査事務所所長	藤田憲司
調査第三係長	辻本　武	技師	川瀬貴子
専門調査員	田之上裕子・宮田佳代		

〔平成15年度〕

調査部長	玉井　功	中部調査事務所所長	小野久隆
調査第二係長	金光正裕		
技師	川瀬貴子	専門調査員	宮田佳代

4．遺物の撮影にあたっては中部調査事務所主査片山彰一が、木製品・金属製品ほかの保存処理については同主査山口誠治が行った。その他に市村慎太郎、井上智博、市本芳三、駒井正明、三好孝一、若林邦彦、若林幸子、森本徹、南出俊彦、小野亜由美、河村恵理、手島美香、松尾洋次郎、多賀晴司、三浦基行など当センター職員・専門調査員の協力を得た。また、発掘調査および整理作業には、当センター非常勤職員として以下の方ほかの参加、協力を得た（五十音順）。

青山由美子、池谷（関）梓、今田明子、井筒美智与、井上敦子、岩下明正、岩崎美紀子、榎本雅則、川崎朝子、川崎理恵、喜田真澄、久木真美、杉本友美、瀧川貴文、田中英子、田中正子、泊清治郎、中川二美、長友（中村）朋子、那須三枝子、藤井文子、藤原夏青、文谷由紀江、槙原美智子、松井章子、松井晴美、松岡聖美、松下知代、松下知世、松本直美、八十千里、山田久美、柚木康伸

5．調査の実施や整理にあたっては、次項6中の方以外に、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して感謝する。（順不同、敬称略）

一瀬和夫・大野薫・阪田育功・堀江門也・松岡良憲・山田隆一（大阪府教育委員会）、積山洋・田中清美・大庭重信・趙哲済・小倉徹也（財団法人大阪市文化財協会）、下村晴文・福永信雄・千喜良淳（東大阪市教育委員会）、中西克宏（東大阪市立郷土博物館）、金村浩一・別所秀高（財団法人東大阪市文化財協会）、吉田野乃（八尾市教育委員会）、北野重・安村俊史（柏原市教育委員会）、野島稔（四條畷市教育委員会）、上田健太郎・加古千恵子・中村弘（兵庫県教育委員会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、秋山進午（大手前大学史学研究所）、都出比呂志・福永伸哉・高橋照彦・寺前直人（大阪大学）、中村大介（大阪大学大学院）、関真一（吉備町教育委員会）、仲原知之（和歌山県教育委員会）、山崎頼人（小郡市埋蔵文化財センター）、伊賀高広・中川和哉（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）、久家隆芳・坂本憲昭・出原恵三（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）、森田尚宏（高知県教育委員会）、大久保徹也（徳島文理大学）、下條信行・村上恭通（愛媛大学）、梅木謙一（松山市考古館）、松井章（奈良文化財研究所）、大山幹成（東北大学大学院理学研究科付属植物園）、藤井裕之（京都大学大学院）、鐘ヶ江賢二（日本学術振興研究員・九州大学）、中西靖人（帝塚山大学）、荻田昭次（日本考古学協会員）

6．自然科学分析などは下記に依頼した。

〔花粉・珪藻・植物珪酸体分析〕古環境研究所

〔種実同定〕古環境研究所

〔貝類同定〕池田研（財団法人 大阪市文化財協会）

〔炭素年代測定〕小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本稔・松崎浩之・陳建立（国立歴史民俗博物館ほか）

〔樹種同定〕中原計（大阪大学大学院）

〔地層堆積〕松田順一郎（財団法人 東大阪市文化財協会）

また、下記3名の方には現地指導いただいた。

〔人骨・獣骨同定〕安部みき子（大阪市立大学大学院医学研究科）

〔地震痕跡調査〕寒川旭（独立行政法人 産業技術総合研究所）

〔石材同定〕冨田克敏（近畿大学教職教育部）

その報告は報告書第7・8章に掲載した（他に石製品の石材同定結果は本文編中に掲載）。

7．報告書の執筆分担は、本文各節・項等の最後には個別に、目次にはまとめて記した。編集は川瀬・秋山があたった。

8．本調査に関わる写真・実測図などの資料は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．実測図の基準高は東京湾平均海面（T.P.）を使用する。

2．座標は国土座標の第Ⅵ座標系に準拠し、座標の単位はすべてmである。座標は世界測地系でなく、日本測地系で表現してある。方位は座標北である。

3．調査や遺物整理は当センターの「遺跡調査基本マニュアル」に準拠して行った。地区割りの第Ⅰ・第Ⅱ区画は大H－6－2・A1～A5である。

4．土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1999年版通商産業省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

5．遺構番号は基本的には調査時のものを使用した。遺構番号の付け方は99年度調査分は、遺構を表すSのあとに2桁で調査区名（01～10）、調査区毎の3桁の通し番号がつく。01・02年度調査分はSのあとにその2またはその3を表す数字、1桁の調査区名（1～3、2～4）、調査区毎の3桁の通し番号がつく。遺構種類毎に整理したり、連番が必要なものには新たに遺構種類と連番からなる遺構番号を与えたが、旧の番号も併記してある。

（例）　・99年度調査99－1区検出の遺構の場合　S01150
　　・99年度調査99－10区検出の遺構の場合　S10400
　　・01年度調査01－1区検出の遺構の場合　S21200
　　・02年度調査02－3区検出の遺構の場合　S33100
　　・旧番号　S01150　　新番号　自然流路1

6．遺構実測図については各項冒頭の全体平面図が1／2000、調査区平面図が1／200、遺構平断面図が1／10・1／20／1／50等を使用する。その他も各図にスケールを用いて表記してある。

7．遺物番号は99・01年度調査分については下記のように頭に時代順の番号を付け、掲載順に4桁の通し番号を与えた。02年度調査分は頭に9をつけ4桁の通し番号とした。また、遺物挿図中で土器の遺物番号に下線が引いてあるものは生駒山西麓産胎土であることを示す。丹塗りの表現は陰時トーンで示した。

（例）　弥生時代前期　3001～3999　　古代　7001～7999
　　弥生時代中期　4001～4999　　中世　8001～8999
　　弥生時代後期　5001～5999　　02年度　9001～9999
　　古墳時代　6001～6999　　生駒山西麓産胎土　3001

8．遺物は土器、土製品、木製品、石製品、その他（金属製品・瓦・埴輪など）の順で掲載した。また、縮尺は土器展開図が1／4（大形1／6）、同断面・拓本のみのものが1／3、土製品が1／2、木製品が1／2・1／4・1／6、石製品が2／3・1／2・1／3・1／4、金属製品が1／2、軒丸・軒平瓦が1／3、平瓦が1／6、埴輪が1／4となっている。縮尺は各挿図にスケールで示した。木製品の断面中年輪は模式的に表現した。

9．写真図版は俯瞰写真はほぼ1／2・1／4・1／3となっている。

本 文 目 次

巻頭図版
序文
例言
凡例
目次
〈本文編〉
第1章　位置と環境 …… （川瀬）…… 1
第2章　既往調査区の成果 …… （川瀬）…… 4
第3章　調査にいたる経緯と経過 …… （秋山）…… 9
第4章　調査の方法 …… （川瀬）…… 14
第5章　99・01年度発掘調査の成果 …… 16
　第1節　基本層序と各区遺構面の対応関係 …… （川瀬・朝田）…… 16
　第2節　縄文時代晩期以前の様相 …… （川瀬・朝田）…… 28
　第3節　弥生時代前期の様相 …… 29
　　1．遺構面と遺構 …… （川瀬・朝田）…… 29
　　2．遺物 …… （秋山・手島・中川・宮田）…… 49
　第4節　弥生時代中期の様相 ……104
　　1．遺構面と遺構 …… （川瀬）……104
　　2．遺物 …… （秋山・中川・長友・手島・宮田）……160
　第5節　弥生時代後期～庄内式期の様相 ……223
　　1．遺構面と遺構 …… （川瀬・朝田）……223
　　2．遺物 …… （秋山・中川・河村・手島・宮田）……260
　第6節　古墳時代の様相 ……308
　　1．遺構面と遺構 …… （川瀬）……308
　　2．遺物 …… （川瀬・池谷・瀬川）……312
　第7節　古代の様相 ……344
　　1．遺構面と遺構 …… （川瀬）……344
　　2．遺物 …… （川瀬）……346
　第8節　中世以降の様相 ……348
　　1．遺構面と遺構 …… （川瀬）……348
　　2．遺物 …… （川瀬・手島・宮田・中川・池谷・秋山）……395
第6章　02年度確認調査の成果 ……444
　第1節　基本層序と99・01区遺構面との対応関係 …… （川瀬）……444
　第2節　弥生時代前期の様相 …… （川瀬）……448
　　1．遺構面と遺構 ……448
　　2．遺物 ……450
　第3節　弥生時代中期の様相 …… （川瀬）……451
　　1．遺構面と遺構 ……451
　　2．遺物 ……452
　第4節　弥生時代後期～庄内式期の様相 …… （川瀬）……453
　　1．遺構面と遺構 ……453
　　2．遺物 ……455

第５節　古墳時代の様相 ……（川瀬）……456
１．遺構面と遺構 ……456
２．遺物 ……457
第６節　古代・中世以降の様相 ……458
１．遺構面と遺構 ……（川瀬）……459
２．遺物 ……（川瀬・手島）……461
第７節　まとめ ……（川瀬）……461

瓜生堂遺跡関係文献・参考文献 ……462
報告書抄録

〈考察・分析・写真図版編〉
第７章　調査成果の検討と位置づけ ……465
第１節　初期農耕集落としての瓜生堂遺跡 ……（秋山）……465
第２節　弥生中期大形集落・瓜生堂遺跡の一構成単位 ……（秋山）……483
第３節　方形周溝墓研究と近畿弥生社会復原への展望 ……（中村・秋山）……499
第４節　瓜生堂遺跡における生駒山西麓産弥生土器の占有率
……（秋山・中川・長友・河村）……543
第５節　弥生土器における色調研究への模索 ……（長友・秋山）……551
第６節　近畿の下川津Ｂ類土器をめぐって ……（中川・秋山）……565
第７節　"土佐産"弥生後期土器の近畿初見例をめぐる検討 ……（秋山・河村）……577
第８節　弥生時代における打製石器製作技術の変容 ……（手島・秋山）……597
第９節　樹種からみた集落環境と弥生木器生産 ……（中原・秋山）……609
第10節　瓜生堂遺跡周辺の中世集落環境の変遷 ……（川瀬）……633

第８章　自然科学分析報告 ……645
第１節　瓜生堂遺跡における植物珪酸体・花粉・珪藻分析 ……（古環境研究所）……645
第２節　瓜生堂遺跡における種実同定 ……（古環境研究所）……677
第３節　瓜生堂遺跡出土の貝類について ……（池田）……686
第４節　瓜生堂遺跡出土の人骨と動物遺体 ……（安部）……690
第５節　瓜生堂遺跡出土の石材－弥生時代後期遺構面の自然石－ ……（冨田）……696
第６節　大阪府瓜生堂遺跡出土弥生～古墳時代土器の^{14}Ｃ年代測定
……（小林・春成・今村・坂本ほか）……715
第７節　瓜生堂遺跡99－９区、弥生時代中・後期堆積物の薄片試料観察結果
……（松田）……727
第８節　瓜生堂遺跡99－６区で検出された液状化跡 ……（寒川）……732

第９章　まとめと問題点 ……739
瓜生堂遺跡北東部の遺跡展開と周辺地域の動態 ……（川瀬・秋山）……739

写真図版
報告書抄録

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版1
調査区遠景
99－4区弥生時代前期竪穴住居
巻頭図版2
01－3区弥生時代前期水田面
99－5区方形周溝墓
巻頭図版3
01－3区弥生時代中期方形周溝墓
99－5区方形周溝墓S05240主体部
巻頭図版4
99－6区弥生時代後期遺構面全景
99－6区中世遺構面全景
巻頭図版5
弥生時代前期土器集合
弥生時代中期方形周溝墓出土土器集合
巻頭図版6
弥生時代後期集石遺構1出土土器集合
古墳時代埴輪集積遺構出土円筒埴輪集合

挿 図 目 次

図1 周辺遺跡分布図 2
図2 瓜生堂遺跡の範囲 5
図3 調査区配置と地区割 15
図4 基本層序断面模式図－1 21
図5 基本層序断面模式図－2 22
図6 基本層序断面模式図－3 23
図7 基本層序断面模式図－4 24
図8 基本層序断面模式図－5 25
図9 基本層序断面模式図－6 26
図10 縄文時代晩期以前遺構面全体図 28
図11 弥生時代前期遺構面全体図 29
図12 弥生時代前期遺構面平面図－1 30
図13 弥生時代前期遺構面平面図－2 31
図14 弥生時代前期遺構面平面図－3 32
図15 弥生時代前期遺構面平面図－4 33
図16 弥生時代前期遺構面平面図－5 34
図17 弥生時代前期遺構面平面図－6 35
図18 99－3区第23・22面ピット平面図・断面図 36
図19 99－3区第22面掘立柱建物S03500平面図・ピット断面図 37
図20 99－3区第22面溝S03371断面図 38
図21 99－3区第22面溝S03380断面図 38
図22 99－3区第21・20面住居跡S03350平面図・断面図 39
図23 99－3区第21・20面溝S03371B断面 40
図24 99－3区第20面集石遺構S03320出土状況図 40
図25 99－4区第26面溝平面図・断面図 41
図26 99－4区第25面東端部溝・土坑断面図 42
図27 99－4区第25面土坑S04184平面図・断面図 43
図28 99－4区第24面住居跡S04300平面図・断面図 44
図29 99－5区第25・24面溝・土坑断面図 46
図30 01－2区第17・16面溝S22215・S22210断面図 47
図31 01－3区第20面畦畔平面図・断面図 48
図32 弥生時代前期土器実測図－1 50
図33 弥生時代前期土器実測図－2 51
図34 弥生時代前期土器実測図－3 52
図35 弥生時代前期土器実測図－4 53
図36 弥生時代前期土器実測図－5 54
図37 弥生時代前期土器実測図－6 55
図38 弥生時代前期土器実測図－7 57
図39 弥生時代前期土器実測図－8 58
図40 弥生時代前期土器実測図－9 59
図41 弥生時代前期土器実測図－10 61
図42 弥生時代前期土器実測図－11 62
図43 弥生時代前期土器実測図－12 64
図44 弥生時代前期土器実測図－13 65
図45 弥生時代前期土器実測図－14 66
図46 弥生時代前期土器実測図－15 67
図47 弥生時代前期土器実測図－16 68
図48 弥生時代前期土器実測図－17 69
図49 弥生時代前期土器実測図－18 70
図50 弥生時代前期土器実測図－19 71
図51 弥生時代前期土器実測図－20 72
図52 弥生時代前期土器実測図－21 73
図53 弥生時代前期土器実測図－22 75

図54　弥生時代前期土器実測図－23　76
図55　弥生時代前期土器実測図－24　77
図56　弥生時代前期土器実測図－25　78
図57　弥生時代前期土器実測図－26　80
図58　弥生時代前期土器実測図－27　80
図59　弥生時代前期土器実測図－28　81
図60　弥生時代前期土器実測図－29　81
図61　弥生時代前期土製品実測図－1　85
図62　弥生時代前期土製品実測図－2　86
図63　弥生時代前期土製品実測図－3　87
図64　弥生時代前期土製品実測図－4　88
図65　弥生時代前期木製品実測図　91
図66　弥生時代前期石製品実測図－1　97
図67　弥生時代前期石製品実測図－2　98
図68　弥生時代前期石製品実測図－3　99
図69　弥生時代前期石製品実測図－4　100
図70　弥生時代前期石製品実測図－5　101
図71　弥生時代前期石製品実測図－6　102
図72　弥生時代前期石製品実測図－7　103
図73　弥生時代中期遺構面全体図　104
図74　弥生時代中期遺構面平面図－1　105
図75　弥生時代中期遺構面平面図－2　106
図76　弥生時代中期遺構面平面図－3　107
図77　弥生時代中期遺構面平面図－4　108
図78　弥生時代中期遺構面平面図－5　109
図79　弥生時代中期遺構面平面図－6　110
図80　弥生時代中期遺構面平面図－7　111
図81　弥生時代中期遺構面平面図－8　112
図82　弥生時代中期遺構面平面図－9　113
図83　01－1区第13面遺構断面図　114
図84　99－1区第15面周溝S01184内供献土器出土状況図　115
図85　01－2区第11面溝平面図・断面図　116
図86　01－3区第10面方形周溝墓S23200・周溝S23201平面図・断面図　117
図87　01－3区第10面方形周溝墓S23200主体部S23205平面図・断面図　118
図88　01－3区第10面方形周溝墓S23200供献土器出土状況図　119
図89　99－3区第14面遺構平面図・断面図－1　120
図90　99－3区第14面遺構平面図・断面図－2　121
図91　99－3区第14面方形周溝墓S03200平面図・断面図　122
図92　99－3区第14面方形周溝墓S03200供献土器出土状況図　123
図93　99－5区第19面方形周溝墓群平面図　124
図94　99－5区方形周溝墓群・堤状遺構模式断面図　125
図95　99－5区第19面方形周溝墓S05200平面図・断面図　126
図96　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－1　128
図97　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－2　129
図98　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－3　130
図99　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－4　131
図100　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－5　132
図101　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－1　132
図102　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－2　133
図103　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－3　134
図104　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－4　134
図105　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－5　135
図106　99－5区第19面方形周溝墓S05220・S05240平面図・断面図　136
図107　99－5区第19面方形周溝墓S05220供献土器出土状況図　138
図108　99－5区第19面方形周溝墓S05220主体部平面図・断面図　139
図109　99－5区第19面方形周溝墓S05240供献土器出土状況図　140
図110　99－5区第19面方形周溝墓S05240主体部平面図・断面図－1　141

図111 99－5区第19面方形周溝墓S05240主体部平面図・断面図－2 142
図112 99－5区第19面方形周溝墓S05240主体部平面図・断面図－3 143
図113 99－5区第19面堤状遺構S05260土器棺(S05261)出土状況図 144
図114 99－6区第20面溝S061330・S061340A断面図 145
図115 99－6区第19面土器棺墓出土状況図 146
図116 99－7区第17面溝S07080断面図 148
図117 99－8区第12面溝S08080・堤状遺構S08081・S08082平面図・断面図 148
図118 99－9区第10面溝S09051・堤状遺構S09050断面図 149
図119 99－10区第13面低湿地状遺構S10100断面図 150
図120 99－10区西端部遺構平面図－1 151
図121 99－10区西端部遺構平面図－2 152
図122 99－10区西端部遺構平面図－3 153
図123 99－10区第13面溝S10400田下駄出土状況図 154
図124 99－10区第13面井戸S10401W・E平面図・断面図 155
図125 99－10区第13面井戸S10623平面図・断面図 156
図126 99－10区第10面井戸S10109平面図・断面図 157
図127 99－3区第14面土器平面図及び土器出土位置図 158
図128 99－5区第19面平面図及び土器出土位置図 159
図129 弥生時代中期土器実測図－1 160
図130 弥生時代中期土器実測図－2 162
図131 弥生時代中期土器実測図－3 163
図132 弥生時代中期土器実測図－4 164
図133 弥生時代中期土器実測図－5 167
図134 弥生時代中期土器実測図－6 168
図135 弥生時代中期土器実測図－7 169
図136 弥生時代中期土器実測図－8 170
図137 弥生時代中期土器実測図－9 171
図138 弥生時代中期土器実測図－10 172
図139 弥生時代中期土器実測図－11 174
図140 弥生時代中期土器実測図－12 175
図141 弥生時代中期土器実測図－13 176
図142 弥生時代中期土器実測図－14 177
図143 弥生時代中期土器実測図－15 180
図144 弥生時代中期土器実測図－16 180
図145 弥生時代中期土器実測図－17 181
図146 弥生時代中期土器実測図－18 182
図147 弥生時代中期土器実測図－19 184
図148 弥生時代中期土器実測図－20 185
図149 弥生時代中期土器実測図－21 187
図150 弥生時代中期土器実測図－22 188
図151 弥生時代中期土器実測図－23 189
図152 弥生時代中期土器実測図－24 190
図153 弥生時代中期土器実測図－25 191
図154 弥生時代中期土器実測図－26 193
図155 弥生時代中期土器実測図－27 194
図156 弥生時代中期土器実測図－28 195
図157 弥生時代中期土器実測図－29 197
図158 弥生時代中期土器実測図－30 198
図159 弥生時代中期土器実測図－31 199
図160 弥生時代中期土器実測図－32 200
図161 弥生時代中期土器実測図－33 201
図162 弥生時代中期土器実測図－34 201
図163 弥生時代中期土製品実測図－1 203
図164 弥生時代中期土製品実測図－2 204
図165 弥生時代中期木製品実測図 206
図166 弥生時代中期石製品実測図－1 215
図167 弥生時代中期石製品実測図－2 216
図168 弥生時代中期石製品実測図－3 217
図169 弥生時代中期石製品実測図－4 218
図170 弥生時代中期石製品実測図－5 219
図171 弥生時代中期石製品実測図－6 220
図172 弥生時代中期石製品実測図－7 221
図173 弥生時代中期石製品実測図－8 222
図174 弥生時代後期～庄内式期遺構面全体図 223
図175 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－1 224
図176 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－2 225
図177 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－3 226
図178 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－4 227

図179 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－5 228
図180 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－6 229
図181 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－7 230
図182 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－8 231
図183 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－9 232
図184 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－10 233
図185 01－1区第9面畦畔平面図・断面図 234
図186 99－5区第18面土器群平面図 236
図187 99－5区第18面集石遺構1（S05190）平面図 237
図188 99－5区第18面木製品5354・5355出土状況図 238
図189 99－5区第16面土器群平面図 240
図190 99－5区第16面土坑S05180平面図・断面図 241
図191 99－5区第15面梯子(5360)出土状況図 241
図192 99－5区第14面土器群平面図－1 242
図193 99－5区第14面土器群平面図－2 243
図194 99－5区第14面木製品S05149出土状況図 244
図195 99－5区第10・9面間木製品S051200出土状況図 244
図196 99－6区第18面集石出土状況図－1 245
図197 99－6区第18面集石出土状況図－2 246
図198 99－6区第18面集石出土状況図－3 247
図199 99－6区第18面集石出土状況図－4 248
図200 99－6区第18面S061304断面図 249
図201 99－6区第17面集石遺構S061220出土状況図 251
図202 99－6区第14面土器群平面図－1 252
図203 99－6区第14面土器群平面図－2 253
図204 99－6区第14面土器出土状況図 254
図205 99－6区第9面土器群平面図－1 255
図206 99－6区第9面土器群平面図－2 255
図207 99－6区第9面土器群平面図－3 256
図208 99－7区第14面土器群平面図－1 257
図209 99－7区第14面土器群平面図－2 258
図210 99－7区第14面土器出土状況図 259
図211 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－1 260
図212 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－2 261
図213 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－3 264
図214 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－4 265
図215 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－5 266
図216 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－6 267
図217 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－7 268
図218 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－8 269
図219 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－9 270
図220 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－10 271
図221 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－11 273
図222 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－12 274
図223 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－13 275
図224 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－14 276
図225 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－15 278
図226 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－16 279
図227 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－17 281
図228 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－18 282
図229 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－19 284
図230 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－20 285

図231 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－21 286
図232 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－22 287
図233 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－23 288
図234 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－24 289
図235 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－25 290
図236 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－26 291
図237 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－27 292
図238 弥生時代後期～庄内式期土器実測図－28 293
図239 弥生時代後期土製品実測図 295
図240 弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－1 297
図241 弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－2 298
図242 弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－3 299
図243 弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－4 300
図244 弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－5 301
図245 弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－6 302
図246 弥生時代後期～庄内式期石製品実測図－1 305
図247 弥生時代後期～庄内式期石製品実測図－2 306
図248 古墳時代遺構面全体図 308
図249 古墳時代遺構面平面図－1 308
図250 古墳時代遺構面平面図－2 309
図251 01－2区第9面自然流路1（S22150）断面図 310
図252 01－2区第7面遺構平面図・断面図 311
図253 99－4区埴輪集積（S04001）出土状況図 313
図254 古墳時代土器実測図－1 314
図255 古墳時代土器実測図－2 315
図256 古墳時代土器実測図－3 316
図257 古墳時代土器実測図－4 317
図258 埴輪タガ形状分類図・タガ突出率算出図 318
図259 99－4区埴輪集積（S04001）接合関係図 319
図260 古墳時代埴輪実測図－1 320
図261 古墳時代埴輪実測図－2 321
図262 古墳時代埴輪実測図－3 322
図263 古墳時代埴輪実測図－4 323
図264 古墳時代埴輪実測図－5 324
図265 古墳時代埴輪実測図－6 325
図266 古墳時代埴輪実測図－7 326
図267 古墳時代埴輪実測図－8 327
図268 古墳時代埴輪実測図－9 328
図269 古墳時代埴輪実測図－10 329
図270 古墳時代埴輪実測図－11 330
図271 古墳時代埴輪実測図－12 331
図272 古墳時代埴輪実測図－13 332
図273 古墳時代埴輪実測図－14 333
図274 古墳時代埴輪実測図－15 334
図275 古墳時代埴輪実測図－16 336
図276 古墳時代埴輪実測図－17 338
図277 古代遺構面全体図 344
図278 古代遺構面平面図 345
図279 99－1区第9面土坑S01123平面図・断面図 345
図280 古代土器実測図 346
図281 中世遺構面全体図 348
図282 中世遺構面平面図－1 349
図283 中世遺構面平面図－2 349
図284 中世遺構面平面図－3 349
図285 中世遺構面平面図－4 350
図286 中世遺構面平面図－5 350
図287 中世遺構面平面図－6 351
図288 中世遺構面平面図－7 351
図289 中世遺構面平面図－8 352
図290 中世遺構面平面図－9 353
図291 中世遺構面平面図－10 354
図292 中世遺構面平面図－11 355
図293 中世遺構面平面図－12 356

図294 01－1区第5面掘立柱建物1平面図・断面図 357
図295 01－1区第2面遺構平面図・断面図 358
図296 01－1区第2面井戸S21019平面図・断面図 359
図297 01－1区第2面井戸S21022平面図・断面図 360
図298 01－1区第2面井戸S21052平面図・断面図 361
図299 99－1区第5面井戸S01099平面図・断面図 362
図300 99－2区第4面井戸S02095平面図・断面図 363
図301 01－2区溝S22001・溝S22030・土坑S22025断面図 365
図302 01－2区第6面掘立柱建物2平面図・断面図 365
図303 01－2区第2面掘立柱建物3平面図・断面図 366
図304 01－3区第4面池S23011断面図 367
図305 01－3区第2面溝S23001断面図 367
図306 99－3区第3面溝S03100・溝S03079断面図 368
図307 99－3区第3面井戸S03014平面図・断面図 370
図308 99－3区第3面井戸S03016平面図・断面図 371
図309 99－3区第3面井戸S03104・井戸S03160平面図・断面図 372
図310 99－3区第2面井戸S03090平面図・断面図 373
図311 99－4区第4面溝S04073・S04056、第3面溝S04040断面図 375
図312 99－4区第3面溝S04003断面図 376
図313 99－4区第4・3面祭地状遺構S04058平面図 377
図314 99－5区第4面井戸S05102平面図・断面図 378
図315 99－5区第3面溝S05010断面図 380
図316 99－5区第4面溝S05001・土坑S05090断面図 380
図317 99－5区第2面井戸S05070立面図・断面図 381
図318 99－6区第4面掘立柱建物4平面図・断面図 382
図319 99－6区第5・4面井戸S06951平面図・断面図 383
図320 99－6区第5面土坑S06923断面図 383
図321 99－6区第3面高まりS06300合成平面図 384
図322 99－6区第3面高まりS06300平面図・断面図 385
図323 99－6区第3面掘立柱建物5平面図・断面図 386
図324 99－6区第3面井戸S06333平面図・断面図 387
図325 99－6区第3面井戸S06505平面図・断面図 388
図326 99－6区第3面瓦器椀埋納土坑S06310・S06421平面図・断面図 388
図327 99－6区第3面土坑S06372・S06430断面図 388
図328 99－6区第3面礎石・柱遺存柱穴平面図・断面図 389
図329 99－6区第3面噴砂平面図・断面図 390
図330 99－6区第2面溝S06020・溝S06061・S06050・第3面溝S06460・S06461断面図 391
図331 99－7区第6面土坑S07001・S07002・溝S07005断面図 392
図332 99－7区第6面土坑S07013平面図・断面図 393
図333 99－8区第2面畦畔断面図 394
図334 中世土器実測図－1 396
図335 中世土器実測図－2 397
図336 中世土器実測図－3 398
図337 中世土器実測図－4 399
図338 中世土器実測図－5 401
図339 中世土器実測図－6 402
図340 中世土器実測図－7 404
図341 中世土器実測図－8 405
図342 中世土器実測図－9 406
図343 中世土器実測図－10 408

図344 中世土器実測図－11 409
図345 中世土器実測図－12 410
図346 中世土器実測図－13 411
図347 中世土器実測図－14 412
図348 中世土器実測図－15 414
図349 中世土器実測図－16 415
図350 中世土器実測図－17 416
図351 中世土器実測図－18 417
図352 中世土器実測図－19 418
図353 中世以降土製品実測図－1 421
図354 中世以降土製品実測図－2 422
図355 中世以降土製品実測図－3 423
図356 中世以降土製品実測図－4 424
図357 中世以降木製品実測図 426
図358 中世以降石製品実測図－1 429
図359 中世以降石製品実測図－2 430
図360 中世以降石製品実測図－3 431
図361 中世以降石製品実測図－4 432
図362 中世以降瓦実測図－1 436
図363 中世以降瓦実測図－2 437
図364 中世以降瓦実測図－3 438
図365 中世以降瓦実測図－4 439
図366 中世以降金属製品実測図－1 442
図367 中世以降金属製品実測図－2 443
図368 中世以降銭貨実測図 443
図369 99・01・02区配置図 445
図370 調査区配置図 446
図371 基本層序断面模式図 447
図372 02調査区遺構面全体図 448
図373 弥生時代前期遺構面平面図 449
図374 02－4・2・3区弥生時代前期遺構断面図 450
図375 弥生時代土器実測図 450
図376 弥生時代中期遺構面平面図 451
図377 02－4・3区弥生時代中期遺構断面図 452
図378 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－1 454
図379 弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－2 454
図380 02－4区第9面遺構断面図 455
図381 古墳時代遺構面平面図 455
図382 02－3区第5面須恵器出土状況図 456
図383 古墳時代土器実測図 456
図384 中世遺構面平面図－1 458
図385 中世遺構面平面図－2 458
図386 02－4・3区中世遺構断面図 460
図387 中世土器実測図 460
図388 中世以降金属製品実測図 461
図389 河内湖周辺部等における縄文晩期・弥生前期遺跡分布 465
図390 瓜生堂遺跡北東部における弥生前期遺構配置図 466
図391 河内平野弥生前期集落の分布状況（近畿自動車道関連調査部） 469
図392 近畿における初期環濠集落の様相 470
図393 周辺遺跡における弥生前期の建物遺構 471
図394 近畿における弥生前期水田関連資料－1 473
図395 近畿における弥生前期水田関連資料－2 474
図396 近畿における弥生前期水田関連資料－3 475
図397 近畿弥生開始期における金山産サヌカイトの搬入状況 476
図398 河内湖南沿岸域（ウォーターフロント）における初期弥生集落の展開 477
図399 縄文系集団と弥生系集団の具体的「共生」状況（長原遺跡・八尾南遺跡） 479
図400 瓜生堂遺跡北東部における弥生中期後半遺構配置図 484
図401 瓜生堂遺跡北東部における掘立柱建物復原案（中期後半） 486
図402 瓜生堂遺跡北東部における弥生中期前半（推定）の水田畦畔と石庖丁 488
図403 瓜生堂遺跡北東部出土の扁平片刃鉄斧と石庖丁製作途中品（中期後半） 489
図404 近畿弥生中期集落ほかにおける石庖丁製作途中品率 490
図405 瓜生堂遺跡および周辺域における弥生中期集落・墓域・水田域の分布傾向 492
図406 瓜生堂遺跡における弥生中期墓域の一様相 493
図407 瓜生堂遺跡周辺域における弥生中期・後期集落変遷様式図 494

図408 瓜生堂遺跡をめぐる近年の弥生集落研究動向 495
図409 池上曽根遺跡(和泉)の方形周溝墓 502
図410 池上遺跡(丹波)の方形周溝墓 503
図411 木棺の諸型式 503
図412 河内地域の木棺 504
図413 近畿地方におけるⅡ型木棺の棺材厚の推移 506
図414 瓜生堂遺跡小阪ポンプ場地点の方形周溝墓と穿孔土器 507
図415 城山遺跡の方形周溝墓と穿孔土器 507
図416 瓜生堂遺跡47－2次D区(東大阪市教育委員会調査)地点の方形周溝墓と穿孔土器 507
図417 穿孔形態の多様性－1(瓜生堂遺跡42次) 508
図418 穿孔形態の多様性－2(鬼塚遺跡・雲井遺跡) 508
図419 西ノ辻遺跡の方形周溝墓と供献土器 510
図420 河内湖周辺の主要弥生遺跡 543
図421 弥生中期の生駒山西麓産土器群と各集落における占有率 544
図422 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の推移データ－1(大別時期) 545
図423 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の推移データ－2(中期集落域・墓域別) 545
図424 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の消長－1(全器種別) 546
図425 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の消長－2(機能別) 546
図426 他遺跡における生駒山西麓産比率の消長(全器種別) 547
図427 亀井・城山遺跡の弥生中期集落・墓域における広口壺の生駒山西麓産比率 548
図428 池上曽根遺跡における"白い器台"と"赤い器台" 551
図429 近畿における"白・赤・黒の器台"の代表例 554
図430 遺跡間の色度比較(左)と保存良好点・不良点の色度(右) 558
図431 遺跡間の明度比較 558
図432 瓜生堂遺跡出土土器の器種別明度 559
図433 瓜生堂遺跡出土土器の器種別色度－1(生駒山西麓産胎土土器) 560
図434 瓜生堂遺跡出土土器の器種別色度－2(非生駒山西麓産胎土土器) 561
図435 受口状口縁壺の色度比較 561
図436 3遺跡の受口状口縁壺 562
図437 下川津B類土器の壺・高杯・甕(高松市上天神遺跡出土例) 566
図438 瓜生堂遺跡の下川津B類土器(壺・高杯)と大阪府下類例 568
図439 瓜生堂遺跡の下川津B類土器(甕) 569
図440 下川津B類土器出土遺跡分布図 574
図441 瓜生堂遺跡の"土佐産"弥生後期土器の詳細 579
図442 南四国地方ほかにおける類似資料出土遺跡分布 580
図443 南四国地方ほかにおける類似資料集成図－1 583
図444 南四国地方ほかにおける類似資料集成図－2 584
図445 南四国地方ほかにおける類似資料集成図－3 585
図446 具同中山遺跡における甕の形態分類・変遷図 589
図447 「南四国型甕」の変遷図 590
図448 近畿における"土佐産"土器関連資料 593
図449 宮崎県鬼付女西遺跡における"土佐産"弥生後期甕の出土状況 594
図450 瓜生堂遺跡における弥生前・中期のサヌカイト石核 599
図451 剥片の背面構成 601
図452 自然面の付着率 603
図453 二上山サヌカイトにおける自然面種類と各遺跡での割合 605
図454 自然面形状 606
図455 瓜生堂遺跡における弥生中期の製作途中木製品 628
図456 瓜生堂遺跡周辺中世後半期道・区割り 634
図457 中世(後期)集落の名区画と調査地周辺の条里地割の想定 635
図458 高まりS06300合成図("瓜生堂廃寺"基壇部) 636

図459 瓜生堂遺跡出土の軒平瓦・鬼瓦集成 637
図460 瓜生堂遺跡中世遺構図－1 640
図461 瓜生堂遺跡中世遺構図－2 641
図462－1 瓜生堂遺跡中世集落の時期別変遷－1 642
図462－2 瓜生堂遺跡中世集落の時期別変遷－2 643
図463 99－8・01－2・01－3区平断面サンプル採取位置－1 648
図464 99－8・01－2・01－3区平断面サンプル採取位置－2 648
図465 99－8・01－2・01－3区平断面サンプル採取位置－3 648
図466 99－8・01－2・01－3区平断面サンプル採取位置－4 648
図467 99－8・01－2・01－3区平断面サンプル採取位置－5 648
図468 99－8調査区におけるプラント・オパール分析結果 649
図469 01－2調査区におけるプラント・オパール分析結果 650
図470 01－3調査区東側におけるプラント・オパール分析結果 650
図471 01－3調査区西側におけるプラント・オパール分析結果 650
図472 01－3調査区遺構面におけるプラント・オパール分析結果 651
図473 99－5調査区弥生中期～後期断面図サンプル採取位置－1 652
図474 99－5調査区弥生中期～後期断面図サンプル採取位置－2 652
図475 99－5調査区周溝S05201セクション1における花粉ダイアグラム 662
図476 99－5調査区南壁における花粉ダイアグラム 662
図477 01－2調査区南壁における花粉ダイアグラム 662
図478 01－3調査区における花粉ダイアグラム 663
図479 99－8調査区南壁における花粉ダイアグラム 663
図480 99－5調査区S05201セクション1における主要珪藻ダイアグラム 669
図481 99－5調査区南壁における主要珪藻ダイアグラム 669
図482 01－2調査区南壁西側及び東側における主要珪藻ダイアグラム 669
図483 99－5区方形周溝墓人骨出土状況 691
図484 瓜生堂遺跡弥生時代後期遺構面集石グループ位置図 696
図485 グループ①の岩石種の構成 698
図486 グループ②の岩石種の構成 699
図487 グループ①の平均粒径と球形度の相関 700
図488 グループ②の平均粒径と球形度の相関 700
図489 グループ③の岩石種の構成 701
図490 グループ③の平均粒径と球形度の相関 702
図491 グループ④の岩石種の構成 703
図492 グループ④の平均粒径と球形度の相関 704
図493 炭素年代測定試料採取土器 721
図494 OSF12・OSF95・OSF98・OSF109の^{14}C測定による較正暦年代 722
図495 OSF110・OSF111・OSF165の^{14}C測定による較正暦年代 723
図496 瓜生堂遺跡99－9区の試料採取位置図(a)、試料採取位置の堆積層断面図(b)および柱状断面図(c) 727
図497 ブロック試料（左上の上下2つ）と薄片の拡大画像(a～h) 729
図498 99－6区高まりS06300上の砂脈検出状況 732
図499 高まりS06300西側北部の砂脈 732
図500 高まりS06300西側南部の砂脈 733
図501 高まりS06300西側南部の液状化跡の断面図 733
図502 高まりS06300東側の砂脈 733
図503 高まりS06300東側の液状化跡の断面 734
図504－1 高まりS06300西側南部の液状化跡に関する粒径加積曲線 734
図504－2 高まりS06300東側の液状化跡に関する粒径加積曲線 734
図505 巨大地震の発生時期 735
図506 瓜生堂遺跡北東部の時代別変遷図－1 742
図507 瓜生堂遺跡北東部の時代別変遷図－2 743
図508 瓜生堂遺跡周辺域における弥生遺跡展開－1（全期） 748

図509 瓜生堂遺跡周辺域における弥生遺跡展開－2（前期） 749
図510 瓜生堂遺跡周辺域における弥生遺跡展開－3（中期） 750
図511 瓜生堂遺跡周辺域における弥生遺跡展開－4（後期） 751

表目次

表1 瓜生堂遺跡既往調査一覧 6～8
表2 99・01調査区遺構面対応関係 27
表3 弥生時代前期土製品分類表 84
表4 弥生時代前期土製品観察表 89・90
表5 弥生時代前期石製品組成表 93
表6 弥生時代前期石製品観察表－1 94・95
表7 弥生時代前期石製品観察表－2（投彈状礫） 96
表8 弥生時代中期土製品分類表 204
表9 弥生時代中期土製品観察表 204
表10 弥生時代中期石製品組成表 212
表11 弥生時代中期石製品観察表 213・214
表12 弥生時代後期～庄内式期土製品分類表 296
表13 弥生時代後期～庄内式期土製品観察表 296
表14 弥生時代後期～庄内式期石製品組成表 304
表15 弥生時代後期～庄内式期石製品観察表 307
表16 古墳時代埴輪観察表 339～343
表17 瓜生堂遺跡井戸一覧表 369
表18 瓜生堂遺跡大溝一覧表 374
表19 瓜生堂遺跡建物一覧表 380
表20 中世以降土製品分類表 420
表21 中世以降土製品観察表 420
表22 中世以降石製品観察表 428
表23 河内地域の方形周溝墓 518～525
表24 摂津地域の方形周溝墓 526～528
表25 山城地域の方形周溝墓 528～531
表26 大和地域の方形周溝墓 531～533
表27 播磨地域（玉津田中遺跡）の方形周溝墓 533
表28 近江地域（服部遺跡）の方形周溝墓 534～539
表29 尾張地域（朝日遺跡）の方形周溝墓 539～542
表30 瓜生堂遺跡出土土器の色調データ－1 556
表31 瓜生堂遺跡出土土器の色調データ－2 557
表32 下川津B類土器集成表 574
表33 南四国地方ほかにおける類似資料出土遺跡一覧 581
表34 石器組成表 598
表35 背面構成 601
表36 瓜生堂遺跡出土の弥生時代木製品（搬入された可能性が高いもの） 626
表37 瓜生堂遺跡出土の弥生時代木製品（瓜生堂遺跡でも製作可能なもの） 626
表38 瓜生堂遺跡出土の弥生時代雑木類（図版掲載分） 626
表39 瓜生堂遺跡出土の中世～近世木製品 626
表40 瓜生堂遺跡出土の雑木類の利用樹種 627
表41 中世遺構出土遺物の器種組成表 638
表42 プラント・オパール分析結果－1 649
表43 プラント・オパール分析結果－2 649
表44 花粉分析結果－1 658
表45 花粉分析結果－2 659
表46 花粉分析結果－3 660
表47 花粉分析結果－4 660
表48 花粉分析結果－5 661
表49 花粉分析結果－6 661
表50 珪藻分析結果－1 666
表51 珪藻分析結果－2 667
表52 珪藻分析結果－3 668
表53 試料一覧 677
表54 種実同定結果 681
表55 弥生時代～（古墳時代初頭）出土種実類 682
表56 中世以降出土種実類 682
表57 出土貝類種名一覧 686
表58 瓜生堂遺跡出土貝類一覧表 688
表59 出土人骨の四肢骨の計測値 690

表60　出土動物遺体の同定表　693
表61　瓜生堂遺跡出土弥生時代後期石材同定一覧　707～714
表62　試料記号と本報告遺物番号の対比表　720

写　真　目　次

写真１　調査・整理・各種行事等風景　13
写真２　99－３区第20面建物検出状況　32
写真３　弥生時代前期遺構面断面と調査風景　32
写真４　弥生時代中期方形周溝墓木棺写真－１　207
写真５　弥生時代中期方形周溝墓木棺写真－２　208
写真６　99－６区・東大阪市教育委員会47－２次Ｃ地区遠景　356
写真７　99－６区高まりＳ06300　356
写真８　99－６区溝Ｓ06456検出状況　356
写真９　99－１区柱穴検出状況　356
写真10　瓜生堂２号方形周溝墓の検出状況　499
写真11　"白い器台""赤い器台""黒い器台"と共伴土器ほか　553
写真12　瓜生堂遺跡の下川津Ｂ類土器・壺（大阪府教委試掘調査出土）　570
写真13　瓜生堂遺跡の下川津Ｂ類土器・壺（99－６区出土）　571
写真14　瓜生堂遺跡の下川津Ｂ類土器・高杯（99－６区出土）　572
写真15　近畿初見例となった瓜生堂99-６区出土の"土佐産"弥生後期土器　577
写真16　南四国における類似資料の口頸部詳細－１（具岡中山遺跡群出土）　586
写真17　南四国における類似資料の口頸部詳細－２（北高田遺跡出土）　587
写真18　瓜生堂遺跡周辺における現在の景観（西から、奥：生駒山地）　609
写真19　99－６区の弥生後期木製品・自然木出土状況　609
写真20　同定樹種の顕微鏡写真－１　617
写真21　同定樹種の顕微鏡写真－２　618
写真22　同定樹種の顕微鏡写真－３　619
写真23　同定樹種の顕微鏡写真－４　620
写真24　同定樹種の顕微鏡写真－５　621
写真25　同定樹種の顕微鏡写真－６　622
写真26　同定樹種の顕微鏡写真－７　623
写真27　石田神社へ至る道　633
写真28　石田神社　633
写真29　プラントオパール顕微鏡写真　673
写真30　花粉・寄生虫卵顕微鏡写真　674
写真31　珪藻顕微鏡写真－１　675
写真32　珪藻顕微鏡写真－２　676
写真33　瓜生堂遺跡の種実－１　683
写真34　瓜生堂遺跡の種実－２　684
写真35　瓜生堂遺跡の種実－３　685
写真36　瓜生堂遺跡出土貝　689
写真37　99－５区方形周溝墓人骨現地調査風景　692
写真38　瓜生堂遺跡出土骨類－１　694
写真39　瓜生堂遺跡出土骨類－２　695
写真40　瓜生堂遺跡出土の石材　706
写真41　土器付着炭化物採取風景　720
写真42　^{14}Ｃサンプリング参加者（於：中部調査事務所）　720
写真43　瓜生堂遺跡出土土器炭素付着状況　724
写真44　瓜生堂遺跡出土土器付着炭素顕微鏡拡大写真－１　725
写真45　瓜生堂遺跡出土土器付着炭素顕微鏡拡大写真－２　726
写真46　高まりＳ06300西側南部の液状化跡の断面形態　737
写真47　高まりＳ06300東側の砂脈　737
写真48　高まりＳ06300東側の液状化跡の断面形態　735
写真49　現地調査風景　738
写真50　瓜生堂遺跡の調査区　739
写真51　瓜生堂遺跡の調査前周辺風景　752
写真52　瓜生堂遺跡の調査後周辺風景　752

写 真 図 版 目 次

写真図版1　99・01年度調査区:弥生時代前期遺構
写真図版2　99・01年度調査区:01－2区弥生時代前期遺構
写真図版3　99・01年度調査区:01－3区弥生時代前期遺構
写真図版4　99・01年度調査区:99－3区弥生時代前期遺構
写真図版5　99・01年度調査区:99－3区弥生時代前期遺構
写真図版6　99・01年度調査区:99－4区弥生時代前期遺構
写真図版7　99・01年度調査区:99－5区弥生時代前期遺構
写真図版8　99・01年度調査区:弥生時代中期遺構
写真図版9　99・01年度調査区:弥生時代中期遺構
写真図版10　99・01年度調査区:01－1・99－1区弥生時代中期遺構
写真図版11　99・01年度調査区:01－2区弥生時代中期遺構
写真図版12　99・01年度調査区:01－3区弥生時代中期遺構
写真図版13　99・01年度調査区:99－3区弥生時代中期遺構
写真図版14　99・01年度調査区:99－3区弥生時代中期遺構
写真図版15　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版16　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版17　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版18　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版19　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版20　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版21　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版22　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版23　99・01年度調査区:99－5区弥生時代中期遺構
写真図版24　99・01年度調査区:99－8・99－9区弥生時代中期遺構
写真図版25　99・01年度調査区:99－10区弥生時代中期遺構
写真図版26　99・01年度調査区:99－10区弥生時代中期遺構
写真図版27　99・01年度調査区:99－10区弥生時代中期遺構
写真図版28　99・01年度調査区:01－1区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版29　99・01年度調査区:99－5区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版30　99・01年度調査区:99－5区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版31　99・01年度調査区:99－5区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版32　99・01年度調査区:99－6区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版33　99・01年度調査区:99－6区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版34　99・01年度調査区:99－6区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版35　99・01年度調査区:99－7区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版36　99・01年度調査区:01－2・99－1区古墳時代遺構
写真図版37　99・01年度調査区:99－4区古墳時代遺構
写真図版38　99・01年度調査区:中世遺構
写真図版39　99・01年度調査区:01－1区中世遺構
写真図版40　99・01年度調査区:99－1区中世遺構
写真図版41　99・01年度調査区:99－2区中世遺構
写真図版42　99・01年度調査区:01－2区中世遺構
写真図版43　99・01年度調査区:99－3区中世遺構
写真図版44　99・01年度調査区:99－3区中世遺構
写真図版45　99・01年度調査区:99－4区中世遺構
写真図版46　99・01年度調査区:99－5区中世遺構
写真図版47　99・01年度調査区:99－5区中世遺構
写真図版48　99・01年度調査区:99－6区中世遺構

写真図版49　99・01年度調査区:99－6区中世遺構
写真図版50　99・01年度調査区:99－6区中世遺構
写真図版51　99・01年度調査区:99－6区中世遺構
写真図版52　99・01年度調査区:99－7区中世遺構
写真図版53　99・01年度調査区:99－8・99－9区中世遺構
写真図版54　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(1)99－3区遺構出土
写真図版55　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(2)99－3・99－4区遺構出土
写真図版56　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(3)99－4区遺構出土、99－5区遺構・包含層ほか出土
写真図版57　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(4)99－5区遺構・包含層ほか出土
写真図版58　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(5)99－3区遺構出土
写真図版59　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(6)99－3区遺構・包含層ほか出土
写真図版60　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(7)99－3区包含層ほか出土、99－4区遺構出土
写真図版61　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(8)99－4区包含層ほか出土
写真図版62　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(9)99－4区包含層ほか出土、99－5区遺構出土
写真図版63　99・01年度調査区:弥生時代前期土器(10)99－5区包含層ほか出土、99－6区包含層ほか、01－2区包含層ほか、01－3区遺構・包含層ほか出土
写真図版64　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(1)99－1区遺構ほか出土、99－3区方形周溝墓S03200出土、99－5区方形周溝墓S05200出土
写真図版65　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(2)99－5区方形周溝墓S05220出土、99－5区方形周溝墓S05240出土
写真図版66　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(3)99－1区遺構ほか出土、99－3区墓域出土
写真図版67　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(4)99－3区墓域出土
写真図版68　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(5)99－5区墓域出土
写真図版69　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(6)99－5区墓域出土
写真図版70　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(7)99－5区墓域出土
写真図版71　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(8)99－5区墓域出土
写真図版72　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(9)99－5区墓域出土
写真図版73　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(10)99－5区墓域出土
写真図版74　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(11)99－6区墓域出土
写真図版75　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(12)99－9・10区遺構・包含層出土
写真図版76　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(13)99－10区遺構出土
写真図版77　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(14)99－10区遺構出土
写真図版78　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(15)99－10区遺構出土
写真図版79　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(16)99－10区遺構ほか出土
写真図版80　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(17)99－6・8区遺構・包含層出土、99－9区遺跡・包含層出土
写真図版81　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(18)99－10区遺構出土
写真図版82　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(19)99－10区遺構出土
写真図版83　99・01年度調査区:弥生時代中期土器(20)99－10区遺構出土
写真図版84　99・01年度調査区:弥生時代後期～庄内式期土器(1)99－5区遺構ほか出土
写真図版85　99・01年度調査区:弥生時代後期～庄内式期土器(2)99－5区遺構出土
写真図版86　99・01年度調査区:弥生時代後期～庄内式期土器(3)99－5区遺構ほか出土

写真図版87　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（4）99－5区遺構ほか出土
写真図版88　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（5）99－5区遺構ほか出土
写真図版89　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（6）99－5区遺構ほか出土
写真図版90　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（7）99－5区遺構ほか出土
写真図版91　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（8）99－5区遺構ほか出土
写真図版92　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（9）99－6区遺構ほか出土
写真図版93　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（10）99－6区遺構ほか出土
写真図版94　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（11）99－6区遺構ほか出土
写真図版95　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（12）99－6区遺構ほか出土
写真図版96　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（13）99－6区包含層ほか出土
写真図版97　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（14）99－6区包含層ほか出土
写真図版98　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（15）99－6区遺構ほか出土
写真図版99　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（16）99－7区遺構ほか出土
写真図版100　99・01年度調査区：弥生時代後期～庄内式期土器（17）99－7区遺構ほか出土
写真図版101　99・01年度調査区：古墳時代土器（1）99－1・2・4・5区遺構・包含層出土
写真図版102　99・01年度調査区：古墳時代土器（2）・古代土器99－1・2・4・5・7区遺構・包含層出土、99－1・2・4・5区遺構・包含層出土
写真図版103　99・01年度調査区：中世土器（1）99－1・2・3区遺構・包含層出土
写真図版104　99・01年度調査区：中世土器（2）99－4・5・6区遺構出土
写真図版105　99・01年度調査区：中世土器（3）99－6・7区、01－2・3区遺構・包含層出土
写真図版106　99・01年度調査区：中世土器（4）99－3区遺構出土、99－4区遺構出土
写真図版107　99・01年度調査区：中世土器（5）99－5区遺構出土、99－6区遺構土
写真図版108　99・01年度調査区：中世土器（6）99－6区遺構出土、99－7区遺構出土
写真図版109　99・01年度調査区：中世土器（7）01－1区遺構出土、01－2区遺構出土
写真図版110　99・01年度調査区：土製品（1）弥生時代前期土製品
写真図版111　99・01年度調査区：土製品（2）弥生時代中期～後期土製品
写真図版112　99・01年度調査区：土製品（3）中世以降土製品、土人形
写真図版113　99・01年度調査区：木製品（1）弥生時代前期～中期木製品
写真図版114　99・01年度調査区：木製品（2）方形周溝墓木棺底板、弥生時代中期～後期木製品
写真図版115　99・01年度調査区：木製品（3）弥生時代後期木製品
写真図版116　99・01年度調査区：木製品（4）弥生時代後期～庄内式期木製品
写真図版117　99・01年度調査区：木製品（5）弥生時代後期・中世木製品
写真図版118　99・01年度調査区：木製品（6）中世木製品
写真図版119　99・01年度調査区：石製品（1）弥生時代前期打製石器ほか
写真図版120　99・01年度調査区：石製品（2）弥生時代前期磨製石器ほか
写真図版121　99・01年度調査区：石製品（3）99－3区弥生時代前期集石遺構ほか出土
写真図版122　99・01年度調査区：石製品（4）弥生時代中期打製石器ほか
写真図版123　99・01年度調査区：石製品（5）弥生時代中期打製石器ほか
写真図版124　99・01年度調査区：石製品（6）弥生時代中期磨製石器ほか
写真図版125　99・01年度調査区：石製品（7）弥生時代中期磨製石器ほか弥生時代後期打製石器ほか

写真図版126 99･01年度調査区:石製品(8)
中世以降　硯･温石、石臼
写真図版127 99･01年度調査区:石製品(9)
中世以降　砥石
写真図版128 99･01年度調査区:埴輪(1)
S04001出土円筒埴輪･鶏形埴輪
写真図版129 99･01年度調査区:埴輪(2)
円筒埴輪口縁部･円筒埴輪胴部
写真図版130 9･01年度調査区:埴輪(3)
円筒埴輪胴部
写真図版131 99･01年度調査区:埴輪(4)
円筒埴輪底部･朝顔形埴輪
写真図版132 99･01年度調査区:埴輪(5)
形象埴輪
写真図版133 99･01年度調査区:瓦(1)
軒平瓦･軒丸瓦･桟瓦
写真図版134 99･01年度調査区:瓦(2)
平瓦･鬼瓦･丸瓦
写真図版135 99･01年度調査区:金属製品･銭貨
99－3～7・01－1区遺構・包含層出土
写真図版136 02年度調査区:02－2・3区弥生時代前期遺構
写真図版137 02年度調査区:02－2・3・4区弥生時代中期遺構
写真図版138 02年度調査区:02－4区弥生時代後期～庄内式期遺構
写真図版139 02年度調査区:02－3区弥生時代後期～古墳時代遺構
写真図版140 02年度調査区:02－4区中世遺構
写真図版141 02年度調査区:02－4区中世遺構
写真図版142 02年度調査区:02－2～4区出土遺物

《《 本 文 編 》》

第１章　位置と環境

第１節　瓜生堂遺跡の位置

瓜生堂遺跡は大阪府の中央東部、東大阪市若江西新町、瓜生堂町、西岩田町、岩田町に所在する。遺跡の範囲は東西約1.1km、南北約0.8kmにおよぶ広大なものである。近鉄奈良線八戸ノ里駅南方を遺跡の中心とし、遺跡の南北を中央環状線・近畿自動車道が、北端付近に東西に近鉄奈良線が通る。

これまでの調査で遺跡の範囲がほぼ確定している。遺跡の北端は近鉄奈良線付近で、この北には西岩田遺跡が位置する。南端は巨摩廃寺遺跡に接する。西端は第２寝屋川より西には大きく広がらない。今回の調査地は遺跡の北東端にあたる。東端に関しては従来は中央環状線から東に約200mとされてきたのが、（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会の第45～47次調査によって、より東にのびることが判明した。当調査はそれより東に位置する調査区を含むので、遺跡の東限を決定することも調査目的の一つとなった。東には岩田遺跡が位置する（図１）。

瓜生堂遺跡は、過去30年以上にわたる発掘調査で弥生時代の集落・墓などが相次いで発見され、河内平野の弥生時代を代表する遺跡として広く知られるようになった。既往の調査成果については第２章に述べる。

第２節　地理的・歴史的環境

ここでは周辺の遺跡との関連もふまえ、地理的、歴史的環境を概観する。

瓜生堂遺跡が立地するのは河内平野の北半で現標高約T.P.３ｍの低地であり、地山からは５ｍもの厚さで弥生時代前期以降の層が堆積している。この周辺は縄文時代前期には縄文海進により河内湾が進入していた。河内湾に旧の大和川が流れ込み大量の土砂をもたらした結果、縄文時代後半には河内湾は河内潟へと変化する。この大和川の氾濫は両岸に自然堤防を発達させ、埋積を進めて三角州を形成させた。埋積はその後も進行し、縄文時代末～弥生時代初めには河内潟は淡水の河内湖へと変化する。

瓜生堂遺跡は河内湖の南側に位置する。瓜生堂遺跡の他にもこの河内平野の自然堤防や三角州上に、弥生時代以降多くの遺跡が形成される（図１）。上述の立地条件上、この地域は短期間あるいは長期間に洪水の氾濫と滞水が繰り返される。よって各時代の遺構・遺物は、滞水時に泥質堆積土（シルト～粘土）上に形成され、これを洪水砂が覆うことが繰り返され、累重した地層中に検出される。このため遺構はプライマリーな状態で検出されることが多く、有機遺物も遺存状況がよい。

弥生時代前期には、瓜生堂遺跡の南に位置する若江北遺跡で前期初頭の集落・水田が検出される。その後、前期中葉段階に、若江北遺跡に隣接する山賀遺跡で集落・水田が検出される。さらにその南の美園遺跡では続いて集落・水田が検出される。その頃、瓜生堂遺跡の北東部でも集落域が検出される。瓜生堂遺跡内でも、点在する形だが集落域・生産域が存在する。その他周辺の弥生時代前期の遺跡としては、瓜生堂遺跡の北東部に位置する稲葉遺跡などがある。

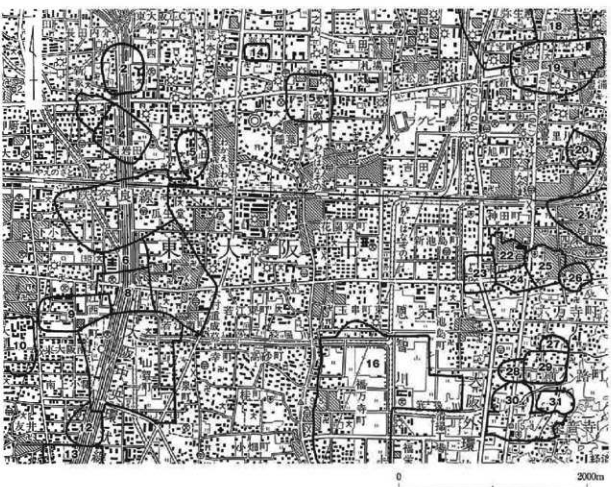
弥生時代中期になると遺跡は大きな広がりをみせるようになる。弥生時代前期から継続する河内湖南辺の瓜生堂遺跡とその南の遺跡群以外に、東側の生駒山西麓に鬼虎川・西ノ辻・鬼塚等の遺跡群が出現

する。瓜生堂遺跡では集落・墓域が検出され、なかでも墓域は70基をこえる方形周溝墓がいくつかの小群を形成する。その南の巨摩廃寺・若江北・山賀遺跡で集落と方形周溝墓を主とする墓域が検出される。

また、瓜生堂遺跡の南側では水田域も検出されている。生駒山西麓の遺跡部でも平野部同様、方形周溝墓や掘立柱建物群が確認される。このように、遺跡の数は弥生時代中期中頃から後半に一気に拡大する。

弥生時代後期になると、幾度もの河川の氾濫により不安定な自然環境となるのを反映して、遺跡の規模が主に南の方に縮小するようである。瓜生堂遺跡の北端や、若江北遺跡で集落がみられる。巨摩廃寺遺跡から若江北遺跡の北部にかけて方形周溝墓が検出されている。

ただし今回の調査において、瓜生堂遺跡北東端で弥生時代後期末から庄内式期の水田が検出されており、その下層では住居域は検出されていないが多量の土器・木製品などを伴う集石遺構も検出されていることから、北東部での遺跡の分布も考えられる。その他には弥生時代中期末から後期初頭にかけて、



1 瓜生堂遺跡　2 新家遺跡　3 意岐部遺跡　4 西岩田遺跡　5 岩田遺跡　6 巨摩廃寺遺跡　7 若江遺跡　8 若江北遺跡
9 上小阪遺跡　10 小若江遺跡　11 山賀遺跡　12 友井東遺跡　13 美園遺跡　14 菱江寺跡　15 稲葉遺跡　16 池島・福万寺遺跡
17 鬼虎川遺跡　18 西ノ辻遺跡　19 鬼塚遺跡　20 黒池遺跡　21 山畑古墳群　22 五合田遺跡　23 北鳥池遺跡　24 段上遺跡
25 縄手遺跡　26 上六万寺遺跡　27 北屋敷遺跡　28 西代遺跡　29 馬場川遺跡　30 楽音寺遺跡　31 西の口遺跡

図1　周辺遺跡分布図

生駒山麓には高地性集落の遺跡群も認められるようになる。

古墳時代にはいると前期には瓜生堂遺跡の南から巨摩廃寺遺跡・若江遺跡にかけて水田が形成される。南の美園遺跡と瓜生堂遺跡北部の西岩田遺跡では集落域も形成される。巨摩廃寺遺跡・山賀遺跡・美園遺跡では古墳時代中期から後期の小型低方墳が、遺物でも家形埴輪・壺形埴輪などが検出されている。当遺跡からも確実な古墳は検出されていないものの、古墳時代中期から後期の埴輪が出土しており、近隣に埋没古墳があった可能性も考えられる。

古代は（財）東大阪市文化財協会の第45次調査によって、瓜生堂遺跡北東端に掘立柱建物からなる集落の存在が明らかになっている。また、中央環状線付近、それより西南部の第二寝屋川右岸にも古代の集落が存在することが判明している。既往の調査で「若」の墨書土器が瓜生堂遺跡で出土している（表１参照、市９次調査）ことから、若江郡衙との関係が推測される。瓜生堂遺跡の南の若江遺跡・若江北遺跡でも古代の遺物が出土している。また、文献史料より平安時代（９世紀後半～）に若江寺が存在していたことが判明しており、遺構は明らかになっていないが若江寺跡からは白鳳時代の瓦や唐三彩が出土している。この他寺院遺跡として巨摩廃寺跡がある。山賀遺跡などでは水田が検出されている。

中世前期の集落域は当遺跡やその北東の岩田遺跡で検出されている。ただし中世前半期の集落については文献史料に記載はない。この時期については生駒山西麓の水走遺跡・西ノ辻遺跡などにも大規模な中世集落をみることができる。中世後半になると1390年代に畠山基国によって若江城が築城され、若江遺跡周辺は高野街道や十三街道の通る河内国の中心として栄えたといえる。瓜生堂遺跡でも中世後半期の遺構・遺物が検出され、これが近世の岩田村や瓜生堂村の祖源になると考えられる。

以上概観してきたように瓜生堂遺跡とその近辺に立地する河内平野の遺跡群は、現代に至るまで連続して人間の生活が営まれてきた地域といえる。（川瀬）

第２章　既往調査区の成果

瓜生堂遺跡は1964年に遺物が採集された後、1965年に水道工事が行われた際に青銅器などが発見されたのを機にその存在が知られるようになった。

なかでも瓜生堂遺跡の名を全国的に知らしめたのは、1971年から1974年にかけて瓜生堂遺跡調査会によって行われた中央環状線から小阪ポンプ場にかけての発掘調査である。この調査で、弥生時代中期の方形周溝墓７基と土壙墓27基ほかを検出した。方形周溝墓７基のうち第２号方形周溝墓からは木棺墓や土壙墓、土器棺墓を良好な状態で検出した。その後の調査でもさらに５基の方形周溝墓を検出し、この周辺に合計12基の方形周溝墓で構成される一大墓域が形成されていることが判明した。

その後も瓜生堂遺跡調査会、大阪府教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、（財）東大阪市文化財協会、（財）大阪文化財センター（後に（財）大阪府文化財調査研究センター、（財）大阪府文化財センター と改称）により次々と調査が行われた。既往の調査の一覧と成果は表１に示した。

1970年代後半以降は主に、南北を貫く近畿自動車道の建設に伴う大規模な調査が、（財）大阪文化財センターによって実施された。その結果、瓜生堂遺跡の南北の範囲や様相が明らかになった。範囲は南北約0.8kmにわたり、弥生時代前期から後期までの生産域、集落域、墓域をもつことが判明した。この成果については三好孝一氏がまとめている（大文セ1996、文献名は本冊末尾参照、以下同じ）。

1990年代にはいると東西方向の調査が盛んとなる。中央環状線・近畿自動車道と交差する近鉄奈良線八戸ノ里駅から若江岩田駅周辺が該当地域である。

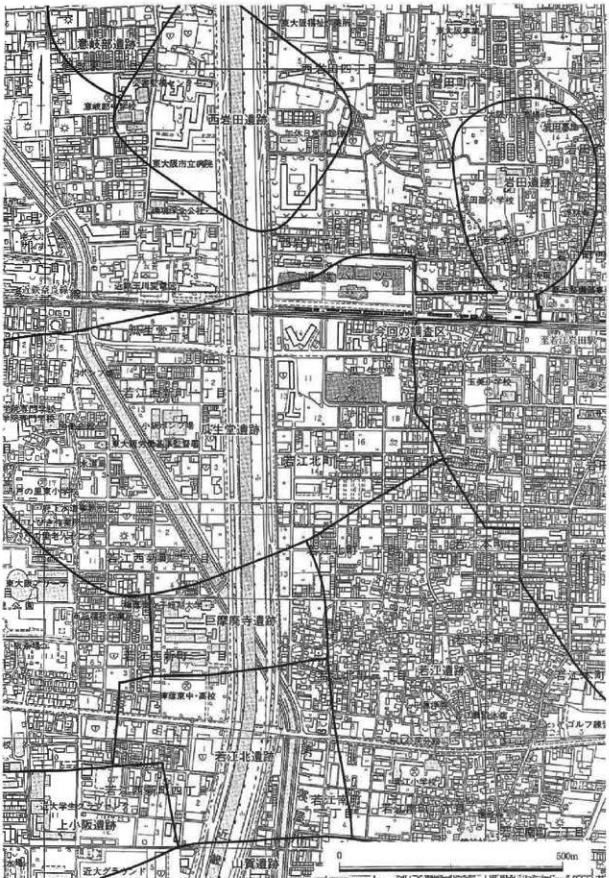
1989年近鉄奈良線北側で大規模商業施設が建設されるにあたって試掘調査が行われ、一部で弥生時代中期の包含層が確認された。その翌年には、若江岩田駅前再開発事業のための試掘調査が大阪府教育委員会によって行われ、弥生時代中期の方形周溝墓等を検出した。さらにその東側も（財）東大阪市文化財協会が試掘調査を行い、遺跡を確認した。

これらの結果をふまえて、近鉄奈良線北側の都市計画道路建設地を1997・1998年度、（財）東大阪市文化財協会が調査を行った（第45次、第45－２次）。当調査では弥生時代中期の方形周溝墓や円形周溝墓、古代から中世の集落などを検出し、遺跡がここまで及ぶことを確認した（市協会1999ｃ・1999ｄ）。さらに1999・2000年度にはその西側を東大阪市教育委員会が調査した（第46次、第47－１・２次）。この調査でも弥生時代前期の集落、45－２次調査とは異なる弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期の遺構、中世の集落などが報告されている（市教委2000ａ・2001・2002）。

このようにここ数年で瓜生堂遺跡の北東端にあたる地域の調査が進み、東西約１kmの遺跡の様相が明らかとなってきた。

当センターではこの都市計画道路の南側を近鉄奈良線立体交差化事業に伴って、線路橋脚にあたる部分を調査することになった。調査は1999年度から2002年度にわたり、計16の調査区を発掘調査した。その結果、弥生時代前期から中・近世までの遺跡を確認し、総遺物量はコンテナ約500箱にも及んだ。その調査成果をまとめたものがこの報告書である。上述の諸調査と併せて、瓜生堂遺跡北東域の内容解明に大きく貢献する成果が得られた。

なお南北方向の遺跡調査も、1990年代以降も単発的に行われており、2002年度当センターでも調査を行っている（大文セ2004）。そちらの調査成果も併せて参照されたい。　（川瀬）



意岐部遺跡
西岩田遺跡
岩田遺跡
今回の調査区
岩江西新町一丁目
瓜生堂遺跡
岩江北町
岩江西新町一丁目
巨摩廃寺遺跡
岩江北遺跡
上小阪遺跡
山賀遺跡
0
500m

図2　瓜生堂遺跡の範囲

表１　瓜生堂遺跡既往調査一覧

調査原因	調査地	調査面積(㎡)	調査主体／発見者	調査期間	調査内容	文献略号
中央環状線予定地内府工業用水道管工事(A地点)(市1次)	若江西新町1丁目	1500	荻田昭次・河内歴史研究グループ、他	1965.2～10	遺物採集、層位確認：青銅製武器片、弥生中期の土器・石器	荻田1966 荻田・藤井1966 河内市教委・調査グループ1966
第二寝屋川開削工事(B地点)(市2次)	若江西新町3丁目	100	荻田昭次・島田義明、他	1966.9～12	遺物採集・層位確認；弥生中期の木棺4基(熟年男性の人骨が遺存)・甕棺1基・壺棺2基、古墳～歴史時代の遺物	府教委1967
第二寝屋川開削工事(C地点・第1次)(市3次)	若江西新町1丁目	40	三輪栄一郎・松田正昭・原田 修・島田義明・大阪府教育委員会、他	1966.10～11	弥生前期の集落跡(貝層・遺構・土器・石器・木製品・骨角製品)、古墳～歴史時代の遺物包含層	府教委1967
第二寝屋川開削工事(C地点・第2次)(市4次)	若江西新町1丁目	675	大阪府教育委員会・荻田昭次・桑原正明・島田義明・松田正昭、他	1966.12～1967.1		府教委1967 花園高地歴部1970
市立労働会館建設(試掘)(市5次)	若江西新町2丁目			1969	包含層なし	
中央南幹線管渠築造工事(試掘・本調査)(市6次)	瓜生堂1・2丁目～若江西新町1・2丁目	128	中央南幹線西岩田・瓜生堂遺跡調査会 田代克己・荻田昭次・中西靖人・今村道雄・北野 保、他	1971.2～3	弥生中期・古墳の遺物	調査会1971
中央南幹線管渠築造工事(市7次)	瓜生堂1・2丁目～若江西新町1・2丁目	1250		1971.5～7	弥生中期の遺構・遺物、古墳～奈良時代の遺構、遺跡の北限が近鉄奈良線付近と判明	調査会1971 調査会1972
中央南幹線管渠築造工事(市8次)	瓜生堂1・2丁目～若江西新町1・2丁目	1000		1971.8～11	弥生中期の集落、1～5号方形周溝墓、土壙墓27基、方形周溝墓と土壙墓を画する溝	調査会1971 調査会1972
市公共下水中部第2排水区若江分区下水管渠築造工事(市9次)	瓜生堂2丁目～若江西新町1丁目	2750	中央南幹線西岩田・瓜生堂遺跡調査会 田代克己・荻田昭次、他	1971.12～1972.12	弥生中期集落・墓域(6・7号方形周溝墓)、「若」の銘のある墨書土器	調査会1972 調査会1973
工業用水管の敷設替え工事(市10次)	若江西新町1丁目	200	中央南幹線西岩田・瓜生堂遺跡調査会	1972.4～5	弥生中期集落	調査会1973
水道局庁舎建設(試掘)(市11次)	若江西新町1丁目	84	東大阪市教育委員会 原田 修	1972.9～10		
小阪ポンプ場増設(市12次)	若江西新町1丁目	300	瓜生堂遺跡調査会(註1) 田代克己・井藤 徹、他	1973.10～1974.3	2号方形周溝墓の規模(木棺・土器棺・土壙を各6基検出・3代にわたる家族墓)、8～12号方形周溝墓の検出	調査会1981
共同住宅建設(試掘)(市13次)	瓜生堂1丁目		瓜生堂遺跡調査会	1973.11～		
ガソリンスタンド建設(試掘)(市14次)	若江西新町1丁目	85	瓜生堂遺跡調査会	1973.12		
近畿自動車道建設	中央環状線内		(財)大阪文化財センター 中西靖人・辻内義浩、他	1974.5～9	遺跡の範囲確認(巨摩廃寺・若江北・山賀遺跡との関係から、将来的に範囲が一体化する可能性を示唆)	大文セ1975
近鉄幹線河内ライン瓦斯導管敷設工事(市15次)	若江西新町1・2丁目	188	東大阪市遺跡保護調査会 福永信雄・芋本隆裕	1974.9～1975.2		芋本1975
上水道配水管敷設工事(市16次)	若江西新町2丁目・横枕・上小阪	114	東大阪市遺跡保護調査会 新田 洋・勝田邦夫	1975.1～3	古墳時代の遺物(古墳の存在/河川に対する配慮)、小阪合遺跡の範囲	市保護会1975a 市保護会1976
小阪ポンプ場新築(市17次)	若江西新町1丁目		瓜生堂遺跡調査会 田代克己・井藤 徹、他	1975.10～1977.3	9号方形周溝墓の規模(木棺1基)、方形周溝墓と土壙墓を画する溝の追求調査	調査会1981
八戸ノ里第3ガーデンハイツ新築工事(試掘)(市18次)	西岩田3丁目	100	瓜生堂遺跡調査会 今村道雄・新田 洋	1976.3～5		調査会1976
ガス管埋設(試掘)(市19次)		15	瓜生堂遺跡調査会	1976.4		
上水道排水管敷設工事(市20次)	若江西新町1丁目～新家東町3丁目	1500	東大阪市遺跡保護調査会 勝田邦夫・才原金弘	1976.9～1977.1	弥生中期の溝、奈良～平安の集落、古墳～奈良の遺物、製塩土器、角杯、土馬	市保護会1977a 市保護会1977b 市協会1984
若江石切線瓦斯管埋設工事(市21次)	若江西新町1丁目～新家東町3丁目	2200	東大阪市遺跡保護調査会 勝田邦夫・才原金弘	1976.11～1977.5		市保護会1977b 市協会1984
シャトー八戸ノ里新築工事(試掘)(市22次)	西岩田3丁目・御厨	58	東大阪市遺跡保護調査会 上野利明	1976.11～12、1977.2～3		市協会1984
八戸ノ里第4ガーデンハイツ建設(試掘)(市23次)	瓜生堂1丁目		瓜生堂遺跡調査会	1977.3～		調査会1981
(仮称)八戸ノ里小学校分校建設工事(試掘)(市24-1次)	中小阪	12.5	東大阪市遺跡保護調査会 芋本隆裕	1977.8	奈良～平安の柱穴・遺物包含層、埴輪	市保護会1978 市教委1979
(仮称)八戸ノ里小学校分校建設工事(市24-2次)	中小阪	1000	東大阪市遺跡保護調査会 芋本隆裕	1978.1～3	古墳の埴輪・須恵器、奈良～平安の集落(掘立柱建物5棟)	市保護会1978 市教委1979
市公共下水道第33区管渠築造工事(市25次)	若江西新町1丁目		瓜生堂遺跡調査会	1978.2		

マンション建設(試掘)		300	東大阪市遺跡保護調査会 上野利明		庄内併行期の円形周溝、遺物	上野1980
近畿自動車道建設(A地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	1800	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1	弥生中期の集落・方形周溝墓4基	大文セ1980
近畿自動車道建設(B地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	1900	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1	弥生中期の集落・方形周溝墓6基、 8c代の掘立柱建物	大文セ1980
近畿自動車道建設(C地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	1100	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1	弥生中期の集落・方形周溝墓4基 8c代の多量の遺物	大文セ1980
近畿自動車道建設(D地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	810	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1	弥生中期の集落・方形周溝墓6基	大文セ1980
近畿自動車道建設(E地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	930	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1	弥生中期の集落・方形周溝墓2基	大文セ1980
近畿自動車道建設(F地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	1000	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1	古墳の畦畔、中世の耕作跡	大文セ1980
近畿自動車道建設(G地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	610	(財)大阪文化財センター 中西靖人・赤木克視・瀬川 健、他	1978.2～1980.1、1978.12～1980.11	弥生中期の集落	大文セ1980 大文セ1981
近畿自動車道建設(H地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	880	(財)大阪文化財センター 玉井 功・井藤暁子・小野久隆、他	1978.2～1980.1、1978.12～1980.11	弥生中期の集落・方形周溝墓2基	大文セ1980 大文セ1981
近畿自動車道建設(I地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	700	(財)大阪文化財センター 玉井 功・井藤暁子・小野久隆、他	1978.2～1980.1、1978.12～1980.11	弥生中期の方形周溝墓5基、大溝、巨摩1号墳	大文セ1981
近畿自動車道建設(J地区)	瓜生堂3丁目・若江西新町1・2丁目	1300	(財)大阪文化財センター 玉井 功・井藤暁子・小野久隆、他	1978.2～1980.1、1978.12～1980.11	弥生中期の方形周溝墓1基、弥生後期の方形周溝墓3基	大文セ1981
瓜生堂遺跡範囲確認調査	若江西新町1丁目	32	大阪府教育委員会	1978.3	弥生中期における集落の範囲、古墳時代の遺構、古墳～中世の遺物、近世以降の遺構	府教委1978
八戸ノ里第4ガーデンハイツ建設(市26次)	瓜生堂1丁目	50	瓜生堂遺跡調査会	1978.4～8	弥生中期方形周溝墓1基(木棺1基)、溝・土壙・ピット	調査会1981
小阪ポンプ場増設工事(市27次)	若江西新町1丁目	2400	瓜生堂遺跡調査会 田代克己・井藤 徹・今村道雄・阿部孝一、他	1978.5～1979.3	弥生中期～近代までの各時期の遺構	調査会1981
小阪ポンプ場電気室増設(市28次)	若江西新町1丁目	300	瓜生堂遺跡調査会 田代克己・井藤 徹、他	1978.8～12	10・13～15号方形周溝墓の調査	調査会1981
近畿自動車道建設	若江西新町3・4丁目	4800	(財)大阪文化財センター 瀬川 健・尾上 実・大谷治孝・高橋雅子、他	1979.6～1982.2	弥生前期～中期の集落・畦畔、古墳の畦畔、旧楠根川流路(S0埋立)	大文セ1983
住宅建設	若江北町1丁目		東大阪市教育委員会	1979.12	弥生包含層なし	市教委1980
瓜生堂遺跡東限の試掘調査(市29次)	若江北町1丁目		東大阪市教育委員会 芋本隆裕・勝田邦夫	1980.1	歴史の遺物包含層	市教委1980
ガソリンスタンド建設(市30次)	若江北町1丁目	85	東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 原田 修	1981.4	奈良～鎌倉の包含層・子持勾玉、9c代の溝と伴出土器群	市協会1989
公共下水道第5工区管渠築造工事(市31次)	若江北町1丁目	80	東大阪市遺跡保護調査会 阿部嗣治	1981.8～11	方形周溝墓1基	市協会1984
八戸ノ里東小学校校舎改築工事(市32次)	中小阪	90	東大阪市教育委員会 原田 修	1981.8～9	弥生中期遺構面を検出(検出地点以東で同遺構面は検出されず)	市教委1990
公共下水道第11工区管渠築造工事(市33次)	若江西新町1丁目	45	東大阪市遺跡保護調査会 原田 修	1981.10～11	弥生中期の方形周溝墓1基(部分的調査のため墳丘1基のみを検出)	市協会1984
公共下水道第324工区管渠築造工事(市34次)	若江北町1丁目	120	(財)東大阪市文化財協会(註2) 吉村博恵	1982.11～1983.1	弥生包含層なし	市協会1984
近畿自動車道建設	若江西新町3・4丁目	1050	(財)大阪文化財センター 尾上 実・岸本道昭・高橋雅子、他	1982.7～1983.5	弥生中期末の集落、庄内～古墳の墓域、平安後期以降の集落	大文セ1984
小阪ポンプ場増設			大阪府教育委員会	1982	弥生中期の集落・方形周溝墓7基	府教委1982
公共下水道第113工区管渠築造工事(市35次)	若江西新町1丁目	190	(財)東大阪市文化財協会 原田 修・上野利明	1983.5～6	古墳～中世の遺物	市協会1984
倉庫建設(市36次)	若江西新町1丁目	283	(財)東大阪市文化財協会 芋本隆裕	1986.10～12	弥生中期の集落	市協会1989
大規模専門店建設	西岩田1丁目			1988	弥生中期の遺物 遺跡の範囲が近鉄奈良線より北へ拡大	
公共下水道1～12工区管渠築造工事(市37次)	若江北町2丁目	105	(財)東大阪市文化財協会 中西克宏	1988.8～10	古墳～近世の遺物	市協会1990a
公共下水道第31工区管渠築造工事(市38次)	若江西新町1丁目	49	(財)東大阪市文化財協会 福永信雄	1989.11～1990.3	弥生前～中期の集落	市協会1990b 市協会1998
都市計画道路大阪瓢箪山線建設(試掘)	西岩田2丁目	64	大阪府教育委員会 大野 薫	1990.12～1991.1	弥生前期の包含層、弥生中期の墓域、遺跡の範囲がさらに東へ拡大	大野1992
公共下水道管渠築造工事(市39次)	若江西新町2丁目	288	(財)東大阪市文化財協会 金村浩一	1991.8～10	古墳時代の流路、中世の耕作跡	金村1992a 市協会1996
公共下水道工事	若江西新町2丁目	230	(財)東大阪市文化財協会	1991.5～8	弥生～古墳・中世の遺構・遺物	金村1992b
府道中央環状線工事	若江西新町3・4丁目	162	(財)大阪文化財センター 若狭幸子・村上年生・若林邦彦	1992.3～5、1992.7～9	弥生中期末の集落、平安後期の井戸(瓦器椀などを大量に検出)	大文セ1993a 大文セ1993b
府道中央環状線工事	若江西新町2～4丁目	2407	(財)大阪文化財センター	1993.12～1994.9	弥生中～後期の集落・方形周溝墓4基、3号方形周溝墓の規模、若江城関係の遺構・遺物	大文セ1995

地中送電線建設工事（市40-1～3次）	西岩田3丁目、若江西新町1丁目	175	(財)東大阪市文化財協会 藤城 泰・三輪若葉・松田順一郎、他	1994.1～1995.8	弥生中期の集落・遺物、中世の耕作跡・遺物	市協会1999a
公共下水管築造工事（市41次）	若江西新町1・2丁目	120	(財)東大阪市文化財協会 井上伸一	1994.5～6	中世～近世の耕作跡、円筒埴輪（古墳の存在を示唆）	井上1996
工業用水道工事	若江西新町2丁目	41	(財)大阪文化財センター 三好孝一・市木芳三・亀井 聡	1994	中世～近世の製造・土坑	大文セ1994
共同住宅建設（市42次）	瓜生堂3丁目	2440	(財)東大阪市文化財協会 松宮昌樹	1995.5～9	弥生中期中頃～後半の遺構群・方形周溝墓10基、5世紀後半の頃墓群・埴輪、遺跡の範囲がふらに北へ拡大	松宮1997
府道中央環状線工事	若江西新町	2763	(財)大阪府文化財調査研究センター(註3) 三好孝一・市木芳三	1995～96	弥生前期集落・中期末集落	松宮1996
						三好1996
						大文セ1996
倉庫建設（市43次）	若江北1丁目	96	東大阪市教育委員会 下村晴文・才原金弘	1996.9～10		
都市計画道路大阪瓢箪山線建設事業（試掘）（市44次）	西岩田1丁目	107	(財)東大阪市文化財協会 芋本隆裕・三輪若葉	1996.12～1997.3	室町の集落・遺物、埴輪片、遺跡の範囲がふらに東へ拡大	市協会1997a
都市計画道路大阪瓢箪山線建設事業（市45-1・2次）	西岩田1丁目	1091	(財)東大阪市文化財協会 金村浩一・藤城 泰・曽根猛子	1997.12～1998.3、1998.7～12	弥生前期の集落、弥生中期の方形周溝墓1基・円形周溝墓1基、古墳時代の埴輪、古代から中世の集落	市協会1999c
						曽根1999
						市教委1999
都市計画道路大阪瓢箪山線建設事業（市46、47-1・2次）	西岩田1・2丁目	640	東大阪市教育委員会 福永信雄	1998.8～1999.4	弥生中期の集落・方形周溝墓5基、畦畔、弥生後期の配石遺構、中世の集落	市教委2000a
		640				市教委2001
		610				市教委2002
						福永2000
共同住宅建設（市48次）	若江北町1丁目	46	東大阪市教育委員会	1999.10	奈良の遺構・遺物、近世の遺構・遺物	市教委2000b
近畿奈良線立体交差化工事	西岩田1・2丁目、岩田町4丁目	1670	(財)大阪府文化財調査研究センター 秋山浩三・川崎貴子	2000.1～2002.7、2002.11～2003.3	弥生前期の集落・畦畔、弥生中期の集落・方形周溝墓11基、弥生後期の遺構、古墳の埴輪、中世の集落、遺跡の範囲がふらに東へ拡大	大文セ2000a
		233				大文セ2000b
		153	(朝田公年・田之上裕子・宮田伸代)			本報告書
関西電力地中電線建設工事（市49次）	西岩田3丁目	40	東大阪市教育委員会 福永信雄	2000.7～8	弥生中期の遺物	市教委2000c
寝屋川南部地下河川若江立坑建設	若江西新町2丁目	704	(財)大阪府文化財センター(註4) 若林邦彦(宮田伸代)	2002.4～2003.2	弥生中期後半の方形周溝墓2基(木棺3基)、奈良～平安の掘立柱建物群	大文セ2002
						大文セ2004

〈表中註〉

1.1972年5月、「中央幹線内西岩田・瓜生堂遺跡調査会」から「瓜生堂遺跡調査会」に改称

2.1982年3月、「東大阪市遺跡保護調査会」から「(財)東大阪市文化財協会」に改称

3.1995年4月、組織改変により「(財)大阪文化財センター」から「(財)大阪府文化財調査研究センター」に改称

4.2002年4月、組織改変により「(財)大阪府文化財調査研究センター」から「(財)大阪府文化財センター」に改称

《参考文献》

(財)東大阪市文化財協会『(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度』1989

(財)東大阪市文化財協会『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』1999

［註］

調査地名は区画整理等で現在までに変更されたものもあるかと思うが、原典にある表記に従った。

〈市○次〉は、東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会の調査次数を表す。

〔略称一覧〕 ※初出順・敬称略

個人：	団体：
荻田一荻田昭次	河内市教委→河内市教育委員会
藤井一藤井直正	調査グループ→瓜生堂遺跡調査グループ
上野一上野利明	府教委→大阪府教育委員会
芋本一芋本隆裕	花園高地歴部→大阪府立花園高校地歴部
大野一大野 薫	調査会→中央幹線内遺跡調査会/中央幹線内西岩田・瓜生堂遺跡調査会
金村一金村浩一	大文セ→(財)大阪文化財センター/大阪府文化財調査研究センター/大阪府文化財センター
井上一井上伸一	市保護会→東大阪市遺跡保護調査会
松宮一松宮昌樹	市協会→(財)東大阪市文化財協会
三好一三好孝一	市教委→東大阪市教育委員会

第３章　調査にいたる経緯と経過

1914年（大正３）、大阪と奈良を直結する交通機関として、大阪電気軌道（大軌）が開通した。現在の近鉄（近畿日本鉄道）奈良線の前身である。大阪府・奈良県境の生駒山の麓には、私鉄としては当時最長であった生駒トンネルが設けられた。この貫通掘削工事は大規模なもので、多くの朝鮮人労働者も従事し難工事の末１年半で開通したが、前年には落盤事故の悲劇も発生している。

開業当初の鉄道では、そのトンネルにいたるまでに、大阪上本町を起点とし国鉄城東線（現在のＪＲ環状線）鶴橋との連絡を経て東進し、片江（今里）、足代（布施）、小阪、若江岩田、瓢箪山、枚岡、鷲尾（石切）の停留所が設置されている。大阪東郊外の往時の田園地帯を貫いたこの鉄道は、現在の東大阪市域における村々での変容や発展に与えた影響はきわめて大きい。いま中年以上の世代の記憶には、長年さほど変化がなかった旧在集落や田畑が織りなす風景を通過する近鉄車両の深い小豆色が、借景の生駒山とも相まって、いかにもその雰囲気に馴染んだ渋い色合いに思えたものだった。この鉄道敷設が大きな起爆剤ともなり、大阪東郊にも都市化の波がおよぶ。市街化が進行した現在、この小豆色は、かつての歴史的環境の記憶がまったくない世代には、くすんだかなり地味とも感じるダークカラーに映っているにちがいない。近年ときおり目にする、アニメや奈良観光地を意匠化した明るい絵柄の車両や、車体に幅広の白色ラインを重ねた色合いは、若年層がもつそのイメージを払拭したい意図があるようにも勘ぐりたくなってくる。

特に高度経済成長期以降の都市化は、一方で自動車の台数急増と道路事情の悪化を招いた。1967年（昭和42）、布施・河内・枚岡の３市が合併して現在の東大阪市が誕生したが、まさにその年から、交通環境の悪化を回避するため、近鉄奈良線の高架化事業の計画が開始された。大阪平野中央を南北に延びる基幹自動車道・中央環状線と近鉄奈良線の立体交差事業は、早くも２年後の1969年（昭和44）には竣工している。だが、それより奈良側での高架化工事は1960年代以降、長らく未着手のままであった。この高架化がすでに完了している中央環状線部のすぐ東側地点、すなわち地上走行部の起点付近が、今回報告する瓜生堂遺跡における発掘調査の対象地にあたる。

さて、今回の報告書にもりこんだ成果内容は、上記に関連した、近畿日本鉄道奈良線連立立体交差事業にともなう３件の発掘調査に関してである。いずれも大阪府八尾土木事務所からの2000年（平成12）１月14日から2003年（平成15）３月31日における継続委託事業として当センターが実施した。また、それら調査にかかわる遺物整理・報告書作成業務は、2002年（平成14）８月１日から2004年（平成16）３月31日までの間、同土木事務所からの委託事業としておこなった。

まず、発掘調査については、当センター発注の発掘工事として、1999年（平成11）度、2001年（平成13）度、2002年（平成14）度の３ヶ年度分の契約事業にあたり、その内容は次の通りである。なお、以下の各調査区の「直接的現地発掘期間」とは、実際の機械掘削開始日～現地調査作業最終日（大阪府教委立会の終了時点も含）を指す。各調査区の位置は図３ほかを参照されたい。

〔1999年度発注調査区（その１）〕

発掘工期：2000年２月９日～2001年11月30日

発掘面積：1670㎡

調査区数：10調査区

各調査区の面積および直接的現地発掘期間：

99－1区：82㎡、2000年3月30日～2000年6月30日
99－2区：33㎡、2000年3月31日～2000年5月26日
99－3区：192㎡、2000年3月29日～2000年8月22日
99－4区：93㎡、2000年6月1日～2000年10月31日
99－5区：298㎡、2001年5月7日～2001年11月26日
99－6区：280㎡、2000年10月10日～2001年4月16日
99－7区：280㎡、2001年5月7日～2001年9月17日
99－8区：111㎡、2000年8月24日～2000年12月12日
99－9区：51㎡、2001年1月9日～2001年3月29日
99－10区：250㎡、2000年7月17日～2000年12月8日

概要ほか：近鉄奈良線の現営業路線の北接地において建設計画されている、高架化用の橋脚（ピア）部分の調査にあたる（なお、今回対象分は営業線の片側用のみ）。工法として、あまり広くない調査対象範囲を鋼矢板打設で囲み、その内側では土留め用支保工を2～3段に施工し、現地表下5m強にまでおよぶ掘削調査を実施した。しかも、現行の自動車道路と鉄道線路に挟まれた細長い場所のため、掘削の深化にともない、現営業線の基礎部分や道路に全く影響なしと判断できる状況でなかった。それゆえに、地盤沈下・鋼矢板倒壊を防ぐ目的の定期的観測・管理体制のもと、調査着手調査区の順序と範囲が、埋蔵文化財調査の展開にみあったあり方では実施できなかった。また、遺構写真撮影や写真測量は、そのような位置関係からクレーン車輌を用いて実施したが、それにも大きく制限が常につきまとった。そのため、埋蔵文化財の発掘に関する作業以外に、付帯する諸工事とその調整や安全確保にかかる時間と労力が、調査担当者にも心身両面で大きな負担とならざるを得ない調査となった。この状態は、2001年度以降の発掘工事でも改善されることはなかった。

発掘調査では、弥生時代前期以降の各種遺構・遺物を検出した。特記事項として、弥生時代前期の集落域、同中期の墓域（方形周溝墓群主体）・集落域、同後期の集石遺構、古墳時代の埴輪集積遺構、中世の集落域ほかがある。出土遺物量は、整理用コンテナで約450箱におよぶ。考古学以外の領域では、成果報告を後掲（第8章）したように、各専門分野の研究者による指導をあおぐとともに、自然科学的分野に関する委託分析等を実施した。

また、調査期間中には、次のような行事等があった（写真1）。2000年6月9日には、99－3区で検出した弥生時代中期の方形周溝墓群を中心対象とし関係者に発掘現場公開を実施し、約55名の参加を得た（当日配付資料：「瓜生堂遺跡99発掘現場公開資料－99－1～3区：弥生時代中期の方形周溝墓群ほか－」）。2000年12月16日には、北接域で併行して発掘を継続中であった東大阪市教育委員会（担当：福永信雄氏ほか）との合同開催で、99－6区で検出しつつあった中世遺構面を対象とし、今回発掘のそれまでの成果公表をかね一般市民に発掘現場を公開し、約458名の参加を得た（当日配付資料：「瓜生堂遺跡99発掘現場公開資料－2」）。2001年6月には、地元の意岐部中学から、職業体験教育の一環として生徒を受け入れた。2001年8月11日には、第37回低湿地遺跡研究会が発掘調査現地で開催され、多くの研究者から土層堆積状況ほかについて有益なご教示をいただいた（当日配付資料：朝田・川瀬・秋山「瓜生堂遺跡99－5区調査区における地層」）。2001年9月22日には、当センター普及資料課が主催する「郷土の文化財を見学する会」による多数の来訪者を迎えた。

〔2001年度発注調査区（その２）〕

発掘工期：2002年１月16日～2002年５月31日

発掘面積：233㎡

調査区数：３調査区

各調査区の面積および直接的現地発掘期間：

01－１区：92㎡、2002年１月29日～2002年４月23日

01－２区：68㎡、2002年１月28日～2002年４月26日

01－３区：73㎡、2002年１月28日～2002年５月15日

概要ほか：上記の1999年度発注調査区の発掘期間内において、99－２区と99－３区の間に存在した関西電力鉄塔が撤去移設され、その範囲内での高架用橋脚の予定部分には、過去の鉄塔建設時の破壊から免れている未調査域が存在することが判明した。そのため、99－２区と99－３区に接続した位置に01－２区と01－３区の２調査区をあらたに設定し、追加調査を実施した。また、1999年度発注分の最東端にあたる99－１区において、弥生時代中期から中世にいたる遺構面が確認され、遺跡の範囲自体がより東側に拡がることが予測された。そこで、99－１区のさらに東側に01－１区を設定し、遺跡の有無を確認調査した。

これら今次の調査区でも、弥生時代前期以降の各種遺構・遺物を検出した。特記事項として、01－２区・３区部では、近畿最古期に属する弥生時代前期の水田、99－３区で一部確認していた弥生時代中期の方形周溝墓の続き部を発掘し主体部等の調査をおこなった。一方、01－１区では、弥生時代中期の溝、同後期～庄内式期の水田、中世の集落域を検出し、遺跡がこの地点まで確実に拡がっている事実を把握できた。出土遺物量は、整理用コンテナで約50箱である。

〔2002年度発注調査区（その３）〕

発掘工期：2002年11月１日～2003年３月28日

発掘面積：153㎡

調査区数：３調査区

各調査区の面積および直接的現地発掘期間：

02－２区：51㎡、2002年11月12日～2003年１月28日

02－３区：51㎡、2002年11月６日～2003年１月29日

02－４区：51㎡、2002年11月12日～2003年１月31日

概要ほか：以上の両年度発注調査区の成果から、今回の高架化用地内において、遺跡の東限がどこまで延伸するのかを再検討する必要性がでてきたことになった。それを確認する目的で、01－１区の東側一帯、若江岩田駅までの間に、02－２区～４区の３調査区を設定した。

調査結果としては、先の両年度ほどには遺構・遺物は検出できなかったが、次の諸点が確認できた。弥生時代では顕著な遺構はみられなかったものの、前期においては最東端の02－４区で土器が数点ながら出土しており、また層順等から水田域として利用されていた可能性も考えられた。古墳時代では、99－３区で西岸を確認していた流路の東岸を02－３区で検出し、その流路幅が約200mと判断できた。中世においては、瓜生堂遺跡から東接して岩田遺跡に続く集落域の東限が01－１区付近に相当し、それより東側には水田域が展開すると推定できた。出土遺物量は、整理用コンテナで約７箱である。

次に、これらの発掘調査にともなう遺物整理・報告書作成については、上記の発掘調査期間と一部重

複して開始し、2004年2月における本報告書の刊行とその残務整理の実施をもって完了した。この間の作業は、先述のように16もの発掘区において最大28面にもおよぶ調査面があることから、現地作成図面や写真類等の記録保存資料が膨大で、さらに出土遺物量も土器類を中心として整理コンテナ500箱以上にも達する多量であったため、決して平板順調な進捗ではなかった。なお、この業務を計画的かつ有効的に遂行することを目的に、発掘で検出した遺構・遺物類の総合的な検討会を、「瓜生堂（近鉄）勉強会」と称し定期的に開催した。この会には、当センター以外からも毎回少なからずの参加者があって多くのご教示・協力を得ることができ、整理・報告にも有益に反映することができたといえる。参考までに、各回の検討内容を下記しておく。

〔瓜生堂（近鉄）勉強会の記録〕

（各回：当センター中部調査事務所にて夕刻から開催）

第1回　2002年10月18日　中川二美・秋山浩三「瓜生堂遺跡方形周溝墓出土供献土器の検討」

第2回　2002年11月20日　秋山浩三・池谷　梓「近鉄瓜生堂遺跡出土の埴輪について―瓜生堂99－5区出土の埴輪―」

積山　洋「大阪市御勝山古墳と瓜生堂遺跡の埴輪における比較検討」

一瀬和夫「瓜生堂遺跡埴輪に関してのコメント」

第3回　2002年12月17日　秋山浩三・中川二美「瓜生堂遺跡出土木製品の検討」

第4回　2003年1月29日　秋山浩三「瓜生堂の5分画挽き臼をめぐって」

川瀬貴子「瓜生堂遺跡99・01区中世遺構の検討」

第5回　2003年2月12日　中原　計「瓜生堂遺跡出土木質遺物の樹種について」

第6回　2003年3月27日　川瀬貴子・池谷　梓「瓜生堂遺跡出土中世瓦の検討」

第7回　2003年4月23日　手島美香「弥生時代前・中期における剥片剥離技術の比較検討」

第8回　2003年5月22日　秋山浩三・中川二美「瓜生堂遺跡99－5区出土の弥生時代後期土器」

小野亜由美「勝部遺跡の弥生時代後期末の土器」（弥生後期土器関連報告）

秋山浩三・河村恵理「瓜生堂遺跡出土の四国（讃岐・土佐）産弥生後期土器をめぐって」

第9回　2003年6月13日　宮田佳代「瓜生堂遺跡の土製品」

第10回　2003年6月26日　秋山浩三・中村大介「瓜生堂の方形周溝墓について」

第11回　2003年7月17日　秋山浩三「瓜生堂遺跡99調査区の弥生前期における生駒山西麓産土器の突出性―弥生土器の胎土分別・比率算出をめぐって：作業方針の打ち合わせのために―」

第12回　2003年8月21日　秋山浩三「瓜生堂99・01調査区の弥生胎土分別・比率算出をめぐってMark Ⅱ―作業方針・検討項目の打ち合わせのために―」

中川二美・秋山浩三「瓜生堂99・01調査区の弥生胎土分別・比率算出をめぐって：弥生後期編」

秋山浩三・長友朋子「弥生人の食生活具カタログ―瓜生堂遺跡出土品の評価をめぐって―」

第13回　2003年12月3日　秋山浩三「歴博プロジェクト・瓜生堂（近鉄）^{14}C年代測定値の速報・解説」

（秋山）

第１回現地公開風景

第２回現地公開風景

高所作業車を使用した写真撮影風景

発掘調査風景

大阪市立大学・安部先生ご指導風景

職業体験実習の意岐部中学生とプレハブ前での記念撮影

整理作業風景

瓜生堂勉強会風景

写真１　調査・整理・各種行事等風景

第４章　調査の方法

今回の調査は近鉄奈良線の立体交差化に伴うものである。従ってその範囲は高架が実施されていない中央環状線と近鉄奈良線線路が交わる地点から若江岩田駅西側までが該当する。東西約１kmの範囲で、現行線路の北側、高架の橋脚部分にあわせて調査区が設定された。1999年度で10区、2001年度で３区、2002年度で３区の合計16の調査区を設定した。各調査区の名称は調査年度の３・４桁目を頭につけ、－でつないだ後ろには東に位置するものから昇順で１ないし２桁の番号を与えた（例：99－１～10区、01－１～3区、02－２～４区）。02区のみ02－１区が他調査で既に存在したため、最東区を02－４区とし、ついで東から02－２・３区とした（図３）。各調査区の詳細は、第５章・第６章の調査区全体図を参照されたい。線路に近接していることと、最深T.P.－2.0m以下まで掘削を行うため、周囲に鋼矢板をめぐらし、掘削の深度にあわせて２段ないし３段の鉄骨切梁を設置した。鉄骨切梁は調査終了後除去されたが、鋼矢板は本体工事に引き継いで使用されるため、そのまま埋め戻された。

掘削はまず重機によって盛り土等を除去した。その際この周辺がかつて近畿日本鉄道の車庫・工場として使用されていた名残の敷コンクリートが埋設されていたため、これを除去した。その後掘削深度に応じて人力掘削を行った。掘削深度は現地表から３m、４m、4.5m、５mと調査区によって異なる。これはやはり線路に近接しているため、北側の調査結果や試掘結果をもとに、擁壁等への影響を考えて最低限必要な深度が設定されたためである。よって、遺構深度が当初設計を越える遺構面については下層確認を部分的にしか行えなかったところもある。

調査総面積は2000㎡強である。各区の長さ（東西長）は様々だが、幅（南北長）は６m前後と細長い。そのため土層断面観察用のアゼは南側にのみ設定し、それ以外は必要に応じて適宜設けた。

写真撮影はクレーン車及び高所作業車を用い、平面測量もクレーン車や平板測量によって1/10、1/20、1/50、1/100のスケールを適宜使用して行った。

地区割りには当センターで従前から行われている国土座標系（第Ⅵ座標系）を使用して大から小への数段階で行う方法によった。第Ⅰ区画は１万分の１地形図ををそのまま使用し、第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を各々４分割、16区画を設定したものである。2500分の１地形図で東西2.0km、南北1.5kmの範囲を示す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20分割、南北15分割し、100m四方の範囲としたものである。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を東西南北とも10分割、10m四方とする。遺物の取り上げなどに関してはこの第Ⅳ区画を主に用いた。地区割りについては2002年度から測量法の改正に伴い世界測地系が採用されたことにより、従来の日本測地系と世界測地系の両方が存在することとなった。しかし、この報告書ではそれまでの調査成果との整合性を保つため従来の日本測地系の測量基準に従った座標を用い、第６章の2002年度調査についてのみ新旧両方の座標を表記してある。

遺構番号は現地調査の際付与した番号をそのまま使用した。遺構の重なり等で重複が生じた際はS10400E、S06456ｂなどの記号・枝番で区別した。その後整理時に必要が生じた場合、集石遺構１といった番号を付与した。第５章以下の遺構・遺物の記述に際して、必要な遺構番号のみを記載するにとどめた。遺物番号は現地調査では土器、木製品等の種類別の番号を特筆すべきものに対して付与したが、報告書掲載にあたって時代別に遺物番号を付けた。その他に、現地調査と平行して人骨や地震痕跡の現地指導を受け、調査終了後も土壌分析などの委託分析を行った。その結果は第８章に掲載した。（川瀬）

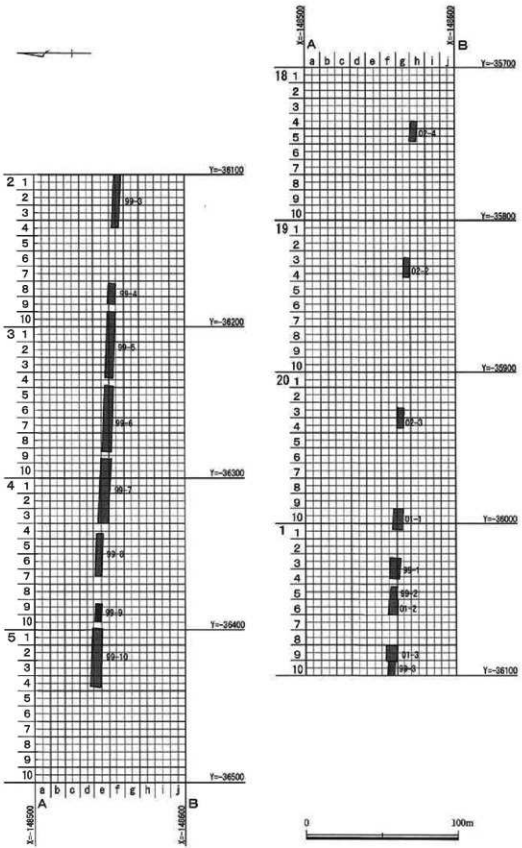


図３　調査区配置と地区割

第５章　99・01年度発掘調査の成果

第１節　基本層序と各区遺構面の対応関係

１．はじめに

当センターは瓜生堂遺跡において、のべ３ヵ年近くにわたる調査を行ってきた。このうち99・01年度の対象となった調査区は、全部で13を数え、最東端に位置する01－１区から、最西端に位置する99－10区まで東西約600mの距離をはかる。

今回の調査では、現地表高T.P.約3.0mから機械掘削を開始し、T.P.約－0.5～－2.0mの深度まで人力掘削を行なった。その結果、当遺跡北東域の東西方向の層序をほぼ連続的に把握することができた。また、当遺跡北西側で（財）東大阪市文化財協会が実施した瓜生堂遺跡第42次調査や、近畿自動車道関連調査などの既往調査成果も合わせると、東西方向１㎞近くという広範囲の層序が理解可能となった。しかし、今回の調査区は東西方向で連続的に位置しているものの、実際の調査においては各調査区において層序を対比させ、同一層序を連続的に把握することにかなりの労苦を要した。

通常、中河内地域で発掘調査を行なう場合、調査区の周囲に鋼矢板を打設し調査を行なう。特に今回の調査では、南側に近畿日本鉄道の営業路線が、北側に一般道が近接していることから、地盤強化を通常より念入りに行う必要があった。そこで鋼矢板倒壊防止の鉄骨切梁を深度1.5m毎という短い間隔で設置することとなった。切梁設置するには調査面を平坦にする必要がある。そのため土層観察用のアゼや方形周溝墓といった「凸状」の遺構を元来の形状のまま残して調査できず、層位の連続性を追うのにはきわめて困難で、不自由な調査を強いられることとなった。

また、各調査区の作業スペース、特に排土置場が不足しており、これらを確保するために、隣接調査区の同時調査が不可能であった。

そこで各調査区の面呼称に関しては、たとえ隣接区で同一層序と判断できる土層、あるいは出土遺物等から同時期と判断できる遺構面を検出したとしても、共通の面呼称を当てはめることはしていない。各調査区毎に、検出した遺構面を上から順番に「第１面」「第２面」と呼称することとした。そのため同時代の遺構面であったとしても、各調査区で面呼称が異なることとなった。

一例をあげるならば、当遺跡において弥生時代中期と後期を区分する鍵層として、方形周溝墓や集落跡を覆う黒色土壌化層が周知されている。この土壌化層の上面を、99－１区では「第14面」、99－３区では「第12面」、99－５区では「第18面」、99－10区では「第８面」と呼称している。

このように面呼称に関しては、上記の記載方法を踏まえて調査時の表記をほぼ忠実に報告することを目標としたため、層序の理解、あるいは遺構面の時期比定等にやや煩雑な作業を強いられることとなった。

そこで本節で各調査区の層序、遺構面の対応関係については、断面模式図を掲載し（図４～９）、詳細を記載していく。さらにこれらと合わせて、より層序の理解を容易にするため、別表にてこれら遺構面、層序の時期の対応関係を示すので参考にされたい（表２）。

以下、時代の古い方から順に、主要な層序を中心に記載してゆく。

2．基本層序

（1）縄文時代晩期以前

〔下層：灰白色もしくは灰オリーブ色極細粒砂～粗粒砂〕

本層は調査区域全体のうち、99－1区、99－2区を除く範囲で確認した。

本層上面の検出レベルはT.P.約－1.8m以下である。特に、下層の層厚は、調査時には確認できなかったが、近接地のボーリング調査結果では約1.5mをはかる。この砂層は、「河内潟」から「河内湖」へと推移する時期の堆積物で、旧大和川支流の堆積作用が進み、徐々に水位が低下していった結果と考えられる。

特に、99－3区から6区の範囲でのみ粒径の粗い砂層が見受けられることから、この範囲が流路あるいは流路の末端部分に相当し、これらの堆積作用により微高地が形成され、後の弥生時代前期遺構面の展開に大きな影響を与えたと考えられる。

〔上層：黄灰色シルト混じり極細粒砂～粗粒砂、生物擾乱顕著〕

本層は調査区域全体のうち、99－1区、99－2区を除く範囲で確認した。

河内潟縁辺部の堆積に相当する。縁辺部の陸化が進んでゆく過程の堆積物で、堆積層上部が水位低下により地表面に現れ、干潟のような様相を呈していたと考えられる。顕著な生物擾乱を確認することができた。

（2）弥生時代前期

〔下層：オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト～粘土〕（図4～9の基本層序断面模式図中のF・G・Hに相当。以下、模式図：F・G・Hという形で表現。）

本層は調査区域全体のうち、99－2区を除く範囲で確認した。

本層の検出レベルはT.P.約－2.0～－1.4mである。

本層は弥生時代前期の鍵層となるもので、99－3区～5区に展開する微高地上においては、縄文晩期相当の粗粒砂層上部が土壌化作用を受けており、約20～30cmの層厚をはかる。この範囲においては、砂粒の含み具合などで少なくとも3層に分層することができる。遺構面としての遺存状態は悪く、遺構等の切り合いや掘り込み面の確認が困難で、本層が比較的長期間地表面として機能していたことが伺える。また、3層に分層した土層中の出土遺物は、各層で明確に時期差がみられるというものではなく、上下層の混入が存在する。しかし、より詳細にみてゆくと、下層部分では前期中葉でもやや古い要素をもつ土器が、中・上層部分では、前期後葉の新しい要素をもつ土器がごく一部に含まれており、出土遺物からも本層の時期が弥生時代前期中葉を中心として一部後葉にいたるという時間幅をもつことが判断できる。

一方、低地部分では、99－3区東半部、あるいは99－5区西半部でシルト～粘土に砂粒をわずかに含む土壌化層へと徐々に変化し、本層が後背湿地堆積に相当すると考えられる。生物擾乱や地震による撹拌作用を受けており、遺構面としての遺存状態はあまり良くない。

今回の調査では、集落域に近接する01－3区で水田畦畔を検出し、99－3区、99－4区では木製農具が出土していることなどから、集落域に接した低地部分を生産域として利用した可能性が高い。本調査では、これら生産域の範囲を確認するために、01－3区や99－8区において、弥生時代前期相当層やその上下層の土壌サンプルを採取し、プラントオパール分析を行なっている（第8章第1節）。

〔上層：オリーブ灰色シルト（植物遺体含む）〕

本層は調査区域全体のうち99－２調査区を除く範囲で確認した。

下層の遺物包含層あるいは後背湿地状の堆積の上部は、有機物を多く含む層として分層可能であった。約５～10cmの層厚をはかる。遺構、遺物等はほとんど無い。上下層との関係で弥生時代前期後葉以降の相当層と判断したが、明確な時期比定はできなかった。

（３）弥生時代中期

〔下層：暗緑灰色シルト～粘土〕

本層は調査区域全体のうち、99－２区を除く範囲で確認した。

本層の検出レベルはT.P.約－1.5～－0.8mで、約10～40cmの層厚をはかる。弥生時代前期相当層を覆うように、シルト～粘土層が均質に堆積している。粒径が細かいため、流れの少ない堆積環境下であったと推測できる。遺構、遺物はほとんど無い。上下層との関係で弥生時代中期相当層と判断したが、弥生時代前期上層と連続しており、本層も明確な時期比定はできなかった。

〔中層：緑灰色粗粒砂〕

本層は01－１区から99－５区、99－８区から99－10区などで顕著にみられる。

本層の層厚は20cm～１mをはかる。99－３区においては縄文晩期相当層まで浸食する流路が存在し、その洪水堆積が隣接調査区に広がっている。また、99－10区周辺にも流路が存在し、それぞれの堆積によって微高地が形成される。上下層との関係などから弥生時代中期前葉から中葉頃に相当すると考えられる。

〔上層：暗オリーブ褐色シルト（細砂混じり）～黒色粗砂（シルト混じり、粘性有）〕

本層は調査区域全体で確認した。

本層の検出レベルはT.P.約－1.2～－0.2mで、01－１区から99－９区では約10cmの層厚をはかる。99－１区から99－５区の範囲では、本層をベース面として方形周溝墓が作られた。一方、西端の99－10区では、本層を３層に分層可能であった。99－10区では微高地をベースとして集落が形成されており、遺構が集中する。さらに盛土を施した部分も確認しており、最大約40cmの層厚をはかる。盛土の状況などから、集落の存続した時期に当遺跡周辺の水位が上昇した可能性も考えられる。出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

（４）弥生時代後期（～庄内式期）

〔下層：黒色粘土～シルト（植物遺体多く含む）〕（模式図：C）

本層は調査区域全体で確認した。

植物遺体（有機物）を多量に含んだ土壌化層であり、瓜生堂遺跡の全範囲において、弥生時代中期と後期を分ける鍵層として認識されている。当調査区域においても、弥生時代中期遺構面を覆うようにほぼ均一に堆積している。本層の検出レベルはT.P.約－1.2～－0.2mで、層厚は約10cm程度をはかる。

本層上面において遺構の確認できる範囲は、99－５から７区の範囲と限定されており、土器集積、集石遺構などを確認した。出土遺物から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

〔上層：オリーブ灰色シルト～粗粒砂と植物遺体堆積の互層〕（模式図：B）

本層は調査区域全体で確認した。

本層の検出レベルはT.P.－1.0～0.2mで、主な植物遺体層を３層確認した。それぞれ約５～10cmの層厚をはかる。

黒色土壌化層より上層は、洵汰の進んだシルト～粘土が層厚10～20cm程度、植物遺体堆積層が層厚1～2cm程度で互層に堆積しており、水位上昇と低下を繰り返す堆積環境にあったと判断できる。この互層内の植物遺体堆積層は、どの調査区においても最低3層確認できるが、下層の黒色有機物層と比較すると土壌化はそれほど進んでいないことから、地表面として機能していた時間が短いと考えられる。また、このような堆積環境下にあるため、当時期の遺構に関しては、集落などのような継続して営まれた遺構はほとんど確認できず、水位が低下した後の、ごく短期間に営まれた遺構が中心であった。

99－5区～7区の範囲の微高地上では、中・下層の植物遺体堆積を除去すると土器集積遺構等を確認することができた。また、東端の01－1区では、水田畦畔を検出している。出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から庄内式期・古墳時代初頭と考えられる。

（5）古墳時代

〔下層：緑灰色粗粒砂～小礫、上層：灰色シルト～細砂〕

両層とも調査区域全体で確認した。

下層は約1～2m、上層は約50cmの層厚をはかる。古墳時代初頭から古墳時代中期頃にかけて、当遺跡周辺には大量の土砂がもたらされた。特に、01－1区から99－3区においては、推定幅200mの規模をはかる流路が存在する。本流路（以下、自然流路1と呼称）は、旧大和川の「小阪合分流路」から分かれた「西岩田分流路」に相当するものと考えられ、流路内の洪水堆積、あるいは流路からの溢流堆積などによって、当調査区域周辺の標高は一気に上昇したと考えられる。なお、古墳時代の遺構は、調査区域中央部の99－4区に限られており、T.P.約＋1.8mの標高において古墳時代中期相当の埴輪集積遺構を確認している。

（6）古代から中世

〔下層：灰色細砂～粗砂（シルト混じり）〕

本層は調査区域全体で確認した。

01－1区から99－4区での本層検出レベルはT.P.約＋1.8～＋2.5mであるが、99－5から99－10区での本層検出レベルはT.P.約＋1.0～1.4mと低い。

古墳時代以降は流路の氾濫による堆積が停止して安定し、自然環境による急激な堆積変化はみられない。流路内堆積あるいは洪水堆積による微高地をベースとしており、その上部が土壌化している。層厚は約30cmをはかる。

古墳時代以降、特に古代から中世にかけて集落域が展開していた。古代においては、平安時代相当と考えられる遺構および遺物等が99－1区から01－2区の範囲を中心として展開、出土している。なお、中世以降においては、01－1区から99－7区の範囲まで遺構、遺物等を確認している。

〔上層：灰オリーブ色シルト（鉄分沈着）〕

本層は調査区域の西側、99－6区から99－10区の低地部分で確認した。

古墳時代の微高地周辺に形成される後背湿地状の様相を呈しているが、水田耕作などの上層からの影響を受けており、遺構の遺存状態が悪い。また、下層からの地下水の影響を受けていることから層中の鉄分の沈着が著しく、赤橙色に変色している土層がほとんどであった。99－8区ではわずかながら水田畦畔を確認しており、当時期の調査区域西側は生産域として利用されていたと考えられる。

（7）近現代

〔下層：緑灰色シルト～黄褐色シルト混じり細砂〕

本層は調査区域全体で確認した。基本層序断面模式図に記載されている「盛土」の直下層部分がこれに相当する。99－2区では層厚が30～40cm程度で、本層を除去することで遺構面を検出することができた。耕作土等に利用されていたものと考えられる。盛り土がなされ、水田等に利用されていたようである。

〔上層：礫混じり粗粒砂（客土）〕

99－3区より西側においては層厚が80～100cm程度と厚くなる。近畿日本鉄道の車庫・工場建設や周辺の宅地化に伴って、旧地形を平坦にするため盛土がなされたようで、その客土とみられるマサ土が堆積する。

（8）小結

ほぼ東西方向で一直線状にに調査区が設定されていたため、東西の広範囲にわたって、連続した地層堆積の変化や、地表の高低が遺構の形成に及ぼす影響を追うことができた。その結果、縄文時代晩期に陸地化したのちも、弥生時代には全時期を通じて、浸水と乾燥を繰り返して徐々に地表面が上昇したことがわかった。さらに、古墳時代の大流路の氾濫作用によって、地表は高位部と低位部の逆転現象を起こしながら一挙に上昇する。その後は自然作用による影響が少なく、地盤はほぼ安定する。これ以降は氾濫堆積をベース土としながら、むしろ盛り土や掘削という人為的な土地改変の様相がみてとれる。

また、この節では全体的な地層の層序をみたが、99－9区の弥生時代中期から後期という、局所的な限定した時期の堆積状況については、後章で分析検討してあるのでそちらも参照されたい（第8章第7節）。

3．各区遺構面の対応関係とまとめ

初めに述べたように、同一層序と判断できる土層にも各調査区毎の調査時の遺構面名称を採用してあるので、調査区間の同一層序の対応関係が煩雑となってしまった。

そこで、各区の層序を整理して、検出高を縦軸に調査区を横に並べて、同一層序（時期）を同じトーンで示すことで対応関係をみやすくしたものを、表2に示した。各柱状図中の数字が遺構面名称（第○面）を表す。

グラフの下方がT.P.－2.0m付近まで及んでいない調査区は、調査深度がそこまで達していないためである。また、細かい単位で互層になっているところはこの表で表現できていないので、基本層序模式図を参照されたい。

表2をみると改めて今回の調査区の特徴がいくつか分かる。一つは全体的な地形の高低についてである。弥生時代前期には調査区中央部が低かったのが、弥生時代中期の洪水によって地形の逆転現象が起こり、以降、弥生時代後期から古墳時代まで中央部が高くなる。その後古墳時代の自然流路1の氾濫によって主に調査区東半で一挙に堆積が進行する。よって、それ以降は調査区の東側が高く、中央が低くなり、西に進むと再び上がる地形をとる。また、古墳時代から古代の層序は上下層による影響のため、局所的にしかみられない。

上述してきたように、T.P.－1.5m前後の弥生時代前期初めから現代までにわたり、自然の堆積作用によって約4.5mもの堆積を示すのは、河内平野の低湿地遺跡の特徴であろう。（川瀬・朝田）

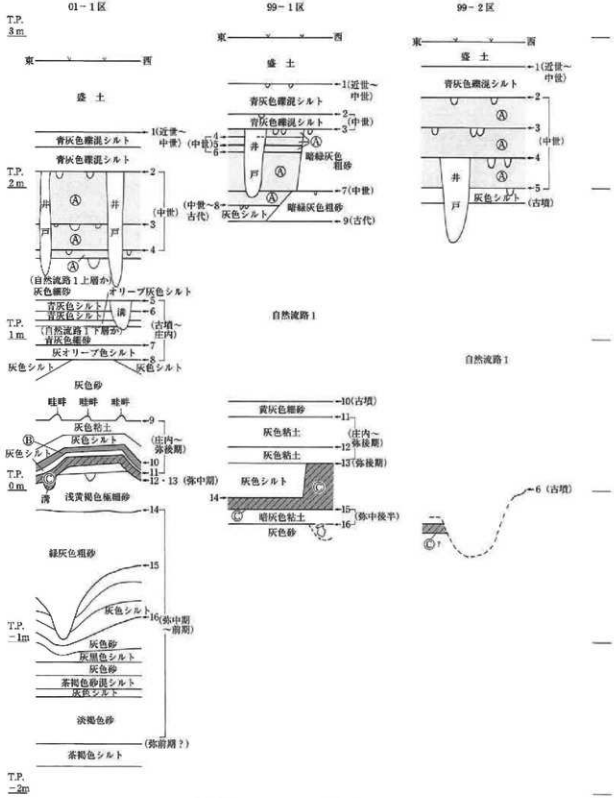


図4　基本層序断面模式図－1
(01－1区・99－1区・99－2区)

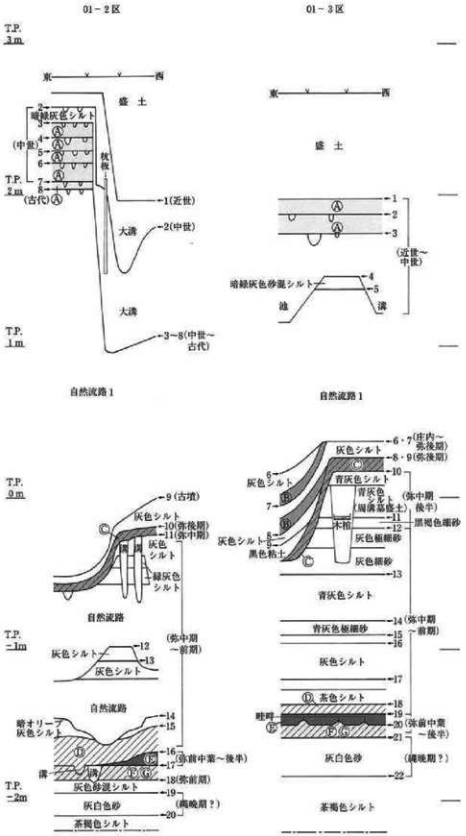


図5　基本層序断面模式図－2
(01－2区・01－3区)

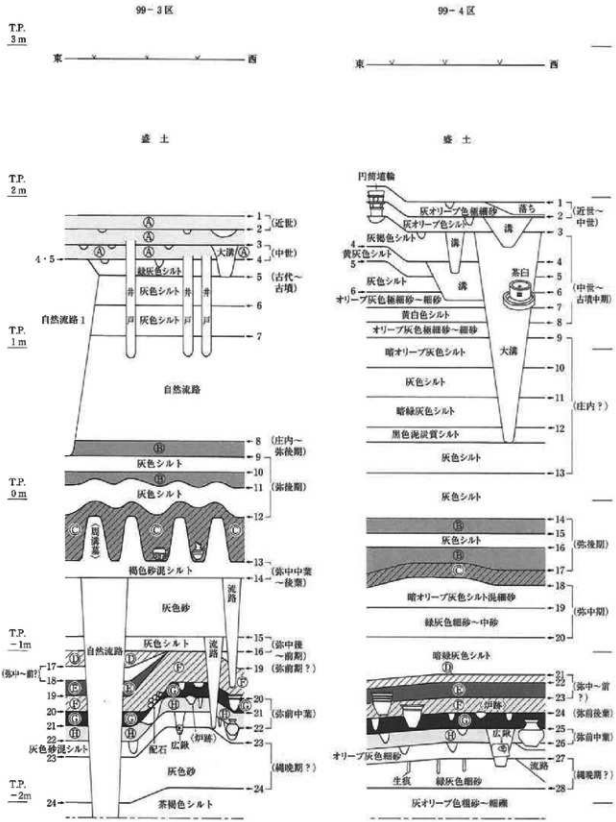


図6　基本層序断面模式図－3
(99－3区・99－4区)

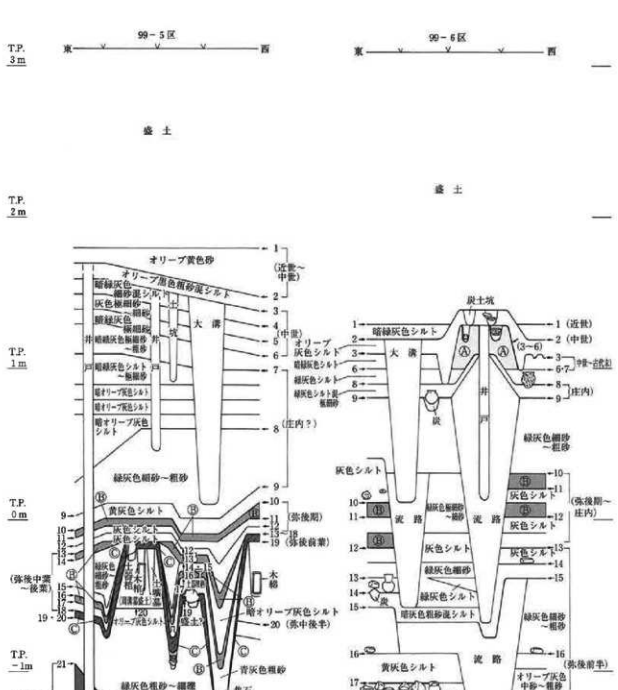


図7　基本層序断面模式図－4
(99－5区・99－6区)

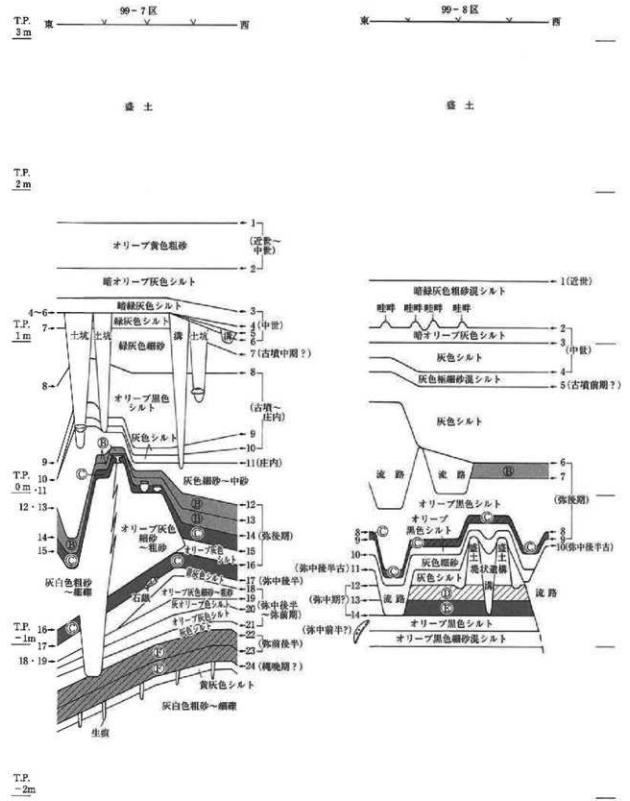


図8　基本層序断面模式図－5
(99－7区・99－8区)

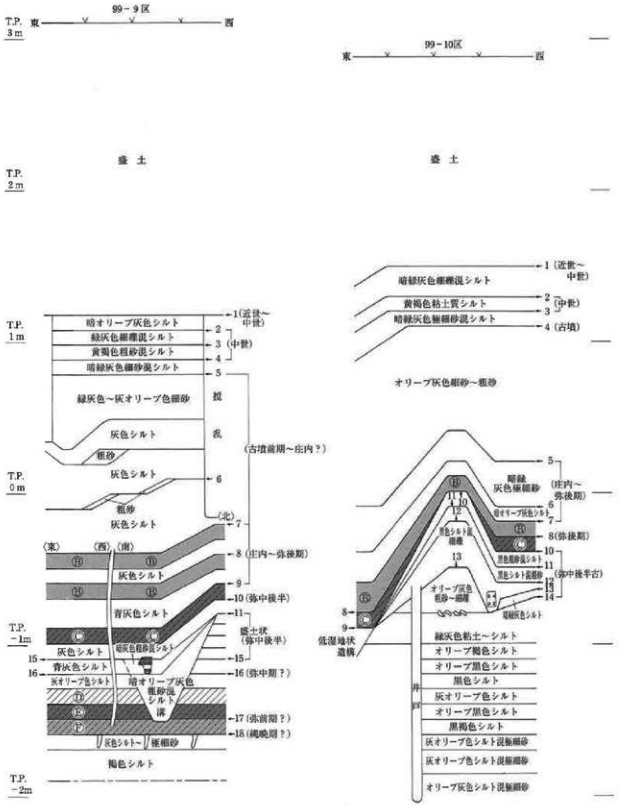
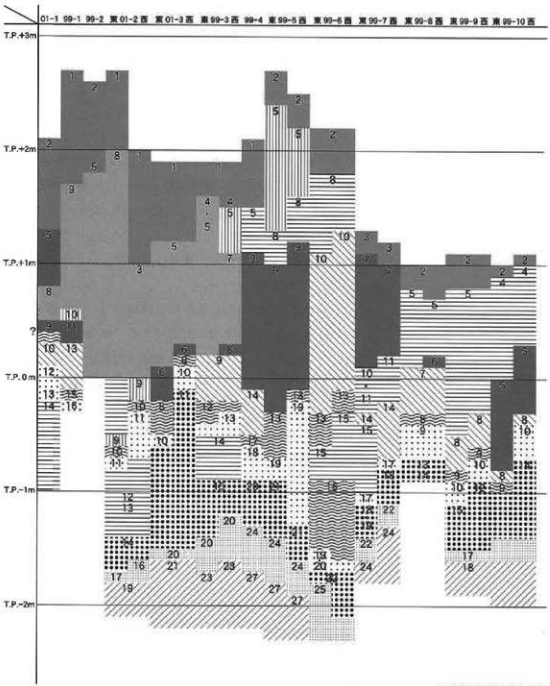


図9　基本層序断面模式図－6
（99－9区・99－10区）

表2　99・01調査区遺構面対応関係



※数字は遺構面を表す

凡例：

- 縄文時代晩期以前
- 弥生時代前期
- 弥生時代中期前半
- 弥生時代中期前半～後半
- 弥生時代後期後半
- 弥生時代後期前半
- 流路
- 古墳時代自然流路1
- 中世以降
- 古墳時代～古代
- 弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期）

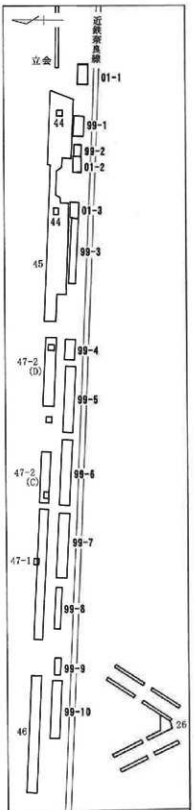


図10　縄文時代晩期以前遺構面全体図

第２節　縄文時代晩期以前の様相

１．遺構面と遺構（図10）

当遺跡における縄文時代晩期以前の面は、弥生時代前期相当層を除去して検出することができた。検出レベルはT.P.－1.6m以下となる。

99－３区から99－６区で確認できた土層堆積状況からは、当該時期の土層が著しい生物擾乱作用を受けていることが分かっており、当調査区周辺が干潟などの堆積環境であった可能性が考えられる（第５章第１節基本層序参照）。それより下層は粗粒砂の堆積物が調査区全体に広がっている。

今回の当調査区域では遺構、遺物等を確認することができなかった。

縄文時代晩期相当上層面は弥生時代前期相当の包含層を除去すると、灰色細砂上面で検出することができる。生物擾乱が著しく、弥生時代前期相当の黒色シルト層が巣穴等に充填されており、調査区全体で径５cm程度の穴を多数検出することができる。これら巣穴等を除去すると、粗粒砂の堆積層を検出することができる。

堆積層上面まで確認できた調査区は99－３区、99－４区など微高地が形成されている範囲の下層に限られている。

２．遺物

縄文時代に該当する遺物はどの調査区からも出土しなかった。ただし、縄文時代晩期相当上層中には自然木などの有機遺体を多く含む。

３．小結

縄文時代晩期に相当する包含層中からは遺構、遺物とも検出されなかった。縄文海進により入り込んだ河内湾が河内潟・河内湖へと変化するのは縄文時代末であるが、その汀線が当調査区の北側約１kmにまで及んでおり、当調査区域は陸地化が進行する過程の干潟のような地形環境で、常に浸水にさらされていた。つまり、人間の住環境には適さなかったと推測できる。

そのため、当該時期にはこの周辺には人間の生活活動は及んでいなかったと言える。

（川瀬・朝田）

第３節　弥生時代前期の様相

１．遺構面と遺構（図11～31、写真図版１～７）

（１）概要

弥生時代前期遺構面は01－２区から99－７区の範囲で確認することができた（図11）。

弥生時代前期遺物包含層は黒色粘土からシルトの土壌化層であり、間にやや灰色がかった層を挟むこともあり、２面から４面の遺構面が存在する。この上面、下面遺構面それぞれの検出高は上面がT.P.－1.5～－1.2m、下面がT.P.－1.8～－1.5mである。

弥生時代前期の土地利用状況をみてみると、99－３区中央部から99－５区東側の範囲には、縄文時代晩期以降に形成された微高地が存在し、当時期の遺構はこの微高地上に集中している。その遺構密度、遺物量から判断して、安定した集落域を形成していたと想定できる。一方、微高地の東西両側には微低地が広がっており、遺構密度、遺物密度共に低い。しかし、東と西では同じ微低地でも様相が異なる。

今回の調査では、東側微低地部分の01－３区で水田畦畔を検出しており、01－２区でも水田遺構に関連する遺構を検出した。これによって集落域と生産域が近接して併存している様子が明らかになった。対して、西側微低地では人為的な遺構・遺物はきわめて希薄である。

そこで、99－３・４・５区に相当する集落域、99－６・７区に相当する低地部、01－２・３区に相当する水田域の順にみていく。

（２）集落域の様相

１）99－３区

本調査区では、計４面の遺構面を検出した。調査区の東側は、弥生時代中期前半相当の流路によって縄文時代晩期相当層まで浸食を受けており、この浸食部分の東肩から調査区東端にかけて遺構面がわずかに遺存していた。

一方、浸食部分の西肩から調査区西端にかけては、先述のように微高地が広がっており、西へ向かうに従って遺構面が高くなっていく。弥生時代前期の遺構は、この微高地上に集中して見られた。各遺構の切り合い関係、あるいは帰属する面の確認が非常に困難で、比較的長期間集落が存続していたことを伺わせる。

なお、本調査区に北接した地点で、（財）東大阪市文化財協会が実施した第45－２次調査区においても、３棟の竪穴住居とともに多数

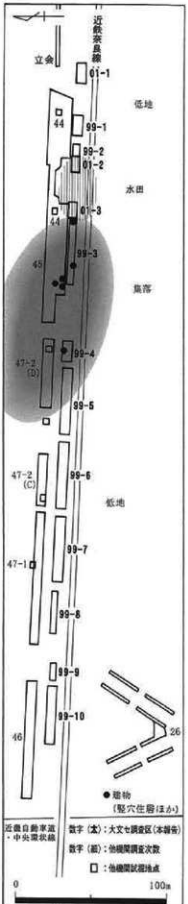


図11　弥生時代前期遺構面全体図

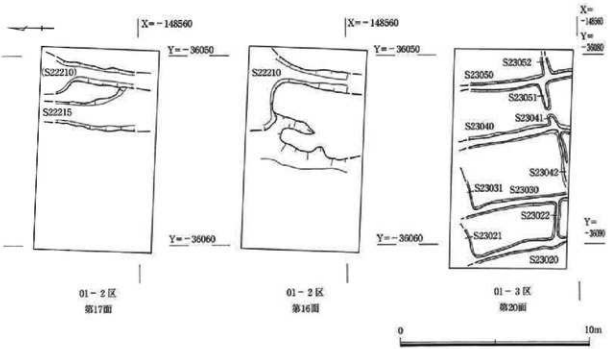


図12　弥生時代前期遺構面平面図－1
（01－2区：第17面、第16面、01－3区：第20面）

の土坑、ピットを検出しており、集落が北方向に展開することが確認されている。

a．第23面

第22面ベース層の土壌化層（黒色粘土～シルト層）を除去して検出した、オリーブ灰色シルト～砂層の上面で検出した遺構面である。つまり本面は「b層上面」に相当し、検出した遺構のほとんどが上部より掘り込まれた可能性が高く、上面確認の遺構面と重複する遺構が多い。それで全体平面図にも第22面と第23面で同一遺構の場合、最底部の検出状況を第23面に掲載した。また、第22面遺構と断定できるピット群の説明は第22面で記述することとした。

遺構の密度はやや低く、調査区中央部から西側でピット、土坑等を検出した（図13）。

b．第22面

第21面ベース層を除去して検出した面である。本面は3つに分層した弥生時代前期包含層の下層（3層目）の上面に相当する。本面上の遺構密度は比較的高く、調査区中央部から西側で溝、ピット、土坑などを検出した。東端では掘立柱建物を1棟検出した（図13）。

〔掘立柱建物Ｓ03500〕　調査区東側で検出した（図19）。柱の配置は東西4間、南北に3間、一辺約2ｍ強、面積4㎡で隅切りの正方形ないし多角形状をなす小規模な掘立柱建物である。この建物は隅柱が存在せず、弥生時代では類例のほとんどない特殊なプランをもつ。建物の各ピットは直径約40cm、掘り込みが検出面より約20cm程度とそれほど深くないので、高さがない建築物であったと想定される。ピットには柱根痕跡が明瞭に残るものもある。遺物はほとんど出土していないが層位的に弥生時代前期中葉に相当すると考える。竪穴住居の最底部を検出したとも考えられるが、断定できなかった。

〔溝Ｓ03371〕　調査区中央部で検出した（図20）。幅約1.2m、深さ約30cmをはかり、南－北に主軸を取る溝である。西側のピット群などからなる集落域の環濠となる可能性をもつ。本遺構に関しては検出当初溝Ｓ03371と一括して認識したが、断面等を検討した結果、切り合いをもち重複した遺構と判断し、上層相当部分を第20面溝Ｓ03371Ｂ、下層相当部分を第22面Ｓ03371として別名称を与え、掘削を分けて行った。

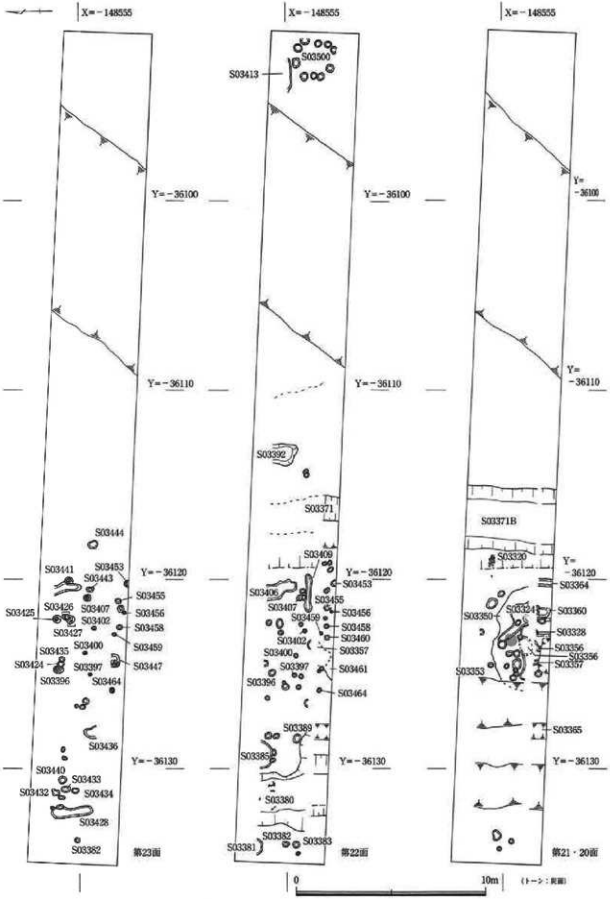


図13　弥生時代前期遺構面平面図－２（99－３区：第23面、第22面、第21・20面）

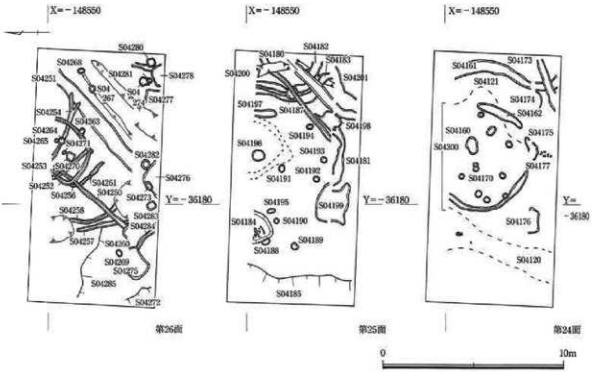


図14　弥生時代前期遺構面平面図－３
（99－４区：第26面、第25面、第24面）

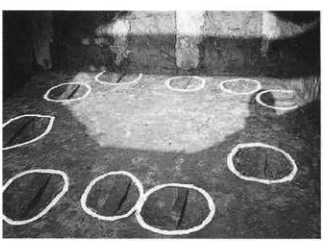


写真２　99－３区第22面建物検出状況

写真３　弥生時代前期遺構面断面と調査風景

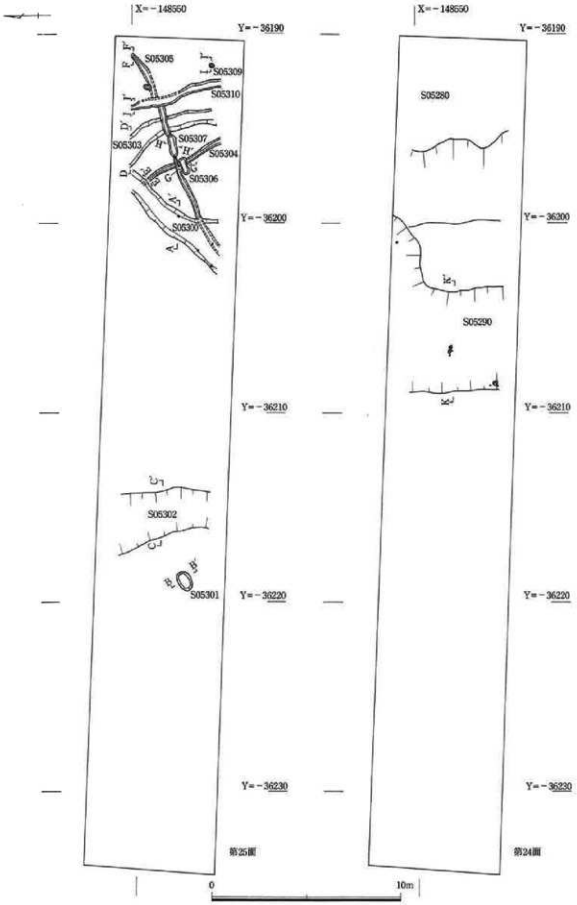


図15　弥生時代前期遺構面平面図－４（99－５区：第25面、第24面）

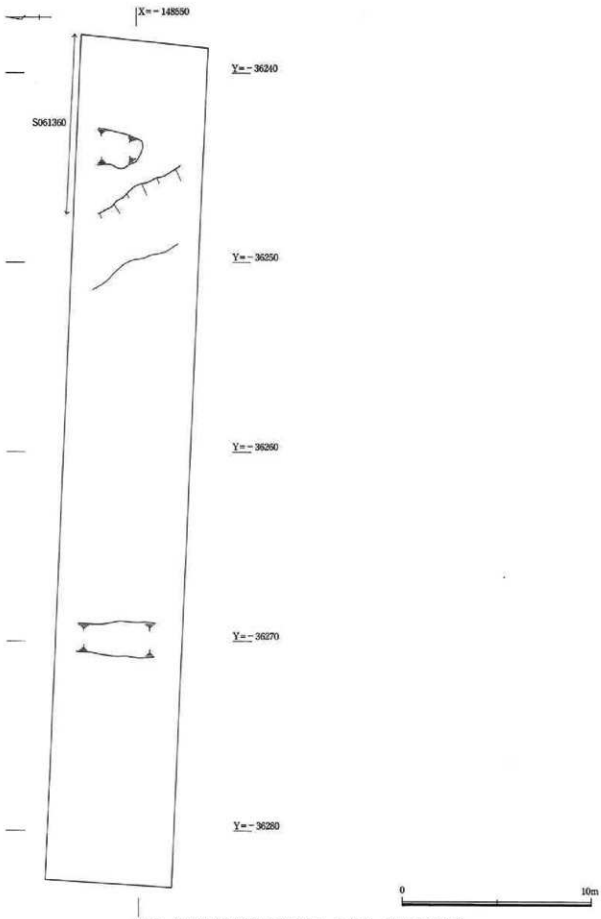


図16　弥生時代前期遺構面平面図－５（99－６区：第23面）

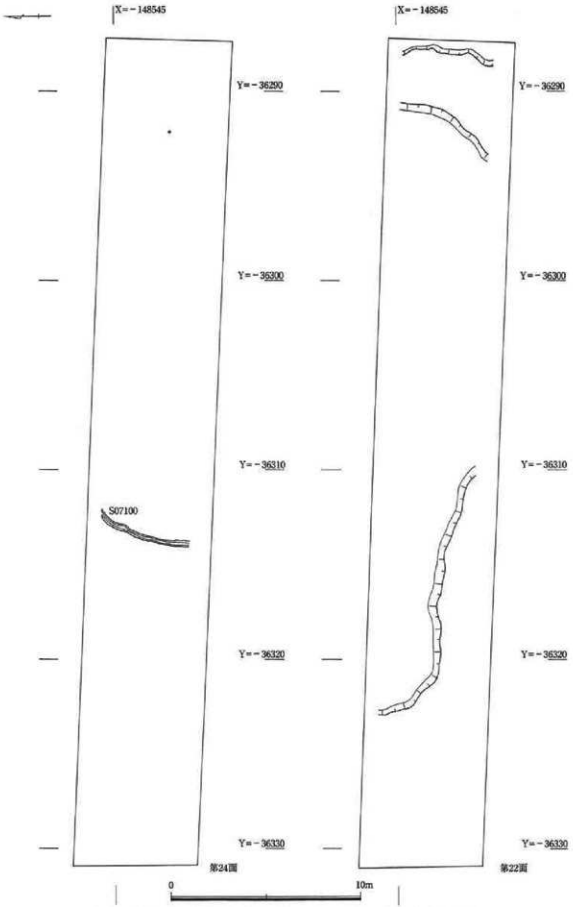


図17　弥生時代前期遺構面平面図－6（99－7区：第24面、第22面）

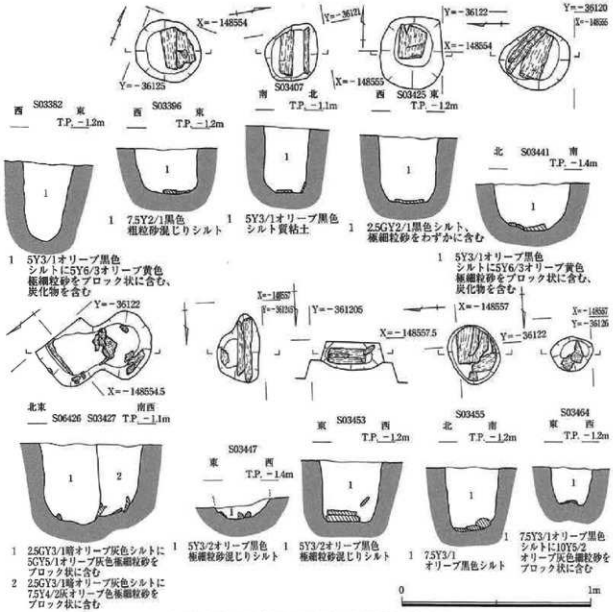


図18　99－3区第23・22面ピット平面図・断面図

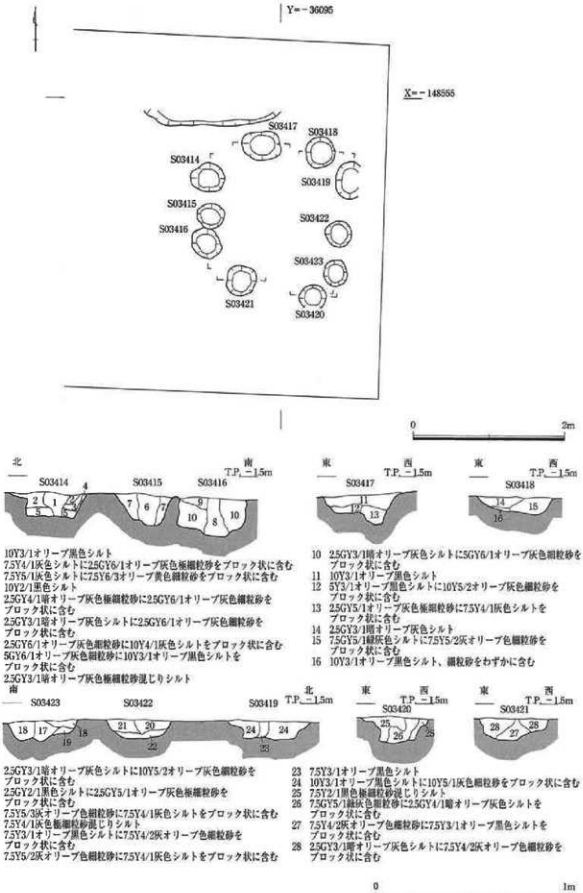
埋土はやや砂粒を含むシルトが大半であった。遺物は弥生時代前期中葉相当の壺、甕などの破片が若干出土している。

〔溝Ｓ03380〕　調査区西側で検出した（図21）。幅約3.5m、深さ約0.3mをはかる落ち込み状の大きな溝である。南北にのびる溝で南にいくと東に広がる。埋土は２～３層に分層でき、遺物を比較的多く含み、弥生時代前期中葉相当の壺、甕、鉢などの土器が多く出土している。

〔ピットＳ03382・Ｓ03396・Ｓ03407・Ｓ03425・Ｓ03441・Ｓ03426・Ｓ03427・Ｓ03447・Ｓ03453・Ｓ03455・Ｓ03464〕　Ｓ03382からＳ03427までは第22面で、それ以外は第23面で検出した。検出したピットの内、10基の底部で木材を確認した（図18）。木材はいずれも底面付近に設置されており、建造物の柱の沈み込みを防ぐため、あるいは柱の高さ調節などに利用した礎盤と推定できる。このうちＳ03453に使用していた礎盤は、木製広鍬（図65－3631）を転用して再利用していた。

Ｓ03426とＳ03427は切り合い関係をもつ。直径0.3m程度のピットが多く、深さは0.1～0.3mである。

第22面で検出したピット群は調査区南端を東からＳ03453、Ｓ03455、Ｓ03447、Ｓ03464と並び、その



1 10Y3/1オリーブ黒色シルト
2 7.5Y4/1灰色シルトに2.5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂をブロック状に含む
3 7.5Y5/1灰色シルトに7.5Y6/3オリーブ黄色細粒砂をブロック状に含む
4 10Y2/1黒色シルト
5 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂に2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂をブロック状に含む
6 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトに2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂をブロック状に含む
7 2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂に10Y4/1灰色シルトをブロック状に含む
8 5GY6/1オリーブ灰色細粒砂に10Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む
9 2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト
10 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトに5GY6/1オリーブ灰色細粒砂をブロック状に含む
11 10Y3/1オリーブ黒色シルト
12 5Y3/1オリーブ黒色シルトに10Y5/2オリーブ灰色細粒砂をブロック状に含む
13 2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂に7.5Y4/1灰色シルトをブロック状に含む
14 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト
15 7.5GY5/1緑灰色シルトに7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂をブロック状に含む
16 10Y3/1オリーブ黒色シルト、細粒砂をわずかに含む
17 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトに10Y5/2オリーブ灰色細粒砂をブロック状に含む
18 2.5GY2/1黒色シルトに2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂をブロック状に含む
19 7.5Y5/3オリーブ色細粒砂に7.5Y4/1灰色シルトをブロック状に含む
20 7.5Y4/1灰色極細粒砂混じりシルト
21 7.5Y3/1オリーブ黒色シルトに7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂をブロック状に含む
22 7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂に7.5Y4/1灰色シルトをブロック状に含む
23 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
24 10Y3/1オリーブ黒色シルトに10Y5/1灰色細粒砂をブロック状に含む
25 7.5Y2/1黒色極細粒砂混じりシルト
26 7.5GY5/1緑灰色粗粒砂に2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトをブロック状に含む
27 7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂に7.5Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む
28 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトに7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂をブロック状に含む

図19　99－3区第22面掘立柱建物S03500平面図・ピット断面図

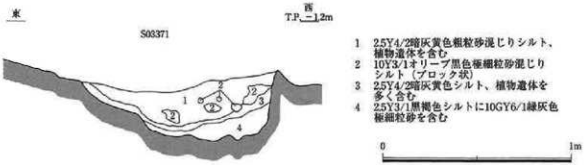


図20　99－3区第22面溝S03371断面図

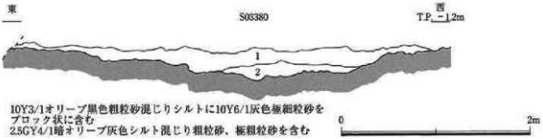


図21　99－3区第22面溝S03380断面図

間隔もおよそ1.5m、3m、1.5mと規則的である。このピット群の北側にも点在するピットがみられる。また、S03382以外は第23面で検出したピットの北側に位置して、やはり1.5mか3mの間隔で東西に並び、東西2列の柱列状をなす。

上記のことからこれらのピットは第22面の掘立柱建物の柱穴となる可能性もある。

c．第21・20面

第21面は調査区中央部の住居S03350周辺で確認できる人為的な盛土と考えられるブロック土をベースとしており、その上面は炭を多量に含む。

第20面は弥生時代前期土壌化層の2層目（中層）をベースとしている。本面遺構の多くは、調査区中央部から西側で溝、ピット、土坑、住居などを検出した（図13）。

両面はほぼ同時に形成されたものと推定できるため、平面図上では第21・20面を同時に表現した。

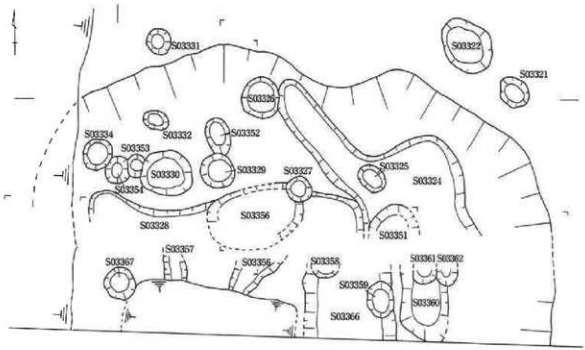
〔竪穴住居S03350〕　直径約6m近くをはかる円形の住居である（図22）。住居の中央部に不整形の土坑S03356が確認できる。この土坑は周辺に焼土や炭化物の範囲がいくつも見受けられることなどから、住居に伴う炉跡と考えられる。また、住居の南東部で溝S03364を部分的に検出しており、これが住居に付随する壁溝になるかもしれない。すると、この住居は壁溝が周囲を巡っていた可能性が考えられる。溝より内部の底面は極細粒砂にシルトや粘土を含み、貼床であったと考えられる。

土坑S03356を中心にして円形や長円形の土坑、ピットを20基弱検出した。S03334・S03330・S03327・S03367・S03358などが建物を構成するピットにあたると思われる。

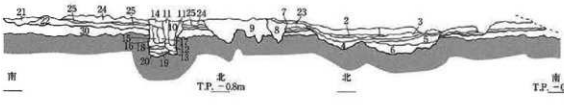
〔溝S03371B〕　調査区中央よりやや西で検出した南北方向の溝である（図23）。幅4m、深さ0.4mをはかる。竪穴住居S03350などの西側に位置する集落域の環濠になる可能性をもつ。溝S03371の上層の溝である。

竪穴住居S03350、溝S03371Bおよびその周辺から出土した遺物はいずれも弥生時代前期前半におさまるものであり、周辺にこの単純期の集落が形成されていたといえる。

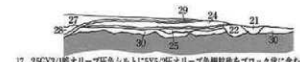
〔集石遺構S03320〕　調査区中央部溝S03371Bの西肩部で検出した集石遺構である（図24）。拳大の



東　　住居跡S03350　　西
T.P. −0.8m



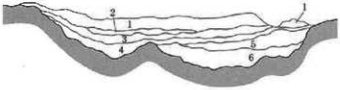
南　　北　　北　　南
T.P. −0.8m　　T.P. −0.8m



1　5Y2/1黒色微粒砂混じりシルト、炭を含む
2　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト、炭を多く含む
3　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト、炭を含む
4　5Y2/1黒色微粒砂混じりシルト、炭を多く含む
5　10Y3/1オリーブ黒色シルト、粗粒砂をわずかに含む、炭を含む
6　2.5Y3/1黒褐色シルト、粗粒砂をわずかに含む、植物遺体を含む
7　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
8　5GY3/1暗オリーブ灰色シルト、粗粒砂をわずかに含む
9　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト
10　5Y3/1オリーブ黒色微粒砂混じりシルト、炭を含む
11　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト
12　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
13　7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂に5Y3/2オリーブ黒色シルトをブロック状に含む
14　2.5Y3/1黒褐色細粒砂混じりシルト
15　2.5Y3/1黒褐色シルトに5Y5/2灰オリーブ色細粒砂をブロック状に含む、炭化物を含む
16　2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルト
17　2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトに5Y5/2灰オリーブ色細粒砂をブロック状に含む
18　7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂に10Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む
19　7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト、炭化物を含む
20　5Y3/1オリーブ黒色シルトに10Y6/2オリーブ灰色細粒砂をブロック状に含む
21　5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト（整地層）
22　5Y3/1オリーブ黒色シルトに7.5Y5/2細粒砂をブロック状に含む（整地層）
23　10Y2/1黒色粗粒砂混じりシルト
24　5Y5/2灰オリーブ色細粒砂に5Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む（貼床）
25　5Y2/1黒色細粒砂混じりシルト、炭を多く含む
26　2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトに5Y6/3オリーブ黄色細粒砂をブロック状に含む（貼床）
27　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト、微粒砂を含む
28　10YR2/2黒褐色細粒砂混じりシルト炭を多く含む（焼土）
29　5Y2/1黒色細粒砂混じりシルト、炭を多く含む
30　7.5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混じりシルト

東　　西
T.P. −1.0m

0　　2m



0　　1m

図22　99－3区第21・20面住居跡S03350平面図・断面図

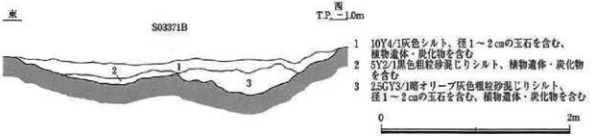


図23　99－３区第21・20面溝Ｓ03371Ｂ断面

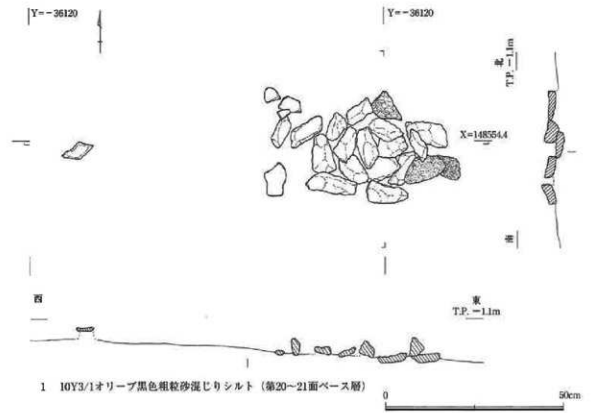


図24　99－３区第20面集石遺構Ｓ03320出土状況図

石が22点集中していたが、掘方などは確認できず、遺構面上に貼り付いている状態で検出した。

石は長さが８～14cm、幅が５～７cmの規格内におさまる。石材も同定したものはすべて斑糲岩もしくは閃緑岩だった。類似した大きさの石材が集っている状態は人為的な遺構であることは紛れもなく、それらの石の用途として投彈に使用した可能性がある。

99－３区で検出した第23から第20面の遺構面はいずれも弥生時代前期前半の中におさまるものであり、短期間の内に住居の建て替え、移動があったといえる。

２）99－４区

本調査区では計４面の遺構面を確認した。調査区の西側に向かってわずかに下がる地形であり、99－３区に続いて竪穴住居や溝・土坑など多数の遺構を検出した。99－４区内では東側に比べると西側では遺構の密度が低い。

ａ．第26面

調査区中央から東側で多くの溝、ピット、土坑等を検出した。99－３区の第23面に相当する、黒色粘

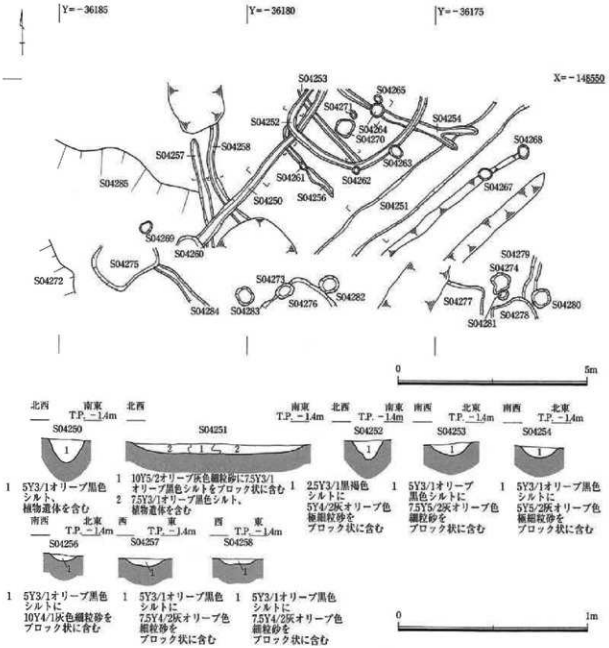


図25　99－4区第26面溝平面図・断面図

土層下面の遺構面である（図14）。

〔溝S04251〕　調査区の北東－南西方向をほぼまっすぐにのびる溝である。幅約1m、深さ0.1mをはかる。

〔溝S04252〕　調査区北側、溝S04250と溝S04251の間に位置する溝であり、溝S04250を切る。環状に巡り、中心に大形の土坑S04270、溝周辺にも小形の土坑をもつなど住居になる可能性ももつが、確定できなかった。

〔その他の溝〕　本遺構面では溝S04251に平行して溝S04250、交差するように溝S04253～S04256など、北西－南東の方角を意識した遺構が存在する。これらの縦横にのびた溝は、排水機能を果たしていた可能性が考えられる。ただし溝S04251以外の溝は幅0.1～0.2m、深さ0.1m程度の細い溝である（図25）。

第26面の遺構からはヘラ描き平行沈線文が1条から4条の土器等が出土している。

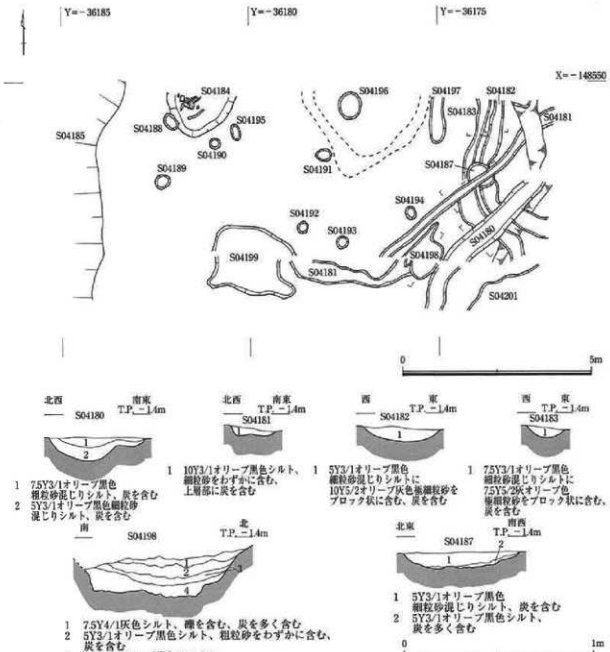


図26　99－4区第25面東端部溝・土坑断面図

b．第25面

調査区全体で溝、ピット、土坑、落ち込み等を検出した（図14）。99－3区の第22面に相当する、弥生前期包含層黒色粘土層上面の遺構面である。

〔溝Ｓ04180・Ｓ04181ほか調査区東端部溝〕　第26面と同じく遺構の主軸は北東－南西を意識しているが、これはこの周辺の微地形に起因するものである。溝は幅が0.2～0.4m、深さ0.1m程度だが、埋土に炭を含む（図26）。

また、第26面の溝Ｓ04252と同位置に溝の可能性のある凹状部とその中央に大形の土坑Ｓ04196が認められたが、これも住居になるか判断できなかった。

〔落ち込みＳ04185〕　調査区の西端で検出した南北方向の落ち込みである。

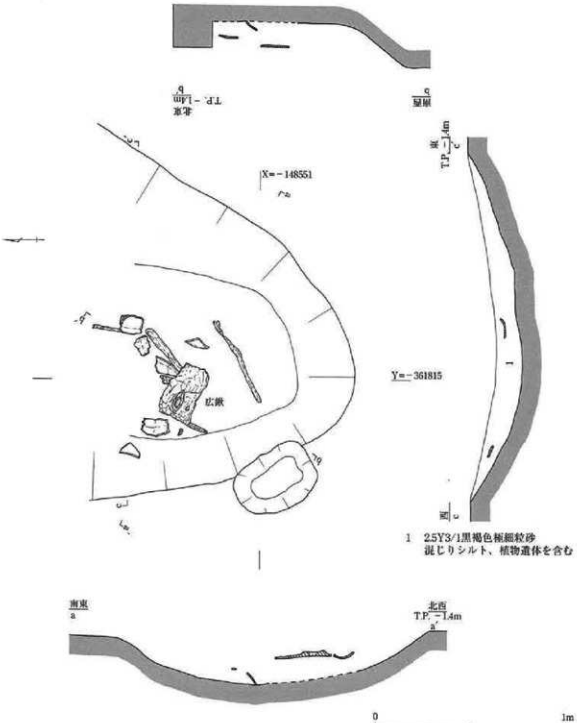


図27　99－4区第25面土坑S04184平面図・断面図

〔土坑S04184〕　調査区西側で検出したやや大形の土坑である（図27）。北側は調査区外にあたり、南半分強のみの検出となった。短径1.8m、長径は現存する部分だけで1.8m、深さ0.2mをはかる。埋土は黒褐色の砂混じりのシルトで、植物遺体を多く含んでいた。また、埋土中に木製品、自然木を多く確認でき、特筆すべきものとして土坑の上層から農具の広鍬が柄を伴って出土している。

この広鍬は、鍬身に逆三角形の穴や側面に鋸歯状突起をもつこと等から、弥生時代前期の資料のなかでも特徴的な存在である。

広鍬以外に木製品を検出していないので、土坑S04184は貯蔵用土坑でなく、廃棄土坑と考えるのが妥

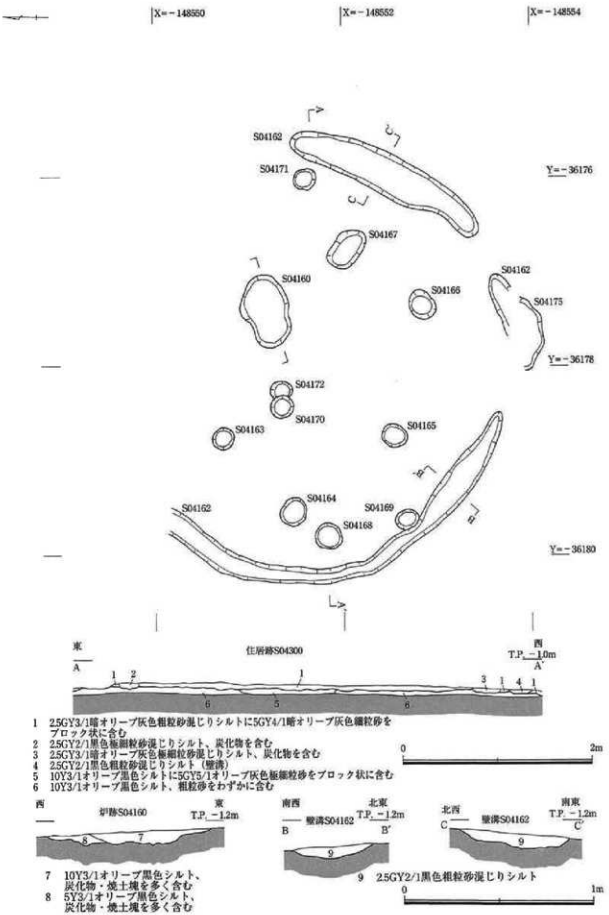


図28　99－4区第24面住居跡Ｓ04300平面図・断面図

当であろう。木製品以外に出土している土器からも第25面の他の遺構と同時期の遺構といえる。

この他には調査区東側等で、一部上述したように複雑に切り合いをもつ溝や不整形の土坑を複数確認している。第25面は出土する遺物の時期から弥生時代前期中葉を中心とした遺構面と考えられる。

c．第24面

調査区全体で溝、ピット、土坑、住居跡、落ち込み等を検出した（図14）。99－3区の第21・20面に相当する弥生時代前期の最上遺構面である。

〔竪穴住居Ｓ04300〕　調査区中央で検出した住居跡である（図28）。ピットの周りを環状に溝Ｓ04162がめぐり、壁溝となる。本遺構の中央部には埋土に炭化物を多く含む土坑Ｓ04160を検出しており、住居に伴う炉跡と考えられる。この他、住居に伴うピットとしてＳ04163～Ｓ04167などが存在し、プラン等からこの住居跡は6本柱であった可能性が高い。ピットや壁溝の埋土には炭化物や焼土塊を多く含む。

竪穴住居Ｓ04300の外周を囲むように東側には溝Ｓ04161がやはり環状に巡る。また住居の西には凹地状の溝Ｓ04120がみられ、内側では土器だまりＳ04177が検出された。

第24面の遺構等から出土した土器をみるかぎり、第25面とほぼ同時期の遺構面と考えられる。

3）99－5区

本調査区では計2面の遺構面を確認した。本調査区の東側には微高地の西端部が存在し、傾斜面上に遺構が集中する。中央より以西に遺構はほとんど見受けられず、集落域の境界が本調査区部分に相当すると考えられる。

a．第25面

第24面ベース層となる土壌化層を除去して検出した面で「b層上面」に相当する。このため本面上の遺構はそのほとんどが第24面に帰属する可能性が高い。主に調査区東側で溝、土坑などを検出した（図15・29）。

〔溝Ｓ05300〕　調査区東半で検出した幅約1.5m、深さ約0.15mをはかる溝である。北東－南西方向をとる。次の第24面の溝Ｓ05290と同様に環濠になる可能性がある。

〔土坑Ｓ05301〕　溝Ｓ05302西側に位置する長円形の土坑である。短径1.2m、深さ約0.1mをはかる。

〔溝Ｓ05302〕　北－南の方向にのびる幅約2.4m、深さ約0.2mの規模をはかる溝である。

〔溝Ｓ05303〕　北西－南東の方向にのびる幅約1.5m、深さ約0.1mの規模をはかる溝である。

b．第24面

調査区東側で微高地、溝を検出した（図15・29）。

〔溝Ｓ05290〕　幅約5.5m、深さ約0.7mをはかる比較的規模の大きな溝である。南北を主軸とする。確定はできないが、99－3・4区で確認した集落域の西端を区画する環濠になる可能性がある。遺物は土器等を多く含む。ミニチュアの壺（3441）や完形に近い鉢（3444）が出土している。主流を占めるのは沈線が3条から4条の土器である。

99－5区に関しては、99－3・4区に比べると遺構・遺物とも少ないが、第25・24面が弥生時代前期中葉相当と考えられる。

（2）低地部の様相

1）99－6区

本調査区では計2面の遺構面を確認した。調査深度の関係から、前期の遺構面は調査区東側でのみ検出可能であった。微高地を確認したが、顕著な遺構は見あたらなかった。遺物の出土量は寡少であった。

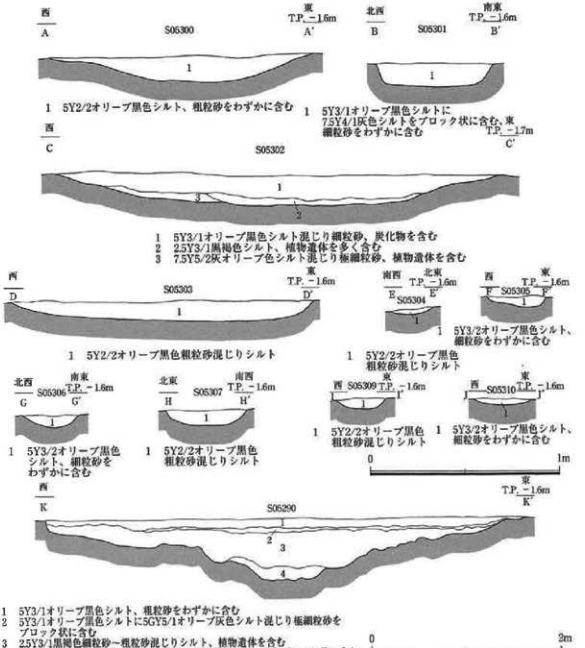


図29　99－5区第25・24面溝・土坑断面図

a．第23面

調査区中央から東側の範囲で検出した（図16）。暗褐色シルト層をベースとしており、微高地S061360以外は顕著な遺構は確認できなかった。

99－6区の低地部については層位的に他の調査区と比定して、黒色シルト土壌化層上面を弥生時代前期遺構面と認定したが、詳細な時期比定はできなかった。

2）99－7区

本調査区では計2面の遺構面を確認した（図17）。黒色シルト層の上面、下面でそれぞれ遺構面を形成する。99－6区を最低位としてそれより西の当区では地表高はやや上昇する。しかし顕著な遺構は見あ

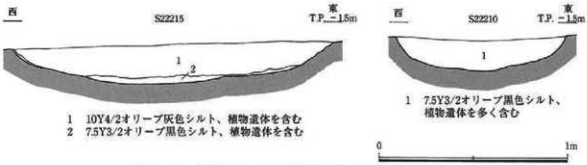


図30　01－2区第17・16面溝S22215・S22210断面図

たらなかった。遺物の出土量は寡少であった。

a．第24面　調査区中央より西でほぼ南北方向を主軸とする溝S07100を検出した（図17）。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

b．第22面　調査区の西半および東端に広がる微高地を検出したにすぎない（図17）。第24面同様、時期を特定できなかった。

低地部の遺構の時期については、遺物の出土量もきわめて少なく明確な時期決定の材料を欠くが、集落域の遺構面とほぼ対応する堆積状況を示すため、弥生時代前期中葉を中心とした時期に相当すると考えられる。

この西側低地部は集落域に比べると標高が平均30～40cm低く、当時は湿潤で常に浸水の危険にさらされる環境にあったため、土地利用されにくかったと推測できる。

（3）水田域の様相

1）01－2区

本調査区では、計2面の遺構面を検出した。弥生時代中期の自然流路の堆積以前、第15面から第16面の間にも弥生時代前期の遺物を含むため、第15面以下を弥生時代前期相当層と考える。第15面では遺構は検出できなかった。

a．第17面　弥生時代前期の土壌化層、黒色シルト層下面に相当する。平均高はT.P.－1.7～－1.6mである。

調査区の中央よりやや東側で溝S22215を検出した（図12）。

〔溝S22215〕　南北に走る溝で、南から北にむかって低くなる。幅1.7m、深さ0.2m程度であるが、南側にいくと広がる。この溝から弥生時代前期中葉の遺物が出土している。

他に、調査区中央でベース土に足を踏み込んだような、楕円形状の穴に砂が入った痕跡が、幅0.5mにわたって南北方向にみられた。畦畔になる可能性を考えて断面観察などの調査・検討やプラント・オパール分析を行ったが、畦畔と断定することはできなかった（第8章第1節参照）。

西の01－3区から続く微高地がこの辺りから東に急に落ち込み、溝へと続く傾斜地となる。現時点では落ち込みの肩部分が他の地表面よりわずかに高く、人が歩いたり、植物が生えていた痕跡があったため、他と若干違う土層の状態になったのではないかと想定する。

b．第16面　黒色シルト層上面の遺構面である。遺構は調査区東端で南北方向の溝S22210を検出した（図12）。

〔溝S22210〕　下面の溝S22215に並行して走る。幅0.8m、深さ約0.3mの溝である。地形にあわせて北に向かって低くなり、大きく広がる。この溝は上層の第15面ベース層の茶褐色シルトが堆積し、弥生

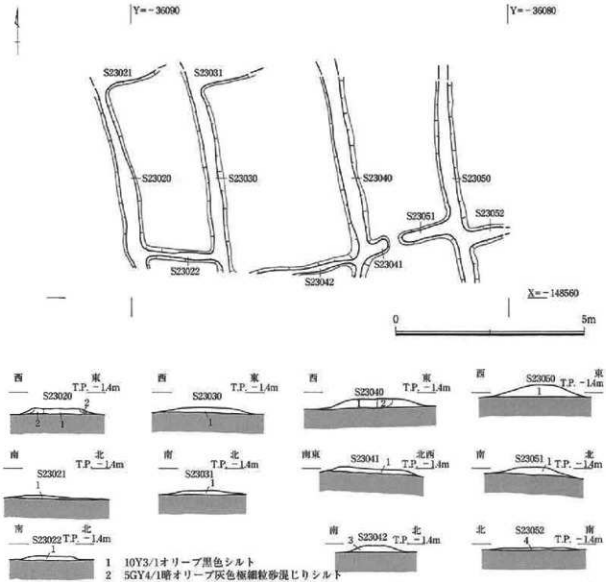


図31　01－3区第20面畦畔平面図・断面図

時代前期後半の遺物を含む。従って、01－2区では弥生時代前期でも溝S22215と溝S22210の新旧2時期の溝が存在していたといえる。

第16面と第17面の2つの溝の相関性は不明である。また、遺構面の時期差は短時間のものといえる。

2）01－3区

本調査区では、1面の遺構面を検出した。弥生時代前期の水田遺構を今回の調査では唯一検出した。

a．第20面　01－2区と同じ黒色シルト層上面で水田畦畔を検出した（図12・31）。遺構面高平均はT.P.－1.4mで、99－3区から続く微高地が01－3区に入るとやや低くなる。01－3区内ではほぼ平坦な地形を保ち、東端でまた01－2区にむかって低くなる。

遺構面の全域で9枚の水田区画を確認し、そのうちの2枚は四方の畦畔を完全に検出した。水田は、主軸を真北よりやや西にふる南北畦畔4条とその支線の東西畦畔3条から構成される。水田1枚は長辺5m、短辺2～3mの区画で、畦畔S23041と畦畔S23051の間には水口も認められる。

畦畔は幅0.5m、高さ0.1m程度と高まりはわずかである（図31）。畦畔の覆土が青灰色シルトであった

ため識別できたが、畦畔が低く断面での識別も困難だった。

これらの畦畔内と覆土に含まれる遺物が弥生時代前期中葉から後半を示す。また、隣接する99－3区の対応する遺構面（第21・20面）から弥生時代前期中葉の竪穴住居が検出されている。よって、この水田遺構は弥生時代前期中葉に属する可能性が高く、幅をもたせたとしても弥生時代前期後半までに帰属するであろう。

近畿地方で弥生時代前期中葉に水田が確認されている遺跡としては、当遺跡より南東に位置する池島・福万寺遺跡があるが、当遺跡周辺では確実例として初めてであり、近畿地方で最古の部類に属する水田を01－3区で検出したことになる。瓜生堂遺跡北東部で弥生時代前期の水田域が検出されたのも初めてであり、土地利用のあり方の解明としても画期的な発見である。

弥生時代前期の地形は西から東にいくほど低くなる。今後の調査成果の増加や、自然科学的検証を加えることでより精度の高い結果が得られることと思う。01－2区以東では調査深度以下であるため、弥生時代前期遺構面を検出し得なかったが、01－3区で確実に水田を検出し、01－2区の溝も水田に関連する施設と考えると、01－3区より東には水田域が広がっていたと推定される。

01－2区の溝は01－3区の水田域を東に延長していった部分にあたり、排水溝や区画溝の役目を果たしていたと想定できる。

（4）小結

概要で述べたように弥生時代前期の遺構面では、集落域、生産域の、それぞれ小規模ではあるがまとまりを設定し得た。これにより、今まで解明されていなかった瓜生堂遺跡北東部の土地利用のあり方が解明できたことが大きな収穫である。集落域のさらに東は今回の調査区外であるが、地形の変化を鑑みると、再び低地化し遺構の希薄な地域となるようである。しかし、瓜生堂遺跡のさらに東に近接して位置する別個の弥生時代前期の遺跡群が存在する可能性も若干考える必要もある（第6章参照）。

時期的には弥生時代前期内で平均3時期存在することが判明した。そのうちの遺構密度が高く竪穴住居や水田畦畔が検出されたのは、中層にあたる黒色粘土層上面である。上層が前期中葉から一部後半代の遺物を含み、中層が前期前半から中葉に位置づけられる。下層は中層と近似した時期と考える。

また、集落域の東で検出した水田遺構は集落域と同様、弥生時代前期中葉からやや幅をもたせて後半までのものとして差し支えないだろう。集落に付随する生産域として、近畿地方でも最古の水田遺構と言えるものである。今後の調査でこの南側で続きが検出され、生産域の範囲の確定や様相がより明らかになるのを待ちたい。

（川瀬・朝田）

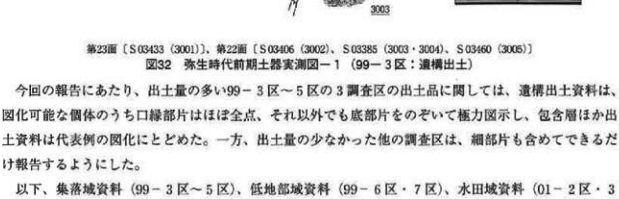
2．遺物

（1）土器（図32～60、写真図版54～63）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

弥生前期土器の出土は、集落域にあたる99－3区～5区からが最も多く、99－3区で14コンテナ、99－4区で14コンテナ、99－5区で11コンテナの量となる。それ以外では、集落域の西側に広がる低地部域の99－6区・7区、さらに、東側で確認できた水田域の01－2区・3区でも出土をみるが、点数は集落域に比べると極端に少なく、各調査区で数点から十数点を数えるにすぎない。



第23面〔S03433（3001）〕、第22面〔S03406（3002）、S03385（3003・3004）、S03460（3005）〕
図32　弥生時代前期土器実測図－1（99－3区：遺構出土）

今回の報告にあたり、出土量の多い99－3区～5区の3調査区の出土品に関しては、遺構出土資料は、図化可能な個体のうち口縁部片はほぼ全点、それ以外でも底部片をのぞいて極力図示し、包含層ほか出土資料は代表例の図化にとどめた。一方、出土量の少なかった他の調査区は、細部片も含めてできるだけ報告するようにした。

以下、集落域資料（99－3区～5区）、低地部域資料（99－6区・7区）、水田域資料（01－2区・3区）の順で、遺構出土と包含層ほか出土とに分け、下層検出品から、図提示個体を中心に概要を述べる。なお、土器胎土に関しては個々には記載しないが、後項（第7章第1・4節）でも再論するように、生駒山西麓産の個体が多く（約85%）、それらは遺物番号に下線を付した資料にあたる。また、器種区分のなかで、如意形（外反）の口縁をもつ鉢は、口縁部付近のみでは甕との峻別が不可能な個体が多いため、すべて甕として記載した。

b．99－3区遺構出土

〔第23面ピットS03433〕（3001）　調査区西端部で検出した、ピットからの出土。壺の口縁部で、外面下端に段ないし沈線（ヘラ描き平行沈線文、以下同じ）がみられる。

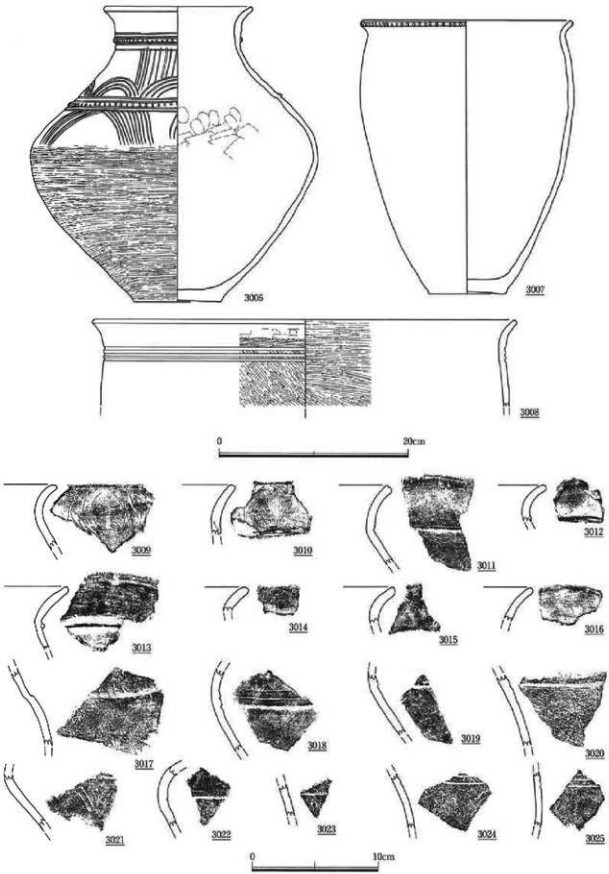
〔第22面土坑S03406〕（3002）　調査区西半部で検出した、溝状の土坑からの出土。甕の口縁部で、端部に刻目を加え、外面に段がみられる。

〔第22面土坑S03385〕（3003・3004）　調査区西端部で検出した、推定平面が円形状の土坑からの出土。ともに甕の口縁部で、（3003）の外面には沈線1条を加えた低い削出突帯がみられる。

〔第22面ピットS03460〕（3005）　調査区西半部で検出した、小形ピットからの出土。甕の口縁部小片である。

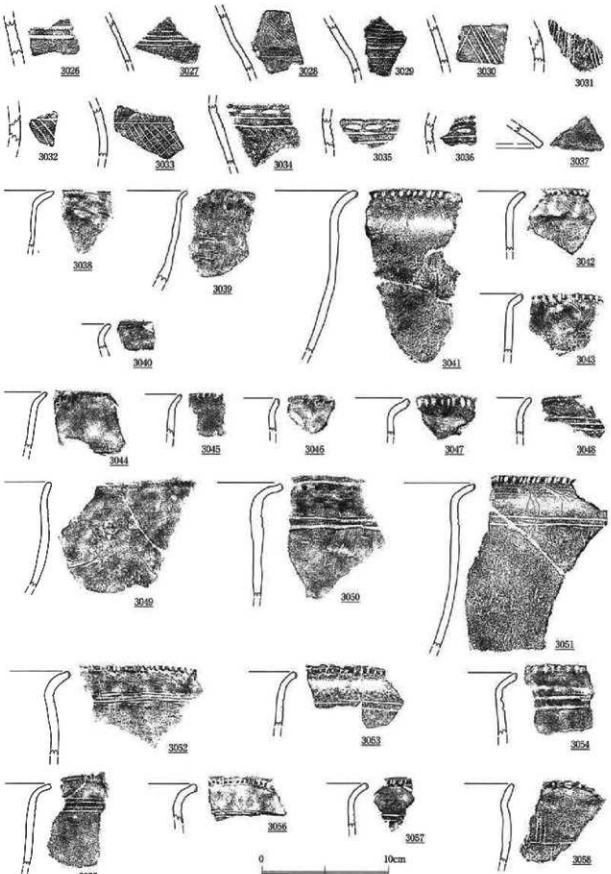
〔第22面溝S03380下層〕（3006～3074）　調査区西端部で検出した、落ち込み状を呈する南－北主軸溝からの出土。本遺構は、調査時に上・中・下層に分けて遺物を取りあげたので区別して掲示したが、大きな様相・時期差はないようである。

壺には、全容が判明する（3006）がある。最大径部が器高のほぼ中央にあり、体部最大径と器高とがほぼ等しい。口縁部は短く外反して開く。頸部と体上部には1条の貼付突帯と、その上下にそれぞれ2条ずつの沈線を加える。突帯間と突帯下には、縦位の沈線、弧文、山形文で装飾される（各種文様は特記しないかぎりヘラ描き沈線による、以下同じ）。沈線文様の施文順序は、平行沈線→擬位沈線→重弧文（左から右へ）となる。（3009～3016）は壺の口縁部で、頸部に、段（3010）、上位に細沈線1条をともなう段（3011）、沈線を加える削出突帯（3012）、無刻目の貼付突帯1条（3013）がみられる。（3017～3037）は壺類の有文体部で、段（3017）、削出突帯や沈線を加えた削出突帯（3018～3021）、沈線（3021～3027）がみられる。沈線条数は最多で4条を数える。（3025）の内面には籾殻圧痕が残る。（3028～3036）は、



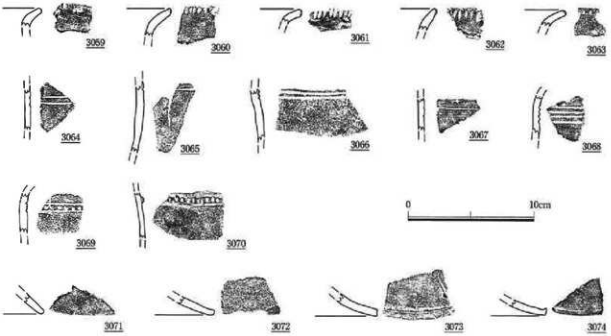
第22面〔S03380下層（3006～3025）〕

図33　弥生時代前期土器実測図－２（99－３区：遺構出土）



第22面〔S03380下層（3026～3058）〕

図34　弥生時代前期土器実測図－3（99－3区：遺構出土）



第22面〔S03380下層（3059～3074）〕
図35　弥生時代前期土器実測図－4（99－3区：遺構出土）

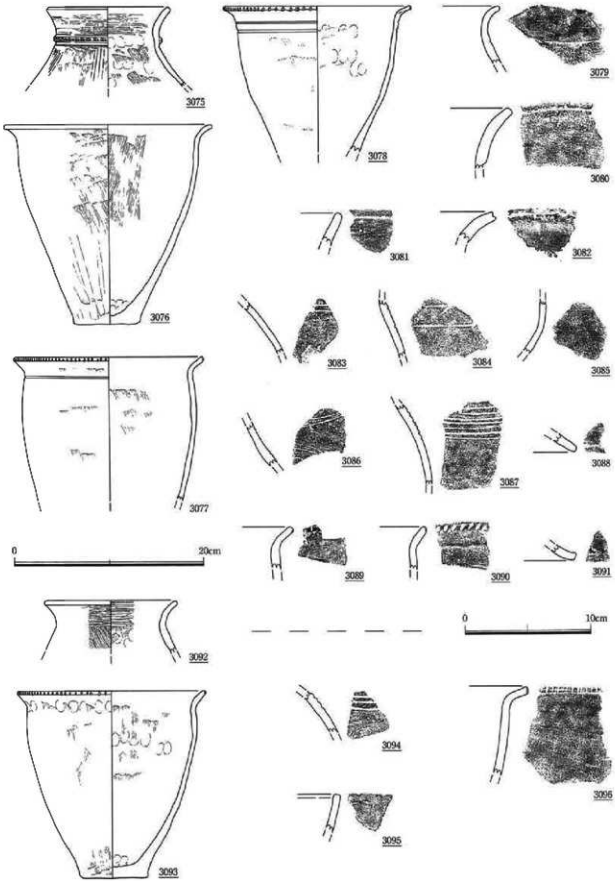
それら以外にやや特殊な文様を付加する個体で、（3028）は下位に細沈線2条、上位に上向き鋸歯文をともなう段状部、（3029）は下位に沈線2条、上位に弧文をともなう段、（3030・3031）は山形文、（3032）は沈線と弧文、（3033）は沈線2条の下位に斜格子文、上位に木葉文の可能性がある文様、（3034～3036）は沈線間に横長の刺突文を配する。（3037）は壺蓋の口縁部である。

甕には、全容が判明する（3007）がある。口縁部径と体部最大径がほぼ等しく、体部全体がややふくらんだ様相をみせる。口縁端部には刻目を加える。（3008・3038～3063）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、1条（3049）、2条（3052・3053）、3条（3054）、4条（3055）がある。（3049）の沈線はきわめて細くて浅い。（3058）は、体部に沈線1条をめぐらし、その上位に縦位沈線文を加える。（3064～3070）は甕の有文頸部で、（3064～3068）は沈線文、（3069）は沈線2条間に竹管刺突文、（3070）は有刻目の貼付突帯がみられる。（3070）は壺の可能性もあるが、体外面の煤の付着状況から甕と判断した。（3071～3074）は、甕蓋の口縁部である。

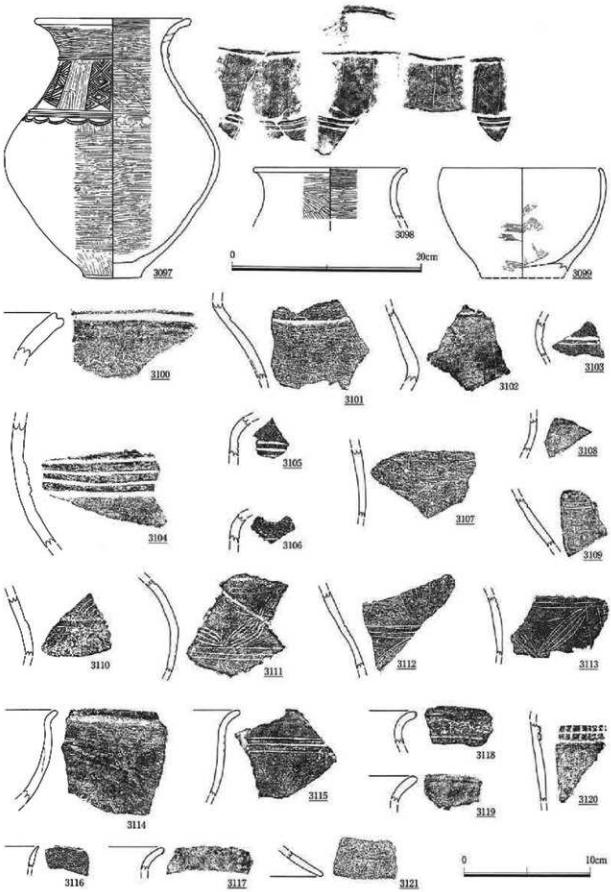
〔第22面溝S03380中層〕（3075～3091）　（3075・3079～3082）は壺の口縁部で、（3082）の端部には沈線1条、頸部には、段（3080）、段ないし沈線1条（3079）、有刻目の貼付突帯1条がみられる。（3075）の体部上半には縦位の沈線文がある。（3083～3087）は壺類の有文体部で、沈線（3083～3085）、弧文（3086）、沈線帯の上位に弧文（3087）がみられる。沈線条数は最多で5条（3087）を数える。（3088）は壺蓋の口縁部である。

甕には、全容が判明する（3076）がある。口縁部径が体部最大径をうわまわり、頸部、口縁端部は無文である。（3077・3078・3089・3090）は甕の口縁部で、いずれも端部に刻目を加え、頸部に沈線をめぐらす個体（3077・3078）がある。沈線条数が判明するものでは、1条（3077）、2条（3078）がある。（3091）は、甕蓋の口縁部である。

〔第22面溝S03380上層〕（3092～3096）　（3092）は壺の口縁部で、無文である。（3094）は壺類の有



第22面〔S03380中層（3075～3091）、S03380上層（3092～3096）〕
図36　弥生時代前期土器実測図－5（99－3区：遺構出土）



第21面〔S03371（3097～3121）〕
図37　弥生時代前期土器実測図－6（99－3区：遺構出土）

文体部で、段の下位に沈線３条を加える。(3095) は直口鉢の口縁部である。甕には、全容が判明する (3093) がある。口縁部径が体部最大径をうわまわり、頸部は無文だが、口縁端部には刻目を加える。(3096) は甕の口縁部で、端部に刻目を加え、頸部は無文である。

〔第21面溝Ｓ03371〕(3097～3121)　調査区中央部で検出した、環濠となる可能性がある南－北主軸溝からの出土。調査時の遺構の土層断面観察では、２段階の掘削期を把握できたが、遺物取り上げ時ではその峻別が不十分であったので、ここでは一括して報告する。

壺には、全容が判明する (3097) がある。最大径部が器高のほぼ中央にあり、器高が体部最大径をうわまわる。口縁部はやや大きく外反して開く。頸部には１条の貼付突帯、肩部には沈線１条を加えた低い削出突帯があり、両者の間には、縦位沈線で区画し、菱形文、横位の鋸歯文や綾杉文で装飾される。削出突帯の下位には横位の重弧文が配される。(3098・3100) は壺の口縁部で、(3100) の端部には沈線がめぐる。(3101～3113) は壺類の有文体部で、段 (3101・3102)、下位に沈線１条をともなう段状部 (3103)、沈線を加えた削出突帯 (3104・3105)、沈線 (3106～3109) がみられる。(3102) の段の下位には、縦位の細沈線１条がある。(3107) の沈線は細い。(3110～3113) は、それら以外にやや特殊な文様を付加する個体である。(3110) は下位に沈線２条をともなう段と、それらの上下に弧文を配する。(3111～3113) は木葉文で装飾された個体で、いずれも境界文様に、沈線２条をともなう段がみられる。(3111) の下位の境界文様は沈線３条で構成される。

鉢には、全容が判明する (3099) がある。口縁部径が器高をうわまわり、体部全体が内湾しながら口縁端部にいたる。文様はない。

(3114～3119) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、３条 (3115) がある。(3120) は、頸部に幅広の貼付突帯を施し、その上面に沈線１条と刻目を加える。壺の可能性もあるが、体外面の煤の付着状況から甕と判断した。(3121) は甕蓋の口縁部である。

〔第21面溝Ｓ03365〕(3122・3123)　調査区西端部で検出した、推定南－北主軸溝からの出土。(3122) は壺の口縁部で、無文である。(3123) は、大形壺の体部で削出突帯がみられる。

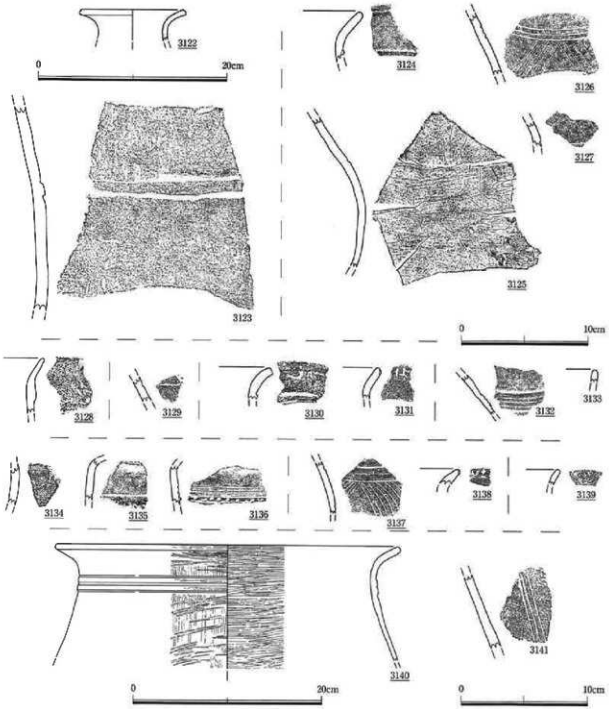
〔第21面落ち込み状遺構Ｓ03370〕(3124～3127)　調査区西端部で検出した、落ち込み状部からの出土。第22面溝Ｓ03380の最上部の凹み部に相当する。(3124) は壺の口縁部で、貼付突帯がみられる。(3125～3127) は、有文の壺体部である。(3125) は段がみられるが、ヘラミガキによって段がつぶれている部分がある。(3126・3127) は沈線と山形文で装飾され、(3126) の平行沈線文の谷（凹部）には赤色顔料が一部残る。

〔第21面土坑Ｓ03360〕(3128)　調査区西半部で検出した、小形土坑（竪穴住居Ｓ03350内に相当）からの出土。甕の口縁部で、段がみられる。

〔第21面土坑Ｓ03356〕(3129)　調査区西半部で検出した、平面不整形の土坑（竪穴住居Ｓ03350内に相当）からの出土。本遺構は竪穴住居Ｓ03350の炉址になる可能性が強い。壺の有文体部で、段と木葉文の一部がみられる。

〔第21面土坑Ｓ03357〕(3130・3131)　調査区西半部で検出した、溝状の小形土坑（竪穴住居Ｓ03350内に相当）からの出土。(3130) は壺の口縁部で、沈線を加えた削出突帯がみられる。(3131) は甕の口縁部で、端部に刻目が施される。

〔第20・21面集石遺構Ｓ03320〕(3132・3133)　調査区中央部で検出した、投弾状自然石の集石部付

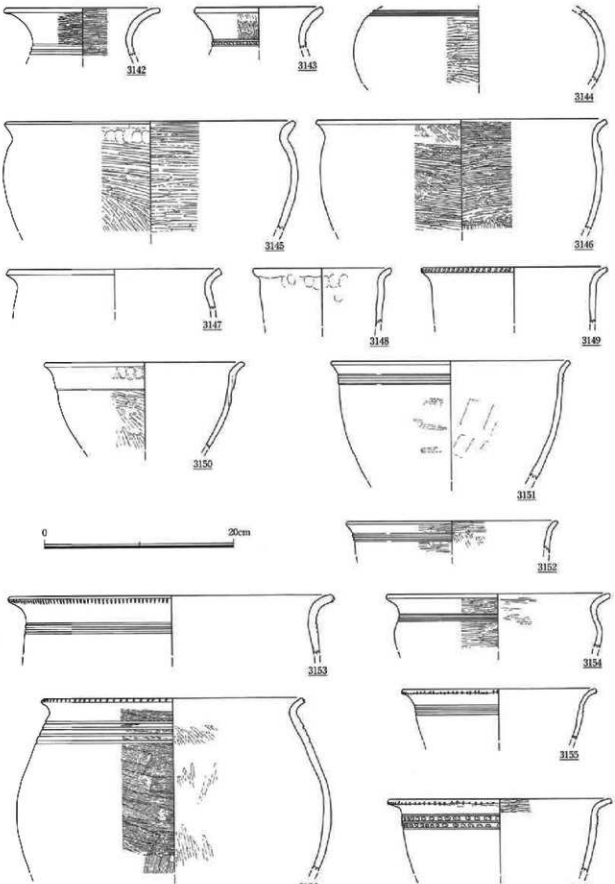


第21面〔S03365（3122・3123）、S03370（3124～3127）、S03360（3128）、S03356（3129）、S03357（3130・3131）〕、
第21・20面〔S03320（3132・3133）〕、第20面〔S03350（3134～3136）、S03328（3137・3138）、S03324（3139）、
S03353（3140・3141）〕

図38　弥生時代前期土器実測図－7（99－3区：遺構出土）

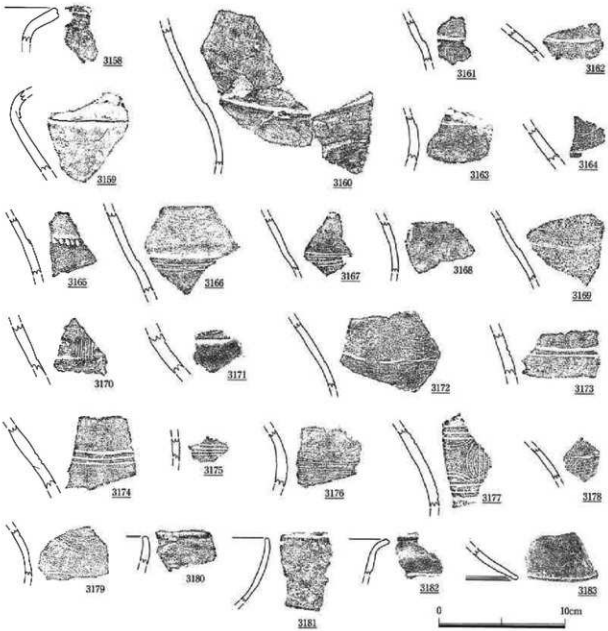
近からの出土。(3132) は壺の有文体部で、沈線3条を加えた削出突帯がみられる。外面に赤色顔料が遺存している。(3133) は直口鉢の口縁部である。

〔第20面竪穴住居S03350〕(3134～3136)　調査区西半部で検出した、竪穴住居内からの出土。(3134) は壺の有文体部で、沈線と縦位沈線（破片上端の一部にのみ遺存）がみられる。(3135・3136) は甕の有文体部で、頸部に沈線 (3135) およびそれに加えて貼付突帯 (3136) がめぐる。(3135) の沈線の位置は通常より下位にあたり、「降下沈線」状甕（秋山1992）にあたる。



下位包含層（3142～3157）

図39　弥生時代前期土器実測図－8（99－3区：包含層出土）



下位包含層（3158～3183）

図40　弥生時代前期土器実測図－9（99－3区：包含層出土）

〔第20面土坑S03328〕（3137・3138）　調査区西半部で検出した、平面不整形の土坑（竪穴住居S03350内に相当）からの出土。（3137）は壺の有文体部縁部で、沈線と弧文がみられる。（3138）は甕の口縁部で、端部に刻目が施される。

〔第20面土坑S03324〕（3139）　調査区西半部で検出した、平面不整形の土坑（竪穴住居S03350内に相当）からの出土。甕の口縁部で、端部は無文である。

〔第20面ピットS03353〕（3140・3141）　調査区西半部で検出した、小形ピット（竪穴住居S03350内に相当）からの出土。（3140）は大形壺の口縁部で、沈線1条を加えた貼付突帯がみられる。（3141）は壺の有文体部で、山形文で装飾される。

c．99－3区包含層ほか出土

99－3区における弥生前期の層順は、遺構面の高低差も大きく、また、竪穴住居のような複雑な遺構

等の調査に苦慮したこともあり、調査時には包含層を整然とした状態では調査できなかった。したがって、調査時にはやや混乱をきたした箇所もあるが、調査後に諸所見を検討して、弥生前期包含層を「下位」「上位」に大別することにした。参考までに、現地調査時の遺物取りあげ層位を併記しておくと、下位包含層には、「弥生前期包含層３（上・下）」「同２Ａ」「同下部」ほか、上位包含層には「弥生前期包含層２Ｂ」「同１」「同上部」ほかが含まれる。

〔下位包含層〕（3142～3183）　（3142・3143・3158）は壺の口縁部で、頸部に、沈線（3142）、沈線と刺突文（3143）、端部に沈線（3158）がみられる。（3144・3159～3079）は壺類の有文体部で、段（3159～3164）、刺突（列点）文をともなう段（3165）、下位に沈線２～３条をともなう段（3166～3168）、上位に沈線２条をともなう段（3169）、上位に縦位沈線をともなう段（3170）、沈線を加えた削出突帯（3171）、断続的な沈線１条（3172）、沈線２～４条（3173～3175）、沈線と弧文（3176・3177）、斜格子文と木葉文の一部（3178）、弧文（3179）がみられる。これらのうち沈線条数は最多で４条を数える。

（3180・3181）は鉢の口縁部で、ともに端部付近は内湾する。

（3145～3157・3182）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、頸部に、段（3150・3182）、沈線１条を加えた削出突帯（3151・3152）、沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、３条（3153～3155）、４条（3156）がある。（3152）の口縁部の外反度は弱い。（3156）の体部の張りは強い。（3157）は、頸部に沈線３条をめぐらし、その間に横位楕円形の刺突文がみられる。（3183）は、甕蓋の口縁部で、端部付近の内面に沈線１条がある。

〔上位包含層〕（3184～3211）　（3184～3186・3188～3190）は壺の口縁部で、頸部に、沈線を加えた削出突帯（3185）、沈線もしくは段（3186）、沈線３条（3188）、端部に沈線１条（3189・3190）がみられる。（3188）は大形壺にあたる。（3191～3200）は壺類の有文体部で、段（3191・3192）、下位に沈線２条をともなう段（3193）、沈線を加えた削出突帯（3194～3196）、沈線１～３条（以上）（3197～3199）、木葉文（3200）がみられる。これらのうち、沈線条数は最多で３条（以上）を数える。（3199）は（3188）と同一個体となる可能性がある。（3201・3202）は壺蓋の口縁部である。

（3203・3204）は鉢の口縁部で、（3203）の端部付近は内湾し、（3204）は直口で外面に沈線がめぐる。

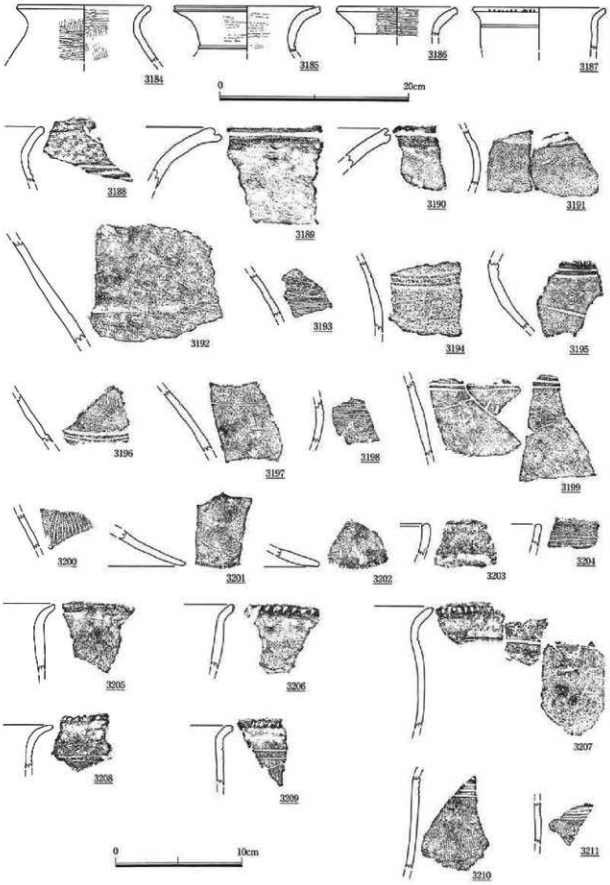
（3187・3205～3209）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、１条（3187・3207）、２条（3208・3209）がある。（3187）の端部刻目は、全周せず間欠部が存在する。（3210・3211）は甕の有文頸部で、（3210）は推定沈線４条、（3211）は沈線４～５条がみられる。

ｄ．99－４区遺構出土

〔第26面落ち込み状遺構Ｓ04272〕（3212）　調査区南西端部で検出した、落ち込み状部からの出土。壺の有文体部で、段がみられる。

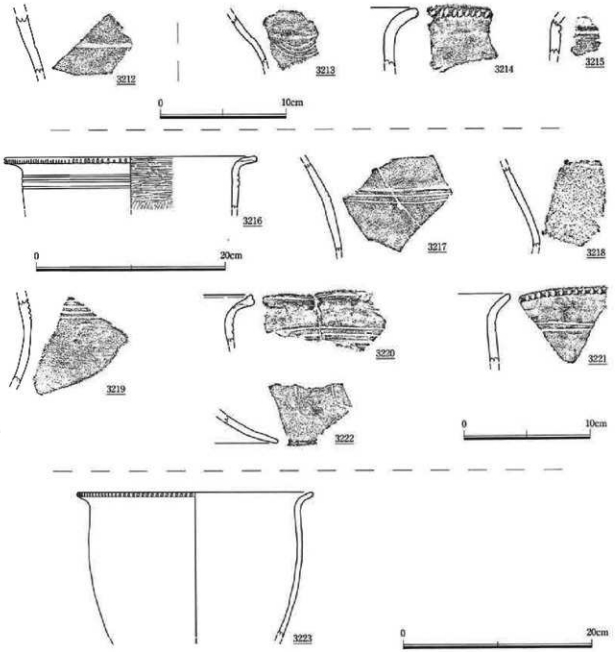
〔第26面溝Ｓ04250〕（3213～3215）　調査区中央部で検出した、北東－南西主軸の小溝からの出土。（3213）は壺の有文体部で、段の下位に重弧文がみられる。（3214）は甕の口縁部で、端部に刻目が加えられ、遺存最下端部にも刻目が残存する。（3215）は甕の有文頸部で、沈線２条がみられる。

〔第26面溝Ｓ04251〕（3216～3222）　調査区東半部で検出した、北東－南西主軸溝からの出土。（3217～3219）は壺類の有文体部で、下位に沈線２条をともなう段（3217）、沈線１～４条（以上）（3218・3219）がみられる。これらのうち沈線条数は最多で４条（以上）を数える。（3216・3220・3221）は甕の口縁部で、端部に、刻目（3216・3221）、沈線１条（3220）のほか、頸部に沈線をめぐらす個体がある。



上位包含層（3184～3211）

図41　弥生時代前期土器実測図－10（99－3区：包含層出土）



第26面〔S04272（3212）、S04250（3213~3215）、S04251（3216~3222）、S04274（3223）〕
図42　弥生時代前期土器実測図ー11（99ー4区：遺構出土）

沈線条数が判明するものでは、2条（3221）、3条（3216）がある。（3220）の口縁端内面は凸状を呈する。（3222）は甕蓋の口縁部である。

〔第26面土坑S04274〕（3223）　調査区東南部で検出した、平面不整形の小形土坑からの出土。甕の口縁部で、端部には刻目がみられる。

〔第25面土坑S04184〕（3224~3231）　調査区西半部で検出した、推定平面円形の土坑（木製鍬等出土遺構）からの出土。（3226）は壺の口縁部で、端部に1条沈線がみられる。甕には、全容が判明する（3224）がある。口縁部径が体部最大径を大きくうわまわり、体部全体が上部に強く開いた様相をみせる。口縁端部には刻目を加え、頸部に沈線1条がめぐる。（3225・3227・3228）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、2条（3225）

がみられる。(3229・3230) は甕の有文頸部で、ともに3条（以上）沈線がみられる。(3231) は甕蓋の口縁部である。

〔第25面落ち込み状遺構S04201〕(3232・3233)　調査区南東端で検出した、落ち込み状部からの出土。壺類の有文体部で、ともに沈線がみられ、(3233) には木葉文の一部が残る。

〔第25面土坑S04196〕(3234)　調査区東半部で検出した、平面円形の小形土坑からの出土。直口鉢の口縁部である。

〔第25面土坑S04198〕(3235～3248)　調査区東半部で検出した、平面長円形の小形土坑からの出土。(3238～3240) は壺類の有文体部で、いずれも沈線3条ないし3条以上がみられ、(3240) はそれに重ねて縦位沈線を施す。

(3241) は直口鉢の口縁部である。

甕には、全容が判明する (3235・3236) がある。(3235) は口縁部径が体部最大径をうわまわり、体部全体が外方に開く。本例は、外面に付着していた煤を用いた炭素14年代測定で、2440±40 ^{14}C BPというデータが得られている（後掲第8章第6節参照）。(3236) は体部最大径が口縁部径をうわまわり、頸部で一旦すぼまり、口縁部は強く屈曲する。ともに口縁端部に刻目を加え、頸部には沈線3条がめぐる。(3237・3242～3245) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、2条 (3242)、3条 (3237) がみられる。(3246) は甕の有文頸部で、沈線2条がめぐる。(3247・3248) は甕蓋の口縁部である。

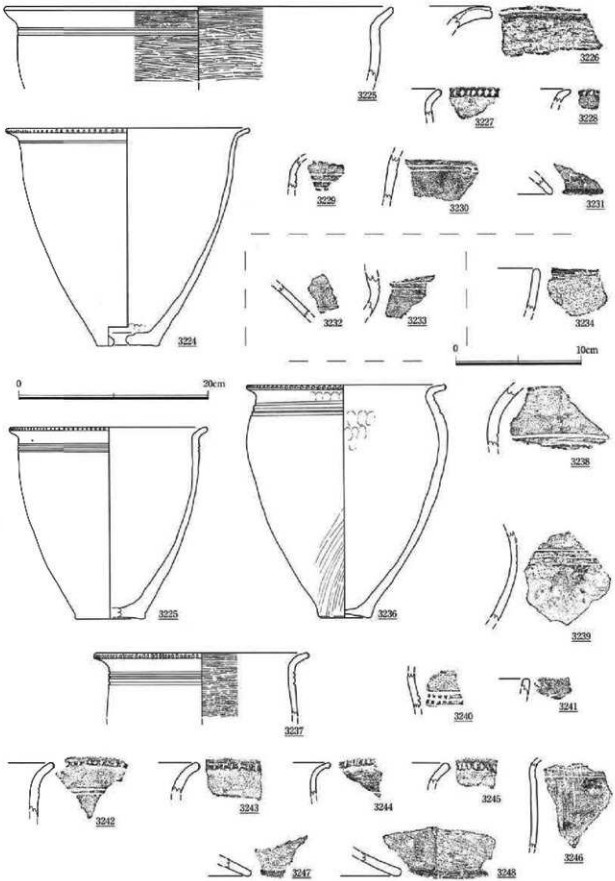
〔第25面落ち込み状遺構S04185〕(3249～3252)　調査区西端部で検出した、落ち込み状部からの出土。(3249) は壺の口縁部で、頸部に段がみられる。(3250) は壺類の有文体部で、下位に沈線2条をともなう段の上位に縦位の沈線文がみられる。(3251・3252) は、甕の有文頸部で、(3251) は細沈線2条、(3252) は沈線4条以上がめぐる。

〔第25面土坑S04199〕(3253～3262)　調査区中央部で検出した、平面不整形の土坑からの出土。(3254) は壺の口縁部で、明瞭な段がみられる。(3255・3256) は壺類の有文体部で、沈線を加えた削出突帯 (3255)、沈線3条とその間の円形（やや竹管状）刺突文 (3256) がみられる。(3253・3257～3259) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、(3253) では、頸部に沈線3条をめぐらすが、その位置は通常の個体に比べて下位に下がっている（降下沈線文状）。(3260～3262) は甕の有文頸部で、段 (3260)、沈線 (3261・3262) がみられる。

〔第25面溝S04182〕(3263～3266)　調査区東端部で検出した、平面が屈曲する溝からの出土。(3263) は壺の口縁部である。(3264) は壺の有文体部で、下位に沈線2条をともなう段がみられる。(3265・3266) は甕の口縁部で、ともに無文である。

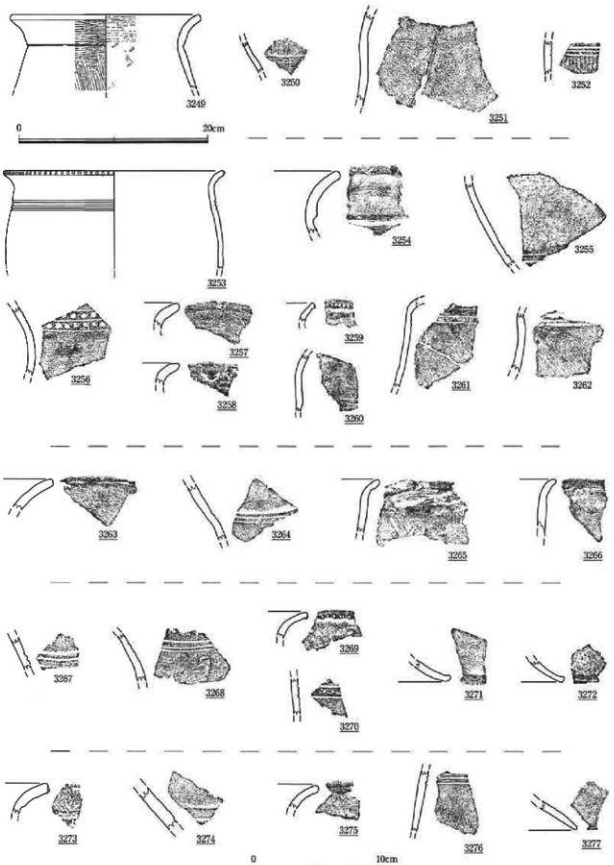
〔第25面溝S04180〕(3267～3272)　調査区東端部で検出した、北東－南西主軸の溝からの出土。(3267・3268) は壺の有文体部で、沈線を加えた削出突帯段の下位に沈線2条 (3267)、同3条 (3268) がある。(3269) は甕の口縁部で、端部の刻目は口縁下端に偏る。(3270) は甕の有文頸部で、沈線2条間に半裁竹管刺突文が施される。(3271・3272) は甕蓋の口縁部である。

〔第25面溝S04183〕(3273～3277)　調査区東端部で検出した、平面が屈曲する溝からの出土。(3273) は壺の口縁部で、端部に刻目を加える。(3274) は壺の有文体部で、削出突帯がみられる。(3275) は甕の口縁部で無文である。(3276) は甕の有文頸部で沈線3条以上がめぐる。(3277) は甕蓋の口縁部である。



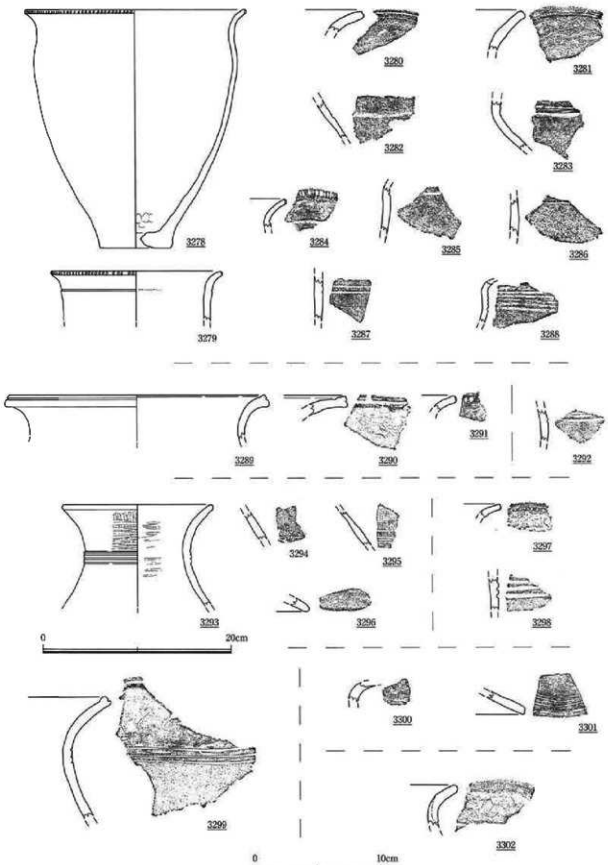
第25面〔S04184（3224～3231）、S04201（3232・3233）、S04196（3234）、S04198（3235～3248）〕

図43　弥生時代前期土器実測図－12（99－4区：遺構出土）



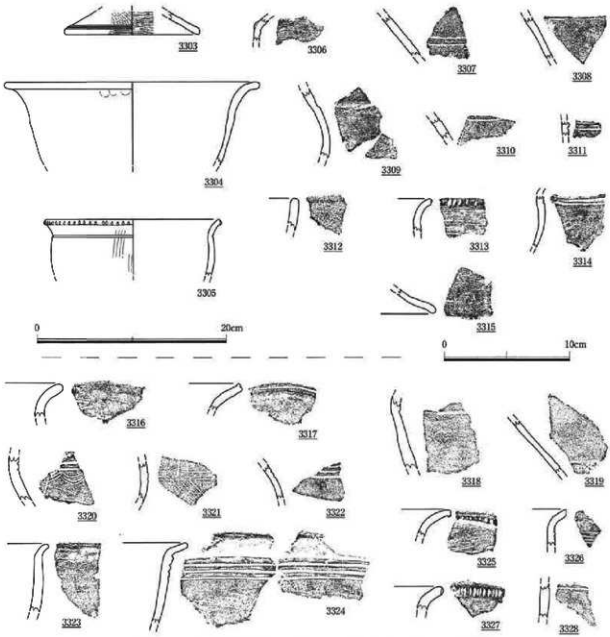
第25面（S04185（3249～3252）、S04199（3253～3262）、S04182（3263～3266）、S04180（3267～3272）、S04183（3273～3277））

図44　弥生時代前期土器実測図－13（99－4区：遺構出土）



第24面（S04161（3278～3288）、S04160（3289～3291）、S04170（3292）、S04174（3293～3296）、S04162（3297・3298）、S04177（3299）、S04173（3300・3301）、S04176（3302））

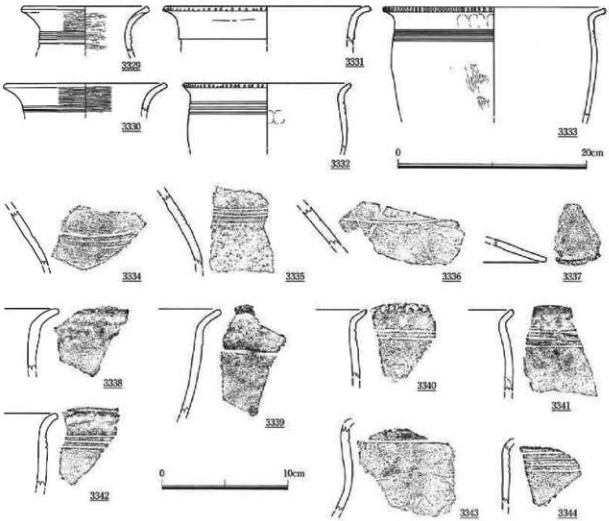
図45　弥生時代前期土器実測図－14（99－4区：遺構出土）



第24～22（21）面凹部〔S04120（3303～3315）、S04121（3316～3328）〕
図46　弥生時代前期土器実測図－15（99－4区：遺構出土）

〔第24面溝S04161〕（3278～3288）　調査区東端部で検出した、平面が湾曲しほぼ南－北主軸の溝からの出土。（3280・3281）は壺の口縁部で、（3280）の端部には沈線1条がめぐる。（3282・3283）は壺の有文体部で、段（3282）、沈線を加えた削出突帯（3283）がみられる。甕には、全容が判明する（3278）がある。口縁部径が体部最大径をややうわまわり、口縁部はゆるやかにやや長く外反する。口縁端部には刻目を加えるが、頸部は無文である。（3279・3284）は甕の口縁部で、端部に刻目を加え、頸部には沈線をめぐらす。（3285～3288）は甕の有文頸部で、いずれも沈線がみられる。（3288）は5条を数え、施文は浅い。

〔第24面土坑S04160〕（3289～3291）　調査区中央部で検出した、平面長円形の土坑（竪穴住居S04300の炉跡）からの出土。いずれも壺の口縁部で、端部には、（3289・3290）では沈線1条、（3291）では刻目が加えられる。



第26・25面間（3329～3344）

図47　弥生時代前期土器実測図－16（99－4区：包含層出土）

〔第24面ピットＳ04170〕（3292）　調査区中央部で検出した、小形ピット（竪穴住居Ｓ04300内に相当）からの出土。壺の有文体部で、沈線がめぐる。

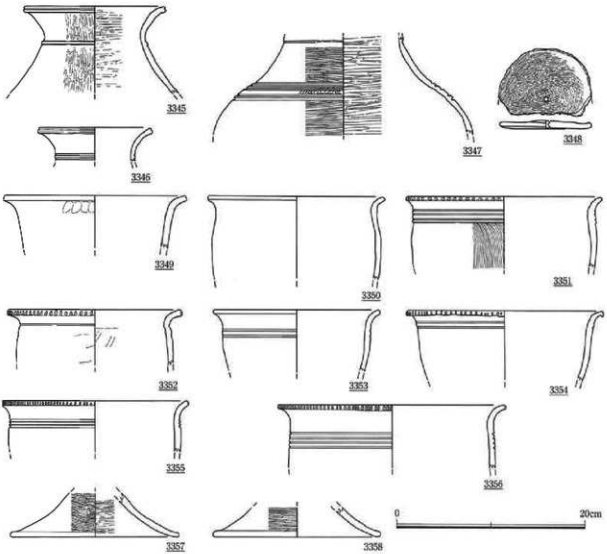
〔第24面土坑Ｓ04174〕（3293～3296）　調査区東半部で検出した、推定平面が長円形の小形土坑からの出土。（3293）は壺の口縁部で、頸部には沈線２条を加えた削出突帯がみられる。（3294・3295）は壺の有文体部で、ともに沈線がめぐる。（3296）は壺蓋の口縁部である。

〔第24面溝Ｓ04162〕（3297・3298）　調査区中央部で検出した、竪穴住居Ｓ04300の周壕溝からの出土。（3297）は甕の口縁部で、端部下端に刻目を加える。（3298）は甕の有文頸部で、沈線がめぐる。

〔第24面土器だまりＳ04177〕（3299）　調査区中央部で検出した、竪穴住居Ｓ04300に南接する土器だまりからの出土。大形壺の口縁部で、頸部には沈線３条がめぐる。

〔第24面溝Ｓ04173〕（3300・3301）　調査区南東端部で検出した、東北東－西南西主軸の溝からの出土。（3300）は壺の有文体部で、沈線がめぐる。（3301）は壺蓋の口縁部で、端部付近外面に断続的な沈線４条が施される。

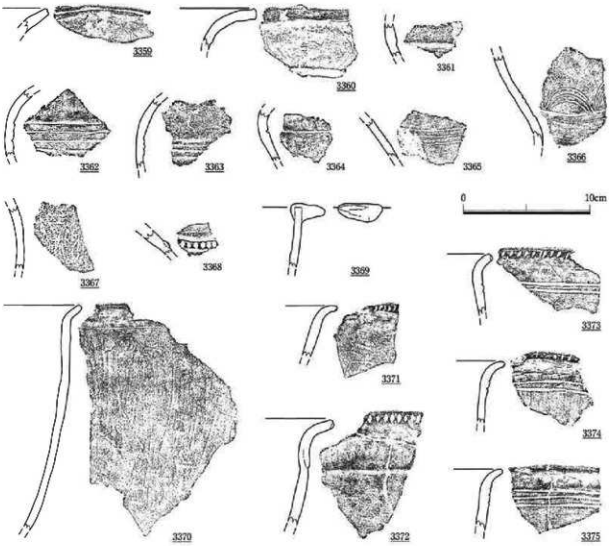
〔第24面土坑Ｓ04176〕（3302）　調査区西半部で検出した、平面不整形の土坑からの出土。壺の口縁部で、頸部に段がみられる。



第25・24面周（3345～3358）
図48　弥生時代前期土器実測図－17（99－4区：包含層出土）

〔**第24～22（21）面凹部S04120**〕（3303～3315）　調査区西半部で検出した、溝状の落ち込み部からの出土。（3306）は、小形壺の口縁部付近で、外面に沈線2条、内面に貼付突帯1条がみられる。（3307～3311）は壺類の有文体部で、段（3309）、削出突帯（3307）、沈線（3308・3310・3311）がみられる。（3308）の沈線は細い。（3303）は壺蓋の口縁部で、端部付近外面に沈線3条がめぐる。（3312）は直口鉢の口縁部である。（3304・3305・3313）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、1条（3305）がある。（3314）は甕の有文頸部で、沈線1条がめぐる。（3315）は甕蓋の口縁部である。

〔**第24～22（21）面凹地状部・溝S04121**〕（3316～3328）　調査区東端部で検出した、落ち状込み状凹部（現地調査では溝とした）からの出土。（3316・3317）は壺の口縁部で、（3317）の端部に沈線がめぐる。（3318～3322）は壺類の有文体部で、段（3318）、沈線を加えた低い削出突帯（3319）、沈線（3322）、沈線の下位に重弧文（3320）や斜格子文（3321）を加えた個体がみられる。（3323～3327）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に沈線をめぐらす個体がある。（3325）の刻目は下端に施される。沈



第25・24画間（3359～3375）

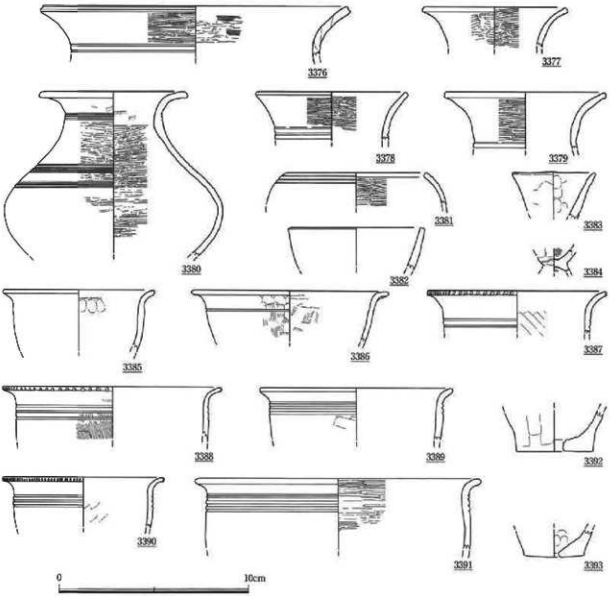
図49　弥生時代前期土器実測図－18（99－4区：包含層出土）

線条数が判明するものでは、4条（3324）がみられる。（3328）は甕の有文頸部で、沈線がめぐる。

e．99－4区包含層ほか出土

〔第26・25画間〕（3329～3344）　（3329・3330）は壺の口縁部で、頸部に、沈線2条を加えた低い削出突帯（3329）、沈線（3330）がみられる。（3334～3336）は壺類の有文体部で、上・下位に沈線をともなう低い段（3334・3335）、沈線（3336）がみられる。（3337）は壺壷の口縁部である。（3331～3330・3338～3342）は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に段（3331・3339）、沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、2条（3340）、3条（3332・3341・3342）、4条（3333）がある。（3343・3344）は甕の有文頸部で、沈線がめぐり、（3344）は4条を数える。

〔第25・24画間〕（3345～3375）　（3345・3346・3359・3360）は壺の口縁部で、（3345・3346・3359）の端部には沈線が施され、頸部に、段（3360）、削出突帯（3345）、沈線（3346）がみられる。（3347・3361～3368）は壺類の有文体部で、段（3361）、沈線を加えた削出突帯（3362・3363）、沈線（3364・3365）がみられる。沈線条数は最多で4条を数える。（3347・3366～3368）は、それら以外にやや特殊な文様を付加する個体である。（3347）は頸部には削出突帯もしくは段、肩部には沈線間に斜線や綾杉文を



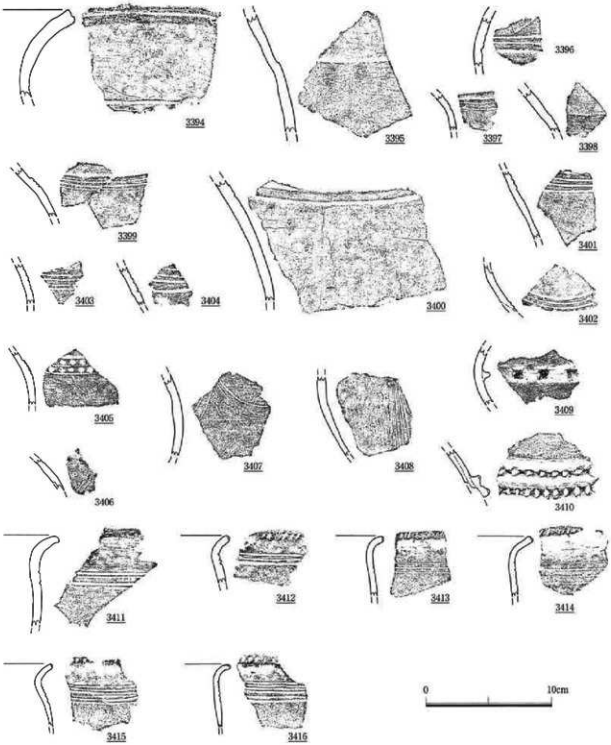
第24・23面間（3376～3393）

図50　弥生時代前期土器実測図－19（99－4区：包含層出土）

部分的に加える。(3366) では肩部の段の下位に沈線1条、上位に重弧文、(3367) では、沈線2条の下位に木葉文、(3368) では刻目を加えた貼付突帯で装飾される。なお、(3367) の図示した天地左右関係にはやや疑問が残る。(3348) はほぼ全容が判明する壺蓋で、器高は低い。

(3369) は、直口鉢の口縁部で、瘤状の把手が付く。(3349～3356・3370～3375) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、頸部に、段 (3372)、上部に沈線3条をともなう段（ハケ工具端で形成）(3351)、沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、1条 (3352)、2条 (3353・3354・3373～3375)、3条 (3355)、4条 (3356) がある。(3357・3358) は甕蓋の口縁部である。

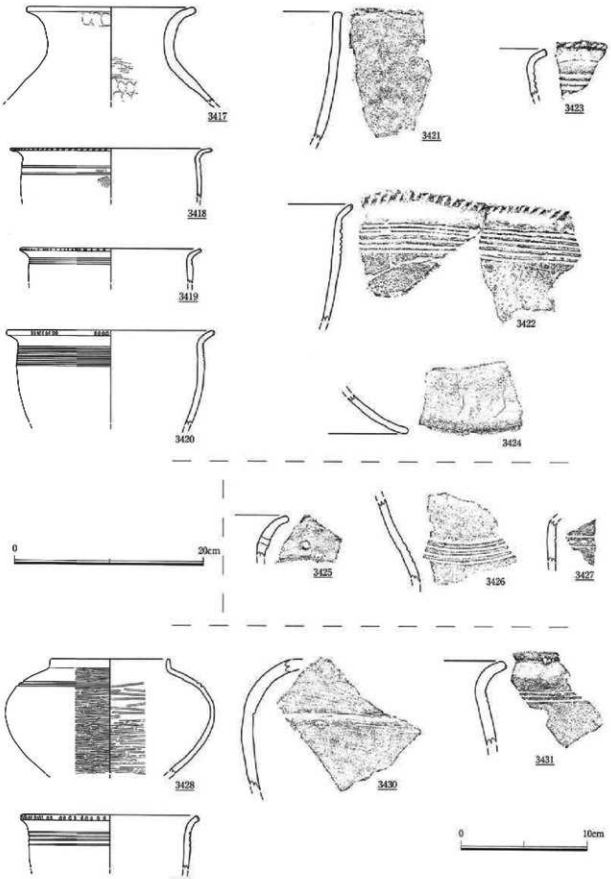
〔第24・23面間〕(3376～3416)　壺には、おおむね全容が判明する (3380) がある。底部を欠くが、体部がやや扁平状を呈し、頸部に沈線3条、肩部に沈線4条と3条をめぐらす。(3376～3379・3381・3394) は壺の口縁部で、うち、(3376) は大形壺、(3381) は無頸壺である。(3376・3394) の端部には沈線が施され、頸部に、段 (3394)、沈線を加えた削出突帯 (3378・3379)、沈線 (3376) がみられる。



第24・23面間（3394～3416）

図51　弥生時代前期土器実測図－20（99－4区：包含層出土）

（3381）の口縁部は内湾し、外面に沈線3条がめぐる。（3395～3410）は壺類の有文体部で、段（3395）、上位に沈線をともなう段（3396）、下位に沈線をともなう段（3397～3399）、削出突帯（3400）、沈線を加えた削出突帯（3401・3402）、沈線（3403・3404）がみられる。沈線条数は最多で5条を数える。（3405～3410）は、それら以外にやや特殊な文様を付加する個体である。（3405）は下位に沈線とその間に刺突文を備えた段、（3406）は同じく下位に沈線と重弧文をともなった段、（3407）は重弧文、（3408）は縦位



第23・22面間（3417～3424）、第22・21面間（3425～3427）、その他（3428～3431）

図52　弥生時代前期土器実測図－21（99－4区：包含層出土）

沈線もしくは山形文、(3409) は突出度が高く突起（浮文）状になった貼付突帯、(3410) は有刻目で断面M字形の貼付突帯で装飾される。(3405) の外面には黒色物質の付着がみられる。

(3382・3383) は、直口鉢の口縁部で、(3383) は小形で手づくね状をなす。(3384) は高杯の軸部と推定できる個体で、高杯で相違ないならば出土品中の唯一例となる。

(3385～3391・3411～3416) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、1条 (3386)、2条 (3387・3411)、3条 (3388～3390・3413)、4条 (3391・3414)、6条 (3415・3416) があり、条数に幅がみられる。うち、(3387) は、沈線の位置がやや下位にさがった「降下沈線」(秋山1992) 文状を呈する。(3392・3393) は、甕の底部で、底面中央に焼成後の穿孔がなされる。

〔第23・22面間〕(3417～3424)　(3417) は壺の口縁部で、残存部では無文である。(3421) は直口鉢の口縁部である。(3418～3420・3422・3423) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、沈線をめぐらす個体がある。(3420) の刻目は全周に施されるのではなく、間欠部がある。沈線条数が判明するものでは、2条 (3418・3419)、6条 (3422)、8条 (3420) があり、8条は今回の出土品のなかでは最多条数となる。なお、条数の多い個体 (3420・3422) は、生駒山西麓産土器ではない。条数の多寡と胎土に相関関係が存在する可能性がある。要するに、土器産地によって、同時期でも沈線条数の増加進行度合が異なる現象に注意しておきたい。(3424) は甕蓋の口縁部である。

〔第22・21面間〕(3425～3427)　(3425) は壺の口縁部で、頸部に沈線がみられ、紐通し孔（焼成前穿孔）がある。(3426) は壺の有文体部で、下位に沈線3条を備えた段がみられる。(3427) は甕の有文頸部で、沈線2条間に横長の刺突文が施される。

〔その他〕(3428～3431)　出土層位が特定しにくい、調査区の排水用側溝等からの出土。(3428) は無頸壺で、おおむね全容が判明する。体部はやや肩の張った扁平状を呈し、肩部には沈線2条がめぐる。口縁部は短く上方に立ちあがる。(3430) は、大形壺の口縁部付近で、段がみられる。(3429・3431) は甕の口縁部で、ともに端部に刻目を加え、頸部に沈線4条と3条をめぐらす。

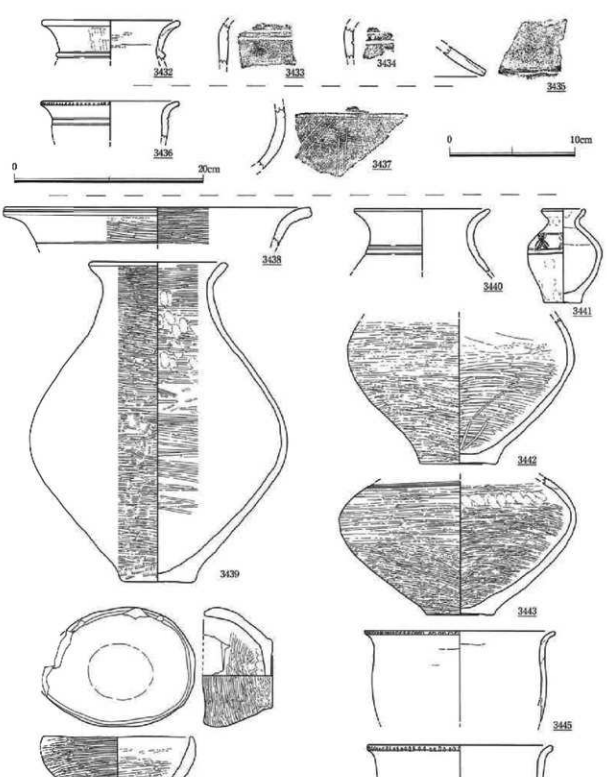
f．99－5区遺構出土

〔第25面溝S05300〕(3432～3435)　調査区東半部で検出した、環濠（下位）となる可能性がある北東－南西主軸の溝からの出土。(3432) は壺の口縁部で、頸部に削出突帯がみられる。(3433・3434) は甕の有文頸部で、沈線がめぐる。(3435) は甕蓋の口縁部である。

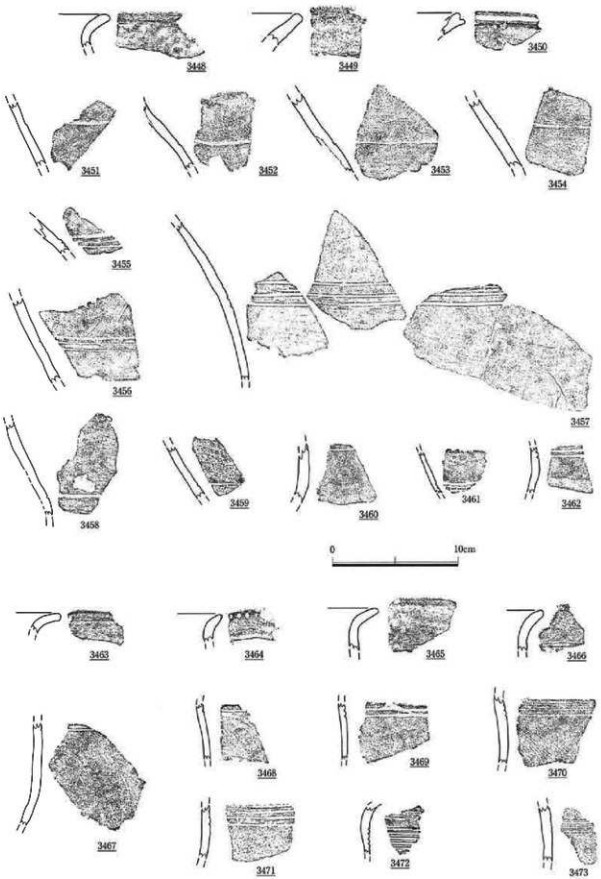
〔第25面溝S05302〕(3436・3437)　調査区中央部で検出した、南北主軸の溝からの出土。(3436) は甕の有文頸部で、沈線2条がめぐる。(3437) は、壺の有文体部で、沈線の下位に縦位と斜位の沈線で装飾される。

〔第24面溝S05290〕(3438～3473)　調査区東半部で検出した、環濠（上位）となる可能性がある南北主軸の溝からの出土。

壺には、全容が判明する (3439・3941) がある。(3439) は、最大径部が器高の下半部にあり、器高が体部最大径を大きくうわまわる。文様は一切みられない。(3441) は小形品（ミニチュア状）で、最大径部が器高の上半部にあり、器高が体部最大径をうわまわる。肩部に沈線と木葉文がみられるが、木葉文は全周せず3単位しかない。土器の正面を意図したものか。(3438・3440・3448～3450) は壺の口縁部で、端部に沈線 (3438・3450) がめぐる個体のほか、頸部に、沈線を加えた低い削出突帯 (3440)、沈線 (3438) がみられる。(3442・3443) は、体下半部の様相が判明する例で、(3443) の肩部には沈線がめぐ

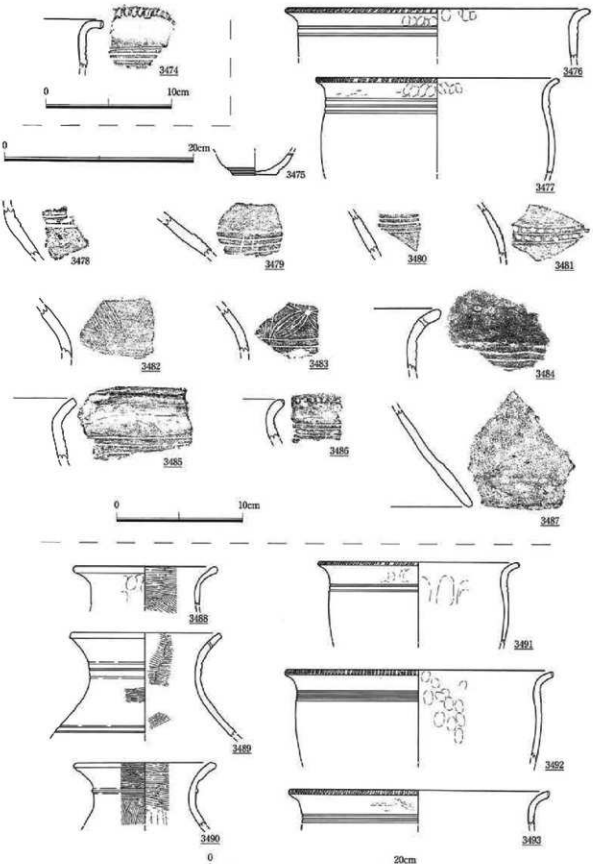


第25図〔S05300（3432～3435）、S05302（3436・3437）第24図〔S05290（3438～3447）〕
図53　弥生時代前期土器実測図―22（99－5区：遺構出土）

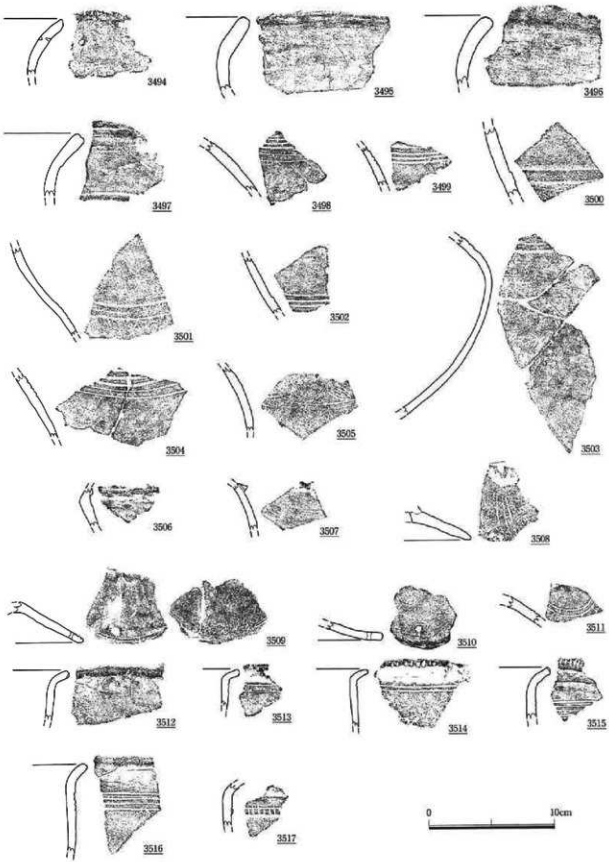


第24図〔S05290（3448～3473）〕

図54　弥生時代前期土器実測図一23（99－5区：遺構出土）



第26・25面間（3474）、第25・24面間（3475～3487）、第24・23面間（3488～3493）
図55　弥生時代前期土器実測図－24（99－5区：包含層出土）



第24・23溝間（3494～3517）
図56　弥生時代前期土器実測図－25（99－5区：包含層出土）

る。(3451～3462) は壺類の有文体部で、段 (3451～3453)、浅い沈線状の段 (3454)、下位に沈線２条をともなう段 (3455)、沈線 (3456～3462) がみられる。(3456・3461) の文様上端はやや段状をなす。沈線条数は最多で４条を数える。

(3444) はほぼ全容が判明する鉢で、平面形は、やや偏った長円形をなし、体部はやや内湾しながら上外方に立ち上がり、口縁端部は先すぼまりにおわる。内外面とも黒色物質が付着している。

(3445～3447・3463～3466) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、２条 (3447) があり、本例は施文位置がやや下がった降下沈線状甕にあたる。この個体には、口縁端に刻目を施した際のヘラ工具先端の当たり痕跡が、体部外面に残る。(3467～3472) は甕の有文頸部で、いずれも沈線がめぐり、最多で５条を数える。

なお、(3473) は、１帯８条の櫛描きの直線文が２帯施された壺体部片かと考えられる。櫛描文は弥生前期相当遺構面・層での検出は他に皆無で、本例に関しては何らかの事情による混入品と考えて相違ないであろう（上層の弥生中期の方形周溝墓関係品が、調査用鋼矢板の打設時に引き下げられたものか）。

g．99－５区包含層ほか出土

〔第26・25面間〕(3474)　甕の口縁部で、端部に刻目を加え、頸部に沈線（４条以上）がめぐる。

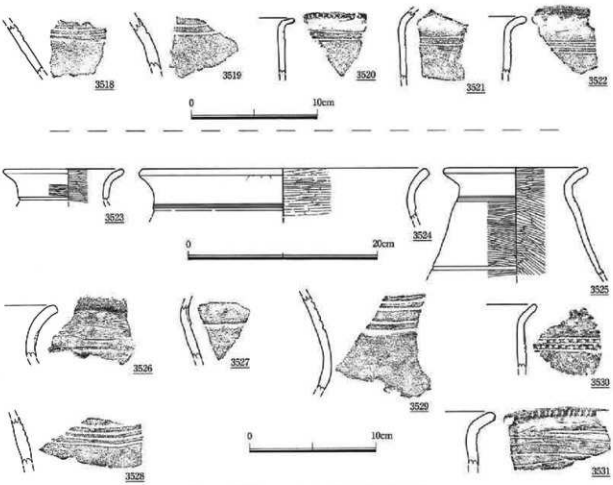
〔第25・24面間〕(3475～3487)　(3475) は、小形壺の底部で、底側面に沈線３条が施される。(3478～3483) は壺類の有文体部で、下位に沈線と横長の刺突文をともなった段ないし削出突帯 (3478)、沈線を加えた低い削出突帯 (3479)、沈線 (3480)、沈線と刺突文 (3481)、山形文 (3482)、沈線と木葉文 (3483) がみられる。(3476・3477・3484～3486) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体のほか、沈線２条を加えた低い削出突帯 (3484)、頸部に沈線をめぐらす例がある。沈線条数が判明するものでは、２条 (3476)、３条 (3477) がある。(3487) は甕蓋の口縁部である。

〔第24・23面間〕(3488～3517)　(3488～3490・3494～3497) は壺の口縁部で、頸部に、沈線を加えた削出突帯 (3489)、貼付突帯 (3490)、沈線 (3497) がみられる。(3489) は肩部にも沈線を加えた削出突帯、(3494) は口縁端部付近の内外面に未貫通の穴（焼成前）が確認できる。(3498～3507) は壺類の有文体部で、上位に沈線をともなう低い段 (3498・3499)、削出突帯 (3500)、沈線を加えた削出突帯 (3501～3503)、太沈線と細沈線の併用 (3504)、木葉文と沈線 (3505)、貼付突帯 (3506・3507) がみられる。遺存状態がよくないため判然としないが、(3505) の木葉文の中心には珠文をともなう可能性がある。(3508～3510) は壺蓋の口縁部で、外面に、(3508) は縦位の沈線、(3509) は沈線２条がみられ、後二者には紐通し孔（焼成前穿孔）がある。(3511) は壺蓋の片で重弧文と縦位沈線が施される。

(3491～3493・3512～3516) は甕の口縁部で、端部に刻目を加える個体、頸部に沈線をめぐらす個体がある。沈線条数が判明するものでは、２条 (3491・3513・3514)、４条 (3492・3515)、５条 (3516) がある。(3517) は甕の有文頸部で、上位に沈線をともなう段に、縦位沈線状の刻目を加える。

〔第23・22面間〕(3518～3522)　(3518・3519) は壺類の有文体部で、沈線を加えた削出突帯 (3518)、沈線 (3519) がみられる。(3520～3522) は甕の口縁部で、頸部に沈線をめぐらし、条数が判明するものでは、２条 (3520・3521)、３条 (3522) がある。

〔その他〕(3523～3531)　側溝等からの出土。(3523～3526) は壺の口縁部で、頸部に、段 (3523・3526)、上位に細沈線３条をともなう段 (3524)、沈線 (3525) がみられる。(3525) の沈線には、描線の重なりが観察でき、施文は左→右の方向でなされている。(3527～3529) は壺類の有文体部で、段 (3527)、下位に沈線をともなう段 (3528)、沈線を加えた削出突帯 (3529) がみられる。(3530・3531) は甕の口



第23・22面間（3518～3522）、その他（3523～3531）

図57　弥生時代前期土器実測図－26（99－5区：包含層出土）

第26・25面間（3532）

図58　弥生時代前期土器実測図－27（99－6区：包含層出土）

縁部で、沈線間に刺突文（3530）、沈線（3531）がある。

h．99－6区包含層ほか出土

〔第26・25面間〕（3532）　壺の口縁部で、頸部に、沈線を加えた削出突帯がみられる。

i．99－7区包含層ほか出土

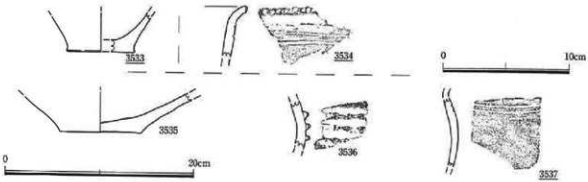
無文体部片が若干出土したにすぎない。図示できる個体はない。

j．01－2区包含層ほか出土

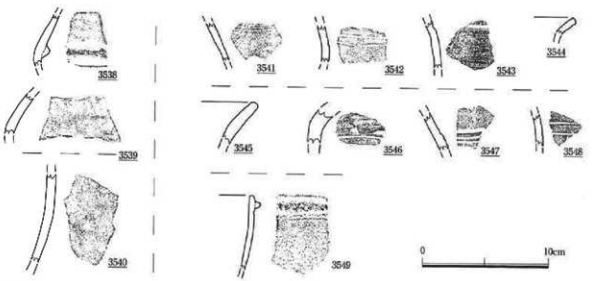
〔第18面〕（3533）　甕の底部である。

〔第17・16面間〕（3534）　甕の口縁部で、端部に刻目、頸部に沈線2条がみられる。

〔第16・15面間〕（3535～3537）　（3535）は壺の底部である。（3536）は壺の有文体部で、布目圧痕



第18面（3533）、第17・16面間（3534）、第16・15面間（3535～3537）
図59　弥生時代前期土器実測図―28（01－2区：包含層出土）



第20面［S23020（3538・3539）、S23040（3540）］、第21・20面間（3541～3544）、第20・19面間（3545～3548）、上層遺構［S23150（3549）］
図60　弥生時代前期土器実測図―29（01－3区：遺構・包含層出土）

をとどめる刻目を加えた貼付突帯3条がみられる。布目圧痕は今回の出土品中の唯一例となる。（3537）は甕の有文頸部で沈線2条がめぐる。

k．01－3区遺構出土

〔第20面水田畦畔S23020〕（3538・3539）　調査区西端部で検出した、ほぼ南－北主軸の畦畔部からの出土。ともに壺の頸部で、（3538）は貼付突帯がみられるが、（3539）は無文である。

〔第20面水田畦畔S23040〕（3540）　調査区中央部で検出した、ほぼ南－北主軸の畦畔からの出土。壺の体部で、無文である。

l．01－3区包含層ほか出土

〔第21・20面間〕（3541～3544）　水田（第20面）耕土層からの出土。（3541～3543）は壺類の有文体部で、沈線と山形文（3541）、沈線（3542・3543）がみられる。（3544）は甕の口縁部である。

〔第20・19面間〕（3545～3548）　水田畦畔（第20面）の直上層からの出土。（3545）は壺の口縁部である。（3546～3548）は、壺の有文体部で、沈線を加えた削出突帯（3547）、沈線（3546・3548）がみられる。

〔その他・上層遺構S23150〕（3549）　直口鉢の口縁部で、口縁端の外面直下に刻目を加えた貼付突

帯がめぐる。なお、本例は、縄文時代の突帯文土器とは異なる個体である。

m．小結

以上の弥生前期の土器資料は、壺や甕、鉢の文様において、段手法が比較的多くみられる点に古い様相を示し、点数は少なくしかも初現的な形態ではあるが貼付突帯文が若干存在し、ヘラ描き平行沈線文の条数に例外的には8条と6条におよぶ個体も確認できる点から新しい様相をみせる。したがって、総体としては一定の時間幅を有する土器資料といわざるを得ない。しかしながら、これらのうち主体を占める個体をみると、突出度が低いながらも削出突帯が多用され、沈線文の条数では3条が中心となり、それに1・2条と4・5条が決して多くはないものの一定量加わるが、5条の個体は極めて少ないという、比較的共通した諸属性をみせる土器様相で構成されている。

これらの資料は、前期を前半・後半に二大別した場合の前半に含まれ、そのなかでもおおむね新相の位置にあたるといえよう。近畿におけるこれまでの代表的な土器編年案にあてはめると、必ずしも厳密な対応は容易ではないが、佐原1968の中段階（の後半）、井藤1981の1－b～c、寺沢・森井1989のⅠ－2、田畑1997の1－2（～3）、若林1999の様相2（古相）におおむね相当しよう。従前における編年上の検討素材とされる諸資料のなかでは、本遺跡の南約500mにある山賀遺跡の諸土器群（大阪文化財センター1984）が今回の土器群様相に比較的近い内容になっている。

さて、今回の調査の北接地では、先述のように、（財）東大阪市文化財協会1999c（45次調査）や東大阪市教委2002（47次調査）によっても同一集落の弥生前期土器が報告され、今回分を含めると豊富で安定した土器群となっている。それらの報告資料を通覧するかぎりにおいて、いずれもきわめて近似した内容であるのが判明する。要するに、本調査地点の弥生前期遺跡の存続は、土器様相をみるかぎり、前期前半（新相）段階の比較的単純な土器小様式幅のなかで営まれていたと推定できる。したがって、近辺では近畿最古の弥生前期集落として、本遺跡と山賀遺跡の中間地点に位置する若江北遺跡（大阪府文化財調査研究センター1996b）が判明しているが、その後続集落として、山賀遺跡と本遺跡北東部の今回の調査地点付近の集落が形成されたといえる。

以上の基本的な傾向は、99－3区～5区にあたる集落域で豊富に出土した土器資料からの内容である。次いで、この集落の縁辺に展開する、西側の低地部域と東側の水田域にかかわる土器資料を検討しておこう。

低地部域の99－6区・7区では、今回は出土資料が非常に少ないが、図示できた資料（3532）でみるかぎり集落域の様相と合致している。また、同じ低地部域における過去の調査で、一定量の土器が検出された東大阪市教委2002の報告資料でも矛盾はない。

一方、水田域の01－2区・3区においては、水田畦畔が実際に検出できた01－3区では、図60に示したように水田耕土層、畦畔構成土中、畦畔被覆層の各層順から、少量ながら土器小片が得られている。それらでは、集落域の土器内容と矛盾するものではない。ただ、その東約20mの01－2区では、ここでも前期土器の出土自体がごく僅少ではあるが、しかも、水田畦畔相当面を直接被覆する層ではないものの、やや上層から前期後半に下がる可能性が強い貼付突帯文3条を備える壺片（3536）が1点出土している。このように、水田域の経営時期に関しては、直接的に水田畦畔を検出した調査区の土器資料に依拠するかぎり、集落域が営まれていた前期前半（新相）に比定するのには全く問題はない。したがって、今回の水田遺構は、データ上では、大阪府下の池島・福万寺遺跡（大阪府文化財調査研究センター2001）や志紀遺跡（大阪府文化財調査研究センター2002b、秋山2002d）の初期水田と同じように、近畿におけ

る最古段階の水田遺構に含めてよい。しかし、上述したように、その下限時期を問題にする際等に、今後考慮しておくべき点もあることをあえて付言しておきたい。近い将来、今回の近鉄高架事業の継続として近接部での調査が進められ、水田遺構の続きが検出される機会があるはずなので、その折りの出土遺物や層順の検討に注意したい。 (秋山)

（2）土製品（図61～64、表3・4、写真図版110）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

99－3区～5区で土錘、紡錘車、土器片転用円盤（有孔・無孔）、焼粘土塊が出土した。その点数を、実測図掲載の有無と総計に区分して表3に示した。

種類別では、焼粘土塊が最も多く、次いで転用円盤となり、この2種が大部分を占める。一方、土錘と紡錘車は少ない。これら土製品が検出された調査区は、弥生前期における集落域部に相当し、低地部域（99－6区・7区）や水田域（01－2区・3区）では確認していない。しかも、集落域のなかでも中心部付近にあたる99－3区・4区での出土量が多く、縁辺部付近の99－5区では極端に出土量が減る傾向がうかがえる。

以下、種類ごとに概要を述べるが、個別の出土地区・遺構・位置等についての特記以外の事項に関しては表4を参照されたい。

b．各区出土

〔土錘〕（3550・3551）　ともに管状土錘である。（3550）は外面にハケを施されている。重量は140gで、完形であれば300g前後と思われる。99－4区の包含層からの出土。生駒山西麓産胎土。（3551）は、小破片で重量は10gである。99－3区の包含層からの出土。生駒山西麓産胎土か。

〔紡錘車〕（3552・3553）　（3552）は全体の約半分に焼成時の黒斑がみられる。重量は42gである。99－3区の包含層からの出土。（3553）は裏面にナデを施されており、重量は40gである。99－3区の溝S03380上層からの出土。2個体とも生駒山西麓産胎土。

〔土器片転用円盤〕（3554～3590）　（3554～3559）は土器片転用円盤の有孔（穴）品である。穿孔は中央部に1箇所施されている。（3554・3555）は破片で、側面を打ち欠いたままでなく、調整を施してある。（3554）は表面にヘラミガキ、裏面にはナデが施されている。重量は13gで、完形であれば30g前後と思われる。（3555）は両面ともナデが施されている。重量は2gで、完形であれば10g前後と思われる。（3556～3558）はほぼ全容がわかる個体で、穿孔は両側から施されている。（3559）は土器の表面部からの穿孔を途中で止めている。（3556）は表面にヘラミガキ、裏面にハケが施されている。重量は13gである。（3557）は両面ともに調整は不明瞭である。重量は8gである。（3558）は表面にヘラミガキが施されているが、裏面の調整は不明瞭である。重量は12gである。（3559）は両面ともハケが施され、重量は5gである。（3554）は、99－3区の小形土坑S03557、他は同区の包含層からの出土。

（3560～3590）は土器片転用円盤の無孔品である。大きさをみると、直径が3cm前後、5cm前後、6cm以上の3グループに分けることができる。最も多くみられるのは直径が約5cm、厚さが0.7cmのものである。表面はハケやヘラミガキ、裏面はナデを施されたものが転用される傾向にある。（3573）は裏面に煤が付着している。（3581）は表面に中央部まで切り込んだような抉りが入っている。幅1mm程度で焼成前についたものと思われる。これらは、99－3区～5区の遺構や包含層からの出土。

〔焼粘土塊〕（3591～3628）　焼成を受けた粘土塊である。（3611）は、裏面が凹状に窪んでおり、へ

ラケズリもしくは剥ぎ取りの痕と考えられる。(3615) も、表面の一部と裏面に意図的に施されたと考えられる凹みがある。これらは、99－3区～5区の遺構や包含層からの出土。なお、胎土に関して言及しておくと、(3628) のみが生駒山西麓産のもので、砂粒を一定程度含有する。一方、数多くある他の焼粘土塊では、生駒山西麓産の個体は全く確認できず、また、それらでは砂粒等の混入が比較的少ない均質的な粘土が素材となっている。これらのことから、(3628) は、単に土器片等が摩滅をうけ、焼粘土塊状を呈したものである可能性があるが、一応、本項に加えておいた。

c．小結

以上の資料は、土器の項目で述べたように、前期前半（新相）の土器群に共伴ないしその可能性が高い個体である。

それらのうち、各2点みられた土錘と紡錘車に関しては、西日本各地域の初現的な弥生前期集落からやや特徴的に出土する傾向がみられ、本遺跡でも従前例（東大阪市文化財協会1999c、東大阪市教育委員会2002）に加えて類例を増加させたことになる。特に、大阪湾周辺部の八尾市田井中遺跡（大阪府文化財調査研究センター1997、大阪府教委1983・1994・1995・1996a・1997・1998）、茨木市新庄遺跡（大阪府教育委員会1996b）等でも確認されており、この時期における特徴を示している。

焼粘土塊に関しては、明確な意図のもとで製作された製品というより、偶発的な契機で形成された遺物といえる。そのような成因のため、従来の発掘調査ではあまり意識的に取りあげられて報告されることが少ない資料にあたるが、今回は100点近く確認できた資料のうち約半数を提示しておいた。実測図面を掲載していない個体を含め、それらの胎土については、焼粘土塊としては疑問が残る1点（3628）以外は、生駒山西麓産ではなく、おおむね淡灰褐～淡黄橙色を呈し、砂粒（もしくは意図的な混和材）をほとんど含まない均質的な粘土である。それらがたまたま焼成を受けたものとなっている。単純に想定するならば、これらの粘土は本遺跡の近辺で採取できるものと考えてよいであろう。また、本遺跡で土器製作がおこなわれる場合、それらに類似した素材粘土が利用されると想定するのが自然であろう。これに関連して注意されるのが、本遺跡で出土した弥生前期土器の約85%が生駒山西麓産胎土で製作されている実態である。このような、土器に生駒山西麓産胎土が高比率を占める現象に対する解釈として、生駒山西麓産胎土が本遺跡にまで運ばれてきて、すなわち土器胎土の移動（搬入）を想定しての、土器製作がおこなわれたと言及されることがある。今回の焼粘土塊の胎土観察等において、原則的に生駒山西麓産胎土が全くみられなかったことから、このような胎土移動は想定しにくいとするべき一証左になるかもしれないであろう。胎土移動があったなら、確実な生駒山西麓産胎土の焼土塊が少しぐらいは出土するはずと考えられるからである。

（宮田・秋山）

表3　弥生時代前期土製品分類表

	地区	種類								計
		土錘	土製紡錘車	土器片転用有孔円盤	土器片転用円盤	焼粘土塊	緑玉	土人形	その他、不明	
実測遺物	99-3	1	2	6	12	17				38
	99-4	1			9	20				30
	99-5				10	1				11
非実測遺物	99-3				5	35				40
	99-4				8	22				30
	99-5					2				2
計		2	2	6	44	97				151

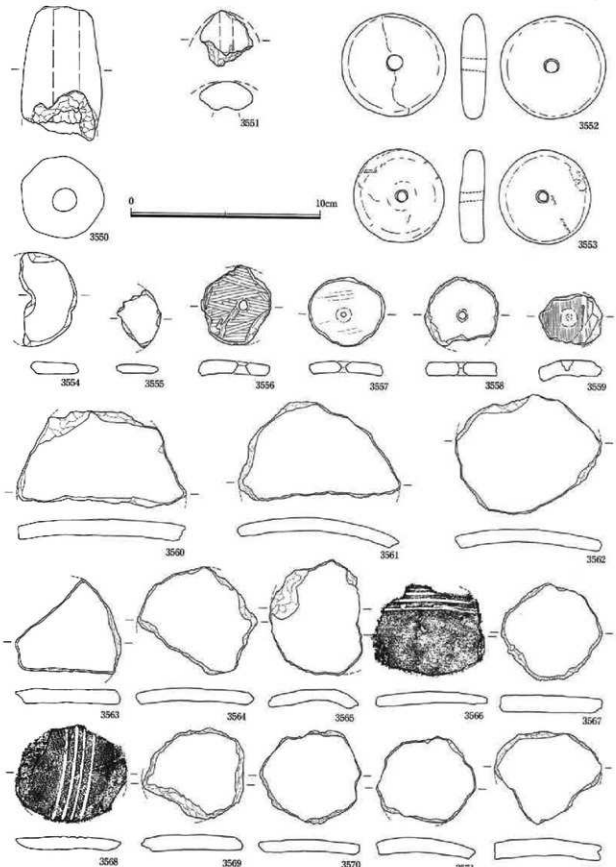


図61　弥生時代前期土製品実測図－1（99－3・4・5区：遺構・包含層出土）

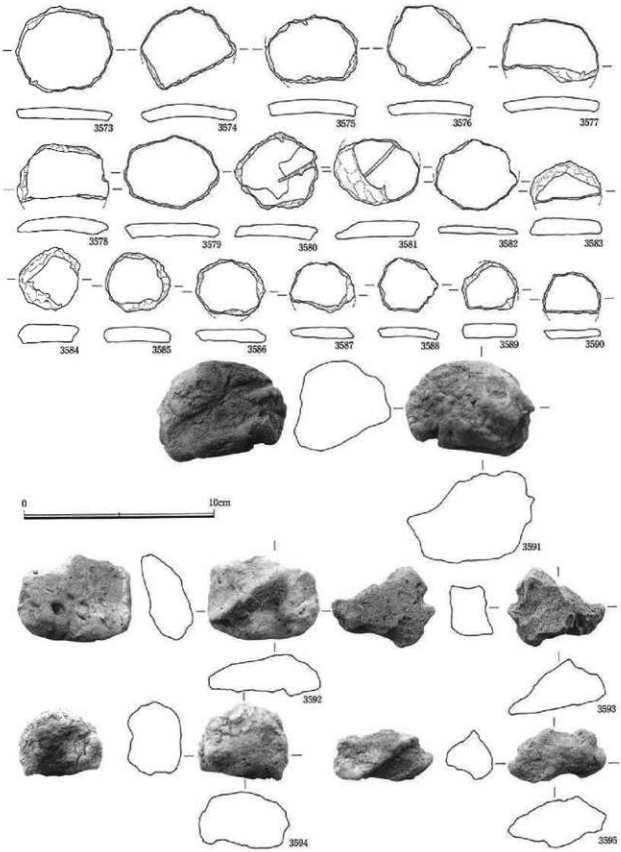


図62　弥生時代前期土製品実測図－2（99－3・4・5区：遺構・包含層出土）

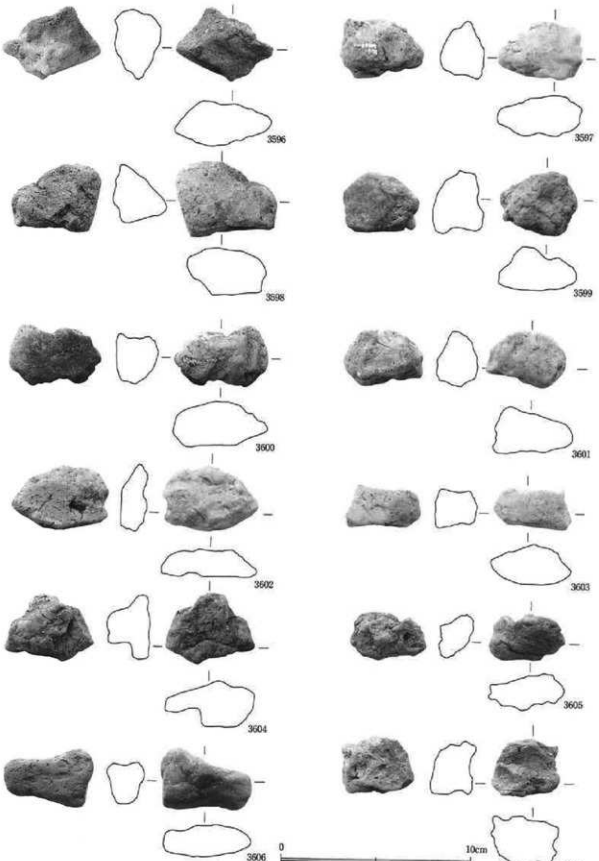


図63　弥生時代前期土製品実測図－3（99－3・4・5区：遺構・包含層出土）

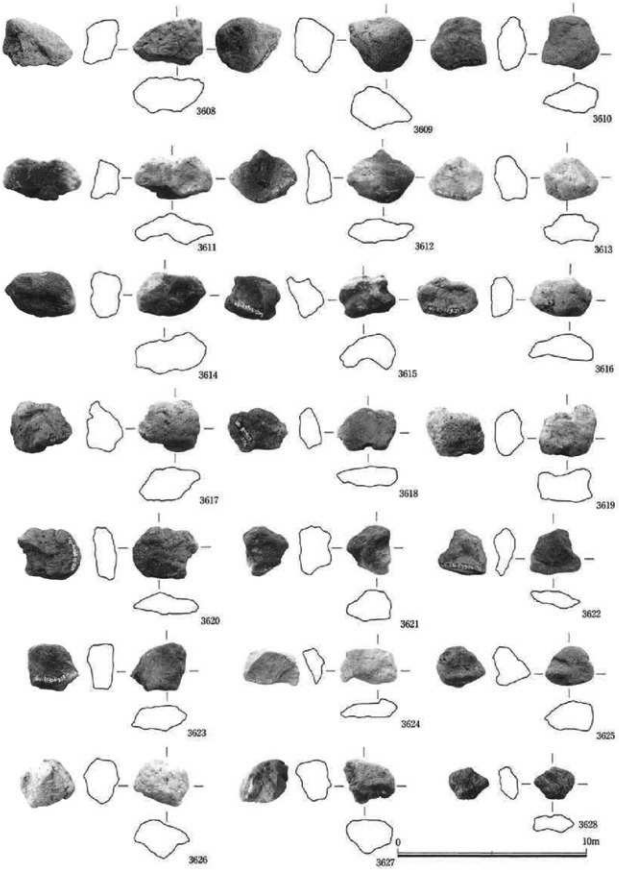


図64　弥生時代前期土製品実測図－4（99－3・4区：遺構・包含層出土）

表4　弥生時代前期土製品観察表

（　）は復原推定重量

挿図番号	遺物番号	写真番号	調査区	出土遺構・層位	器種	法量 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	直径(cm)	重量(g)	備考
61	3550	110	99-4	第26・25面間	土錘	6.7	4.1	1.8		140	
61	3551	110	99-3	第21・20面間	土錘	3.0	2.8	1.3		10	
61	3552	110	99-3	弥生前期包含層3層	土製紡錘車	5.5	5.4	1.3		40~42	全体に煤が付着
61	3553	110	99-3	S03380上層	土製紡錘車	5.0	4.8	1.3		40	
61	3554	110	99-3	第21面S03357 第21・20面S03357	土器片転用有孔円盤	5.0	2.5	0.6		12~15 (24~30)	側面は調整が施されている 2片を接合
61	3555	110	99-3	第21・20面間	土器片転用有孔円盤	3.1	2.3	0.5		1~2 (3~6)	側面は調整が施されている
61	3556	110	99-3	第21・20面間	土器片転用有孔円盤	3.7	4.1	0.8		10 (10~15)	両側から穿孔
61	3557	110	99-3	弥生前期包含層1層	土器片転用有孔円盤	4.1	3.8	0.6		5~6	両側から穿孔
61	3558	110	99-3	第21・20面間	土器片転用有孔円盤	3.4	3.9	0.7		10 (10~15)	穿孔は両側から？
61	3559	110	99-3	弥生前期包含層1層	土器片転用有孔円盤	3.4	2.8	0.8		5	片側のみ穿孔
61	3560		99-5	第26面S05312	土器片転用円盤	4.8	8.9	0.9			
61	3561		99-4	第25・24面間	土器片転用円盤	5.0	8.6	0.7			
61	3562		99-5	第24・23面間	土器片転用円盤	6.3	7.8	0.7			
61	3563		99-3	第21面精査	土器片転用円盤	4.9	5.8	0.8			推定復原径8.8
61	3564	110	99-5	第24面S05290	土器片転用円盤	5.6	6.3	0.7			推定復原径8.0
61	3565		99-4	第25・24面間	土器片転用円盤	6.1	4.8	0.7			推定復原径7.2
61	3566	110	99-5	側溝	土器片転用円盤	4.75	5.9	0.6			
61	3567	110	99-3	第22面S03380	土器片転用円盤	5.2	5.3	0.9			
61	3568	110	99-5	第24面	土器片転用円盤	5.2	5.6	0.7			
61	3569		99-4	第24面	土器片転用円盤	4.9	5.4	0.8			
61	3570	110	99-3	第22面S03350	土器片転用円盤	5.0	5.4	0.7			
61	3571	110	99-3	第22面S03380	土器片転用円盤	4.6	5.3	0.8			
61	3572		99-4	第26・25面間	土器片転用円盤	4.9	6.7	0.9			
62	3573	110	99-4	第24・23面間S04120	土器片転用円盤	4.5	5.1	0.6			内面に煤が付着
62	3574		99-5	第24・23面間	土器片転用円盤	4.0	5.1	0.7			
62	3575	110	99-5	第25・24面間	土器片転用円盤	3.6	4.8	0.7			
62	3576	110	99-3	第22面S03380	土器片転用円盤	4.3	4.6	0.7			
62	3577		99-5	第24面S05290	土器片転用円盤	3.2	5.2	0.6			
62	3578		99-3	弥生前期包含層1層	土器片転用円盤	2.9	4.6	0.7			
62	3579	110	99-5	第24面S05290	土器片転用円盤	3.9	5.0	0.7			
62	3580		99-3	第23面精査	土器片転用円盤	4.0	4.0	0.7			
62	3581		99-4	第24・23面間	土器片転用円盤	3.5	4.6	0.8			
62	3582		99-4	第24・23面間	土器片転用円盤	3.7	4.3	0.4			
62	3583		99-3	第22面S03380	土器片転用円盤	2.0	3.8	0.9			推定復原径4.0
62	3584		99-4	第22・21面間	土器片転用円盤	3.4	3.2	1.0			
62	3585	110	99-3	第22・21面間	土器片転用円盤	3.6	3.5	0.8			
62	3586	110	99-3	第22・21面間	土器片転用円盤	2.9	3.7	0.7			
62	3587		99-4	第25・24面間	土器片転用円盤	2.7	3.4	0.6			
62	3588		99-3	第20、21面S03320	土器片転用円盤	2.8	3.2	0.8			
62	3589		99-3	第22・21面間	土器片転用円盤	2.5	3.0	0.7			
62	3590	110	99-5	第19・18面S05240	土器片転用円盤	2.2	3.0	0.5			
62	3591		99-3	第21・20面S03350	焼粘土塊	5.1	6.8	4.8			
62	3592		99-4	第24・23面間	焼粘土塊	4.6	5.9	2.3			
62	3593		99-4	第24面	焼粘土塊	4.4	5.2	2.4			スサ入り
62	3594		99-4	第25・24面間	焼粘土塊	4.0	4.5	2.9			スサ入り
62	3595		99-4	第25・24面間	焼粘土塊	2.8	5.3	2.5			
63	3596		99-4	第22面	焼粘土塊	3.3	5.1	2.4			
63	3597		99-6	第24・23面間	焼粘土塊	3.0	4.4	2.3			
63	3598		99-4	第25面S04190	焼粘土塊	3.5	4.5	2.7			スサ入り
63	3599		99-3	第21・20面間	焼粘土塊	3.4	4.1	2.7			
63	3600		99-3	第21・20面間	焼粘土塊	3.2	4.9	2.3			
63	3601		99-4	第24・23面間	焼粘土塊	3.0	4.2	2.5			スサ入り
63	3602		99-4	第25・24面間	焼粘土塊	3.5	5.0	1.4			スサ入り
63	3603		99-4	第25・24面間	焼粘土塊	2.1	4.2	2.1			
63	3604		99-3	第22面S03380	焼粘土塊	3.5	4.7	2.4			スサ入り
63	3605		99-4	第25・24面間	焼粘土塊	2.5	4.0	1.8			
63	3606		99-3	第22面S03380	焼粘土塊	3.2	4.6	2.0			
63	3607		99-4	第23・22面間	焼粘土塊	3.1	3.6	2.6			
64	3608		99-4	第25・24面間	焼粘土塊	2.5	3.8	1.9			

（表４つづき）

特図番号	遺物番号	写真番号	調査区	出土遺構・層位	器種	法量					備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	現径(cm)	重量(g)	
64	3609		99-3	第21-20面間	焼粘土塊	2.9	3.3	2.2			
64	3610		99-3	第20～16面間	焼粘土塊	2.9	3.1	1.6			
64	3611		99-4	第24面	焼粘土塊	2.3	4.1	1.4			
64	3612		99-4	第24面	焼粘土塊	2.9	3.9	1.4			
64	3613		99-3	第21面S03371	焼粘土塊	2.4	2.9	1.7			
64	3614		99-3	第21面精査	焼粘土塊	2.4	3.7	1.9			スサ入り
64	3615		99-4	第24面	焼粘土塊	2.2	3.0	1.8			
64	3616		99-3	弥生前期包含層3層	焼粘土塊	2.1	3.3	1.4			スサ入り
64	3617		99-3	弥生前期包含層1層	焼粘土塊	2.7	3.3	1.6			
64	3618		99-3	第21面	焼粘土塊	2.2	3.2	1.1			
64	3619		99-3	第20～16面間	焼粘土塊	2.8	2.8	1.7			スサ入り
64	3620		99-4	第24面S04161	焼粘土塊	2.8	3.5	1.1			スサ入り
64	3621		99-3	第20面S03328	焼粘土塊	2.6	2.3	1.6			
64	3622		99-4	第25～24面間	焼粘土塊	2.5	3.1	1.1			
64	3623		99-4	第24-23面間	焼粘土塊	2.5	2.9	1.4			
64	3624		99-4	第24-23面間	焼粘土塊	1.9	3.0	1.0			
64	3625		99-3	第23面S03380	焼粘土塊	2.1	2.6	1.7			
64	3626		99-4	第25-24面間	焼粘土塊	2.2	2.9	1.9			スサ入り
64	3627		99-3	第21-20面間	焼粘土塊	3.4	2.5	1.8			
64	3628		99-3	弥生前期包含層1層	焼粘土塊	1.7	2.1	1.0			唯一の生駒山西麓産胎土、土器片かも

（３）**木製品**（図65、表36～38、写真図版113）

１）各調査区の出土品

ａ．出土状況ほか

弥生前期に属する木製品は、集落域の中央部にあたる99－３区・４区の主に土坑やピット（柱穴）から出土している。各資料の樹種に関しては、後掲の表36～38を参照されたい。

ｂ．各区出土

〔農具〕（3629～3631）　（3629）は、平面形が縦長の長方形を呈する広鍬である。長さ30.0cm、復原最大幅19.8cmをはかる。頭部はやや丸みを帯び、側面には５つの小さな突起をもつ。柄孔は、身の中央よりも上に穿たれ、そのやや下方で緩くくびれる。現状では削られ遺存していないものの、孔の周囲は紡錘形に高く隆起していたものと考えられる。柄孔の角度から柄は鋭角に着柄された推定される。また、その左右には逆三角形の孔があけられている。これは、泥除装着のためのものと思われる。縦断面にみられるように、全体的に前面に反った形に作られている。下半には削り痕が認められる。なお、本例の断片は国立歴史民俗博物館による炭素14年代測定試料に供出中である（測定未着手）。（3630）は、（3629）にともなう柄の断片で、断面径2.5cm、残存長21.0cmをはかる。ともに99－４区の第25面土坑Ｓ04184からの出土。

（3631）は、柄孔の周囲に紡錘形の隆起をもつ広鍬であるが、（3629）に比べ隆起の幅が広く、長さが短い。残存長22.0cm、残存幅14.5cm。孔の角度から鋭角に着柄されていたものと思われる。隆起の斜め下に径7.5mm程度の孔が穿たれているが、機能は不明である。99－３区の第23面ピットＳ03396からの出土。本遺構は、竪穴住居等の柱穴になる可能性があり、その底面で礎盤として転用されていたようである。

〔用途不明品〕（3632）　板状に加工されている。99－３区の第23面ピットＳ03453からの出土。上記の（3631）と同じように礎板として供されていた。なお、本例は国立歴史民俗博物館による炭素14年代測定試料に供出中である（測定未着手）。

ｃ．小結

以上の資料は、土器の項目で述べたように、前期前半（新相）の土器群に共伴ないしその可能性が高

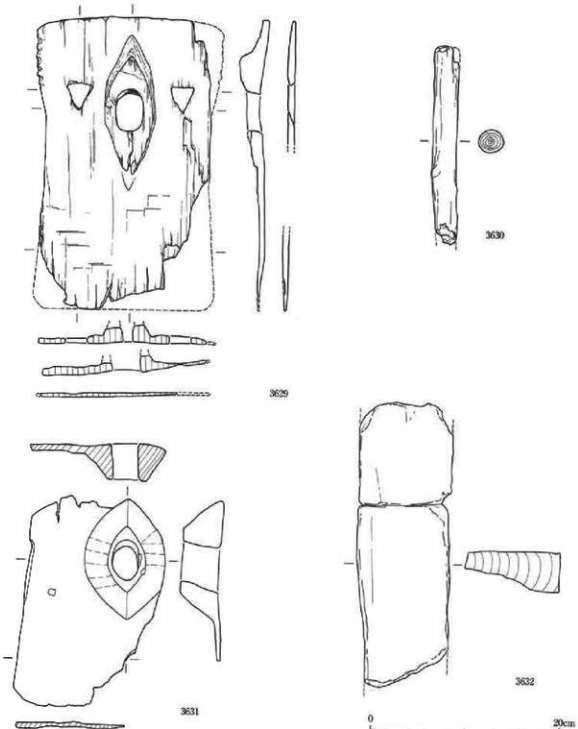


図65　弥生時代前期木製品実測図（99－3・4区：遺構出土）

いものである。

確実に機能が判明する製品では、鍬が2点出土している。特に（3629）のように柄孔を挟む位置に逆三角形の穿孔を有したり、上半の側面に突起を作り出したりするなどの要素は、前期後半を主体とする時期に特徴的なものである（中原計氏ご教示）が、本例は古い部類に属する。このような特徴をもつ木製鍬は、西日本や東海地方で数例確認されており、近畿への本格的な水稲農耕の伝播における経路や様相、さらにはその後の展開を考えるうえで重要であろう。なお、今回報告した以外の雑木類等の樹種鑑定やそれに関する考察は、後掲の第7章第9節を参照されたい。

（中川・秋山）

（4）石製品（図66～72、表5～7、写真図版119～121）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

弥生前期に属する石製品は、製品（トゥール類）、製作途中品、剥片類を含め、表5に示したように87点の出土を確認した。その内訳は、石錐、スクレイパー、楔形石器、石斧、砥石などである。

それらの出土調査区については、2点のサヌカイト剥片が水田域に相当する01－2区から出土しているが、他の85点は、集落域のうち99－3区・4区からの出土である。また、当時の低地部域にあたる99－6区・7区からは全く確認できなかった。したがって、集落域、なかでもその中心部に圧倒的に集中するといえる。

以下では、図示した遺物を中心に、それぞれについて詳細にみていくが、図示した以外の資料を含め、個別資料の出土遺構・位置、大きさ、重さ、石材等に関しては表6・7に示したので、特記しないかぎりそれを参照されたい。

また、石製品の説明をおこなう際、各面の名称は次のとおりとする。主剥離面が明らかな場合は、主剥離面を右側に配して裏面、左側を表面と称する。主剥離面が残置していない場合は、配した位置のとおり右面・左面と称する。砥石などの場合は、正位置を表面、その裏側を裏面、側面は右面・左面とする。各器種における分類名称は、『史跡池上曽根99』（秋山2004b）に示したものに準拠する。

b．各区出土

〔石錐〕（3633）　「V型」に属する。小形の横長剥片を素材とし、左側縁には表裏両面より調整が施され、右側縁のそれは裏面からの急斜度調整のみである。これらの調整により刃部を尖鋭に作出していることから石錐の可能性が高いと考えられる。上部を欠損する。

〔スクレイパー〕（3634～3636）　（3634）は、幅広の剥片を素材とする。ほぼ全周に調整がみられる。とくに右側縁および端部では、表裏両面から調整が施されている。また、右側縁の稜線は摩滅しており、使用による可能性も考えられる。（3635）は、自然面打面の幅広剥片を素材とする。右側縁および端部には表裏両面より調整が施されている。右側縁の調整は平坦であり、端部のそれは連続する微細剥離痕である。（3636）は、幅広の剥片を素材とする。打面側では表裏両面より平坦な剥離痕がみられる。特に、打面に接する稜線には顕著な潰れ痕が認められる。また、表面の一部にはポジティブ面が残ることから、剥片素材石核から剥離されたものと考えられる。

〔楔形石器〕（3637～3644）　（3637・3639・3640）は上端が潰れ、下端が折損している。（3638）は、反対に上端が折損し、下端が潰れている。いずれも剥片素材である。（3637）の打面に一部には自然面が残る。

（3641～3644）は楔形石器の削片。（3641・3643・3644）は上端が顕著に潰れている。（3642）は上下端とも折損している。（3643・3644）の打面には自然面が残ることから、原石に近い状態から剥離したものと考えられる。ともに非常に小形である。

〔剥片〕（3645～3648）　（3645）の打面および側縁の折れは剥離時の衝撃によるものであろうか。非常に石理がつよい。（3646）は打面と裏面のなす角度が鈍角であること、さらに裏面が外湾していることから、石器の調整剥片の可能性も考えられる。（3647・3648）は、表面がポジティブ面であることから、ともに剥片素材石核から剥離された可能性が高い。とくに、（3648）は大形の剥片であることから、石核の大きさもうかがえるであろう。（3646～3648）の一部には自然面が残る。

〔石核〕(3649)　小形でやや薄手の亜角礫を素材とする。左面には大形の剥離面が1枚、右面には前者と直交する剥離軸の剥離面がみられる。大形剥離面の打面およびそれと対をなす石核端部に潰れ痕が認められることから、両極打法により剥片が剥離された可能性が高い。

〔石斧〕(3650～3653)　(3650) は太型蛤刃石斧の完形品。「長台形塁」に属する。長さ15.4cm、重さ750gをはかる。刃先には微細な剥離痕がみられ、使用痕の可能性も考えられる。(3651) は太型蛤刃石斧の刃部片。非常に丁寧に研磨されている。(3650) とは石材が異なる。(3652・3653) は石斧の破片。(3652) は扁平両刃石斧か。上下端に刃部が残存しているが、欠損が多いため幅・厚さなどは判然としない。元来の形状などは不明といわざるをえないが、非常に小形である。(3653) は角柱状石斧の破片であろうか。残置する面は丁寧に研磨が施されている。

〔円盤状品〕(3654)　研磨により平面形はほぼ円形を呈し、厚さも均一となっている。おそらく紡錘車の製作途中品であろう。

〔砥石〕(3655～3660)　(3655) は、半分以上を折損しているため詳細は不明である。擦痕がみられることから砥石として用いられた可能性が高い。また、端部に敲打痕が認められることから敲石の用途も考えられる。(3656) は、上部を折損するが、それ以外の各面には擦痕が認められる。表面には、溝状の凹みが明瞭に確認でき、凹形を呈する。また、下面には敲打痕が認められることから敲石のような用途も推定される。(3660) は大形品。折損部分が多くみられるが表面および右側面には砥面が残る。(3657～3659) は砥石片。(3657) は小形の河原石を素材とする。(3657・3660) は硬質であることから荒砥と考えられる。

〔片岩片〕(3661～3664)　いずれも破片。(3661・3662) は緑泥片岩、(3663) は絹雲母片岩であり、前者は石棒断片の可能性がある。一方、後者はやや小形ではあるが石鎌の製作途中品の可能性も考えられる（若林幸子氏ご教示）が、判然としない。

〔投弾状品〕(3665～3682)　99－3区の第21・20面集石遺構S03320とした遺構では、計20点の自然礫が一箇所にまとまって出土しており、それら礫における類似した形状や大きさ、出土状況等から、投弾の可能性が考えられる。類似品は近接部等からも2点出土している。そのうち計測可能なもの18点を図示した。詳細は表7のとおりである。その大きさをみると、長さは最大値15.3cm、最小値7.8cm、平均値11.3cm、幅は最大値7.3cm、最小値4.3cm、平均値6.1cm、厚さは最大値5.4cm、最小値3.4cm、平均値4.5cmとなる。また、重量は、最大のものが512.4g、平均すると370.8gをはかる。一般的に特製品の石製・土製投弾と認定されている製品に比べて、その大きさや重さはいずれもまさり、形態なども多様である。しかし、掌中におさめ投擲するには適した形状と重さを備えているので、投弾状品としてあえて取りあげた。

表5　弥生時代前期石製品組成表

	前期
石鏃	0
石剣	0
石錐	1
スクレイパー	3
楔形石器	15
二次加工ある剥片	0
微細剥離痕ある剥片	0
剥片	9
微細剥片	20
石核	1
石庖丁	0
円盤状品	1
石斧	4
砥石	7
敲石	0
投弾状品	22
その他	4
計	87

c．小結

以上の資料は、土器の項目で述べたように、前期前半（新相）の土器群に共伴ないしその可能性が高い資料である。

さて、前期に属する石製品の内訳は表5に示すとおりである。トゥール類が非常に少なく、それに比して微細剥片の割合が多い

表6　弥生時代前期石製品観察表－1

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	最大長(cm)	折損長(cm)	最大幅(cm)	折損幅(cm)	最大厚(cm)	折損厚(cm)	重量(g)	石材	産地	自然	形状	打面	折損	時期	備考
119	66	3633	99-3	南壁	石鏃		2.40		1.70	0.50		1.6	Sn		無		無	有	前	
119	66	3634	99-3	S03380下層(砂)	スクレイパー	4.00		5.80		0.90		19.7	Sn	金山	無		無	有	前	
119	66	3635	99-3	S03371中層	スクレイパー	4.00		4.80		0.90		16.5	Sn		有	平坦	自	有	前	
119	66	3636	99-3	S03350	スクレイパー		2.50		4.20	0.90		7.7	Sn	金山	無		単	有	前	一部被線摩滅
119	66	3637	99-3	S03380下層	楔形石器	3.99			2.60	0.60		5.7	Sn	金山	無		無	有	前	
119	66	3638	99-4	第25・24面間	楔形石器		2.30		2.60	0.60		3.0	Sn	金山	無		無	有	前	
	66	3639	99-3	S03380下層	楔形石器		3.00	2.20		0.70		6.1	Sn	金山	有	すじ	自	有	前	
	66	3640	99-3	S03395	楔形石器		2.70		1.60		0.90	3.3	Sn		無		無	有	前	
119	66	3641	99-3	S03380下層	楔形石器		3.40	2.30		0.80		2.9	Sn	金山	無		無	有	前	
	66	3642	99-3	S03371中層	楔形石器		1.20		3.32	0.50		—	Sn	金山					前	上下端を欠損
	66	3643	99-4	S04201	楔形石器		1.60		2.40	0.70		2.6	Sn		有	平坦	自	有	前	
	66	3644	99-3	S03320	楔形石器	2.16		1.20		0.60		0.9	Sn		有	平坦	自	有	前	
119	66	3645	99-3	包含層2A層	Fl		3.10		4.50	0.60		5.1	Sn	金山	無		無	有	前	
	66	3646	01-2	第16・15面間	Fl	2.30		3.00		0.80		2.1	Sn		有	すじ	単	無	前	調整剥片の可能性有
	66	3647	99-3	第21・20面間	Fl	3.20			2.50	0.40		3.2	Sn	金山	有				前	
119	66	3648	99-4	S04198(S04251)	Fl	4.30		6.30		0.70		14.8	Sn	金山	有	すじ	無	無	前	
119	67	3649	99-4	S04121	Dr	6.50		5.90		2.20		64.5	Sn		有	凹凸・爪	無	無	前	
120	67	3650	99-4	第26・25面間	石斧		15.40	6.90		4.50		750.0	粘板					有	前	大型蛤刃石斧
120	67	3651	99-3	S03371下層	石斧片		3.80		4.60		0.90	11.8	安山岩		有			有	前	磨製石斧刃部片
	67	3652	99-4	S04198(S04251)	石斧片	3.40			1.80		0.50	2.6	硅化木？					有	前	小形方柱状石斧？
	67	3653	99-3	弥生前期包含層1	石斧片		2.50		0.80		0.20	0.6	Sn					有	前	
120	67	3654	99-4	南壁上	円盤状品	5.00		4.90		0.90		40.1	石英片岩		有			無	前	桃緑車の未製品
120	67	3655	99-4	20面以下黒粘層	砥石		3.50		5.50		4.90	105.5	砂岩		有			有	前	
120	68	3656	99-4	第28・25面間	砥石		6.50	4.80		4.60		220.6	砂岩					有	前	
	68	3657	99-3	弥生前期包含層1	砥石		2.80		1.70		1.50	7.7	砂岩						前	被熱
	68	3658	99-3	弥生前期包含層1	砥石		2.40		1.70		1.00	3.8	砂岩						前	被熱
	68	3659	99-4	S04176	砥石		3.50		4.10	2.40		36.9	流紋岩						前	被熱
	68	3660	99-3	S03338	砥石	19.70			8.50	7.10		1350.0	片状頁レイ岩						前	
120	68	3661	99-3	弥生前期包含層1	片岩片		5.80		3.40		1.50	25.8	緑泥片岩						前	石棒破片？
120	68	3662	99-3	弥生前期包含層1	片岩片		3.50		3.50		0.90	8.8	緑泥片岩						前	石棒の可能性有？
120	68	3663	99-3	第21・20面間	片岩片		9.70		2.90	0.90		16.7	鳴雲母片岩						前	石錘の可能性有？
	68	3664	99-3	S03380下層(砂)	片岩片		4.50		2.30	0.60		8.9	滑石片岩						前	磨製垂飾
			99-3	弥生前期包含層1	Ch	1.25		1.60		0.25		0.3	Sn	金山					前	調整剥片の可能性有 固化不可能
			99-3	弥生前期包含層1	楔形石器		1.27		1.02	0.20		0.3	Sn		有				前	固化不可能
			99-3	S03351	Fl		0.88	1.90		0.21		0.4	Sn	金山					前	S03350住居跡内土坑 固化不可能
			99-3	S03371(中層)	楔形石器		3.40		1.30	0.60		2.4	Sn	金山				有	前	固化不可能
			99-3	S03356炉埋土	Ch		1.33		1.75	0.32		0.7	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03356炉埋土	Ch		1.20		2.30	0.23		0.6	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch		0.86	1.25		0.15		0.1	Sn						前	固化不可能

（表6つづき）

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	最大長 (cm)	折損長 (cm)	最大幅 (cm)	折損幅 (cm)	最大厚 (cm)	折損厚 (cm)	重量(g)	石材	産地	自然	形状	打面	折損	時期	備考
			99-3	S03350住居跡	Ch	1.00			0.85	0.20		0.1	Sn						前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	0.72		1.60		0.25		0.2	Sn		有	凹凸			前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	1.21		1.30		0.15		0.2	Sn		有	平			前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	0.92		1.13		0.15		0.2	Sn						前	調整剥片の可能性有 固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch		0.75		0.95	0.10		0.1	Sn						前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	0.90		1.40		0.30		0.3	Sn				自		前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch		0.52		0.90	0.14		-	Sn						前	上下端を欠損 固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	0.44		0.68		0.05		-	Sn		有		点		前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	楔形石器	2.05			0.95	0.28		0.5	Sn	金山	有				前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	楔形石器	1.18			0.98	0.40		0.4	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03350中	Ch		0.70	1.65		0.15			Sn						前	固化不可能
			99-3	S03350中	Ch		0.80	0.88		0.25		0.2	Sn						前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch		0.38		0.84	0.12		0.2	Sn						前	上下端を欠損 固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	0.60		0.90		0.25		-	Sn				単		前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch		0.75		0.55	0.15		0.1	Sn				単		前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	楔形石器		1.60	1.60		0.48		1.0	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	楔形石器		1.20		1.00	0.23		0.3	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch		1.23	2.00		0.38		0.9	Sn	金山			単		前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	1.04		1.25		0.25		0.3	Sn	金山			単		前	固化不可能
			99-3	S03350住居跡	Ch	0.80		0.92		0.17		-	Sn	金山			自		前	固化不可能
			99-3	S03380上層	砥石片														前	被熱 固化不可能
			99-3	S03380下層	楔形石器		3.70		1.80		1.30	6.9	Sn		有	凹凸	無	有	前	砂層 固化不可能
			01-2	弥生前期包含層1	Fl	3.52		3.42		0.73		4.4	Sn	金山	有		自		前	固化不可能
			99-3	S03380中層	Fl		1.80		3.42	0.49		2.3	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03380下層	Fl	2.42		3.23		0.62		3.5	Sn	金山					前	固化不可能
			99-3	S03380下層(砂)	Fl		1.64	4.91		0.54		4.8	Sn	金山					前	固化不可能

＊器種の記号は以下のとおりである。

Fl:剥片 Ch:微細剥片 Cr:石核

＊石材 Sn:サヌカイト

ことがわかる。微細剥片とは最大長２㎝以下の剥片であり、その多くは剥片剥離作業時もしくは石器（トゥール）製作時に生ずるものである。この微細剥片の存在、また、１点のみではあるが、石核が出土していることを考慮するならば、積極的ではないにせよ打製石器製作がおこなわれていたといえるであろう。磨製石器についてみれば、太型蛤刃石斧、紡錘車（製作途中品）、砥石が出土している。また、石器組成よりみた様相をまとめると、いわゆる狩猟具が全く認められない点が特徴としてあげられる。

さらに石材では、サヌカイトにおいて、当地方で一般的な二上山産と推定できるもの以外に、香川県金山産と考えられるサヌカイトが多くみられる（表６）。サヌカイト49点中26点（53.1%）と約半数を占めている。近畿地方（特に大阪湾沿岸部）では、在地の二上山産サヌカイトを全面的に使用するそれまでの状況に対して、弥生時代開始期にかぎり突出して非在地原材である金山産サヌカイトが搬入されており（秋山1999）、今回の集計データもそれに符合する結果となっている。そのうち器種別では楔形石器がもっとも多く金山産が10点（38.5%）ある。微細剥片なども出土していることから、本遺跡における金山産サヌカイトでの石器製作を裏付けるものとなるであろう。

また、４点の片岩片が出土し、うち２点は形状や石材種から石棒の可能性も考えられる。この推定に妥当性があるなら、縄文系呪術具である石棒類や土偶が、当地方では弥生時代になっても残存する特徴（秋山2002ａ～ｃ、同2004a、ほか）と関連して注意される。

なお、弥生前期の打製石器製作の様相の検討に関しては、後掲の第７章第８節を参照されたい。

（手島・秋山）

表７　弥生時代前期石製品観察表－２（投弾状礫）

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	層位名	遺構名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
121	69	3665	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	10.0	6.1	5.4	425.7	頁レイ岩	
121	69	3666	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	11.6	5.8	4.4	345.8	アジライト	
121	69	3667	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	10.3	4.8	4.2	320.3	頁レイ岩	
121	69	3668	99-3	21面上		8.6	5.6	3.9	162.0	ヘグマタイト	
121	69	3669	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	10.2	6.5	5.3	508.2	頁レイ岩	
121	69	3670	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	11.5	6.5	5.1	512.4	頁レイ岩	
121	70	3671	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	12.5	6.9	3.9	430.7	頁レイ岩	
121	70	3672	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	11.9	6.4	3.9	338.3	閃緑岩	
121	70	3673	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	11.3	6.9	4.8	439.0	花崗岩	
121	70	3674	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	9.8	5.9	4.6	344.1	ホルンフェルス	
121	70	3675	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	13.2	7.3	3.9	447.6	閃緑岩	
121	71	3676	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	13.7	5.9	4.0	481.4	ホルンフェルス	
	71	3677	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	13.9	5.6	3.6	325.1	頁レイ岩	
	71	3678	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	8.7	5.6	4.8	330.5	閃緑岩	
	71	3679	99-3	21面上		8.7	4.3	4.8	169.5	閃緑岩	
	71	3680	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	7.8	6.7	5.3	304.3	閃緑岩	
	72	3681	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	14.8	6.0	5.3	439.3	頁レイ岩	
	72	3682	99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320	15.2	6.9	3.4	360.7	閃緑岩	
			99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320						固化不可能
			99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320						固化不可能
			99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320						固化不可能
			99-3	第20-21面(第18面検出)	集石遺構903320						固化不可能

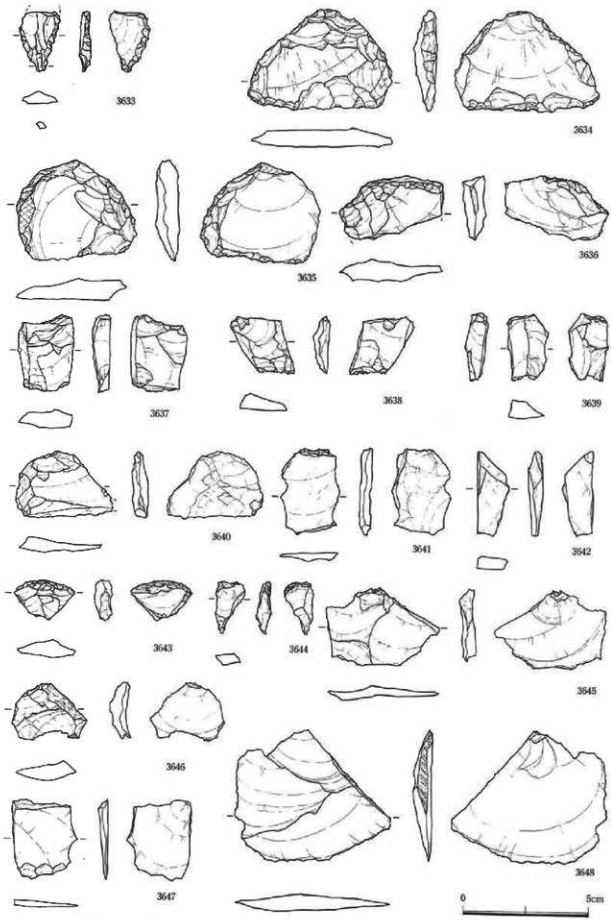


図66　弥生時代前期石製品実測図－１（99－３・４、01－２区：遺構・包含層出土）

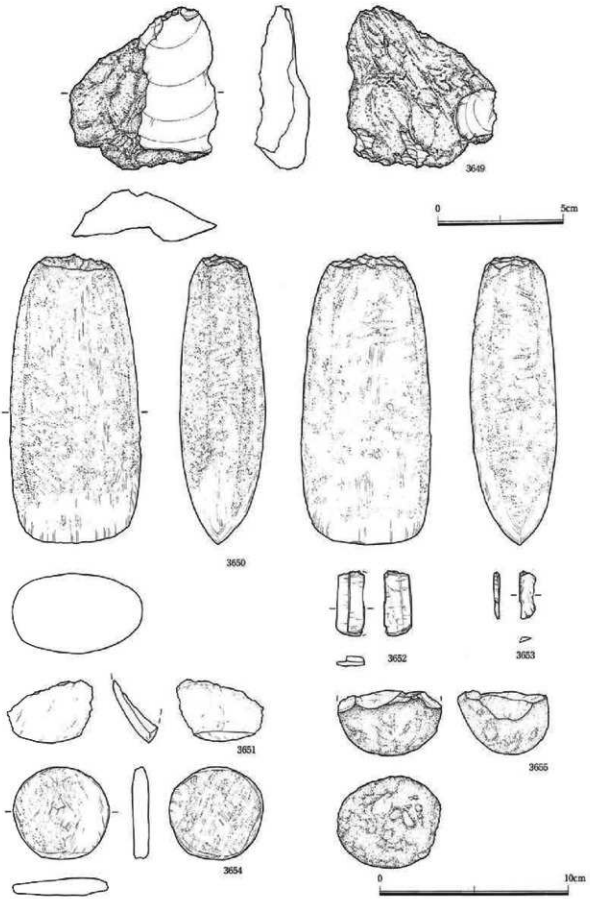


図67　弥生時代前期石製品実測図－２（99－３・４区：遺構・包含層出土）

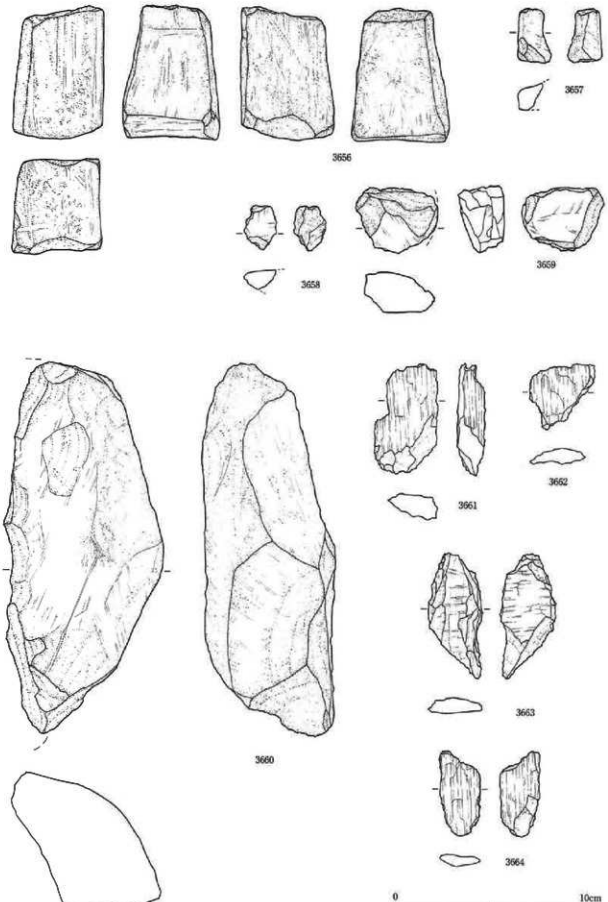


図68　弥生時代前期石製品実測図－3（99－3・4区：包含層出土）

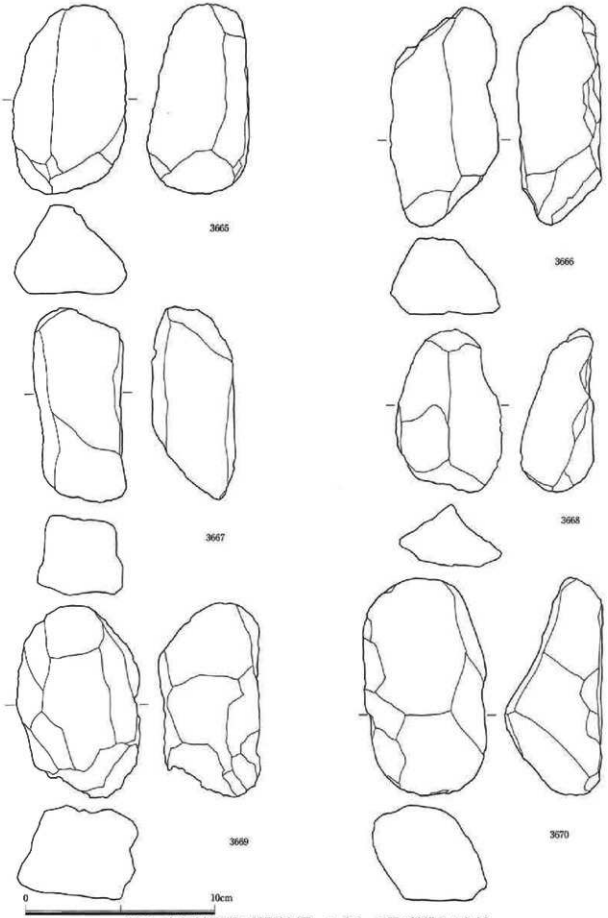


図69　弥生時代前期石製品実測図－４（99－３区：遺構ほか出土）

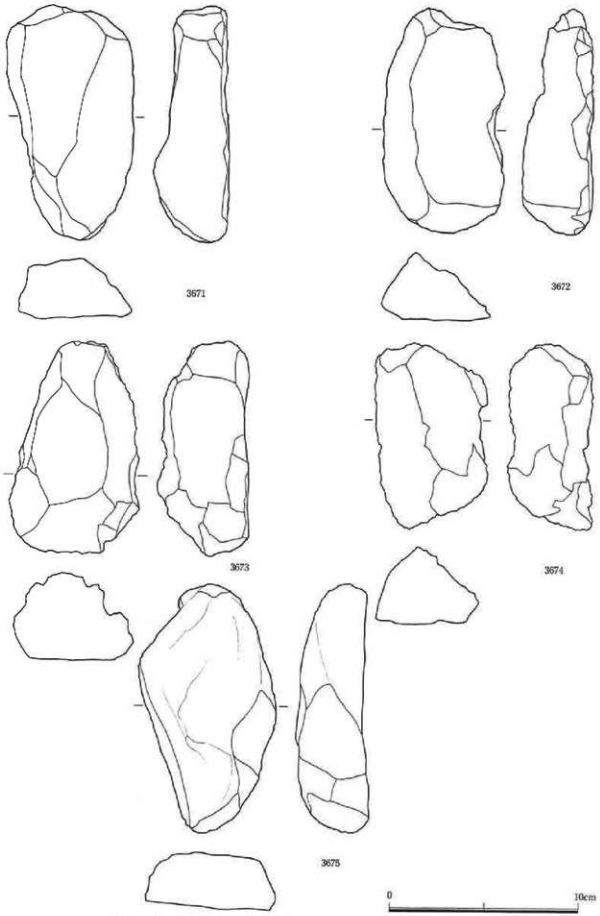


図70　弥生時代前期石製品実測図－5（99－3区：遺構ほか出土）

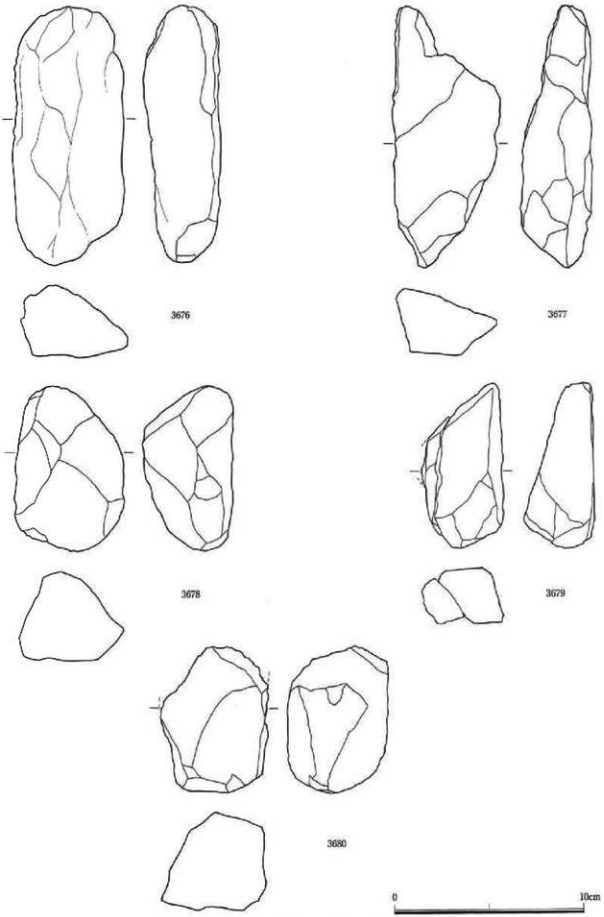


図71　弥生時代前期石製品実測図－6（99－3区：遺構ほか出土）

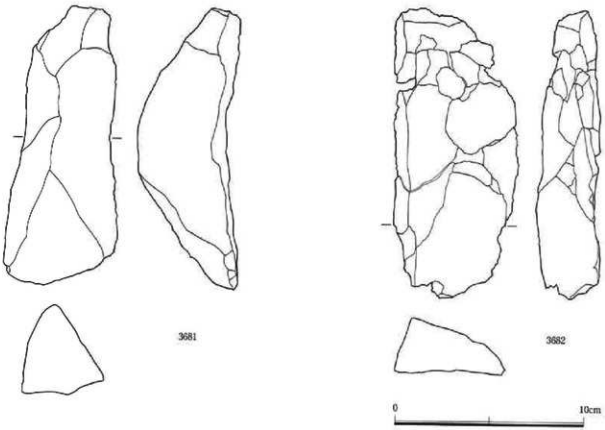


図72　弥生時代前期石製品実測図－７（99－３区：遺構ほか出土）

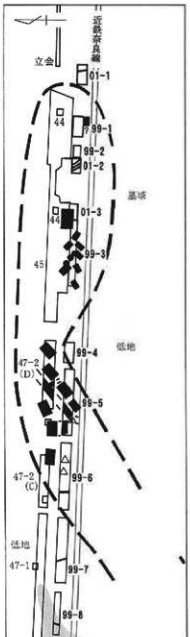


図73　弥生時代中期遺構面全体図

第４節　弥生時代中期の様相

１．遺構面と遺構（図73～126、写真図版８～27）

（１）概要

本調査における弥生時代中期の遺構面は、99－２区を除く全調査区で確認することができた。本来であれば当時期の遺構面は調査区全体に広がっていたものと考えられるが、99－２区では古墳時代前期の流路により調査区全体が浸食を受けており、弥生時代後期以前の遺構面は遺存しない。

弥生時代後期の鍵層となる黒色シルト～粘土層の下面が弥生時代中期遺構面の最上面であり、弥生時代中期後半の遺構はほとんどこの面を指標として把握される。西側にいくとこの層の堆積が厚くなり、２層ないし３層に分層できる。

弥生時代中期土壌化層形成以前は、弥生時代前期の土壌化層を覆うシルトと砂層からなる堆積の繰り返し（互層）である。その後のある段階で大規模な洪水堆積が起こっているが、この洪水が収束して地表面が高くなって土壌化が進み、浸水を免れるようになり人間の活動がこの周辺に及んだと考えられる。地形としては東から西に向かって徐々に低くなり、中央部が低地化し西端では再び高くなる。

弥生時代中期の土地利用状況を見てみると（図73）、東側では01－１区で洪水堆積による砂層の上に溝などの遺構を検出した。

その西では99－３区西側に弥生時代中期前半頃の流路が存在し、その洪水堆積上面において99－１区から99－６区の範囲で方形周溝墓や土器棺墓がつくられており、墓域が展開している様子が明らかとなった。その遺構密度、遺物密度は99－２区、99－４区を除き、多くはないがほぼ均質であった。

墓以外の遺構としては、この墓域の範囲内にあたる01－２区ではほぼ平行する複数の溝を確認している。

墓域の西側では99－７区から99－９区の範囲がやや微低地状の地形となっており、溝が数条確認できるのみで、集落域の末端かあるいは積極的な土地利用はないという様相を呈している。

当調査西端の99－10区では弥生時代中期前半頃に堆積した洪水堆積上に多数の遺構が存在し、この微高地上に集落域の中心が存在していたと考えられる。

また、調査区東端部の01－１区では土坑や溝などが確認できるのみで、墓域はこの範囲まで及んでいない可能性が高い。そこで以下では、99－１区から99－６区までを墓域として捉え、それより東の

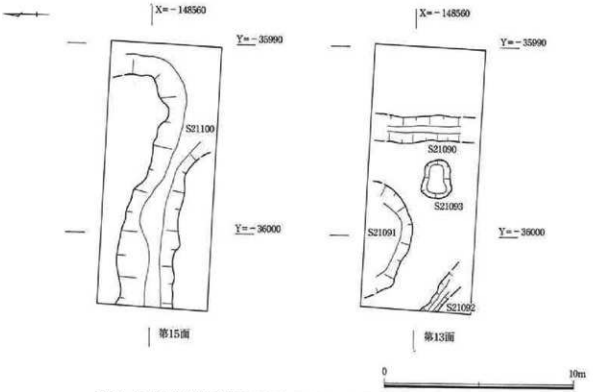


図74　弥生時代中期遺構面平面図－1（01－1区：第15面、第13面）

01－1区は東側遺構と呼称する。また、99－7区から99－9区の低地部も99－10区を中心とする集落域の末端として広くは集落域の中に含めることとする。この3つに設定した小地域を東側遺構から、墓域、集落域の順に説明を行うものとする。

（2）東側遺構の様相

99－10区から99－1区までは弥生時代中期後半の遺構・遺物ともに顕著に認められるが、現道路を挟んだ東側の01－1区になると希薄になる。若干の遺構を検出したが、99－1区のような方形周溝墓に関連性をもつものではない。従って、墓域との境界が99－1区と01－1区の間に存在すると考えられる。

1）01－1区

弥生時代前期から中期のある段階までは、01－1区では人為的な遺構はみられない。灰色シルトと砂層が交互に堆積し、止水と流水を繰り返しながら地表面が上昇していった様子がうかがえる。そして大規模な洪水堆積の起きた遺構面（第15面）と、それによって堆積した砂層上に形成された遺構面（第14面、第13面）、の計3面の遺構面を検出した。第14面では遺構を確認できなかった（図74）。

a．第15面

それまで緩やかな堆積を繰り返していた当区で自然流路の氾濫がみられた。遺物は出土していないが、上下の土層の対比から弥生時代中期の遺構面とした。

〔自然流路Ｓ21100〕　東西方向に主軸をもつ、深さ1ｍ程度の断面U字形を呈する自然流路である。流路内は上層と同一の砂層が埋積し、洪水堆積が本遺構面上を浸食しながら堆積した状況が想定される。遺物は出土していない。

b．第13面

南北を主軸とする溝や大小の土坑などを検出した（図74・83）。

〔溝Ｓ21090・溝Ｓ21092〕　溝Ｓ21090は幅約1.2m、深さ0.3mをはかる南北方向の溝である。調査区

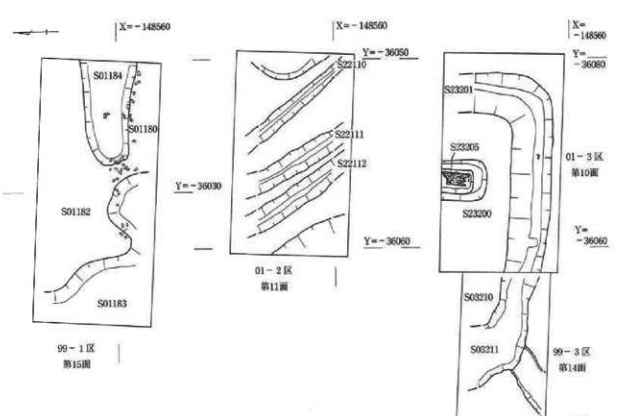


図75　弥生時代中期遺構面平面図－2
（99－1区：第15面、01－2区：第11面、01－3区：第10面、99－3区：第14面）

東半で検出した。溝S21092は調査区南西部で検出した。幅0.5m、深さ0.05mをはかる北西－南東方向にのびる溝である。

〔落ち込みS21091〕　調査区の西半で検出した。直径約6.0m、深さ約0.2mをはかり、円形に広がる。北側は調査区外にのび、南側半分のみを検出した。北側が低くなり、遺構埋土が傾斜するように堆積していることから落ち込み状の遺構と判断した。

〔土坑S21093〕　調査区中央で検出した。南北1.4m、深さ0.1mをはかる不定形の土坑である。上層の黒色シルト層が埋積している。

東側遺構の遺構・包含層ともに遺物をほとんど含まず、正確な時期比定は難しい。また、この東側で検出した遺構の位置づけは、上述のように墓域との関連性を積極的に決定するのはこれだけでは難しく、より東側で弥生時代中期の遺構が検出される結果を待ちたい。

（3）墓域の様相

1）99－1区

本調査区では計2面の遺構面を検出した。弥生時代後期土壌化層（黒色シルト～粘土層）を除去した面が弥生時代中期の遺構面上面に相当する。この第15面で溝で区画される高まりを検出した。第16面は盛り土および土壌化層を除去した後の堆積層上面（粗粒砂上面）で検出したが、遺構は確認できなかった。

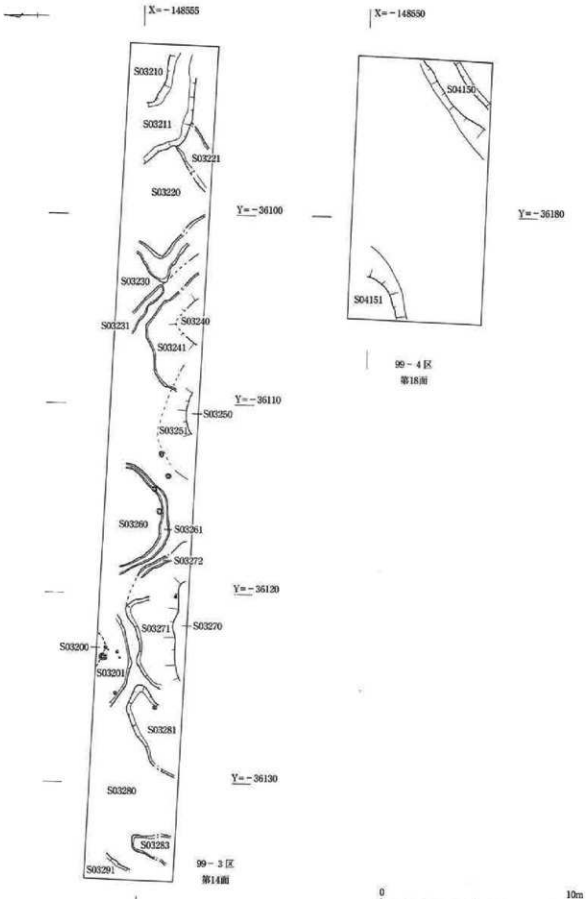


図76　弥生時代中期遺構面平面図－3（99－3区：第14面、99－4区：第18面）

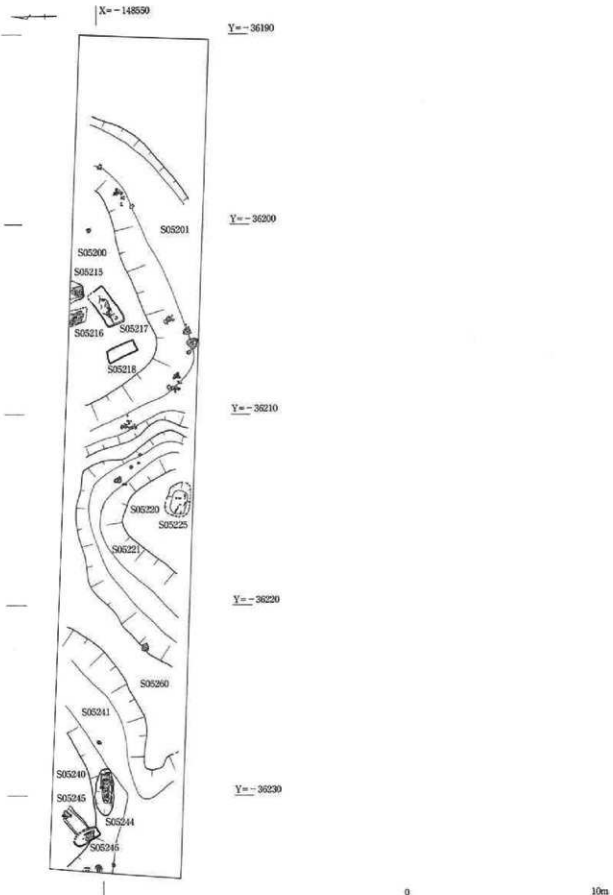


図77　弥生時代中期遺構面平面図－4（99－5区：第19面）

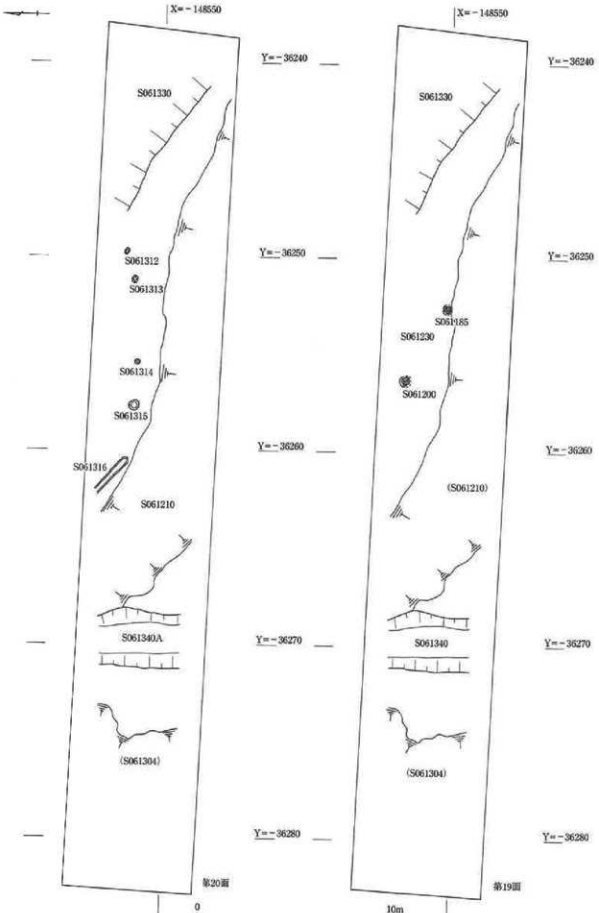


図78　弥生時代中期遺構面平面図－5（99－6区：第20面、第19面）

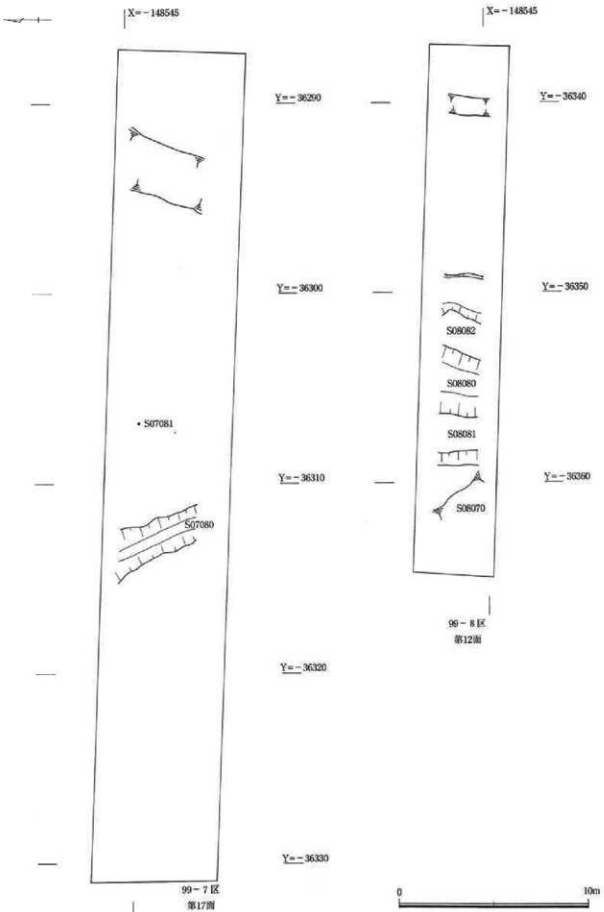


図79　弥生時代中期遺構面平面図－6（99－7区：第17面、99－8区：第12面）

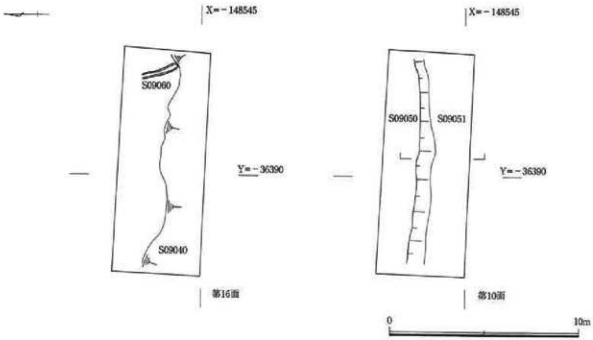


図80　弥生時代中期遺構面平面図－7（99－9区：第16面、第10面）

a．第15面

東から東西方向にのびる溝S01184と南西部に位置する落ち込みS01183、それらによって区画される高まりS01182・S01180を検出した。高まりはシルトを多く含み、人為的な盛り土と考えられる。高まりS01180と同S01182の間、溝S01184のとぎれる部分では東西方向に人の足跡も検出された（図75）。また、溝S01184内と調査区北西隅の側溝から穿孔をもつ供献土器と思われる高杯、広口壺が各1個体、ほぼ完存する状態で出土した。

これらのことから高まりのS01182あるいはS01180はS01183・S01184を周溝とする方形周溝墓となる可能性が高い。しかし、盛り土の状況や主体部の有無を平面・断面ともに検討したが、明らかな確証は認められなかった。よって、確実な方形周溝墓と断定することができなかった。主体部については調査区外の南北にそれぞれ位置する可能性をもつ。

特にS01180は方形周溝墓であるなら、主体部についてはこの高架化事業で現在の線路部分を調査する時点で明らかになろう。高まりが方形周溝墓のマウンドに相当するならば、足跡を検出した箇所は陸橋部ともいえるかもしれない。

断定はできなかったものの、周辺に方形周溝墓が存在していた可能性が高いということで99－1区までを西から続く墓域の東端として捉えたい。

〔溝S01184〕　幅2.6m、深さ約0.2mをはかる。調査区東端から東西正方位に調査区中心までのびる。溝中央で高杯（4002）が出土した（図84）。高杯は杯部を東に向けて倒れていた。復原したところほぼ完存し、杯部下半に2カ所の穿孔をもつことから供献土器であることは疑いないだろう。口縁部に4条の凹線文をもつ弥生時代中期後半の土器である。

また、北東隅から出土した広口壺（4001）については側溝掘削中の出土であったため、正確な出土状況は不明である。この広口壺は簾状文をめぐらす生駒山西麓産胎土の土器で、体部下半に穿孔をもつことから方形周溝墓の供献土器と考えられる。高杯と同時期の土器であり、ローリングによる摩耗などみられないことから、出土地点からさほど遠くないところに原位置があったと考えられる。広口壺の出土

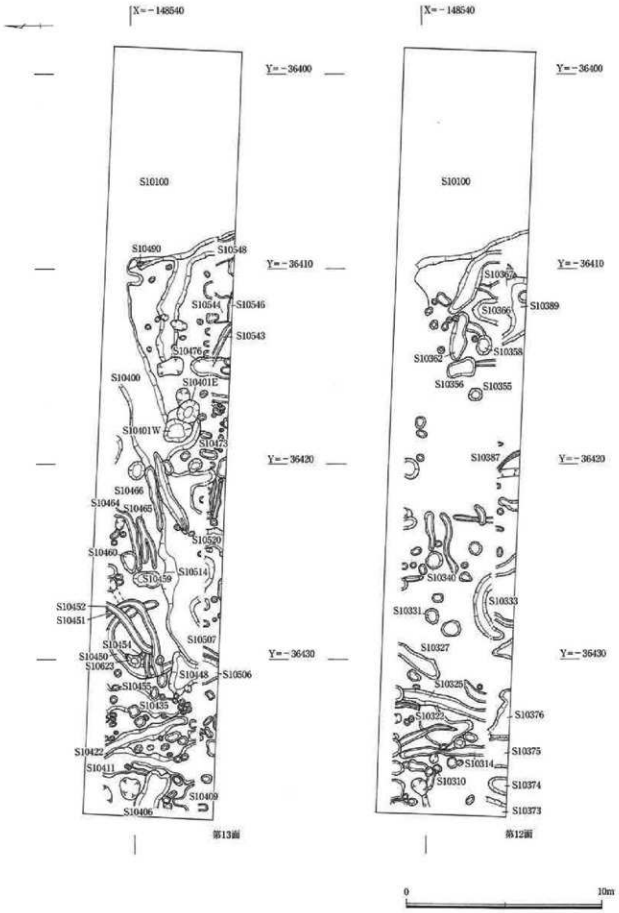


図81　弥生時代中期遺構面平面図－8
（99－10区：第13面、第12面）

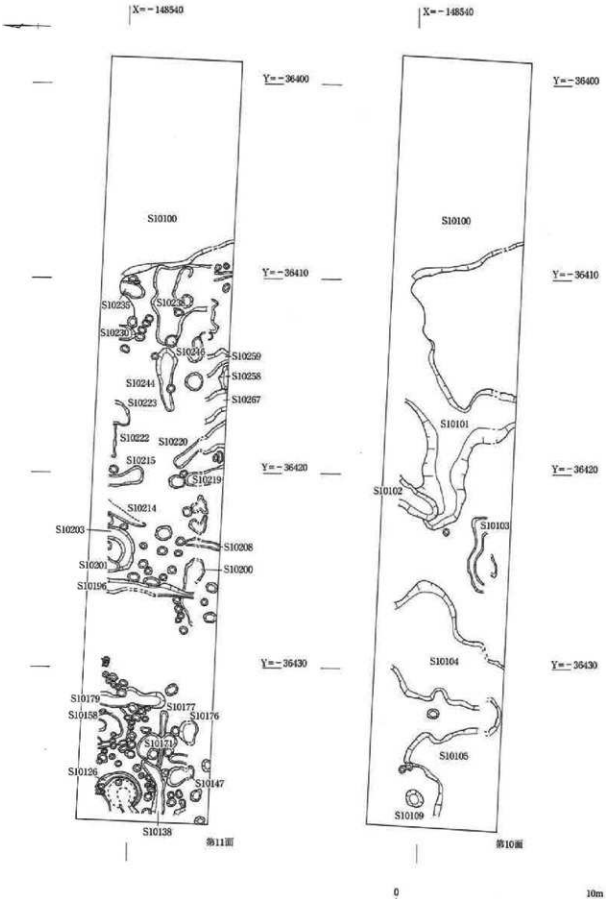


図82　弥生時代中期遺構面平面図－9
（99－10区：第11面、第10面）

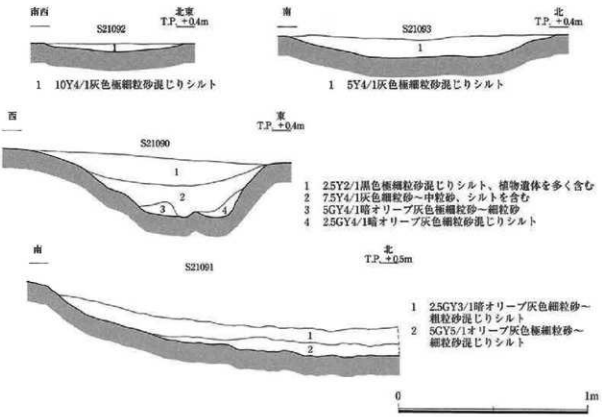


図83　01－1区第13面遺構断面図

地点から判断して、99－1区外のより北側にも方形周溝墓が存在する可能性が高い。明確に判断できる遺構は検出されなかったが、供献土器の存在から99－1区で検出した弥生時代中期遺構面は、弥生時代中期後半の方形周溝墓に関連する遺構面と考えて差し支えないだろう。

2）01－2区

本調査区では1面の遺構面を検出した。

a．第11面

第10面ベース層の黒色シルト層を除去すると、調査区全域でシルトを含みやや土壌化した粗粒砂層を検出し、弥生時代中期相当遺構面と判断した（図75）。

それぞれ北西－南東方向に流向をもつ3条の溝（溝S22110、溝S22111、溝S22112）を検出した（図85）。また、遺構面は中央部が高く、東側および西南部へいくに従い低くなる。

〔溝S22110・溝S22111・溝S22112〕　いずれも幅1.4m、深さ0.4m程度の断面V字形を呈する溝である。これらの溝の埋没は堆積状況により、方形周溝墓の周溝部分のように比較的時間がかかりながら埋没していくのとは異なり、一定程度の流水が存在しながら埋没していったと考えられる。また、溝の埋没後ではほぼ平坦になった後に、黒色有機物層が覆う。遺物は出土していない。

これらの3条の溝はほぼ同じ規模であり、断面形態や平行していることからも相関性のある遺構といえる。溝の機能としては、墓域内を区画する意味をもつと考える。

3）01－3区

本調査区では計2面の遺構面を検出した。第11面は方形周溝墓の盛り土および土壌化層を除去した後の堆積層上面で検出したが、遺構は確認できなかった。

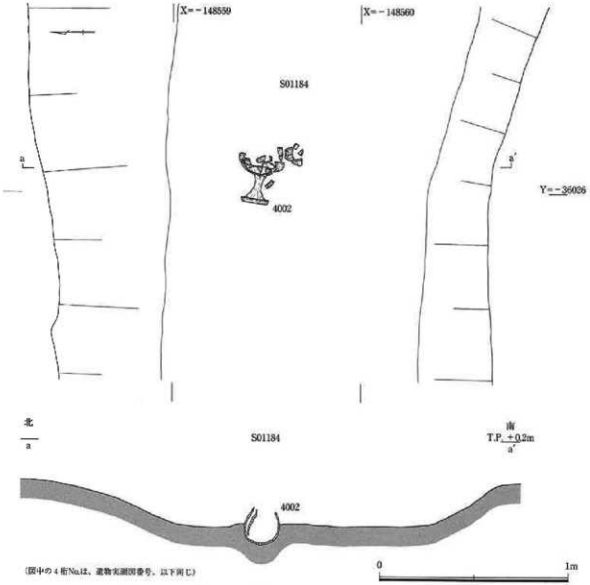


図84　99－１区第15面周溝Ｓ01184内供献土器出土状況図

ａ．第10面

弥生時代後期の黒色土壌化層を除去すると、遺構面に顕著な高低差がみられた。調査区北半ではシルトを含んだしまりのある粗粒砂層の高まりを検出し、方形周溝墓の墳丘と判断した。南から東にかけてＬ字状に落ち込みを検出し、高まりに沿うことから周溝と判断した（図75）。

〔方形周溝墓Ｓ23200〕　隣接の99－３区西端部分で検出したＳ03210と同一遺構であり、方形周溝墓の墳丘南半部東側にあたる。この２調査区での規模をあわせると方形周溝墓の東西長辺が約11ｍと判明した。

南北長は現存部分で約4.0ｍ、周溝Ｓ23201底面からの高さ約1.0ｍをはかる。マウンド中心よりやや東寄りで主体部Ｓ23205が検出されているが、これが南北を主軸とする主体部の南半分のみの検出であることから、南北辺は最低でも８ｍ以上になると推定できよう。主軸は東西方向と推定される。

方形周溝墓Ｓ23200は周溝Ｓ23201も含めると東西16ｍにも及ぶ大規模な方形周溝墓となる。これは東大阪市教育委員会47－２次調査Ｃ地区で検出した方形周溝墓に匹敵するかそれ以上の規模で、当調査中では最大となる。

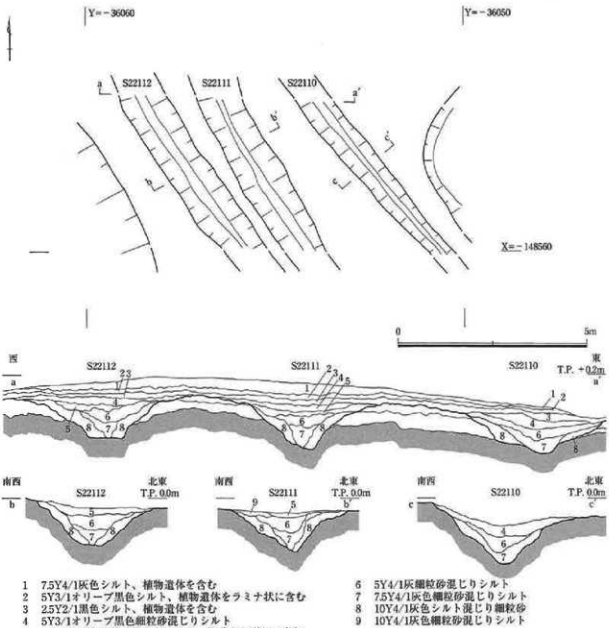


図85　01－2区第11面溝平面図・断面図

マウンドはベース層である黒色細粒砂上にオリーブ灰色～オリーブ黒色シルトを盛り上げて築造されている（図86）。

〔周溝Ｓ23201〕　幅2.0m強、深さ1.0m弱の周溝である。南側周溝の調査区西側で台形状の突起部を有する。突起部は陸橋部になるか。また、南側周溝の中心より東で甕の口縁部片が１点出土した（図88）。弥生時代中期後半の遺物であるが、確実に供献土器となるかは不明である。他にこの周溝墓からは供献土器がまったく出土しておらず、盛り土内などからの出土を含めても土器破片３点の出土にすぎない。方形周溝墓に何らかのかたちで関係する土器であろう。埋土の状況から、埋没するまでには一定の時間的経過があったことが分かる。

〔主体部Ｓ23205〕　主体部の北側は調査区外になり、南半のみの検出となった。掘方は南北に長い長方形で、南北長2.4m、東西長2.2mをはかる。掘方よりさらに0.5m内側がさらに掘り窪められ、この窪み

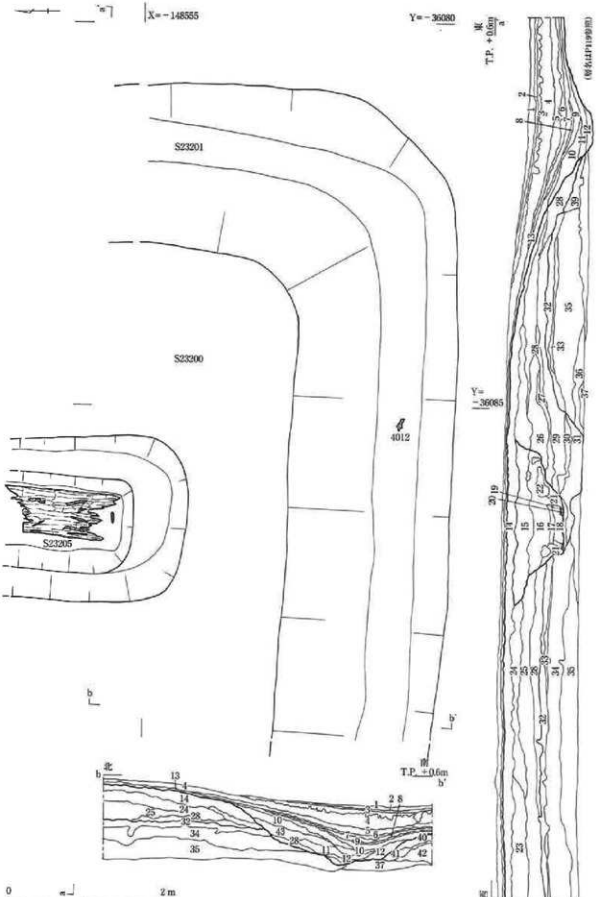


図86　01－3区第10面方形周溝墓Ｓ23200・周溝Ｓ23201平面図・断面図

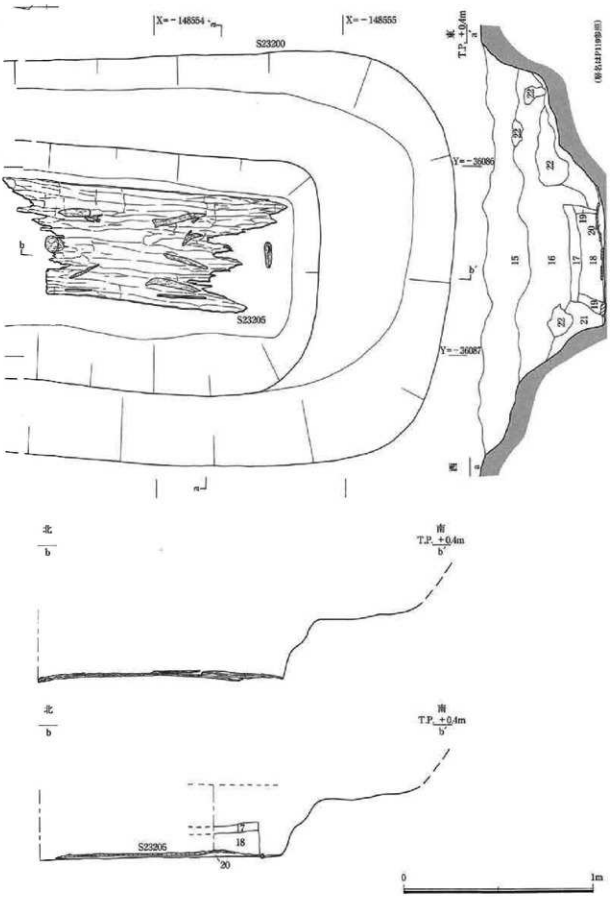


図87　01－3区第10面方形周溝墓S23200主体部S23205平面図・断面図

（図86、87の土色）

1 10Y4/1灰色シルト
2 5Y4/1灰色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
3 7.5Y4/1灰色シルト、植物遺体を含む、炭酸カルシウムを多く含む（タニシ層）
4 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、植物遺体をわずかに含む
5 7.5Y4/1灰色シルト、植物遺体をわずかに含む、炭酸カルシウムを多く含む（タニシ層）
6 5Y4/2灰オリーブ色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
7 5Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体をラミナ状に多く含む
8 7.5Y4/1灰色シルト
9 5Y2/1黒色泥炭質シルト、植物遺体を多く含む
10 7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト（マウンド流出）
11 5Y2/1黒色シルトに7.5Y4/1灰色シルトをブロック状に含む、粗砂粒をわずかに含む
12 7.5Y3/1オリーブ黒色シルトに10GY5/1緑灰色シルトをブロック状に含む
13 5Y2/1黒色細粒砂混じりシルト（マウンド流出）
14 7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト（盛土）
15 10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルト
16 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂～粗粒砂
17 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂～中粒砂
18 10GY4/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂、シルトをわずかに含む
19 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂、シルトをわずかに含む
20 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト混じり細粒砂
21 2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂
22 7.5GY5/1緑灰色シルト、細砂をわずかに含む
23 5GY5/1オリーブ灰色細粒砂混じりシルト（盛土）
24 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂～粗粒砂
25 7.5Y4/1灰色細粒砂～中粒砂（盛土）
26 7.5GY5/1緑灰色シルト、粗粒砂をわずかに含む
27 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト混じり粗粒砂～極細礫
28 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり細粒砂、極細礫をわずかに含む（盛土）
29 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり細粒砂～中粒砂、極細礫をわずかに含む（盛土）
30 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂に7.5Y6/2灰オリーブ色中粒砂をブロック状に含む
31 10GY5/1緑灰色細粒砂～中粒砂に10GY5/1緑灰色粘土をブロック状に含む
32 5Y2/1黒色シルト混じり細粒砂（第11面・マウンドベース層）
33 7.5Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂
34 10GY5/1緑灰色細粒砂
35 10GY6/1緑灰色細粒砂～中粒砂
36 10GY5/1緑灰色中粒砂～粗粒砂
37 10GY5/1緑灰色粘土
38 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂～粗粒砂、極細礫をわずかに含む（盛土流出）
39 10GY5/1緑灰色細粒砂～中粒砂に7.5Y4/1灰色シルト混じり中粒砂～粗粒砂をブロック状に含む
40 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり粗粒砂
41 7.5Y4/1灰色細粒砂～中粒砂、シルトをわずかに含む
42 10GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂（上方細粒化）
43 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり粗粒砂～中粒砂

図88　01－３区第10面方形周溝墓Ｓ23200供献土器出土状況図

部分に木棺が据えられてあった。断面は２段掘り状の逆台形をなす（図87）。木棺は遺存状態が悪く、底板と小口板の一部が残るのみである。木材はコウヤマキである。

また、底板上から成人人骨数本を検出した。頭位は北で、北側に上腕骨と脊椎と思われる骨を、南側にハの字状に大腿骨もしくは脛骨と思われる骨を検出した。

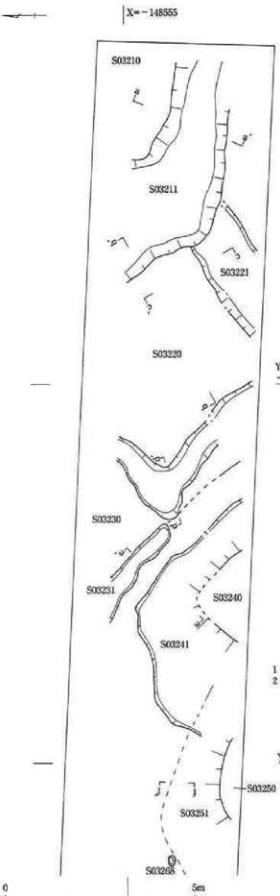
方形周溝墓Ｓ23200の時期は出土遺物が少ないため決め手を欠くが、検出した層序の他調査区との比較から弥生時代中期後半であろう。

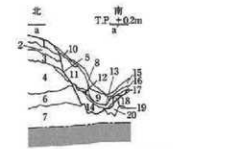
方形周溝墓Ｓ23200の特徴の一つはその大きさにある。この墓域中では最大級の規模をもつが、その西に隣接する99－３区の方形周溝墓群は小規模な一群である。方形周溝墓Ｓ23200の被葬者を、99－３区の方形周溝墓群の首長的役割を担う人物と考えるか、あるいはその突出性から別の一群と考えるかは議論の分かれるところであろう。

また、その規模に比例せず、供献土器がほとんどないことも特徴である。方形周溝墓の全容を検出していないので北側に供献土器が集中しているとも考えられるが、他の方形周溝墓が南西もしくは南東コーナーで供献土器が多く出土していることからみると、特異である。

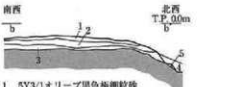
４）99－３区

本調査区では１面の遺構面を検出した。

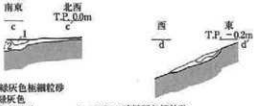




1 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂、板細礫を含む
2 10Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂、板細礫を含む
3 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり板細粒砂、板細礫を含む
4 5Y5.5/6オリーブ色多細粒砂～粗粒砂（上方細粒化）
5 2.5Y3/1オリーブ黒色板細粒砂、シルトをわずかに含む
6 7.5GY4/1暗緑灰色シルト、植物遺体を含む
7 5G4/1暗緑灰色板細粒砂～細粒砂、ラミナあり、植物遺体をわずかに含む
8 2.5Y3/2黒褐色シルト混じり板細粒砂、板細礫を多く含む、ビビアンナイトを含む
9 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体を含む
10 2.5Y3/1黒褐色シルト混じり板細粒砂、板細礫を含む、植物遺体を含む、ビビアンナイトを含む
11 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり板細粒砂、板細礫を含む
12 5Y2/1黒色シルト混じり板細粒砂、板細礫を含む
13 10Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体をわずかに含む
14 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり板細粒砂に5GY6/1オリーブ灰色シルトをブロック状に含む
15 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり板細粒砂、植物遺体を含む
16 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂、植物遺体を含む
17 10Y3/1オリーブ黒色シルト混じり板細粒砂、植物遺体をわずかに含む
18 5GY4/1暗オリーブ色板細粒砂に7.5Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む
19 5GY4/1暗オリーブ色細粒砂～中粒砂、下方に礫をラミナ状に含む
20 7.5GY4/1暗緑灰色板細粒砂～細粒砂に2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトをラミナ状に含む

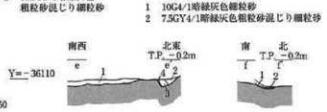


1 5Y3/1オリーブ黒色板細粒砂
2 10Y2/1黒色板細粒砂、板細礫を含む
3 7.5GY3/1暗緑灰色細粒砂
4 7.5Y4/2灰オリーブ色板細礫混じり
7.5Y5/1灰色板細粒砂
5 10GY4/1暗緑灰色細粒砂



1 7.5GY3/1暗緑灰色板細粒砂
2 10GY3/1暗緑灰色
細粒砂混じり細粒砂

1 10G4/1暗緑灰色細粒砂
2 7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂混じり細粒砂



1 10GY3/1暗緑灰色細粒砂、
板細粒砂を含む
2 5GY4/1暗オリーブ灰色板細砂、
粗粒砂を含む
3 2.5GY3/1暗オリーブ灰色板細粒砂
4 7.5GY3/1暗緑灰色板細粒砂

1 7.5Y4/1灰色
シルト混じり板細粒砂
2 5GY4/1暗オリーブ灰色
板細粒砂

0 2m

図89 99－3区第14面遺構平面図・断面図－1

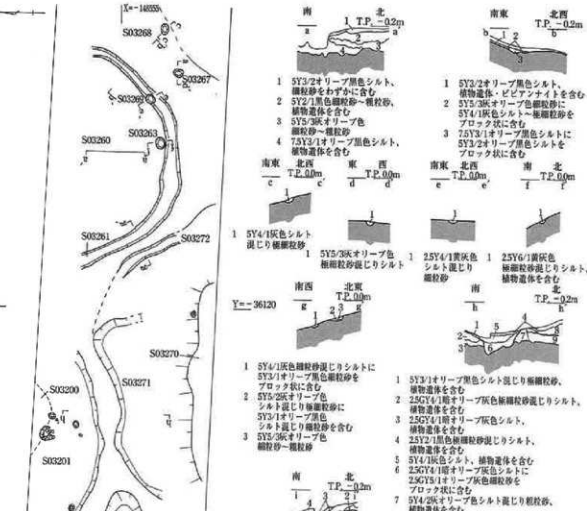


図90　99－3区第14面遺構平面図・断面図－2

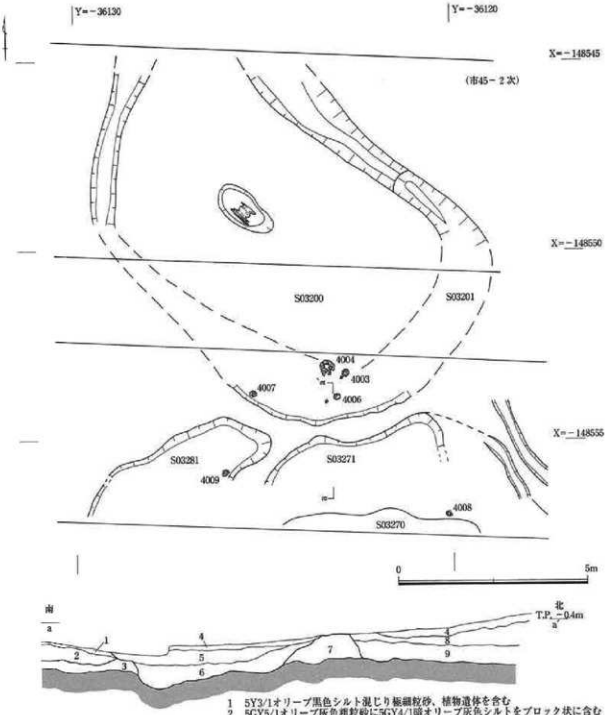


図91　99－3区第14面方形周溝墓S03200平面図・断面図

a．第14面

方形周溝墓8基と円形周溝墓1基、それに付随する周溝13条を検出した（図76）。

〔方形周溝墓S03200〕　調査区の西半で検出した。当区ではマウンド部は南隅を検出したのみである。ただしこの方形周溝墓は、北側道路部を（財）東大阪市文化財協会が45－2次調査で調査した際検出し

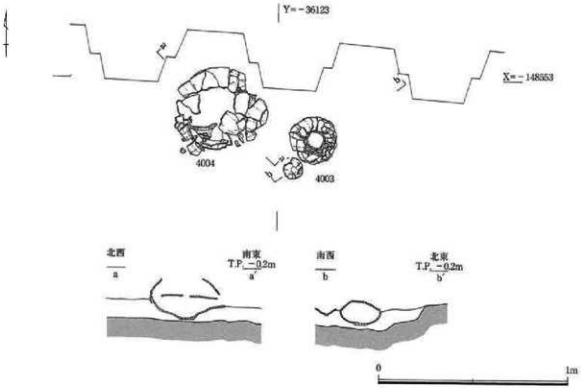


図92　99－3区第14面方形周溝墓S03200供献土器出土状況図

た方形周溝墓1の続きとなり、全体を復原すると9.0m×5.5mの長方形となった（図90・91）。

方形周溝墓の主軸は北西－南東方向と推定される。45－2次調査ではマウンド中心から主体部木棺1基を検出している。

〔周溝S03201〕　断面U字形で幅1.1m、深さ0.3mをはかる。ベースからの掘り込みの深さは、S03200のマウンドが削平を受けているため明瞭でない。マウンド南隅を囲む周溝の南西側と南東側の一部を検出した。コーナーからは供献土器数個体が出土した。供献土器のうち広口長頸壺、大形甕、無頸壺、蓋は一カ所にかたまって出土し、なかでも大形甕と広口長頸壺は正置の状態であった（図92・127）。それより少し離れて高杯の杯部分のみが出土した。無頸壺は体部に穿孔をもつ。いずれもⅢ－2様式前後である。

〔円形周溝墓S03260〕　方形周溝墓S03200の東、調査区中央よりやや西側で検出した（図90）。この遺構も周溝ともに北半分を矢板に遮られている。直径約5.0mである。周溝S03261は幅0.2～0.5m、深さ約0.1mである。遺物は出土しなかった。周溝付近にはS03263・S03269といったピットを検出している。円形周溝の遺構は隣接した（財）東大阪市文化財協会の45次調査でも確認されており、この調査でも周溝付近でピット状の遺構を検出している。円形周溝墓でなく、複数の円形の構築物であった可能性もある。遺物は出土していない。

〔方形周溝墓S03270〕　S03200とS03260の間、調査区の南側に周溝S03271とS03272を検出した（図90）。マウンドは南端にわずかにみられるが、ほとんどが矢板より南の調査区外となるため詳細は不明である。調査区でみられる東西長は約5.0mで、方形周溝墓の北東部から北側にあたる。

周溝S03271は幅2.5m、長さ7.0mをはかる。周溝の内側、マウンドに接する箇所で把手付台付鉢を検出した。脚台部に6個の透穴をもつ鉢で、倒置の状態で出土した（図127）。Ⅳ－1～3様式。

〔方形周溝墓S03280〕　調査区西端で検出した（図90）。南東部の周溝S03281と北西部・南西部の周

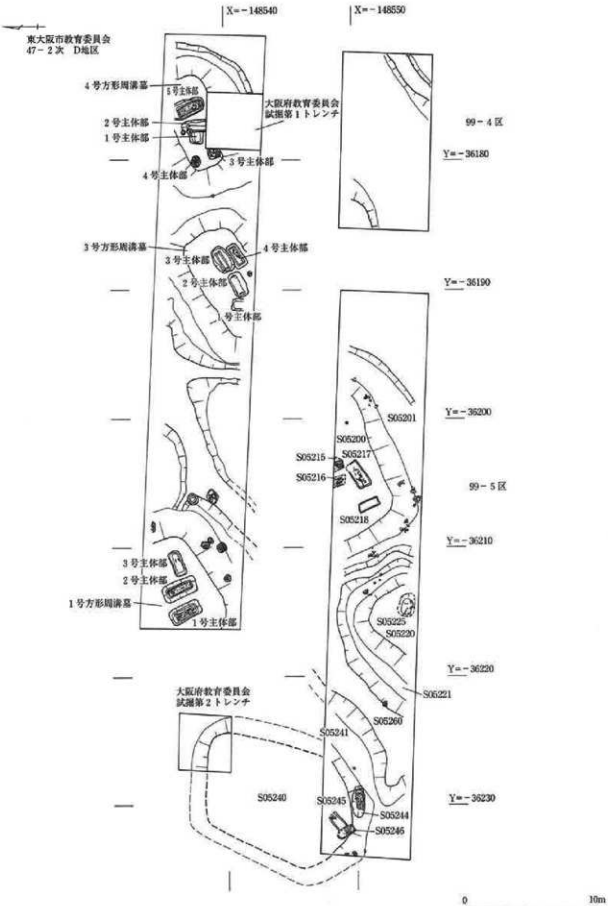


図93　99－5区第19面方形周溝墓群平面図

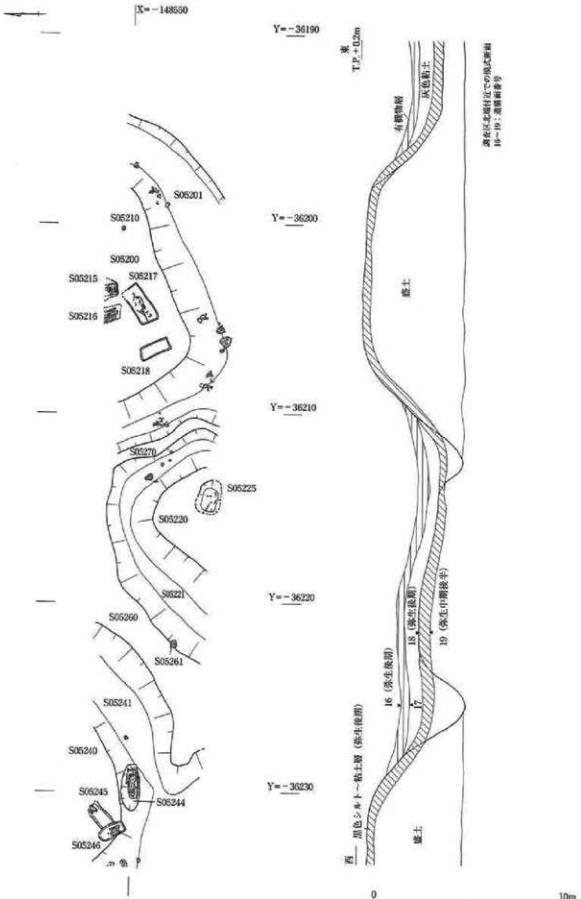


図94　99－5区方形周溝墓群・現状遺構模式断面図

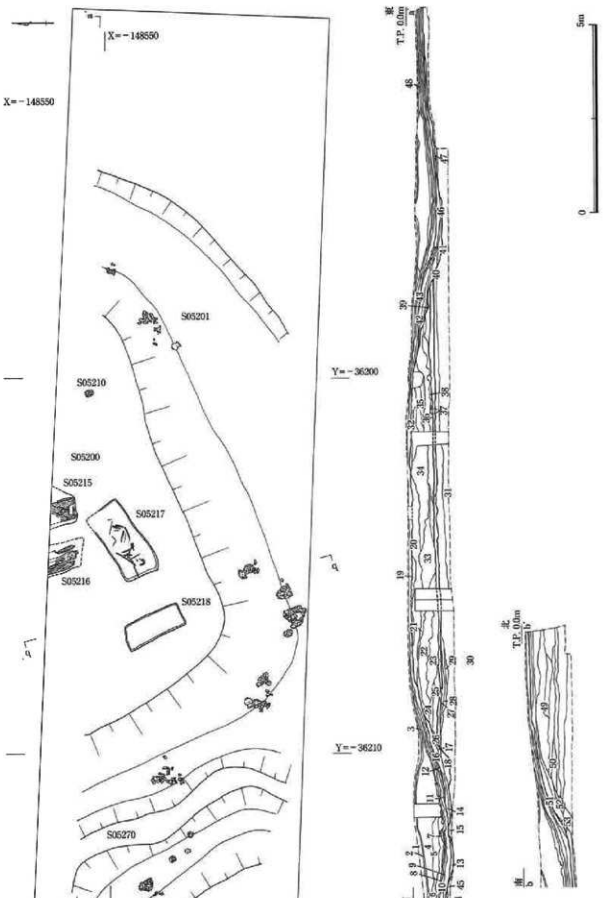


図95　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05200平面図・断面図

(図95の上色)

a-a'断面

1 5Y4/1灰色シルト、植物遺体を含む
2 5Y2/2オリーブ黒色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
3 7.5GY4/1極細砂混じりシルト
4 5Y6/3オリーブ黄色～10YR/1灰色細粒砂～粗粒砂、ラミナあり
5 7.5GY5/1緑灰色細粒砂、ラミナあり
6 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂
7 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト
8 5Y4/1灰色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
9 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト
10 5Y2/2オリーブ黒色泥炭質シルト、植物遺体を多く含む
11 5Y2/2オリーブ黒色礫混じりシルト、植物遺体を含む
12 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり粗砂砂～礫
13 5Y3/1オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト、植物遺体を含む
14 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルト、植物遺体を含む
15 5GY5/1オリーブ灰色粗砂砂～礫
16 5Y4/1灰色シルト混じり低粒砂～礫（盛土流出）
17 7.5Y4/1灰色シルト混じり粗粒砂～礫（盛土流出）
18 10GY5/1緑灰色粗粒砂～礫に5Y4/1灰色粗粒砂混じりシルトをブロック状に含む
19 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり中粒砂～粗粒砂、礫をわずかに含む
20 10Y4/1灰色シルト混じり中粒砂～粗粒砂、礫をわずかに含む
21 7.5Y4/1灰色シルト混じり細粒砂に5Y6/3オリーブ黄色細粒砂をブロック状に含む
22 5Y6/3オリーブ黄色シルト混じり細粒砂～中粒砂に5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂をブロック状に含む
23 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂～細粒砂、礫を含む
24 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～粗粒砂に5Y6/3オリーブ黄色粗粒砂をブロック状に含む
25 7.5Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂、礫をわずかに含む
26 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂、粗粒砂をわずかに含む
27 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂
28 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂、植物遺体を含む、有機物を含む
29 7.5GY4/1暗緑灰色シルト、細粒砂をわずかに含む
30 5GY4/1暗オリーブ灰色粗細粒砂～細粒砂、下方に礫を含む
31 10GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂、ラミナあり、下方に礫を含む
32 5G4/1暗緑灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂
33 5Y6/3オリーブ黄色細粒砂～中粒砂に5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂をブロック状に含む
34 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂に5Y6/3オリーブ黄色細粒砂をブロック状に含む
35 7.5Y4/1灰色シルト混じり細粒砂、植物遺体を含む
36 5Y6/3オリーブ黄色細粒砂～中粒砂に5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂をブロック状に含む
37 7.5Y5/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂に5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂をブロック状に含む
38 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂～細粒砂
39 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂に5Y6/3オリーブ黄色細粒砂をブロック状に含む（盛土流出）
40 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂（盛土流出）
41 10GY5/1緑灰色粗粒砂～粗粒砂に10Y4/1灰色シルト混じり極細粒砂をブロック状に含む
42 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂
43 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂
44 5Y3/1オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト、植物遺体を含む
45 5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂～礫
46 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルト、植物遺体を含む
47 7.5GY5/1緑灰色シルト混じり細粒砂
48 7.5GY4/1暗緑灰色シルト混じり極細粒砂、植物遺体をわずかに含む

b-b'断面

49 7.5GY5/1緑灰色中粒砂～粗粒砂に2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルトをブロック状に含む
50 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂、礫をわずかに含む
51 10Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～粗粒砂
52 7.5GY4/1暗緑灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂に7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルトをブロック状に含む
53 10GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂に10Y4/1灰色シルト混じり極細粒砂をブロック状に含む

溝Ｓ03291・Ｓ03283に区画される東西約7.0ｍの範囲である。周溝Ｓ03281より把手付の水差しが出土した。体部下半に穿孔をもつ（図127）。Ⅳ－１～３様式。

〔方形周溝墓Ｓ03210・Ｓ03220・Ｓ03230・Ｓ03240・Ｓ03250〕 調査区東半に位置する方形周溝墓群である（図89）。

Ｓ03210は先述の01－３区方形周溝墓Ｓ23200の続きであるので、Ｓ23200の説明を参照されたい。ただ、99－３区出土の他の方形周溝墓に比べるとこれだけが平面形でも高まりが明白で、断面で盛り土を観察できた。

Ｓ03220はＳ03210（Ｓ03211）に切られる。東側の周溝Ｓ03221と西から南にめぐる周溝によって一辺4.0ｍ程度の方形周溝墓と想定できた。Ｓ03230はＳ03220に隣接する。Ｓ03240はその西側で北側部分のみを検出した。Ｓ03250と切り合い関係をもつ可能性がある。Ｓ03250も調査区南端でマウンドの北隅を検出したにすぎない。これらの周溝墓からは遺物は出土していない。

99－３区の方形周溝墓は調査区の南北幅が5.0ｍ弱と狭いこともあり、北半か南半のみの検出にとどまった。しかしながら長さを復原できた方形周溝墓の長辺も４ｍ～８ｍと10ｍ未満の小規模なものである。ここでは小規模な方形周溝墓が小群をなしている。

また、前半されているといえ、本来の高まりも周溝墓の規模に比例して低いものだったといえる。断面調査においても盛り土の状況は不明確だった。主体部も全く検出されなかった。ただし、弥生時代前期遺構面の溝上層部で木棺小口板とみられるヒノキ板材を検出しており、出土地点もＳ03260・Ｓ03270がある位置と合致する（第７章第９節表36参照）。もともと本調査区内にかろうじて位置していた木棺端小口部が、調査用鋼矢板の打設時に下位に引き下げられたものである可能性が高い。

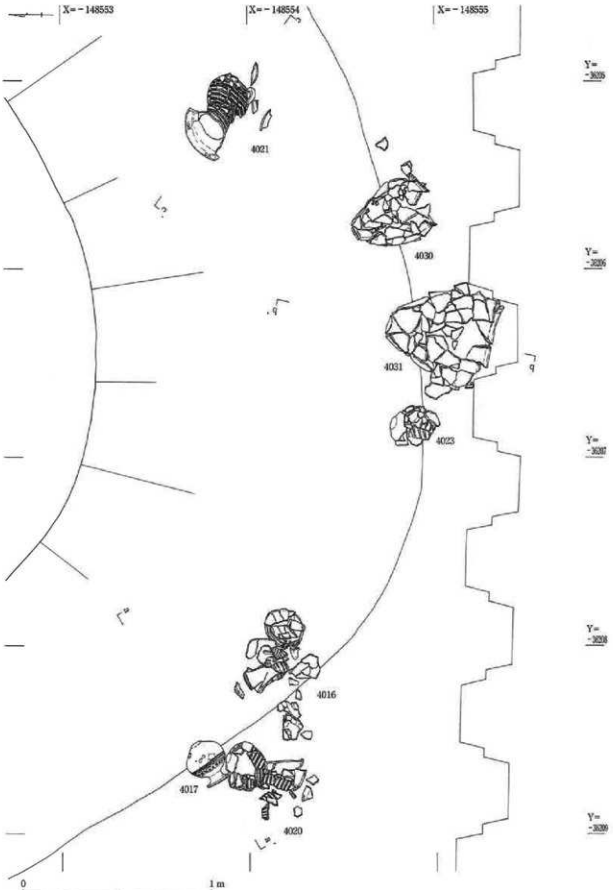


図96　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－1

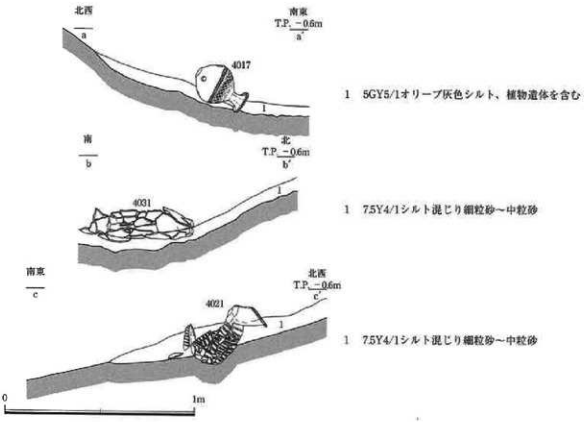


図97　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05200供献土器出土状況図－2

Ｓ03200やＳ03210など本調査区外に方形周溝墓の延長部をもつ部分で主体部が検出されているので、マウンドの中心は調査区の北か南にあり、主体部も未調査の可能性が高い。特に南側については今後の調査の機会を待ちたい。

供献土器は３基の方形周溝墓から検出されたが、Ｓ03200の土器は器種的に一定のまとまりをもつ。また、時期的には南側で検出された方形周溝墓の方が新しくなる傾向をもつ。

5）99－4区

本調査区では１面の遺構面を検出した。

a．第18面

検出高は99－３区から若干低くなる。調査区の東端で北東－南西を主軸とする高まりＳ04150と北西隅で自然の高まりＳ04151を検出した（図76）。方形周溝墓に関連する遺構となる可能性も否定できないが、現状では断定できなかった。遺物等も出土していないので詳細は不明である。

6）99－5区

99－４区とほぼ同じく、T.P.－0.7～－0.5mで１面の弥生時代中期遺構面を検出した（図77）。

a．第19面

調査区全域で方形周溝墓３基とそれに伴う堤状遺構、土器棺墓などを検出した。道路を隔てた北側の東大阪市教育委員会47－２次調査Ｃ・Ｄ地区でも４基の方形周溝墓を検出しており、現状であわせて７基で墓域を形成する。また、今回検出した方形周溝墓Ｓ05240は大阪府教育委員会が試掘第２トレンチで検出したのと同一遺構である（図93）。方形周溝墓群と堤状遺構の東西断面図および模式図を図94・95に表した。これをみると周溝を掘り上げた土を積み上げて、ベースとなる土の上に盛り土がなされる。第19・18面間の黒色粘土層が周溝の埋没過程の中で堆積し、周溝墓間の低地部に弥生時代後期の土壌化層

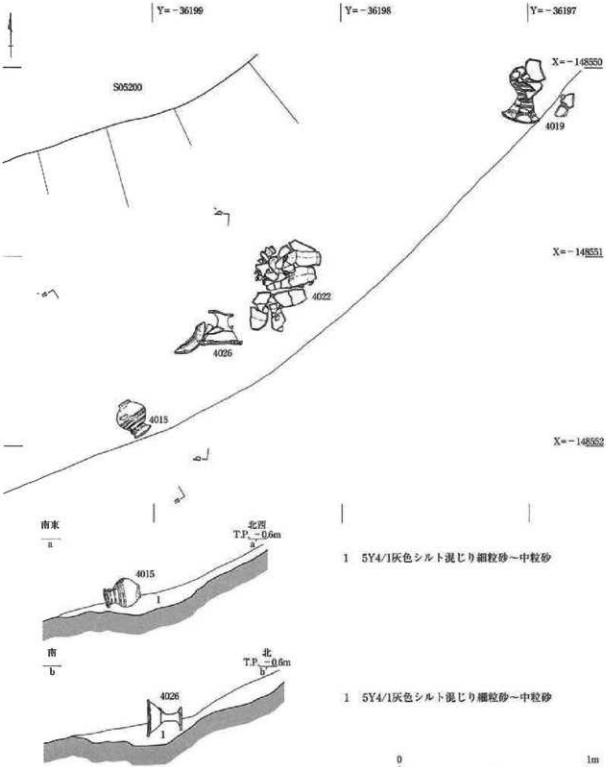


図98　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－3

が次第に堆積する。従って、弥生時代後期においては高位地では弥生時代中期遺構面が露頭し、低地部では徐々に堆積が進む状況を呈する。

〔方形周溝墓S05200〕　調査区東側で検出した方形周溝墓である。主軸を北東－南西方向にもつ。調査区内では南西部を検出した。長辺10m、短辺は現存部で6mをはかる。ベース面からの高さは1.2mである。マウンド上で4基の主体部と1基の土器棺墓を検出した。

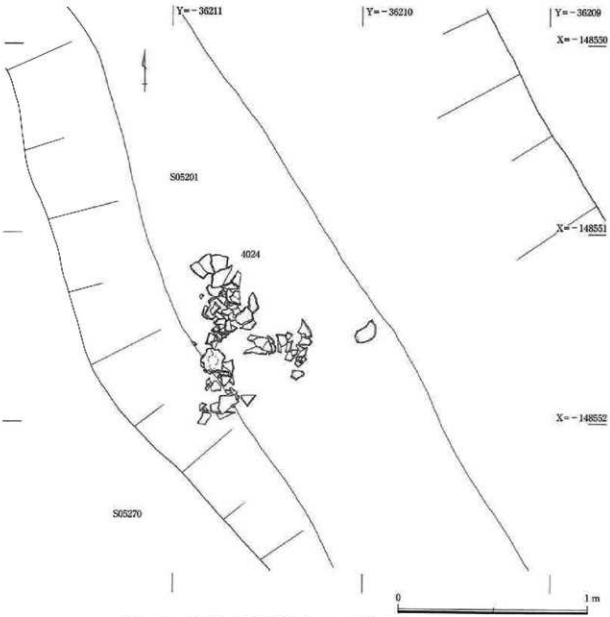


図99　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05200供献土器出土状況図－4

周溝Ｓ05201は東側および西側周溝である。幅4ｍ、深さ0.7～1.0ｍをはかる。周溝では次の位置からまとまって供献土器が出土した（図96～99）。南のコーナー付近では大小の甕や広口長頸壺、広口壺を8個体検出した（図96・97・99）。その出土状況は墳丘の裾から滑り落ちたかのように、底部が高く口縁部が低い方を向いていた。接合・復原したところほとんどが完形となり、そのうちの5個体に体部下半に穿孔がみられる。生駒山西麓産と非生駒山西麓産のものを含むが、Ⅲ－2～Ⅳ－1・2様式前後である。

また東側コーナー付近では高杯、広口壺、広口長頸壺などが出土している（図98）。こちらの供献土器群もやはり墳丘裾から口縁部を周溝に向かうように出土している。いずれも土器の周囲で掘方は検出されなかった。出土状況からこれらの供献土器は墳丘の裾に正置されていたと考えられる。土器の様式は南コーナー付近のものとほぼ等しい。

また、マウンド上の主体部Ｓ05217の直上からも供献土器が1点出土している（図100）。把手付台付鉢（4028）で底部に穿孔をもち、口縁部を打ち欠く。Ⅳ様式であり、周溝出土の供献土器よりやや新しい傾向をみせる。

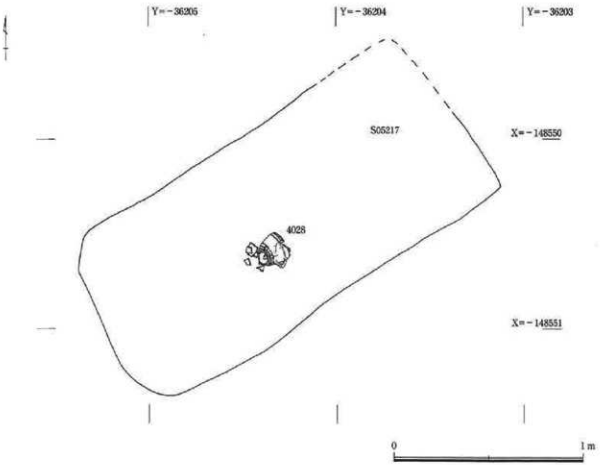


図100　99－5区第19面方形周溝墓S05200供献土器出土状況図－5

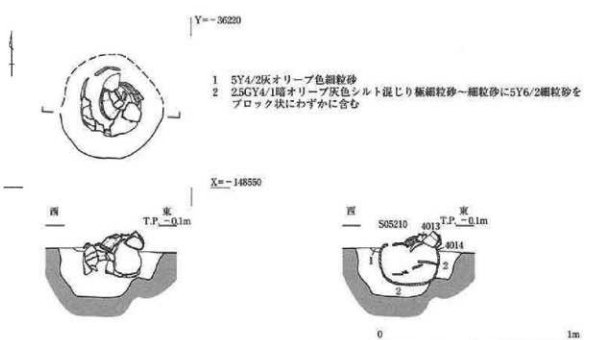


図101　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－1
（土器棺墓S05210）

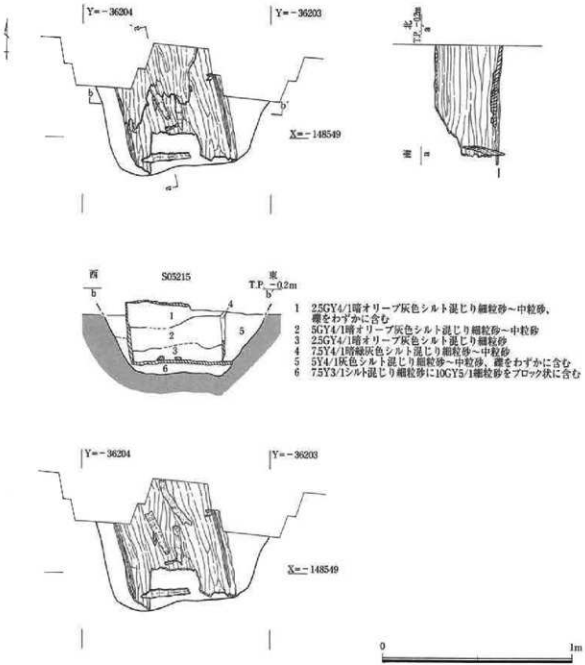


図102　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05200主体部平面図・断面図－2
（木棺墓Ｓ05215）

〔土器棺墓Ｓ05210〕　主体部を検出した箇所より少し離れたマウンドの東端で土器棺墓Ｓ05210を検出した（図101）。口頸部を打ち欠いた広口壺に鉢をかぶせた壺棺墓である。直径55cm、深さ30cmの円形に土坑を掘り窪め、壺の口縁部をやや東を向けて据えられ、その上に鉢を蓋として底部を上にしてかぶせていた。壺の中からは人骨等は検出されていない。壺と鉢のどちらもⅣ－１・２様式前後。

〔主体部Ｓ05215～Ｓ05218〕　マウンド中心もしくは南端で主体部４基を検出した。そのうちのＳ05215とＳ05216からは木棺を部分的に検出、Ｓ05217からは人骨が出土している。

木棺墓Ｓ05215と木棺墓Ｓ05216は平行して調査区北端より検出した。北半を矢板で遮られて欠損する。北北西に頭位をおく木棺墓である。Ｓ05215の掘方は南北の現存長が0.6m、東西0.8m、断面逆台形をなし、深さ0.4mをはかる（図102・103）。木棺は蓋板、底板、左右側板ともに出土し、組み合わせ式木棺と

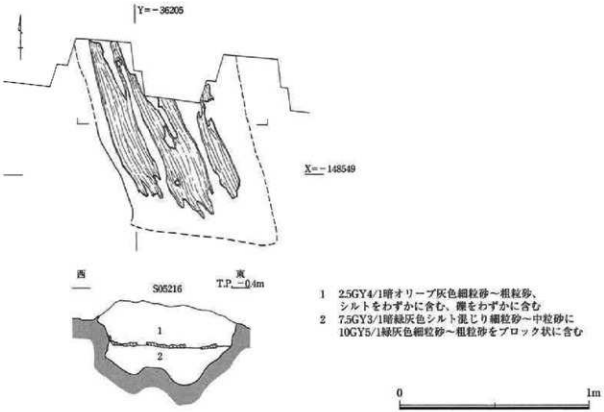
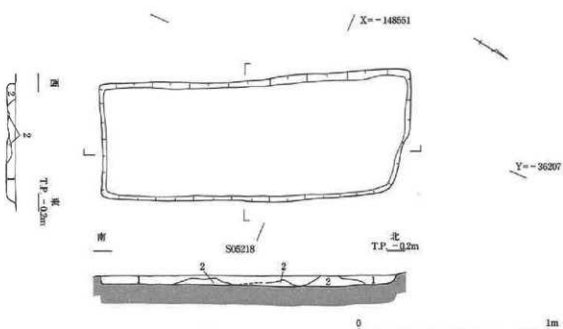


図103　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05200主体部平面図・断面図－3
（木棺墓Ｓ05216）



1　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂～中粒砂
2　7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～中粒砂、シルトをわずかに含む

図104　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05200主体部平面図・断面図－4
（主体部Ｓ05218）

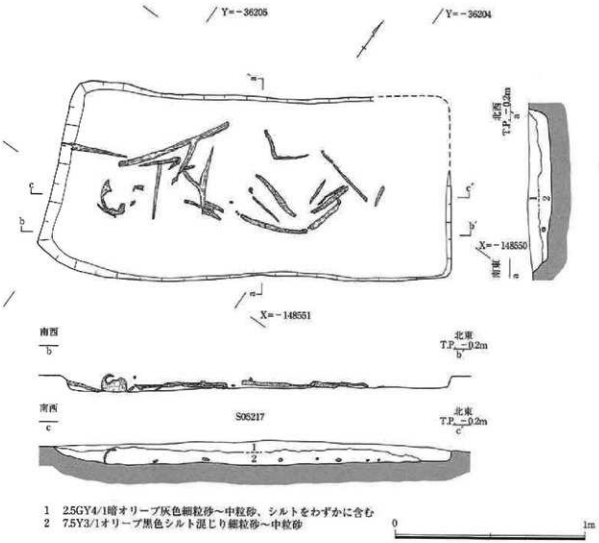


図105　99－5区第19面方形周溝墓S05200主体部平面図・断面図－5
（主体部S05217）

判明している。底板上からはハの字状に人骨が数本出土しており、大阪市立大学の安部みき子先生に成人の左右脛骨と同定いただいた。底板の現存長は0.7mだが、人骨の出土位置などから推定長1.7～1.8mと考えられる。底板の南辺はコの字形に切り取られ、小口板と見られる板の残片が直立して残存する。側板は幅0.3～0.4mで、東側側板は上半分を欠損する。板は厚さ5cm弱で、材はコウヤマキであった。人骨の他、副葬品等は出土していない。

木棺墓S05216は側溝掘削中に検出したため掘方は明瞭にできなかった。また木棺も遺存状態が悪く、底板が収縮した状態で出土しただけである。底板の幅0.6m、掘方は深さ約0.4mをはかる。底板の方位がS05215と同じであり、規模もほぼ同じと言える。この二つの木棺墓は相互に関連性をもつであろう。

主体部S05217は上記の主体部の南側で全容を検出した（図105）。方形周溝墓の南東辺に長辺を平行させる。掘方は長辺が2.0m、短辺が0.9mである。深さ約0.1mと浅く、木棺の痕跡も見いだせなかったため土坑墓かと考える。掘方埋土下層から人骨と自然木などを検出した。輪郭しか分からない部位がほとんどだが、成人の左右大腿骨と脛骨、上腕骨などが出土し、頭位は南西で体は仰臥かやや横臥、南東方に足を屈曲させている（第8章第4節参照）。

主体部S05218はS05217の南西辺に長辺が沿うように検出した（図104）。主軸の方向がS05215等と近

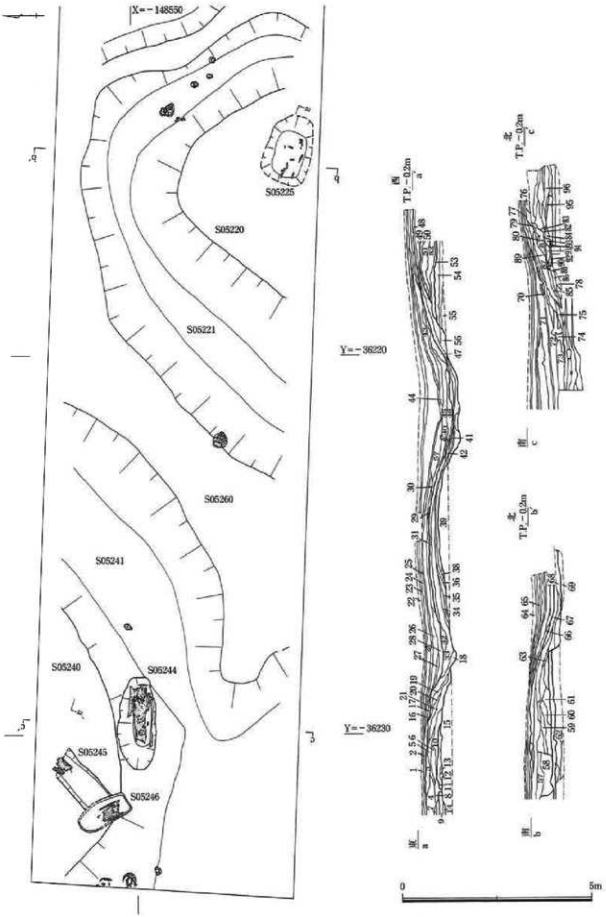


図106　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05220・Ｓ05240平面図・断面図

(図106の土色)

a-a'断面

1 10Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体を含む
2 5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり粗砂粒～礫
3 7.5Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒～礫
4 10Y5/1灰色シルト混じり粗砂粒～礫
5 5GY4/1暗オリーブ灰色細砂粒～粗砂粒、シルトをわずかに含む
5 5Y6/3オリーブ黄色粗砂粒～礫、シルトをわずかに含む
7 10GY5/1緑灰色中砂粒～粗砂粒
8 10Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒～礫
9 5GY4/1暗オリーブ灰色細砂粒～粗砂粒、シルトをわずかに含む
10 7.5Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒～礫
11 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂砂混じりシルト
12 10GY5/1緑灰色細砂粒～中粒砂に7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂砂混じりシルトをブロック状に含む
13 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂
14 7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂混じりシルト
15 10GY5/1緑灰色細砂粒～粗砂粒、下方に礫を含む
16 7.5Y2/1黒色シルト混じり粗砂粒～礫
17 7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂粒～礫
18 5Y2/2オリーブ黒色礫混じりシルト
19 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり粗砂粒～礫
20 5Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒～礫
21 10Y4/1灰色粗砂粒～礫、シルトをわずかに含む（盛土流出）
22 5Y4/1灰色シルト、植物遺体を含む
23 5Y2/2オリーブ黒色シルト、植物遺体を含む
24 10Y4/1灰色シルトに10Y6/2オリーブ灰色板橋粗砂をラミナ状に含む
25 5Y4/1灰色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
26 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト
27 5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり粗砂粒～礫
28 5Y2/2オリーブ黒色泥炭質シルト、粗砂粒をわずかに含む
29 5Y2/2オリーブ黒色泥炭質シルト、粗砂粒をわずかに含む
30 5Y2/2オリーブ黒色シルト混じり粗砂粒～礫

b-b'断面

57 7.5Y4/2灰オリーブ色粗砂粒に5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり粗砂粒～粗砂粒をブロック状に含む（S05225）
58 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～礫（S05225）
59 10Y4/1灰色粗砂砂混じりシルト
60 5Y5/2灰オリーブ色粗砂粒～礫に10Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒をブロック状に含む
61 10Y4/2オリーブ灰色粗砂粒～礫、シルトをわずかに含む
62 10GY5/1緑灰色粗砂粒～礫、ラミナあり

c-c'断面

70 5GY4/1暗オリーブ灰色細砂粒混じりシルト
71 2.5Y4/1黄灰色シルト混じり5GY5/1緑灰粗砂をラミナ状に含む
72 5Y4/1褐灰色細砂粒混じりシルト、植物遺体を多く含む、炭酸カルシウムを多く含む
73 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～粗砂粒、植物遺体を含む
74 10Y4/1灰色～5Y2/2オリーブ黒色細砂粒混じりシルト
75 10Y4/1灰色シルト、粗砂粒をわずかに含む
76 10Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細砂粒～粗砂粒
77 5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり細砂粒～粗砂粒
78 7.5GY6/1緑灰色粗砂粒～礫
79 5Y2/2オリーブ黒色シルト混じり細砂粒～中粒砂、礫をわずかに含む
80 2.5Y3/2黒褐色板橋細砂粒混じりシルト
81 10Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂、礫をわずかに含む
82 5GY4/1暗オリーブ灰色細砂粒～中粒砂、シルトをわずかに含む
83 10Y5/1灰色～7.5Y5/3灰オリーブ色シルト混じり細砂粒～粗砂粒
84 5Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂、礫をわずかに含む
85 2.5GY4/1黄灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂、礫をわずかに含む
31 5Y2/2オリーブ黒色シルト混じり粗砂粒～礫
32 5Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒～礫
33 10Y5/2オリーブ灰色細砂粒～粗砂粒
34 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト、粗砂粒をわずかに含む
35 5Y3/1オリーブ黒色粗砂砂混じりシルト
36 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂砂混じりシルト
37 7.5GY4/1暗緑灰色細砂粒～粗砂粒、シルトをわずかに含む
38 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり粗砂粒～礫
39 5GY3/1オリーブ灰色粗砂粒～礫
40 5Y3/1オリーブ黒色シルト、粗砂粒をわずかに含む
41 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト
42 10Y4/2オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～礫
43 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト
44 7.5Y4/2灰オリーブ色粗砂粒に5Y4/1灰色粗砂砂混じりシルトをブロック状に含む
45 5Y2/1黒色細粒砂混じり泥炭質シルト、植物遺体を多く含む
46 5Y2/1黒色細粒砂混じり泥炭質シルトに2.5GY6/1オリーブ灰色シルトをブロック状に含む
47 5Y2/2オリーブ黒色シルト混じり細砂粒～粗粒砂
48 10Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細砂粒～粗砂粒
49 5Y5/3灰オリーブ色粗砂粒～礫に10Y4/1灰色シルト混じり細砂粒をブロック状に含む
50 10Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～粗砂粒
51 5Y6/3オリーブ黄色細砂粒～中粒砂に10Y4/1灰色シルト混じり細砂粒をブロック状に含む
52 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂、礫をわずかに含む
53 7.5Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂
54 10GY5/1暗緑灰色シルト混じり板橋粒砂～細粒砂、礫をわずかに含む
55 10Y5/1灰色粗砂粒～礫
56 10Y5/1灰色粗砂粒～礫に7.5Y4/1灰色シルト混じり粗砂粒をブロック状に含む
63 5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり粗砂粒～礫
64 5GY5/1オリーブ灰色シルト、植物遺体をわずかに含む
65 5Y5/3灰オリーブ色～10Y6/1灰色細砂粒～粗砂粒、ラミナあり
66 5Y2/2オリーブ黒色泥炭質シルト
67 5Y3/1オリーブ黒色粗砂砂混じりシルト、植物遺体を多く含む
68 7.5Y4/1暗粗砂粒～礫、シルトをわずかに含む
69 5GY5/1オリーブ灰色粗砂粒～礫
86 7.5GY4/1暗緑灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂
87 2.5Y4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂
88 10Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～粗砂粒
89 5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり中粒砂
90 5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり細砂粒
91 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細砂粒～粗砂粒、礫をわずかに含む
92 7.5Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～粗砂粒に5GY4/1暗オリーブ灰色シルトをブロック状に含む
93 5Y4/1灰色シルト混じり細砂粒～粗砂粒、礫をわずかに含む
94 5Y4/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト（炭跡）
95 10Y4/1灰色細粒砂～細砂粒に7.5Y4/1灰色シルト混じり細砂をブロック状に含む
96 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり板橋粒砂～細砂粒、粗砂粒をわずかに含む
97 2.5Y3/1黒褐色シルト混じり細砂粒～中粒砂、礫をわずかに含む
98 7.5GY4/1暗緑灰色シルト混じり細砂粒～中粒砂
99 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂砂混じりシルト
100 10Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体を含む

い北西－南東である。長辺1.7m、短辺0.6m、深さ約0.1mである。木棺、人骨等は出土せず、土壙墓としたが主体部とするには若干決め手を欠く可能性もある。

［方形周溝墓Ｓ05220］　方形周溝墓Ｓ05200の西南部で検出した。３基の方形周溝墓中、中央に位置する方形周溝墓で南側は矢板に遮られており、北半のみ、全体の1/3程度の検出となった。マウンドの残存長は各辺約５ｍで高さは１ｍをはかる。周溝Ｓ05221をめぐらす。東西の周溝との直接的な切り合い関係はない。また、西側の方形周溝墓Ｓ05240の周溝Ｓ05241との間には堤状遺構Ｓ05260を有する。これは方形周溝墓Ｓ05220・Ｓ05240を作る際にも周溝を掘り上げてその土を盛り土としたようだが、もともとＳ05260にも本来のベース面の上に土を盛り上げている（図106）。

方形周溝墓の北東辺付近で供献土器が出土している（図107）。Ｓ05200の方形周溝墓供献土器の出土状況と異なり、周溝中央底部に口縁部を横にした状態で出土する。水差しや広口壺で多くが体部下半に穿孔をもつ。時期的にはややばらつきがあり、Ⅲ～Ⅳ－３様式のものである。

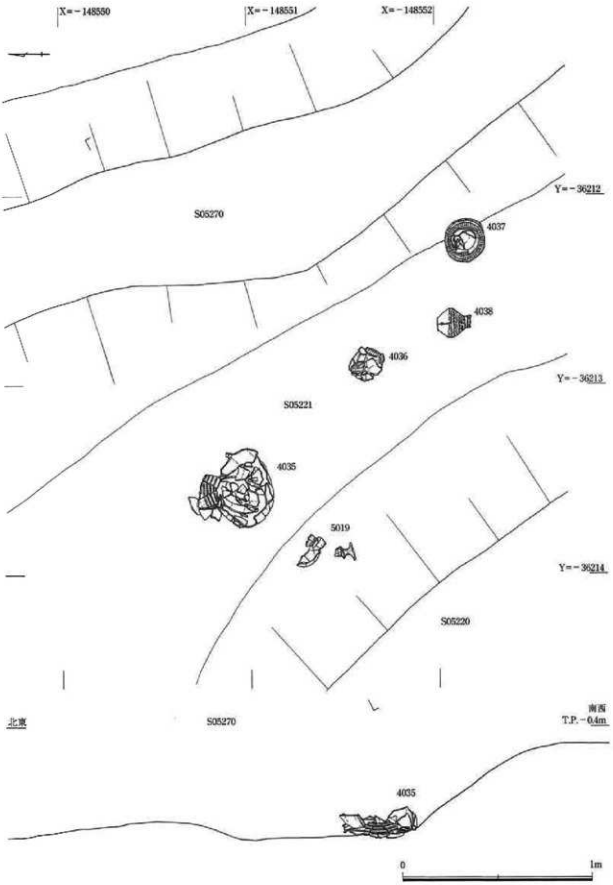


図107　99－5区第19面方形周溝墓S05220供献土器出土状況図

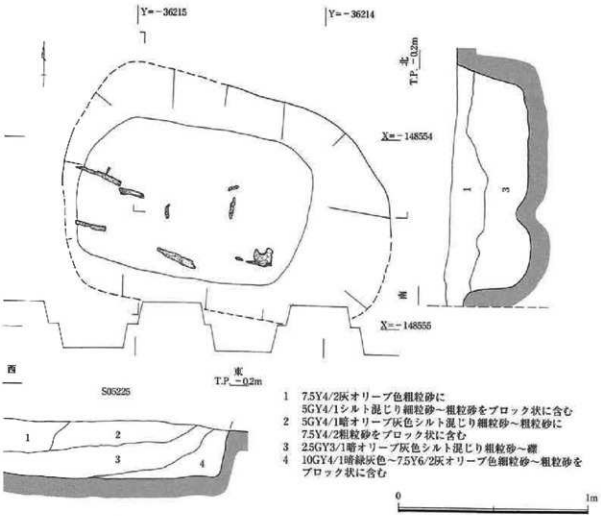


図108　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05220主体部平面図・断面図
（土壙墓Ｓ05225）

〔主体部Ｓ05225〕　マウンド北東部で主体部１基を検出した。東西を主軸とする長円形の土壙で長辺1.8m、短辺1.2m、深さ0.4mをはかる（図108）。木棺材も痕跡も検出されず、土壙墓と判断した。成人人骨が数点出土している。部位が同定できたのは上腕骨のみであった。頭位は東を向く。遺存状況が悪く、細かな部位や被葬者の年齢・性別などは特定できなかった。

〔方形周溝墓Ｓ05240〕　調査区西北部で検出した方形周溝墓である。南端をわずかに検出したにすぎず、全体の規模や向きは不明である。高さは1.1～1.2mをはかる。堤状遺構S05261との間に、周溝墓の東辺から南辺を囲む周溝S05241を検出した（図106）。周溝は幅4.0m、深さ1.4mをはかる。また、この周溝墓の北にあたる大阪府教育委員会の試掘第２トレンチで方形周溝墓の北東端を検出しており、図上で復原したところ規模・位置とも整合するため、同一の遺構と断定した（図93）。復原推定の長辺は13m、短辺は８mになる。

マウンド上で主体部３基と、周溝の東辺及び西端で供献土器を検出した。周溝西端の供献土器は調査用鋼矢板で切断されているが、甕や壺３個体が直立して出土しており、原位置を保っている可能性が高い。従って周溝のこの部分が南西コーナーにあたる可能性が高い（図109）。時期はⅣ－１・２様式のものが大勢を占める。

主体部はマウンド上で３基検出した。ただしその出土位置が通常みられる中心部ではなく、マウンド

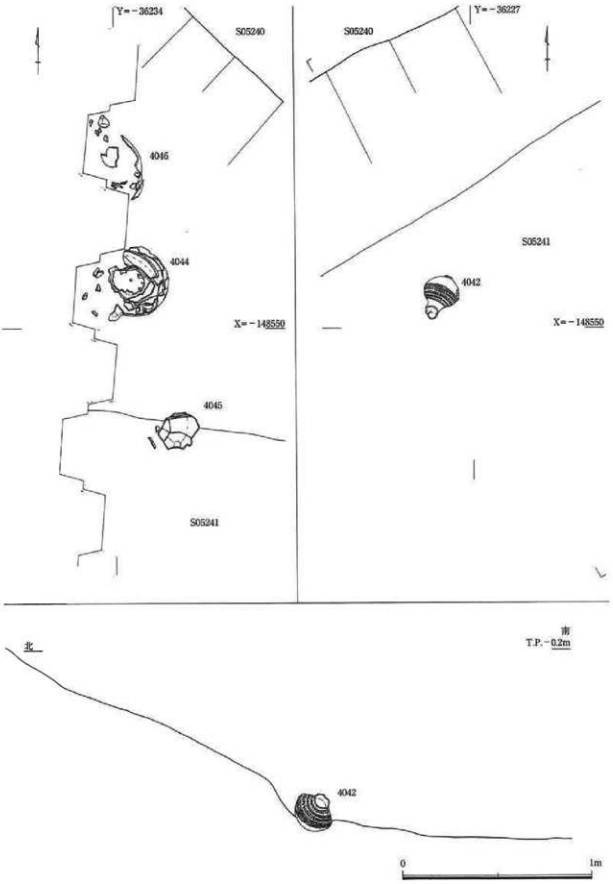


図109　99－5区第19面方形周溝墓S05240供献土器出土状況図

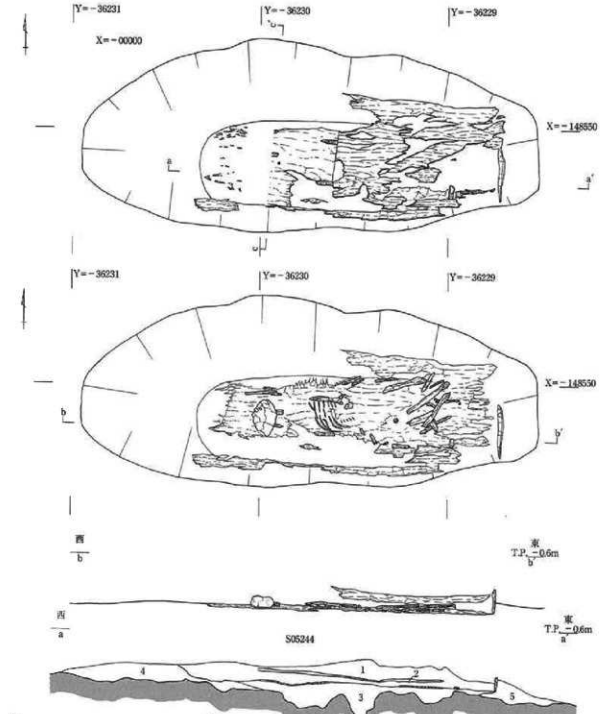


図110　99－5区第19面方形周溝墓S05240主体部平面図・断面図－1
（木棺墓S05244）

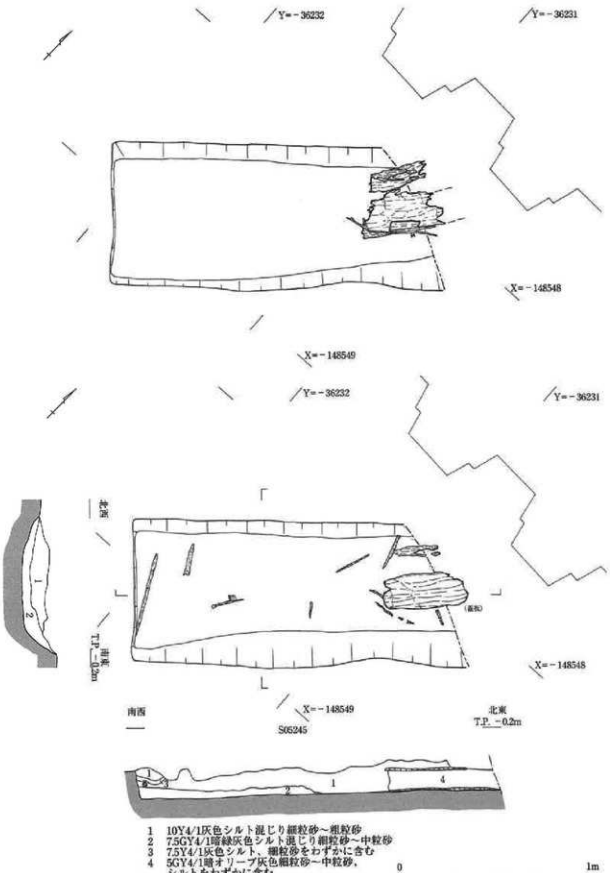


図111　99－5区第19面方形周溝墓Ｓ05240主体部平面図・断面図－2
（木棺墓Ｓ05245）

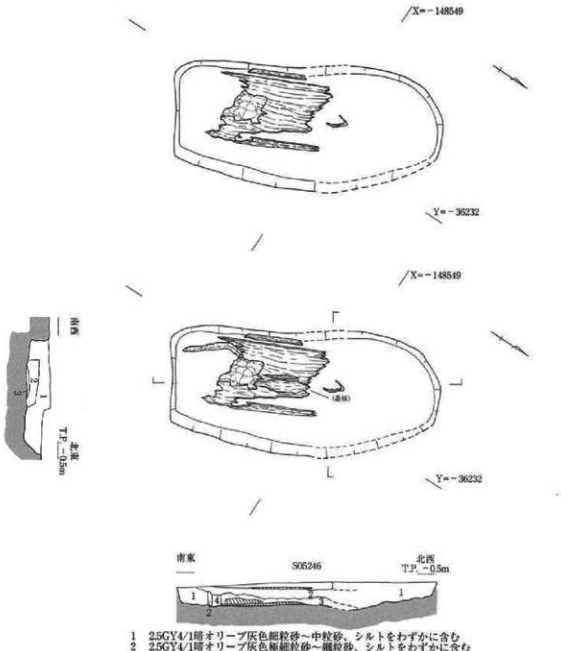


図112　99－5区第19面方形周溝墓S05240主体部平面図・断面図－3
（木棺墓S05246）

の南端、周溝肩部に位置する。主体部S05244などはおおむね全形が周溝内におさまりマウンド斜面に立地する。これは、主体部の埋葬時期と、今回検出したマウンドの形成時期にずれがあるためかと考えられる。

〔主体部S05244〕　99－5区方形周溝墓主体部中、最も遺存状況の良い主体部と言える。頭を西のほぼ正方位に向けて、主体部の掘方もほぼ東西の正方位に主軸をもってマウンド・周溝の斜面から出土した（図110）。掘方は不整形をなし、東西の長辺が2.4m、南北の短辺が1m強をはかる。深さは0.2～0.3mと浅く、断面形状は逆台形をなす。掘方底部の凹凸が著しい。これは主体部の立地状況に起因すると思われる。前述の様にこの主体部はマウンドの斜面中、周溝の中という通常ではあまりあり得ない場所か

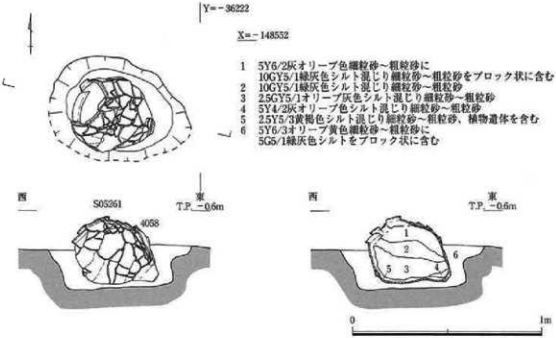


図113　99－5区第19面堤状遺構S05260土器棺（S05261）出土状況図

ら検出された。覆土を丁寧に除去して堆積状況を確認しているため、第19面で今回検出したマウンドがここまでのびていたとは考えにくい。しかし主体部S05244はベース面に直接ではなく盛り土の途中で形成されており、古い時期には主体部S05244周辺を中心として方形周溝墓が形成され、その後より北西へと中心が移っていった可能性もある。その際にさらに盛り土がなされ、そして後に主体部S05245や主体部S05246が作られたかと推測する。

さて、S05244では、掘方内で木棺を検出した。底板と蓋板の一部、南側側板、小口板などが残存する。木棺底板は現状での長さが1.6m、幅が0.7m、厚さは1cm程度と薄く、所々欠損する。蓋板も東側半分のみ残存する。木棺構造も組み合わせ式だが、通常の木棺と異なった板の組み合わせ方で棺身の横断面が半月形のドーム状をなす可能性がある。

被葬者も埋葬状況が分かる程度に頭骨・肋骨・上腕骨・大腿骨・頭骨・歯冠の一部が残存していた。大阪市立大学の安部みき子先生に同定いただいたところ、頭位は西で、頭を含め体全体が南を向き脚も膝を南方に向けて屈曲させていた。また手は背中の方に伸び、左右が合わさった後ろ手の状態を呈していた。この姿勢からは、緊縛されていた可能性も指摘できる。成人人骨と見られるが具体的な年齢や性別は不明である。埋葬状態や木棺の型式からも他の主体部とは性格を異にし、被葬者の特異性を伺わせる。木棺内で人骨以外は出土していない。

〔主体部S05245〕　マウンドの南端で検出した。主軸を北東－南西にもつ木棺墓である。掘方は北側を側溝によって切られるが現存長1.6m、幅0.8mの長方形で、深さ0.2mである（図111）。木棺の蓋板、底板、側板が北側でわずかに残るのみで、構造などは不明である。材はコウヤマキである。人骨等は検出していない。

〔主体部S05246〕　主体部S05245の南辺を切った状態で検出した。主軸を南東－北西にもつ木棺墓である。掘方は長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.15mをはかる（図112）。南西部でのみ蓋板、底板、側板の一部を検出した。材はコウヤマキである。

以上のように方形周溝墓S05240の主体部は切り合い関係を有し、主軸の方向が異なるなど小時期差を

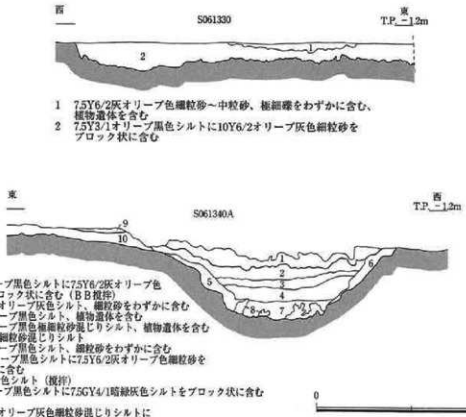


図114　99－6区第20面溝Ｓ061330・Ｓ061340Ａ断面図

もつと考えられる。

〔堤状遺構Ｓ05260〕　周溝Ｓ05221と同Ｓ05241に挟まれた堤状遺構である（図77・106）。東西の方形周溝墓及び周溝を造成した際のベース面を堤状に整えている。北側は調査区外に伸び東大阪市教育委員会47－２次Ｄ地区へと続く。東大阪市教育委員会担当調査者はこの遺構を方形周溝墓へ至る墓道と捉えているが、方形周溝墓にとりつく造り出しなどは見られないため堤状の遺構として捉えた。Ｓ05260の東南部、周溝Ｓ05221との境界で土器棺墓とおぼしき遺構（S05261）を１基検出した。

土器棺墓S05261は長径0.8m、短径0.5mの長円形の土壙に甕を埋置していた（図113）。土壙の深さは約0.3mで断面略台形をなす。甕は口縁部を西に、底を東に向ける斜めに倒れた状態で埋めていた。甕（4058）はⅢ－１様式で、内外面ともに煤が付着する。蓋は出土していない。また、甕内部は大きくは３層の堆積が見られるが遺物は出土していない。通常の土器棺墓では土器を蓋に用いることが多いので、本遺構は単に土器を埋納した遺構の可能性があるが、ここでは一応土器棺墓としておく。

以上のような99－５区の方形周溝墓群や土器棺墓などの墓域を総括してみると、99－３区の墓域と比較して規模も大きく時期もやや新しくなる傾向をもち、東大阪市教育委員会が検出した４基の方形周溝墓とあわせて７基からなる別の一群を形成するといえる。この群の中でも小時期差はみられ、おおむね東から西へ新しくなる傾向がある。

また、遺存状態は悪いが一つの方形周溝墓から３基ないし４基の木棺墓または土壙墓、全体で８基の主体部が検出された。このうちの少なくとも４基からは人骨が確認された。

供献土器が一定量出土したのも特徴の一つである。南西隅や南東隅にかたまって出土する傾向がみられる。すべて弥生時代中期後半に属するが、前述のような若干の時期差をもつ。供献土器は生駒山西麓

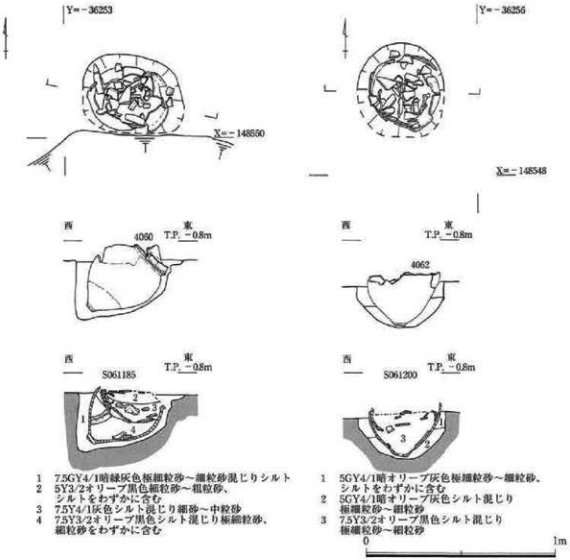


図115　99－6区第19面土器棺墓出土状況図（土器棺墓S061185・土器棺墓S061200）

産胎土の土器が約75%を占め、通常の集落域での比率からはかなり高い数字となる（第8章第5節参照）。非生駒山西麓産胎土の土器中には摂津地域など他地域からの搬入土器を含む。

99－3区以東の方形周溝墓群とこの方形周溝墓群とは墓域の移動ではないのは明確で、同時存在していた、埋葬主体の所属集団の何らかの違いをある程度反映した可能性があるものと捉える。

7）99－6区

本調査区では計2面の遺構面を検出した。東から続いてきた弥生時代後期と中期遺構面の鍵層である黒色シルト～粘土層が、99－6区においては後世流路の氾濫によって浸食を受けほとんどみられなくなる。当区では弥生時代中期以降やや地形が低いこともあり、溝や流路などが形成されては氾濫する繰り返しで地表面は高低差が生じ、凹凸をもつ地形となる。

微高地部分にわずかに弥生時代中期包含層が残るが、それ以外は弥生時代後期の遺構や包含層となる。つまり、弥生時代後期遺構面に部分的に弥生時代中期の遺構・遺物が残存して伴うような状況を呈する（図78）。微高地部分で2基の土器棺墓が検出されたので、当区までを墓域に含めた。

a．第20面

調査区の中央に大きく広がる弥生時代後期の流路S061210による浸食部や、調査区西端の同時期の落

ち込みＳ061304以外の範囲において、北東端で落ち込みＳ061330と西側で溝Ｓ061340Ａ、その他に土坑やピットなどを検出した（図78）。

なお、流路Ｓ061210の範囲の下部において、それに先行する弥生時代中期の流路あるいは溝状遺構が存在していた可能性もうかがわれたが、現地調査では明確にできなかった。

〔溝Ｓ061330〕　調査区の北東端にむかってゆるやかに落ち込んでいく溝状遺構である。幅3.0m強、深さ0.1mをはかる（図114）。本遺構周辺部では、第20面・第19面の峻別が容易でないこともあったが、本遺構は一定の埋積が進行した状態で、次の第19面においても継続して存在したと判断している。

〔溝Ｓ061340Ａ〕　調査区西半の微高地を南北に通る溝である。幅2.8m、深さ0.8mをはかる（図114）。第19面でも同位置に南北方向の溝が存在するため、Ｓ061340Ａという遺構名称を与えた。

ｂ．第19面

第20面と似た状況を呈する。溝Ｓ061340Ａと同位置に溝Ｓ061340を検出した。溝Ｓ061330と弥生時代後期の流路Ｓ061210の間に高まりＳ061230を検出した。この高まりから土器棺２基を検出した（図78）。

〔溝Ｓ061340〕　溝Ｓ061340Ａの上層でやはり南北方向の溝を検出した。溝Ｓ061340Ａと同規模の溝である。

〔土器棺墓Ｓ061185〕　高まりＳ061230上の南端、Ｙ＝－36253付近で検出した土器棺墓である。掘方は直径約0.6mの楕円形状の土壙に大形の甕が口縁部を東の上方にむけて埋置されていた（図115）。甕の形状に合わせて掘り窪められており、断面は斜位のＶ字形をなす。深さは0.3m。甕の体部下半には穿孔をもつ。内外面に煤が付着していたため、使用土器からの転用品と考えられる。棺身である甕はほぼ器形をとどめて出土したが、口縁部上方で別個体の破片が多く出土した。復原したところ脚柱部を打ち欠いた高杯となり、出土状況が口縁部を下に向けていたことから棺蓋に転用されていたものと判断した。杯部に甕と同様穿孔がみられる。

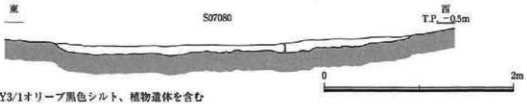
〔土器棺墓Ｓ061200〕　高まりＳ061230上の西寄り、Ｙ＝－36256付近で検出した土器棺墓である（図115）。直径0.5m、深さ0.3mの円形の掘方に大形の甕を正置させる。甕は底面部に穿孔をもつ。Ｓ061185同様、外面に煤が付着することから、使用していた土器の転用品である。棺蓋に用いられていたものは大形の無頸壺だが、欠損が著しかった。

どちらの土器棺とも棺内部からは、棺の破片土器の他は出土していない。また、棺身と棺蓋の土器にやや時期差はみられるが、この土器棺の時期としては弥生時代中期後半（Ⅳ－２様式前後）と考える。

99－６区では弥生時代中期遺構面が浸食を受けているため全容を知ることができなかったが、元来は全域に広がっていたと考えられる。確定的ではないが、高まりＳ061230は断面観察などからも明確な盛り土は確認されず、方形周溝墓になる可能性は低いかと思われる。そうすると、東側の99－５区の方形周溝墓群のなかの堤状遺構Ｓ05260のような高まりに土器棺墓群が存在していたと推測できる。つまり、方形周溝墓群と場所を違えた箇所に土器棺墓群が存在していたことになるが、その当否は今後の南側での調査成果を待ちたい。

（３）集落域の様相

前述のように99－７区から99－９区にかけては地表高が下がり低地部となり、遺構密度は希薄である。狭義には99－10区からを集落域とすべきだが、広く墓域以西を集落域としてここでは捉えることとする。ただし、遺物の記載については遺構の切り分けと食い違う部分があり、土器棺など明らかに墓域に関係する土器は墓域の土器に、それ以外は集落域の土器に含めた。



1　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体を含む

図116　99－7区第17面溝S07080断面図

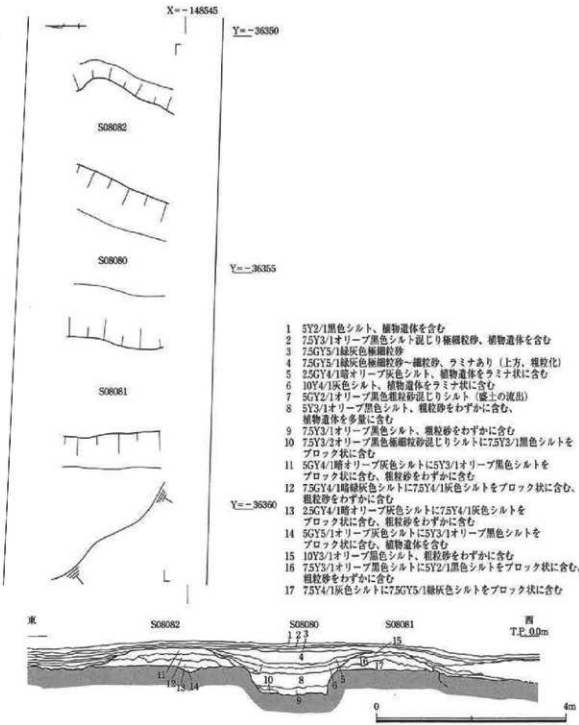


図117　99－8区第12面溝S08080・堤状遺構S08081・S08082平面図・断面図

1）99－7区

T.P.－1.0m前後まで遺構面高が下がり、当区から西は低地部となる。本調査区では1面の遺構面を検出した。

a．第17面

調査区西半で溝を検出した。また、有茎式の石鏃が1点出土した（図79）。

〔溝S07080〕　幅約4m、深さ0.1m程度の浅い溝である（図116）。北西－南東を主軸とする。遺物を含まない。

2）99－8区

本調査区では1面の遺構面を検出した。

a．第12面

調査区西半で溝とその両肩に堤状の遺構を検出した（図79）。

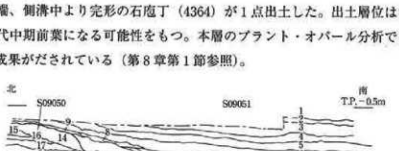
〔溝S08080〕　調査区西半のY＝－36355付近で検出した南北方向の溝である（図117）。幅約3m、深さ1mをはかる。両肩に堤状遺構S08081・S08082を有する。弥生時代中期後半の土器を少量含む。

〔堤状遺構S08081・S08082〕　溝S08080の両肩に形成された堤状の遺構である（図117）。幅約2m、ベース面からの高さは0.5mをはかる。この遺構の盛り土はベースの土をブロック状に含む。溝S08080を掘削した際に生じた土を使って盛り上げたと推測できる。つまり溝と堤状遺構は同時に作られたといえる。

この溝・堤状遺構の機能については推測の域を出ないが、後述する99－10区の集落域に付随する区画と排水を兼ねた溝や堤である可能性が考えられる。

99－8区の弥生時代中期遺構面の時期は出土遺物が少なく、限られた場所でしか出土していないきらいはあるが、墓域の時期と同様に中期後半に位置づけられる。

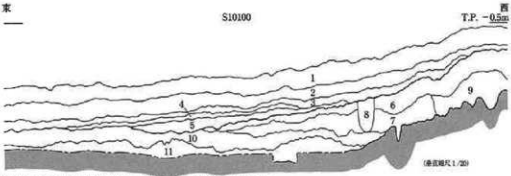
また、調査区東端、側溝中より完形の石庖丁（4364）が1点出土した。出土層位は中期後半より下層であるため弥生時代中期前葉になる可能性をもつ。本層のプラント・オパール分析では、稲作がおこなわれていたという成果がだされている（第8章第1節参照）。



1　5Y4/1灰色シルト、ラミナあり
2　2.5Y3/2黒褐色シルト、植物遺体をラミナ状に含む、炭酸鉄（タニシ？）を含む
3　5Y4/1灰色シルト、植物遺体を含む
4　2.5Y3/1黒褐色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
5　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト、植物遺体をわずかに含む
6　5Y2/1黒色シルト、植物遺体をラミナ状に多く含む
7　7.5GY5/1緑灰色シルト、植物遺体をわずかに含む
8　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体を含む
9　7.5Y4/1灰色シルト、極細礫をわずかに含む
10　10Y3/1オリーブ黒色シルト、植物遺体をわずかに含む
11　5Y4/1灰色シルト、極細礫をわずかに含む
12　5Y4/1灰色シルト、粗砂をわずかに含む、植物遺体をラミナ状に含む
13　5Y4/1灰色シルトに10Y5/1灰色シルト・5Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む、植物遺体・タニシを含む
14　5Y4/1灰色極細礫混じりシルト
15　5Y4/1灰色シルト、粗粒砂をわずかに含む
16　5GY5/1オリーブ灰色シルトに5Y4/1灰色シルトをブロック状に含む、粗粒砂をわずかに含む
17　10Y3/1オリーブ黒色シルト、ピビアンナイトを含む
18　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト、植物遺体・ピビアンナイト（タニシ）を含む
19　7.5GY6/1緑灰色シルト、植物遺体をわずかに含む
20　7.5Y4/1灰色シルト、植物遺体をわずかに含む
21　5Y3/2オリーブ黒色シルト、植物遺体をラミナ状に多く含む
22　7.5Y4/1灰色シルト
23　5Y3/1オリーブ黒色シルト
24　7.5Y4/1灰色シルト～極細粒砂、植物遺体をラミナ状に含む
25　2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト、植物遺体（ヨシ？）を含む

0　2m

図118　99－9区第10面溝S09051・堤状遺構S09050断面図



1　5Y2/1黒色極細粒砂混じり粘土、植物遺体・炭化物を多く含む
2　7.5GY4/1暗緑灰色シルト、植物遺体を含む
3　7.5Y4/1灰色シルト、粗粒砂をわずかに含む
4　7.5Y4/1灰色シルト、粗粒砂をわずかに含む、炭を含む
5　5Y4/1灰色シルト、粗粒砂をわずかに含む、炭を含む
6　5Y3/1オリーブ黒色シルト、粗粒砂をわずかに含む、炭を含む
7　5Y4/1灰色粗粒砂混じりシルト、植物遺体を含む
8　5Y3/1オリーブ黒色極細砂混じりシルト、植物遺体を多く含む
9　5Y2/1黒色シルト混じり粗粒砂～亜円礫に
　7.5GY5/1緑灰色シルトをブロック状に含む、炭を含む
10　5Y3/1オリーブ黒色粗粒砂混じりシルトに
　5GY5/1オリーブ灰色シルトをブロック状に含む
11　5GY5/1オリーブ灰色シルトに
　5Y3/1オリーブ黒色シルトをブロック状に含む

0　4m

図119　99−10区第13面低湿地状遺構Ｓ10100断面図

3）99−９区

本調査区では計２面の遺構面を検出した。

a．第16面

調査区東側で北西－南東に走る溝Ｓ09060を検出した（図80）。

b．第10面

弥生時代後期の黒色シルト層を除去すると、調査区南北辺の中心あたりを境として顕著な高低差がみられる。東西方向の堤状の遺構Ｓ09050と溝Ｓ09051を検出した（図80）。

〔堤状遺構Ｓ09050〕　幅２ｍ、高さ0.9ｍをはかる。弥生時代中期のベース面にシルト諸層が堆積しており堤状をなす（図118）。これらの諸層を現地調査時には「盛土」の可能性を考えたが、松田順一郎氏の分析では否定的である（第８章第７節参照）。

〔溝Ｓ09051〕　Ｓ09050の南を東西に走る溝である。幅３ｍを越え、深さは１ｍをはかる。堤状遺構の斜面、溝の壁にあたる部分には堤状部からの土の流失がみられる。

本遺構からは、土器とともに穿孔をもつ板や高杯脚部を模した様な木製品が出土している。99－７・８区に比べるとやや人間の生活痕跡が濃厚となる。なお、本遺構は現地調査時には当初、上層の落ち込み（Ｓ09040）として把握していた部分も含まれるが、最終的にそれらを溝として評価したものにあたる。

4）99−10区

99－７区から99－９区にかけて徐々に下降していた地形は99－10区から再び上昇する。その結果、弥生時代中期相当層の堆積が厚くなる。現地調査では、第14面～第10面という計５面の遺構面として調査を実施した。このうち最下の第14面としたものは、上位面遺構の検出もれ等が多くみられた検出面であるため、以下では第13面に含めて報告する。

a．第13面

オリーブ灰色粗粒砂層上面で検出した（図81）。調査区の東側、全体の約1/4にあたる部分で低湿地状の遺構Ｓ10100を検出した。それより西側はほぼ平坦で一面に井戸・溝・土坑などの遺構を検出した

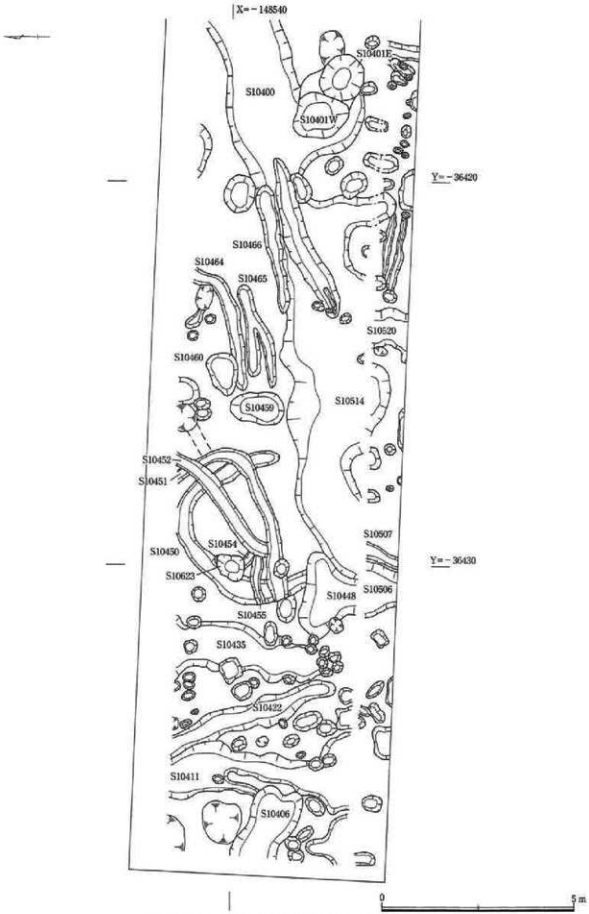


図120　99－10区西端部遺構平面図－1（第13面）

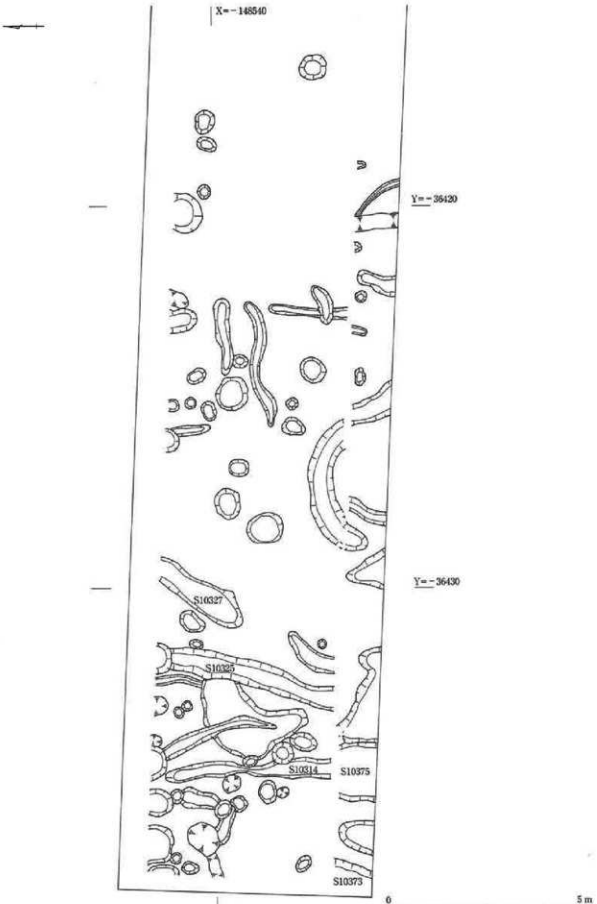


図121　99－10区西端部遺構平面図－2（第12面）

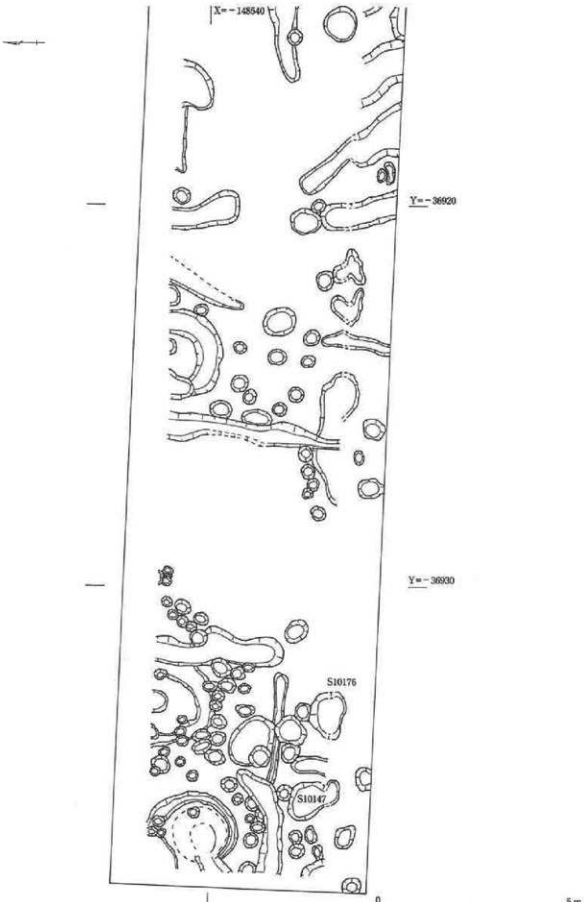


図122　99－10区西端部遺構平面図－3（第11面）

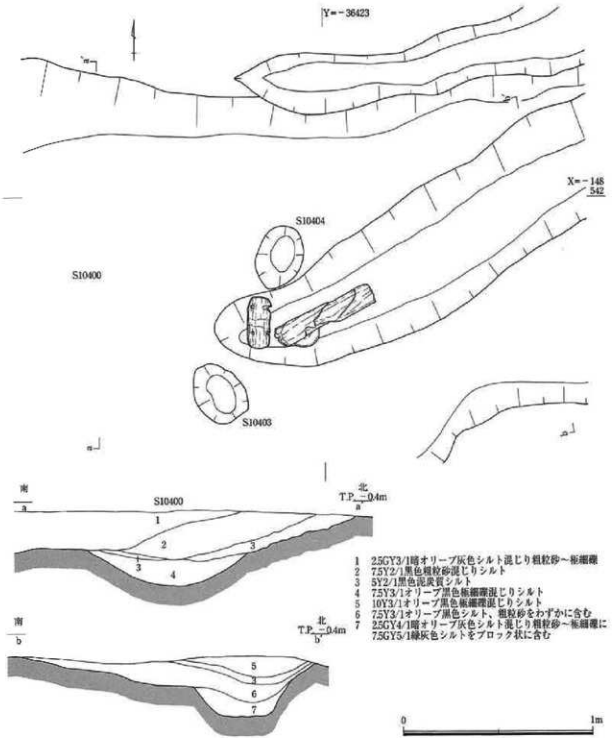


図123　99－10区第13面溝Ｓ10400田下駄出土状況図

(図120)。遺構密度は非常に高い。

〔低湿地状遺構Ｓ10100〕　主軸を北西－南東とする大きく落ち込んだ遺構であり、第13面で検出されるがそれ以降も第10面まで存続する。現状での東西幅10mで南北は調査区外にさらにのびる。調査区北西端で溝Ｓ10400と交差し、Ｌ字状に屈曲する。深さは約１ｍ（図119)。遺物を大量に含み、石庖丁、スクレイパーなどの石器も出土する。弥生時代中期後半の所産である。

〔溝Ｓ10400〕　Ｓ10100と東を接し西南西－東北東にやや蛇行する溝である。およそＹ＝－36420付近まで10m以上の長さをもち、溝Ｓ10514につながり一連のものとしてＹ＝－36430付近までのびる可能性

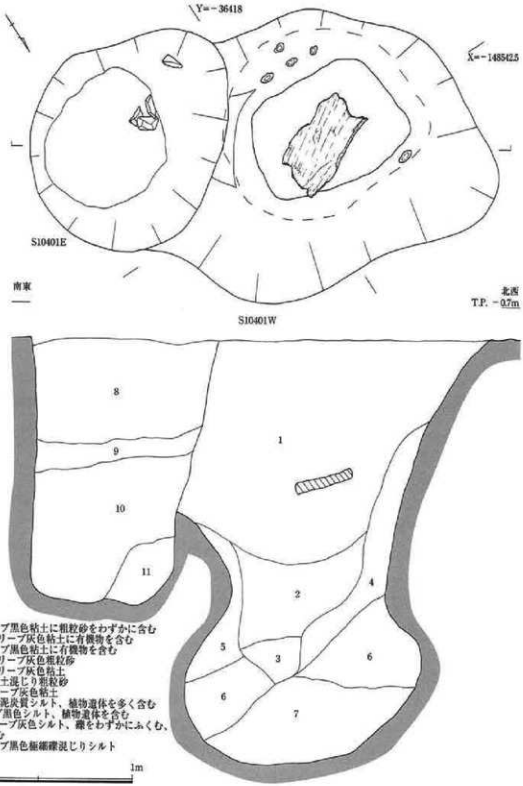


図124　99ー10区第13面井戸Ｓ10401W・Ｅ平面図・断面図

がある。幅1.5～２m、深さ0.2～0.4mをはかる。溝の中央ではさらに小さい溝状の窪みをもつ。この窪み部分から田下駄や鍬、鋤などの木製品、土器が出土している（図123）。出土土器はⅣ様式前半。

〔井戸Ｓ10401W・Ｅ〕　調査区中央部で溝Ｓ10400に北を接して、２基の井戸を検出した（溝との切り合い関係は明確にはできなかった）。当初、大形の一つの土坑としてＳ10401という名称を与えたが、その後二つと判明したため東側をＳ10401Ｅ、西側をＳ10401Wとして調査した。Ｓ10401ＥがＳ10401W

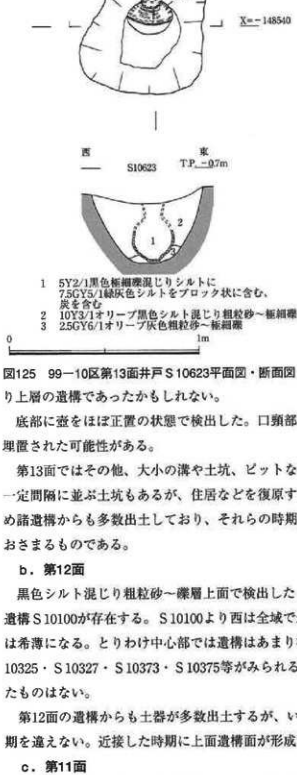


図125　99－10区第13面井戸Ｓ10623平面図・断面図

を切るのでより新しい遺構といえる（図124）。

Ｓ10401Ｅは直径１～1.2ｍの楕円形を呈し、深さは1.4ｍをはかる。

Ｓ10401Ｗは直径1.5～２ｍの不整な円形で、深さ2.2ｍ、深くなるに従って径がすぼまり、底部近くで広がる断面袋状をなす。上層埋土中からやや湾曲した板状木製品が、その下層からは横槌が出土している。埋積状況はＳ10401Ｅが水平堆積で徐々に埋積しているのに対し、Ｓ10401Ｗは上部と下部の堆積が異なる。出土土器から先述の溝と同時期かやや新しいものと考えられる。

〔井戸Ｓ10623〕　本来は下面の第14面遺構として検出したが、上述した理由により、ここで取りあげた。調査区西半、Ｙ＝－36430付近で検出した素掘りの井戸と判断した遺構である。直軸0.6～0.8ｍの不整な平面形で、深さは0.3ｍと浅いがこれは途中から検出したため本来の深さでない可能性がある（図125）。この付近では、遺構埋土と遺構面上包含層との識別が難しく、そのため本来はより上層の遺構であったかもしれない。

底部に壺をほぼ正置の状態で検出した。口頸部を水平にていねいに打ち欠いてある。意図的に井戸に埋置された可能性がある。

第13面ではその他、大小の溝や土坑、ピットなど数百に及ぶ遺構を検出した。溝で環状に巡るものや一定間隔に並ぶ土坑もあるが、住居などを復原するに至らなかった。遺物も溝Ｓ10100、Ｓ10400をはじめ諸遺構からも多数出土しており、それらの時期から第13面は弥生時代中期後半（Ⅳ－１・２様式）におさまるものである。

ｂ．第12面

黒色シルト混じり粗粒砂～礫層上面で検出した（図81）。第13面に引き続き調査区の東半は低湿地状の遺構Ｓ10100が存在する。Ｓ10100より西は全域で遺構が検出される（図121）が、第13面に比べると遺構は希薄になる。とりわけ中心部では遺構はあまり検出されない。調査区西側で南北方向の溝Ｓ10314・Ｓ10325・Ｓ10327・Ｓ10373・Ｓ10375等がみられるのが特徴的である。出土遺構で明確な機能を特定できたものはない。

第12面の遺構からも土器が多数出土するが、いずれも弥生時代中期後半のもので、第13面と大きく時期を違えない。近接した時期に上面遺構面が形成されたといえる。

ｃ．第11面

第12面から第10面までは土質が似るが、黒色シルト混じり粗粒砂層上面で検出した。平坦面で溝や土坑を検出した（図82）。遺構密度は第12面と同じ程度である。特に西側に密集し、やや大形の土坑Ｓ10147・Ｓ10176などは井戸になる可能性があるが判然としない。調査区中央で円形に並ぶピット群を検

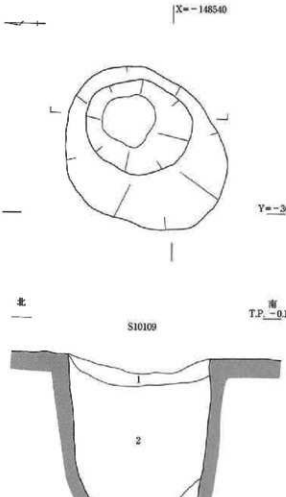


図126　99－10区第10面井戸Ｓ10109平面図・断面図

出したが、建物を復原することはできなかった。

第11面の時期も第13・12面とほぼ同じ範疇におさまる。

ｄ．第10面

黒色粗粒砂混じりシルト層上面で検出した。標高は高いところでT.P. 0 m、低いところでT.P.－0.5m前後である。第13面から第11面までと遺構の様相が変わり、Ｓ10100から続くＳ10101やＳ10104・Ｓ10105などの地形の高低差によって生じた窪み様の溝状や大形土坑状を呈する遺構がほとんどである。本集落域の終息状況を示す遺構面としてとらえられるものである（図82）。唯一、井戸状遺構としてＳ10109を検出した。

〔溝Ｓ10101〕　調査区中央部で検出した西南西－東北東を主軸とする落ち込み状の溝である。平面的には、Ｓ10100から派生するように北東から南西にのび、途中で二股に分かれる。壺や甕などの破片が出土する。

〔井戸S10109〕　調査区西端で検出した。平面形はやや不整な円形で、直径0.8mで底面付近はすり鉢状に下がる。深さ1.3mで、１m辺りから急激にすぼまる（図126）。素掘りの井戸と推定したが、遺構面の様相との関係で、確証に欠けるところもある。遺物は出土していない。

第10面でも一定量の土器が出土したが、下層の遺構面より若干新しい時期のものが主流となる。

以上99－10区の弥生時代中期遺構面について概観すると、遺構の密集度や井戸などの遺構がみられることから人間の生活痕跡が濃厚である。また遺物も田下駄や鋤などの農具が出土していること、土器に煤などの使用痕がみられ、摩耗していないことからもこの近辺で使用、廃棄された可能性が高い。99－10区は、集住状態を示す居住地として利用されていた区域といえるだろう。

（３）小結

弥生時代中期の遺構の様相をみてきたが、今回の調査で判明したことや特徴を今一度まとめてみよう。従来確認されていた以外に、遺跡北東端で少なくとも二つの群からなる弥生時代中期後半の方形周溝墓域を確認した。この二群は規模などの違いからそれぞれが一定の個性を示す群をなすと考えられる。また、時期的には一つの群の中でも東から西へ新しくなる傾向が見られるようである。墓域は今回調査区

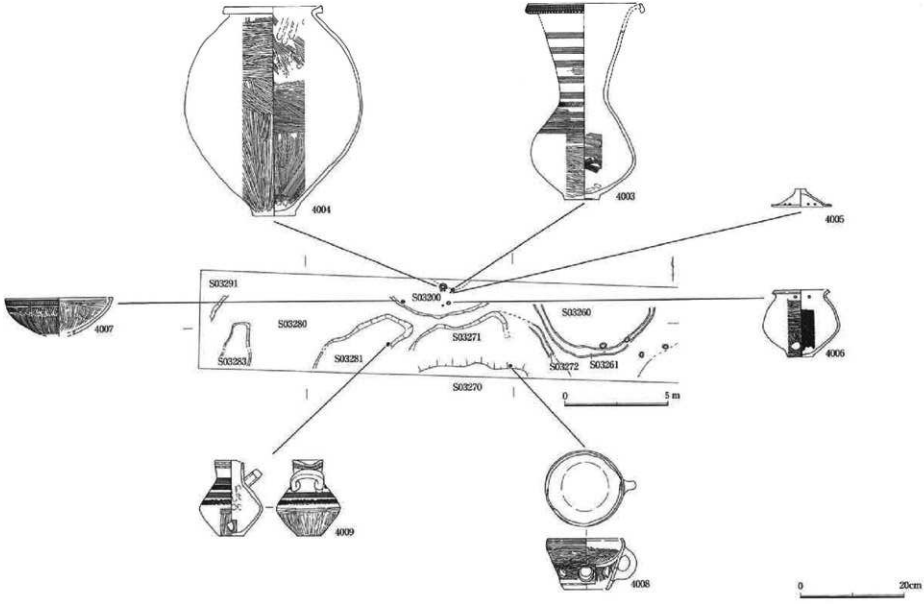


図127　99－３区第14面平面図及び土器出土位置図

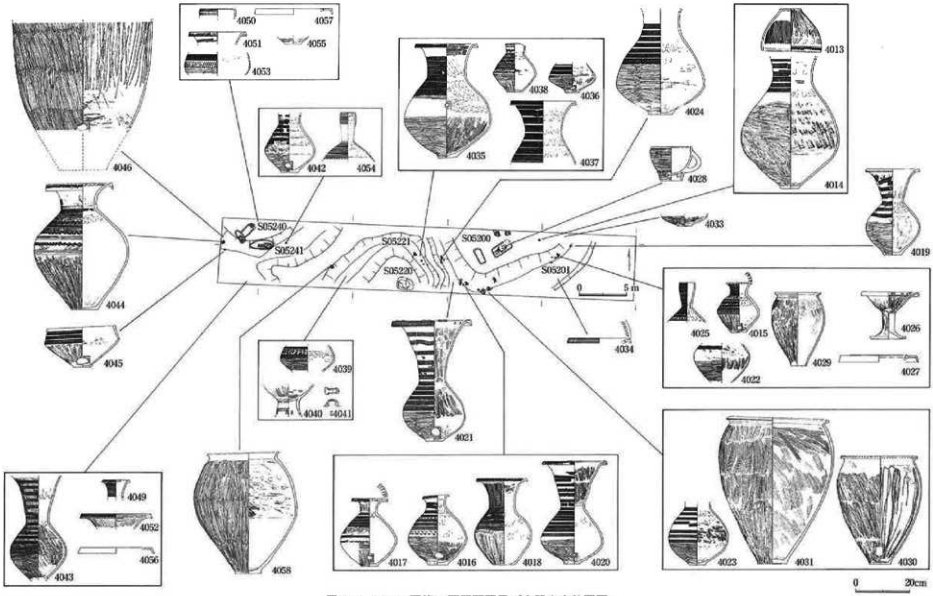
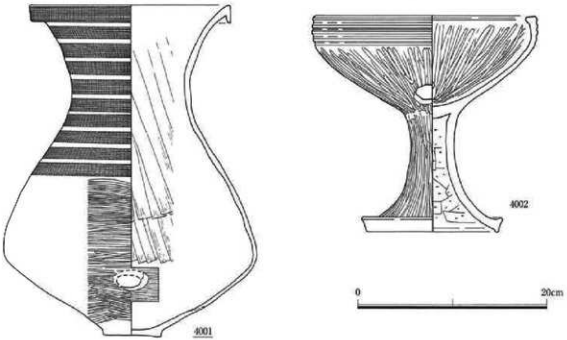


図128　99－5区第19面平面図及び土器出土位置図



第15面〔S01180関係（4001）、S01182関係（4002）〕
図129　弥生時代中期土器実測図－１（99－１区：墓域出土）

のさらに南東や南西に広がる可能性をもつ。

中央の低地を挟んで西側では集落域が検出された。墓域と集落域との近い距離関係とそれぞれの出土土器の様相から、大局的には両者が有機的な関係をもってほぼ同時に併存していたものと理解するのが自然かと考えられる。

ただ、墓域は集落域に比べると時期的にやや古い様相の供献土器等もみられることから、この集落と墓域が全期間を通して完全に同一主体の遺構として併存していたかは検討の余地もあろう。

（川瀬）

2．遺物

（1）土器　（図127～162、写真図版64～83）

1）墓域の出土品

a．出土状況ほか

今回の調査では、方形周溝墓が、99－１区で可能性の高いもの１基（ないし２基）、99－３区と01－３区で８基、99－５区で３基が確認されている。また、99－６区では土器棺墓と想定できる遺構が検出された。これら墓域関係の遺構にともなった土器群は、完形に復原できるものがを多くを占めるが、破片での検出例を含めると62個体の資料が図化できた。また、本遺跡でこれまで確認されている方形周溝墓群域では、先行する集落域に重複して墓域が形成される場合が多いが、今回の調査範囲では、墓域と集落域が地点を異にしている。そのため、周溝墓の上・下層では弥生土器を全くといってよいほど検出できず、また周溝墓の盛土中からでもごく例外的にしか出土していない。したがって、本項で報告する土器資料に関しては、いずれも墓域（方形周溝墓や土器棺）に関連した資料といっても過言ではない。

さて、方形周溝墓にともなう土器群（その多くはいわゆる供献土器）は、それぞれの周溝内に落ち込

むようなかたちで検出されているが、集中する箇所が認められいくつかの単位で区分できる。それぞれの土器群の出土位置は図127・128（99－3区・5区）に示した。以下に、それらの個々の概要を述べることにする。なお、時期表現に関しては、『弥生土器の様式と編年』の河内地域小様式（寺沢・森井1989）に準拠したが、やや特定が流動的であったり小様式幅をもちそうな資料についてもできるだけ所属様式を限定する方針で記載した。

b．99－1区方形周溝墓状遺構出土

〔方形周溝墓状遺構S01180・S01182〕（4001・4002）　方形周溝墓の周溝となる可能性が高い遺構S01184内から（4002）が出土し、近接して方形周溝墓にともなう可能性がある（4001）が、調査区北西隅で側溝掘削中に出土している。

（4001）は、体部屈曲点を下半部にもつ広口壺である。拡張された口縁部が垂下し、その面には櫛描きの簾状文を施している。口縁部・体部あわせて9帯の簾状文がめぐり、その施文原体は1.5cm・10条のものである。文様帯以下は横方向のヘラミガキで仕上げている。体部下半には焼成後に穿孔がおこなわれている。内面は板状の工具によると思われるヘラナデ痕が残る。Ⅳ－2様式。生駒山西麓産。

（4002）は、やや内湾して立ちあがる直口口縁とゆるやかに広がる脚部をもつ高杯である。口縁外面には凹線文が4条めぐらされ、杯下半部には2箇所の焼成後の穿孔がおこわれる。脚部は端部をつまみ上げている。外面調整は杯部底にヘラケズリをおこなった後、脚部から先にヘラミガキをおこなっている。杯部内面は底部を中心に放射状にヘラミガキをおこなう。脚部内面にはヘラケズリの痕がみられ、最後に脚端部をナデている。Ⅳ－3様式。非生駒山西麓産。

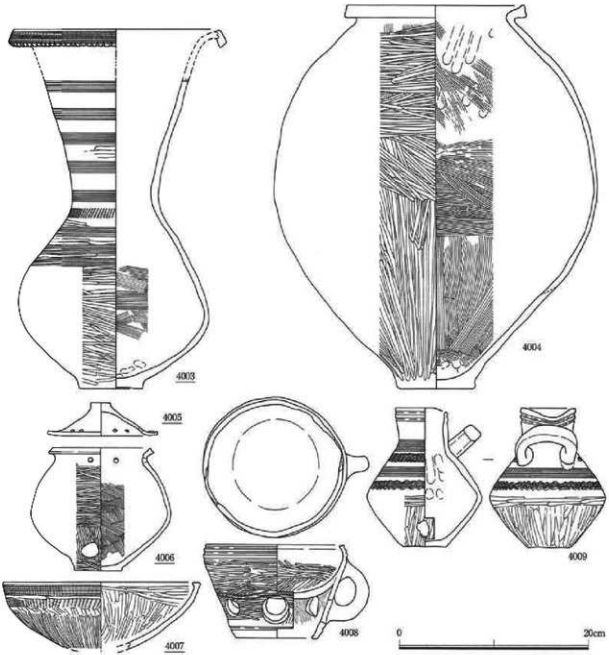
c．99－3区方形周溝墓出土

〔方形周溝墓S03200〕（4003～4007）　東大阪市教育委員会の第45－2次調査で確認された方形周溝墓1（東大阪市教委2002）に続く周溝からまとまって出土している。その位置は、周溝墓全体からみれば、南端のコーナー部付近にあたる。

（4003）は、口縁端部を下方に拡張させた広口長頸壺である。端面には櫛描きの簾状文をめぐらせ、端部に刻目文を入れている。体部では9帯の櫛描文が確認でき、頸部の1帯のみが簾状文で、他は直線文である。文様帯間はヘラミガキが部分的に観察できる。体部はヘラミガキで仕上げられている。内面はハケののち、ナデをおこなっている。Ⅲ－2様式。生駒山西麓産。

（4004）は、「く」の字状に屈曲する口縁をもつ大形の甕である。体部中ほどに最大径をもち全体的に丸い体部になる。外面はハケの後、下半部を縦方向のヘラミガキ、上半部を横～斜め方向のヘラミガキで仕上げている。下半部から先にヘラミガキを始めている。内面も下半部から先に調整を始めている。まず縦方向にハケをおこなった後、最大径あたりで横方向のハケをおこなう。さらに上半部では縦方向のハケがみられるが、横方向のハケとの先後関係は不明である。この調整方向のちがいが、粘土帯の接合点による可能性もある。Ⅲ－2様式。非生駒山西麓産。

（4005）は、次の（4006）とセット関係になると考えられる蓋である。2個1組の紐通し用の穿孔が対角線上に2箇所みられる。内湾気味にのびる裾をもち、端部はやや上方につまみ上げられている。口縁端部の一部に欠損部がみられ、意図的な打ち欠きである可能性が強い。生駒山西麓産。（4006）は、口縁端部がナデにより面をもつ無頸壺である。蓋と結合させる紐を通す孔が2個1組で2箇所にみられる。外面は底部まで丁寧なヘラミガキで仕上げられるが、体部下半に焼成後穿孔をもつ。外面の一部に煤の付着がみられる。内面は細かいハケで仕上げられている。蓋（4005）と組み合う。Ⅲ－2～Ⅳ様式。

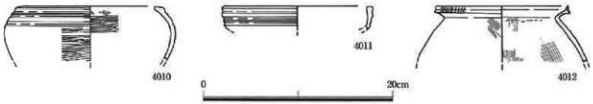


第13面〔Ｓ03200関係（4003～4007）、Ｓ03270関係（4008）、Ｓ03280関係（4009）〕
図130　弥生時代中期土器実測図－２（99－３区：墓域出土）

生駒山西麓産。

（4007）は、高杯の杯部である。口縁端部にはナデにより面が作られ、杯部は浅い。外面には櫛描きの簾状文と列点文が１帯ずつ施文されている。どちらの施文原体も幅1.2cm・８条であり、同一工具によるものと思われる。文様帯の間を埋めるようにヘラミガキが施されており、杯部下半も底から放射状にヘラミガキがおこなわれている。内面も杯底部から放射状にヘラミガキをおこなった後、口縁部付近を横方向のヘラミガキで仕上げている。遺存状況より杯底は円板充填で作られていたと推測される。Ⅲ～Ⅳ－１様式。生駒山西麓産。

〔**方形周溝墓Ｓ03270**〕（4008）　方形周溝墓は北東コーナー付近を検出したが、そのマウンド端付近の周溝内から出土している。把手・台付鉢で、口縁部に２条、脚部に１条の凹線文がめぐる。外面はハ



第10図〔S23200関係（4010～4012）〕
図131　弥生時代中期土器実測図－3（01－3区：墓域出土）

ケの後に、ヘラミガキで丁寧に仕上げられる。脚台部には、ヘラ状工具で2条の沈線文が施され、6方向に円形の穿孔がおこなわれている。鉢部は円形の粘土をはめ込むかたちで成形されており、内面は上半部をナデ、下半部をヘラミガキで仕上げる。脚部内面にはハケ痕が残っている。把手の装着法は、器面に孔をあけて差し込む方法がとられ、それを粘土で補強している。その状況は、脚部で顕著に観察できる。Ⅳ－1～3様式。非生駒山西麓産。

〔方形周溝墓S03280〕（4009）　周溝からの出土。その位置は、周溝墓全体からみれば東端のコーナー部付近にあたる。

水差し形で、算盤玉形の体部をもち、口縁に2条の凹線文がめぐる。体部には櫛描きの直線文と波状文が交互に配される。しかし、把手を貼り付けていた粘土が剥離した痕には施文されていないこと、把手の間には波状文が施文されていないことなどから、把手を貼り付けた後に櫛描き施文をおこなったと考えられる。把手の断面は方形である。体部下半はヘラミガキで仕上げられ、焼成後に穿孔がおこなわれている。内面はナデで仕上げられているが、体部上半に指頭圧痕が顕著である。Ⅳ－1～3様式。非生駒山西麓産。

d．01－3区方形周溝墓出土

〔方形周溝墓S23200〕（4010～4012）　南側の周溝ほかから出土。いずれも小片で、本来的に完形の供献土器であったかは確定的ではない。しかし、本区ではこの周溝墓以外には、中期の遺構や包含層はないので、方形周溝墓に関係する土器であるのはまちがいないであろう。

（4010）は、内傾する口縁をもち、その外面には3条の凹線文がめぐる鉢である。内外面ともにヘラミガキで仕上げる。Ⅳ－2様式。非生駒山西麓産。播磨地方に分布の中心をもつ形態の鉢にあたる（秋山1989）。

（4011）は、杯部の口縁部外面に凹線文をめぐらす高杯の杯部である。Ⅳ－2様式か。

（4012）は、口縁端部に面をつくり、そこへ部分的に刻目を施した甕である。内外面をハケで仕上げるようであるが、外面は明瞭には確認できない。Ⅳ－2様式か。非生駒山西麓産。

e．99－5区方形周溝墓出土

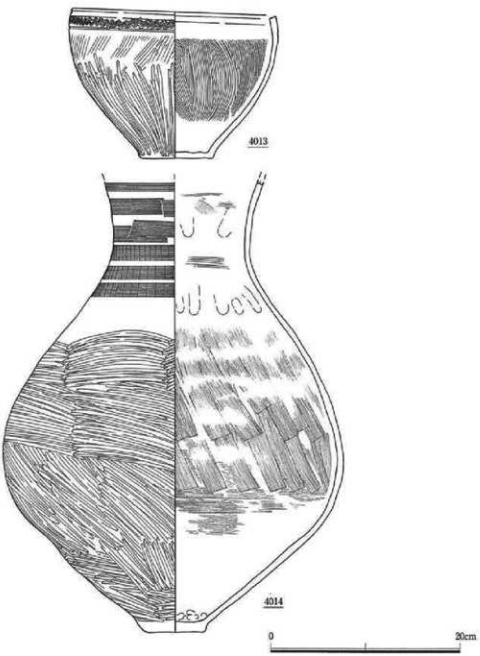
〔方形周溝墓S05200〕（4013～4034）　この方形周溝墓では、墳丘上から壺棺に用いられた（4014）とその蓋用土器（4013）が、墳丘上の主体部S05217の墓壙上面から（4028）が出土している。また、周溝からいくつかのまとまりで、多くの土器（4015～4027・4029～4034）が出土している。周溝内土器群の出土位置は図95～99に示したとおりであるが、主に、周溝墓の東コーナーと南コーナーの付近にまとまる傾向をみせる。

（4013）は、内外面ともに粗いハケで整えた後、外面は下半部を中心にヘラミガキを施す鉢である。口縁付近はナデがおこなわれ、端部は面が作られている。口縁部下の外面には沈線を1条めぐらせた後、

原体幅0.65cm・5条の櫛描きの波状文が施される。壺棺の蓋として利用されていた。Ⅳ－1様式。生駒山西麓産。

（4014）は、頸部上半が打ち欠かれた広口壺である。頸残存部では3帯の櫛描きの直線文と3帯の同簾状文が認められる。原体はそれぞれ幅1.6cm・14条である。調整は外面をヘラミガキで仕上げ、内面はハケの後指ナデがおこなわれている。壺棺として利用されていた。生駒山西麓産。Ⅲ～Ⅳ－1・2様式。

（4015）は、広口壺で、口縁端部に面をもち、内面には櫛描きの扇形文が施文される。また、体部下半には2方向に焼成後穿孔がみらる。体部外面には煤が付着し、底部は器壁表面が剥離している。頸部は縦方向のハケの後に櫛描きの直線文で飾られ、体部最上段には同扇形文がめぐる。頸部への施文原体



第19面〔S05200周辺〔4013・4014〕〕
図132　弥生時代中期土器実測図－4（99－5区：墓域出土）

は幅1.1cm・10条のものであるが、体部への原体は幅0.85cm・9条である。体部は施文後ヘラミガキがおこなわれており、これにより文様の一部が消されている。内面は底部付近と口縁付近にハケが認められるが、体部上半にはナデ痕が残る。Ⅲ－1様式。生駒山西麓産。

(4016) は、体部下半に焼成後穿孔をもつ壺である。口縁端部を下方に拡張し櫛描きの波状文をめぐらせている。頸部と体部上半部は、櫛描文で装飾されており、その原体幅は1.25cm・8条である。体部下半は左上がりのヘラミガキののち横方向のヘラミガキで仕上げる。内面は体部下半に左上がりのハケがみられるが、上半は指ナデで仕上げられている。体部外面に煤が付着している。Ⅲ様式。生駒山西麓産。

(4017) は、体部下半に焼成後穿孔をもつ広口壺である。口縁端部を下方に粘土を貼り付けて拡張した面に櫛描きの波状文および2個1組の円形浮文を5方向に貼り付けている。また、口縁内面には櫛描きの扇形文がめぐる。他に文様として体部の櫛描きの直線文や波状文があり、直線文の間を埋めるヘラ描きの斜格子文が特徴的である。右下がりの線で先に一周し、それに重ねて右上がりの線を描くことで格子文にしている。体部上半の直線文は間隔が詰められているが5帯である。体部下半はヘラミガキで仕上げられ、最下段の波状文を一部消してしまっている。櫛描文の原体はすべて幅1.1cm・8条である。Ⅲ～Ⅳ－1・2様式。非生駒山西麓産。

(4018) は、広口壺である。口縁端部が上下に拡張され端面をもつ。その端面および口縁内面には櫛描きの波状文がめぐらされている。文様は縦方向のハケの後、頸部以下体部に5帯の櫛描きの直線文が施される。原体は幅1.15cm・9条である。口縁下は端部の拡張にともなうと思われるナデにより、ハケが消されている。体部下半は縦方向のヘラミガキで仕上げられている。内面は体部にナデ、頸部にハケが認められる。体部外面には煤が付着する。Ⅲ－2様式。非生駒山西麓産。

(4019) は、口縁端部に刻み目をもつ広口壺である。外面はハケののち櫛描文が施されるが、頸部の1帯が簾状文で、他の5帯は直線文である。原体幅はいずれも1.45cmである。また、最上部の文様は右上がりの短い単位での施文を繰り返し一周している。その下の2段は同様に文様を継ぎ足している。簾状文とその下の直線文の間では、施文後に再びハケで整える。底部から体部最大径あたりにかけてはヘラミガキがおこなわれている。内面は、体部にハケがみられるが、頸部以上はナデで仕上げられている。Ⅲ－1様式。生駒山西麓産。

(4020) は、体部下半に焼成後穿孔をもつ広口壺である。口縁部は下方に拡張され面がつくられている。この面には櫛描きの波状文がめぐり、その上には上下2個1組の円形浮文が6方向に貼り付けられている。また、口縁内面には3個1組の円形浮文が4方向にみられる。外面の文様は、櫛描きの簾状文が体部中ほどまでおよんでいる。一番上位の簾状文は3帯分を螺旋状にめぐっている他は一周毎におわり、全部で17帯となる。櫛描文はすべて幅1.1cm・12条の原体で施されている。体部下半は左上がりにヘラミガキをおこなった後、横方向のヘラミガキで仕上げている。さらに、底部はヘラミガキの上から一度ナデをおこなっている。体部内面は丁寧なナデが認められるが、頸部内面はハケを一部だけナデ消している。Ⅳ－1・2様式。生駒山西麓産。

(4021) は、体部下半に焼成後穿孔をもつ広口壺である。口縁端部は垂下し、端面には櫛描きの簾状文がめぐる。その簾状文を施した後、端面下部に刻目も入れている。内面には2つ1組の円形浮文が4方向に貼り付く。頸・体部の文様はハケののちに計12帯の櫛描文がめぐるが、上部3帯は直線文で、下は簾状文である。頸部の文様帯間はハケが残るが、体部ではヘラミガキをおこなっている。櫛描文の原

体は幅1.45cm・9条である。体部下半はヘラミガキで仕上げている。内面はハケが残り、部分的にその上をナデているが積極的にナデ消そうとはしていない。口縁付近は板状工具によるナデがみられる。Ⅳ－1・2様式。生駒山西麓産。

（4022）は、壺体部である。ハケの後に幅1.45cm・13条の原体による櫛描きの直線文がめぐる。底部付近はヘラミガキで仕上げている。内面はハケが確認できる。外面には煤が付着している。第Ⅲ様式。生駒山西麓産。

（4023）は、広口壺の体部である。体部の中ほどから下部まで施文の範囲がおよんでいる。文様は櫛描きの簾状文が主体で、間に同直線文を挟んでいる。頸部と体部の境付近の簾状文では、施文時に原体を静止させたピッチがやや狭い。施文原体は幅1.1cm・10条である。体部下半は、ヘラミガキで仕上げている。内面は底部に指ナデ痕が残り、最大径付近にはハケがみられるが、その上方は指ナデによりナデ消されている部分がある。外面に煤が付着している。Ⅲ－2様式。生駒山西麓産。

（4024）は、広口壺の体部である。7帯の櫛描きの簾状文と最下段に同列点文が認められる。いずれも幅1.75cm・14条の原体で施文されている。頸部は器壁の剥離が激しく調整は不明だが、体部中ほど以下についてはミガキ調整で仕上げられている。内面は頸部から体部上半にかけてはナデ、最大径付近ではハケ、底部では板状工具痕が認められる。Ⅳ－1様式。生駒山西麓産。

（4025）は、細長く内湾気味に立ちあがる頸部をもつ細頸壺である。体部は上半しか残存していないが、口縁直下から櫛描きの簾状文で飾る。体部には簾状文の間に扇形文を入れている。施文原体は幅1.05cm・10条である。文様帯の間は施文後にヘラミガキが施され、文様の一部が消されている部分も観察できる。内面は丁寧なナデで仕上げられている。体部外面には煤の付着が認められる。Ⅲ－1・2様式。生駒山西麓産。

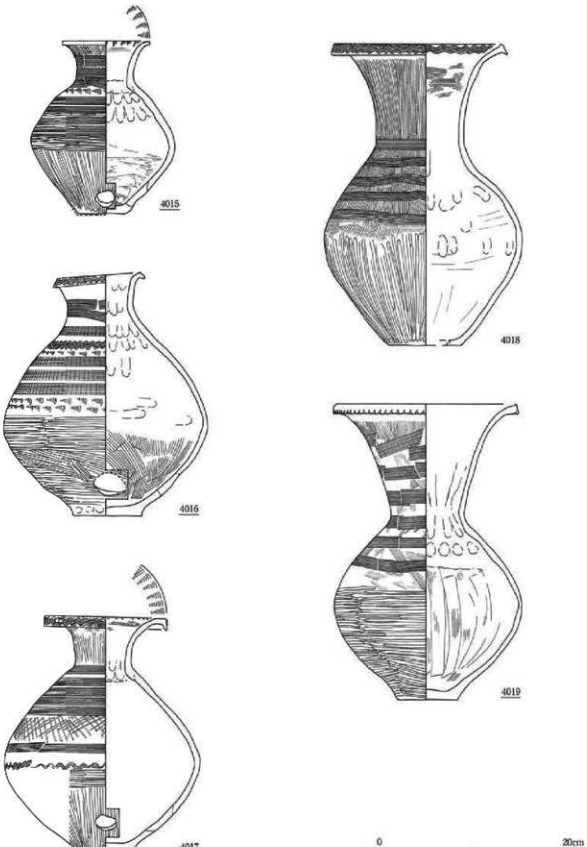
（4026）は、中実の脚をもつ高杯である。杯部に焼成後の穿孔がみられる。杯部は深く、内面に低く内傾する突帯をもつ。突帯の上下で区分されヘラミガキがおこなわれている。水平口縁の垂下部はあまり発達していない。脚部は柱状で裾が横にのび、端面を上方に引きあげる。脚内面はナデで、その他外面はヘラミガキで仕上げられ、杯部を先に磨いている。Ⅲ－2様式。生駒山西麓産。

（4027）は、水平口縁をもつ高杯の口縁部である。杯部内面の突帯は低く上方に立上り、粘土を足して垂下部を作り出している。口縁上面はヘラミガキがおこなわれるが、杯内外面や垂下部はナデで仕上げられている。Ⅳ－2様式か。非生駒山西麓産。

（4028）は、把手・台付鉢である。鉢部の底部には焼成後の穿孔がみられ、口縁部には打ち欠きとみられる破損部が認められる。文様は口縁下と底部に計6条の凹線文が認められ、脚部には円形の透孔が5方向にあけられている。調整は外面を把手部分も丁寧にヘラミガキし、内面はナデをおこなう。鉢底部外面には爪先圧痕も観察される。Ⅳ様式。非生駒山西麓産。

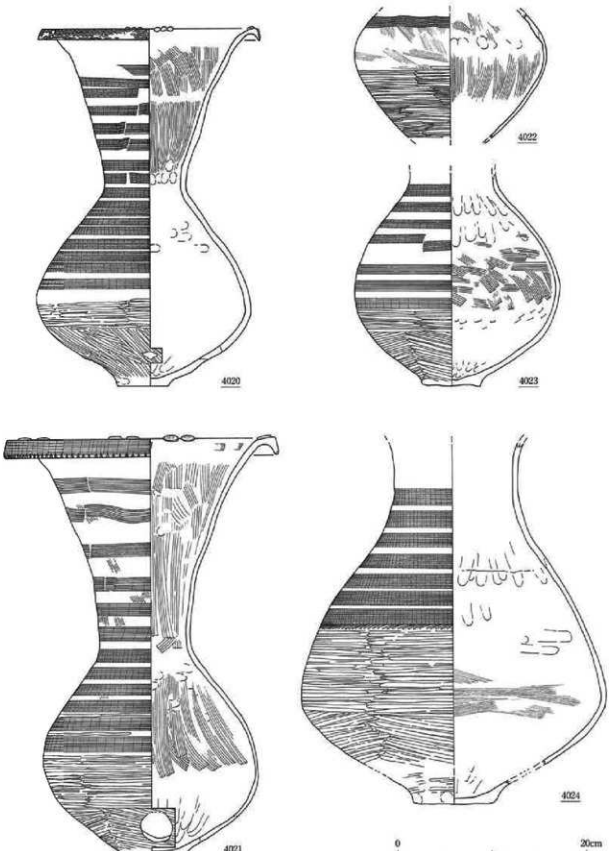
（4029）は、「く」の字状に屈曲する口縁をもつ甕である。外面は体部上半をタテまたは右上がりにハケ調整し、下半部はハケ調整の後に縦方向にヘラミガキを施す。内面もハケを施し河内型甕の系統にある。外面は器壁の剥離が顕著で、煤の付着も観察される。Ⅲ～Ⅳ－1・2様式。生駒山西麓産。

（4030）は、体部下半に焼成後穿孔をもつ甕である。口縁端部は上方に拡張され、この拡張時のものと思われる指頭圧痕が口縁を一周している。また、端面には刺突文が施される。外面が3つの部位に分けられて、縦もしくは左上がり方向にヘラミガキがおこなわれている。内面はヘラミガキを粗く上下方向におこなう。また、口縁と体部の境界よりやや下で粘土接合痕が観察できる。Ⅲ－2様式。生駒山西

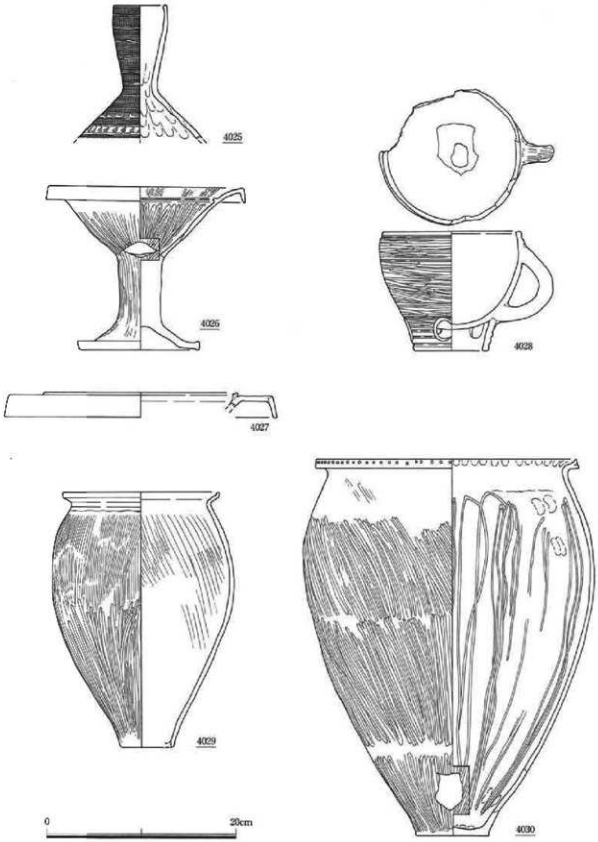


第19面〔S05200関係（4015～4019）〕

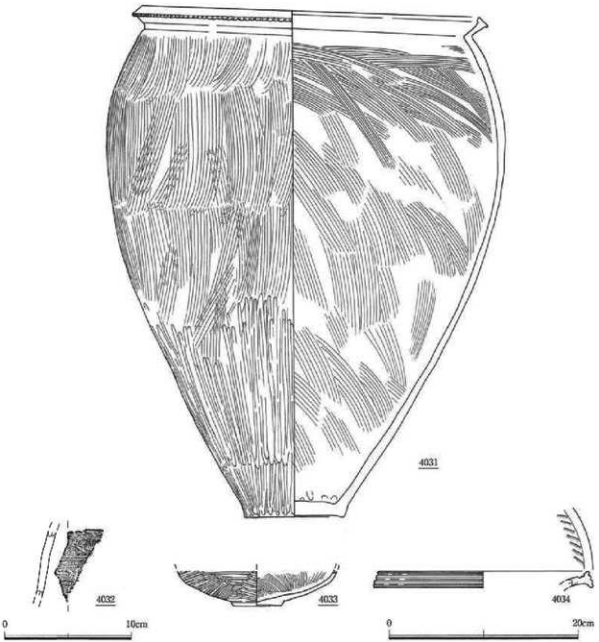
図133　弥生時代中期土器実測図－５（99－５区：墓域出土）



第19面〔S05200関係（4020～4024）〕
図134　弥生時代中期土器実測図－6（99－5区：墓域出土）



第19面〔S05200関係（4025～4030）〕
図135　弥生時代中期土器実測図－７（99－５区：基域出土）



第19面〔S05200関係（4031～4034）〕
図136　弥生時代中期土器実測図－8（99－5区：墓域出土）

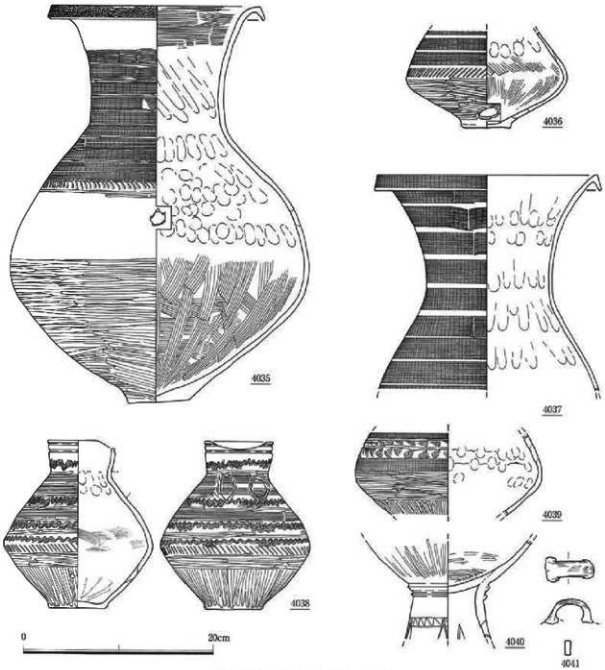
麓産。

（4031）は、「く」の字状に鋭く屈曲し端面を上下に拡張する口縁をもつ大形の甕である。口縁端部下方には刻目がめぐる。外面の体部上半はハケ、下半部はハケの上に2つに分割して縦方向のヘラミガキをおこなう。内面は全体的にハケで仕上げており、河内型甕の系統をひく。Ⅲ－2様式。生駒山西麓産。

（4032）は、壺の頸部片である。幅1.1cm・9条の原体による櫛描きの直線文が2帯確認できる。生駒山西麓産。

（4033）は、壺の底部片である。内面をハケ、外面と底部をヘラミガキで仕上げる。内面にはコゲが付着する。生駒山西麓産。

（4034）は、広口壺の口縁部片である。口縁端部を上下に拡張し3条の凹線文をめぐらす。内面には



第19圖〔S05220関係〔4035～4041)〕
図137　弥生時代中期土器実測図－9（99－5区：墓域出土）

櫛描きの扇形文（刺突文状）がめぐる。非生駒山西麓産。

〔方形周溝墓S05220〕(4035～4041)　主として、北東側の周溝（マウンドコーナー付近）からまとまって土器が出土している。

(4035) は、体部中ほどに焼成後穿孔をもつ広口壺である。口縁端部を下方に拡張し、端面には櫛描きの波状文がめぐる。頸部から体部上半にかけて櫛描きの簾状文が10帯、最下段には同扇形文が1帯めぐっている。施文原体は幅1.15cm・10条である。文様間にはヘラミガキが施文されている。体部中ほどから下半部にかけてと、底部外面はヘラミガキで仕上げられる。内面は口縁付近に横方向、体部下半に縦方向のハケをおこない、その間は指ナデの痕跡が顕著に認められる。Ⅲ～Ⅳ－1様式。生駒山西麓産。

(4036) は、壺の体部である。下半部に焼成後穿孔をもつ。4帯の櫛描きの簾状文と1帯の同列点文

第19面〔S05240関係（4042～4045）〕
図138　弥生時代中期土器実測図－10（99－5区：墓域出土）

が確認できる。文様帯より下および底面外面はヘラミガキをおこなう。内面は、最大径より上とその下の部位に分けてハケが残る。Ⅲ－2様式。生駒山西麓産。

（4037）は、広口壺の上半部である。垂下した口縁端部の面に櫛描きの簾状文をめぐらせ、体部では9帯の同簾状文が確認できる。原体幅は2.45cmと広く条数も23条と多く、他の土器よりはやや新しい様相を示す。内面は丁寧なナデで仕上げられている。Ⅳ－3様式。生駒山西麓産。

（4038）は、体部下半に直径5mm程度の焼成後穿孔をもつ水差し形である。口縁部には2条の凹線文がめぐり、その下部には櫛描きの波状文と直線文が計7帯がめぐる。最下段はヘラ状の工具で刺突文状に斜線を施し、全周する。文様帯の間にはヘラミガキがおこなわれるが、施文前のハケを消しきれていない部分もある。施文原体は幅0.9cm・9条のものである。把手は剥脱しているが、接着のために円形状にヘラ状工具で入れた刻みが文様の上に認められる。また、体部には煤の付着が認められる。Ⅳ－1・

2様式。生駒山西麓産。

（4039）は、壺の体部片である。2帯の櫛描きの簾状文の間を2帯の同扇形文で埋め、文様帯の間にヘラミガキをおこなう。施文は幅1.2～1.3cm・9条の原体を用いている。文様部より下半では、底部から放射状にヘラミガキをおこなったのち、横方向にヘラミガキをおこなっている。内面は指ナデの跡が顕著に残るが、粘土接合痕も観察できる。外面の一部に煤が付着している。Ⅲ～Ⅳ－1・2様式。生駒山西麓産。

（4040）は、深いと推定される杯部をもつ高杯である。杯部の内外面はヘラミガキで仕上げられ、脚部はナデと思われる。杯部底は円板充填法がとられ、杯と脚の境目には断面三角の突帯が2帯貼り付けられる。また、脚部には1帯のヘラ描きの鋸歯文がめぐり、三角形または矢羽根状になると思われる透孔が観察される。このような特徴は、播磨地域の土器に認められるものである。しかし、角閃石が含まれ暗褐色を呈する胎土を有するため、生駒西麓地域で製作された可能性が高い資料である。中期後半。

（4041）は、水差し形等の把手と思われる資料である。外面にはハケ痕が残り、内面はナデで仕上げられている。断面は長方形を呈する。中期後半。非生駒山西麓産。

〔方形周溝墓Ｓ05240〕（4042～4057）　99－5区の最も西側で検出された方形周溝墓のコーナー部分の周溝内で、東側と西側に分かれて土器が出土している。

（4042）は、広口長頸壺の体部下半で焼成後に穿孔されている。残存部からは6帯の櫛描きの簾状文と最下段に同波状文がめぐらされることが確認できる。施文原体は、幅1.25cm・11条である。体部下半はハケの後、ヘラミガキで仕上げられる。内面は上半部はナデられるが、下半部には板状工具の圧痕が残る。外面には煤の付着が観察される。Ⅲ～Ⅳ－1・2様式。生駒山西麓産。

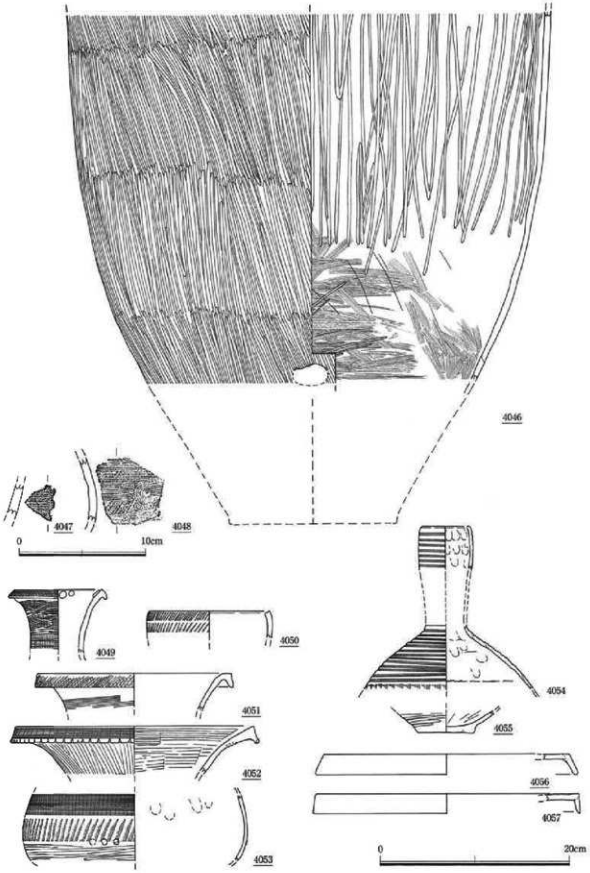
（4043）は、広口長頸壺であるが、口縁部と底部が失われている。ハケののちに体部の中ほどまで14帯の櫛描きの直線文がめぐる。施文原体は幅1.1cm・10条である。文様帯の下はヘラミガキで仕上げられる。頸部内面は丁寧にナデられるが、体部はハケの痕が残る。Ⅲ－1様式。生駒山西麓産。

（4044）は、口縁端部を上下に拡張し、端面を櫛描きの波状文、内面を同扇形文で加飾する広口壺である。端面の波状文の上には5方向に円形浮文を貼り付ける。また、頸部に指頭圧痕突帯がめぐる点、体部に櫛描きの波状文と直線文を交互に配する点などの特徴は、北摂地域に多くみられるものである。文様の施文状況が全体的に浅いため、施文原体を考えることは難しいが、幅1.0～1.5cm・7～8条であると思われる。施文はハケののちにおこなわれ、体部下半はヘラミガキで仕上げている。内面は頸部にハケ痕が残るほかは、丁寧にナデで仕上げられている。また体部上部には指頭圧痕が多数残る。Ⅳ－1様式。非生駒山西麓産で、搬入品の可能性がある。

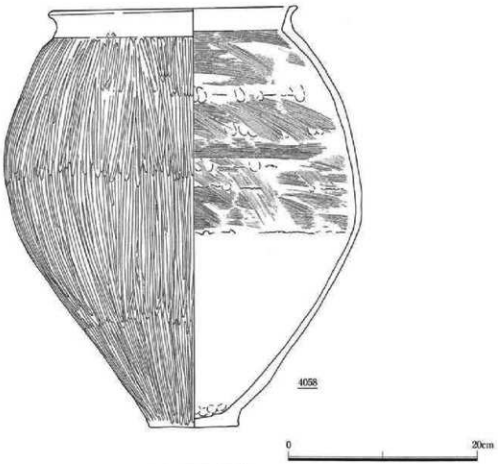
（4045）は、体部下半に焼成後穿孔をもち、屈曲して張る体部を呈する鉢である。口縁部は端面を折り返して段をつくる。この段の直下から櫛描きの簾状文が3帯めぐり、施文原体は幅1.3～1.4cm・13条である。屈曲点より下はヘラミガキで仕上げられる。内面はハケが観察できる。Ⅳ－1様式。非生駒山西麓産。

（4046）は、大形甕の体部で、焼成後穿孔も認められる。外面は少なくとも4段以上の部位に分けて、やや左上がり縦方向のヘラミガキがおこなわれている。内面は上半部ではヘラミガキがみられるが、下半部ではハケ調整でおわっている。外面には煤が付着している。Ⅳ－1様式か。生駒山西麓産。

（4047）は、壺の体部片で、櫛描きの直線文が2帯認められる。施文は幅0.9cm・8条の原体でおこなわれている。生駒山西麓産。



第19面〔S05240関係（4046～4057）〕
図139　弥生時代中期土器実測図－11（99－5区：墓域出土）



第19面〔S05261（4058）〕
図140　弥生時代中期土器実測図－12（99－5区：墓域出土）

（4048）は、壺の体部片である。櫛描きの文様が認められる。生駒山西麓産。

（4049）は細頸の広口壺の頸部より上部で、口縁端部を下方へ拡張している。頸部はあまり外反しない。口縁端面および頸部に櫛描きの簾状文で飾る。頸部の文様帯間はヘラミガキがおこなわれており、文様の一部を消してしまっている部分がある。施文原体は幅1.5cm・10条である。口縁内面には2個1組の円形浮文が4方向に貼り付けられている。Ⅳ－1様式。生駒山西麓産。

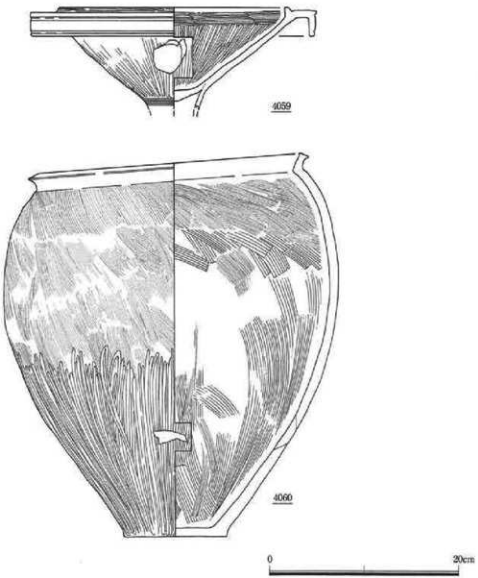
（4050）は、いわゆる太頸壺の口縁部片である。口縁端面はナデにより内傾して面をもち、直下に櫛描きの列点文を2帯めぐらせる。施文原体は幅1.2cm・14条である。Ⅳ－2様式。生駒山西麓産。

（4051）は、広口壺の口縁部である。口縁端部を下方に拡張し、ヘラ状工具でまず右上から左下へ斜線を入れ一周し、次に左上から右下への斜線を組み合わせ斜格子文としている。調整は内外面ともにナデがおこなわれている。Ⅳ－1様式。生駒山西麓産。

（4052）は、広口壺の口縁部片で、口縁端部を下方へ拡張している。櫛描きの簾状文をめぐらし、下半に刻目をもつ。施文は幅1.1cm・10条の原体でおこなわれている。外面にハケを施し、上部は口縁端部とともにナデがおこなわれ、内面はハケで仕上げられている。Ⅳ－2様式。生駒山西麓産。

（4053）は、壺の体部片である。2帯の櫛描きの簾状文とその下に3個1組の円形浮文があったと考えられるが、現状で1つは痕跡を残すだけである。文様より下はヘラミガキで仕上げられる。簾状文の施文原体は、幅2.4cm・26条である。Ⅳ－1～2様式。生駒山西麓産。

（4054）は、細頸壺である。内面は指ナデで仕上げられるが、外面は幅0.25cm・3条の原体による櫛



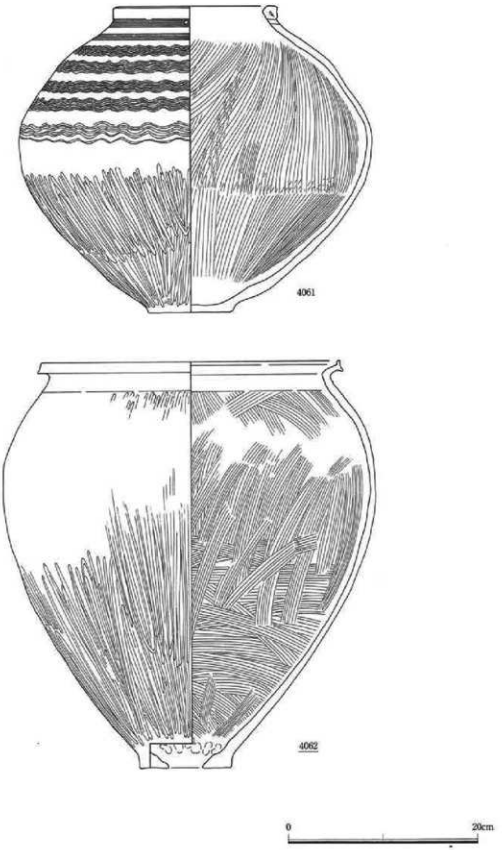
第19面〔S061185（4059・4060）〕
図141　弥生時代中期土器実測図－13（99－6区：墓域出土）

描きの直線文がめぐる。直線文は口縁部片に7帯、体部片に13帯確認でき、失われた部分にもめぐらされていたと思われる。文様最下段には幅9.5cm・10条の原体による扇形文がめぐる。Ⅳ－1様式。非生駒山西麓産。

（4055）は、壺の底部である。内面には板状工具でナデた痕が残り、外面はヘラミガキで仕上げている。生駒山西麓産。

（4056・4057）は、高杯の口縁部片である。ともに水平に広がった口縁端部を垂下させる形態であるが、（4056）の方が外方に広がる。Ⅳ様式。（4056）は生駒山西麓産。

〔土器棺墓S05261〕（4058）　方形周溝墓S05220の西側で検出された堤状遺構S05260上で、やや斜位の状態で土器がおさめられた遺構からの出土品である。次項の99－6区で検出し土器棺墓とした遺構のようには、蓋に相当する土器はともなわないので、墓とするにはやや躊躇されるが土器棺墓として報告した遺構にあたる。なお、堤状遺構S05260は、北側の東大阪市教委の調査区で検出された、方形周溝墓群間の「墓道」とされた遺構（東大阪市教委2002）の続きに相当する。



第19面〔S061200（4061・4062）〕
図142　弥生時代中期土器実測図－14（99－6区：墓域出土）

「く」の字状に鋭く屈曲する口縁をもつ大形の甕である。体部中ほどに最大径をもち、全体的に丸い器形である。外面は3段に分けて下から順番にヘラミガキがおこなわれている。内面は上半部をハケで仕上げている。下半部は煤の付着や器壁の剥離のため調整が確認できないが、底部には指頭圧痕が残る。外面にも煤が付着する。Ⅲ－1様式。生駒山西麓産。

f．99－6区土器棺墓出土

〔土器棺墓S061185〕(4059・4060)　調査区中央から東半部でみられた高まりS061230で検出した東側の土器棺墓である。

(4059)は、棺蓋として使用されていた高杯で、水平口縁をもちその垂下部には2条の凹線文がめぐる。杯部と脚部の境界には櫛描きの直線文が施されるが、それ以下は打ち欠かれている。杯底は円板充填法により作られている。また、杯部には焼成後穿孔がみられる。外面調整は、口縁の垂下部以外すべてヘラミガキで整えられている。内面は口縁付近をヘラミガキした後、底部を中心とする放射状のヘラミガキで仕上げている。Ⅳ－2・3様式。生駒山西麓産。

(4060)は、棺身として用いられた大形の甕で、「く」の字状に鋭く屈曲してあがる口縁をもつ。外面調整は、まず縦から左上がり方向のハケを下から上へとおこない、体部下半だけを縦ヘラミガキで仕上げている。内面は下半部を縦方向に、次に上半部を左上がりにハケをおこなう。口縁部はハケののちにナデがおこなわれている。外面には煤の付着が認められ、実際に煮沸に使用されていた個体の転用品と考えられる。Ⅳ－1様式。生駒山西麓産。棺蓋・棺身の土器小様式に差がありそうであるが、土器棺自体の時期としては、Ⅳ－2・3様式とすべきか。

〔土器棺墓S061200〕(4061・4062)　調査区中央から東半部でみられた高まりS061230で検出した西側の土器棺墓である。

(4061)は、棺蓋として用いられた大形の無頸壺で、その大半は失われていたが、かろうじて全容が判明した。最大径が体部中ほどに位置し、全体的に丸みをおびた形態である。口縁端部を折り返すことで段を作り、紐通し用と思われる穿孔が確認できた。外面は7帯の櫛描文で飾られ、上の2帯は直線文、下の5帯は波状文である。体部下半はヘラミガキが観察される。内面は上下に区分し、下方から先にハケをおこなっている。Ⅳ－1・2様式。非生駒山西麓産。

(4062)は、棺身として用いられた大形の甕である。「く」の字状に鋭く屈曲し、端部を上下に拡張する口縁部をもつ。また、底部には焼成後の穿孔をもつ。外面は2段から3段に区分されてヘラミガキがおこなわれたと思われるが、上半部の調整が不明瞭である。内面は底部に成形時に付いたと思われる指頭圧痕が観察できる。口縁はハケののちにナデがおこなわれている。外面には煤の付着が認められ、(4060)と同様に、実際に煮沸に使用されていた個体が転用されたものと考えられる。Ⅳ－2様式。生駒山西麓産。

g．墓域出土の外来系土器に関して

以上の方形周溝墓群にともなう土器群のなかで、河内以外の地域との関係が強い土器として、壺の(4017・4018・4044・4061)があげられる。これらの土器はいずれも、河内地域において櫛描きの廉状文が盛行する時期に、櫛描きの波状文が優勢である点や、頸部に櫛描文がめぐらされない点などが特徴として指摘できる資料である。また櫛描文だけではなく、特に(4044)の頸部下端にみられる指頭圧痕突帯文は、河内地域では有段口縁をもつ壺に付けられるものの、広口壺にはほとんどみられない装飾方法である。以上のような特徴は、近接する摂津地域に多くみられるものであり、土器が搬入品である可能

性は高い。搬入品そのものではないとしても、摂津地域の影響を強く受けた土器であるといえよう。また、(4040) は、胎土に角閃石を含むため、今回は生駒山西麓地域で製作された土器であると判断したが、先述のように播磨地域との関連性が濃く認められる資料である。

このように、本調査において検出した墓域に供された土器からは、当時の瓜生堂遺跡の人々が、摂津や播磨といった地域との交流をもっていたことが推測されよう。

また、本遺跡の東側に近接する地域の生駒山西麓産土器に関しては、墓域出土土器の約74%を占める比率となる。この数値は、後述する中期集落域での割合（約37%）に対して高率となっている。詳細に関しては、後掲の考察（第7章第4節）を参照されたい。

h．小結

今回の調査では、複数の調査区より方形周溝墓を検出したが、比較的まとまって土器（供献土器・土器棺資料ほか）が出土した99－3区と99－5区の方形周溝墓について時期を検討してみたい。また、これらの地区から出土した土器群のほとんどが、河内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけての時期に属しているため、以下では凹線文出現以前と以後の2つに区分して考えていきたいと思う。

まず、99－3区の出土土器（図127）をみると、東大阪市教育委員会の第45－2次調査で検出された方形周溝墓の南端を検出（今回検出の方形周溝墓S03200）し、その南側コーナーにともなう土器群が周溝から出土した（4003～4007）。これらの土器は、5個体すべてが凹線文出現以前に属する特徴を有している。そのほか、これらの土器群からやや離れた地点の方形周溝墓S03270・S03280から、凹線文を有する土器が1個体ずつ出土している（4008・4009）。

次に99－5区でも、凹線文出現以前と以降の土器が出土しているが、これらの出土位置には一定の傾向が見受けられる。図128には主要な土器の出土地点を示してあるが、この図をもとに検討すると、調査区の一番東側で検出した方形周溝墓S05200の周溝の南東～南側と堤状遺構S05260の南側には主として凹線文出現以前の土器群が確認されている。一方で、凹線文出現以降の土器群は、主として調査区西側で検出される傾向にあるように思われる。破片で出土した土器片には若干の混じりがあるものの、ほぼ完形状態にまで復原可能な土器群では、この傾向は比較的明瞭にみてとることができる。

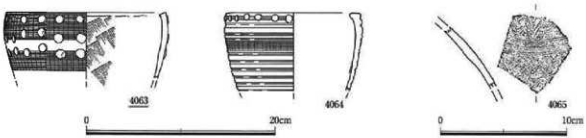
また、凹線文出現以前の土器が多くともなう方形周溝墓S05200の墳丘上から、凹線文をもつ土器を棺とするもの（4013・4014）や、埋葬施設上に凹線文土器（4028）が置かれた状況で出土するなどの様相も確認できている。

以上の2つの調査区の検討をまとめると、次にあげることが明らかとなろう。

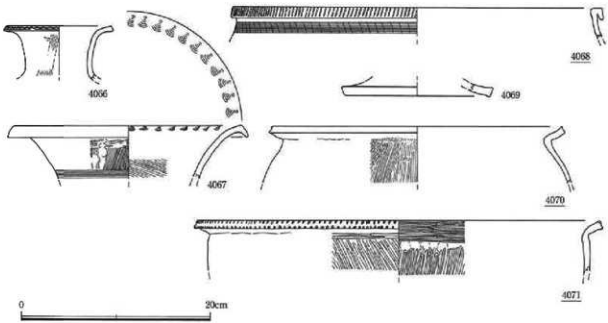
第一に、今回の調査において確認された方形周溝墓は、全体的な傾向として北側ないし東側に棺葬されている方が古い様相を多く示すようである。同様の傾向は、本調査区より現道一本を隔てた北側で東大阪市教育委員会が検出した第47－2次D地区の方形周溝墓群（東大阪市教委2002）でも確認できる様相である。

第二に、一方で、99－5区で検出された堤状遺構S05260上（S05261：4058）やその周辺からも凹線文出現以前の土器が出土していることから、この墓域が形成された比較的古い段階ですでに、この堤状の高まりが形成されていた可能性を考えることができる。そうすると、方形周溝墓S05200と堤状遺構S05260の間に位置する方形周溝墓S05220は、その周溝内で検出された土器の多くが凹線文をもつ段階のものではあるものの、凹線文出現以前に築造された可能性があると思われる。

最後に、上に述べた方形周溝墓S05220の状況と、方形周溝墓S05200の墳丘上から凹線文をもつ土器



第18・17面間（4063）、第17・16面間（4064）、第16・15面間（4065）
図143　弥生時代中期土器実測図－15（99－6区：包含層出土）



第11面〔S08070（4066－4071）〕
図144　弥生時代中期土器実測図－16（99－8区：遺構出土）

が出土しているということを考えあわせると、凹線文出現以前に構築された方形周溝墓群を凹線文出現後も継続し墓として使用されていたということができるだろう。（中川・秋山）

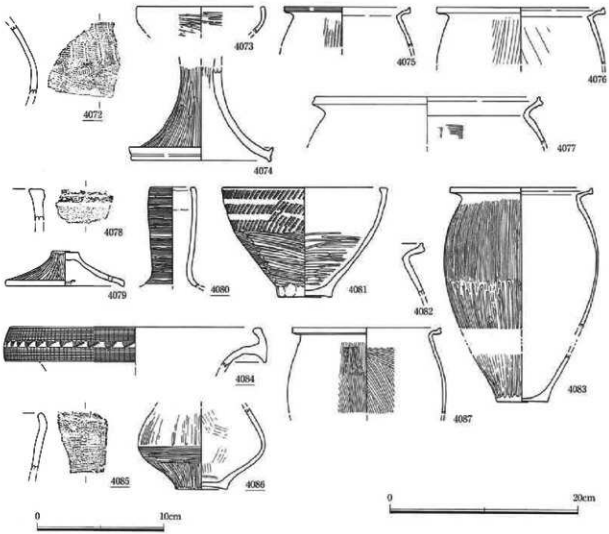
2）集落域の出土品

a．出土状況ほか

弥生中期の墓域関係以外の遺構や包含層ほかから出土した土器は、集落域の中心部にあたる99－10区からの量が最も多く44コンテナで、集落の東縁辺部に相当する99－8区・9区からは1コンテナ弱の量が出土している。

また、土器棺墓2基を検出した99－6区では、弥生後期土器群ほかに混入したかたちで、中期にさかのぼる若干点が確認できている。これらは墓域関係の可能性があるが、特定できないので仮に本項に含めておいた。

集落域土器群の報告にあたり、遺構出土品に関しては、図上復原できるものを中心に、器種組成をある程度反映し網羅するかたちで実測・掲載土器を抽出した。しかし、主として99－10区で大量に検出した包含層出土の資料については、外来的要素の強い土器あるいは特徴的な土器のみを若干抽出し掲載したにとどまる。このように今回報告できた土器以外に、多くの実測可能な資料が出土しているわけだが、



第10面〔S09051（4072～4077）、第16・15面間（4078～4083）、第12～10面間（4084～4087）〕
図145　弥生時代中期土器実測図－17（99－9区：遺構・包含層出土）

整理・報告に費やせる人的・時間的な制約等から、それらの実測・報告や資料化は断念せざるを得なかった。これらの未報告分土器類が、将来的に何らかのかたちで再活用される機会があることを切望したい。以下、実測図掲載資料に基づき、地区ごとに分け、下層から順に報告する。各資料の細別時期に関しては、まず一定量の土器群に関して若干のコメントを付し、最後に総括的な時期推定をおこないたい。

なお、これらの集落域出土の弥生中期土器を対象にして、土器の色調を計器で測定し、それらをふまえて弥生土器色調に関する考察を後項（第7章第5節）でおこなっているので参照されたい。

b．99－6区包含層ほか出土

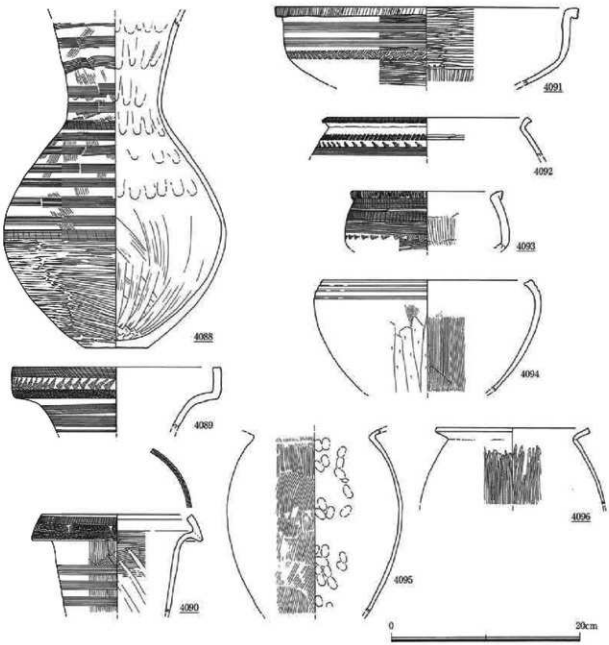
〔第18・17面間〕（4063）　細頸壺（別称として太頸壺とも呼ばれる。この類の大形品も、本項では細頸壺とした。以下同じ）を掲載した。生駒山西麓産胎土である。櫛描きの旋状文と円形浮文を施す。

〔第17・16面間〕（4064）　細頸壺を掲載した。凹線文と櫛描きの旋状文さらに円形浮文で飾る。

〔第16・15面間〕（4065）　壺の体部を掲載した。櫛描きの波状文と直線文を交互に施す。

c．99－8区遺構出土

〔第11面流路S08070〕（4066～4071）　調査区西端部で検出した、南東－北西主軸の流路からの出土。壺2点、鉢1点、蓋1点、甕2点を掲載した。



第14面〔S10623（4088）、S10624（4089・4093～4095）、S10633（4090）、S10628（4091・4092・4096）〕
図146　弥生時代中期土器実測図－18（99－10区：遺構出土）

（4066・4067）は広口壺である。（4066）は口縁部に櫛描きの波状文を施し、（4067）は口縁部を垂下させている。（4068）は大形の鉢である。口縁部を垂下させ、体部には櫛描きの簾状文を施している。（4069）は壷である。内面に煤が付着している。（4070）は茶褐色の胎土をもつ甕である。「く」の字状に屈曲させ体部外面にはハケ調整を施している。（4071）は生駒山西麓産胎土の甕で、内面外面をヘラミガキ仕上げしている。口縁部に上下2方向から刻みを施している。

d．99－9区遺構出土

〔第10面溝S09051〕（4072～4077）　調査区南半部で検出した、東－西主軸の溝からの出土。壺1点、高杯2点、甕3点を掲載した。

（4072）は生駒山西麓産胎土で、櫛描きの簾状文を施した壺体部である。（4073）はやや浅い椀形の杯

部をもつ高杯で、外面にはヘラケズリ調整を施している。(4074) は脚部であるが、内面外面に煤が付着し、蓋に転用されたと考えられる。(4075～4077) は甕である。(4075・4076) は茶褐色を呈しやや小形品で、(4077) は淡色の中形品である。いずれも口縁端部をつまみあげる「く」の字状口縁部をもち、煤が付着する。

e．99－9区包含層ほか出土

〔第16・15面間〕(4078～4083)　鉢2点、蓋1点、細頸壺1点、甕2点を掲載した。

(4078) は淡色の色調の胎土をもつ鉢の口縁部と思われる。(4079) は外面をヘラミガキ仕上げし、穿孔を施す壺用蓋であるが、内面に煤が付着している。(4080) は生駒山西麓産胎土をもつ細頸壺である。櫛描きの直線文を連続して施し、間をヘラミガキ仕上げする。(4081) は茶褐色の色調をもつ鉢である。外面を櫛描文で飾る。(4082・4083) は同様の形態をもつ甕である。(4083) は薄手の甕で、「く」の字状口縁部をもち体部下半にヘラミガキ調整を施す。外面には煤が付着する。

〔第12～10面間〕(4084～4087)　有段口縁壺1点、細頸壺1点、壺体部1点、甕1点を掲載した。

(4084) は生駒山西麓産胎土をもつ有段口縁壺である。外面には炭素が付着している。櫛描きの簾状文と扇形文で飾っている。(4085) は細頸壺で口縁部をわずかに内湾させる。外面には櫛描きの直線文と波状文を施す。(4086) は壺体部である。(4087) は甕である。「く」の字状の口縁部をもち、体部内面外面をハケ調整する。

f．99－10区遺構出土

〔第14面諸遺構〕(4088～4096)　調査区西半部で検出した、平面長円形の井戸（土坑の可能性あり）S10623、平面長円形の大形土坑S10624、平面長円形の小形土坑S10633、平面不整形の落ち込み状遺構S10628からの出土。本遺構面として検出した遺構には、上層遺構面の検出漏れや掘り残しの遺構が含まれるのは先述したとおりであるが、本項では現地調査で第14面として扱った遺構からの出土土器を取り上げた。あわせて、壺1点、受口状口縁壺2点、鉢3点、高杯または鉢1点、甕2点を掲載した。

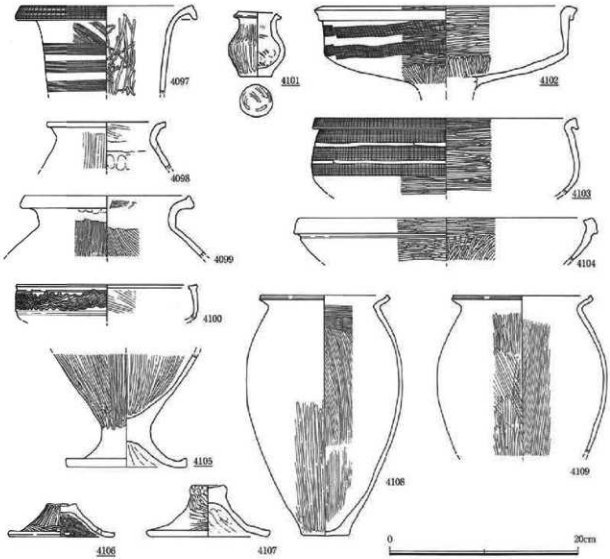
(4088) は口頸部を水平に丁寧に打ち欠いており、直口壺に転用して使用したと考えられる。外面全体に炭素を付着させている点も特徴的である。(4089) は屈曲部から口縁部を直立させる形態を呈し、(4090) は口縁部を内側に向けて強く屈曲する。(4088・4089) はともに受口状口縁壺である。

(4091～4093) の鉢は口縁部を折り曲げる形態のものだが、(4093) だけ完全に折り曲げをおこない、(4091・4092) は口縁部を「く」の字状に曲げる程度である。(4094) は、口縁部に3条の凹線文をもち、外面の最終調整はヘラケズリ調整である。脚の付く可能性もある。

甕は、ハケ調整する (4095) と肩部までヘラミガキ調整する (4096) がある。(4095) は外面に煤が厚く付着し、内面にもコゲが認められる。(4096) は生駒山西麓産胎土をもつ。

この面からの出土土器は、凹線文が鉢口縁部に出現しているが、Ⅳ様式後半にみられるような幅広の櫛描簾状文は認められず、鉢の口縁部折り曲げも顕著ではないことから、Ⅳ様式前半と考えられる。

〔第13面諸遺構〕(4097～4109)　調査区中央部以西で検出した、推定平面円形の小土坑S10473、平面不整形の中形土坑S10409、平面不整形の大形土坑S10544、平面長円形状の大形土坑S10406、平面不整形の中形土坑S10520、北西－南東主軸の溝S10422、平面長円形のピットS10490、平面弧状をなす小溝S10451、平面方形状をなす中形土坑S10495、推定平面長円形の中形土坑S10514、平面不整形の落ち込み状遺構S10411等からの出土。あわせて、広口壺3点、有段口縁壺1点、ミニチュア壺1点、鉢2点、高杯1点、脚1点、壺用蓋1点、甕用蓋1点、甕2点を掲載した。



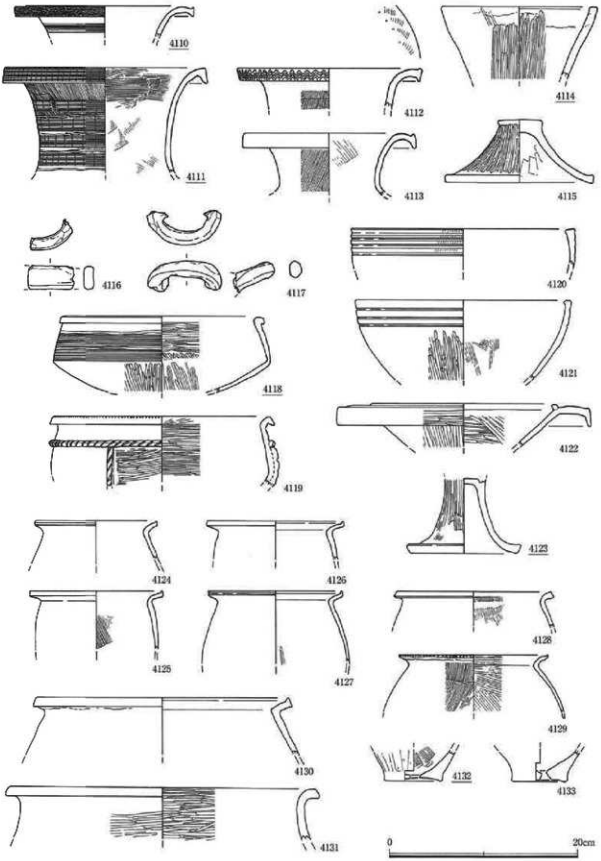
第13面〔S 10473（4097）、S 10409（4098）、S 10544（4099）、S 10406（4100）、S 10405（4101）、S 10520（4102・4104）、S 10422（4103）、S 10490（4105）、S 10451（4106）、S 10495（4107）、S 10514（4108）、S 10411（4109）〕

図147　弥生時代中期土器実測図－19（99－10区：遺構出土）

広口壺は櫛描文で装飾される（4097）と、無文の壺Dとよばれるもの（4098・4099）がある。（4100）は櫛描きの波状文をもち、その上下に弱い凹線文を施す有段口縁壺である。（4101）は小形の壺で、外面にヘラミガキ調整をする。（4102・4103）の鉢は口縁部を折り曲げるもので、外面に幅の狭い櫛描きの簾状文が施されている。（4104）は、内外面を美しくヘラミガキ調整された高杯である。（4105）は中実の脚部である。蓋は穿孔があり、器高の低い壺用蓋（4106）と、器高の高い甕用蓋（4107）がある。前者には煤が付着せず、後者には内面に煤付着が認められる。（4108・4109）の甕は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、体部はやや長い形態を呈する。タタキ調整は顕著ではない。

この面からの出土土器は、有段口縁壺に凹線文があり、甕の体部が大きく張らない点、櫛描きの簾状文の幅が狭い点、脚が中実である点から、Ⅳ様式前半と考えられる。

〔第13面溝S 10400〕（4110～4133）　調査区中央部で検出した、ほぼ西北西－東北東主軸の蛇行する溝からの出土。壺5点、蓋1点、高杯1点、脚部1点、鉢4点、底部2点、把手2点、甕8点を掲載した。



第13面〔S10400（4110～4133）〕
図148　弥生時代中期土器実測図－20（99－10区：遺構出土）

壺は広口壺（4110～4113）と直口壺（4114）がある。このうち生駒山西麓産胎土をもつのは（4110・4111・4114）で、（4112）も茶褐色の色調を呈する。（4113）は赤色の胎土をもつ広口壺で無文である。（4110）は外面に炭化物を付着させ黒色化している。（4114）は口縁部内面に粘土紐の接合痕が認められる。

甕用蓋（4115）は内面に煤が付着し、特に口縁部付近に顕著である。把手は（4116）が淡色で、（4117）は茶褐色を呈する。水差し形の把手と考えられる。

鉢は口縁部を外反させる（4118・4119）と、直口で凹線文により装飾する（4120・4121）がある。（4118）は生駒山西麓産胎土である。（4119）は粘土紐を横と縦に貼り付け、その粘土紐の上から刻みを施す。（4122）は水平口縁高杯である。（4123）は生駒山西麓産胎土の脚部である。円盤充填されている。しかし、充填部分は脚の内側を充填しているが、上面はナデ調整され杯部・体部へと続いていかない。したがって、この脚は杯部と別作りで製作された可能性がある。このような脚の作り方は、中期には珍しい。全体に煤が付着し、甕用蓋に転用されたと考えられる。

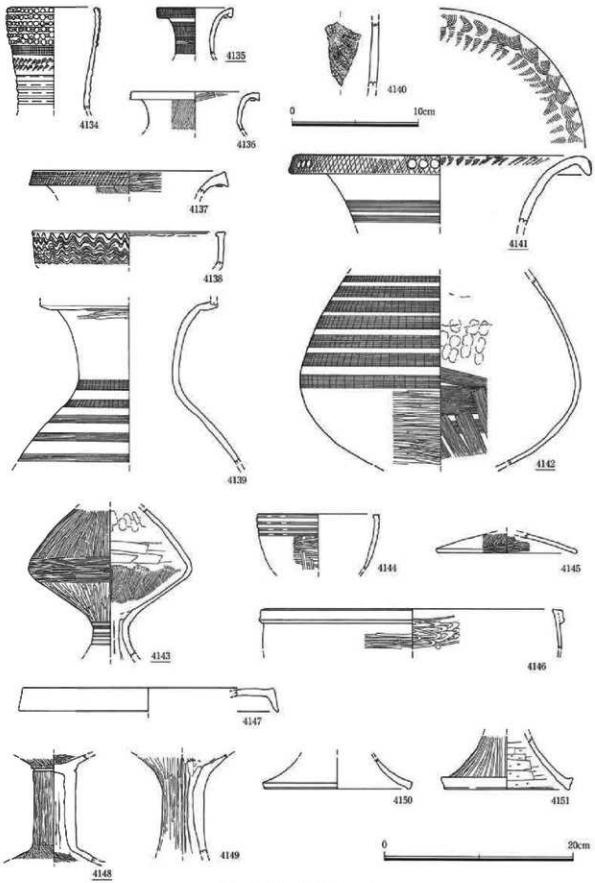
甕は、小形（4124～4129）、中形（4130）、大形（4131）がある。小形品のうち（4129）以外は「く」の字状口縁甕である。体部の張りの強いものと弱いものとがあり、口縁端部をつまみあげるものが多い。（4129）は口縁部外面をナデ仕上げするいわゆる摂津型甕で、体部の張る形態を呈している。中形と大形の甕は、淡色の胎土をもつ「く」の字状口縁甕（4130）と、緩やかに外反し、内外面に横方向のヘラミガキを施す（4131）がある。甕と思われる底部が２個体あるが、いずれも焼成後に穿孔されている。（4132）は生駒山西麓産胎土で上下両方から穿孔されている。

これらの本遺構土器群は、凹線文が出現しているが、その器種は鉢にとどまっており、一方、生駒山西麓産の器種においても櫛描きの簾状文の幅が広くなっていない段階であり、Ⅳ様式前半ととらえられる。

〔第13面井戸S **10401**（W・E）〕（4134～4159）　調査区中央部で検出した、平面ほぼ円形の２基の井戸からの出土。発掘時の遺構上面検出段階では、一連の大形遺構（土坑）として認識し調査を進めたが、途中段階で、並列する２基の素掘り井戸と判明した遺構である。西側井戸をW、東側井戸をEとして区別し遺物取りあげを実施したが、それ以前のものは厳密には両者の区別は困難である。壺10点、鉢２点、高杯１点、脚部４点、壺蓋１点、甕８点を掲載したが、うち、区別できる個体は、Wが（4137～4141・4144～4156）、Eが（4134・4135・4142・4158・4159）、Eの可能性のあるものが（4136・4143・4145・4147・4159・4152～4154・4157）である。

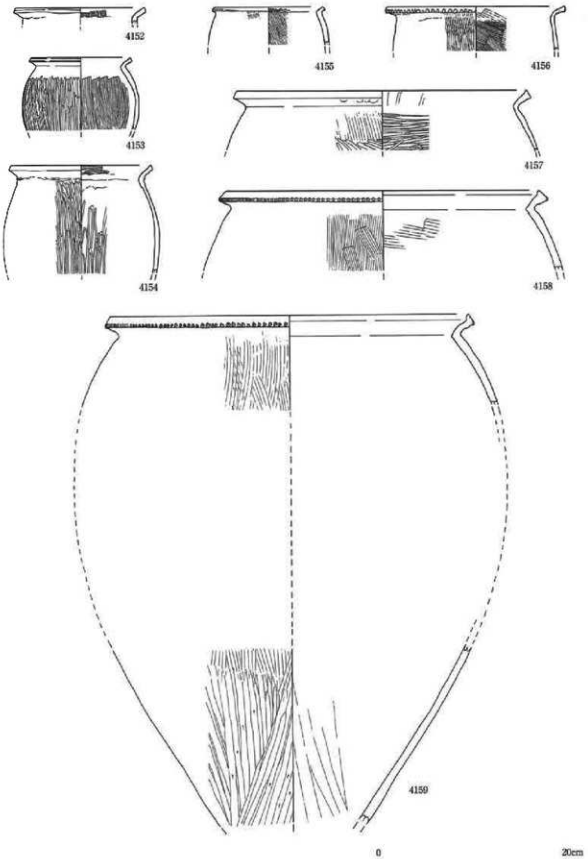
（4134）は細頸壺、（4135～4137・4141）は広口壺、（4138・4139）は受口状口縁壺、（4140・4142・4143）は壺体部である。（4134）は外面の表面に炭素を付着させ黒色化させている。（4135・4141）は生駒山西麓産胎土、（4136・4137）は茶褐色の色調を呈する。（4138・4139）はいずれも淡色の色調を呈し、形態からも同一個体である可能性が高い。（4139）の体部を装飾する櫛描きの簾状文は、施文の始点と終点の切りあいから、上からみて時計回りに施文されていることが確認できる。（4140）は外面をヘラミガキし、内面に爪痕跡の残る体部である。（4143）は脚のついた壺体部である。

（4144）は凹線文を施す直口の鉢である。（4146）は口縁部を折り曲げる鉢であるが、外面を黒色化している。高杯は水平口縁の（4147）があり、他は脚部である。胎土の色調をみると、（4147・4149・4151）は赤褐色を呈し、（4148・4150）は茶褐色である。生駒山西麓産胎土をもつのは（4148）である。（4148）は筒状を呈し、Ⅳ様式でも新しい様相を示している。（4151）も内面にヘラケズリ調整を施し、新しい様

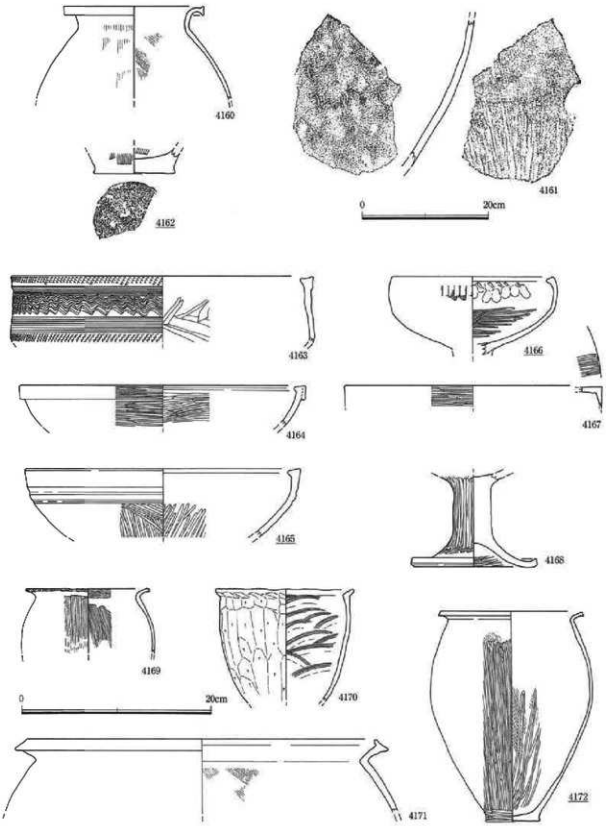


第13面（S10401（4134～4151））

図149　弥生時代中期土器実測図ー21（99ー10区：遺構出土）

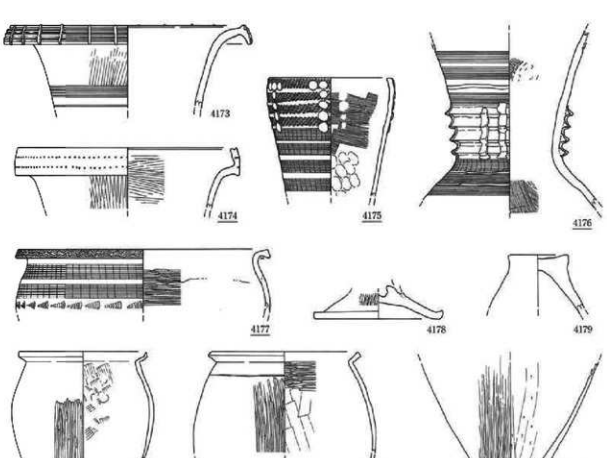


第13面〔S10401（4152～4159）〕
図150　弥生時代中期土器実測図ー22（99ー10区：遺構出土）



第12面〔S10333（4160・4164）、S10310（4161）、S10331（4162）、S10314（4163・4171）、S10325（4165）、S10358（4166・4170）、S10387（4167）、S10366（4168）、S10340（4169）、S10356（4172）〕

図151　弥生時代中期土器実測図－23（99－10区：遺構出土）



第11層〔S 10267（4173・4176）、S 10203（4174）、S 10200（4175）、S 10246（4177）、
S 10244（4178・4182）、S 10235（4179・4181）、S 10176（4180）〕

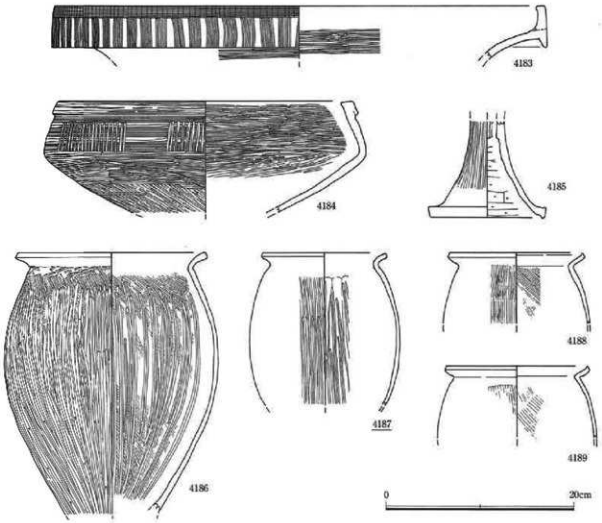
図152　弥生時代中期土器実測図－24（99－10区：遺構出土）

相を呈している。裾端部付近には煤が付着している。

甕は（4152～4159）の8点ある。小形5点（4152～4156）、大形3点（4157～4159）である。形態的特徴をみると、河内型、摂津型、「く」の字状口縁甕の3種があり、大形は「く」の字状口縁甕のみである。このなかで明瞭な生駒山西麓産胎土の甕はなく、褐色および茶褐色の色調が主となるが、（4158・4159）は淡色を呈する。

これらの本遺構土器群は、凹線文が出土し、Ⅳ様式前半を主体とするが、脚部内面のヘラケズリ調整や脚柱状部が筒状形態のものがあるなど、Ⅳ様式後半の様相もでている。しかし、新しい様相を示す個体は出土した井戸を特定できず、遺物だけからでは西側井戸（W）と東側井戸（E）の新古を決めることはできない（なお、遺構の切り合い関係では東側井戸が後出）。

〔第12面諸遺構〕（4160～4172）　調査区中央部以西で検出した、平面弧状の溝S 10333、平面円形の小土坑S 10310、平面長円形の小土坑S 10331、ほぼ南－北主軸の小溝S 10314、ほぼ南－北主軸の溝S 10325、平面長円形の中形土坑S 10358、南東－北西主軸の小溝S 10387、平面不整形の大形土坑S 10366、平面長円形の中形土坑S 10340、平面不整形の中形土坑S 10356からの出土。あわせて、壺2点、底部1点、高杯4点、脚部1点、鉢1点、甕4点を掲載した。



第11面〔S10238（4183～4189）〕

図153　弥生時代中期土器実測図－25（99－10区：遺構出土）

壺はいわゆる壺Dとされる（4160）がある。（4161）の体部内面には爪の痕跡が残っている。（4162）は壺の底部で木葉の圧痕が認められる。生駒山西麓産胎土である。

（4163）は鉢で、口縁部を外面に折り返している。直線文と波状文など櫛描文で装飾している。

高杯は浅い皿状または椀形の（4164～4166）と水平口縁高杯（4167）の2種がある。（4166）は生駒山西麓産の胎土をもち、櫛描きの簾状文や扇形文を施文する。（4164）は外面に粘土を折り返し、ヘラミガキ調整で器面を整える。（4165）は凹線文を2条施す。（4167）は水平口縁高杯である。（4168）は中実の脚部で、脚部内面はヘラミガキ仕上げがされている。

甕は河内型（4172）、和泉型（4170）、大和型（4169）、「く」の字状口縁甕（4171）がある。（4172）は生駒山西麓産胎土である。（4169）は器壁が薄く大和型甕の搬入品である可能性がある。（4171）は中形品であり、淡色を呈し搬入品である可能性が考えられる。

〔第11面諸遺構〕（4173～4182）　調査区中央部以西で検出した、平面弧状の溝S10203、西－東主軸の溝S10200、平面長円形のピットS10235、平面不整形（溝状）の大形土坑S10244、平面長円形の中形土坑S10176等からの出土。あわせて、壺4点、底部1点、脚部1点、蓋1点、甕口縁2点を掲載した。このなかで生駒山西麓産胎土をもつものは（4174～4177・4180・4181）で、（4173・4179）も茶褐色を呈する。

壺は（4173）の広口壺と（4174）の有段口縁壺、（4175）の細頸壺がある。（4176）は広口壺か直口壺の壺頸部と考えられる。（4173）は口縁部に立体的な凹線文を施し、縦方向の棒状浮文を貼り付ける。西摂・播磨地域にみられるような施文方法である。（4174）は口縁部の外面に刺突文を２列めぐらせている。（4175）は櫛描きの簾状文を何帯もめぐらせ、円形浮文を貼り付ける典型的な生駒山西麓型の細頸壺である。（4176）は頸部に突帯を４条施し、やはり縦方向の棒状浮文を施している。頸部に櫛描きの簾状文１帯を施す。

（4178）は脚部であるが、下からも円盤充填をしている。（4179）は内面にコゲが付着し、外面が酸化して赤色になっている。甕用蓋と考えられる。

（4180・4181）の甕はともに煤が付着している。２点とも「く」の字状を呈するが、ヘラミガキ調整は体部最大径よりも上まで施され、（4181）は内面にも横方向のヘラミガキ調整が施されている。（4182）は甕の底部である。ヘラケズリ調整が内面に施されている点は注意される。外面はヘラミガキ仕上げがなされ、煤が付着している。

〔第11面土坑Ｓ10238〕（4183～4189）　調査区東半部で検出した、平面不整形の大形土坑からの出土。壺１点、鉢１点、脚部１点、甕４点を掲載した。

（4183）は大形の有段口縁壺であり、口縁部外面に櫛描文で装飾を施している。

（4184）は鉢で口縁部を体部に接するように折り返している。体部は櫛描きの直線文を施した上から縦方向の暗文を加えている。淡色の色調を呈する。（4185）は脚部である。内面にはヘラケズリ調整が施されている。煤が厚く付着し、特に脚端部付近の内面に顕著である。杯部が欠けている点、煤の付着する点から、蓋に転用されたと考えられる。

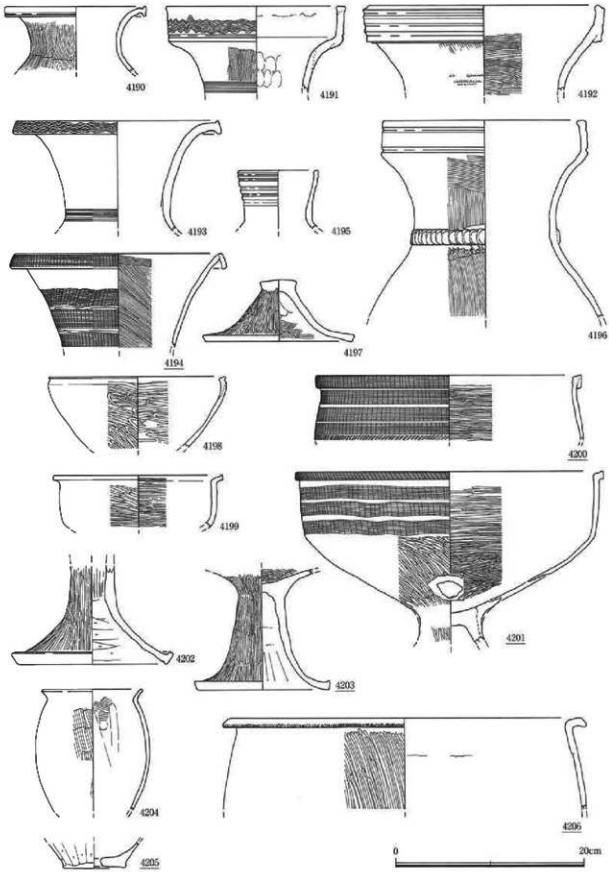
（4186～4189）は甕である。（4187）は生駒山西麓産胎土をもつ。（4186・4187）は河内型甕である。ともに内面外面にヘラミガキ仕上げを施している。（4188・4189）は「く」の字口縁をもつ甕で、体部上半の内外面はハケ調整を施している。

これらの本遺構土器群のうち、脚部内面にヘラケズリ調整が施されている点、鉢の折り返した口縁部が体部と密着状態になっている点は、Ⅳ様式でも新しい様相と考えられる。

〔第10面溝Ｓ10101〕（4190～4206）　調査区中央部で検出した、西南西－東北東主軸を主体とする落ち込み状の溝からの出土。壺７点、蓋１点、鉢３点、高杯１点、脚部２点、甕２点、底部１点を掲載した。

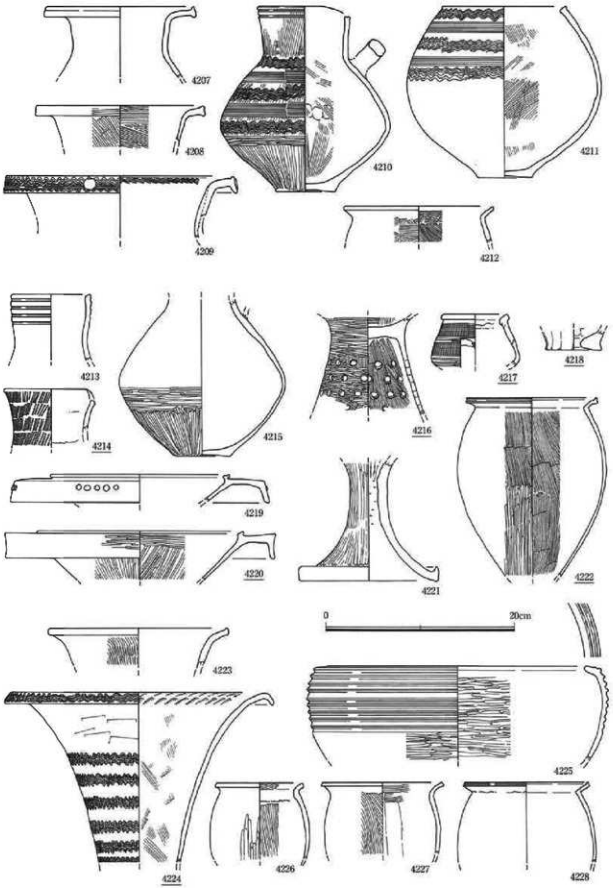
壺は、（4195）の直口壺１点、（4190・4193・4194）の広口壺３点、（4191・4192・4196）の受口状口縁壺３点がある。このうち、（4194）は生駒山西麓産胎土で、櫛描きの簾状文を多用し口縁部がやや直線的に開くなど、文様と形態的において生駒山西麓型広口壺の特徴をもつ。一方、（4192・4193・4196）は赤褐色の胎土をもち、（4192・4196）は口縁部に凹線文をめぐらせる。（4193）の口縁部端面には櫛描きの波状文、頸部に同直線文を施す。（4191・4195）は淡色の色調を呈する。（4190）は口縁部端面に凹線文を１条施す。

（4197）は甕用蓋である。内外面に煤とコゲが付着する。（4198）は杯部の深い高杯である。茶褐色の色調を呈し、口縁部を強くナデ調整する。（4199～4201）は鉢である。いずれも茶褐色の色調だが、（4201）のみが生駒山西麓産胎土である。（4201）は台付鉢で、いったん脚部を作った後、体部をつくり足して作る。この製作工程は（4123）の脚部と類似している点は注意される。体部下半に孔を穿つ。（4202・4203）は脚部である。（4202）は赤褐色の色調を呈し、内面にヘラケズリ調整を施す。煤は付着

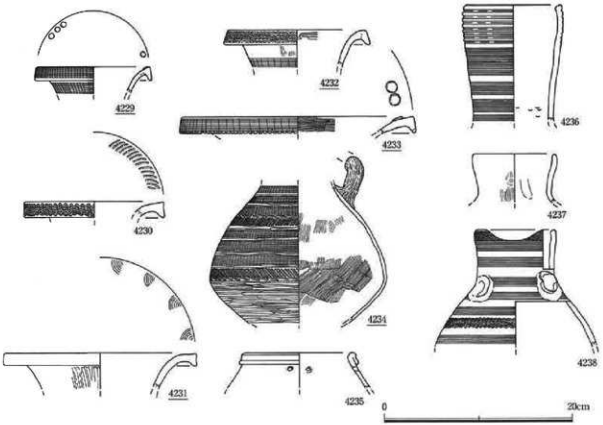


第10面〔S10101（4190～4206）〕

図154　弥生時代中期土器実測図－26（99－10区：遺構出土）



第10面〔S10102（4207～4212）、S10104（4213～4222）、S10105（4223～4228）〕
図155　弥生時代中期土器実測図ー27（99ー10区：遺構出土）



第13～10面〔S10100（4229～4238）〕
図156　弥生時代中期土器実測図－28（99－10区：遺構出土）

していない。（4203）は生駒山西麓産胎土で、内面は板状工具を使って仕上げている。

（4204）は「く」の字状に口縁部が屈曲するが、口縁部が上方にむかってのびる。体部外面はハケ調整が施され、内面にはハケ調整の上からナデ調整が重ねて施されている。外面には煤が付着している。（4206）は生駒山西麓産胎土をもち、形態・調整の特徴からも河内型甕である。煤が一部付着している。

（4205）は生駒山西麓産胎土の底部である。外面はヘラケズリ調整を施し、焼成後に底面に上下から回転を利用して丁寧に穿孔を施している。残存部に煤は付着していない。

本遺構出土土器は、直口壺に凹線文が複数条用いられている点や、受口状口縁壺などに凹線文が多用されている点、生駒山西麓産土器においても広口壺にやや幅広の櫛描廉状文が施される点などから、Ⅳ様式でも新しい様相を示すと考えられる。

〔第10面土坑S10102〕（4207～4212）　調査区中央部で検出した、平面長円形（溝または落ち込み状）の大形土坑からの出土。壺５点、甕１点を掲載した。

壺は、（4207～4209）の広口壺３点と（4210）の水差し形、（4211）の無頸壺である。（4207）は口縁部に煤が付着し、いわゆる壺Ｄである。（4208）は外面もハケ調整で仕上げられている。（4209）は内面と口縁部端面に櫛描きの波状文を施し、端面には円形浮文を貼り付ける。（4210）の水差し形は口縁部に２条の凹線文を施し、体部に直線文と波状文の櫛描文を交互に施す。（4211）の無頸壺の口縁部は約６分の５程度残存しているが、穿孔は認められない、やはり櫛描きの直線文と波状文を交互に施す。甕（4212）は、如意形口縁をもち、内外面にハケ調整を施す。外面には煤が厚く付着する。凹線文出現期の様相を示す。

〔第10面土坑S10104〕(4213～4222)　調査区西半部で検出した平面不整形の落ち込み状の大形土坑からの出土。甕1点、壺3点、高杯3点、底部1点、鉢1点、鉢台部1点を掲載した。

(4213) は直口の口縁をもつ壺で淡色の色調を呈し、口縁部に凹線文を施している。壺体部 (4215) も同じ胎土をもち、大きさや形態から同一個体の可能性が高く、水差し形になると考えられる。(4214) は生駒山西麓産胎土の水差し形で、口縁部が片口になっている。刺突文状の櫛描きの簾状文を連続して施し、形態や文様からも生駒山西麓型水差し形である。

(4216) は生駒山西麓産胎土の鉢台部である。外面から内面へ、縦3列の穿孔がめぐらされている。(4217) は櫛描きの簾状文を施す生駒山西麓産胎土の鉢である。黒斑や煤は付着しない。(4218) の底部は焼成後に内面から穿孔をしている。外面には煤が付着している。(4219・4220) は水平口縁をもつ高杯である。(4219) は茶褐色の色調を呈し、口縁端面に円形浮文を貼り付ける。(4220) も生駒山西麓産胎土をもつ。(4221) は高杯脚部で、内面にヘラケズリ調整を施す。内面の脚端部付近に煤が厚く付着し、蓋に転用されていたことがわかる。(4222) の甕は生駒山西麓産胎土をもつ、「く」の字状口縁甕である。体部下半にヘラケズリ調整後ヘラミガキ仕上げをする。煤やこげはなく未使用と考えられる。

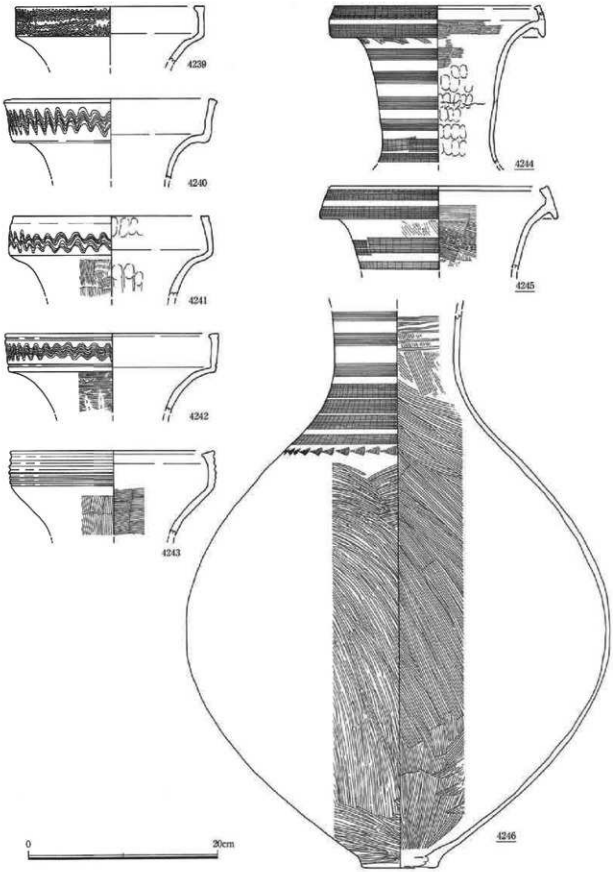
〔第10面土坑S10105〕(4223～4228)　調査区西端部で検出した、平面不整形の落ち込み状の大形土坑からの出土。壺2点、鉢1点、甕3点を掲載した。

(4223・4224) は広口壺である。(4224) は頸部の長い広口壺である。頸部に櫛描きの波状文を連続して施し、さらに口縁部にも同波状文を施す。生駒山西麓産胎土である。(4225) は凹線文を施し、口縁部を内側に肥厚させる無頸壺（ないし鉢）である。これは、擂磨を中心に分布する器種である。(4226) は外面の最終調整がヘラケズリ調整のいわゆる和泉型甕である。(4227) は如意状口縁に外面ハケ調整の摂津型の甕である。(4228) は口縁部を「く」の字状に屈曲させ外面にナデ調整を施している。3個体とも煤が付着している。

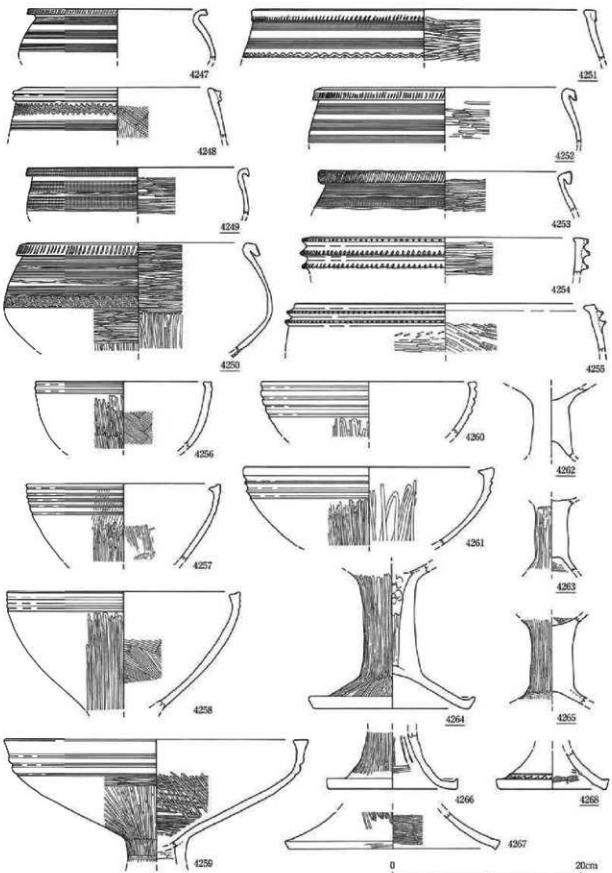
〔第13～10面低湿地状遺構S10100〕(4229～4288)　調査区東端部で、第13面～第10面にわたって継続的にみられた低地部の低湿地（沼）状遺構からの出土。壺18点、鉢9点、高杯6点、脚部7点、甕20点を掲載した。

壺は、広口壺 (4229～4233)、細頸壺 (4236)、直口壺 (4237)、水差し形 (4234・4238)、受口状口縁壺 (4239～4243)、有段口縁壺 (4244・4245)、同体部と推定できる壺 (4246)、無頸壺 (4235) がある。このうち生駒山西麓産胎土のものは、(4229・4231・4232～4234・4244～4246) である。広口壺のうち、生駒山西麓産胎土で櫛描きの簾状文をもつ (4226・4232・4233) がやや直線的に外反して口縁端部を垂下させるのに対し、淡色の色調胎土をもつ (4230) は水平近くまで大きく外反する形態を呈する。細頸壺 (4236) と直口壺 (4237) は、淡色の胎土を呈している。(4236) は櫛描文と凹線文が同一個体に共存している。(4234) の水差し形は生駒山西麓産胎土をもち、櫛描きの簾状文を連続して施す。(4238) は櫛描きの波状文と直線文で装飾されるが、煤が外面に厚く付着する。無頸壺 (4235) は口縁部が外面に折り曲げられている。受口状口縁壺と有段口縁壺は形態的に類似しているが、受口状口縁壺 (4239～4243) は淡褐色胎土をもち櫛描きの波状文や凹線文で飾られ、一方、有段口縁壺 (4244・4245) は生駒山西麓産胎土をもち、櫛描きの簾状文を連続して施されるなど、文様、胎土さらに口縁部形態において各器種内での相関性が明瞭である点は注目される。したがって、壺体部 (4246) は生駒山西麓産胎土で櫛描きの簾状文で飾られることから、有段口縁壺の体部である可能性が高いと考えられる。

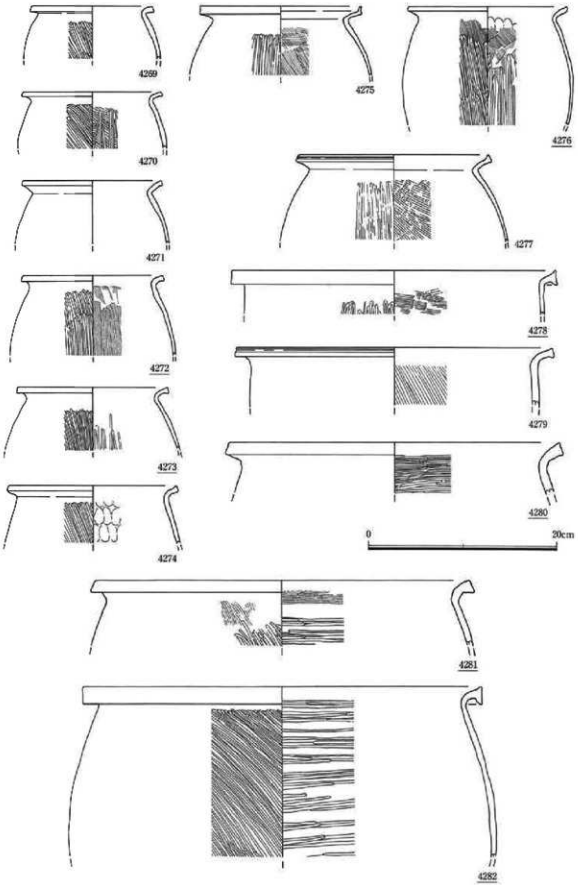
鉢は、口縁部を外に折り曲げる (4247～4253) と、突帯を貼り付ける (4254・4255) の2種がある。



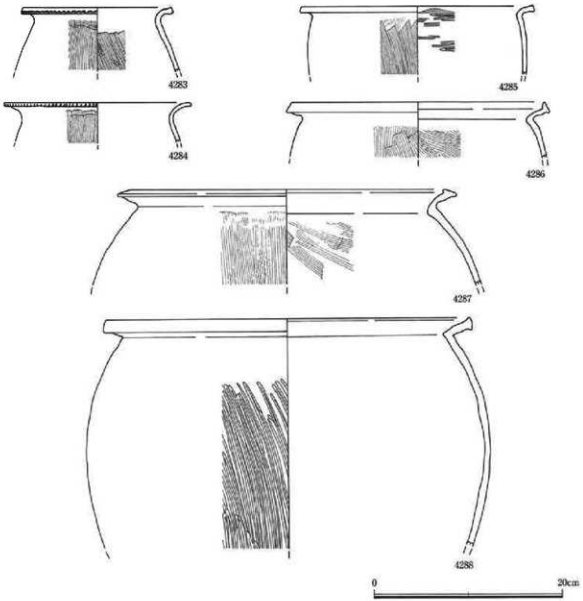
第13～10面〔S10100（4239～4246）〕
図157　弥生時代中期土器実測図－29（99－10区：遺構出土）



第13～10面〔S10100（4247～4268）〕
図158　弥生時代中期土器実測図ー30（99ー10区：遺構出土）



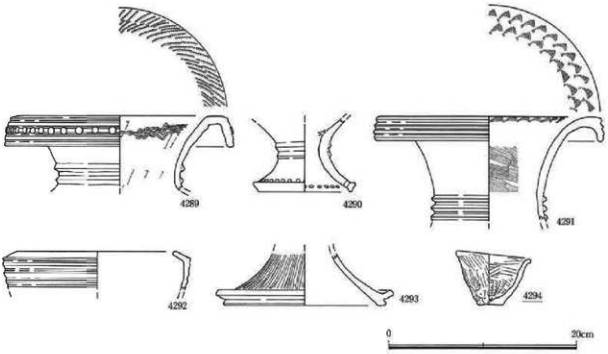
第13～10面〔S10100（4269～4282）〕
図159　弥生時代中期土器実測図－31（99－10区：遺構出土）



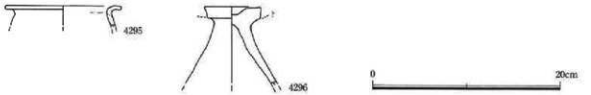
第13～10面〔S10100（4283～4288）〕
図160　弥生時代中期土器実測図ー32（99ー10区：遺構出土）

前者は、（4249～4252）の7個体中4個体が生駒山西麓産胎土である。口縁部から体部が膨らむ形態を呈し、櫛描きの簾状文、直線文、波状文で飾られ、口縁部には刻みの施されるものが多い。（4253）の口縁部は2方向から刻みが施されている。後者の（4254・4255）はほとんど体部が張らず、生駒山西麓産の胎土ではない。高杯（4256～4259）は口縁部に2条～4条の凹線文が施されている。体部に屈曲がなく杯部の深い（4256～4261）と緩やかに屈曲し杯部の浅い（4259）がある。脚部は中実の（4263・4265）がある。（4264）は中実ではないが、脚部にも脚柱状部の下方にも円盤充填をしている。図示したなかには生駒山西麓産胎土の高杯の杯部はないが、脚部では（4262～4264・4268）の4点が生駒山西麓産胎土である。（4266）の脚裾部内面には煤が厚く付着し、蓋として転用されたと考えられる。いずれの脚内面にもヘラケズリ調整が施されていない。（4267）は壺である。内面に煤が付着している。

甕は、外面の肩部までヘラミガキ調整を施すいわゆる河内型甕、体部外面ハケ調整で口縁部端面に刻



第13・12面間（4289・4290）、第12～10面間（4291～4293）、その他（4294）、
図161　弥生時代中期土器実測図－33（99－10区：遺構・包含層出土）



第11面精査（4295）、その他（4296）
図162　弥生時代中期土器実測図－34（01－2区：包含層出土）

みを施し外面をナデ調整するいわゆる摂津型甕、そして、「く」の字状口縁をもち口縁部整形にナデ調整を多用する甕の3種がある。（4269～4282）までは河内型甕、（4283・4284）は摂津型甕、（4271～4274）は「く」の字状口縁甕である。河内型甕のうち、胎土が生駒山西麓産のものは（4272・4273・4276・4278・4280～4282）である。中・小形甕（4269～4277）と大形甕（4278～4282）がある。小形品の中には「く」の字状に屈曲する（4275～4277）や口縁端部をつまみあげる（4275）もある。大形甕は、口縁部断面が三角形を呈する（4278・4281・4282）があり、河内型甕に特徴的な口縁部形態を示している。摂津型甕（4283・4284）はいずれも体部が張り、新しい様相を示している。「く」の字状口縁部の甕は、（4286～4288）のように淡色の胎土をもつが多い。中形の（4285・4286）と大形の（4287・4288）がある。（4285）は体部が張らないが、大形になるほど体部の張る傾向が強い。

以上から、本遺構出土土器は、甕にタタキ痕跡が顕著ではなく口縁部端面に凹線文の施されていない点、壺に施される櫛描きの旗状文が幅広ではない点、および、高杯脚部の内面にヘラケズリ調整の認められない点から、Ⅳ様式前半ととらえたい。

g．99－10区包含層ほか出土

〔第13・12面間〕（4289・4190）　壺1点、脚台部1点を掲載した。

（4289）は広口壺で口縁部端面に凹線文を施し、頸部には突帯を貼り付けている。淡色の胎土をもち播磨

の特徴を有しており、搬入品である可能性が考えられる。(4290) は脚柱部に突帯をめぐらせ、端部付近に連続して穿孔を穿つ。この脚部は西摂から播磨の地域的特徴をもっている。

〔第12・11面間〕(4293)　高杯脚部1点を掲載した。

淡色で脚端部が上方にのびる形態を呈している。西の地域的要素の強い土器である。

〔第11・10面間〕(4292)　鉢1点を掲載した。

口縁端部を内側に屈曲させてのびる鉢である。淡色の胎土をもち播磨の特徴を有しており、搬入品である可能性が考えられる。

〔その他〕(4291・4294)　出土層順を特定できない側溝からの出土品。壺1点、鉢1点を掲載した。

壺 (4291) は口縁部を大きく垂下させ凹線文を施す。頸部には突帯を施し、播磨地域の壺の特徴をもつ。胎土は淡色から赤褐色の色調を呈し、在地の胎土との相違からも搬入品である可能性が考えられる。(4294) は口縁部を外反させる鉢である。外面を指ナデにより仕上げ、生駒山西麓産胎土で作られている。

h．01－2区包含層ほか出土

〔第11面精査〕(4295)　甕1点を掲載した。

口縁部をほぼ水平近くまで屈曲させ、端部は丸くおわる。

〔その他〕(4296)　上層での混入品としての出土。甕用蓋1点を掲載した。

器種比定にやや疑問も残るが、頂部が外方に拡張され、鉦状を呈する。

i．小結

以上、99－6区・8区～10区出土の弥生中期集落域関係の土器を概観してきた。

これらは凹線文出現後から盛行期までを中心とし、中期後葉の土器群と位置づけられる。特に、最も出土量の多い99－10区では第14面から第10面まで5面に分けて報告してきた。上層の第10面では、新しい傾向をみせるようではあるが、中心となるのは連続した2小様式内（寺沢・森井1989の編年では、Ⅳ－1・2が中心）におさまっており、長い時期幅は認められなかった。したがって、この空間の集落域としての中期後葉に限られていたと考えられる。このように、集落域の存続時期が、前述した墓域の形成時期とは完全には重ならず、墓域の方がやや時期的に先行する点は注意されるべきである。

また、これらの集落域出土の土器には他地域から搬入された個体が含まれている。最も多いのは本遺跡の東に隣接した地域の生駒山西麓産土器で、後項（第7章第4節）で検討するように約37%を占め、しかも多器種にわたって出土している。ただし、この割合は墓域資料（約74%）に比べて低くなっている点は先述のとおりである。さらに、摂津や播磨の地域の壺、甕、脚部が出土し、瓜生堂遺跡より河内湖を挟んだ西北地域との交流の強かったことがうかがわれる。一方、この時期に土器移動が活発だった近江地域の甕は出土せず、淀川をさかのぼった上流域（山城地域や近江地域ほか）との直接的な交流はこの時期にはそれほど強くなかったことが理解される。　（長友・秋山）

（2）土製品（図163・164、表8・9、写真図版111）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

99－3区・8区～10区で土器片転用円盤（有孔・無孔）、焼粘土塊が出土した。その点数を、実測図掲載の有無と総計に区分して表8に示した。

種類別では、転用円盤が圧倒的多数を占め、他に焼粘土塊が若干3点あるにすぎない。弥生前期では、

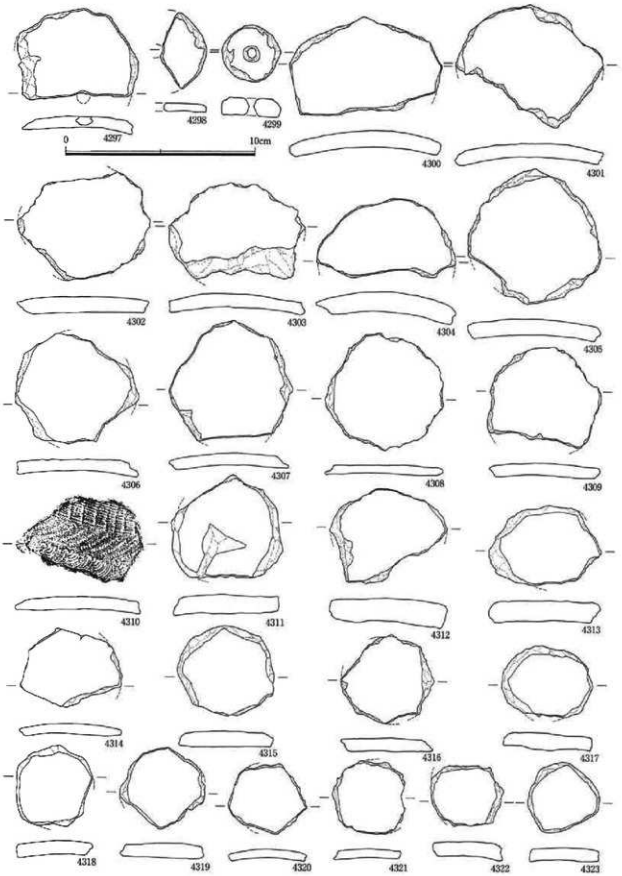


図163　弥生時代中期土製品実測図－１（99－３・９・10区：遺構・包含層出土）

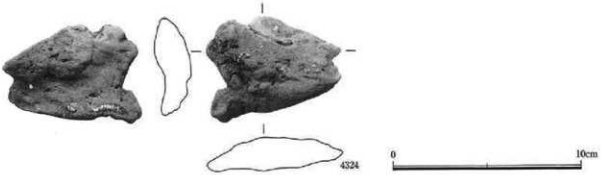


図164　弥生時代中期土製品実測図－２（99－９区：遺構出土）

表８　弥生時代中期土製品分類表

	地区	種類								計
		土錘	土製紡錘車	土器片転用有孔円盤	土器片転用円盤	焼結土塊	球玉	土人形	その他、不明	
実測遺物	99-3			1	3					4
	99-9			1	5	1				7
	99-10			1	16					17
非実測遺物	99-3				1					1
	99-8				1					1
	99-9				1	1				2
	99-10				6	1				7
計				3	33	3				39

表９　弥生時代中期土製品観察表

（　）は復原推定重量

挿図番号	遺物番号	写真番号	調査区	出土遺構・層位	器種	法量					備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	直径(cm)	重量(g)	
163	4297		99-9	第10面509061(509040)	土器片転用有孔円盤	4.9	6.3	0.6		20(30)	
163	4298	111	99-10	第11面510259	土器片転用有孔円盤	4.1	2.4	0.4		1～5 (2～10)	
163	4299	111	99-3	第15面503301	土器片転用有孔円盤	3.0	3.1	0.9		6～10	穿孔は外一内？
163	4300		99-10	側溝	土器片転用円盤	8.0	8.0	0.9			
163	4301		99-9	第10面509061(509040)	土器片転用円盤	6.1	7.8	0.8			
163	4302	111	99-10	第12・11面間	土器片転用円盤	5.3	7.1	0.9			
163	4303		99-10	第11面510196	土器片転用円盤	4.9	7.2	0.7			
163	4304		99-9	第12・11面間	土器片転用円盤	3.8	7.4	1.1			
163	4305	111	99-10	(510105)	土器片転用円盤	7.1	7.1	0.8			
163	4306	111	99-9	第10面509061(509040)	土器片転用円盤	5.7	6.6	0.7			
163	4307	111	99-10	側溝	土器片転用円盤	6.1	6.6	0.7			
163	4308	111	99-10	側溝	土器片転用円盤	6.2	6.2	0.5			
163	4309		99-10	第13面精査	土器片転用円盤	5.0	6.0	0.6			
163	4310	111	99-9	第11・10面間	土器片転用円盤	4.4	6.6	0.7			
163	4311		99-3	第19・18面間	土器片転用円盤	5.3	5.7	1.1			
163	4312		99-9	第12・11面間	土器片転用円盤	4.9	6.3	1.2			
163	4313		99-3	第15面以下	土器片転用円盤	4.1	6.9	1.1			
163	4314		99-10	第12面	土器片転用円盤	4.2	5.3	0.6			
163	4315	111	99-10	第14面510623	土器片転用円盤	4.8	5.1	0.8			
163	4316		99-10	側溝	土器片転用円盤	4.6	5.0	0.7			
163	4317		99-3	503300	土器片転用円盤	3.7	4.8	0.9			
163	4318		99-10	第13～10面 510199	土器片転用円盤	4.1	4.0	0.7			
163	4319		99-10	第11面510171	土器片転用円盤	4.3	4.5	0.8			
163	4320		99-10	第12・11面間	土器片転用円盤	3.7	4.1	0.5			
163	4321	111	99-10	第12面510376	土器片転用円盤	3.9	3.7	0.5			
163	4322	111	99-10	第10面 510104	土器片転用円盤	3.2	3.8	0.9			
163	4323	111	99-10	側溝	土器片転用円盤	3.7	3.8	0.7			
164	4324		99-9	第10面509061(509040)	焼結土塊	5.1	7.2	1.8			炭化した植物遺体痕を含む

焼粘土塊が大多数を占め、加えて土錘や紡錘車がみられた特徴と対照的なあり方を示す。

また、これら土製品が検出された地区のうち、99－8区～10区の3調査区は、弥生中期における空間利用区分では集落域ないしその縁辺部に相当する。なかでも集落域の中心部と目される箇所（99－10区）で出土点数が最も多い事実は、弥生前期集落域でのあり方と共通する。一方、99－3区では、弥生中期方形周溝墓群とその下層の弥生前期集落域との間の自然流路や堆積層からの出土であるが、土器片転用円盤（有孔品含）の出土が若干ながら確認できている。

以下、種類ごとに概要を述べるが、個別の出土地区・遺構・位置等についての、特記以外の事項に関しては表9を参照されたい。

b．各区出土

〔土器片転用円盤〕（4297～4323）　（4297～4299）は土器片転用の有孔円盤である。（4297）は破片だが、穿孔を施されているのが認められたため有孔円盤と判断した。重量は20gで、完形ならば30g程度と思われる。99－9区の第10面溝S09051からの出土。（4298）の重量は3gで、完形であれば15g前後と思われる。99－10区の第11面溝S10259からの出土。（4299）の穿孔は両側から施されている。重量は8gである。99－3区の第15面流路S03301からの出土。

（4300～4323）は土器片転用の無孔円盤である。壺や甕の体部片が転用されたと考えられる。大きさに関しては、直径が3～4cm、5～6cm、7cm以上の3グループに分けられる。最も多くみられるのは、直径6cm程度、厚さが0.7cmのものである。弥生前期よりやや大きくなるように見受けられる。表面にヘラミガキ、裏面にナデが施された土器片を転用する傾向にある。（4310）の表面には櫛描きの懸状文・列点文・扇形文、裏面にナデが施されている。（4311）は、表面にヘラミガキが、裏面にはハケが施されている。表面には「T」字状の傷がある。焼成後の傷であるが、円盤整形の際についたかは不明である。これらは、99－3区・9区・10区の各種遺構や包含層ほかからの出土。

〔焼粘土塊〕（4324）　植物遺体痕を含んでいる。99－9区の第10面溝S09051からの出土。

c．小結

以上のうち、共伴土器からの時期比定では、集落域とその周縁部の99－8区～10区の資料は中期後半（Ⅳ－1・2前後）に属すると想定できる。一方、99－3区の資料は中期中葉と弥生前期の間の層順に相当し、詳細時期の特定は不可能であるが、推定では中期に含まれると考えられる。　（宮田・秋山）

（3）木製品（図165、表36～39、写真4・5、写真図版113・114）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

方形周溝墓の主体部木棺以外の弥生中期の木製品は、遺構や包含層ほかから農具や容器類などが確認された。出土地区は、集落域中心部の99－10区と、同縁辺部域の99－9区の2調査区で、前者での出土が顕著となっている。したがって、今回報告の木製品は、集落域で使用されていたものである。各資料の樹種に関しては、後掲の表36～39を参照されたい。

b．各区出土

〔農具〕（4325～4329）　（4325）は、鋤の一部と推定される資料である。残存長19.2cm、残存幅6.1cmである。突起状に残る部分が柄になるとすると、一木作り鋤の可能性もある。端から徐々に厚くなっている。加工痕は確認できない。99－10区の第13・12面間からの出土。

（4326）は、隅丸長方形を呈する、枠なし形式（秋山1993）の田下駄である。長さ23.6cm、復原幅11.3

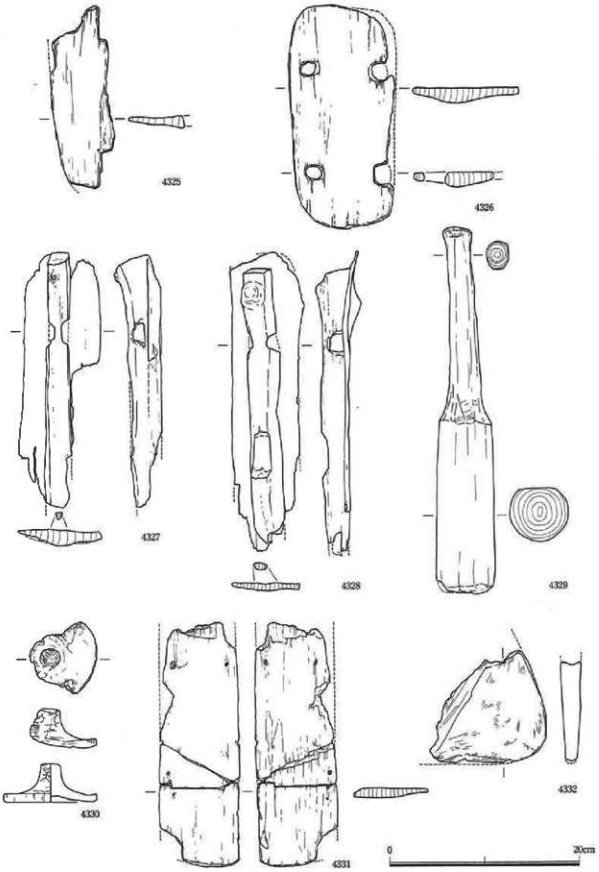
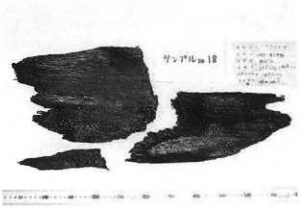
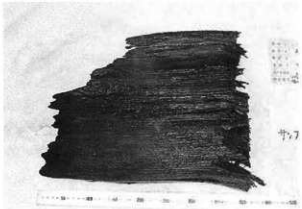


図165　弥生時代中期木製品実測図（99－9・10区：遺構・包含層出土）



木棺S05215蓋板

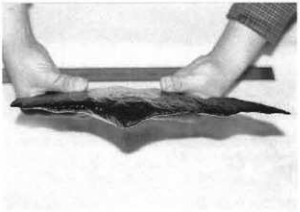
木棺S05215蓋板側面



木棺S05215側板

木棺S05215側板側面

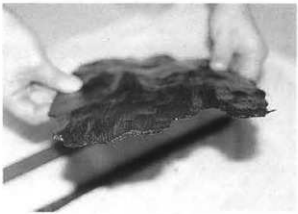
木棺S05215小口板



木棺S05215小口板断面

写真4　弥生時代中期方形周溝墓木棺写真－1

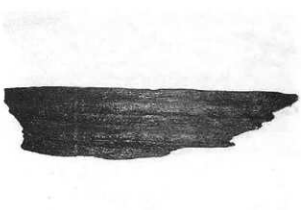
木棺S05245蓋板



木棺S05245蓋板断面

木棺S05245底板

木棺S05245底板断面



木棺S05246側板

木棺S05246側板側面

写真5　弥生時代中期方形周溝墓木棺写真ー2

cmとなる。方形に近い孔を表面から裏面に向かって上下2対あけており、そこに紐状のものを通したと考えられるが、擦痕などは確認できない。表面は比較的平らに仕上げられているが、裏面はやや中央で隆起している。99－10区の第13面溝S10400からの出土。

（4327・4328）は、鏝と考えられる製品である。両者ともに2cm前後の方形の把手孔が1孔のみ確認できる。（4327）は現状でも磨り板の下面が曲面を呈していることが確認できる。2点の出土位置が近接しているので同一個体の可能性が高い。本遺跡周辺では、東大阪市鬼虎川遺跡（東大阪市文化財協会1988）などで、同様の製品が出土している。ともに99－10区の第13面溝S10400からの出土。

（4329）は、長さ36.6cm、敲打部径6.2cm、柄部径2～3cmの横槌であり、ほぼ完形の状態で出土した。敲打部は先端から加工し始めており、削ったものと思われるが現状ではその単位は確認できない。敲打部を作り出した後、柄部を削り、柄の先端を最後に整えている。また、敲打部と柄部の境界付近には工具痕と思われる痕跡が残っている。図示面の反対側は全体的に炭化している。99－10区の第13面井戸S10401Wからの出土。

〔容器類〕（4330）　高さ4.0cm、復原径9.8cmをはかり、下端部はやや上方に跳ねあがる。全体的に炭化している。高杯の脚部かと思われる。99－9区の第10面溝S09051からの出土。

〔用途不明品〕（4331・4332）　（4331）は、小さな穿孔をもつ板状製品である。残存長25.8cm、幅7.8cmをはかり、より長い形状になると推測される。割れた箇所をはさんで2箇所の穿孔がおこなわれており、これは、修復のためにあけられたと考えられる。99－9区の第10面溝S09051からの出土。

（4332）は、全体的な形状は不明だが、丸みをおびた角をもつと推測される資料である。残存長11.6cm、残存幅11.3cmをはかる。加工痕は確認できない。99－10区の第13面溝S10548からの出土。

〔木棺材〕（写真図版114、写真4・5）　上記の集落域以外の墓域で検出した木棺は、現地取りあげ後における図化や写真撮影に耐えうるほどに遺存状況のよいものが少なく、その大部分は個別の詳細な記録化等はできなかった。そのうち、保存処理をおこない写真図版に掲載した2点について簡単に紹介しておこう。

（写真図版114・1）は、99－5区の第19面で検出した方形周溝墓S05200の木棺墓S05215の底板である。発掘工事時の鋼矢板で切断されてしまっているが、残存長69.1cm、幅57.4cm、厚6.2cmをはかり、小口部分付近が残存している。小口板を受けるために中央を窪めた形状をしている。小口部分は、外から5cm前後の範囲で中央より一段低くなっており、そこに小口板を載せたと考えられる。また、側縁端から約2～6cmの間に溝状の筋がみられ、ここに側板を立てたと思われる。この溝の幅から、側板の厚さは最大4cm程度であったと推測される。

（写真図版114・2）は、01－3区の第10面で検出した方形周溝墓S23200の木棺墓S23205の底板である。遺存状態があまりよくなく、現状で、残存長約101cm、幅約19cm、厚みは一番厚いところで1.3cmをはかる。

上記以外の写真4・5の各木棺材は、遺存状況もあまりよくない断片であるが、現状での状態把握のため掲載しておく（なお、この諸例は国立歴史民俗博物館の炭素14年代測定への供出品にあたるが、測定は未着手）。

c．小結

弥生中期に属する木棺以外の木製品の出土は、99－9区・10区に集中している。上記のように、これらの調査区は中期後葉（河内Ⅳ－1・2様式中心）の集落域と考えられる地区であり、これらは集落で

使用・保管されていた日常必需品である。機能が判明する木製品では、農具類が主体を占め、この集落域での生業の一端を示しているといえよう。そのなかに、田下駄が含まれている点は、周辺の水田環境や土地条件を推測するうえで有効な材料となる。なお、今回報告した以外の雑木類等の樹種鑑定やそれに関する考察は、後掲の第7章第9節を参照されたい。 (中川・秋山)

(4) 石製品 (図166～173、表10・11、写真図版122～124)

1) 各調査区の出土品

a. 出土状況ほか

弥生中期に属する石製品は、製品(トゥール類)、製作途中品、剥片類を含め、表10に示したように50点の出土を確認した。その内訳は、石剣、石鏃、石錐、スクレイパー、石庖丁、石斧、二次加工ある剥片、楔形石器、砥石などである。

それらの出土調査区では、3点以外は、集落域およびその縁辺部に相当する99－7区～10区から出土しているが、そのうち集落中心部の99－10区からの資料がほとんどを占める。他の若干の資料は、1点のサヌカイト微細剥片が99－5区の第19面方形周溝墓S05240の主体部(木棺墓)S052244から、2点のサヌカイトの楔形石器と剥片が99－1区の流路中ほかから出土している。

以下では、図示した遺物を中心に、それぞれの石製品について詳細にみていくが、図示した以外の資料を含め、個別資料の出土遺構・位置、大きさ、重さ、石材等に関しては表11に示したので、特記しないかぎりそれを参照されたい。また、石製品の説明をおこなう際の、各面名称や器種内分類基準は弥生前期の項と共通させている。

b. 各区出土

〔石剣〕(4333) 下半部を折損しているため、詳細な形状は不明である。平坦剥離により形態を整えたのち、中央に稜線が通るように全面を研磨したものと考えられる。その大部分が研磨により非常に平滑となっているが、縁辺には若干剥離痕が認められる。刃縁部は磨耗している。断面形はレンズ状を呈する。

〔石鏃〕(4334・4335) (4334)は「有茎型」。基端部を折損している以外は、ほぼ完形に近いと考えられる。(4335)は「尖基型」。上半部を欠損しているが、元来あまり大形でないものと考えられる。調整はやや粗く、縁辺は鋸歯状を呈する。

〔石錐〕(4336) 横長の剥片を素材とする「V型」。片側縁には自然面が残置する。調整により長狭に整形された刃部には、明瞭な回転痕が認められる。

〔スクレイパー〕(4337～4342) (4339)以外は、その形態に共通点がみられる。それは、素材剥片の一部に自然面が残置しており、それに対置する縁辺を刃部としている。自然面の多くは打面に認められる。(4338・4340～4341)は、横長剥片を素材とし、末端部の表裏両面から平坦な調整を施し刃部としている。一方、(4337・4342)はやや縦長の剥片を素材とするが、それを横位に用いているため、形態上では他との差異は認められない。(4339)は、素材の用い方、自然面打面とそれに対置する刃部の形成など他のものと類似点はみられるが、その調整は粗く刃部は彎曲しており、打面部には敲打痕および摩滅がみられることから、スクレイパー以外の用途も考えられる。

〔二次加工ある剥片〕(4343～4348) (4343)は裏面両側縁に連続した調整がみられる。他は、不連続な剥離痕がわずかに認められるにすぎない。いずれも一部に自然面を有している。また、(4343)の表面にはバルブが残ることから、剥片素材石核から剥離された可能性が高い。

〔微細剥離痕ある剥片〕(4349・4350)　(4349) は、上下端を折損するがやや縦長の剥片であったと推定される。縁辺には連続する微細な剥離痕がみられる。(4350) は、やや寸詰まりの剥片を素材とする。末端の裏面側に不連続な微細な剥離痕が認められる。

〔楔形石器〕(4351～4353)　(4351・4353) はともに下端部を折損する。両者とも一部に自然面を残す。(4353) は、左右からも剥離痕が認められることから、先行して同様の行為がおこなわれていた可能性がうかがえる。(4352) は削片である。

〔剥片〕(4354～4359)　(4358・4359) 以外はいずれも自然面を有する。なかでも、(4356・4357) は表面が自然面で覆われており、(4354) もまた1枚の剥離面を除くと自然面であることから、原石もしくはそれに近い状態から剥離されたものと考えられる。(4354・4356) の打面は単剥離面打面、(4355) のそれは自然面であるが、いずれも非常に平坦である。(4357) は上部を欠損しているが、その形状から人形の剥片であったと推定される。輪郭や稜線が非常に摩滅しており、ローリングを受けたものと考えられる。また、端部には微細な剥離痕があるが、これは人為的なものというよりもローリングを受けた際に生じたものの可能性が高い。(4358・4359) は調整剥片と考えられる。(4358) の打面は潰れており、断面形は弓形状を呈する。特に (4359) は、側縁に先行の調整痕が認められる。

〔石核〕(4360～4363)　いずれも剥片を素材としている。(4360) は、打面と作業面を交替し、交互に剥片を剥離している。(4362) は、素材剥片の風化（トーン部）が非常に進んでいることから、より以前に剥離された剥片を石核として再利用した可能性が高い。(4361・4363) は素材剥片の表裏両面に作業面を設け、剥片を剥離している。とくに (4363) は、一部に微細な連続した剥離痕がみられることから、剥片剥離が終了したのち、スクレイパーとして転用した可能性も考えられる。

〔石庖丁〕(4364～4366)　(4364) は完形品、(4365) は破片、(4366) は製作途中品。(4364) は刃部が全体的にやや内彎する「内湾型」である。その刃部は、急斜度を呈する片刃である。長さ17cm、重さ約80gをはかる。(4365) は残置する面が非常に丁寧に研磨されている。(4366) は「杏仁型」の石庖丁を製作しようとした、剥離整形段階の製作途中品と考えられる。上端の一部には自然面を残置しており、厚みを減じる努力の痕跡がうかがえるが、これが折損する原因となった可能性も考えられる。

〔礫状加工品（砥石か）〕(4367・4368)　(4367) は砥石の一部であろうか。擦痕が顕著に認められる。(4368) は砥石。ただし、その断面形態は半楕円形を呈しており、敲打により整形されている。また、石材は閃緑岩であり、石斧に多用されるものであることから、石斧の製作途中で失敗したものを砥石に転用した可能性も考えられる（若林幸子氏ご教示）。ともに被熱の痕跡がみられる。

〔石錘〕(4369・4370)　(4369) は、短軸の中央付近に1条の溝状凹部がはしることから、錘のようなものとして使用されたものか。また、上下端に敲打痕が認められ、さらに下端部の一部が非常に平滑となっていて擦痕がみられることから、敲石および磨石のような用途も考えられる。被熱している。

(4370) は礫錘か。棒状の礫を素材とする。ほぼ全面に短軸方向の磨り痕が認められる。とくに下半部では、ほぼ一周するようなくぼみも認められる。磨り痕の状況から、錐のような用途に用いられた可能性も考えられる。上部の一部分にはタール状の付着物が認められる。

〔砥石〕(4371～4375)　(4373～4375) は被熱しており、折損部分が多くみられる。砥面にはそれぞれ擦痕が顕著に認められ平滑となっている。個別にみると、(4371) は6面が砥面となっており、各面は平坦である。(4372) は、石材が軟質であることから、金属用の砥石の可能性が考えられる。表裏、左右の砥面は非常に平滑となっており、やや凹形を呈する。各面には擦痕が顕著に認められる。また、一部

表10　弥生時代中期石製品組成表

	中期
石鏃	2
石剣	1
石錐	1
スクレイパー	6
楔形石器	5
二次加工ある剥片	6
微細剥離痕ある剥片	2
剥片	8
微細剥片	3
石核	4
石庖丁	3
円盤状品	0
石斧	0
砥石	7
敲石	0
投弾状品	0
その他	2
計	50

には煤のようなものが付着し、上下端には自然面が残置する。(4374) は、やや扁平な長細い礫を素材とする。上部を欠損し、端部に敲打痕、他の部分には擦痕がみられる。砥石および敲石として用いられたものか。(4375) は、被熱のため大部分を折損するが、元来かなり大形であったと推定される。砥面と考えられる面には擦痕が顕著に認められる。

c．小結

以上の中期石製品のうち、その大部分を占める99－10区・5区・9区の資料に関しては、以下の特記例以外は、共伴土器等から中期後半（Ⅳ－1・2前後）に属するのはほぼ確定できる。また、99－1区・6区・7区の若干点（4334・4348・4351）は、その層順等からほぼ同時期と想定して大過ないであろう。しかし、99－8区で完形で単独出土した石庖丁（4364）の出土層序は、中期後半面よりかなり下層にあたる。本区では、弥生前期相当層まで発掘がおよんでおらず、また今回の調査範囲全体では弥生中期前葉の考古遺物は皆無であるので、厳密な総体的評価はできない。が、本例は中期前半（ないし弥生前期）までさかのぼる可能性も考慮しておく必要性がある。また、北接部の東大阪市教育委員会の47－2次D区では、中期前半に推定され水田畦畔と判断された遺構が確認されており、それとの関連性も想定できる（第7章第2節参照）。

さて、弥生中期の石製品の出土点数は前期よりは若干少ないが、その組成は豊富である。内訳は、石剣、石鏃、石錐、スクレイパー、そして剥片、石核、石庖丁、石鋸、礫錐・砥石などである（表10）。

まず、打製石器からみていこう。石剣、石鏃はいずれも折損しているため、集落内部に廃棄されたと考えることができる。ただし、石錐やスクレイパーなどは完形であるにもかかわらず、集落内に残されているということは、両者間の石器に対する意識の相違の現れとみることもできるであろう。

また、サヌカイトの石核、剥片、微細剥片の各段階の資料は認められるが、微細剥片の点数が非常に少なすぎる。このことから、積極的な剥片剥離作業はおこなわれてはいなかったとも考えられるが、そのような微細剥片については発掘調査時における回収精度の問題ともからんでくるので、今後意識的な調査・検討が必要となろう。ただ、調整剥片（4359）が出土していることから、調整にともなうような石器の製作はおこなわれていたといえるのではなかろうか。なお、弥生中期の打製石器製作の様相の検討に関しては、後掲の第7章第8節を参照されたい。

一方、磨製石器では、完形の石庖丁（4364）が出土している。その刃部はやや内湾しているが、これは使用によるものと考えられる。また、(4366) は石庖丁の製作途中品としたものである。同一石材の微細剥片など出土していないため、断言することはできないが、仮に（4366）が製作途上の失敗品とみるならば、遺跡内において石庖丁の製作がおこなわれていたことの裏付けとなる。石庖丁の製作に関しては、これまで本遺跡では実施されておらず製品を他集団から供給されたとも想定されたこと（田代1986）もあるが、最近の本遺跡内の調査では石庖丁製作途中品の出土が蓄積されつつある（東大阪市教委2002、第7章第2節、図403参照）。また、石庖丁の刃部片も出土していることから修正も施されていたのであろう。そして、それらの作業に使用された可能性のある砥石も出土している。砥石は石質のちがいにより荒砥、中砥、仕上げ砥の3種類が認められる。このように、磨製石器については、遺跡内における製

表11　弥生時代中期石製品観察表

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	最大長(cm)	折損長(cm)	最大幅(cm)	折損幅(cm)	最大厚(cm)	折損厚(cm)	重量(g)	石材	産地	自然	形状	打面	折損	時期	備考
122	166	4333	99-10	側溝	石剣		5.70		2.50		1.20	15.1	Sn		無		無	有	中	茎部、両面に磨痕がみられる。石刀つよい
122	166	4334	99-7	S07081	石剣		5.30	2.30		0.80		7.6	Sn		無		無	有	中	茎部を折損、凸基式、石刀つよい
122	166	4335	99-10	S10129	石鏃		2.90	2.20		0.50		2.2	Sn		無			有	中	
122	166	4336	99-10	S10299	石錐	5.60		2.20		0.90		10.1	Sn		有	平坦	無	無	中	回転痕有
122	166	4337	99-10	第12-11面間	スクレイパー	4.60		2.40		0.90		9.8	Sn		有	凹凸	自	有	中	
122	166	4338	99-10	S10474	スクレイパー	4.80		3.20		1.10		14.8	Sn		有	凹凸	無	有	中	
122	166	4339	99-10	S10100西部	スクレイパー	11.40		4.50		1.60		98.9	Sn		有	凹凸	自	無	中	石核の可能性有
122	166	4340	99-10	S10327	スクレイパー	3.00		8.60		1.70		26.2	Sn		有	凹凸	自	有	中	
122	166	4341	99-10	第10-9面間	スクレイパー	7.00		4.20		2.00		38.4	Sn		有	凹凸	自	無	中	
	167	4342	99-10	第13-12面間	スクレイパー	10.30		5.90		1.60		111.8	Sn		有	凹凸・爪	自	有	中	
	167	4343	99-10	南壁アゼ	RF	2.80		3.30		1.30		8.2	Sn		有	凹凸	自	無	中	
123	167	4344	99-10	S10389東側	RF	4.90		5.00		1.50		36.9	Sn		有	凹凸	単	無	中	
123	167	4345	99-10	第13-12面間	RF	4.80		3.80		1.10		12.7	Sn		有	すじ	自	無	中	
	167	4346	99-10	南壁アゼ	RF	4.30		5.90		1.40		25.7	Sn		有	すじ	単	有	中	
	167	4347	99-10	S10196	RF	2.30			1.80	1.10		3.4	Sn		有	すじ	単	有	中	板状石器？
	167	4348	99-1	S01123	RF	3.40		6.00		1.00		15.0	Sn		有	凹凸	単	無	中	下層遺構状況から時期特定
	168	4349	99-9	溝状遺構	MF		5.30	4.50		1.10		22.5	Sn		無		無	有	中	
	168	4350	99-10	第12面精査	MF		4.50		4.60	1.00		13.7	Sn		無		単	有	中	
123	168	4351	99-1	第16-15面間	板状石器		2.80	4.70		1.20		12.0	Sn		有	平坦	無	有	中	
	168	4352	99-10	第13-12面間	板状石器		3.00		3.70	0.80		5.9	Sn(ク)		無		無	有	中	
123	168	4353	99-10	S10238	板状石器	4.00		3.10		0.90		9.8	Sn		有	すじ	無	有	中	
123	168	4354	99-10	南壁アゼ	Fl	5.10		5.00		1.40		35.1	Sn		有	平坦・すじ	単	無	中	
123	168	4355	99-10	S10100	Fl	6.30		8.80		1.80		67.9	Sn		有	爪	自	無	中	
	168	4356	99-10	第13-12面間	Fl	6.20			5.20	1.60		43.2	Sn		有	すじ	単	有	中	
	169	4357	99-10	側溝	Fl		5.90		5.40		1.20	25.9	Sn		有	凹凸・爪	無	有	中	ローリング受ける。敲磨側縁痕有
	169	4358	99-10	S10401	Fl	1.70		2.60		0.40		0.7	Sn(ク)		無		無	無	中	調整剥片の可能性有
123	169	4359	99-10	S10220	Fl		2.10		2.20	0.50		1.1	Sn		有	凹凸	自	有	中	調整剥片の可能性有
123	169	4360	99-10	第13-12面間	Cr	6.70		3.20		1.60		23.1	Sn		無		無	有	中	
	169	4361	99-10	S10362	Cr	4.00		4.30		1.50		25.4	Sn		有	凹凸	無	無	中	
123	169	4362	99-10	S10100	Cr	9.50		5.40		2.00		85.4	Sn		有	すじ	無	無	中	二重風化有
123	169	4363	99-10	S10314	Cr	6.20		6.30		2.70		107.0	安山岩		有	凹凸	無	無	中	最終的に法Sc
124	170	4364	99-8	第14層以下	石庖丁	4.60		17.00		0.70		80.7	石英片岩					有	中	詳細時期特定不可能。弥生中期前半か
	170	4365	99-10	第11-10面間	石庖丁		2.10		2.30		0.40	1.9	Sn					有	中	
124	170	4366	99-10	S10100西部	石庖丁	5.70			10.50	1.00		81.5	緑泥片岩		有			有	中	

（第11つづき）

図版番号	掲載番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	最大長(cm)	折損長(cm)	最大幅(cm)	折損幅(cm)	最大厚(cm)	折損厚(cm)	重量(g)	石材	産地	自然	形状	打面	折損	時期	備考
	170	4367	99-10	第11・10間間	礫石		5.40		4.10		4.00	82.5	Sn		有			有	中	
	170	4368	99-10	S10624	礫石		5.90		6.70		4.60	180.5	閃緑岩		有			有	中	
125	171	4369	99-10	S10401	石錘	12.40		6.30		9.00		1320.0	閃緑岩		有			無	中	
124	171	4370	99-10	第11層	磨製	9.70		3.40		3.30		110.2	流紋岩		有			無	中	相方向の磨痕有、タールようなもの付着
125	172	4371	99-10	S10400(西壁)	礫石	8.40		7.20		6.20		860.0	閃緑岩		有			有	中	全面に磨痕有
124	172	4372	99-10	S10356	礫石		5.20		1.80		1.20	16.3	流紋岩		有		無	有	中	金属器用、石材不明
	172	4373	99-10	S10325(北半)	礫石		7.90		4.90	3.50		114.3	砂岩		有			有	中	
125	172	4374	99-10	S10401E	礫石		13.50		7.40	5.50		750.0	砂岩		有			有	中	端部に敲打痕有
124	173	4375	99-10	S10401E	礫石		14.30		10.10	5.10		940.0	砂岩						中	被熱
			99-10	S10303	Fl	2.40		4.40	1.30			14.3	Sn		有	凹凸	無	有	中	
			99-10	S10345	Ch		1.73		1.45	0.25		0.6	Sn						中	
			99-10	S10261	Fl		2.36		2.31	0.83		2.8	Sn						中	
			99-10	包含層	Ch	1.40		1.71		0.15		0.3	Sn				自		中	
			99-10	S10401	楔形石器	1.45		1.70		0.25		0.5	Sn						中	
			99-5	S992244	Ch	1.22		1.15		0.17		0.2	Sn						中	調整剥片？
			99-6	S981230	楔形石器		1.45		2.39	0.31		0.9	Sn	金山					中	

＊器種の記号は以下のとおりである。

RF:二次加工ある剥片　MF:微細剥離痕ある剥片　Fl:剥片　Ch:微細剥片　Cr:石核

＊石材　Sn:サヌカイト

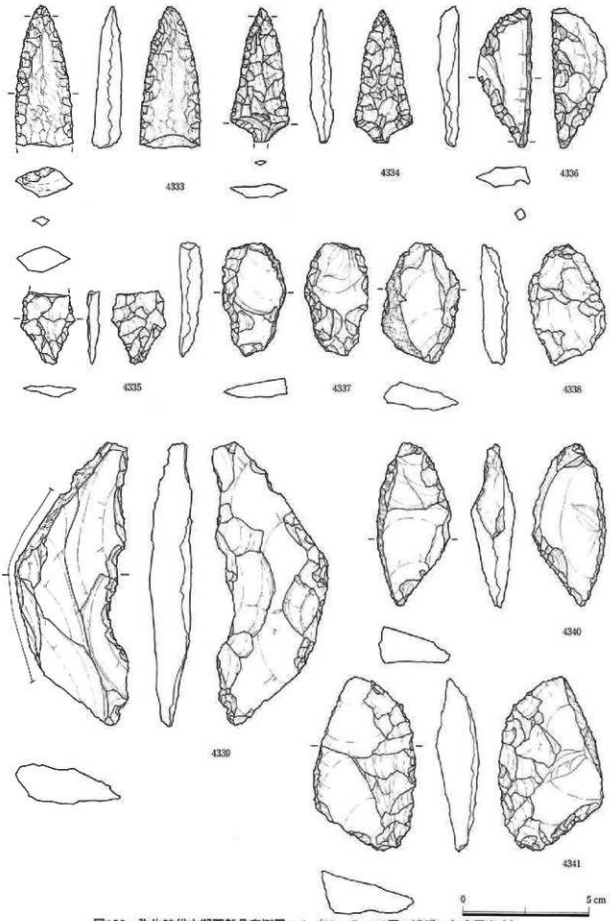


図166　弥生時代中期石製品実測図－1（99－7・10区：遺構・包含層出土）

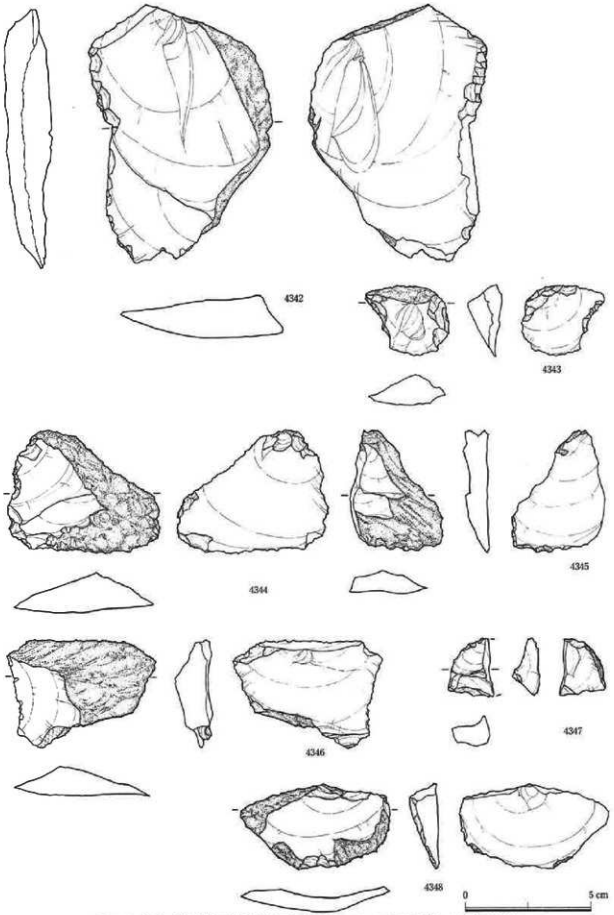


図167　弥生時代中期石製品実測図－２（99－１・10区：遺構・包含層出土）

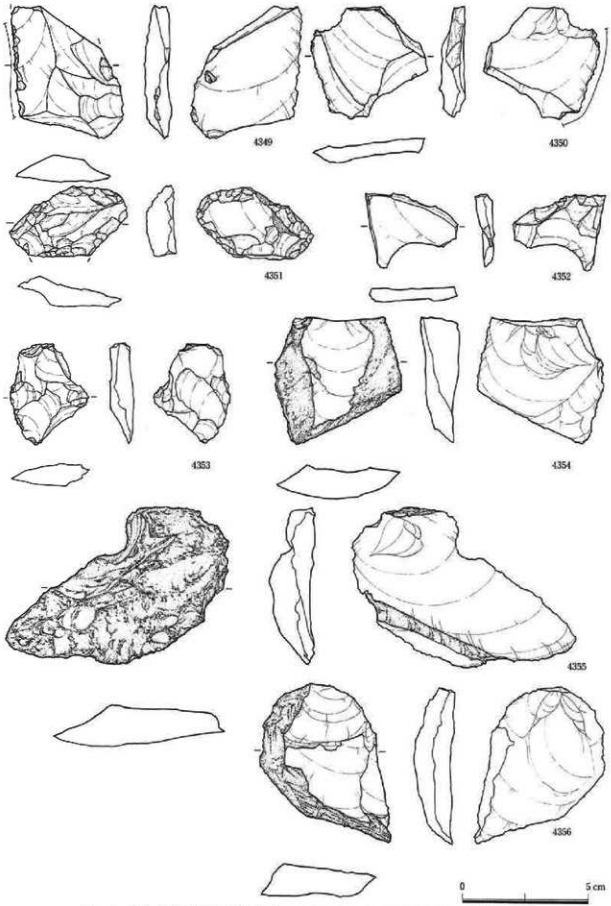


図168　弥生時代中期石製品実測図－３（99－１・９・10区：遺構・包含層出土）

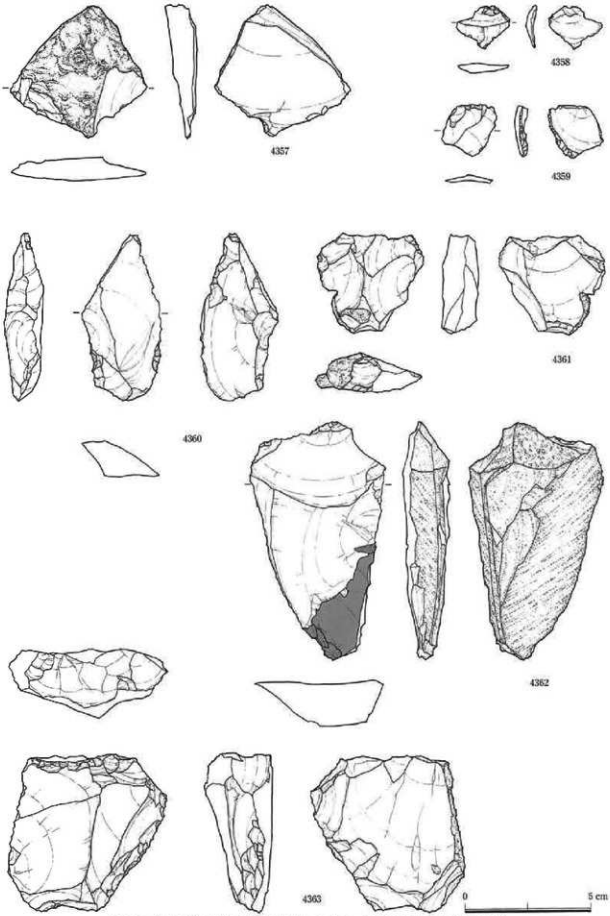


図169　弥生時代中期石製品実測図－４（99－10区：遺構・包含層出土）

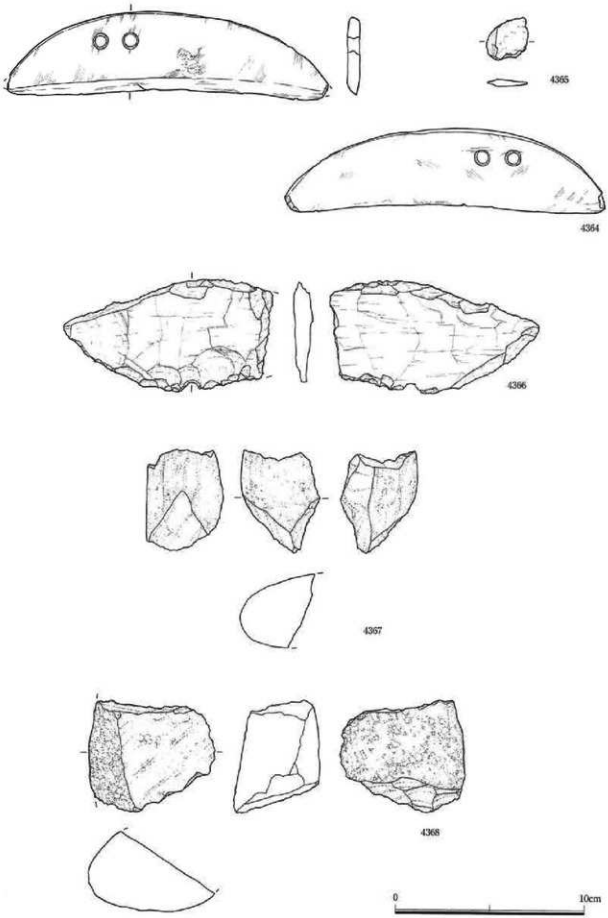


図170　弥生時代中期石製品実測図－5（99－8・10区：遺構・包含層出土）

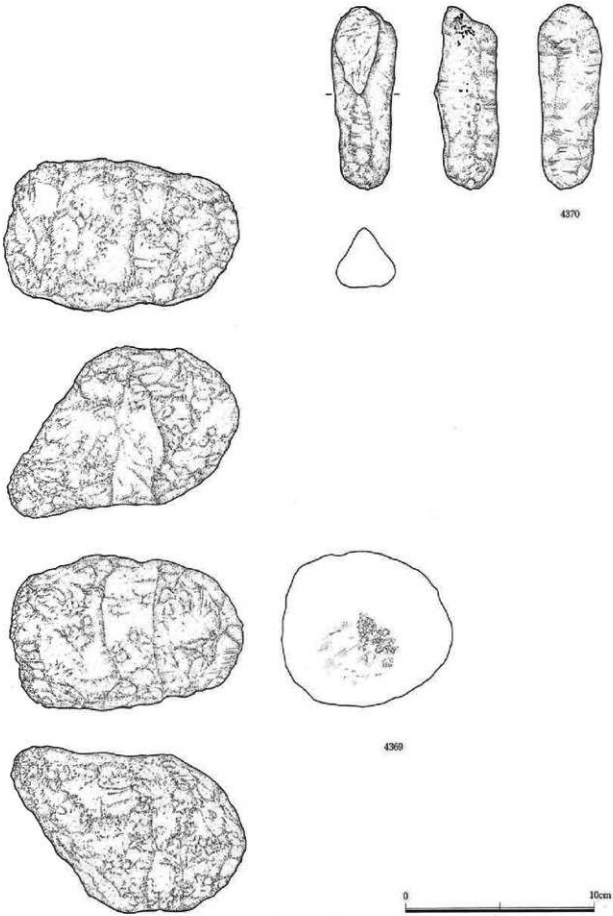


図171　弥生時代中期石製品実測図－６（99－10区：遺構・包含層出土）

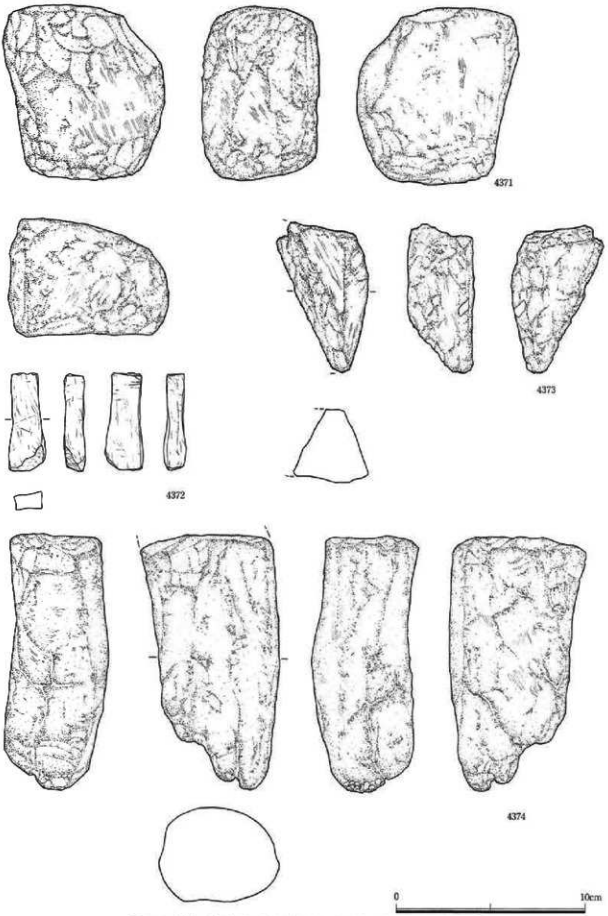


図172　弥生時代中期石製品実測図－７（99－10区：遺構出土）

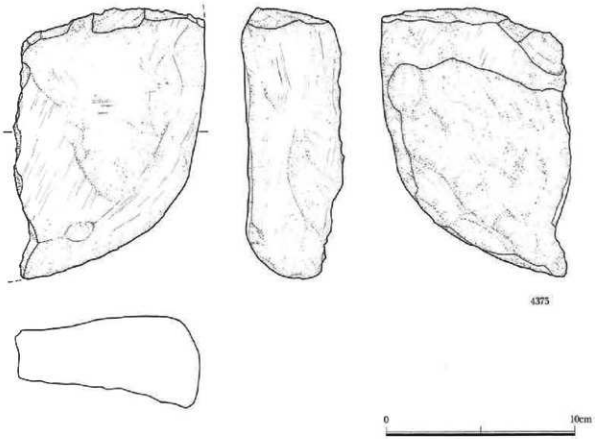


図173　弥生時代中期石製品実測図－8（99－5・6・10区：遺構出土）

作の痕跡がうかがえる。なお、砥石のなかには、砥面に残された擦痕などから金属器用かと考えられるもの（4372）も存在する。（手島・秋山）

第５節　弥生時代後期～庄内式期の様相

１．遺構面と遺構（図174～210、写真図版28～35）

（１）概要

当遺跡における弥生時代後期の遺構面（一部は庄内式期前後に属するものも含む、以下同じ）は、01－１区から99－10区の全範囲で確認することができた。

主要な遺構面の時期としては、大きく３時期に区分できる。

すなわち下層からみると、①弥生時代後期と中期を識別する鍵層である弥生時代後期前葉相当の黒色有機物層上面、②弥生時代後期前葉から後葉相当の植物遺体堆積層と堆積層の上面、③弥生時代後期末葉から庄内式期の洪水堆積層上面の３時期である（第５章第１節基本層序参照）。

普遍的に遺構が検出されるのが、①下層の黒色有機物層上面である。ただし、99－６区の第９面のように、③最上面で顕著な遺構・遺物の出土がみられるところもある。

弥生時代後期は、弥生時代中期までと地形の様相が一変する。

弥生時代中期より前までは調査域の中央部が最も低く、東西にいくに従いやや標高が上昇する傾向だった。ところが、弥生時代中期に方形周溝墓・周溝の造成など人為的な盛り土や掘削が行われたことを含め、地表面に高低差が生じた結果、高低差を埋めるかのように堆積が進み地表面が上昇して微高地を形成する。その結果、今まで中央より高かった東側の99－１区から01－３区にかけてが、逆転して低地部となる。今回の調査では当調査区域最東端の01－１区において水田畦畔等の遺構を確認することができ、調査区東側に生産域が広がることが明らかとなった。

弥生時代後期の土地利用状況を見ていくと、遺構のほとんどが99－５区から99－７区のこの微高地上に集中している（図174）。微高地はそのなかでも微少な高低差をもち、流路や溝などを形成する。その窪んだ部分から大量の土器や木製品、自然石などの遺物が出土するが、人為的な遺構は希少である。

そこで以下では、01－１区を生産域、99－５区から99－７区を微高地部、それ以外を低地部として記述することとする。

また、微高地部の中で調査区をまたがって検出した集石遺構については、それぞれの区でＳ05190、Ｓ061230などの遺構番号を発掘調査時に与えたが、本来は一連の遺構であるので全体として「集石遺構１」という名称で表現することとする。個々の区での詳細な、

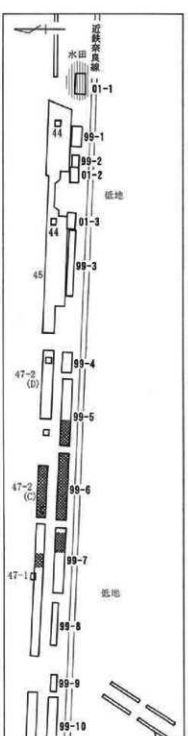


図174　弥生時代後期～庄内式期遺構面全体図

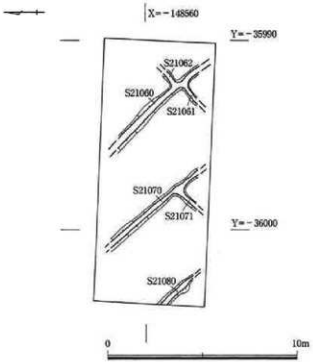


図175　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－1
（01－1区：第9面）

あるいは局所的な説明の際には、集石遺構1の後に（　）をつけて現地調査時の遺構番号を併記することとした。また、土器集積遺構に関しては、後掲の土器報告番号そのものを便宜的に用いて図中表記や記載をおこなっている部分もある。

（2）生産域

1）01－1区

本調査区では、計3面を検出した。

古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第9面以下を弥生時代後期相当と判断した。第10面は植物遺体堆積層上面、第11面は黒色シルト層上面で検出したが、ともに遺構は確認できなかった。

a．第9面

第8面ベース層である粗粒砂層を除去すると、調査区全域で灰色シルト層を検出した。検出レベルはT.P.0.5m前後で、調査区西側が低く、西端部分がやや極端な傾斜をもつ。

わずかに浸食作用を受けていたものの、砂層で覆われていたため遺存状態が良好な水田畦畔を検出することができた（図175）。

〔畦畔S21060・S21070・S21080〕　調査区全域で3条の幹線畦畔を検出した（図185）。それぞれ幅約50cm、検出面との比高差約5～10cmをはかり、北西－南東方向にのびる畦畔である。調査区の南側では、これらの幹線畦畔には、支線畦畔S21061・S21062・S21071が直交している。支線畦畔もそれぞれ幅約50cm、検出面との比高差は約5cmをはかる。

この幹線畦畔と支線畦畔で区画されて、少なくとも7枚の水田面が調査区内に存在する。水田一筆あたりの面積に関しては、本調査区でその全体を確認できるものはなかった。が、区画の長辺（南北辺）が10m前後と考えられ、短辺は4mなのでおおよそ40㎡の規模と推測される。また、わずかな調査面積からの想定となるが、遺構面の傾斜などから、これら水田は導水施設等を東側に設け、西へ向かって配水したものと考えられる。

当面より遺物は全く出土しなかった。本遺構面の帰属時期に関しては、上下層との対比などから、おおむね弥生時代後期後半から後期末の範疇に収まるものと考えられる。

また、本遺構面の水田に関してより慎重な判断をするため、水田面相当部分および水田畦畔部分で採取した土壌を用いたプラントオパール分析等を、今後予定されている隣接地の調査で実施すべきだろう。

（3）低地部

1）99－1区

本調査区では、計5面を検出した。

古墳時代前期相当積層以下で確認できる第10面以下を弥生時代後期相当と判断した。

なお、第11面は灰色粘土層上面、第12面は植物遺体を含む灰色粘土層上面、第13面はオリーブ灰色シ

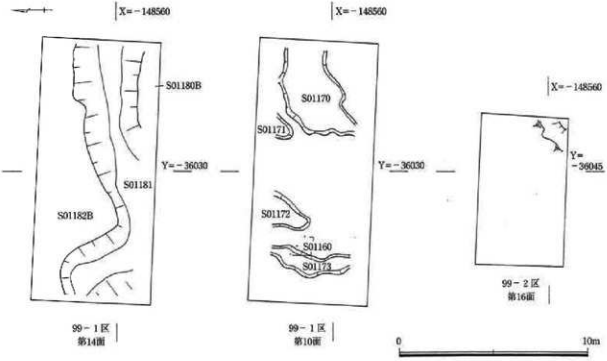


図176　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－2（99－1区：第14面、第10面、99－2区：第6面）

ルト層上面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第14面

第13面ベース層を除去すると、調査区全域で黒色シルト層を検出した。調査区南側には、下層に存在する弥生時代中期の周溝墓および周溝の可能性のある遺構を反映した高まりS01182Bや溝状の落ち込みS01180Bがみられるが、その他の顕著な遺構は確認できなかった（図176）。

b．第10面

古墳時代前期の粗粒砂層「自然流路1」を除去すると、シルト混じりの極細粒砂～細粒砂をベースとした面を検出した。浸食が著しく、一部は下層の黒色シルト層まで到達している部分を確認した。調査区全体が流路の底部で、かつ流心部分であったと考えられる（図176）。

〔杭列S01160〕　調査区西側で検出した。北西－南東方向に、ほぼ等間隔に3本の杭が並んでいた。本遺構面上ではこのほか浸食による落ち込み4箇所（S01170～S01173）を確認しているが、人為的な遺構はこの杭列のみである。東側に隣接する01－1区において、当該時期に相当すると考えられる水田畦畔を検出していることから、S01160は水田等の施設にともなう杭列とも考えられる。

2）99－2区

本調査区では、1面を検出した。

古墳時代前期相当層以下で確認できる第6面以下を弥生時代後期相当と判断した。遺構面は浸食が著しく、調査区南東部でのみ遺存していた。

a．第6面

古墳時代前期の自然流路1内堆積を除去すると、灰色シルト層をベースとした面を検出した（図176）。01－2区と同様、浸食が部分的に下層の黒色シルト層まで到達していたが、調査深度の関係上、調査区全体で面として検出することはできなかった。遺物は全く出土しなかった。

3）99－3区

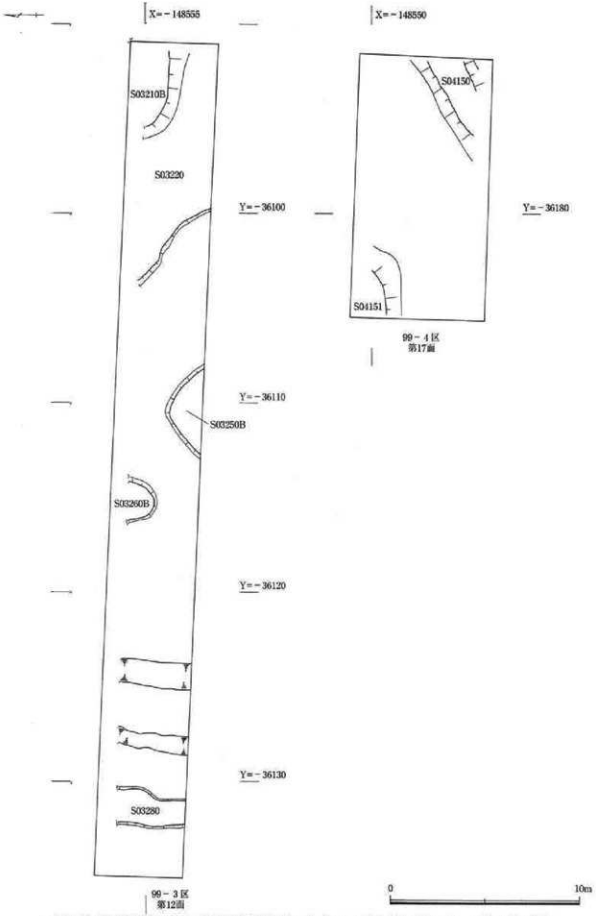


図177　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－3（99－3区：第12面、99－4区：第17面）

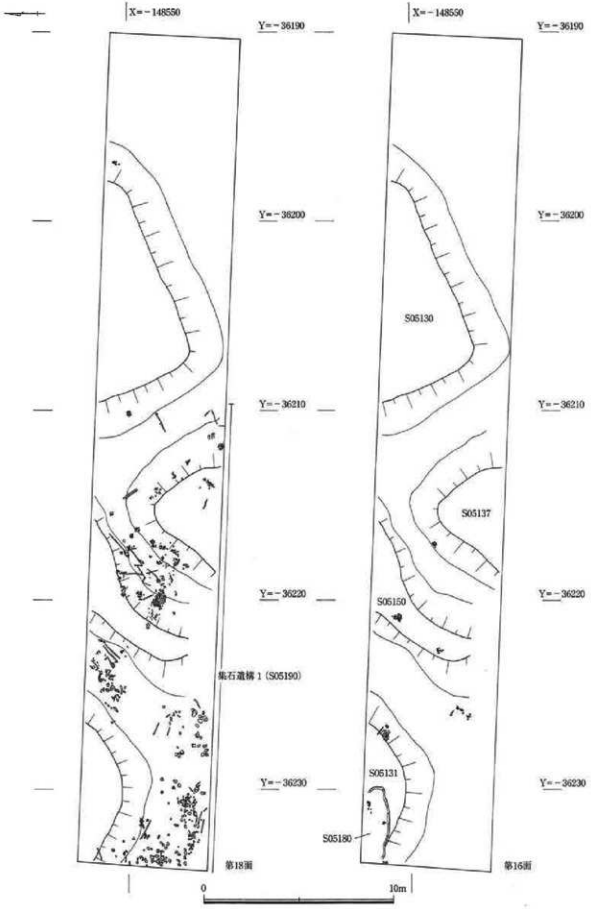
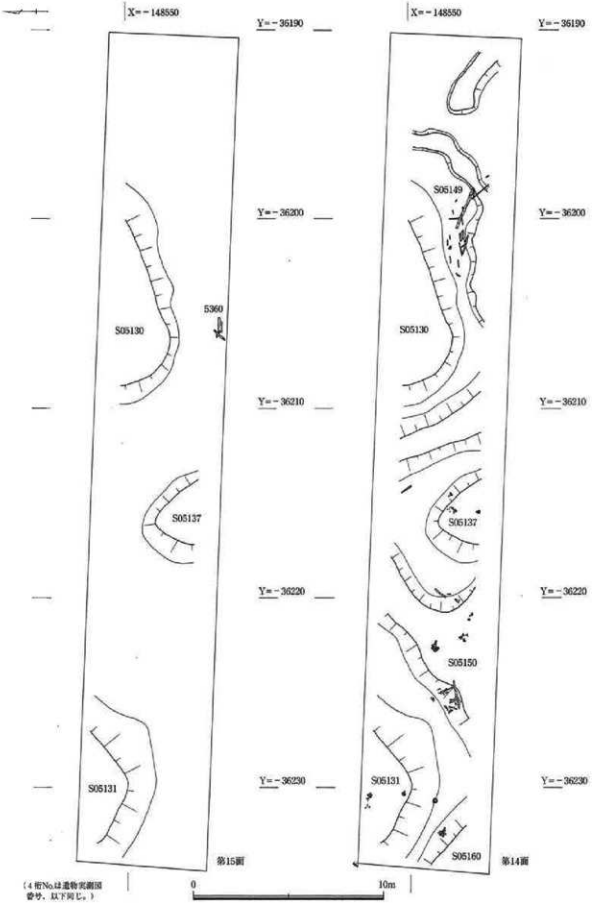


図178　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－4（99－5区：第18面、第16面）



（4桁No.は遺物実測図番号、以下同じ。）

図179　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－５（99－５区：第15面、第14面）

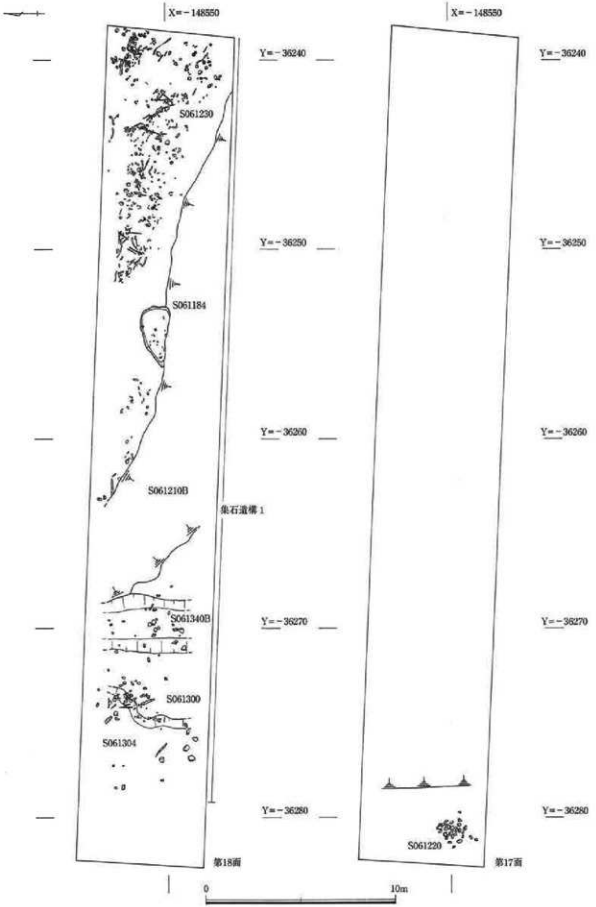


図180　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－6（99－6区：第18面、第17面）

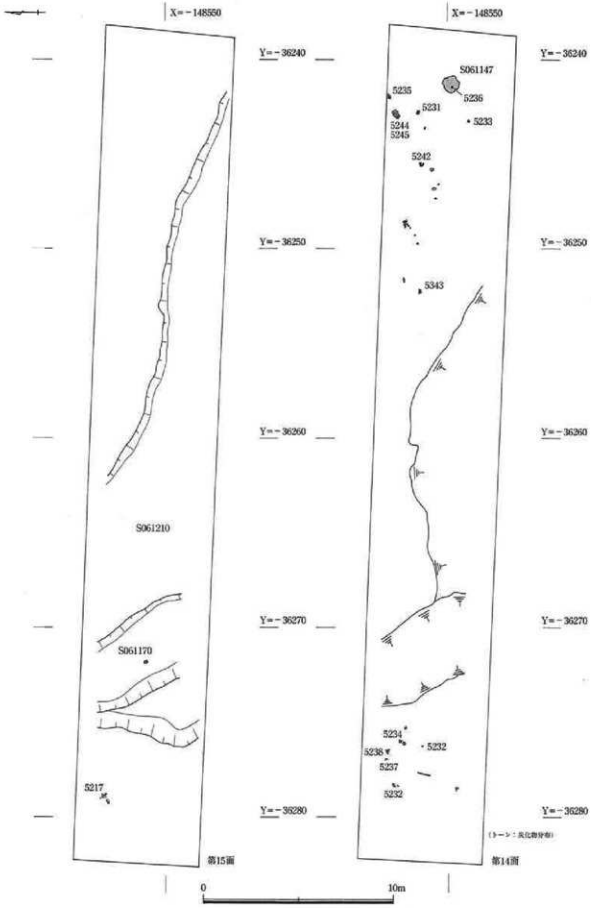


図181　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－７（99－６区：第15面、第14面）

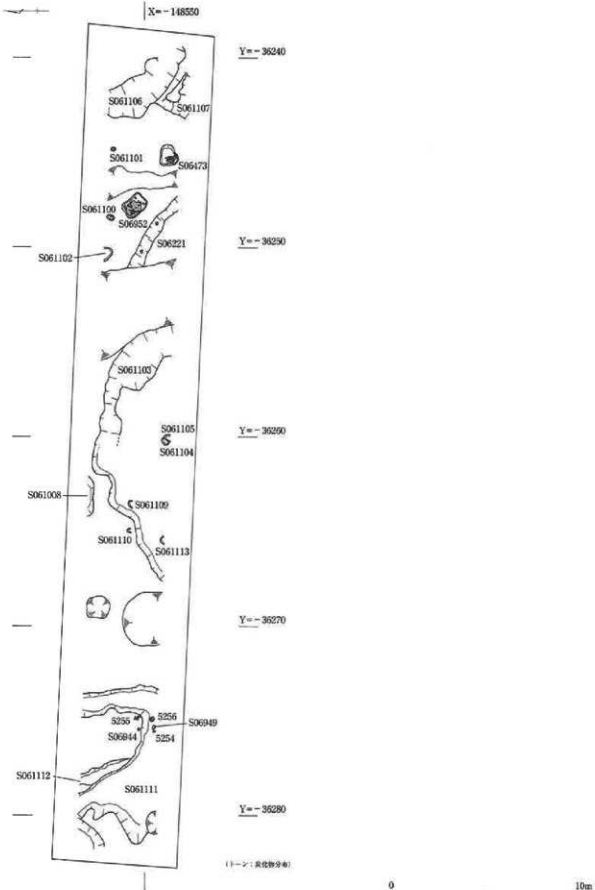


図182　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－8（99－6区：第9面）

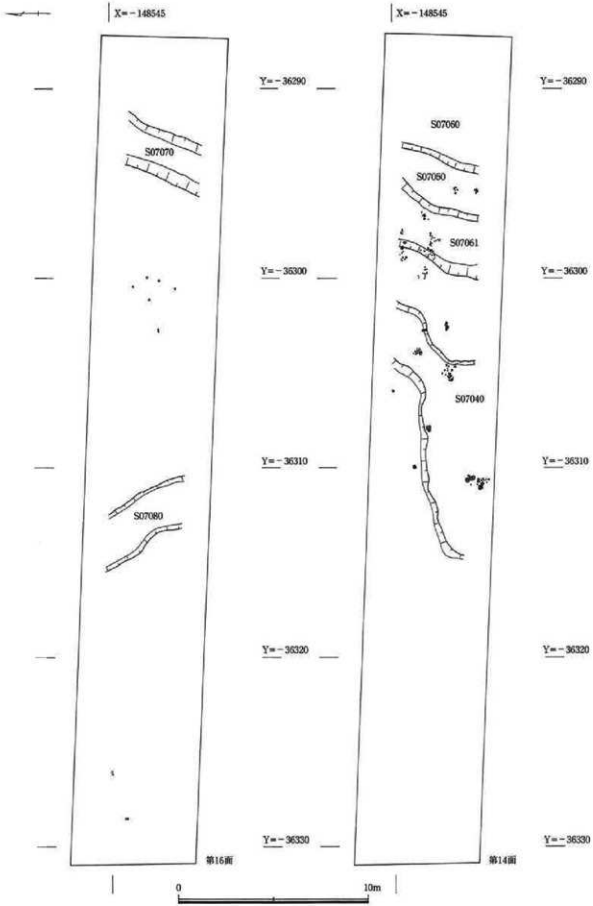


図183　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－９（99－７区：第16面、第14面）

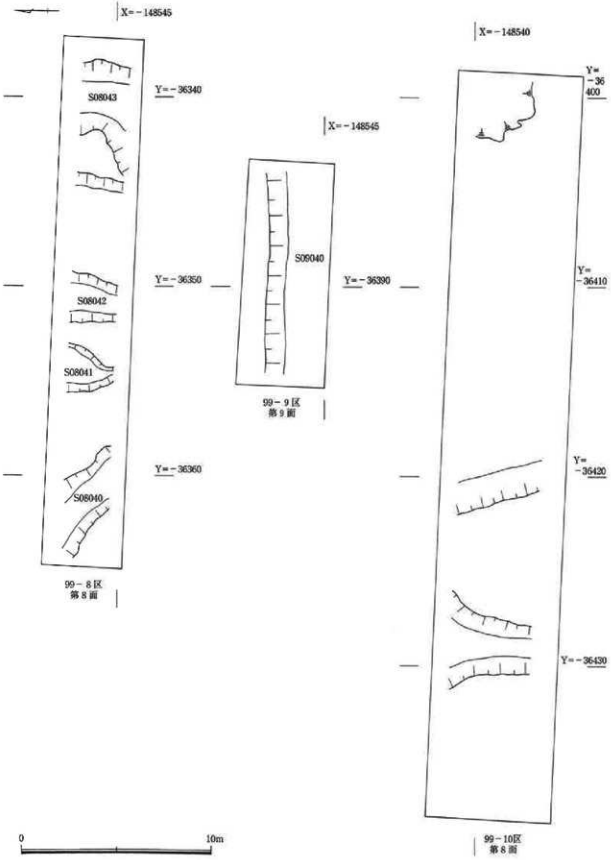


図184　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－10
（99－8区：第8面、99－9区：第9面、99－10区：第8面）

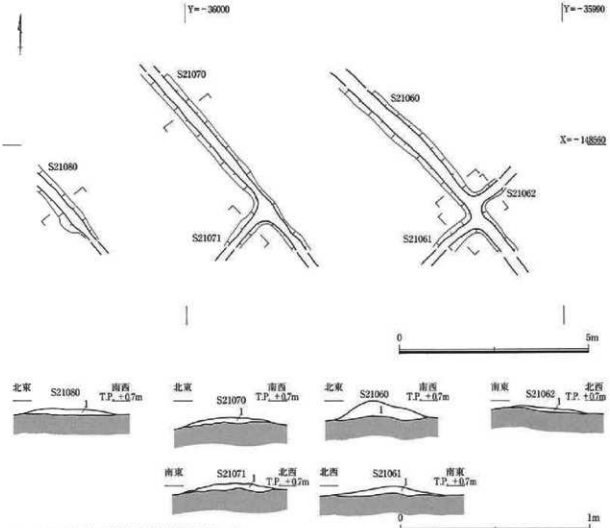


図185　01－1区第9面畦畔平面図・断面図

本調査区では、計5面を検出した。古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第8面以下を弥生時代後期相当と判断した。第12面は黒色シルト層上面、第9～11面は植物遺体堆積と灰色シルト層の互層の上面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第12面

黒色シルト層上面で検出した面である（図177）。本遺構面に関しても下部弥生時代中期の遺構（方形周溝墓・周溝）の凹凸を反映した高まりS03210B・S03250B・S03260Bなどがみられる。しかし、その他の人為的な遺構を確認することはできなかった。遺物は確認できなかった。

4）99－4区

本調査区では、計9面を検出した。古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第9面以下を弥生時代後期遺構面と判断した。

なお、第9面は植物遺体を含む暗オリーブ灰色シルト層上面、第10面は灰色シルト層上面、第11面は植物遺体を含む暗緑灰色シルト層上面、第12面は植物遺体堆積層上層上面、第13面は植物遺体堆積層中層上面、第14面は植物遺体堆積層下層上面、第15面は植物遺体堆積下層除去後の灰色シルト層上面、第16面は植物遺体を含む灰色シルト層上面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第17面　第16面ベース層となる植物遺体を含む灰色シルト層を除去すると、調査区全域で黒色シルト層を検出した。調査区北西部と南東部に弥生時代中期の自然地形を反映したわずかな高まりが見られるが、顕著な遺構は確認できなかった（図177）。遺物は出土しなかった。

5）99－8区

本調査区では、計4面を検出した。

古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第6面以下を弥生時代後期相当と判断した。

第8面は植物遺体堆積層上層上面、第9面は黒色シルト層除去後のオリーブ黒色シルト層上面で検出したが、それぞれ明確な遺構は確認できなかった。

a．第8面

第7面ベース層となる植物遺体を含む灰色シルト層を除去し、調査区全域で黒色シルト層を検出した。

調査区西側に下層に存在する弥生時代中期の遺構を反映した高まりと落ち込みS08040・S08041・S08042・S08043がみられるが、顕著な遺構は確認できなかった（図184）。

6）99－9区

本調査区では、計3面を検出した。

古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第7面以下を弥生時代後期遺構面と判断した。

なお、第7面は植物遺体堆積層上層上面、第8面は植物遺体堆積層下層上面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第9面

第8面ベース層となる植物遺体堆積層下層および灰色シルト層を除去すると、調査区全域で黒色シルト層を検出した。検出平均レベルはT.P.－0.9mである。調査区北側には下層に存在する弥生時代中期の遺構を反映した高まり、調査区南側には落ち込みS09040がみられるが、顕著な遺構は確認できなかった（図184）。遺物は出土しなかった。

7）99－10区

本調査区では、計4面を検出した。

なお、古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第5面以下を弥生時代後期相当と判断した。

第5面は暗緑灰色極細砂層上面、第6面は植物遺体堆積層上面、第7面は植物遺体堆積層除去後の灰色シルト層上面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第8面

第7面ベース層となる灰色シルト層を除去すると、調査区全域で黒色シルト層を検出した。調査区中央部から西側にかけて下層の微高地を反映した南北を主軸とする高まりが展開しているが、顕著な遺構は確認できなかった（図184）。遺物は土器片転用円盤や木製品が若干出土している。

（4）微高地部

1）99－5区

本調査区では、計12面を検出した。

なお、古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第7面以下を弥生時代後期相当と判断した。

第7面は暗緑灰色シルト層上面、第8面は緑灰色粗砂層上面、第9面は黄灰色シルト層上面、第10面は植物遺体堆積層上層上面、第11面は植物遺体堆積層上層除去後の灰色シルト層上面、第12面は植物遺体をやや含む灰色シルト層上面、第13面は植物遺体堆積層中層上面、第17面は植物遺体堆積層下層除去

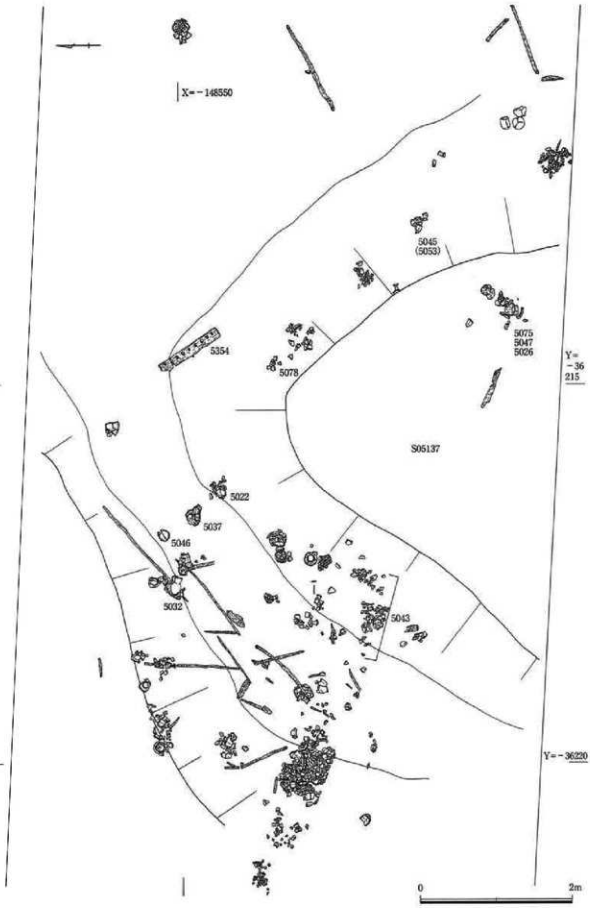


図186　99－5区第18面土器群平面図

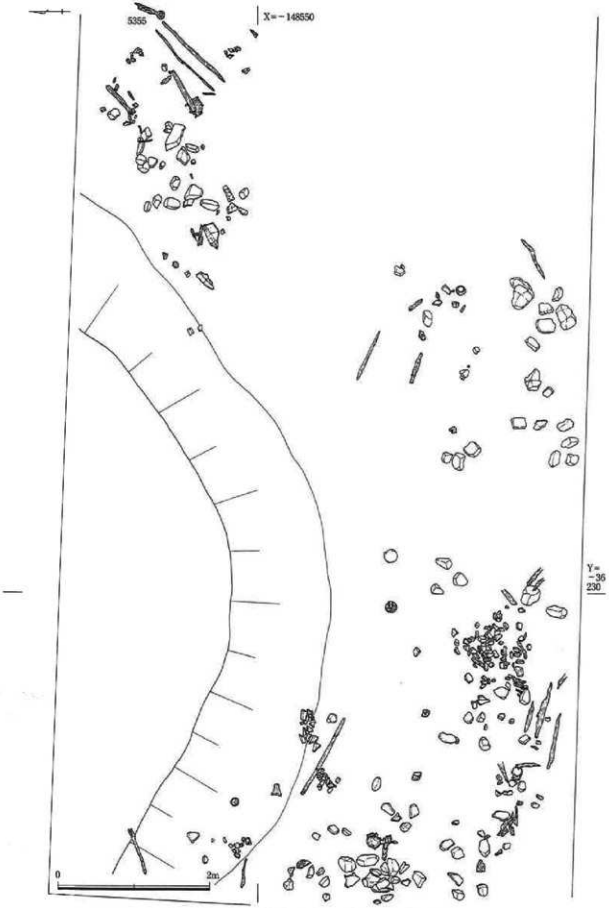


図187　99－5区第18面集石遺構1（S05190）平面図

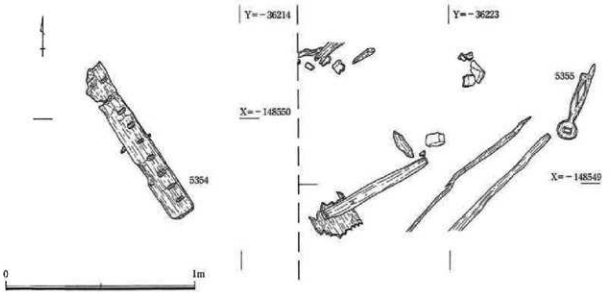


図188　99－5区第18面木製品5354・5355出土状況図

後のオリーブ灰色シルト層上面でそれぞれ検出したが、遺構は確認できなかった。

a．第18面

第17面ベース層となる灰色シルト層を除去すると、調査区東側から中央部の範囲で黒色シルト層上面の第18面を検出した。一方、西側では黒色シルト層を浸食するように粗粒砂層が堆積していた。その粗粒砂層を除去すると一部で黒色シルト層と下層の弥生時代中期相当の第19面ベース層を確認できた。検出レベルはT.P.－0.4～－1.6mで、下部に存在する方形周溝墓の凹凸を反映した地形が広がっていた。

調査区中央部では、やや西寄り部分の主に方形周構墓の周溝内堆積層上面で多数の土器集積を、調査区西側でも周溝内の堆積層上面で集石遺構を確認した（図178）。

〔土器集積（5022・5032・5037・5043・5046ほか）〕　それぞれ調査区中央から西側で検出した（図186）。

土器は一部高まりS05137上やその傾斜面に転落するように出土しているが、ほとんどが周溝埋没途中の落ち込み部分から、ほぼ原位置を保った状態で出土した。土器は弥生後期前半相当の壺、甕、鉢、高杯で、バラエティに富む。いずれの土器もほぼ完形に復原可能である。特に西側の土器集積（S05178）では、壺、甕、鉢、高杯がまとまって出土している。

〔集石遺構1（S05190）〕　調査区西半で検出した（図187）。

若干隔たりがあるが99－6区東側部分で検出した集石遺構S061230と連続する一つの遺構である。弥生時代中期の方形周溝墓埋没途中に溝状に落ち込んだ部分、あるいは低地部分に堆積する黒色シルト層を浸食するように粗粒砂層が流れ込んでいる。その埋土中に拳大から人頭大程度の石、自然木および木製品、土器を大量に含んで調査区西側一帯に広がっていた。これらを総称として「集石遺構1」と呼称する。

集石遺構1は落ち込み内の埋土を観察する限りでは洪水堆積と認められ、石の出土位置もランダムで配石等の人為的行為は認められない。しかし、洪水によってこのような大きさの石が長距離流入してくることはあり得ず、ごく近接地から運ばれてきたと考えられる。また、出土遺物には杭列等に利用されたと考えられる木製品が含まれており、これら石も本来は護岸施設等の配石に利用されていた可能性も考えられる。石材の種類や産地については近畿大学の冨田先生に同定いただき、石材種については砂

岩・チャート・花崗岩などに大別でき、大阪府泉南地域や紀ノ川流域から運ばれた可能性が高いと指摘いただいた（第8章第5節参照）。

遺物は弥生時代後期前半相当の土器が出土しており、完形まで復原可能なものも多数含まれており、図示掲載しただけでも50点以上にのぼる。また、杭やその他の木製品等が多数出土している。特殊で、用途不明の木製品2点の出土状況を記しておく。

（5354）は調査区中央部、方形周溝墓埋没途中の溝状落ち込み部分で出土した（図188）。土器集積遺構と一連の遺物と考えられる。端部を加工した長方形の板材である。片側の端部を欠いており全形は不明であるが、遺存部分で幅10cm強、長さ90cmをはかる。横木等を差し込むことが可能であるが貫通しない窪みが10ヶ所設けられている。樹種はケヤキである。

（5355）はS05190の東側で出土した（図188）。近隣には杭状の木製品や自然木も多く出土した。ほぼ完存と考えられ、その形状は先端部が円形で、柄あるいは杖状の部分がのび、端部がとがる。先端部の円形部分には方形の穿孔が、柄の部分に菱形の穿孔がなされている。用途等は特定できない。樹種はヤマグワである。

b．第16面

第15面ベース層となる、植物遺体堆積層下層を除去すると、調査区全域で灰色シルト層上面を遺構面とする第16面を検出した。

検出レベルはT.P.－0.9mで、下部に存在する方形周溝墓の凹凸を反映した地形となっており、特に、墳丘上部に関しては、第18面の時期から堆積が進んでおらず、第18面と第16面の遺構をほぼ同一面上で検出することとなった。

本来であれば第18面と第16面の出土遺物は、わずかながら時期差が存在し、区別可能である。しかし、マウンド上部の出土遺物に関しては、発掘時にその判断ができなかったこともあり、第16面時に第18面の出土遺物を先行して検出している場合、あるいはその逆の場合もあり、本来の帰属面で検出できず混同して検出・とりあげを行っている場合がある。よって、後掲の出土遺物に関しては、本報告において時期差および帰属時期等を考慮して掲載している箇所もある。

遺構はこれら高まり部分に集中しており、調査区中央から西側で土器集積などを確認した。

〔土器集積（5131・5146・5147・5149）〕　それぞれ調査区中央から西側で検出した（図189）。

土器は一部傾斜面に転落するように出土しているが、そのほとんどが高まりS05131・S05150上にほぼ原位置を保った状態で出土している点で、第18面検出の土器集積とは異なる。この土器集積は、埋土や検出面がシルト層であり、土器が置かれた後に植物遺体が堆積していることなどから、水位上昇による堆積が落ち着いた直後に水際の高まり部分に土器を置いた可能性が高い。土器はほぼ完形に復原可能な弥生後期前半相当の壺、甕、鉢、高杯が出土している。

〔土坑S05180〕　調査区西側、周溝墓S05240墳丘部の高まり上面S05131で検出した（図190）。

調査区外に広がるためその規模および全形はうかがえないが、形状は隅丸長方形状で現存部分で東西1.9m、南北約0.7m、深さ5cmをはかる。掘方は浅く、埋土中に多量の炭化物が含まれており、火を使用した痕跡として認められるが、土坑底面などに被熱を受けた面などは認められなかった。遺物は破片であるが弥生土器が出土している。

c．第15面

第14面ベース層となる洪水堆積層の粗粒砂層を除去すると、調査区全域で灰色シルト層を検出した

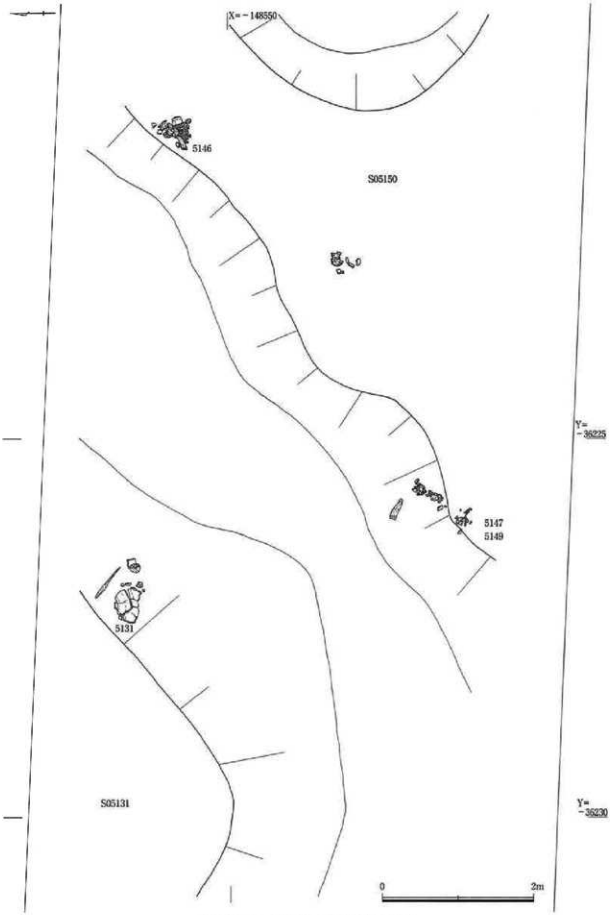


図189　99－5区第16面土器群平面図

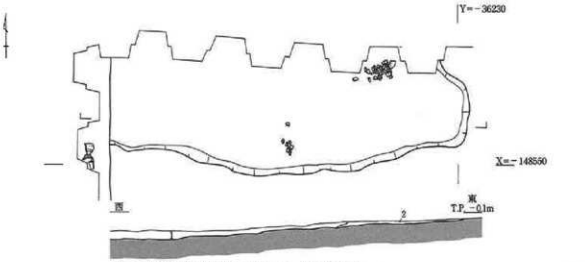


図190　99－5区第16面土坑S05180平面図・断面図

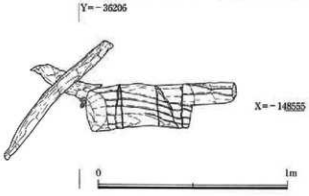


図191　99－5区第15面梯子（5360）出土状況図

（図179）。下部に存在する方形周溝墓の凹凸を反映した地形となっていた。遺構は確認できなかったが、第15・14面間の粗粒砂層下部で木製品が出土している。

〔梯子（5360）〕　調査区中央部の、方形周溝墓S05200埋没途中の高まり南側で出土した（図191）。一部を欠損する。大きさは幅82cm、長さ23cmで、現存で2段の足かけを確認できる。樹種はヒサカキである。

d．第14面

第13面ベース層となる植物遺体堆積層中層を除去すると、調査区全体で粗粒砂層を主体とした面を検出した（図179）。

検出レベルはT.P.－0.3mで、下層にある方形周溝墓の周溝の埋没が一気に進み、極端な凹凸はみられなくなる。調査区中央から西側の方形周溝墓の起伏を反映した高まり部分では、植物遺体堆積下層とベース層が接しているため識別が困難となっている。遺構はこれら高まり部分にのみ存在し、土器集積などの遺構が確認できた。

〔土器集積（5128・5133・5134・5137～5144）〕　調査区中央部から西側、高まりS05137・S05150、および周溝埋没後の高まりS05160上で検出した（図192・193）。本面検出の土器集積もそのほとんどが高まり上でほぼ原位置を保った状態で出土しており、第16面検出のものと類似した出土状況である。

これらも、土器が置かれた後に植物遺体が堆積していることなどから、洪水堆積が落ち着いた直後に、水際の高まり部分に土器を置いた可能性が高い。土器はほぼ完形に復原可能な弥生後期中葉前後の壺、甕、鉢、高杯が杭状の木製品などと共に出土している。

調査区東側の高まりS05130の南側傾斜部分で木製品も出土している（図194）。

木製品（S05149）はほぼ完形と思われる大型材で、片側に凹状の抉りをもつ。表面は丁寧に加工がなされている。本来は大型構築物の部材に相当するものと考えられるが、用途等は特定できない。

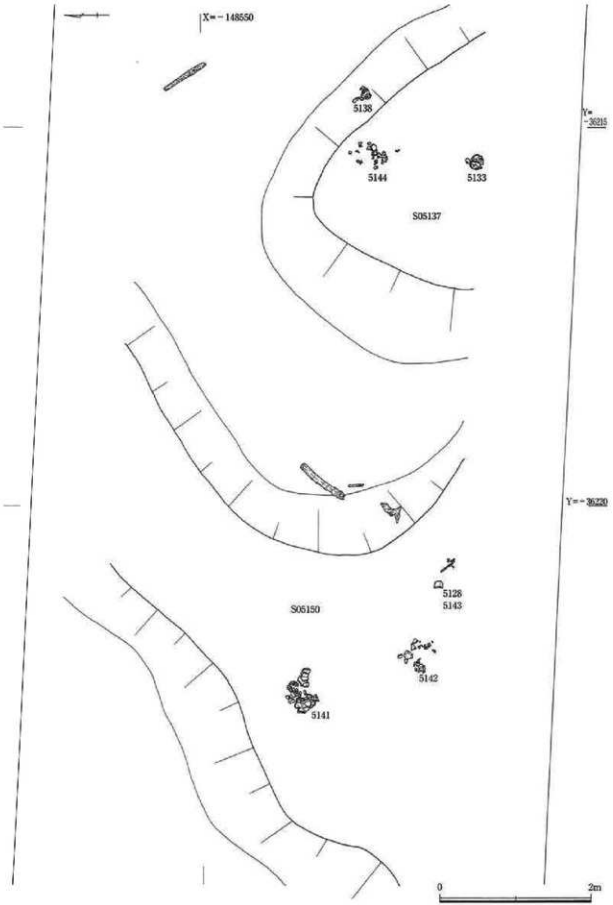


図192　99－5区第14面土器群平面図－1

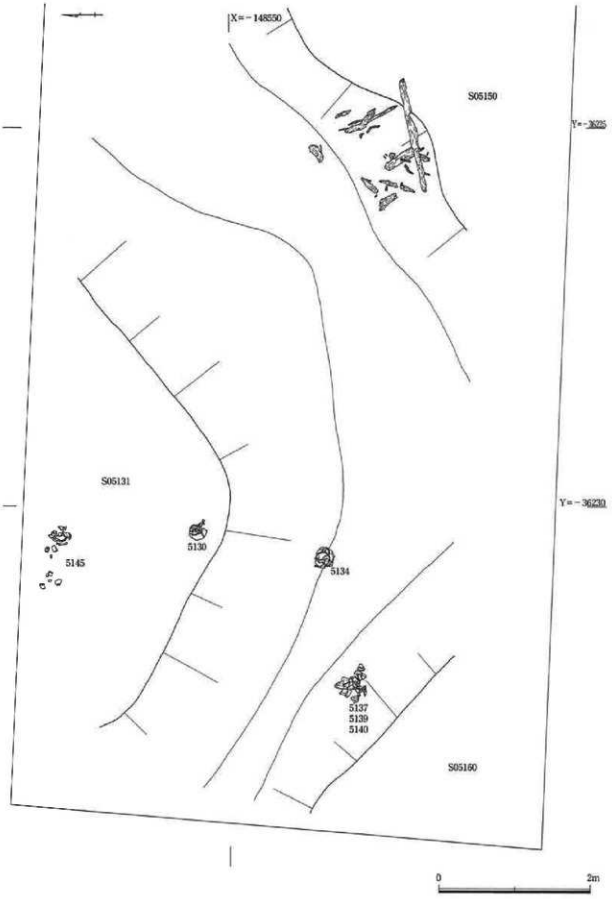


図193　99－5区第14面土器群平面図－2

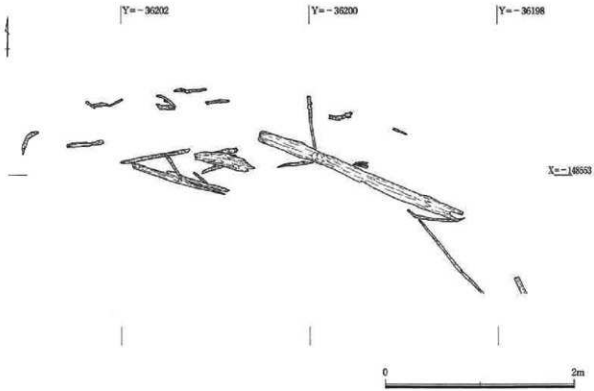


図194　99－5区第14面木製品S05149出土状況図

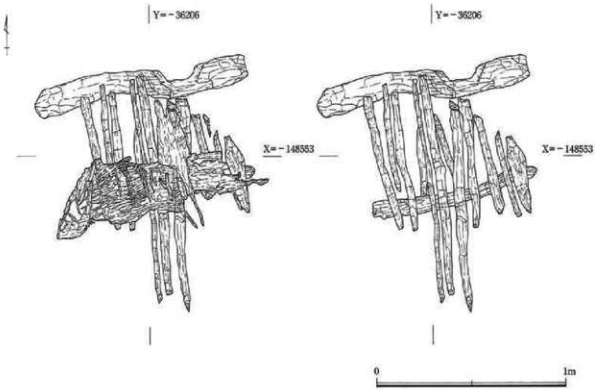


図195　99－5区第10・9面間木製品S051200出土状況図

図196　99－6区第18面集石出土状況図－1

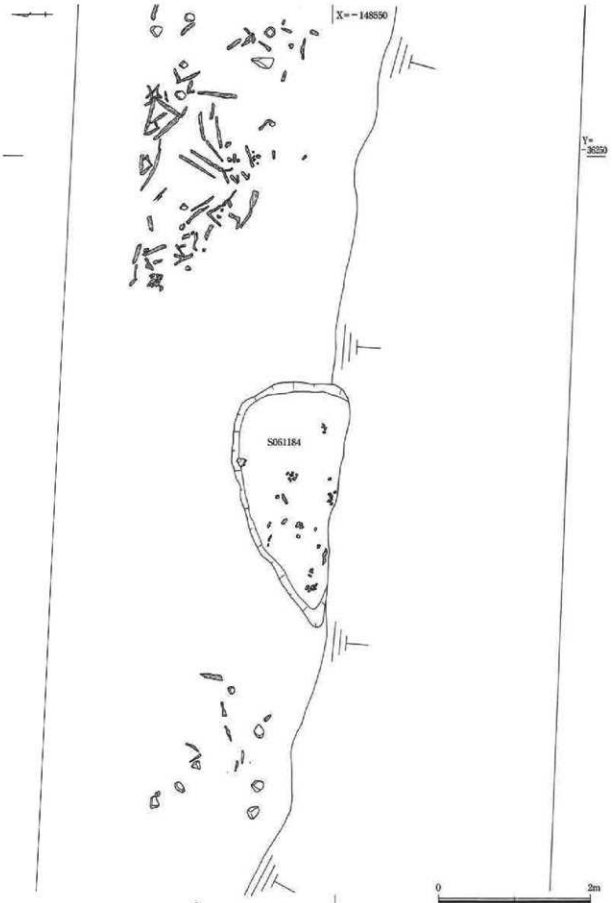


図197　99－6区第18面集石出土状況図－2

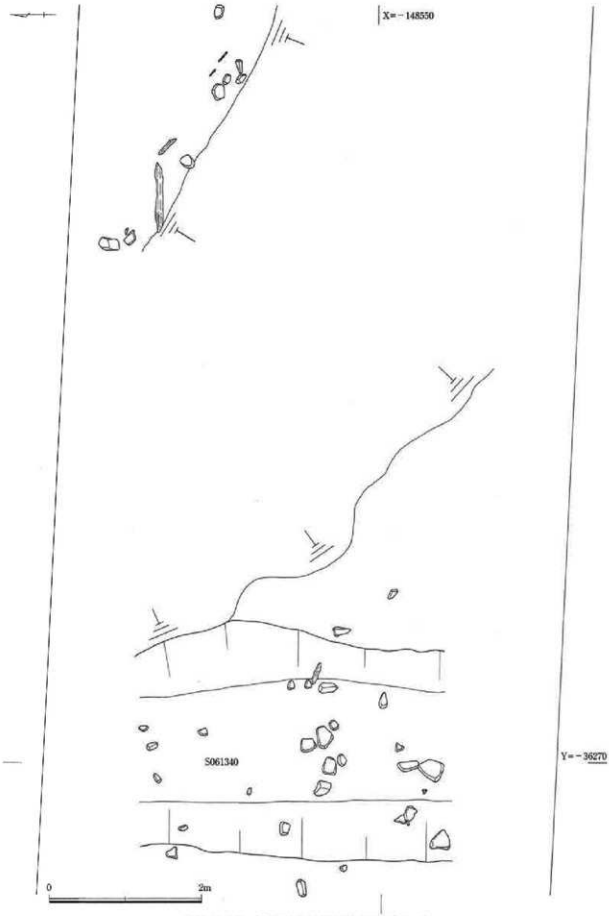


図198　99－6区第18面集石出土状況図－3

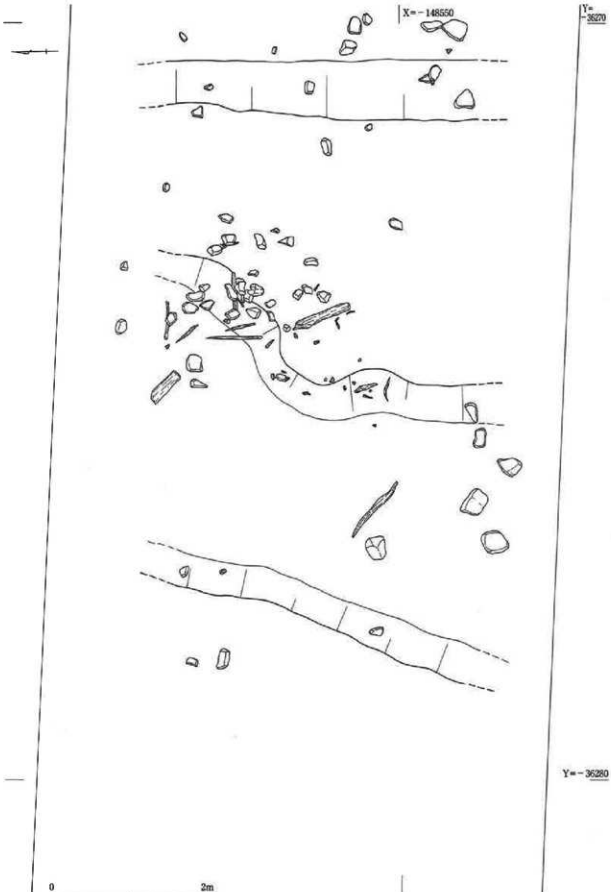
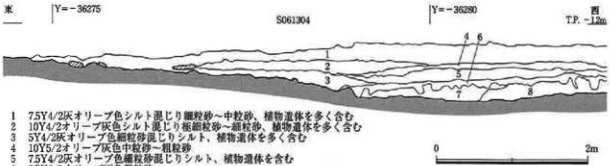


図199　99－6区第18面集石出土状況図－4



1　7.5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり細粒砂～中粒砂、植物遺体を多く含む
2　10Y4/2オリーブ灰色シルト混じり板細粒砂～細粒砂、植物遺体を多く含む
3　5Y4/2灰オリーブ色細粒砂混じりシルト、植物遺体を多く含む
4　10Y5/2オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂
5　7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂混じりシルト、植物遺体を含む
6　5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂
7　2.5Y4/1黄灰色粗粒砂混じりシルト
8　5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂

図200　99－6区第18面S061304断面図

e．その他

第10・9面間の粗粒砂層中より木製品S051200が出土した（図195）。第10・9面間は庄内式期に相当すると考えられる。

木製品は用途不明品で、端部を加工したやや太めの横木を2本に、細い縦木を直行方向に組み合わせており、さらにその上部には網代状の木質が残っていた。網代状の部位は遺存状態が悪く脆弱で、取り上げ時に破損している。本来は大型構造物の一部と考えられるが、残存部位およびその全形、用途等は特定できない。大きさは横木方向で約1.1m、縦木方向で最長約1.2m、網代相当部分は幅0.3m、長さ約1m遺存していた。横木と縦木のいくつかを実測した（図244－5367～5369）。樹種はキハダ、サカキなどである。

上記のうち、第16面から第14面の時期に関しては第18面より若干新しい弥生時代後期中葉から後葉の遺構面と言える。

2）99－6区

本調査区では、計10面を検出した。

古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第9面以下を弥生時代後期相当と判断した。

なお、第10面は洪水堆積層除去後の植物遺体堆積上層上面、第11面は灰色シルト層上面、第12面は植物遺体堆積中層除去後の灰色シルト層上面、第15面は植物遺体堆積下層除去後の灰色シルト層上面、第16面は洪水堆積層除去後の面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第18面

第17面ベース層となる粗粒砂層を除去すると、調査区中央部から西側の一部の範囲で黒色シルト層を検出した。

調査区東側および西端部では黒色シルト層を浸食するように粗粒砂層が堆積している。この砂層を除去すると、下層の弥生時代中期相当の第19面のベースとなる土壌化層を確認できた。検出レベルはT.P.－1.4mをはかる。遺構は広範囲に広がっており、調査区東側で集石遺構を、調査区西側で落ち込みを確認した（図180）。

〔集石遺構1（S061230）〕　調査区東側から中央にかけて検出した。

99－5区西端部で検出した集石遺構1（S05190）から連続する遺構である。弥生時代後期の鍵層となる黒色シルト層を浸食するように粗粒砂層が流れ込んでおり、その埋土中に拳大から人頭大程度の石、自然木および木製品、土器を大量に含んでいた（図196～199）。石の出土位置はランダムで人為的な配石等は認められない。これらの石に関しては99－5区、99－6区両区の総量でコンテナ約100箱分出土して

おり、そのすべてについて石材同定を行なった（第8章第5節参照）。

本調査区では、これら集石が上層流路（S061200）の浸食部分を除く広範囲に広がっており、また、隣接する東大阪市教育委員会47－2次調査C地区においても、調査区中央部の低地部分に大量の自然石、自然木、木製品等が出土しており、これが集石遺構1に連続する遺構であるのは明らかである。上記の出土遺物は洪水等で近接地から流入した可能性が高い。しかも、杭列等に利用されたと考えられる木製品が含まれており、これら石も本来は護岸施設等の配石に利用されていた可能性が考えられる。

遺物は弥生時代後期前半相当の土器が出土しており、完形まで復原可能なものが多数含まれていた。また、杭状の木製品、あるいは用途不明品が出土している。

〔溝S061340B〕　調査区西側で検出した（図180）。

溝S061340は弥生時代中期の溝だが、溝S061340Bとした埋没最終段階の黒色シルト層上面に、溝状窪みに落ち込む状況で石が出土しており、集石遺構1とは別の集石がみられる。集石遺構1と比較するとその密度はやや低く、人為的な配石等は認められなかった。遺物は弥生時代後期前半の土器、木製品が出土している。

〔落ち込みS061304〕　調査区西端部で検出した北東－南西方向の溝状の落込である（図180）。

調査区西端に向かって傾斜しており、その西肩に相当する立ち上がりは、隣接する99－7区では検出できなかった。幅4～7m、深さ0.8mをはかる（図200）。埋土は粗粒砂層が大半を占め、この埋土を除去すると、傾斜部分に石、木製品あるいは土器が集中して確認できた。東側の集石遺構と同様、出土位置等はランダムで、人為的な配石等は認められなかった。

遺物は弥生時代後期前半の土器、木製品が出土しており、讃岐産、記号文をもつ土器も含まれる。

b．第17面

第16面ベース層となる粗粒砂層を除去すると、調査区西端部でのみシルト混じりの細砂層を検出した。調査区東側から西側にかけて流路が存在し、弥生時代中期および後期遺構面を浸食しており、遺構面の残りは悪い。遺構は調査区西端部でのみ集石遺構を確認した。

〔集石遺構S061220〕　調査区西端部で検出した（図180）。

本遺構は下層の第18面落ち込みS061304が埋没した場所に形成される。第18面時の集石遺構とは層位的にも区別できる。拳大から子供の頭大程度の石が35個集中して出土しており、集石と言うより配石と呼んだ方がよいかもしれない。出土状況も下層の集石遺構とは異なり、1.5mから2mの範囲内に大形の石を数個、列をなすように地表面に立て、その上に2、3段石をのせ、隙間には小さな石を挟んで構築する（図201）。石材も9割が花崗岩類を選択されており、人為的な配石遺構であることは紛れもない。これらの集石以外には、弥生土器が若干出土したにすぎない。

c．第15面

第14面ベース層となる層を除去すると、調査区東側および西側で堆積層上面に相当する灰色シルト層を検出した。遺構は希薄で、下層流路の堆積が落ち着いた後の西側では、わずかながら地形の凹凸が認められ、流路や土器集積等が確認できた（図181）。

〔流路S061210〕　調査区の約2/3を占める流路である。主軸を北西－南東とする。壺、甕、高杯などが出土する。

〔流路S061170〕　調査区西側で、流路S061210に重複したあり方で検出した。主軸を北西－南東とする。幅約4mをはかる流路で、その底部付近で弥生時代後期前半の甕や壺、鉢などが出土する。

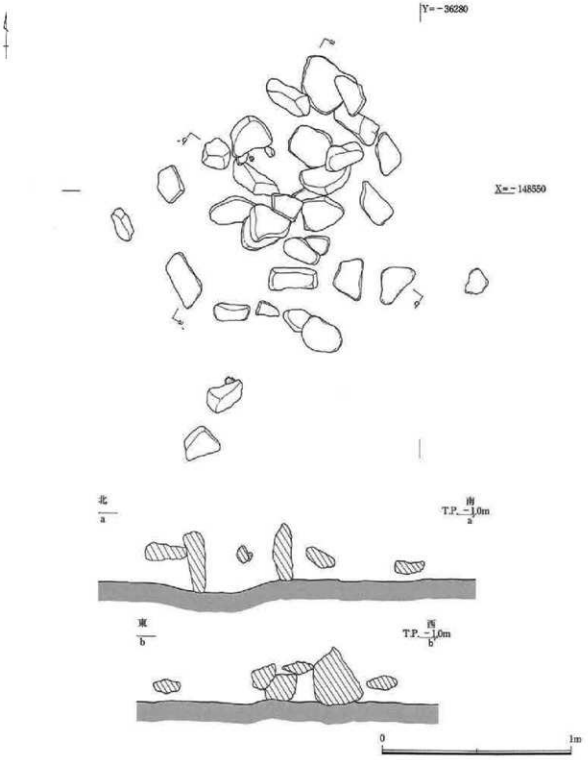


図201　99－6区第17面集石遺構S061220出土状況図

〔土器集積（5217）〕　調査区西端で土器片がかたまって出土した。遺物は弥生時代後期前半の体部下半に焼成後穿孔をもつ壺である。

d．第14面

第13面ベース層となる植物遺体堆積中層を除去すると、調査区中央部は上層の流路により浸食を受けているが、それ以外で灰色シルトをベースとした遺構面を検出した。遺構はやや希薄で、調査区東側および西側で土器集積を確認した（図181）。

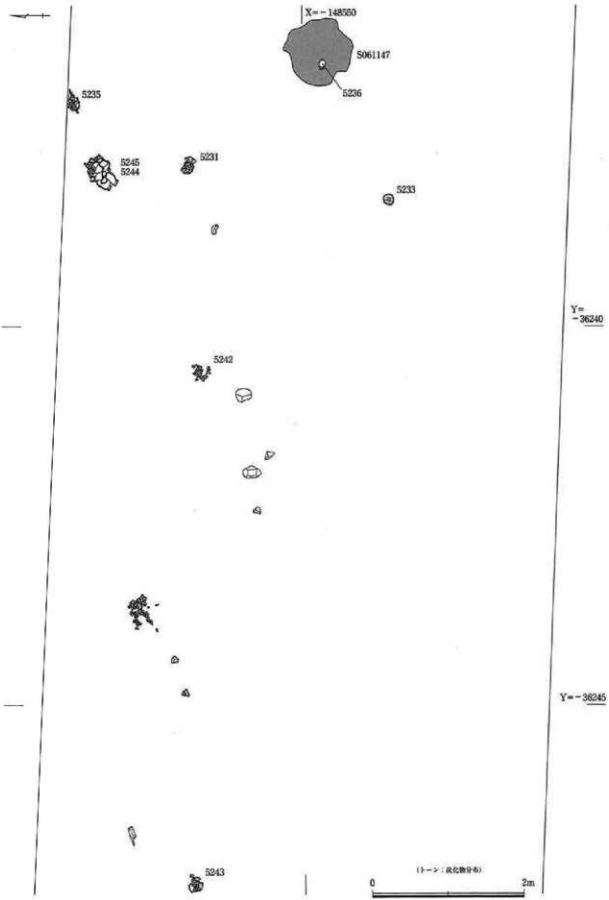


図202　99－6区第14面土器群平面図－1

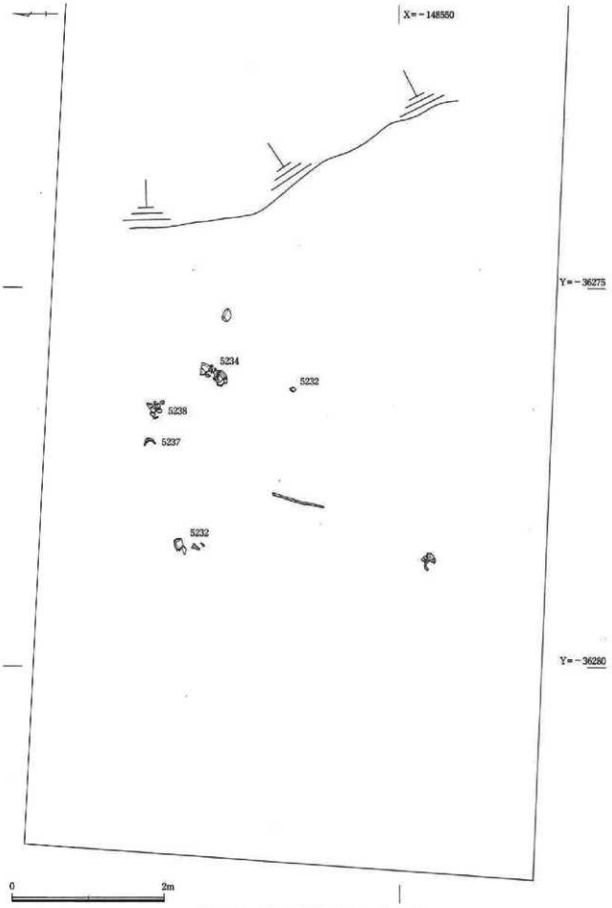


図203　99－6区第14面土器群平面図－2

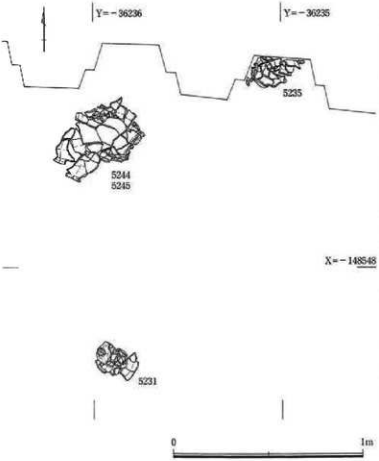


図204　99－6区第14面土器出土状況図

〔東側土器集積（5231・5233・5235・5236・5242～5245）〕　調査区東側で検出した（図202・204）。土器片が散在して検出されたが、その大部分の土器はほぼ完形に復原可能な個体が潰れた状態で出土し、意図的に置かれたと推測できる。

これら土器集積のほか、石が複数置かれていた。これらが置かれた後に植物遺体が堆積していることなどから、洪水堆積が落ち着いた直後に置いた可能性が高い。弥生後期中葉相当の壺、甕、鉢、高杯である。下川津B類の讃岐産甕が数個体出土している。

〔土坑S061147〕　調査区東側で検出した。形状はやや不定形の円形で、埋土に多量の炭化物を含む。この炭化物上面に土器が置かれていた。

〔西側土器集積（5232・5234・5237・5238）〕　調査区西側で検出した（図203）。

東側の土器集積と同様、石が複数置かれていた。土器はほぼ完形に復原可能な弥生後期中葉相当の壺、甕、鉢、高杯である。

e．第9面

第8面ベース層となる植物遺体堆積層を除去すると、灰色シルトをベースとした遺構面を検出した。当該時期では本調査区付近がもっとも標高が高くなる。そのためか他の調査区の相当層では遺構は皆無だったが、下層の堆積による自然地形の凹凸がみられる他、調査区東側および中央西側で土坑や土器集積等の遺構を確認した（図182）。

〔土坑S06473〕　調査区東側で検出した（図205）。

調査区東側では、第6面および第7面検出時に一部掘削が深かったため、本来の検出面より上層で確認することとなったが、土器型式から本面に帰属すると判断した。方形の土坑状に掘り下げた状態で土器集積を検出したが、本来は遺構面上あるいは単なる凹地状部状に置かれていた可能性がある。土器は庄内式期前後の高杯や甕が出土した。

〔土坑S06952〕　調査区東側で検出した（図206）。

形状はやや隅丸の長方形で、規模は長軸方向1.3cm、短軸方向0.9cm、深さ10cmで、埋土に多量の炭化物を含む。この土坑内からは、ほぼ完形の庄内式期前後の甕と高杯が出土した。

〔溝S06221〕　調査区東側で検出した。

幅0.5mの溝で、北西－南東方向にのびる。この溝埋土中より庄内式前後の土器破片が出土している。

〔土器集積（5254～5256ほか）〕　調査区西側で検出した。

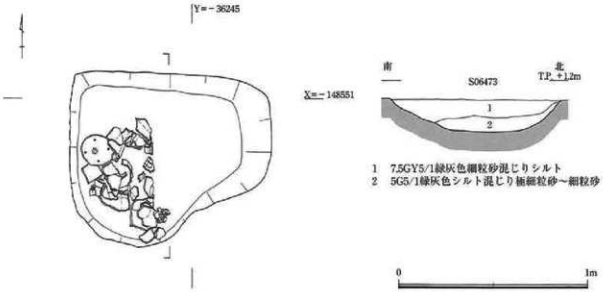


図205　99－6区第9面土器群平面図－1（S06473）

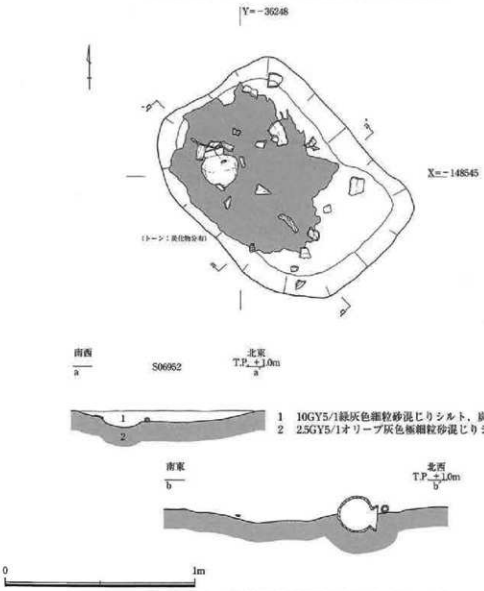


図206　99－6区第9面土器群平面図－2（S06952）

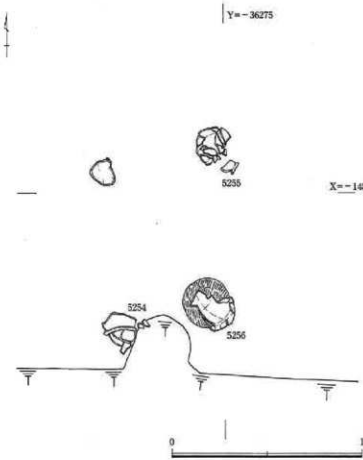


図207　99－6区第9面土器群平面図－3
（S061009など）

中世の高まりS06300盛り土を除去すると、一部掘削が深かったため、本来の検出面より上層で確認することとなった。どの土器も本来この遺構面上に置かれていたと考えられる。土器はほぼ完形に復原できる庄内式期前後の土器の甕などが出土した（図207）。

以上のように、99－6区の主要な遺構面としては5面を数える。そのうち第9面のみ庄内式期前後に相当する。しかし、それ以外はすべて弥生時代後期前半に帰属するが、小時期差は認められる。きわめて短い期間に繰り返し遺構面が形成されていた様子がうかがえる。

また、人為的な遺構が少ないのに反して、集石遺構1を代表例として、大量の土器や木製品などの遺物の多さには目を見張る。先述したように散乱状態や堆積土の所見から、これらは洪水等によって近接地から移動してきたものが一定程度占められると推定されるものである。しかし、土器では完形に復原しうることや摩耗を受けていないことなどからも、流水作用などによって運ばれてきたものでなく、人為的に満ち運ばれてきたものがかなりの割合で存在したことが分かる。

その他特筆できるのは遺構・包含層中に四国地方からの搬入土器が多くみられることがある。詳細は遺物の項でのべるが、讃岐産が約10点、土佐産が2点、阿波産が1点出土する。讃岐産土器は99－5区でも出土しているが、この当時に四国地方との密接な関係があったことを物語るものである（後掲の第7章第6・7節参照）。

3）99－7区

本調査区では、計8面を検出した。

古墳時代前期相当の堆積層以下で確認できる第9面以下を弥生時代後期相当と判断した。

なお、第9面は植物遺体堆積層上層上面、第10面は植物遺体堆積層上層除去後、第11面は粗粒砂層上面、第12面は灰色シルト層上面、第13面はオリーブ灰色シルト層上面、第14面は植物遺体堆積層下層上面で検出したが、それぞれ遺構は確認できなかった。

a．第16面

第15面ベース層となる洪水堆積層とその下層の灰色シルト層を除去すると、調査区全体で黒色シルト層を検出した。遺構密度は希薄で、調査区東側に流路による浸食部分（S07070）を、調査区中央部では下層に存在する弥生時代中期相当の溝の埋没最終段階の溝状落ち込みを確認した（図183）。

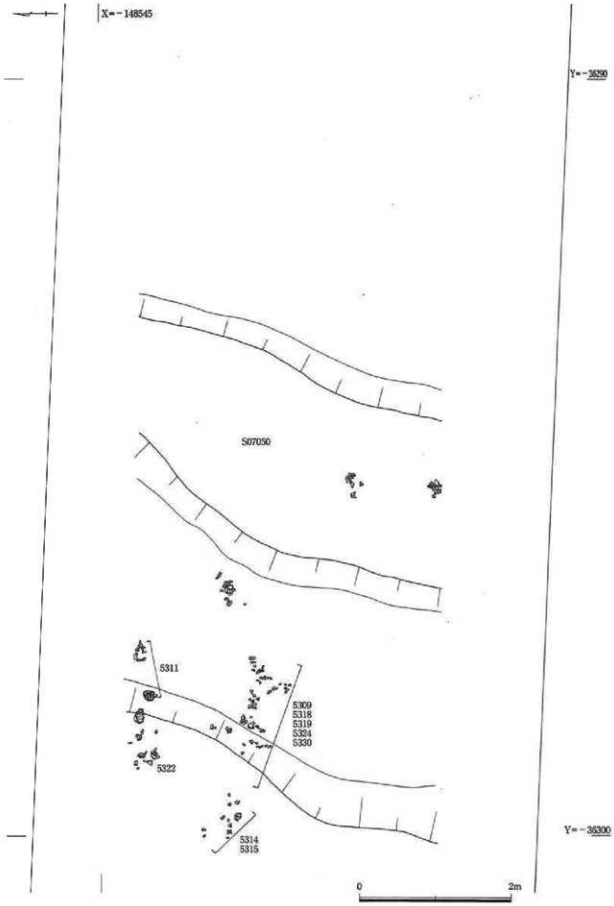


図208　99－7区第14面土器群平面図－1

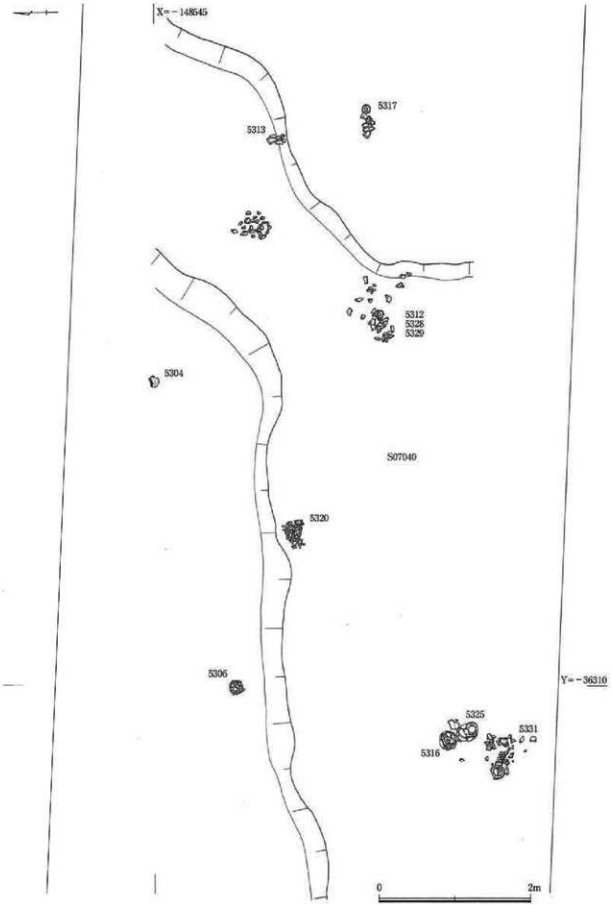


図209　99－7区第14面土器群平面図－2

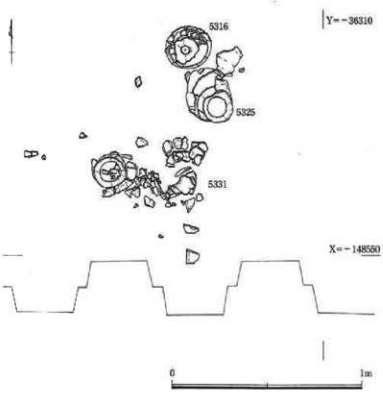


図210　99－7区第14面土器出土状況図

b．第14面

第13面ベース層となる植物遺体堆積下層を除去すると、調査区中央に下層堆積層が形成した微高地・高まり（S07040）が存在した。調査区東端部および西側では標高が低くなっており、灰色シルト層の低地部分（S07060ほか）が広がっていた。遺構密度は希薄で、調査区中央部の高まり上において土器集積を確認した。

〔土器集積（5316・5325・5331ほか）〕　調査区中央部、主に高まりS07040・S07050上で検出した（図208～210）。

本面検出の土器集積もそのほとんどが高まり上で、ほぼ原位置を保った状態で出土していた。土器が置かれた後に植物遺体が堆積していた。土器はほぼ完形に復原可能な弥生後期中葉相当の壺、甕、鉢、高杯が出土している。

99－7区の弥生時代後期遺構面は対応する層序から、第16面が99－5区の第16～14面、第14面が99－6区の第14面に相当すると考えられる。

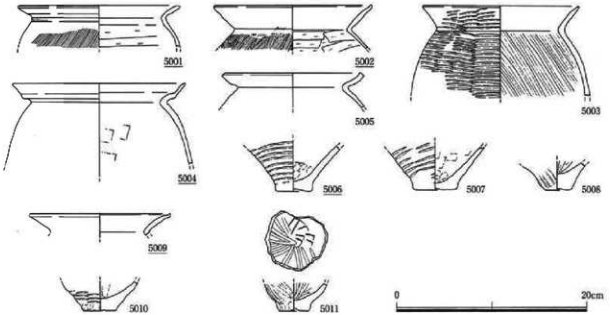
（5）小結

瓜生堂遺跡の本調査区域で確認した弥生時代後期（～一部庄内式期前後）遺構面は、中央部では微高地上にのみ展開するなど局所的な様相を呈している。これら遺構の分布状況や、度重なる洪水などの堆積環境などから、当時期の本調査区域周辺は自然環境によって形成された地形的制約を受けつつ、短期間ながら人間活動が営まれていたことが明らかとなった。

特に、99－5区から99－7区の各遺構面で見られる土器集積は、弥生時代後期前葉から後期中葉にかけての一括資料として、あるいは方形周溝墓の埋没過程で人間活動が行なわれていたことの証左として、重要な資料と位置づけられる。

その土器集積の範囲を詳細にみてゆくと、弥生時代後期の鍵層となる黒色シルト層上面の時点では、墳丘を反映した高まり部分を避けるように、溝状の落ち込み部分に土器が置かれていたが、その後堆積が進んでゆくと土器は高まり上のみの出土となる。

これらはより想像力を働かせるならば、方形周溝墓は墓として、あるいは墓域として一定の時間は何らかの特別な「空間」として認識されていたのかもしれない。が、やがて湿地帯に浮かんだ単なる島状の高まり＝「限定された空間」としてとしか認識されなくなっていくのではなかろうか。一方、その後さらに堆積が進むと、99－6区で弥生時代後期末～庄内式期前後の土器集積が見受けられるが、こういった土器を「置く」といった行為自体は、中期の供献土器の思想と同じ背景のもとで、この時期まで継続していった可能性があるとも考えられる。



上層遺構〔S01150（5001～5004・5006～5008）、S02150（5009～5011）〕、第7・2面間（5005）
図211　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－1（99－1・2区：遺構・包含層出土）

また、99－5区・99－6区の低地部分で検出した集石遺構1は、多数の石だけでなく、木製品、土器が多く出土しており、約70mという広範囲にわたっている。集石遺構に含まれる土器の中には、中部瀬戸内地域から搬入されたものがある。石に関しても分析結果などから近接地ではなく遠方からもたらされたものが多く、その選択にあたっても人的意向が働いているといえる。これらのことから、弥生時代後期にこの周辺では広範囲な交易ルートをもった集団が存在していたと考えられる。そして、この集団の形成になる集石遺構を「特殊な遺構」として認識できよう。

しかし、これらの出土状況をみても、遺物の量に比例せず、意図的な配石等の人為的な要素は希薄である。調査区近辺に人間の生活の拠点があり、洪水などで近接地より流れてきた可能性も考えられる点は先述したとおりである。これら石や木製品に関しては、それらを使用した何らかの人為的な施設等が近接地に存在した想定が十分考えられる。

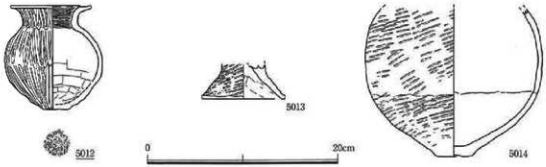
一方、東側ではわずかな調査面積であるが、01－1区において水田畦畔を確認することができ、当調査区域の東側には生産域が一定範囲で展開する可能性が考えられるようになった。この範囲は、弥生時代中期から後期にかけての時期の遺構検出面の標高が、他調査区より若干高く、元々水没する可能性が少なかったと考えられる。近隣では、当遺跡の南側に位置する巨摩・若江北遺跡で弥生時代後期～庄内式期相当の水田を確認している。また、当遺跡東側では少し距離はあるが、池島・福万寺遺跡（八尾市・東大阪市）で弥生時代後期に広範囲に及ぶ規格性の高い水田を検出しており、当該時期には生産域の拡大が行なわれたと考えられる。

本調査区域で検出した水田は、あまり土壌化が進んでおらず、ごく短時間しか営まれていなかったと考えられる。しかしながら、微高地から低地へのわずかな傾斜を利用して、水田域の拡大が積極的に行なわれた可能性が高い。

（川瀬・朝田）

2．遺物

（1）土器（図211～238、写真図版84～100）



第８・７面間（5012）、第12・11面間（5013）、第７・６面〔S03170（5014）〕
図212　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－２（99－３区：遺構・包含層出土）

１）各調査区の出土品

ａ．出土状況ほか

今回の調査では、弥生後期に属する多くの土器資料が比較的まとまったかたちで出土した。

特に99－５区～７区では資料数も充実しているが、これらの土器群は、土坑や溝等の明確な個別遺構にともなって検出されたものはあまり多くなく、遺構面上に土器だまりを形成する、もしくは完形土器が散在的に出土するというように、面的に大量の土器が広がっていた様相を呈する。

とりわけ、99－５区西端部（第18面ほか）～99－６区全体（第18面関係ほか）にわたる東西幅約70mにかけては、ほぼ同一時期ないしおおむね継続した契機で形成されたと推定できる集石遺構（分布に粗密あり）等にともなって出土した。これらの地区にまたがり多くの土器群を共伴した集石遺構に対しては、今回の報告にあたって総体的な遺構名称として、あらたに「集石遺構１」としたのは遺構の項で記したとおりである。この集石遺構１の現地発掘において、各調査区ごとに、集石やそれらに共伴した土器群等に対して、集中度合や分布粗密を考慮して、別個に遺構番号を付して調査を進め遺物類を取りあげた。そこで本項では、それらのまとまりごとのままで報告することとし、例えば、「集石遺構１内：土器集積部Ｓ～～」という表現を用いる（その際、遺構項目中の表記とやや異なる内容のところもみられるが、遺物としてのまとまりを重視する意図として理解されたい）。また、集石が分布する範囲以外で、それらに西接ないし東接する範囲でも、同一面および近接層順で土器群を確認しており、それらも集石遺構１とほぼ同時期・契機で形成されたと判断できる。なお、このような状況は、東大阪市教育委員会がこの北側で調査を実施した範囲（東大阪市教委2002、ほか）でも確認されている。

さらに、それらの上層では、古墳時代前期（布留式期）以降の安定した遺構面にいたるまでの層順において、顕著な遺構は稀薄ではあるが、庄内式期前後までの土器（群）を出土する遺構面が、間層をはさんだ状態で存在する。このように、堆積層順からは、弥生後期前半～庄内式期前後までは、間隙が介在するものの一定の連続性を示す。この状況をかんがみて、本項では、庄内式期前後までの土器資料を扱うことにした。

以下、上述の集石遺構１およびそれの関連面・層から出土した資料群を中心に、99・01年度の別で、東側の調査区から順に、さらに、そのなかでも下層から出土土器の概要を述べる。加えて、弥生後期～庄内式期前後の遺構面・包含層からの検出ではなく、上層の古墳時代以降の面・層に混入したかたちで検出できた当該期の個体もあわせて報告する。

ｂ．99－１区包含層ほか出土

〔上層遺構：第９面流路Ｓ01150〕（5001～5004・5006～5008）　古墳時代流路（自然流路１）中の混

入品。甕口縁部（5001～5004）・底部（5006～5008）を検出した。本遺構からはほぼ完形の布留式甕（6004）も出土している。

（5001）は、内面をヘラケズリ、外面をハケで仕上げている。（5002）は口縁端部をつまみ上げており、外面はハケの後、頸部外面を一周ナデで仕上げている。庄内式甕と考えられる。（5003）は内面にハケを施すが、他の甕はすべてヘラケズリをおこなっている。底部片ではすべて内面をハケ、外面タタキで仕上げている。（5004）は内面に段をもち、外側に開いておわる口縁をもつ甕である。内面はヘラケズリをおこなうが、外面の調整は不明瞭である。（5001・5002・5004・5006）は生駒山西麓産。

〔第７～２面間〕（5005）　やや内湾しながら開く口縁をもつ甕である。

c．99－２区包含層ほか出土

〔上層遺構：第５面流路Ｓ02150〕（5009～5011）　古墳時代流路（前出のＳ01150と同一遺構、自然流路１）中の混入品。（5009）は甕の口縁部で、外方に広がる口縁の端面をつまみ上げておわる。庄内式甕の口縁と考えられる。生駒山西麓産。（5010）は外面にタタキが残る甕、（5011）は内外面をヘラミガキする壺の底部と考えられる。

d．99－３区遺構・包含層出土

〔第12・11面間〕（5013）　外面をタタキで仕上げた脚台片である。二次的な熱を受けた痕跡は認められないが、製塩土器の可能性があろうか。

〔第８・７面間〕（5012）　小形の壺である。外面全体を縦方向のヘラミガキで、頸部内面を横方向のヘラミガキきで仕上げる。体部内面はヘラケズリをおこなう。生駒山西麓産。

〔第７・６面Ｓ03170〕（5014）　内面をナデ、外面をタタキで仕上げた甕である。底部中央がやや窪んだ形状を呈し、体部下半に成形時の接合痕が明瞭に確認できる。

e．99－５区遺構・包含層ほか出土

99－５区の現地調査では、弥生後期の土器群は、大別して第19面、第18面、第16～14面というまとまりで出土している。これらを面ごとに、さらに同一面の分布範囲ごとに区分して報告する。また、第18面では、上述のように集石遺構１および同一面からの出土個体数が多いため各器種ごとに報告する。

〔第19面〕（5015～5021）　弥生中期方形周溝墓群の直上に相当する第19面では、口縁下に穿孔をもつミニチュア土器（5015）のほか、壺（5016・5017）、高杯（5018）、甕（5020・5021）などが出土している。（5015）は飯蛸壺形の可能性が強い。（5017）の口縁下には３条の凹線文がめぐり、外面はハケで仕上げている。（5019）は、台付壺と考えられる。（5020）は内面下半をヘラケズリ、上半を指ナデで仕上げ、外面下半はヘラミガキ、上半はハケで仕上げている。この土器は角閃石を含む胎土で製作されているが、器形や製作技法から、讃岐地域の下川津Ｂ類土器として分類される土器が持ち込まれた個体と考えられる。

〔第18面東半部土器群〕（5022～5078）　下層の弥生中期方形周溝墓群の墳丘と周溝による凹凸を反映する、平坦でない遺構面上に展開して形成された土器群である。上述のように、次項の集石遺構１共伴品とほぼ同時に形成されたと想定できる（図186参照）。

（5022～5025）は広口壺である。（5023）は内面に赤色顔料が付着している。また（5025）は、頸部下端にも赤色顔料が認められる。（5022・5025）は生駒山西麓産。

（5026～5028）は、従来から蒸沸用の器種として指摘されることもあり、（5026・5027）には実際に外面に煤が付着しているが、今回は器形から壺として扱った。口縁端部に面をもち、（5026・5028）では擬

凹線をめぐらせる。体部内面はハケのものとヘラケズリをおこなうものがある。外面調整はハケで仕上げられているが、(5027) ではタタキの後にハケをおこなっていることが観察される。

(5029～5040) は長頸壺である。ほとんどの個体の内面はナデやハケで仕上げられるが、(5035) の体部内面はヘラケズリの跡が残る。外面調整はハケの後、全体をヘラミガキで仕上げるもの (5029～5032)、体部だけヘラミガキをおこなうもの (5033～5035・5040)、ハケでおわるもの (5036～5039) がある。施文はほとんどおこなわれないが、(5034) の頸部に櫛状工具による刺突文が2帯めぐり、(5039) の口縁には1条の凹線がめぐる。また (5030) の体部上半には方形を描くような、(5038) には3本線の記号のようなものがヘラ描きで刻まれている。(5030) は生駒山西麓産。

(5041～5047) は鉢である。「く」の字状に屈曲して開く口縁とまっすぐに開く口縁形態に二分できる。前者では、(5042・5045) など、口縁端部に面をもち、擬凹線のめぐらせる資料もある。(5047) は台付鉢の脚台部と推測されるうえ、鉢体部下半に粘土のはがれたような痕跡があり、把手が付いていた可能性がある。

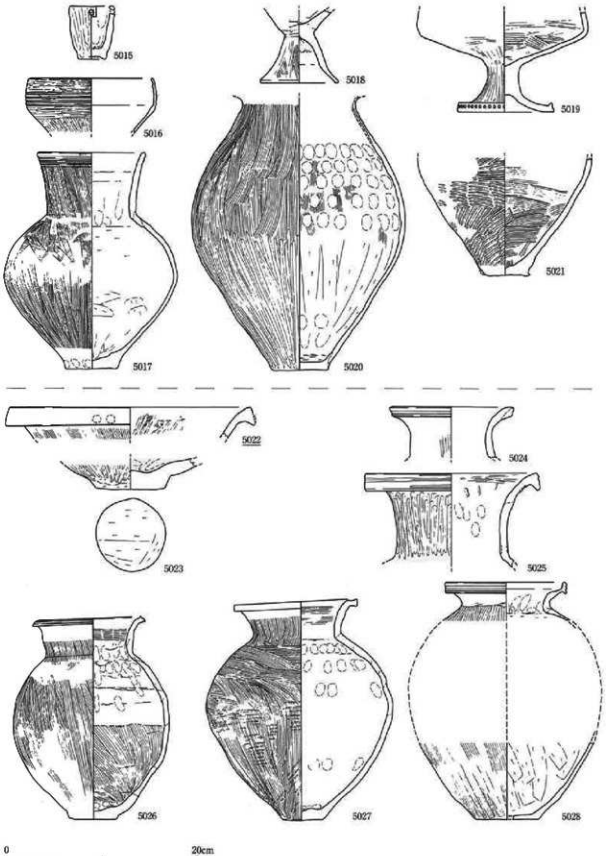
(5048～5057) は高杯である。杯部の形態には、稜をもって外反してひらくものと、椀形になるものとがある。(5048) は口縁下に浅い凹線がめぐり、(5052) ではヘラミガキを波状に施すことで暗文のような施文効果を得ている。また、杯部内面は基本的に中心から放射状にヘラミガキがおこなわれるが、(5057) は1方向の往復運動でヘラミガキをおこなっている。(5057) の透孔の径は他の資料と比べやや大きい。他に、脚部の透孔は、確認される資料のほとんどが4方向に穿たれているが、(5054) のみ3方向である。また (5055・5057) ではヘラ描きで直線文を施しており、特に (5055) では鋸歯文も認められる。(5054・5056) は生駒山西麓産。

甕の口縁形態では、「く」の字状に広がっておわるもの、口縁端部に面をもちそれを上下に拡張し擬凹線をめぐらせるもの、複合口縁状になるものが認められる。内面調整ではナデやハケよりもヘラケズリが、外面調整ではタタキよりもハケが優勢である。一方で、(5078) のようにやや細かいタタキを全面的に施す資料も認められる。底部形態では、(5069・5077) のように明瞭に上げ底状の個体も少量ながら存在するが、ほとんどが平底である。施文は (5069・5077) のように肩部に列点文をめぐらせる例がある。(5077) は口縁外面に凹線を2条めぐらされており、形態や施文など恩智遺跡出土例 (瓜生堂遺跡調査会 1980) と類似している。また (5064) のように口縁端部を上方に拡張して擬凹線をめぐらせるなどの要素は、北近畿地域の資料の特徴と類似している。なお、(5065) は、外面に付着していた炭化物を用いた炭素14年代測定で、2000±40 ^{14}C BPというデータが得られている (後掲第8章第6節参照)。

〔第18面集石遺構1内：土器集積部S05190〕(5079～5127)　調査区西端部で検出した、集石遺構に共伴する土器集中部からの出土。上記の第18面東半部土器群とは一連の形成と判断してよい (図187参照)。

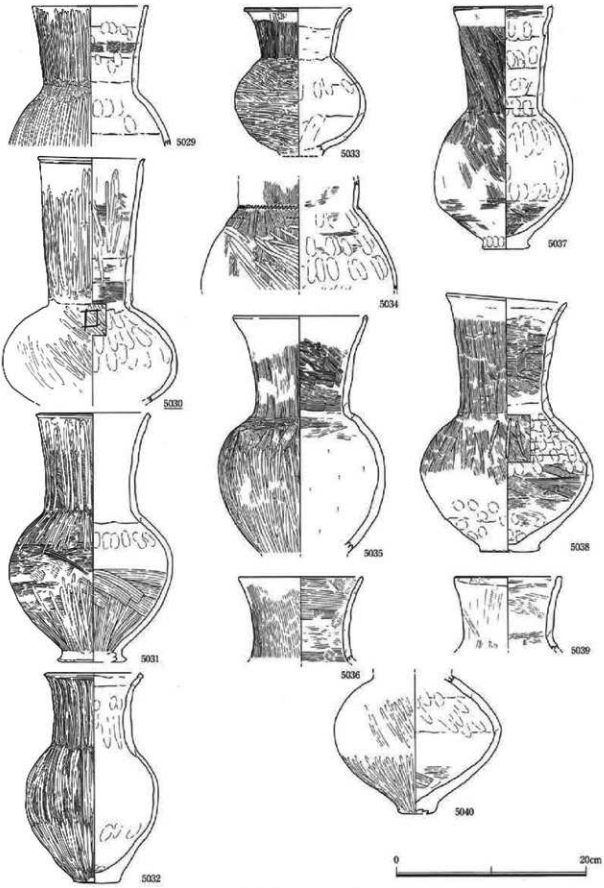
(5079～5086) は広口壺である。口縁端部を垂下させたり上下に拡張することで面を作るものと、頸部からまっすぐに開いておわるものとに分類される。前者では拡張した面に円形浮文を貼り付けるなどして装飾している。後者では口縁端部に刻目を入れる (5083) などがある。また (5084) ではヘラ状工具により3本のラインが描かれ、(5085) の頸部には赤色顔料の塗布がおこなわれている。(5086) は大形の壺の体部である。(5079) は生駒山西麓産。

(5087～5099) は長頸壺である。内面はナデやハケで仕上げられている。外面はハケの後、ヘラミガキで仕上げるもの (5088・5089・5091・5094・5097)、ハケでおわるもの (5090・5092・5093・5096・



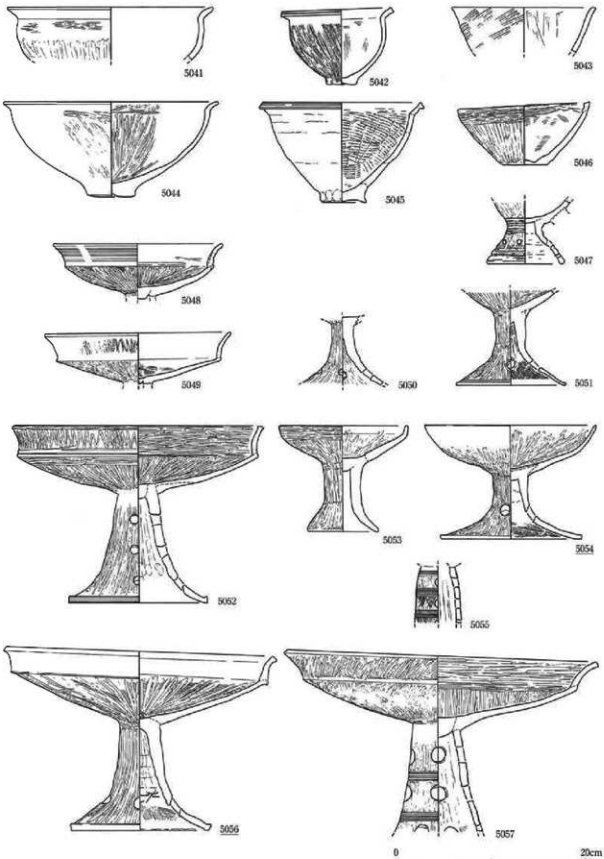
第19面（5015～5021）、第18面東半（5022～5028）

図213　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－３（99－５区：遺構ほか出土）



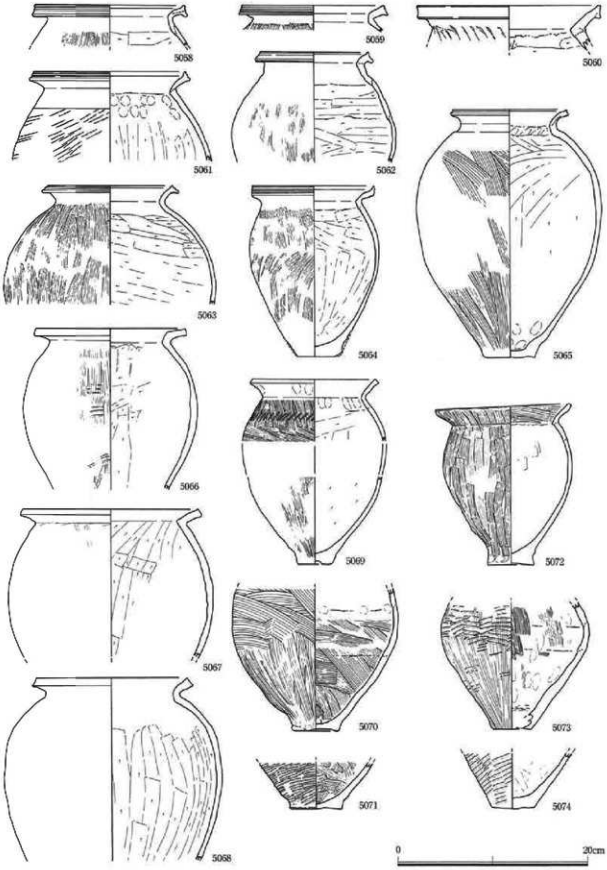
第18面東半（5029～5040）

図214　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－4（99－5区：遺構ほか出土）



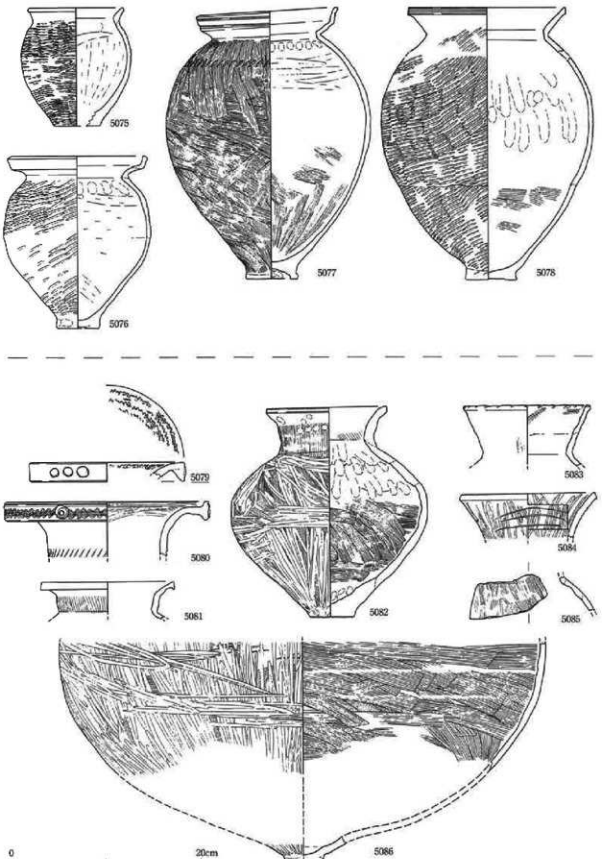
第18面東半（5041～5057）

図215　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－5（99－5区：遺構ほか出土）

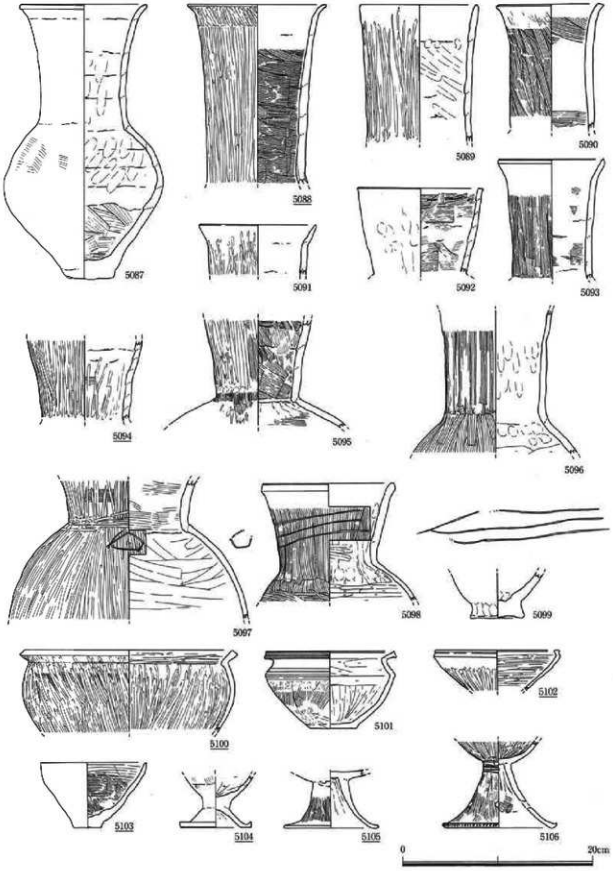


第18面東半（5058～5074）

図216　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－6（99－5区：遺構ほか出土）

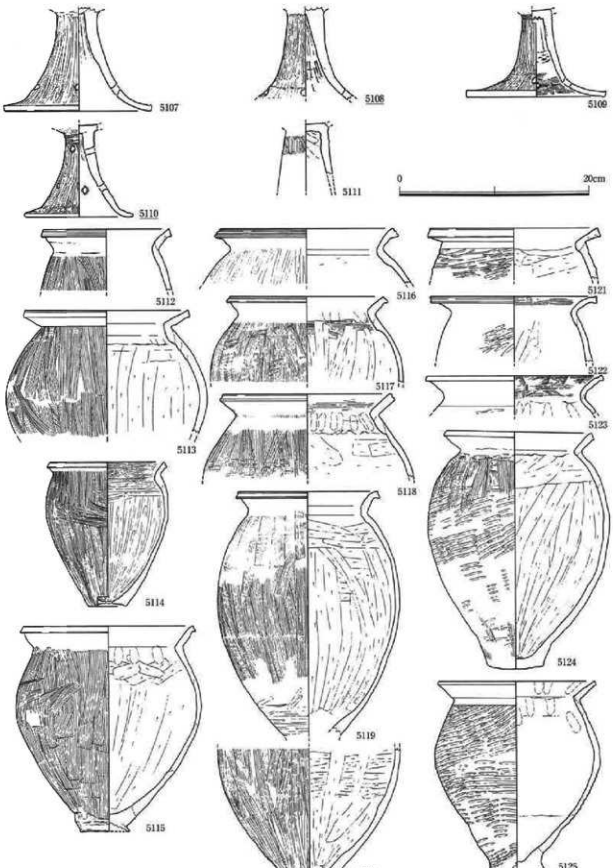


第18面東半（5075～5078）、第18面〔S05190（5079～5086）〕
図217　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－7（99－5区：遺構ほか出土）

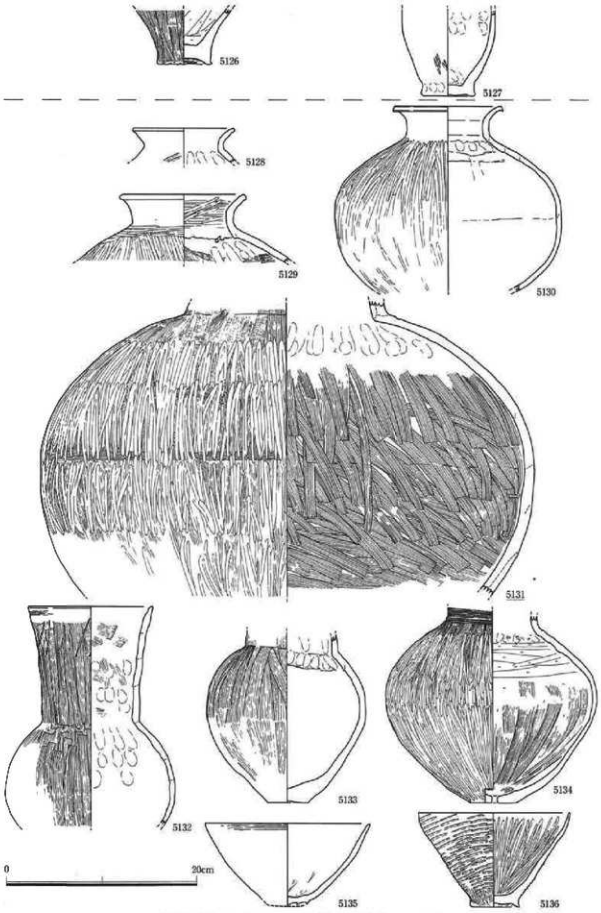


第18面〔S05190（5087～5106）〕

図218　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－8（99－5区：遺構出土）



第18面〔S05190（5107～5125）〕
図219　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－9（99－5区：遺構出土）



第18面（S05190（5126・5127））、第16～14面（5128～5136）

図220　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－10（99－5区：遺構ほか出土）

5098）などがある。前項の第18面東半出土の長頸壺と同様に、施文はほとんどおこなわれないが、（5097）の体部上半には三角形の記号が対照な位置に2箇所、（5098）には3本線が刻まれている。（5088・5094）は生駒山西麓産。

（5100～5104）は鉢である。（5100）は他の資料と比べてやや大きめである。（5101）は、内面にヘラケズリをおこない、体部上半の最大径部付近で鋭く屈曲する。屈曲点あたりには凹線文が3条めぐらされているほか、口縁端部にも擬凹線がめぐる。山陽地域に類例が求められ、搬入品の可能性もある。（5100・5102～5104）は生駒山西麓産。

（5105～5111）は高杯である。杯部が残存する資料は少ないが、（5105・5106）は椀形を呈すると考えられる。また、ヘラ描きの沈線をめぐらせる（5106・5109・5110）もある。観察できる透孔は（5110）の3方向を除いてすべて4方向に穿たれている。（5105・5108・5110）は生駒山西麓産。

甕の口縁形態では、第18面東半出土の資料と同様に、「く」の字状に屈曲し広がっておわるもの、口縁端部に面をもちそれを上下に拡張し擬凹線をめぐらせるもの、複合口縁状になるものが認められる。内面調整ではナデやハケよりもヘラケズリが、外面調整ではタタキよりもハケが優勢である。しかし、口縁端部に擬凹線のめぐる個体は東半と比較して割合が低いようである。特徴的な個体として、（5114）の体部内面は、ヘラケズリののち最大径より下を縦方向にヘラミガキ、最大径より上を横方向にヘラミガキがはいる。また体部外面は下半にヘラミガキを施しており、底部はやや上げ底状を呈し、穿孔されている。他のほとんどの個体が平底である。なお、（5125）は、外面に付着していた炭化物を用いた炭素14年代測定で、1960±40 ^{14}C BPというデータが得られている（後掲第8章第6節参照）。

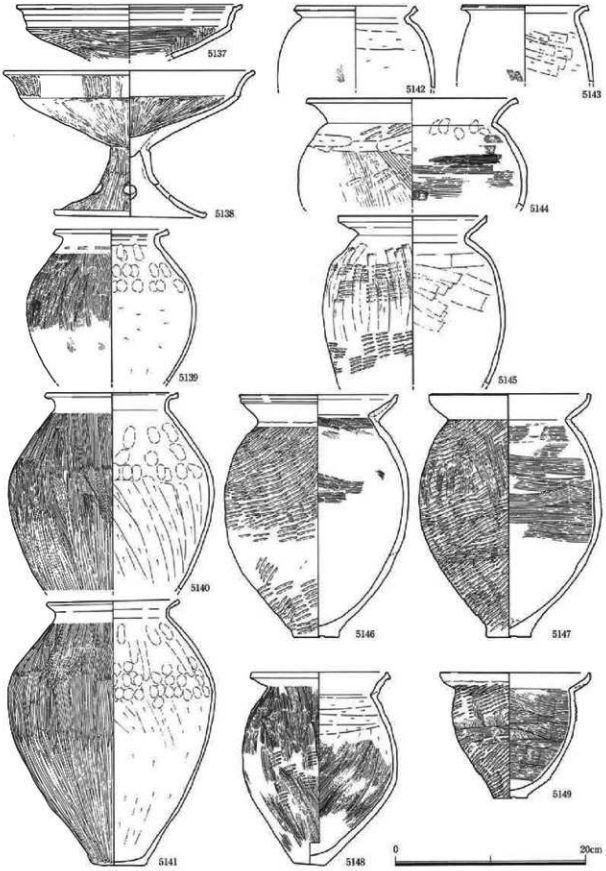
〔第16～14面諸土器群〕（5128～5149）　上記の第18面集石遺構1およびそれと同一面の土器群とは、若干の間層をはさんで上層から検出した土器単体、土器群、土器だまり状の出土資料である（図189・192・193参照）。これらを一括して器種ごとに実測図を掲載したが、現地調査では、（5131・5132・5146・5148）が第16面、（5136）が第15面、（5128～5130・5133～5145）が第14面、（5147～5149）が第16～14面として、遺物取りあげをおこなった個体にあたる。土器の個々の埋積時期としては、第16面が古く第14面が新しくなるので、今後の土器変遷のあり方を追求する際の指標資料となろう。

（5128～5131）は広口壺である。口縁は短く立上り、外反する。内面はナデで仕上げられるものがほとんどであり、外面調整はヘラミガキで仕上げられる。（5131）は大形の壺の体部である。内面はハケのあと頸部付近のみナデがおこなわれる。外面はハケをおこなった後、上から下へと4段以上にわけてヘラミガキをおこなっている。（5131）は生駒山西麓産。

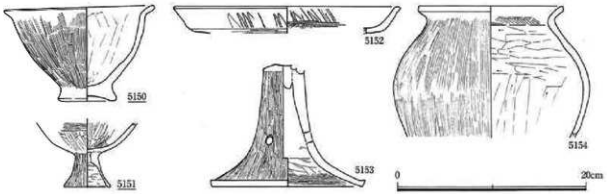
（5132～5134）は長頸壺である。（5132・5133）は内面をナデ、外面をハケで仕上げる。また（5132）は口縁下にヘラ描きで斜線が刻まれている。一方で（5134）は、体部内面上半に半時計回りの方向でヘラケズリをおこなうが、下半では下から上へハケをおこなう。外面はハケをおこなった後、上から2段に分けてヘラミガキがおこなわれている。また、頸部にはヘラ描きの平行沈線がめぐり、現状では4条確認できる。底部には焼成後に穿たれた直径5～7㎜の孔がある。

（5135・5136）は鉢である。（5135）は器壁の剥離が激しく調整は不明瞭である。（5136）は、内面をヘラミガキし外面はタタキで仕上げている。底部は上げ底状を呈する。

（5137・5138）は高杯である。（5137）の口縁部は斜め上方に上がり屈曲して外反する。外面は強いナデで凹線状を呈する。今回の調査で出土した高杯では、杯部のヘラミガキは内外面ともに放射状に磨く個体が一般的だが、（5137）は全周を4分の1ずつに区切り、1単位箇所を集中的に磨いて、隣の区画に



第16～14面（5137～5149）
図221　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－11（99－5区：遺構ほか出土）



第18面関係〔S061310（5150～5154）〕
図222　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－12（99－6区：遺構・包含層出土）

移るという方法がとられている。瀬戸内地方の土器との関連が考えられる。（5138）杯部外面に一部分のみヘラミガキをおこない、暗文状の文様効果を得ている。脚部は低脚であり、4方向に透孔が穿孔される。

（5139～5149）は甕である。うち、（5139～5141）は角閃石を含み、暗褐色の胎土を有するが、その器形などから讃岐地域の下川津B類に分類される土器であると考えられ搬入品であろう。内面は、上半に位置する最大径より上は指押さえや指ナデがおこなわれるが、それより下半にはヘラケズリの痕を残す。外面は先にハケをおこなうが、器高の半分程度の高さまで下半をヘラミガキで仕上げる。底部は（5141）では直径5.8cmの平底で、器壁は3～4㎜と非常に薄く作られている。讃岐地域では、後期初頭に位置づけられている土器である。（5142～5149）は、在地の低湿地地域の胎土を有する土器であるが、下層の第18面出土の土器群と比べて外面をタタキで仕上げる割合が高くなっている。内面調整もハケで仕上げる割合が高くなっているほか、口縁端部を拡張させ、擬凹線をめぐらせる個体はほとんどない。

なお、外面に付着していた炭化物を用いた炭素14年代測定で、（5139）は1975±40 ^{14}C BP、（5147）は1950±40 ^{14}C BP、（5149）は1990±40 ^{14}C BP、というデータが得られている（後掲第8章第6節参照）。

（中川・秋山）

f．99－6区遺構出土

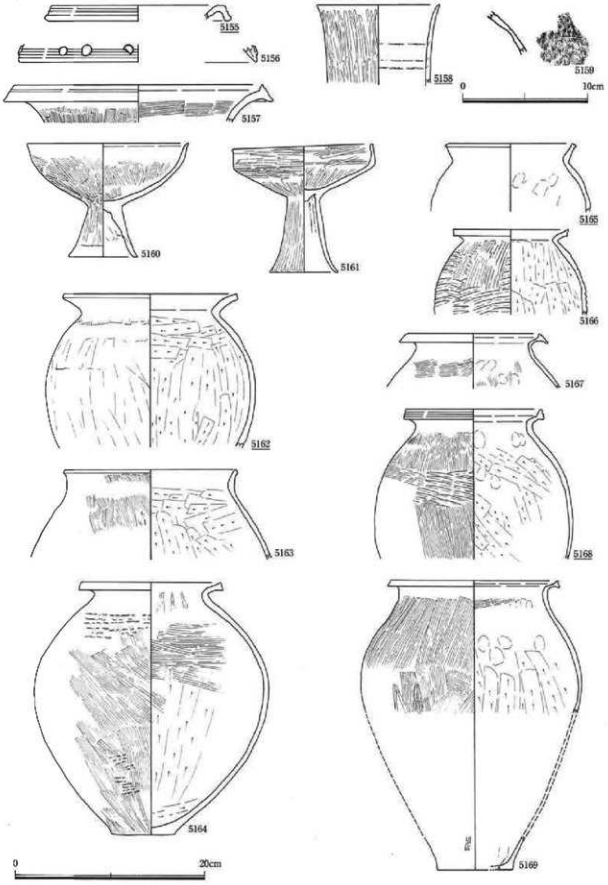
本調査区では、当該期前後の自然流路が調査区のほぼ中央部に広く存在し、さらに遺構面が平坦でないこともあったため、遺物の取りあげに関してやや統一性を欠く部分もみられた。そこで、発掘調査の終了後における整理所見に依拠し、以下のように、出土土器の遺構・層順を再整理したので、「第○面関係～～」という表現を用いることにした。また、この場合、「第○面関係包含層ほか」は、その面に所属ないし近接した層順からの出土を意味する。

〔第18面関係集石遺構1内：土器集積部S061310〕（5150～5154）　調査区東端部で検出した、土器集中部からの出土。鉢（5150）、高杯（5151～5153）、甕（5154）がある。（5150・5151）は生駒山西麓産。

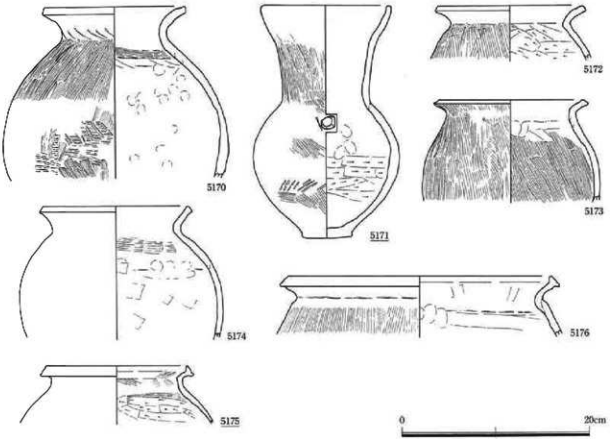
鉢（5150）は外反する口縁部をもち、ドーナツ状の底部をもつ。調整は外面全体にハケ調整を施し、内面は板状工具によるナデで仕上げる。底部裏面に黒斑がみられる。

高杯は椀形の（5151）と、杯部から上方に立ちあがる口縁をもつ皿形の（5152）がある。脚部の形態は逆円錐台形を呈するもの（5151）と、柱状が長く裾の広がりの大きな（5153）がある。（5151）は脚中部外面に黒斑が一部みられる。（5153）は4つの透孔を施す。

甕（5154）は肩部に最大径をもつ。調整は内面にヘラケズリを施し、外面はハケ調整で仕上げる。こ



第18画関係〔S061304（5155～5169）〕
図223　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－13（99－6区：遺構・包含層出土）



第18面関係［S061240（5170～5176）］
図224　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－14（99－6区：遺構・包含層出土）

の土器は胎土に角閃石を含むが、形態の特徴が讃岐地域の下川津B類土器と類似する点が多いことから、讃岐産土器の可能性が高い。

〔第18面関係集石遺構1内：落ち込みS061304〕（5155～5169）　集石遺構のうち、調査区西端にあたる落ち込み部で検出した土器集中部からの出土（図199参照）。壺（5155～5159）、高杯（5160・5161）、甕（5162～5169）がある。なお（5155・5158・5162・5165・5168・5171）は生駒山西麓産である。

壺は外上方にのびる垂下口縁をもつ（5155・5156）と、上下に肥厚した口縁端面をもつ（5157）と、外傾して直口する長頸壺（5158）がある。壺（5155～5157）は、口縁端面に擬凹線を施す。（5156）は口縁端部に黒斑がみられる。（5159）は肩部にヘラ描きの沈線によって、「建物」を抽象化したともいわれる記号文（春成1991）を施す。

高杯は椀形で、柱状部が短く裾の広がりの大きな脚台をもつ（5160）、杯部から上方に立ちあがる口縁をもつ皿形で、柱状部が長く裾の広がりの大きな脚台をもつ（5161）がある。（5161）は円板充鎮の手法をとる。

甕は口縁部形態をみると、口縁端部に小さな面をもつ（5162～5164）、口縁端部が上下にのびる（5165～5169）がある。なお（5162・5166）は「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。底部形態は、突出しない平底をもつもの（5164・5169）がある。調整は外面にタタキの後ハケ調整するものが多いが、板状工具によるナデを施すもの（5162）や、ハケ後ヘラミガキを施すもの（5169）もみられる。内面は、ヘラケズリを施すもの（5162～5164・5166・5168・5169）が多い。（5162）は口縁部に赤色顔料を塗布する。（5162・5163・5165～5169）は外面に多量の煤の付着がみられる。（5169）は胎土に角閃石を含むが、肩

部に最大径をもつ体部形態をもち、調整は内面をヘラケズリ、外面体部上半部にハケ調整、下半部にヘラミガキを施すことから、讃岐地域の下川津B類土器に分類でき、讃岐産土器に位置づけられる。

〔第18面関係集石遺構1内：落ち込みS061240〕(5170～5176)　集石遺構のうち、調査区西半部で検出した落ち込み部からの出土。壺（5170・5171）、甕（5172～5176）がある。(5171・5175）は生駒山西麓産。

壺は緩やかに曲線的に外反する口縁をもつ広口壺（5170）と、内湾する口縁をもつ長頸壺（5171）がある。(5170）は外面調整にタタキ後ハケ調整が施され、体部中央部に線刻状の刺突文を加える。(5171）の肩部には円形浮文の貼付とヘラ描きによる記号文を施す。

甕は口縁部形態をみると、口縁端部に小さな面をもつ（5172～5174）と、口縁端部が上下にのびるもの（5175・5176）がある。調整は外面にハケ調整を施すもの（5172・5173・5176）が多く、内面はヘラケズリ調整（5172・5175）、ハケ調整（5173）、板状工具によるナデを施す（5174・5176）がある。(5170・5171）は体部外面に黒斑がみられ、(5172～5175）は外面に煤が付着する。

〔第18面関係集石遺構1内：土器集積部S061230〕(5177～5186・5216)　集石遺構のうち、調査区中央高まり部にあたる箇所で検出した土器集中部からの出土（図196～199参照)。壺（5177～5182)、高杯（5183～5186）・甕（5126）がある。(5181～5183・5216）は生駒山西麓産。

壺は緩やかに外反する口縁をもつ広口壺（5177～5179）と、外傾して直口する長頸壺（5181・5182）がある。広口壺は粘土の貼付によって形成した垂下口縁をもつ（5177）と、肥厚した口縁端面をもつ（5178・5179）がある。(5177・5178）は口縁端部に擬凹線を加える。壺の体部片（5180）は肩部にヘラ描きによって弧線状に描く記号文を施す。

高杯は緩やかに内湾する杯部をもつ（5184)、口縁部が外反する（5186)、杯部から上方に立ちあがる口縁をもつ（5185）がある。(5184・5185）は、杯部上半部に1条の擬凹線を加え明瞭な端面をもつ。(5183）は逆円錐台を呈する脚台部をもつ。(5186）は杯部屈曲部に矢羽根状の刺突文を施す。(5183・5184）は外面が煤ける。

〔第18面関係集石遺構1内：溝S061340〕(5187～5190)　集石遺構のうち、調査区西半溝状遺構部にあたる箇所で検出した土器集中部からの出土。壺（5187)、高杯（5188)、甕（5189・5190）がある。(5188・5190）は生駒山西麓産。

壺の体部片（5187）は外面調整にヘラミガキを施し、肩部に棒状工具による刺突文を施す。

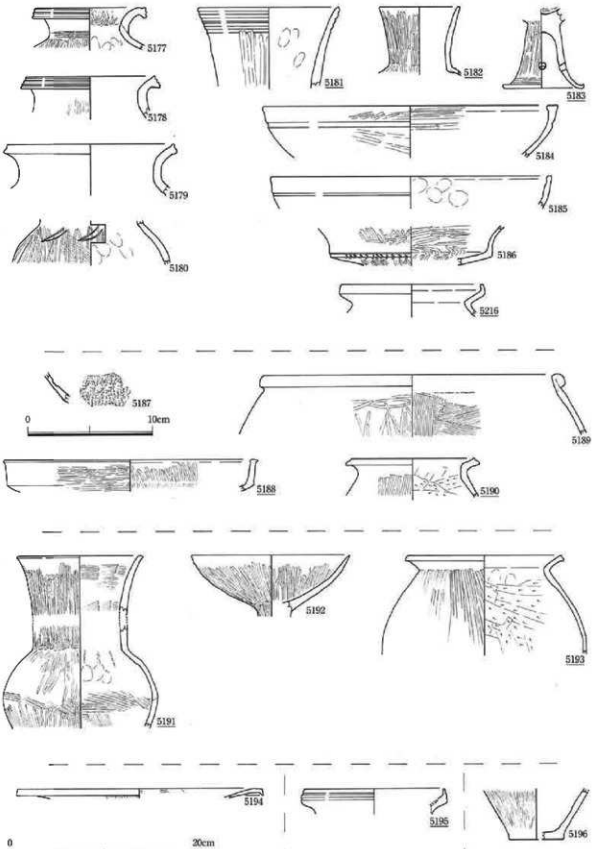
高杯（5188）は、杯部から上方に立ちあがる口縁をもつ。内面全体に煤ける。

甕は、口縁端部の粘土を外側に折り返す口縁部をもつ（5189）と、緩やかに屈曲する口縁部をもち、口縁端部に小さな面をもつ（5190）がある。調整は、内面はハケ調整（5189)、ヘラケズリ（5190）を施し、外面はヘラミガキ（5189)、ハケ調整（5190）で仕上げる。(5189）は外面全体に煤け、(5190）は外面全体に多量の煤が付着する。

〔第18面関係集石遺構1内：土器集積部S061184〕(5191～5193)　集石遺構のうち、調査区中央高まり部付近にあたる箇所で検出した土器集中部からの出土。壺（5191)、高杯（5192)、甕（5193）がある。(5191・5193）は生駒山西麓産。

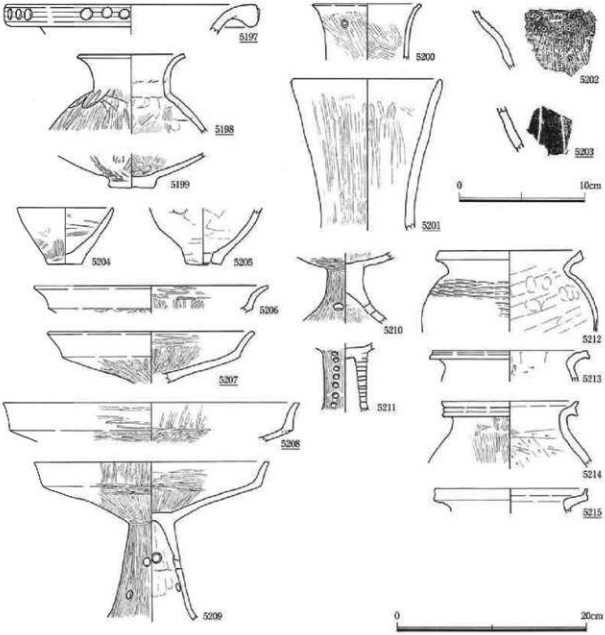
壺（5191）は外反しつつ直口口縁にいたる長頸壺である。調整は、内面にハケ調整を施し、外面はハケ調整後ヘラミガキで仕上げる。体部外面に黒斑がみられる。

高杯（5192）は、楕形で口縁端部は丸くおわる。調整は内外面ともにヘラミガキを施す。



第18面関係［S061230（5177～5186・5216）、S061340（5187～5190）、S061184（5191～5193）、S061200b（5194）、S061210b（5195）］、第17面［S061220（5196）］

図225　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－15（99－6区：遺構・包含層出土）



第15面関係〔S061210（5197～5215）〕
図226　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－16（99－6区：遺構・包含層出土）

甕（5193）は、「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部が下方にのびる。調整は内面にヘラケズリを施し、外面はハケ調整で仕上げる。外面全体に多量の煤が付着する。

〔第18面関係集石遺構1内：土器出土地S061200B〕（5194）　集石遺構のうち、調査区中央高まり部付近にあたる箇所（中期土器棺墓S061200付近）からの出土。高杯で、口縁が広く外反し、水平口縁高杯の退化した形態と考えられる。口縁部内面に円形状に赤色顔料が残存する。また、口縁端部全体にも赤色顔料がみられる。

〔第18面関係集石遺構1内：土器出土地S061210B〕（5195）　集石遺構のうち、調査区中央付近にあたる箇所（第15面検出流路S061210付近）からの出土。甕で、粘土貼付によって形成する受口状口縁をもつ甕の口縁部である。生駒山西麓産。外面全体にペースト状に煤が付着する。

〔第17面集石遺構S061220〕（5196）　集石遺構1とは異なりその上層で、調査区西端部で単独で検出

した組石状の集石遺構からの出土。甕の底部で、突出しない平底である。外面調整にハケを施す。内面にコゲが付着し、外面と断面部が煤ける。

〔第15面関係流路Ｓ061210〕(5197～5215)　調査区中央～東半部で検出した、南東－北西主軸の流路からの出土。壺（5197～5203）、鉢（5204）、有孔鉢（5205）、高杯（5206～5211）、甕（5212～5215）がある。(5197・5198・5201・5203・5207・5208・5215）は生駒山西麓産。

壺は外上方にのびる垂下口縁をもつ広口壺（5197）、口縁端部を肥厚させて直立して外反する口縁をもつ短頸壺（5198）、外傾して直口する長頸壺（5200）、外傾して直線的にのびる細頸壺（5201）がある。(5198・5203）は肩部、(5199）は底部にヘラ描きの記号文や線刻がある。また（5200・5202）は円形竹管によるスタンプ文を施す。

高杯は口縁部が外反する（5206・5207）と、杯部から上方に立ちあがり緩やかに外反する口縁をもつ（5208・5209）がある。脚部の形態は逆円錐台形を呈する（5209）、柱状の短く裾の広がりの大きな（5210）、柱状の長い（5211）がある。(5209）は脚部に２段からなる８つの透孔があり、(5210）は４つの透孔がある。また（5211）は５～７段、５列からなる透孔を備える。

甕は口縁部形態をみると、「く」の字状に屈曲し、口縁端部に面をもつ（5212）、口縁端部が下方にのびる（5213）、緩やかに屈曲し口縁端部が上下にのびる（5214）、「く」の字に屈曲し受け口状口縁をもつ（5215）がある。(5212・5213）はペースト状に煤が付着し、(5214・5215）は外面全体に煤が付着する。

〔第15面関係土器集積部〕(5217)　調査区西端で検出した、土器集中部からの出土。壺で、球形の体部をもつ長頸壺である。調整は内面はハケ調整、外面はタタキ後ヘラミガキを施す。体部下半部に外側から打ち欠いた穿孔がみられる。生駒山西麓産。

〔第15面関係流路Ｓ061170〕(5218～5230)　調査区西半部で検出した、南東－北西主軸の流路からの出土。壺（5218・5219）、鉢（5220・5221）、高杯（5222）、甕（5223～5227）、底部（5228～5230）がある。(5219・5225・5228～5230）は生駒山西麓産。

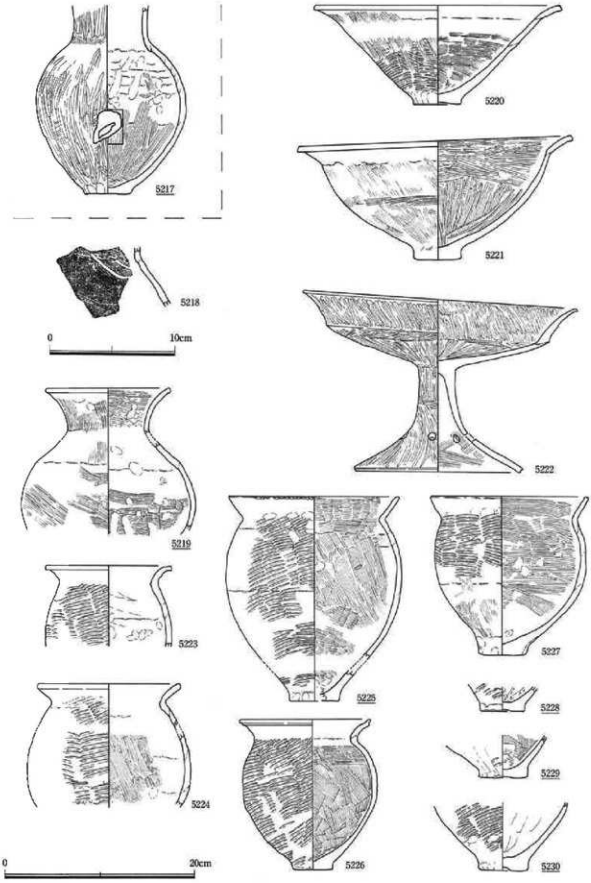
壺は緩やかに曲線的に外反する口縁をもつ広口壺（5219）と、壺の体部片（5218）がある。(5218）は肩部に棒状工具によって描いた記号文を施す。内面全体が煤ける。(5219）は内外面ともにハケ調整を施す。口縁部から体部にかけて黒斑がみられる。

鉢は大形品で、逆円錐台の体部に外方へ開く口縁部をもつ（5220）と、内湾する体部に外方へ開く口縁をもつ（5221）がある。調整は、内面にハケ調整を施す（5220）と、ハケ調整後ヘラミガキで仕上げる（5221）がある。外面をタタキ後ハケ調整で仕上げる（5220）と、ハケ調整を施す（5221）がある。(5220・5221）は体部外面に黒斑がみられる。

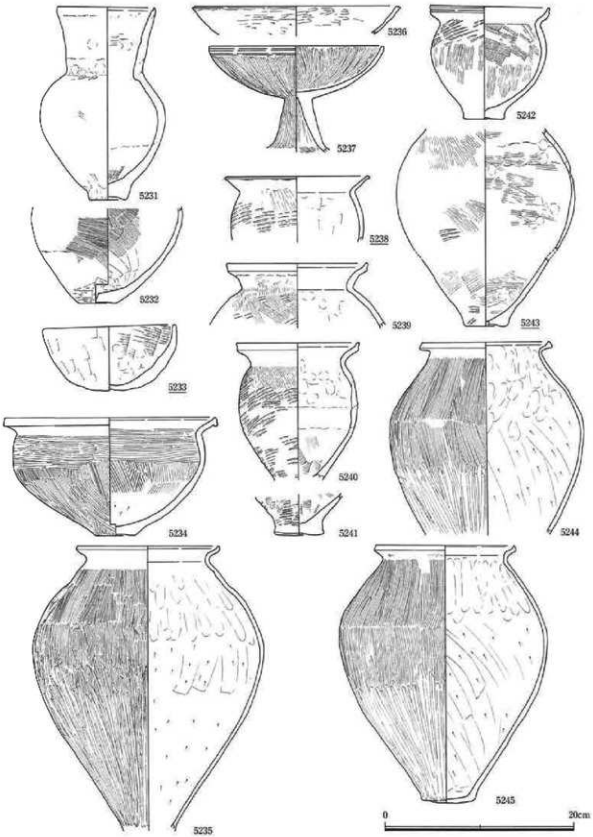
高杯（5222）は、稜の屈曲が強い有稜高杯である。脚部に４つの透孔を呈する。

甕は口縁部形態をみると、緩やかに屈曲し端部に小さな面をもつ（5223・5224）と、内湾気味に立ち上がり端部に面をもつもの（5225・5227）、緩やかに屈曲し端部に擬凹線をもつ（5226）がある。底部形態をみると、突出する底部をもつ（5225～5227）と、ドーナツ状の底部を残す（5228～5230）がある。(5223・5224）は外面が煤ける。(5225・5226）は外面に液体がふきこぼれた痕跡があり、体部下半に煤が付着する。

〔第14面関係諸遺構〕(5231～5245)　第14面上において、調査区の東半部と西端部で分散状態的に検出した、土器だまりないし完形の状態で出土した土器、および炭混じりの土坑Ｓ061147からの出土品が



第15図関係〔S061171（5217）、S061170（5218～5230）〕
図227　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－17（99－6区：遺構・包含層出土）



第14面関係〔S061147（5236）、その他（5231～5235・5237～5245）〕
図228　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－18（99－6区：遺構・包含層出土）

ある（図202～204参照）。これらは、いずれも同一遺構面で類似した状況で検出できたため一括して概要を述べる。(5233・5238・5243）は生駒山西麓産。

壺（5231）は口縁部と体部のくびれが明瞭で、外傾して直口する口縁と球形の体部と、ドーナツ状の底部を残す長頸壺である。調整は内外面ともにハケ調整をナデ消す。(5232）はおそらく壺の底部であり、底部外面にヘラケズリを施す。

鉢は椀形で粗製の（5233）と、内湾する体部に外方へ開く口縁をもつ（5234）がある。(5234）は内外面ともにハケ調整後丁寧なヘラミガキを施す。(5233）は底部裏面に黒斑がみられる。(5234）は内外面にペースト状の煤が付着する。

高杯（5236・5237）は椀形であり、(5237）は逆円錐台の脚部をもつ。調整をみると、(5236）は外面にヘラケズリを施し、(5237）は内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げる。

甕は口縁部形態が、「く」の字状に屈曲し、端部に面をもつ（5238）と、「く」の字に屈曲し受け口状口縁をもつ（5235・5239・5240・5242・5244・5245）がある。調整は外面にタタキ後ハケ調整を施す（5238～5243）と、ハケ後ヘラミガキを施す（5235・5244・5245）がある。(5235・5244・5245）は胎土に角閃石を含み、肩部に最大径をもつ体部形態をもち、調整は内面をヘラケズリ、外面体部上半部にハケ調整、下半部にヘラミガキを施すことから、讃岐地域の下川津Ｂ類土器に分類でき、讃岐産土器に位置づけられる。

〔第９面関係炭混じり地点Ｓ061120〕(5246）　調査区東端部で検出した、炭混じり地点からの出土。甕で、「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端部がやや内湾気味におわる。体部中央に最大径をもち、突出しない平底をもつ。調整は内面にヘラ状工具によるナデを施し、外面はタタキを施す。

〔第９面関係土坑Ｓ06473〕(5247～5251）　調査区東端部付近で検出した、平面方形状の中形土坑状部からの出土（図205参照）。高杯（5247）、甕（5248～5251）がある。(5248～5251）は生駒山西麓産。

高杯（5247）は、柱状の長い裾の広がりの大きな脚部形態をもつ。脚部に４つの透孔を備える。

甕（5249～5251）は口縁部がすべてタタキ出しした後、粘土接合による製作技法を用いる。内面に粘土紐接合痕が目立ち、外面調整はタタキを施す。

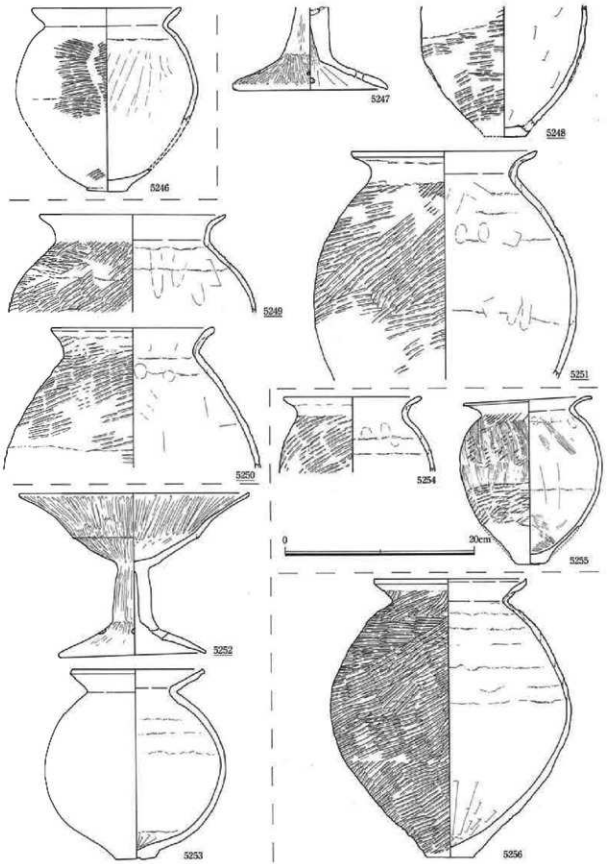
〔第９面関係土坑Ｓ06952〕(5252・5253）　調査区西半部で検出した、平面方形状の中形土坑からの出土（図206参照）。高杯（5252）と甕（5253）がある。(5252）は生駒山西麓産。

高杯（5252）は、稜の屈曲が強い有稜高杯である。柱状部の長い裾の広がりの大きな脚部形態をもち、４つの透孔を施す。甕（5253）は、「く」の字状に屈曲し、口縁端部が肥厚する。体部形態は球形でドーナツ状の底部をもつ。

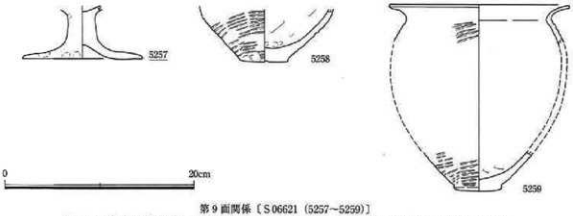
〔第９面関係土器集積Ｓ06950〕(5254）　調査区西半部で検出した、土器だまりからの出土（図207参照）。甕で、口縁部形態は、緩やかに外反し口縁端部が丸くおわる。外面調整のタタキが頸部までおよぶことから、タタキ出し手法による口縁部の形成が考えられる。

〔第９面関係土器集積Ｓ061008〕(5255）　調査区西端部で検出した、土器だまり（ほぼ１個体分）からの出土（図207参照）。甕で、口縁部形態は、「く」の字状に外反し口縁端部がわずかに下方へ肥厚する。突出しない平底をもつ。調整は、内面にハケ調整、外面はタタキ後ハケ調整を施す。

〔第９面関係土器集積Ｓ061009〕(5256）　調査区西端部で検出した、土器だまり（ほぼ１個体分）からの出土（図207参照）。甕で、口縁部形態は、「く」の字状に屈曲した受口状である。口縁部の製作技法



第9面関係〔S061120（5246）、S06473（5247～5251）、S06952（5252・5253）、S06950（5254）、S061008（5255）、S061009（5256）〕
図229　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－19（99－6区：遺構・包含層出土）



第9面関係〔S06621（5257～5259）〕
図230　弥生時代後期～庄内式期土器実測図一20（99－6区：遺構・包含層出土）

は、タタキ出した後、粘土を接合する。体部形態は胴中位部に最大径をもち、突出しない底部を呈する。内面に粘土紐接合痕が目立ち、外面調整はタタキを施す。外面に煤が付着する。

〔第9面関係溝S06621〕（5257～5259）　調査区東半部で検出した、溝からの出土。高杯（5257）、甕（5258・5259）がある。（5257）は生駒山西麓産。

高杯（5257）は大きく裾が広がる粗雑な脚部をもつ。

甕（5259）の口縁部形態は「く」の字状に外反し口縁端部に面をもつ。甕（5258・5259）の底部形態は突出しない平底を呈する。底部（5258）の底面には籾圧痕がみられる。また底部内面の一部が煤ける。

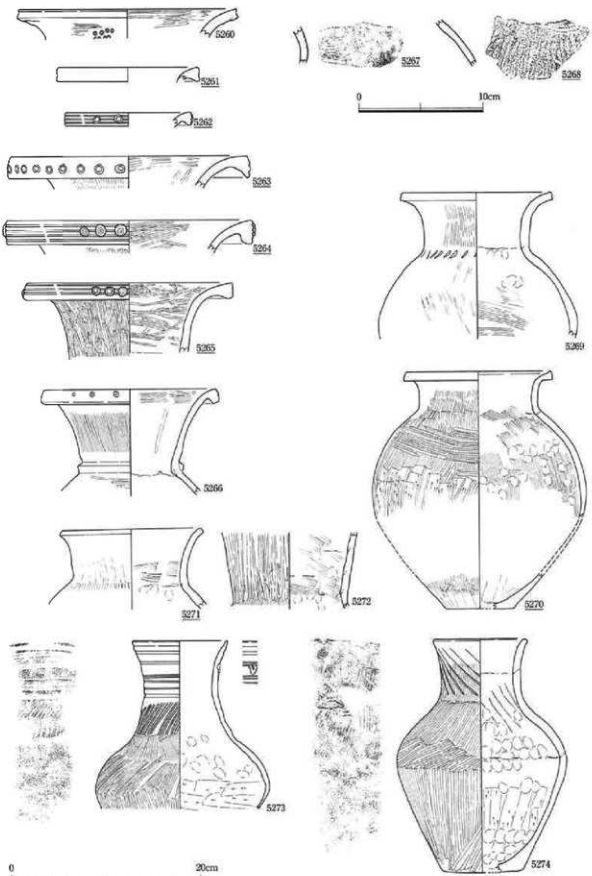
g．99－6区包含層ほか出土

〔第18面関係包含層ほか〕（5260～5289）　本包含層ほかから出土した土器には、壺（5260～5274）、高杯（5275～5278）、甕（5279～5289）がある。これら多くは、上述した集石遺構1に共伴した可能性が高いものである。（5261～5265・5267・5268・5270・5271・5277・5278・5286）は生駒山西麓産。

壺は、広口壺（5260～5266・5269～5271）、長頸壺（5272～5274）がある。広口壺の口縁部形態は、大きく外反して口縁端部に面をもつ（5260）、外上方にのびる垂下口縁をもつ（5261～5266）、直立する頸部に緩やかに外反する口縁をもつ（5269・5271）、直立する頸部に屈曲する口縁をもち、口縁端面が若干肥厚する（5270）がある。頸部に円形竹管によるスタンプ文を施す（5260）、口縁端面に円形竹管浮文を付す（5262～5266）、肩部に記号文（5267・5268）や刺突文（5269）を付すものがある。（5262）は口縁部内面、（5264～5266）は円形竹管浮文部の竹管文部分と擬凹線部分にそれぞれ赤色顔料が残る。（5266）は頸部下に突帯をめぐらす。（5273・5274）の調整は、内面体部下半部にヘラケズリを施し、外面ハケ後にヘラミガキを施す。頸部には擬凹線と刻目状文様（5273）や、刻目状文様（5274）を施す。（5273）は、このような特徴的な体部形態や文様、さらには胎土（下川津B類）の特徴から讃岐産土器と考えられる。なお、（5373）の頸部には、胎土中に含まれていた籾の圧痕が、器表面がはがれ露出状態になっている。（5269・5270・5273）は外面の一部に黒斑がみられ、（5274）は外面が煤ける。

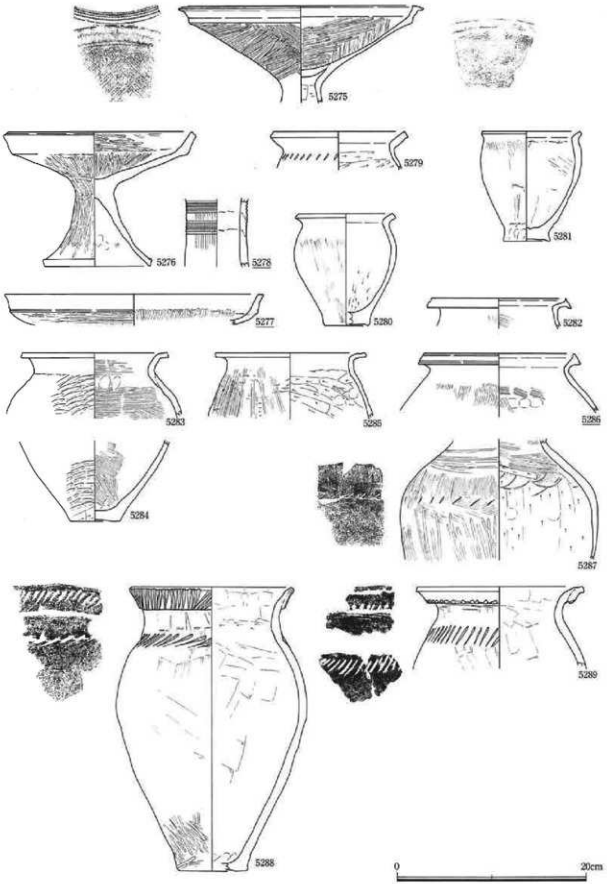
高杯は、内湾気味に立ち上がり短く外反し口縁端部が肥厚する（5275）、皿形の杯部が上方に立ちあがる（5276）がある。脚部（5278）は、沈線部分に赤色顔料が残る。（5275）は胎土に角閃石を含み、特徴的な杯部形態や内外面調整に放射状のヘラミガキを施すことから、讃岐系土器と考えられる。

甕は、「く」の字状に屈曲し口縁端部に面をもつ（5279～5281）、「く」の字状に屈曲し口縁端部が上下に肥厚する（5282・5286）、頸部から上方に立ち上がり外反する口縁をもつ（5283・5285）、体部から緩やかに外反し粘土貼付口縁をもつ（5288・5289）がある。調整は、内面にヘラケズリを施す（5279・



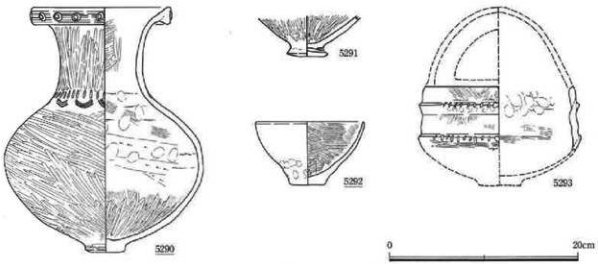
第18面関係包含層ほか（5260～5274）

図231　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－21（99－6区：包含層出土）



第18面関係包含層ほか（5275～5289）

図232　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－22（99－6区：包含層出土）



第15面関係包含層ほか（5290～5293）
図233　弥生時代後期～庄内式期土器実測図一23（99－6区：包含層出土）

5280・5285・5287)、板状工具によるナデで仕上げる（5281・5288・5289)、ハケ調整を施す（5282～5284・5286）がある。なお内面に、調整工具端部があたったと考えられる痕跡が線刻文状を呈する（5287）もある。外面はタタキやハケ調整を施すものが多くを占めるが、ヘラミガキ後ハケ調整のあとに列点文を加える（5279）や、板状工具によるナデの後、肩部に列点文を施す（5288・5289）など、他地域産の特徴をもつ土器の存在が目立つ。特に、(5288・5289）は、刻目のある粘土貼付口縁をもち肩部に列点文を施す形態と施文の特徴や、胎土に4㎜大の円磨の進んだチャートが目立つこと等から、土佐産（「南四国型甕」）土器と判断できる（第7章第7節参照)。

〔**第15面関係包含層ほか**〕(5290～5293)　本包含層ほかから出土した土器には、壺（5290・5291)、鉢（5292)、手焙形（5293）がある。(5290・5292）は生駒山西麓産。

壺（5290）は、扁球形の加飾広口壺である。直立する頸部に屈曲する口縁をもち、口縁端部が肥厚する。口縁端面に擬凹線後、円形竹管浮文を付し、肩部にはヘラ原体を押し当てた刺突文と、波状文を施す。内外面倒部下半部に黒斑がみられ、内面全体が煤ける。壺底部（5291）は底部側面に焼成前の横位の貫通孔を備える。調整は内外面ともにヘラミガキを施す。底部裏面に籾圧痕が残り、黒斑もみられる。

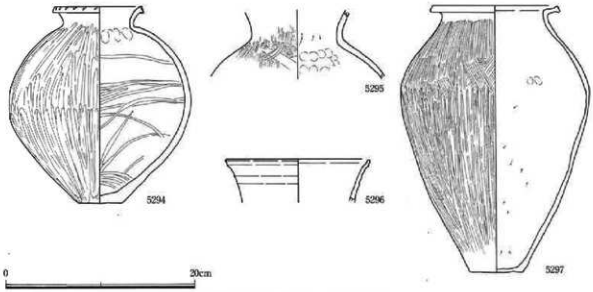
鉢（5292）は、椀形で口縁端部に段をもつ。底部は平底である。内面調整はハケ調整を施す。

手焙形の鉢部（5293）は、受け口状を呈する口縁をもつ。体部には2条の刻目突帯をもつ。覆部は残存しない。外面の一部に黒斑がみられる。

〔**第14面関係包含層ほか**〕(5294～5297)　本包含層ほかから出土した土器には、壺（5294～5296)、甕（5297）がある。すべて非生駒山西麓産。

壺は、広口壺（5294・5295）と、長頸壺（5296）がある。広口壺（5294）は球形の短頸広口壺である。頸部が短く外上方にのびる垂下口縁をもつ。口縁端部に刻目を呈し、調整は、内外面体部全体にヘラミガキを施す。広口壺（5295）は、肩部に棒状工具によって描かれた記号文を施す。

甕（5297）は、口縁部を「く」の字状に屈曲し、受口状の口縁をもつ。胎土に角閃石を含み、肩部に最大径をもつ体部形態をもち、調整は内面をヘラケズリ、外面体部上半部にハケ調整、下半部にヘラミガキを施すことから、讃岐地域の下川津B類土器に分類でき、讃岐産土器に位置づけられる。内外面で火



第14面関係包含層ほか（5294～5297）
図234　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－24（99－6区：包含層出土）

を受けたための剥離が目立つ。外面体部下半部に黒斑がみられる。

〔第9面関係等包含層ほか〕（5298～5302）　本包含層ほかから出土した土器には、壺（5298）、甕の体部（5299）、鉢（5300）、有孔鉢（5301）、高杯（5302）がある。（5298・5299）は、層順を厳密にはできない憾みがあるが流路中の砂層からの出土の可能性があり、（5300・5301）は推定で調査区中央付近からの出土、（5302）は上層遺構からの出土品である。

壺（5298）は、扁球形の加飾二重口縁壺である。直立する頸部に屈曲する受口状口縁をもち、体部中位部に最大径をもつ。突出する底部をもつ。口縁端面と肩部に粗雑な波状文を施す。調整は、外面体部全体にヘラミガキを施す。胎土は粗い粒子と片岩を含むことから阿波系の土器である可能性が高い。外面体部に火を受けたための剥離が目立つ。

甕（5299）は、体部上半部に最大径をもち、突出しないドーナツ状底を残す。調整は、内面を体部上半～中位部は板状工具によるナデで仕上げ、外面にタタキ後ハケ調整を施す。

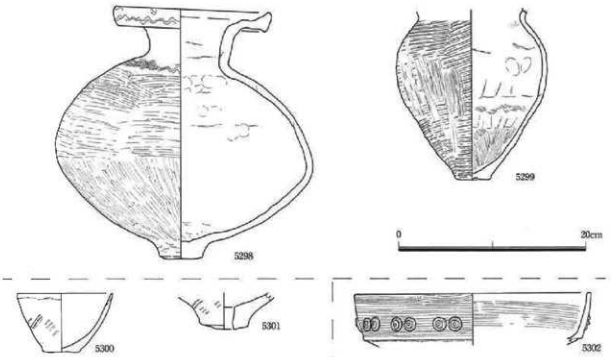
鉢は、椀形で突出しないドーナツ状底を残す（5300）と、有孔鉢の底部（5301）がある。調整は、内面をナデによって仕上げ、外面にタタキ後ナデを施す。

（5302）は、壺口縁部（あるいは高杯杯部）で、上方に立ちあがる口縁をもつ。口縁立ち上がり部に円形竹管浮文を付す。調整は、内外面ともにハケ調整を施す。

h．99－6区の遠隔地からの搬入土器に関して

上述のように本調査区の後期資料には遠隔地からの搬入土器が顕著であるので、簡単にその確認と整理をしておきたい。なお、ここでの「搬入土器」は、他地域の模倣土器や影響を受けた土器ではなく、本遺跡に確実に運ばれてきた土器をさす。確認できた遠隔地搬入土器の産地は、讃岐・土佐・阿波の各地域に該当する。以下に、産地別に各土器について述べておく。なお、土佐産土器と、讃岐産土器に関しての詳細は、他調査区や他遺跡の出土例を含めて後章の考察（第7章第6・7節）で記述する。

〔讃岐地域〕　遺構出土の土器では（5154・5169・5235・5244・5245）の5点、包含層出土の土器では（5273・5275・5297）の3点が該当する。これらはいずれも、色調が暗茶褐色系で胎土に角閃石を含むことから、讃岐地域の下川津B類土器に該当する。



第９面関係等包含層ほか（5298～5302）
図235　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－25（99－６区：包含層出土）

（5273）は肩部の張る体部から外反気味に立ち上がり、頸部に擬凹線や刻目状文を施す長頸壺である。弥生後期前半に位置づけられる。

（5154・5169・5235・5244・5297）は甕である。肩部に最大径をもつ体部形態をもち、調整は内面をヘラケズリ、外面体部上半部にハケ調整、下半部にヘラミガキを施す特徴をもつことから、弥生後期前半に位置づけられる。

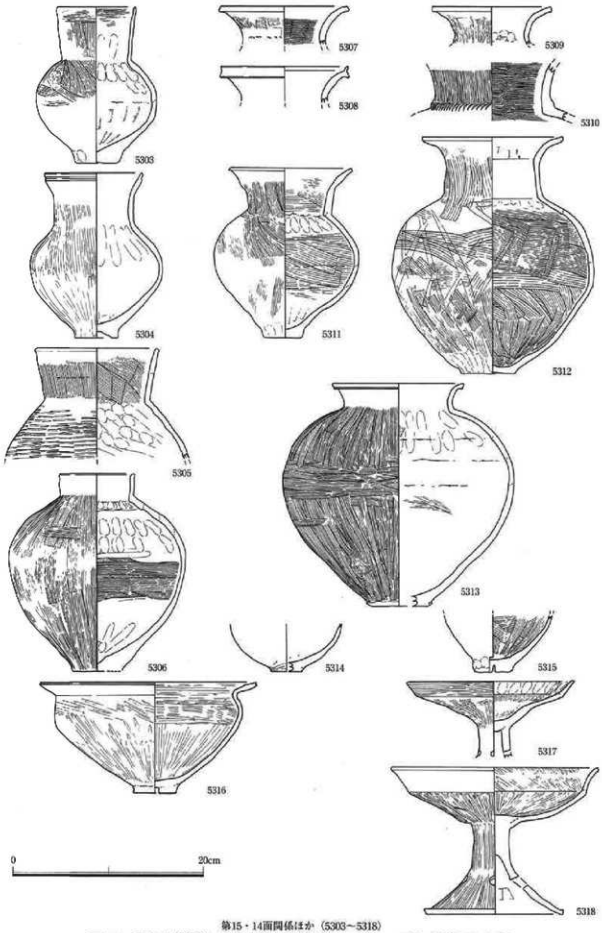
（5275）は高杯である。かつて「吉備系（産）」土器ともいわれていたが現在は讃岐産とされる資料（秋山2002ｅ）で、上面に水平面を備える特徴的な口縁をもつ。弥生後期前半に位置づけられる。

〔土佐（南四国）地域〕　（5288・5289）は甕である。胎土に粒子の粗いチャートを含み、口縁部の製作技法に粘土貼り付けを用いる特徴をもつことから、土佐地域の「南四国型土器」に分類できる。弥生後期初頭～前半に位置づけられる。近畿地方で、この時期の土佐産土器が明確に確認できたのは初見となり、貴重例である。

〔阿波地域〕　（5298）は広口壺である。色調が明赤褐色系で、胎土に結晶片岩を含む特徴をもつことから、阿波産と推定した。弥生後期後半～庄内式期に位置づけられる。　（河村・秋山）

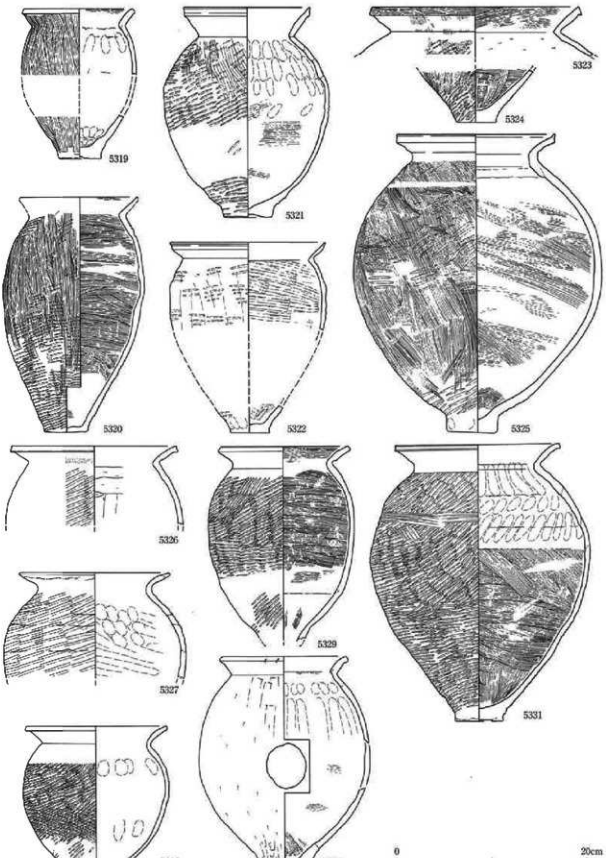
１．99－７区遺構・包含層ほか出土

本調査区では、第14面および一部第15面を中心として、ほぼ同時に形成されたと推定される状態で、完形に復原できる個体を多く含み、散在的ながら土器群が出土している。それらの一部は、上述した99－５区・６区の集石遺構１およびそれと同一面での土器群と同時に形成されたものも含むと想定できるが、層順からの検討では、その多くは集石遺構１が終息をむかえた後に形成された土器群ということができる。層順等からの比較では、本区の土器群は、99－５区の第16～14面、99－６区の第14面関係の土器群におおむね対応する資料となる可能性が高い。本区では、これらの土器群を一括して報告するが、個別の出土層順等に関しては、下記したとおりである。



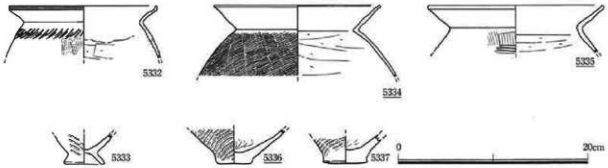
第15・14面関係ほか（5303～5318）

図236　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－26（99－7区：遺構ほか出土）



第15・14図関係ほか（5319～5331）

図237　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－27（99－7区：遺構ほか出土）



第9面〔S22150（5332・5333）〕、第2面〔S23001（5334）〕、第5面〔S23150（5335～5337）〕
図238　弥生時代後期～庄内式期土器実測図－28（01－2・3区：遺構出土）

〔第15・14面間係土器群ほか〕（5303～5331）　現地調査の遺物取り上げでは、（5305・5328）が第17・16面間、（5310・5327）が第16・15面間、（5309・5311・5318・5319・5324・5330）が第15面、（5307・5308）が第15・14面間、その他が第14面となっており、第14面上の土器群が主体を占める（図208～210参照）。このなかでは、第17～15面として取りあげた土器が、上述の集石遺構1と関連をもつ可能性がある資料にあたる。

（5303～5315）は壺である。（5310）が内外面をヘラミガキで仕上げる以外は、ほとんどの個体がハケで仕上げられている。また（5305）は体部外面にタタキ痕を残す。加飾はほとんど認められないが、（5304）の口縁部に凹線文がめぐり、（5310）の頸部の突帯の上に刻目が施される。（5312）の体部外面には斜格子状に籠目状品が接していた痕跡が残る。（5314）、（5315）は底部であるが、後者には底部中央にヘラ状工具で刺したような窪みが確認される。

（5316）は鉢、（5317・5318）は高杯である。（5316）は「く」の字状にひらく口縁をもち、内外面ともにハケをおこなった後、ヘラミガキで仕上げている。（5317）の杯部は口縁内面に指頭圧痕が残り、杯底部内面はハケで仕上げられる。口縁外面はハケがおこなわれ、杯底部外面もタタキの後ハケがおこなわれている。透孔の穿孔は（5317・5318）ともに4方向である。

（5319～5331）は甕である。（5319・5320・5322）などではタタキの後にハケをおこなっているものの、ほとんどすべての個体でタタキ痕が確認される。また、内面ヘラケズリをおこなう個体もほとんどない。タタキ痕はほとんどが水平から右上がりに施されるが、（5328）は体部下半の一部に左上がりのタタキ痕が観察できる。これは、右上がりのタタキの後におこなっている。底部が残る資料は少ないが、上げ底状を呈する土器は少ない。生駒山西麓産の資料はない。（5330）は外面を全体的にヘラケズリする、他とは異なる特徴をもった土器である。また、体部中央に直径4～5cmの大きな穿孔をもつ。（5330）は生駒山西麓産。

j．01－2区包含層ほか出土

〔上層遺構：第9面流路S22150〕（5332・5333）　古墳時代流路（自然流路1）中の混入品。（5332）は嬬部をつまみ上げておわる口縁をもつ甕である。内面にヘラケズリをおこない、外面はハケで仕上げる。外面の頸部下では、ハケが文様状に施される。（5333）は、低い脚台片であると思われ、外面をタタキで仕上げている。

k．01－3区包含層ほか出土

〔上層遺構：第4面溝S23001〕（5334）　古墳時代以降の溝中の混入品か。頸部付近までヘラケズリ

し、外面を細かいタタキで仕上げている。庄内式甕であると思われる。生駒山西麓産。

〔上層遺構：第５面流路Ｓ223150〕(5335～5337)　古墳時代流路（自然流路１）中の混入品。(5335)は、ややゆるやかに屈曲して広がる口縁をもつ甕である。内面を頸部まで、ヘラケズリをおこない、外面はタタキをおこなう。庄内式甕と考えられる。(5336・5337)はともに内面を板状工具でナデた痕が残り、外面にはタタキ痕が残る底部片である。(5335・5336)は生駒山西麓産。　(中川・秋山)

１．小結

本調査で出土した弥生後期から庄内式期にかけての土器群について、ここで簡単にまとめておきたい。まず、出土した土器のほとんどが弥生後期に属する資料であり、確実に庄内式期に属するものは99－１区・２区や01－２区・３区等で、主に上層の自然流路中の混入品としてわずかに確認される程度である。このため、今回の調査からは庄内式期の本遺跡の動向詳細をうかがい知ることは難しく、以下では弥生後期に重点をおいた検討をおこなう。また、出土した資料数がより充実している99－５区～７区を中心対象としたい。

99－５区～７区出土の土器群の特徴について、第一に、前述のように遺構と呼べるものはほとんど確認されず、集石遺構１やそれと同一面に土器が広範囲に分布して検出されたことがあげられる。集石遺構やそれに共伴する遺物類の形成に関しては、先述のように洪水堆積作用がある程度あったと想定されている。しかし、土器についてみるならば、ほぼ完形に復原される個体が多いことから、自然に堆積したというよりも、むしろ、人為的に持ち込まれて木製品や多くの石塊とともに配置ないし廃棄された土器群といえよう。

第二に、土器群の時期を検討すると、99－５区・６区の第18面関係を主体とする集石遺構１およびこれと関連する資料を中心として、大半の資料は後期前半（Ｖ－１～３様式前後）を中心とする土器群であることがわかる。つまり、後期前半の短期間でこの膨大な土器溜まりとでも呼べる状況が形成されたと考えられよう。しかし、集石遺構１形成の終息段階ないしその直後以降に形成されたと推定される、99－５区の第16～14面、99－６区の第14面関係、99－７区の第15・14面の諸資料では、甕における体部の球形化、底部径の小形化、外面調整の比較的細かいタタキの顕在化等が進行する様相をみせるなど、時期が下る傾向をみせるようである。特に99－６区では、上層の第９面関係の資料では、庄内式期に属する土器が確実に含まれるようになる。つまり、上層の庄内式期の土器はさておき、これらの集石遺構１を中心とする土器群資料は、短期間ではあるが一定の時間幅をもって形成されたものであるといえる。

第三に、これらの主体となる土器群においては、特に在地産と思われる甕などに、瀬戸内地域などからの強い影響をみることができる。加えて、先に少し紹介したように、遠隔地域からの確実な搬入品と考えられる土器が存在することは特筆すべきであろう。搬入品の詳細については後の論考（第７章第６・７節）を参照されたいが、主として讃岐や土佐といった地域の土器が確認される。これらの外来系土器の時期は、すべて後期初頭に位置づけられるものである。在地の土器そのものにみられる瀬戸内地域からの影響とあわせて考えると、当該期の河内地域は、より西方の地域との結びつきが強かったものと推定できる。なお、搬入品に関連して土器胎土について記しておくと、弥生前期・中期では比較的顕著な存在であった、東接地域からの搬入品である生駒山西麓産土器が、弥生後期では全体として約19％と少なくなっている。これらの変遷の様相をめぐっては後項（第７章第４節）を参照されたい。

以上のように、弥生時代後期の大量に検出された土器群は、遺跡内部でのその存在意味や当時の広範囲な交渉等を考えるうえで、非常に興味深い資料群であるといえよう。　(中川・河村・秋山)

（2）土製品（図239、表12・13、写真図版111）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

99－5区・6区・10区で、土器片転用円盤と焼粘土塊を検出した。99－5区・6区からの出土が主体を占めるが、これらの地区では上述したように集石遺構1やそれに隣接する箇所から多くの土器群が出土している傾向と合致する。それらの点数を、実測図掲載の有無と総計に区分して表12に示した。なお、焼粘土塊は99－6区から7点出土したが図化はおこなっていない。

以下、各資料の概要を述べるが、個別の出土遺構・位置に関しては特記しないかぎり表13を参照されたい。なお、本項の諸資料に関しては、出土状況から判断して、直下の弥生中期帰属資料との峻別が困難な個体も含まれている。

b．各区出土

〔土器片転用円盤〕（5338～5342）　すべて無孔品である。大きさに関しては、直径が2cm前後、4cm前後、6cm以上の3グループに分けられる。平均的な大きさは直径約4.5cm、厚み0.6cmである。表面にハケやヘラミガキを、裏面にナデやヘラケズリを施した土器片を転用する傾向がうかがえる。例えば、（5340）は両面ともヘラケズリが、（5341）は表面にナデ、裏面にヘラケズリを施されており、どちらも甕の体部片を転用して製作されている。また、（5342）は表面にヘラミガキ、裏面にヘラケズリが施されており、壺の体部片を転用して製作されたと思われる。これらは、99－5区・6区・10区の遺構（集石遺構1主体）や包含層からの出土。

c．小結

以上の資料のうち、その大部分を占める99－5区・6区出土品は、共伴土器から後期前半（V－1～

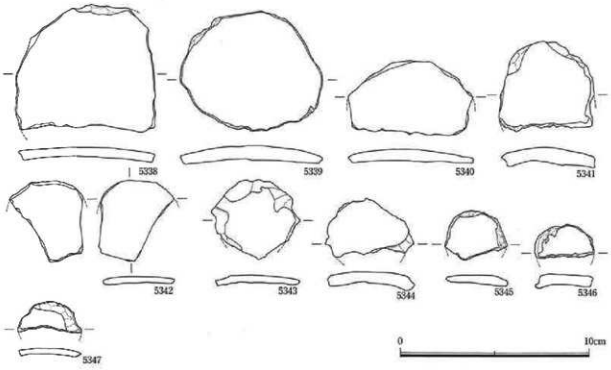


図239　弥生時代後期土製品実測図（99－5・6・10区：遺構・包含層出土）

表12　弥生時代後期～庄内式期土製品分類表

	地区	種類								計
		土錘	土製紡錘車	土器片転用有孔円盤	土器片転用円盤	焼粘土塊	球玉	土人形	その他、不明	
実測遺物	99-5				4					4
	99-8				5					5
	99-10				1					1
非実測遺物	99-5				4					4
	99-6					7				7
	99-10				1					1
計					15	7				22

表13　弥生時代後期～庄内式期土製品観察表

挿図番号	遺物番号	写真番号	調査区	出土遺構・層位	器種	法量					備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	直径(cm)	重量(g)	
239	5338	111	99-10	第9・8面間	土器片転用円盤	6.3	7.3	0.5			
239	5339	111	99-5	第16・17面間	土器片転用円盤	6.3	7.5	0.			
239	5340	111	99-6	第18面精査	土器片転用円盤	5.6	3.9	0.7			壺体部片
239	5341	111	99-6	第18面精査	土器片転用円盤	4.95	4.5	0.8			壺体部片
239	5342	111	99-6	第16・17面間	土器片転用円盤	4.3	3.8	0.4			壺の体部片か
239	5343	111	99-6	第16・17面間	土器片転用円盤	4.4	4.2	0.8			
239	5344	111	99-6	第18面精査	土器片転用円盤	4.7	2.9	0.8			
239	5345	111	99-5	第19・17面間	土器片転用円盤	2.8	3.3	0.5			
239	5346	111	99-5	第19・17面間	土器片転用円盤	1.7	3.7	0.6			
239	5347	111	99-5	第16面SD5179	土器片転用円盤	1.9	3.4	0.3			

3様式主体）に属すると想定できる。しかし、99－10区資料（5338）に関しては、層順等から中期後半にさかのぼる可能性がある。（宮田・秋山）

（3）木製品（図240～245、表36～39、写真図版114～117）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

弥生後期～庄内式期の木製品は、様々な器種が出土している。その多くは、99－5区～7区において大量の石材や土器等が出土した集石遺構1、およびそれとほぼ同時に形成された土器だまり等が検出できた面と同じ箇所で出土している。それ以外として、99－5区では、その上層に厚く堆積していた自然流路と考えられる砂層中、01－3区では方形周溝墓が埋没しつつある層順などからも検出している。

図面指示では原則として、前者の集石遺構1関連品を図240～242に、後者のそれ以外を図243～245に、器種区分して配列した。以下、器種ごとに概要を述べるが、各資料の樹種に関しては後掲の表36～39を参照されたい。

b．各区出土

〔農具〕（5348・5349・5365）　（5348）は、柄孔周辺に楕円形の低い隆起をもつ鍬の一部である。残存長13.3cm、残存幅9.5cmをはかる。柄孔の径は表面の方が大きくなっており、その角度から、身に対して鈍角に着柄されたものと推測される。また、裏面には泥除装着用と考えられる溝が1条つけられている。溝の幅は約2cmである。99－5区の第18面集石遺構1（S05190）からの出土。

（5349）は、竪杵もしくは横槌の敲打部と考えられる。残存長15.3cm、径7.3cmをはかる。端部を削ることによって成形している。99－6区の第18面集石遺構1関係層（第17・16面間）からの出土。

（5365）は、広鍬の一部である。残存長18.6cm、残存幅14.6cmをはかる。柄孔の周囲には、紡錘形状になると考えられる隆起の一部が残存する。柄孔の角度より、柄は鋭角に装着されたものと思われる。加工痕などは現状で認められない。99－5区の第8・7面間からの出土。

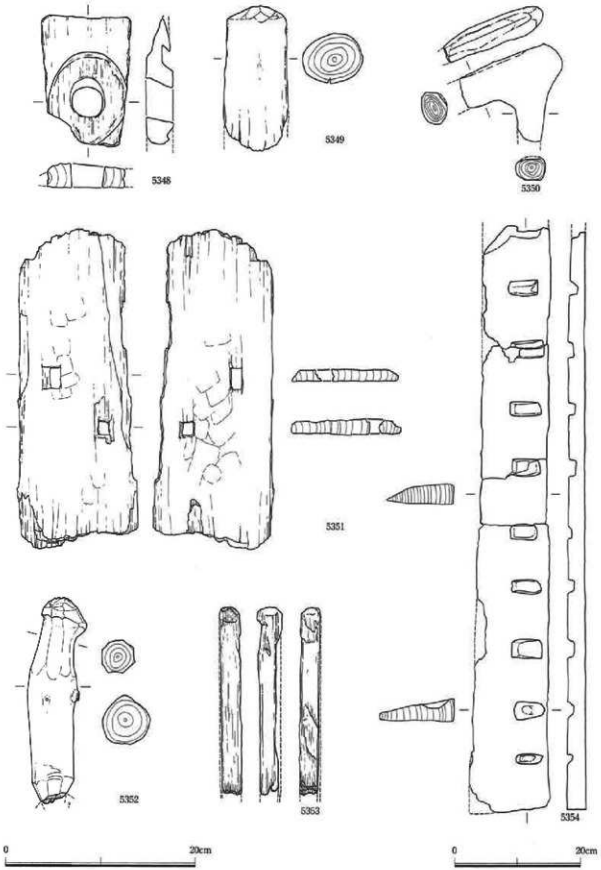


図240　弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－1（99－5・6区：遺構出土）

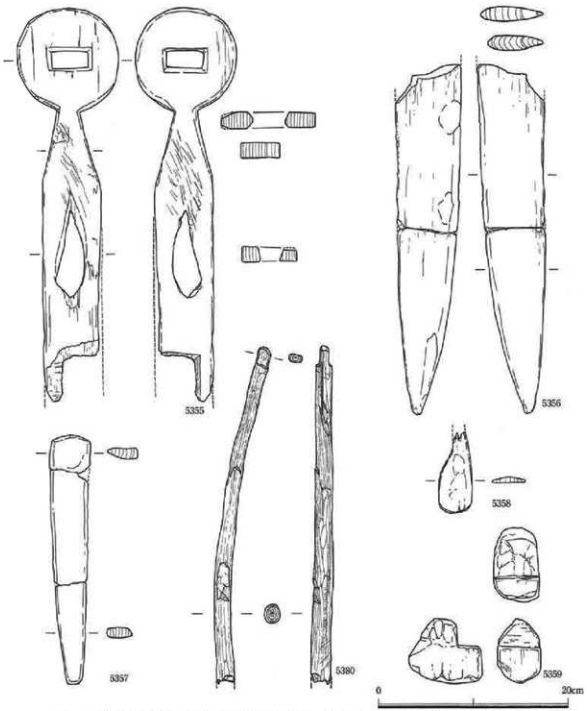


図241　弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－２（99－５・６区：遺構ほか出土）

〔工具〕(5350・5357・5359)　(5350) は、斧台と握りとを一つの材で作り出す、一木式柄柄である。斧身を装着するための溝が彫り込まれておらず、製作途中品であると考えられる。現状では加工痕の確認はできない。99－５区の第18面集石遺構１からの出土。

(5357) は、長さ16.5cmの棒状木製品である。全体的に丁寧な削りで成形されている。上部の一部が炭化している。楔として利用されたかと推測される。99－６区の第18面集石遺構１からの出土。

(5359) は、楔状に成形された木製品である。加工痕が確認される。99－６区の第18面集石遺構１からの出土。

〔狩猟具・武器〕(5380)　弓と考えられる。残存長35.7cmをはかる。弭は、先端の両側面を削り、扁

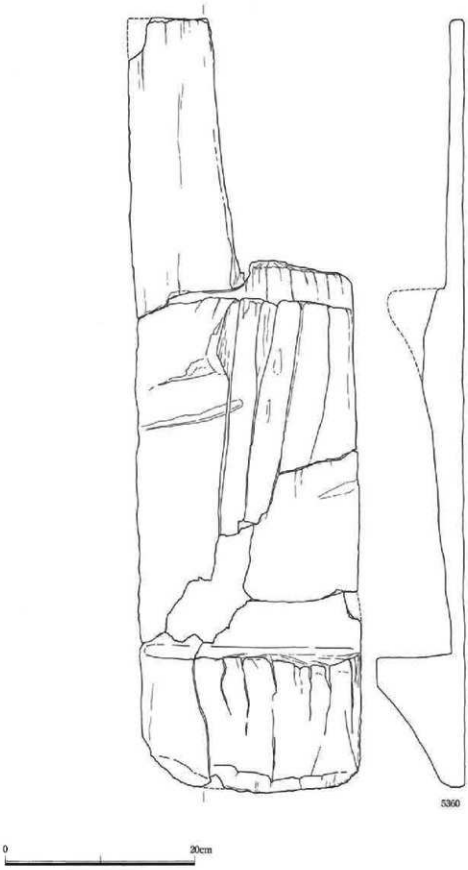


図242　弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－３（99－５区：包含層出土）

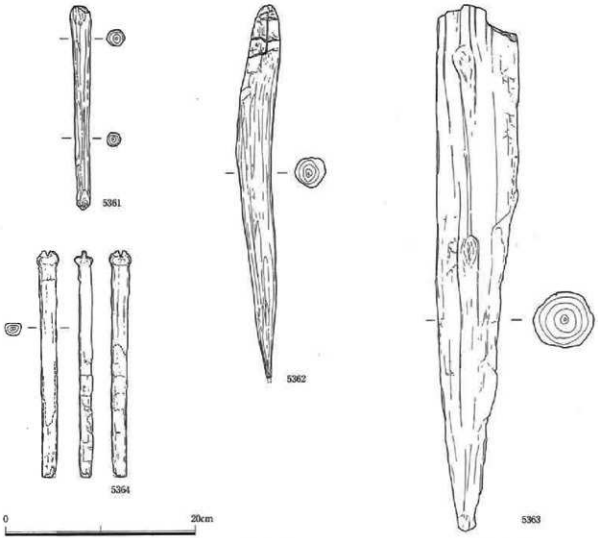


図243　弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－４（99－10、01－３区：包含層出土）

平な突起と傾斜した肩状の部分を作り出すタイプで、弦の先端に弦輪を作り、これを引っかけることで弦を装着したものと考えられる。全面に細かく削り加工を施しているが、表面はなめらかな仕上がりになっている。99－５区の第18面集石遺構１（Ｓ05190）からの出土。

〔紡織具〕(5353)　上部の一部を彫り込んでおり、残存長19.8cm、最大厚2.7cmをはかる。布巻き具の一部かと考えられる。加工痕は不明である。99－５区の第18面集石遺構１（Ｓ05190）からの出土。

〔食事具〕(5358)　匙状木製品の身の部分かと考えられる。身の図示左側は楕円形状にふくらむが、右側は直線的にのびる。柄の部分は僅かに残存するのみである。99－５区の第18面集石遺構１関係層（第18・17面間）からの出土。

〔容器〕(5370)　槽と考えられる。木目に直行する方向で短辺を、平行する方向で長辺を作り出している。長辺よりも短辺の方が厚く作られており、上面はより広く幅をもたせている。両短辺には小さく把手が作られている。底部は平坦であるが、底面中央には主軸に沿って、長さ約24cm、幅約3.5cm、深さ約0.3cmの溝が彫り込まれている。全体形の長辺長80.6cm、短辺長60.2cmと推定できるが、短辺長は把手の位置を中心として復原したものである。99－５区の第９・８面間（自然堆積砂層）からの出土。

〔建築部材〕(5360・5367～5369)　(5360)は、足かけが２段確認できる一木梯子である。残存長81.8cm、幅23.3cmをはかり、裏面は平坦に仕上げられている。足かけの間隔は約39cmであり、踏み面の奥

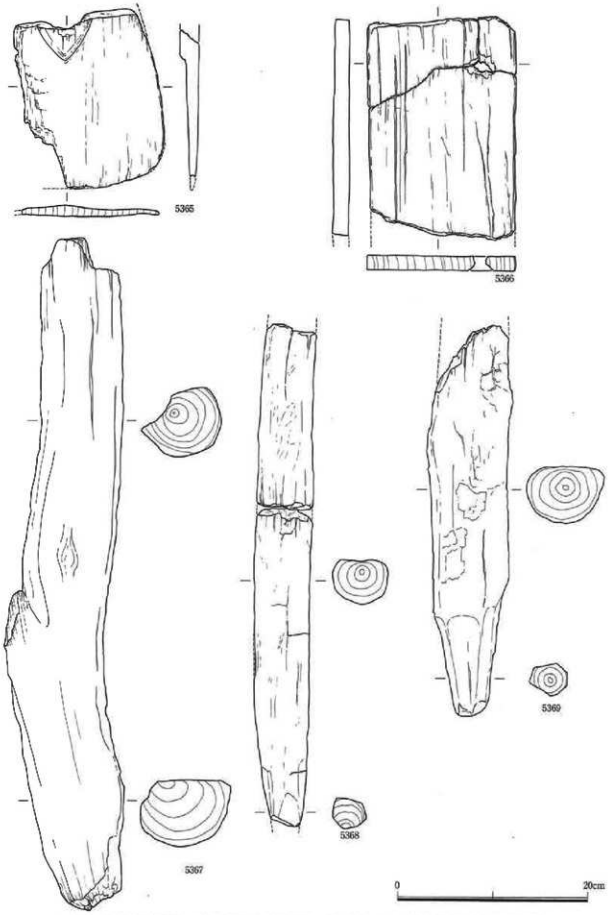


図244　弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－5（99－5・8区：遺構・包含層出土）

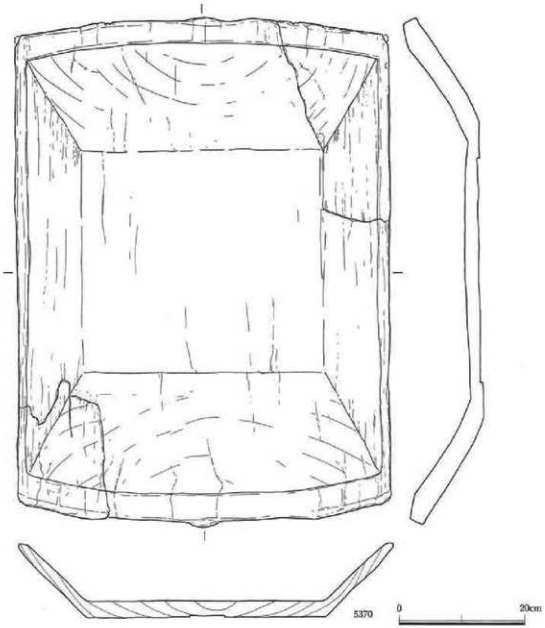


図245　弥生時代後期～庄内式期木製品実測図－6（99－5区：包含層出土）

行きは8cm程度である。その上面は板に対してほぼ直角に、下部は斜めに切り込まれている。全体的に加工痕は認めにくいが、下部先端に削り痕跡が確認できる。99－5区の第18面集石遺構1関係面からの出土（図179・191参照）。

（5367～5369）は同一構成物として出土した（本来の出土状況に関しては図195、写真図版31下を参照）。（5367）は、他の部材とともに櫂のような形状を構成する部材の一つである。横木状になって検出された。一部が炭化している。残存長70.7cmで、直径約7.0cmをはかる。（5368）は、（5367）と同じく櫂状のものを構成する部材である。（5367）に対してほぼ垂直な状態で検出された。下部先端は失われているが、削ることによって鋭くし、杭状にして使用したものと思われる。（5369）も同じく櫂の部材である。（5367）に対して垂直な状態で検出されている。（5368）に比して一回り太い木材を利用している。こちらも下部を削ることにより鋭く尖らせ、杭状にして使用している。表面の一部が炭化している。残存長41.3cm、最大幅8.6cm、最大厚6.0cmをはかる。これらは、99－5区の第9面からの出土。

〔用途不明品〕(5351～5357・5359・5361～5364・5366)　(5351)は、確認できるだけで2箇所に方形の穿孔をもつ木製品である。残存長32.8cm、残存幅12.4cmをはかり、厚さは1.2～1.5cmとほぼ均一に仕上げられている。表・裏面ともに加工痕が残る。99－6区の第18面集石遺構1（S061230）からの出土。

(5352)は、半球状の頭部をもつ有頭棒である。残存長21.0cm、最大径5.4cmをはかる。まず半球状に頭部を作り出した後、その直下を削る。反対側も同様の作りであったと推定される。頭部と先端部の間には加工がなされていない。また、これらの加工は鉄製工具でおこなわれたと考えられる。99－5区の第18面集石遺構1からの出土。

(5354)は、残存長93.1cm、幅12.8cmをはかり、10個以上の長方形の穴をもつ板状品である。断面は台形～三角形状を呈している。穴はすべて貫通せず、1～2cm程度くぼませただけである。99－5区の第18面集石遺構1からの出土（図188参照）。

(5355)は、円形の頭部をもつ板状品である。円形部分には横長長方形の穿孔がおこなわれており、これは表裏の両面からあけられている。また、体部にも不整形の穿孔が認められ、これは表面からのみあけられたようである。さらに、下部は欠損しているが、残存部から方形の穿孔がおこなわれていた可能性がある。残存長は41.5cmを測るが、その用途は不明である。類似資料に、奈良県桜井市芝遺跡例（清水1992）などがある。99－5区の第18面集石遺構1からの出土（図188参照）。

(5356)は、残存長36.8cmをはかる板状品で、厚みは1.5cm程度である。一方に向かって薄くなる形状をもつ。上方ほど幅が広くなり、もう少し上方まで続くようである。二股ナスビ形木製品の脚部の可能性もある。99－7区の側溝掘削時からの出土だが、推定層順から本項に入れた。

(5361)は、多角柱状に削り出された棒状品である。上面は炭化している。01－3区の第8・7面間（方形周溝墓S23200の周溝S23201の埋没過程層）からの出土。

(5362)は、残存長39.4cmをはかる杭状品である。先端部を削りだし、尖らせている。削りは上部から下部の順におこなわれている。上部は炭化している。01－3区の第8・7面間（方形周溝墓S23200の周溝S23201の埋没過程層）からの出土。

(5363)も、先端を細く削り出した杭状品である。01－3区の第8・7面間からの出土。

(5364)は、球体状の部分に2つの小さな突起が付く有頭棒である。全長23.9cm、球体部径2.3cm、棒状部厚1.3cmをはかる。突起部分は現状では2つに分かれているが、本来は間に孔を穿つ形状であった可能性もある。棒状の部分は、片面だけが平らになるように加工されている。下半部は炭化している。99－10区の第10・9面間からの出土。

(5366)は、残存長22.2cm、幅15.7cm、厚1.8cmをはかる。幅や厚さがほぼ均一に加工されていることから、何らかの板材であると考えられる。99－8区の第11面流路S08070からの出土。

c．小結

以上のうち、上述した集石遺構1およびそれに関連した層順・面で出土した資料は、(5348～5355・5357～5360・5380)で、これらは共伴土器群から後期前半（V－1～3様式前後）に属する。

それ以外の時期比定は次のようになる。(5356・5364・5366)も後期前半と推定したが、共伴土器の時期が特定できない層序関係等から、若干の可能性として中期後半にまでさかのぼることを考慮しておくべき資料である。(5361～5363)は、中期後半の方形周溝墓周溝の埋没過程層等から出土しており、後期前半に属する蓋然性が高いが、共伴土器資料からの特定はむずかしい。(5367～5370)は、後期前半の集石遺構1の形成が終了した後で庄内式期までの間に堆積した砂層等からの出土である。共伴土器の特定

も不可能なので、後期前半～庄内式期の時間幅内の帰属想定にとどまる。(5365) も同様の出土状況であるが、庄内式期層順に近い位置からの出土である。

上記の時期比定をふまえると、弥生後期の木製品では、99－5区・6区の集石遺構1関係面からまとまって出土している諸資料が注目できる。これらは、大量の石材や土器とともに出土したもので、使途が特定できない個体を含み、各種機能の製品がある。また、今回は全く図化できなかったが、同じ面から同様の状況で出土した木製品のうちには、小さな棒状のものでも人為的な加工がおこなわれたものが多数存在した。これらの状況は、遺構の性格を考えるうえで重要であろう。同様なあり方は、すぐ北側の東大阪市市教委の調査区でも確認されており、同報告書（東大阪市教委2002、ほか）では、祭祀的な側面を重視した解釈に到達されているが、今後、十分な検討が必要となる。

なお、今回報告した以外の雑木類等の樹種鑑定やそれに関する考察は、後掲の第7章第9節を参照されたい。

（中川・秋山）

（4）**石製品**（図246・247、表14・15、写真図版125）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

本項で取りあげる資料は、確実に弥生後期に帰属する資料以外に、所属時期が判然としないものも含む。ここで扱った資料は、表14に示したように12点あるが、石鏃・石錐のほかには製品はみられない。出土地点は、上述の集石遺構1関係面・層がみられた99－5区・6区を中心としている。その他の地区の資料は判然としないものが多い。

以下では、図示した遺物を中心にそれぞれの詳細にみていくが、図示した以外の資料を含め、個別資料の出土遺構・位置、大きさ、重さ、石材等に関しては表15に示したので、それを参照されたい。また、石製品の説明をおこなう際の、各面名称や器種内分類基準は弥生前期の項と共通させている。

b．各区出土

〔石鏃〕(5371)　「有茎型」。基部を欠損する。周縁のみに調整が施されており、左面の中央付近には自然面、右面には素材剥片の主剥離面を残す。

〔石錐〕(5372)　「V型」の石錐か。下半部を折損するうえ、新欠部分も多くみられることからその詳細は不明といわざるをえない。ただ、右面を中心に調整が施されていること、断面形がD字状を呈するなどの点から石錐の基部の可能性が考えられる。

〔剥片〕(5373)　やや縦長の剥片である。打面と端部に自然面が残る。側縁の一部に不連続な微細剥離痕がみられる。表面の上下端および腹面上端に剥離痕が認められることから、楔形石器のような用途も考えられる。

〔石核〕(5374)　厚手の剥片を素材とする。上面には自然面が残り、その一部には敲打痕が認められる。上下左右とも対になる剥離痕がみられることから両極打法（楔形石器）の可能性が考えられる。さらに、表面右側の剥離面には擦痕が認められ、そのような行為に用いられたのであろうか。

表14　弥生時代後期～庄内式期
石製品組成表

	後期
石鏃	1
石剣	0
石錐	1
スクレイパー	0
楔形石器	0
二次加工ある剥片	0
微細剥離痕ある剥片	1
剥片	3
微細剥片	0
石核	1
石庖丁	0
円盤状石製品	0
石斧	0
砥石	2
敲石	0
投弾状礫	0
その他	3
計	12

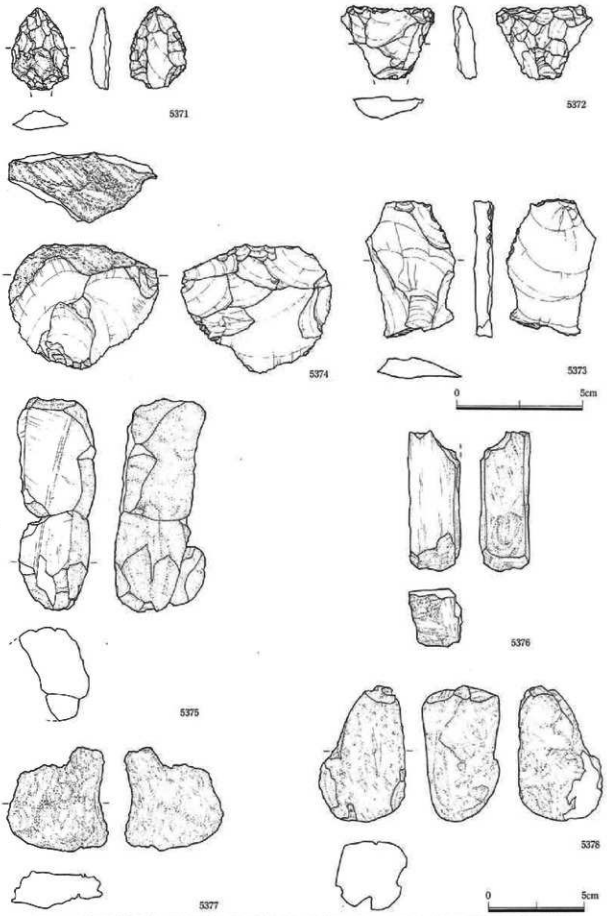


図246　弥生時代後期～庄内式期石製品実測図－1（99－5・6、01－3区：遺構・包含層出土）

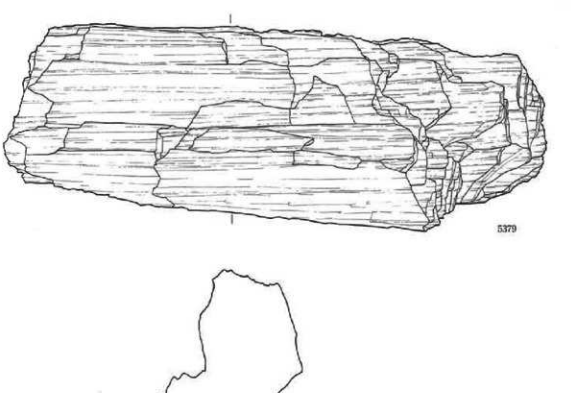


図247　弥生時代後期～庄内式期石製品実測図－2（99－6区：包含層出土）

〔砥石〕（5375・5376）　（5376）は、表面の全面、および裏面・上面の一部に擦痕が認められるが、折損している部分が多い。裏面・下面の一部分に自然面が残置する。（5375）は、被熱しており、また風化が著しいことから折損している部分が多くみられる。一部の面には、1条の浅い溝が残る。

〔軽石〕（5377・5378）　（5377）は破片である。片面には自然面が残る。（5378）は、正面には線状痕が顕著に認められ、上面は非常に平滑となっている。砥石のような用途も考えられる。

〔片岩〕（5379）　大形の滑石片岩。最大長43.5cm、最大厚11.4cm、重量7.4kgをはかる。現地調査の取り上げ時に破損したので、本来はさらに大形品であった。素材として遺跡内にもち込まれた可能性もあるが判然としない。

c．小結

上記のうち、99－5区・6区で集石遺構1に関連する状態で出土した（5375・5376・5377・5379）等は共伴土器から、また（5378）は層順から、後期前半に属する可能性が高い。しかし、それ以外の資料は、本来は中期ないし前期に帰属する製品が、上位層に混入した公算が高い。

また、本項で取りあげた石製品は、弥生前・中期と比べると極端に少ない。弥生後期に属すると考えてよい資料にかぎると、他時期との相違点としては軽石2点と大形滑石片岩の存在であろう。軽石の1点（5377）は、一部に平滑面を有していることから、砥石の可能性が高いことは先に述べたとおりである。大形片岩（5379）は、石器素材として持ち込まれた可能性もある点で、非常に興味深い資料といえる。しかし、製作予定品には主として石庖丁や石斧等が想定できるが、それらの石器製作が急減してしまっている時期であり、また、石器素材としてならこれほど大きさな石塊としての搬入は非合理であることから、評価は流動的である。同様の大形片岩は、東大阪市教育委員会の調査（東大阪市教委2002）でも重量12.3kgもあるものを含め数点出土しており注意される。　（手島・秋山）

表15　弥生時代後期～庄内式期石製品観察表

調査区番号	遺構番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	最大長(cm)	折損長(cm)	最大幅(cm)	折損幅(cm)	最大厚(cm)	折損厚(cm)	重量(g)	石材	産地	自然	形状	打面	折損	時期	備考
125	246	5371	99-6	第18・17面間	石鏃		3.3	2.4		0.8		4.6	Sn		有	凹凸	無	有	後？	中期の可能性も有
125	246	5372	01-3	第4・3面間	石鏃		2.9	4		0.9		8.1	Sn		無		無	有	後？	石鏃基部？弥生前・中期の可能性有
125	246	5373	99-5	S05190	MF	5.4		3.6		0.9		15.24	Sn	金山	有	凹凸・すじ	自	無	後	中期の可能性も有？
125	246	5374	99-6	流路最下層	Cr	5		8		2.7		67.3	Sn		有	すじ	自	無	後	敲打痕有 弥・中期の可能性も有
	246	5376	99-5	S05119③	敲石	11.20			4.00		4.80	238.5	砂岩						後	被熱、有溝
	246	5376	99-6	S061184	敲石		7.5		2.7		3.2	125.1	石墨片岩		有		無	有	後	
125	246	5377	99-5	S05190(S05241)	砥石		5.6		5.3		2	10.2	輝石		有			有	後	
125	246	5378	99-1	第18面	砥石	7.3		5.5		4.1		25.7	輝石						後	
	247	5379	99-6	18面以下	片岩	43		16.3		11.2			滑石片岩						後	
			99-1	S01150	Fl	2.9		4.05		0.32		2.5	Sn				縁		弥	ローリング
			99-2	S02150下層	Fl		3.05		5.65	1.41		15.8	Sn						弥か	ローリング
			99-1	S01150	Fl		3.5	3.9		1.8		12.06	Sn		有	爪・半坦	自	有		

＊器種の記号は以下のとおりである。

RF:二次加工ある剥片　MF:微細剥離痕ある剥片　Fl:剥片　Ch:微細剥片　Cr:石核

＊石材　Sn:サヌカイト

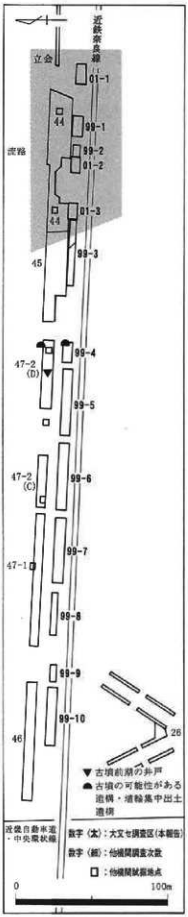


図248　古墳時代遺構面全体図

第６節　古墳時代の様相

１．遺構面と遺構（図248～253、写真図版36・37）

（１）概要

本節では、主として布留式期以降を扱う。

弥生時代後期前半段階では調査区中央の低地部で、遺構は検出されないものの、茶褐色シルト～粘土層の上面から多量の遺物が散乱した状況で検出された。

その後も灰色シルトと有機物を大量に含む茶褐色シルトが互層となって堆積し、浸水した状態を繰り返しながらも、この環境で人間が活動していた痕跡がみてとれる。しかし、その後は01－１区などごく一部の地域で弥生時代後期後半～末（庄内式期前後）の水田遺構が検出される他は遺構は皆無となる。

この互層の灰色シルトを覆う大量の淡褐色の極細粒砂から粗粒砂や礫が、01－１区から99－３区までの東西幅およそ130mにわたって堆積する。99－１区や99－２区ではこの砂層によって弥生時代中期包含層まで浸食を受けている。堆積は薄いところで50cm、厚いところで約２mにも及ぶため、地表面は一挙にT.P.0.5～1.5mまで上昇する。

99－３区の中央部付近でこの砂層堆積の境界（西肩）を検出し、広大な自然流路であることが判明した。

この砂層中には弥生時代後期から古墳時代等の多くの遺物を含む。遺物から推定できる自然流路の時期の上限は古墳時代前・中期である。上記調査区をまたがる同一の大きな自然流路

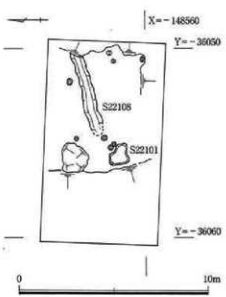


図249　古墳時代遺構面平面図－１
（01－２区：第７面）

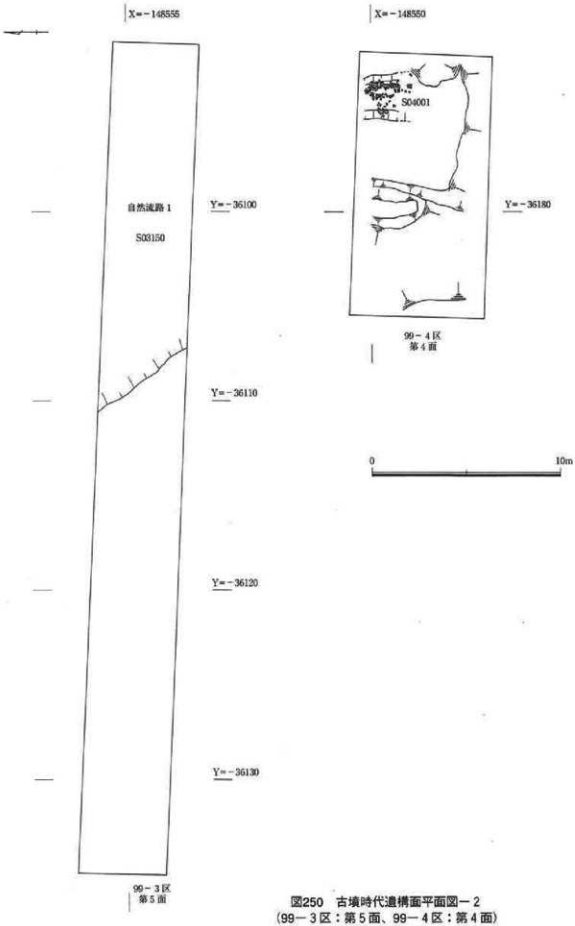
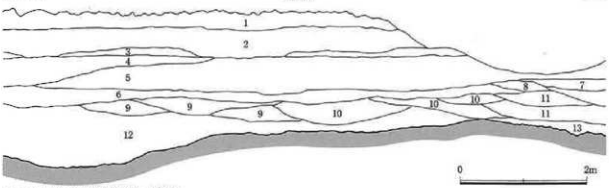


図250　古墳時代遺構面平面図－2
（99－3区：第5面、99－4区：第4面）



1　10YR4/3にぶい黄褐色礫粒砂～板礫礫
2　7.5Y5/2オリーブ色粗粒砂～板礫礫、ラミナあり
3　N5/灰色中粒砂～粗粒砂、板礫礫をわずかに含む、ラミナあり
4　7.5Y6/2灰オリーブ色中粒砂～粗粒砂、細礫を含む
5　7.5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂～板礫礫、細礫を含む、ラミナあり
6　10Y6/2オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂、細礫を含む、ラミナあり
7　7.5Y6/1灰色細粒砂～礫粒砂、板礫礫を含む
8　7.5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂、細礫を含む
9　10Y5/1灰色礫粒砂～粗粒砂、細礫を含む、ラミナあり
10　7.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～礫粒砂、細礫を含む、ラミナあり
11　5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～礫粒砂、板礫礫を含む、ラミナあり
12　7.5Y5/1灰色粗粒砂～板礫礫、1～2cmの礫を含む、ラミナあり
13　10Y4/1灰色シルトに10Y6/1灰色粗粒砂をラミナ状に含む

図251　01－2区第9面自然流路1（S22150）断面図

の氾濫したものとみなし、調査時は01－2区ではS22150、99－1区ではS01150、99－2区ではS02150、99－3区ではS03150という名称を与えたが、整理報告の際に自然流路1という名称を付与した。従って、遺構としては「自然流路1」として説明するが、遺物の説明は個々の区毎に行うため区別の遺構番号も併記する。

（2）各区の様相

古墳時代の主たる遺構としては、自然流路1と99－4区で検出した埴輪集積遺構があげられる。自然流路1は複数調査区にまたがって検出したため、全体的な概要はここでとりまとめて記述する。

〔自然流路1（S01150・S02150・S22150・S03150)〕　平面図では流路の西端を検出した99－3区のみを掲載した（図250)。東端は99・01調査区では未検出であり、さらに東に続く。従って、これらの調査区で判明している限りで東西幅130m以上、最深2m超の大流路であり、連続断面の検討から99－2区を最深部とすると思われる。この流路には弥生時代後期後半から古代の遺物を含むが、主体となるものでは古墳時代前・中期を中心とする年代が考えられる（図254・257および図211・238・280参照)。それより後の時代の遺物のほとんどは最上層からの出土である。それら遺物の出土層順等から、この自然流路1は古墳時代前半期において主体的に流れており、最終的には一部古代まで及んだと推定できる。

この流路に該当するものとしては、旧大和川から分岐した分流路として小阪合分流路が考えられる。小阪合分流路がさらに北上して若江分流路、瓜生堂分流路、西岩田分流路と分岐する流路にあたると（財）東大阪市文化財協会の松田氏、別所氏らは所見を述べている（東大阪市文化財協会1999c)。このうちの瓜生堂分流路を検出したと考えて差し支えないだろう。自然流路1の断面図は01－2区の南壁で部分的に示した（図251)。

01－2区以東、99－3区の中央以西では自然流路1の影響を受けずに古墳時代以降は地盤が安定する。そのため古墳時代から中世までの遺構・遺物が同一遺構面で検出される。遺物の出土範囲は01－1区から99－7区まで及ぶのだが、後世の攪乱・削平を受けているため、古墳時代と明確に規定できる遺構は少なく、01－2区第7面で検出した遺構と99－4区の第4面で検出した埴輪集積遺構S04001にとどまった。

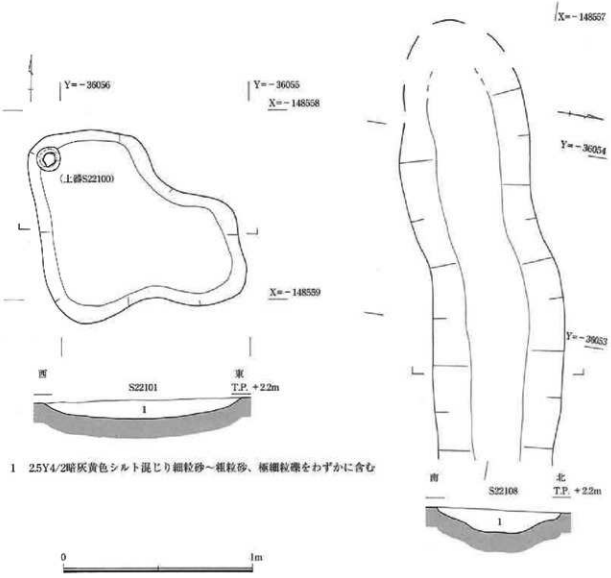


図252　01－2区第7面遺構平面図・断面図

1）01－2区

a．第9面

〔自然流路1（S22150）〕　上面を検出した（図251）。全体に粗粒砂から細礫までのやや粗い砂礫が堆積し、斜行するラミナがみられる。非常に速い流れにより一時的に大量の土砂がもたらされた様子がわかる。

b．第7面

本調査区の西側は、第2面、第3面から掘りこまれた大きな溝のために古代の遺構面は削平されており、東側のみ遺存する。古墳時代の自然流路により運ばれてきた土砂の堆積で、地表高はT.P.2.0mまで上昇する。地盤が安定したところに古代から中世の遺構が検出される（図249）。

第7面で古墳時代以降の遺物を含む遺構をわずかながら検出した。遺構は溝と不整形のやや大形の土坑、小形円形土坑などである（図252）。

〔土坑S22101〕　東西方向を長軸とする不整形の土坑で幅1.1m、深さ0.1mをはかる。土坑S22101の

北西隅からは土師器の壺が正置の状態で出土した。壺は口縁部から頸部を失っており、体部のみ残存する。古墳時代中期前後の広口壺かと思われる。

〔溝Ｓ22108〕　北東から南西にのびる溝で、長さ4.7m、幅0.7m、深さ0.15mをはかる。

他の遺構やベース土中にも若干の遺物を含む。第７面は古墳時代～古代の遺構面と推定する。

２）99－３区

本調査区では１面の遺構面を検出した。

ａ．第５面

〔自然流路１（Ｓ03150)〕　西肩端を、Ｙ＝－36110付近を南東から北西にのびる形状で検出した（図250)。概要で述べたように、この流路は小阪合分流路の分岐流路としてこれより東約150mの範囲幅で流れ、それよりまだ東にのびると予想される。

３）99－４区

本調査区では１面の遺構面を検出した。

ａ．第４面

第４面は主に中世の遺構を検出したが、調査区の北東端に浅い溝状の窪みがあり、この中から円筒埴輪や形象埴輪、古墳時代の土器が集積した状態で出土した。この遺構を埴輪集積遺構Ｓ04001とする。

〔埴輪集積遺構Ｓ04001〕　調査区北東端で幅３ｍ、深さ0.3ｍ程度の浅い窪みを検出した。この窪みの中もしくは周辺から多量の埴輪片が出土した。埴輪は上からの土圧などで原形をとどめず、破片の状態で出土した。ただし、その出土状況を見ると南北に平行する二列状をなす（図253)。

また、これらの破片には同一個体と思われるものが含まれており、一つ一つに番号を付けて取り上げ接合したところ、各同一個体片がほぼまとまって出土していることが分かった（図259)。実測可能なだけでも円筒埴輪が52点、鶏形埴輪が１個体あった。そのうちの円筒埴輪５個体が、タガを１段から２段もちほぼ全周する程度まで復原できた。埴輪、土器とも５世紀後半を示す古墳時代中期の遺構である。

同一遺構面で検出した中世の溝などからも同時期の埴輪が多数出土している。

この埴輪集積遺構の出土状況を考えると、近隣に古墳の存在が想定できる。この遺構面自体は上層からの削平を受け、地形的に古墳の存在を確認することはできなかった。しかしながら、埴輪集積の存在を確認できたことで、周辺に埋没（削平）古墳があった可能性がより高くなった。

（３）小結

古墳時代の遺構は希薄である。しかし、円筒埴輪片は99－３区から99－５区を中心として広く出土しており、後述するように、時期的に東の方がやや新しくなる特徴を備える埴輪が分布するなど、時期幅をもつことが分かった。つまり、埋没古墳も複数基広がっていた可能性をもつ。

また、断面のみならず平面でも小阪合分流路の分岐流路を検出できたことは大きな意味をもつ。堆積学的にもこの流路の氾濫による堆積が地表を安定させ、古墳時代以降低湿地ではなくなり、人間の住みやすい環境をもたらし、集落を繁栄させる大きな起因になったことは紛れもない。この自然流路１のさらに東を調査することで、この流路の東西幅（規模）を確認できると考えられる。　（川瀬）

２．遺物

（１）土器（図254～257、写真図版101・102)

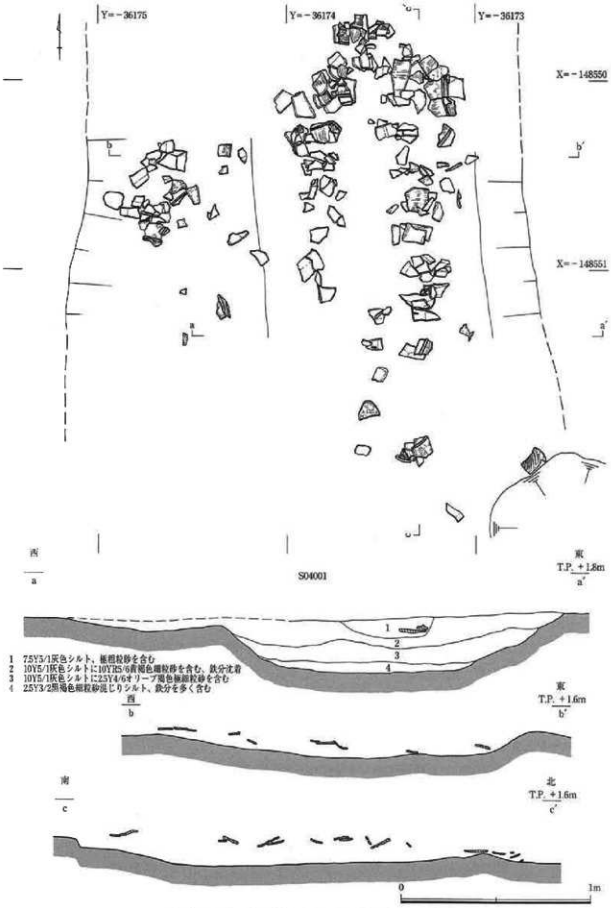
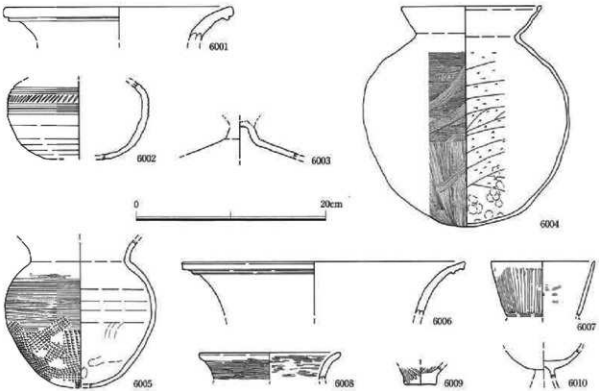


図253　99－4区墳輪集積（S04001）出土状況図



99－1区　第7～2面（6001）、第2・1面（6002）、側溝（6003）、第9面〔自然流路1（S01150（6004））〕、
99－2区　第4・3面（6005）、第5面〔自然流路1（S02150（6006～6010））〕

図254　古墳時代土器実測図－1（99－1・2区：遺構・包含層出土）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

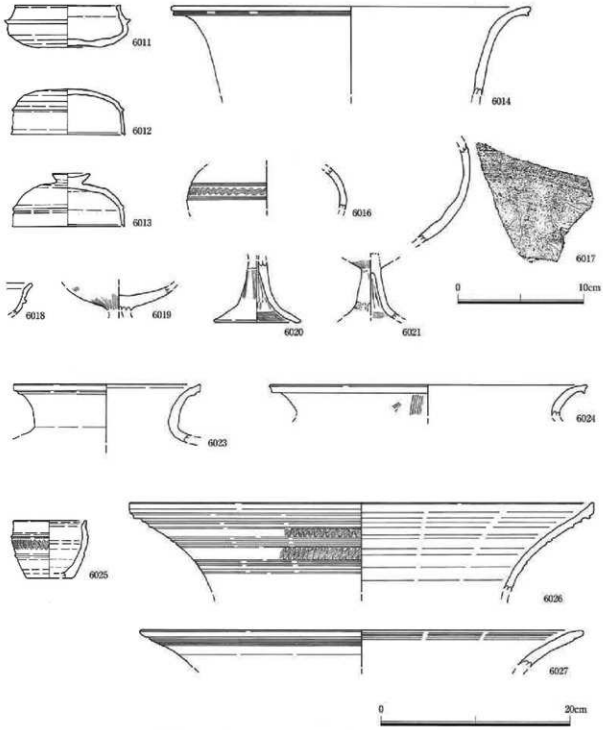
古墳時代の土器の出土量は全調査区を通じてもコンテナ2、3箱と少ない。99－4区での出土が最も多く、次いで99－5区、99－7区であり、それ以外も99－1・2区、01－1・2区と調査区の東半分に集中する。出土状況は99－4区を除いては、すべて後世の遺構や自然流路、包含層に含まれるもので古墳時代の明確な遺構に伴うものはない。

99－4区では多量の埴輪が出土した埴輪集積遺構S04001で、溝状の窪みに埴輪と共に一定量の古墳時代の土器が出土した。それ以外は中世の溝S04040など後世の遺構に含まれるものがほとんどである。流路の砂層中から出土した一部の土器以外はもとの器形をとどめるものはなく、S04040以外でまとまった状況で出土したものもない。ほとんどは破片が広く散乱した状態で出土しており、接合して個体を復原できたものも少ない。

b．99－1区遺構・包含層出土

〔包含層〕（6001～6003）　古墳時代から中世に相当する包含層と側溝からの出土遺物である。（6001）は須恵器壺口縁部。（6002）は須恵器壺体部。口縁部から頸部と底部を失う。体部上方に直線文と刺突文を施す。（6003）は土師器高杯脚部。杯部は失われているが、内湾して開く器形をとると思われる。

〔第9面自然流路1（S01150）〕（6004）　古墳時代の小阪合分流路の分岐流路に相当する大規模な自然流路の99－1区での呼称がS01150である。完形の布留（Ⅱ）式甕である。内面は右上がりのケズリ、外面はタテハケのちヨコハケを施す。外面には煤が付着し、内面底部には炭化物が付着していたので、実際に使用されていたことが分かる。なお、器面に付着していた炭化物を用いた炭素14年代測定で、



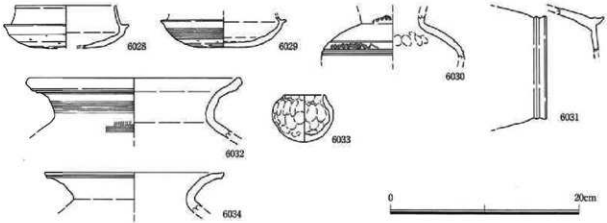
第2面〔S04001（6011～6014、6016～6021）〕、S04040（6023～6027）〕
図255　古墳時代土器実測図－2（99－4区：遺構出土）

1790±40 ^{14}C BPというデータが得られている（後掲第8章第6節参照）。

c．99－2区遺構・包含層出土

〔包含層〕（6005）　中世に相当する包含層からの出土。須恵器壺で約1/2残存する。口縁部は欠損する。内面はタタキ当て具の痕跡がわずかに残るが、きれいにナデ消されている。外面はカキ目と格子タタキを施す。

〔第5面自然流路1（S02150）〕（6006～6010）　自然流路中の遺物であるため、摩耗を受けており、



99－5区 第3面〔Ｓ05090(6028～6030)、Ｓ05070(6031)〕、第2面〔Ｓ05030(6032)、Ｓ05010(6033)〕、99－7区 第6面〔Ｓ07001(6034)〕
図256　古墳時代土器実測図－３（99－５・７区：遺構出土）

調整などは不明瞭になっている。(6006) は須恵器甕口縁部。(6007) は土師器壺口縁部。外面はタテミガキを施す。(6008・6009) も土師器甕口縁部と同底部。(6010) は土師器高杯の杯部の下半部にあたる。

d．99－４区遺構出土

〔第４面埴輪集積遺構Ｓ04001〕(6011～6014・6016～6021)　Ｓ04001は浅い窪みに多量の円筒埴輪・朝顔形埴輪片がかたまって出土した集積遺構である。埴輪とともに須恵器・土師器も一定量出土したので、図化できるものを示した。(6011) は杯身、(6012・6013) は杯蓋と高杯蓋である。杯身は口縁立ち上がり部が内傾し、高杯蓋のつまみが大きく、口縁部も長い。いずれも５世紀後半頃、ＴＫ23～ＴＫ47型式前後に相当する。(6014) は須恵器甕口縁部。(6016) は須恵器壺の体部である。直線文と櫛描き波状文をめぐらす。(6017) は須恵器壺の体部片。(6018) は須恵器高杯の口縁部片。(6019～6021) はいずれも土師器高杯の杯部下半もしくは脚部である。Ｓ04001の遺物はいずれも５世紀後半前後に属する。

〔第３面溝Ｓ04040〕(6023～6027)　いずれも中世の溝からの出土である。(6023・6024) は須恵器の壺と甕の口縁部。(6025) は把手付椀の一部だが、把手は失われている。櫛描き波状文をめぐらす。(6026・6027) は大形の甕の口縁部。(6026) は直線文の間に櫛描き波状文を２段めぐらす。

e．99－５区遺構出土

〔第３面井戸Ｓ05090・Ｓ05070〕(6028～6031)　99－５区Ｓ05090・Ｓ05070は中世から近世の井戸だが、古墳時代の遺物を含む。(6028・6029) は須恵器杯身である。(6029) は体部にカキ目が残り、かえりも (6028) に比べるとかなり内傾する。(6030) は須恵器壺の肩から体部。(6031) は須恵器樽形 瓶の一部である。

〔第２面溝Ｓ05030・Ｓ05010〕(6032・6033)　99－５区の中世の溝からの出土。(6032) は須恵器甕口縁部。(6033) は土師器のミニチュア鉢で完形である。てづくねで内面に指頭圧痕が強く残る。

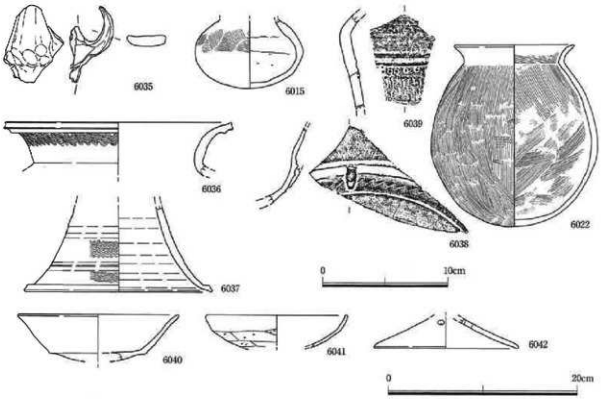
f．99－７区遺構出土

〔第６面土坑Ｓ07001〕(6034)　99－７区中世期大形土坑からの出土。須恵器甕の口縁部である。端部に沈線をめぐらす。

g．01－１区包含層出土

〔包含層〕(6035)　土師器甑の把手である。

h．01－２区遺構・包含層出土



01－1区 側溝（6035）、01－2区 第4面〔S22030（6036～6038）、S22025（6039）〕、
第7面〔S22101（6015）、S22108（6040）〕、第9・8面〔自然流路1（S22150（6022・6041・6042））〕
図257　古墳時代土器実測図一4（01－1・2区：遺構・包含層出土）

〔第4面溝S22030・土坑S22025〕（6036～6039）　S22030、S22025はともに中世期の溝もしくは土坑である。（6036）は須恵器甕の口縁部である。頸部に櫛描き波状文をもつ。（6037）は須恵器高杯の脚部で、2段の櫛描き波状文を施すが、小片のため透孔は遺存しない。壺の口頸部となる可能性も若干ある。（6038）は須恵器高杯の杯部である。（6039）は長方形のスカシを有する、器台の筒部片である。筒部から杯部への変化点にわずかに櫛描き波状文が残る。脚部に波状文と竹管文がみられることから新羅系の流れをくむ古い型式の須恵器といえる。

〔第7面S22081〕（6040）　土師器有段高杯の杯部である。

〔第7面土坑S22101〕（6015）　土師器の広口壺と推定できる個体が出土している。頸部より上を失う。

〔第9・8面自然流路1（S22150）〕（6022・6041・6042）　古墳時代の自然流路に含まれていた遺物である。（6022）はほぼ完形の土師器甕で、体部下半がふくらむ。内外面ともハケを施す。（6041）は土師器高杯の杯部で外面をヨコケズリする。（6042）は土師器高杯の脚部で透孔をもつ。

i．小結

古墳時代の土器の多くはおおむね5世紀後半代に集約され、同時に出土している埴輪とも大きく時期を違えない。器種組成も雑多で、近隣に埋没古墳もしくは集落のあったことが示唆できる。　（川瀬）

（2）埴輪（図258～276、表16、写真図版128～132）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

今回の発掘調査において、99－1区～7区から埴輪片が総数約20コンテナ分出土している。特に99－

図258　埴輪タガ形状分類図・タガ突出率算出図

3区・99－4区・99－5区からの出土が多く、3区から1コンテナ、4区から3コンテナ、5区から12コンテナが出土した。その他の地区からの出土点数は各区とも1コンテナに満たない状況であった。

このなかで古墳時代の遺構から出土した埴輪片は99－4区の埴輪集積遺構S04001の出土遺物のみであり、当遺構出土の埴輪片の一部は比較的大形片にまで接合することができた。しかし、それ以外の埴輪片は中世の遺構（主に溝・土坑）からの出土であり、同一遺構からの出土品であっても接合するものは皆無であった。また、各調査区での埴輪片の出土点数をみていくと、底部・口縁部の破片が胴部片に比べ圧倒的に少ないことから、これら埴輪片が後世（中世）の土地開発によって溝や土坑内に廃棄されたものであると考えられる。

今回の報告では、99－4区においてのみ遺構と包含層出土にわけて提示し、その他の地区は包含層からの出土として一括で提示する。出土地区など、遺物の詳細については観察表（表16）において記載する。出土した埴輪片のうち、口縁部片と底部片、形象埴輪に関しては全てを図化し、胴部に関しては大形片については可能なかぎり図化し、円筒埴輪の口縁部・胴部・底部、朝顔形埴輪の口縁部・口縁部付近～頸部の順に掲載している（朝顔形埴輪の胴部・底部は特定できないので円筒埴輪に含む）。形象埴輪については最後に全調査区を一括して提示した。

観察表で記載しているタガの形状は、タガの断面をM字・台形・低い台形・三角形の4種類に分け、便宜的に1～4まで順に数字をあてている。また、円筒埴輪のタガの突出率については、タガの高さをタガの幅（上下の粘土の接合痕跡の間）で割った数値であり、小数点以下は第2位を四捨五入している（図258）。

なお、円筒埴輪の時期については川西編年（川西1978）を用いる。

b．円筒・朝顔形埴輪（6043～6288）

〔99－1区・2区出土〕　（6043）は99－1区から出土。円筒埴輪胴部片、やや低い台形タガであり、外面にヨコハケが明瞭にのこる。円形のスカシ孔が入れられている。

（6044）は99－1区から出土。円筒埴輪底部片、外面のヨコハケは細かく、短い間隔で静止痕がみられる。

（6045）は99－2区から出土。朝顔形埴輪片、肩部と頸部のタガが残っている。タガの形状は三角形であり、タガ間にヨコハケがみられる。

〔99－3区出土〕　（6046～6051）は円筒埴輪口縁部片、口縁が直線的に立ち上がり端部を内側に折り曲げて成形するもの（6046・6047）、口縁がやや外反しながら立ち上がり端部面を外側にもつもの（6048・6049）、口縁が直線的に立ち上がり端面を外側にもつもの（6050・6051）がある。

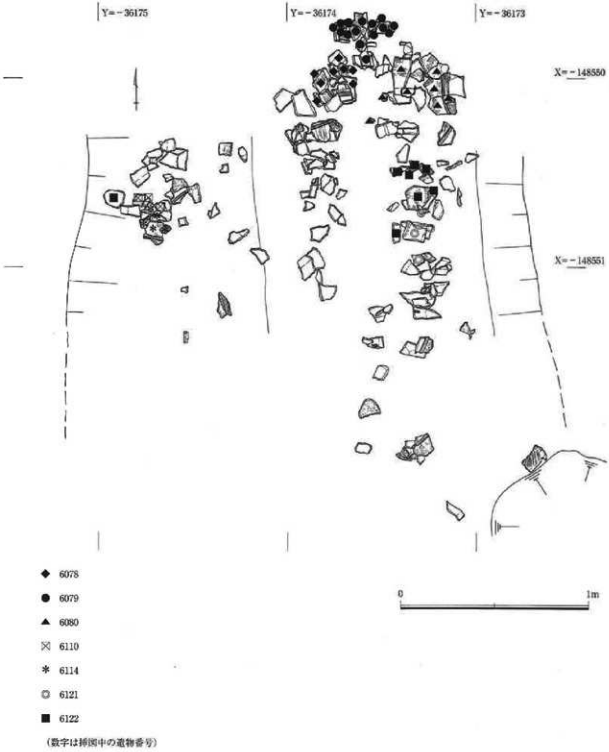


図259　99－4区埴輪集積（S04001）接合関係図

（6052～6065）は円筒埴輪胴部片。（6052～6058）はタガの形状が台形を呈し、外面にヨコハケが施されている。（6052～6054・6056～6058）には円形のスカシ孔が入れられている。タガ突出率は0.3～0.5である。（6059～6061）は、タガの形状がやや低い台形であり、二次調整としてヨコハケを施さないもの（6059・6060）がみられる。タガの突出率は0.2～0.3である。（6064）は円形のスカシ孔をいれ、外面にヨコハケを施している。（6065）は円形のスカシ孔をいれ、外面はタテハケで調整している。

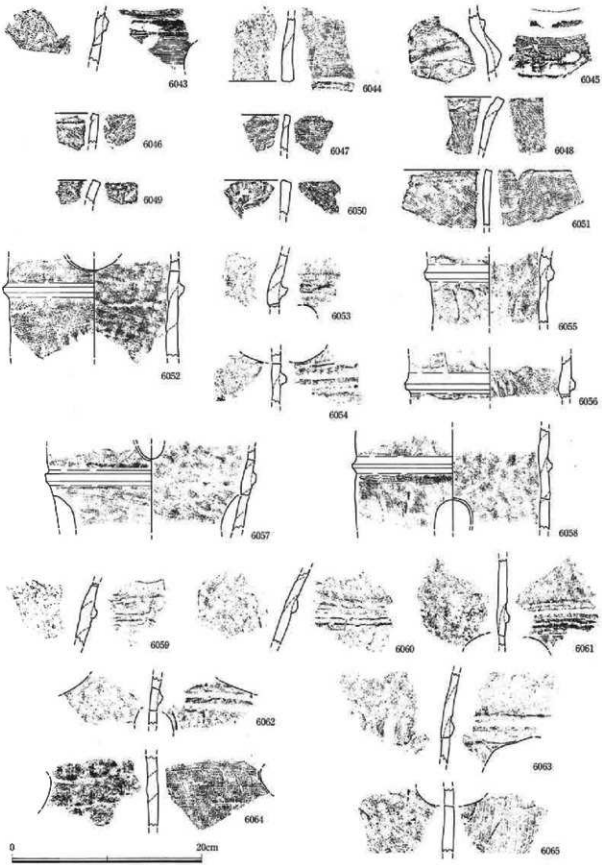


図260　古墳時代埴輪実測図－1（99－1～3区：遺構・包含層出土）

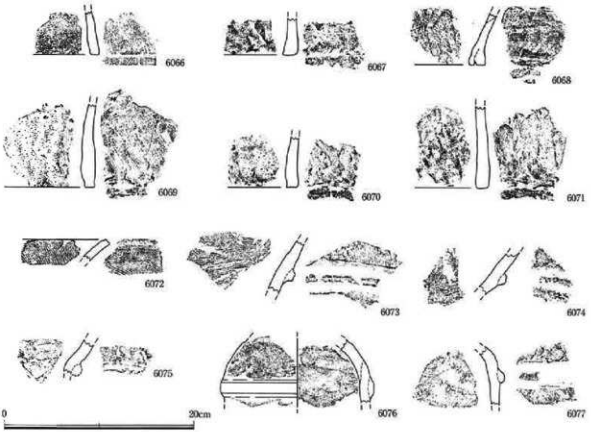


図261　古墳時代埴輪実測図－2（99－3区：遺構・包含層出土）

（6066～6071）は円筒埴輪底部。（6066）は底部がやや内側に立ち上がる。（6067）は底部外面に左上がりのハケ調整を施し、底部端部が内側にやや張りだし直線的に立ち上がる。（6068）は底部外面にタテハケののち粗いヨコハケを施し、底部が外反しながら立ち上がる。（6069～6071）は底部外面に左上がりのハケ調整を施し、底部が直線的に立ち上がる。

（6072～6077）は朝顔形埴輪。（6072）は口縁部片である。外面には左上がりのハケ調整を施し、そののち口縁端部をナデ調整で成形している。（6073～6075）は上部突帯片である。突帯の形状は（6075）については剥離しているため不明であるが、他のものについては台形である。外面は左上がりのハケ調整がなされている。（6076・6077）は肩部破片である。タガの形状は台形であり、（6077）は外面に左上がりのハケ調整がなされている。

〔99－4区埴輪集積遺構S04001出土〕　当調査区において、埴輪が多数検出された埴輪集積遺構S04001がある。この遺構からは、埴輪の他に同時期の須恵器などが出土しており、数少ない古墳時代の遺構である。よってこの遺構出土の遺物は、他の遺構のものと区別して記載する。この遺構内では破片の埴輪を接合した結果、比較的大形片にまで復原できたものが10点近くあった。その接合関係は図259に示した。

（6078～6092）は円筒埴輪口縁部。（6078～6080）は多くの破片が接合した個体である。いずれもタガの形状は台形であり、タガの突出率は0.3～0.4。（6078・6079）についてタガ間の間隔は約8cmである。（6078）は口縁がやや内湾して立ち上がる。（6079）は口縁が直線的に立ち上がる。（6080）は口縁が外反して立ち上がる。（6081・6082）はタガ部分も残る口縁部片であり、突出率は0.4である。（6081）は口縁端部を外反し、（6082）は口縁端部を内側につまみあげている。（6083～6087）は口縁端部を内側につま

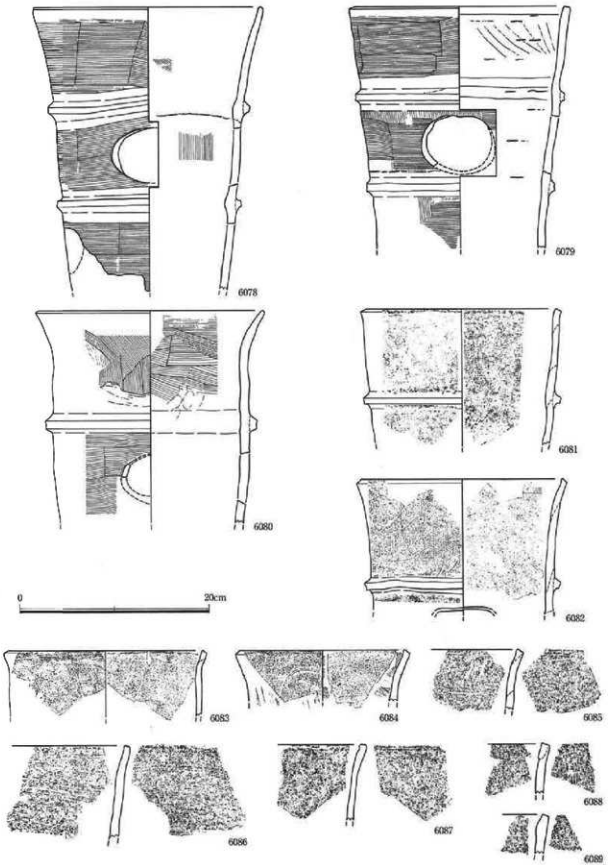


図262　古墳時代埴輪実測図－３（99－４区：遺構出土）

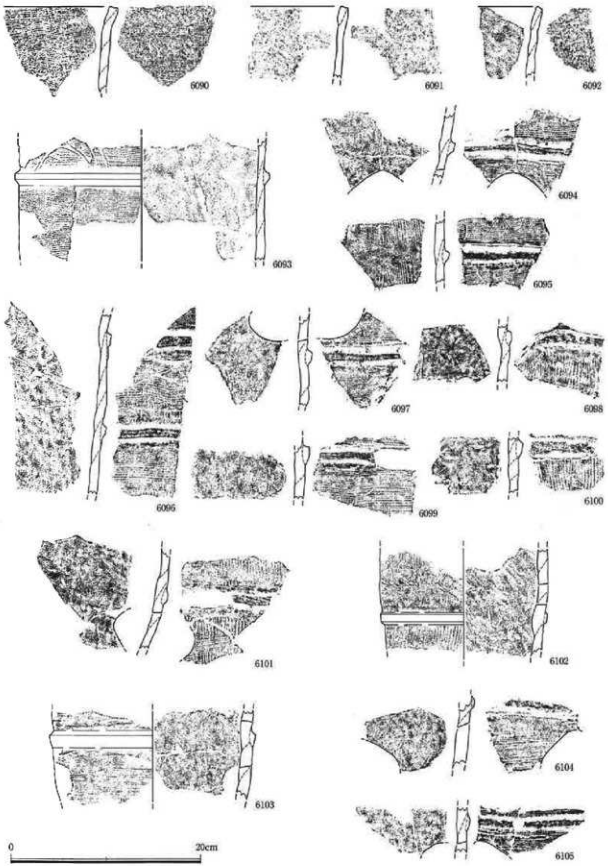


図263　古墳時代墳輪実測図－4（99－4区：遺構出土）

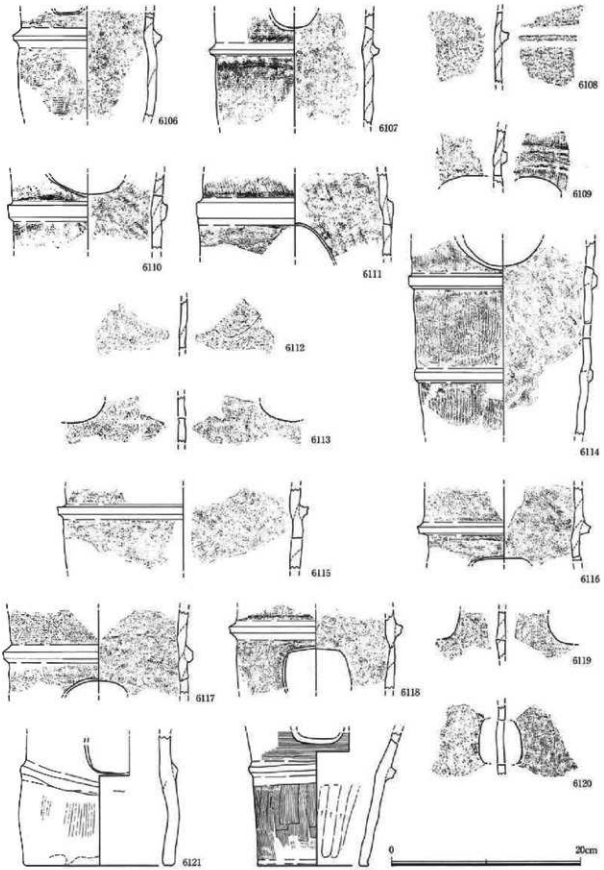


図264　古墳時代埴輪実測図－５（99－４区：遺構出土）

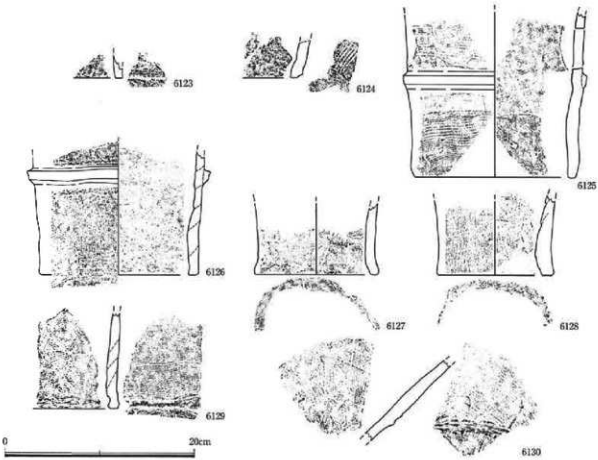


図265　古墳時代埴輪実測図－6（99－4区：遺構出土）

み出すものである。(6084) は口縁部に円形と思われる線刻が施されている。(6088～6092) は口縁端部を内側に折り曲げて口縁を形成し、やや外反気味に立ち上がるものである。

(6093～6120) は円筒埴輪胴部片。(6093～6106) は、胎土の色調が黄白色を呈するものである。(6093～6095・6106) はタガの形状が台形で、タガの突出率は0.2～0.4である。(6093) には、タガ上部に半円形の線刻が3本施されている。(6096～6102) はタガの形状がやや低い台形であり、タガの突出率は0.2～0.3である。(6096) はタガが2条残っており、タガ間の間隔は約8cmである。(6103～6105) はタガの形状が三角形で、タガの突出率が0.2～0.3である。(6107～6114) は胎土の色調が橙色のものである。(6107・6108) はタガの形状が台形で、タガの突出率は0.4である。(6109・6110・6114) はタガの形状がやや低い台形であり、タガの突出率は0.2～0.4である。(6111) はタガの形状が三角形で、タガの突出率は0.2である。(6112) は胴部に円形の線刻が施されている。(6113) は円形のスカシ孔がみられる。(6115～6120) は胎土の色調が灰色を呈する、須恵質のものである。(6115～6118) はタガの形状が台形であり、タガの突出率は0.3～0.5である。(6119・6120) はともにスカシ孔が入れられた破片である。

(6121～6129) は円筒埴輪底部。(6121・6122) は多くの破片が接合した個体である。

(6121) はタガの形状が三角形で、底部が直線的に立ち上がる。(6122) はタガの形状が台形で、底部が直線的に立ち上がる。(6123) は底部がやや内湾気味に立ち上がる。(6124) は端部が内側に張りだし、底部は外反して立ち上がる。(6125・6126) は底部が直線的に立ち上がる。(6125) はタガの形状がやや

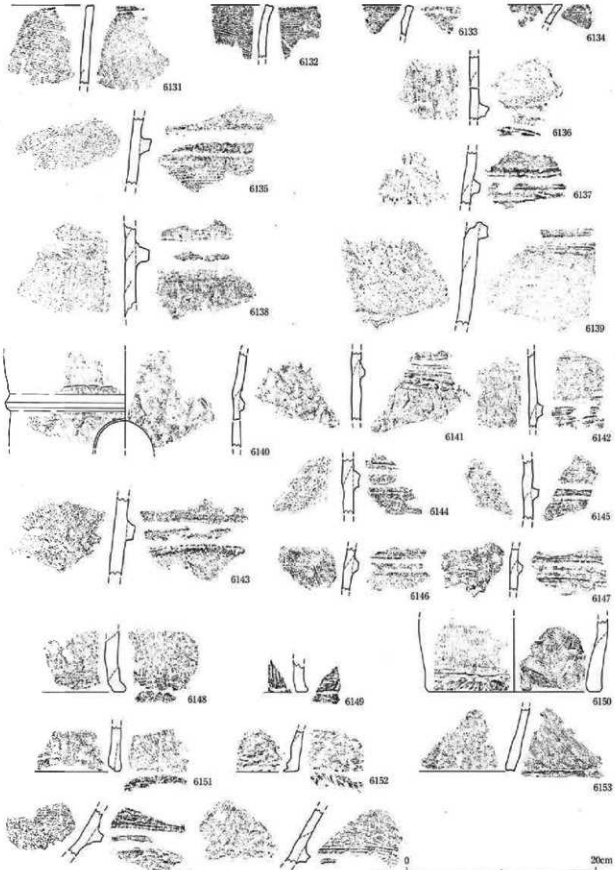


図266　古墳時代埴輪実測図－7（99－4区：遺構・包含層出土）

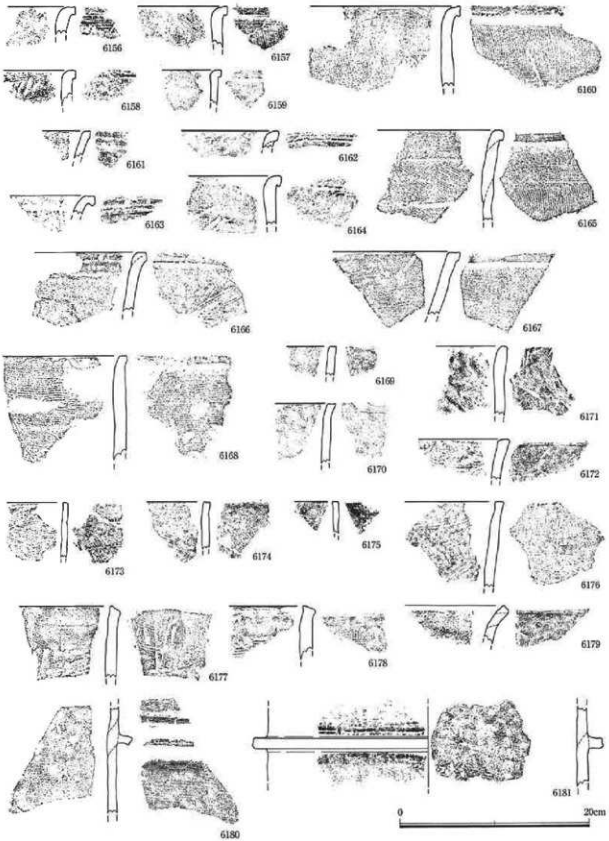


図267　古墳時代埴輪実測図－8（99－5区：遺構・包含層出土）

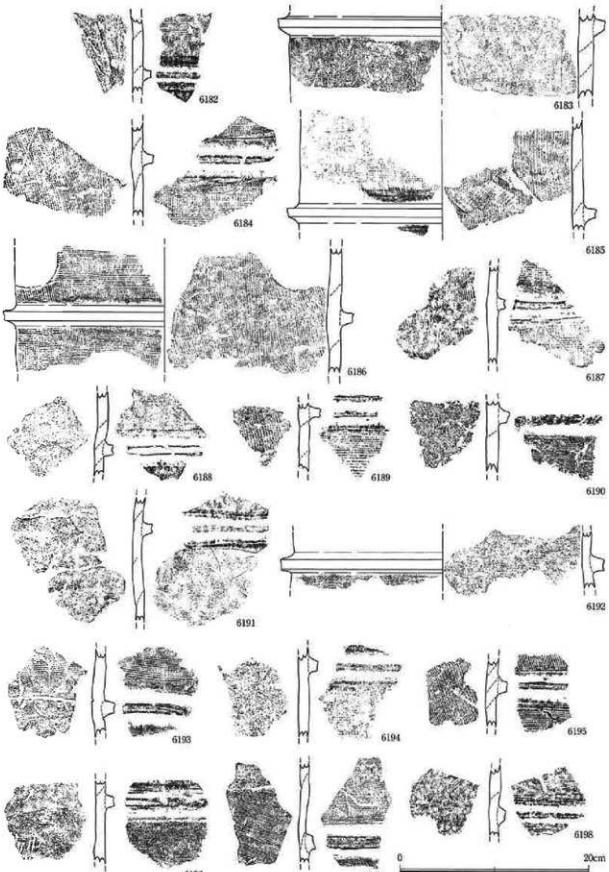


図268　古墳時代埴輪実測図－9（99－5区：遺構・包含層出土）

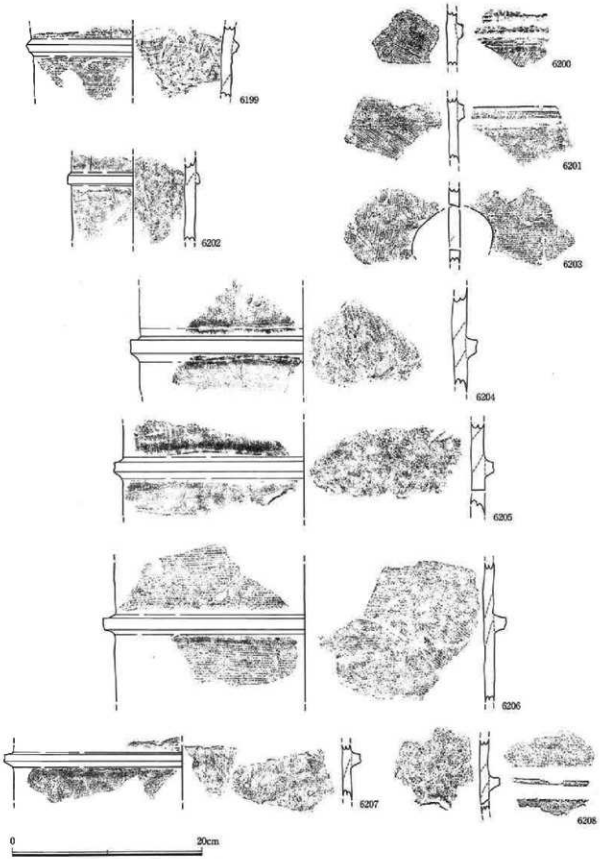


図269　古墳時代埴輪実測図―10（99―5区：遺構・包含層出土）

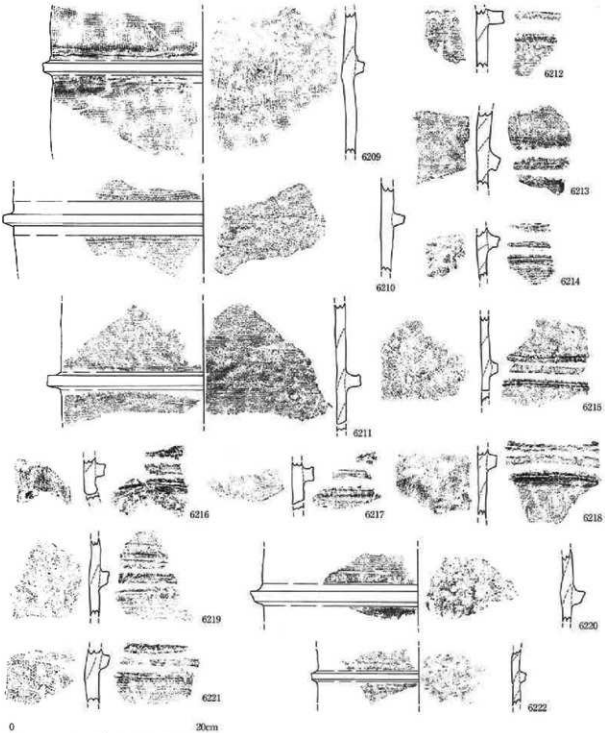


図270　古墳時代埴輪実測図－11（99－５区：遺構・包含層出土）

低い台形で、(6126) はしっかりとした台形である。(6127～6129) は底部が内湾してから立ち上がるものである。

(6130) は朝顔形埴輪口縁部付近片。色調は橙色で、タガは剥離している。

〔99－４区Ｓ04001以外の遺構・包含層出土〕　(6131～6134) は円筒埴輪口縁部片。(6131) は口縁が直線的に立ち上がる。(6132～6134) は口縁が外反して立ち上がるものである。

(6135～6147) は円筒埴輪胴部片。(6135～6139) はタガの形状が台形であり、胎土の色調が黄灰色を

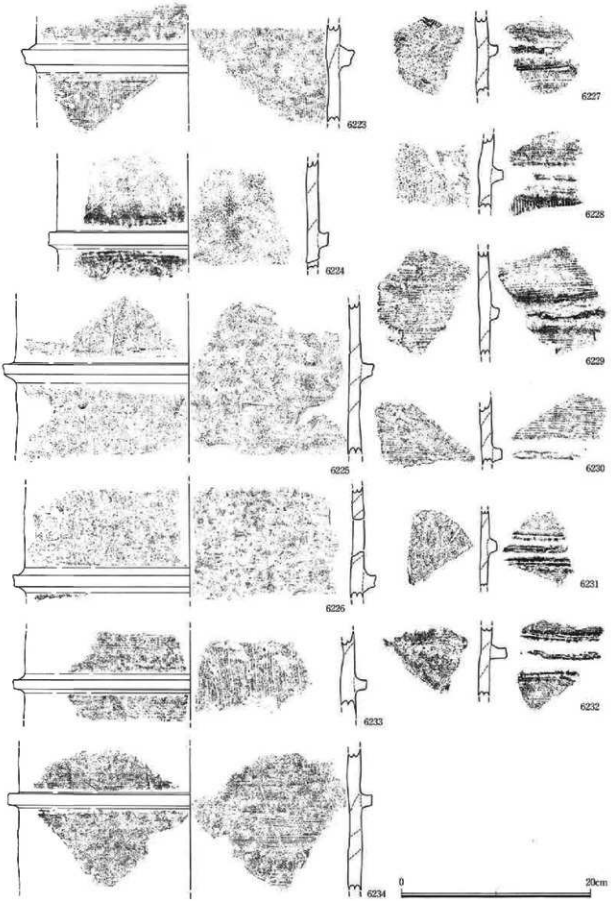


図271　古墳時代埴輪実測図－12（99－5区：遺構・包含層出土）

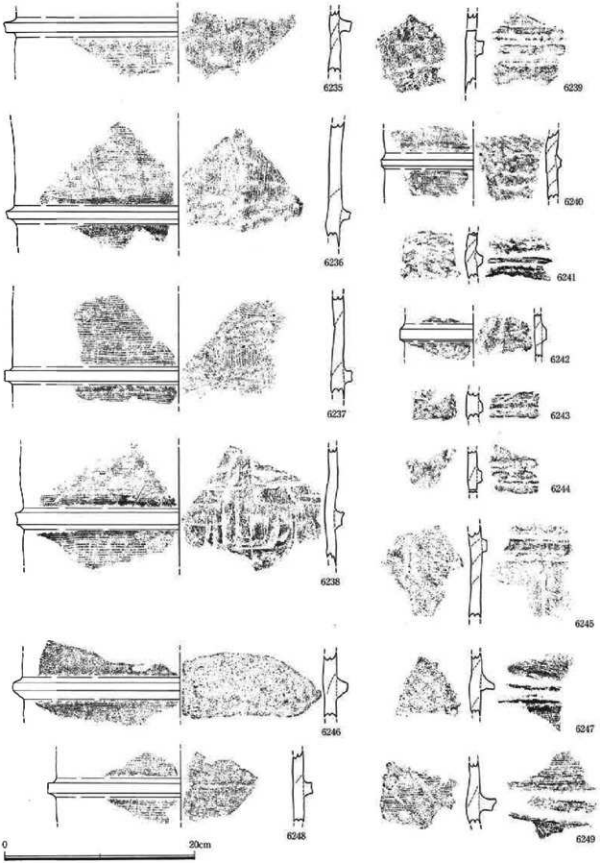


図272　古墳時代埴輪実測図－13（99－5区：遺構・包含層出土）

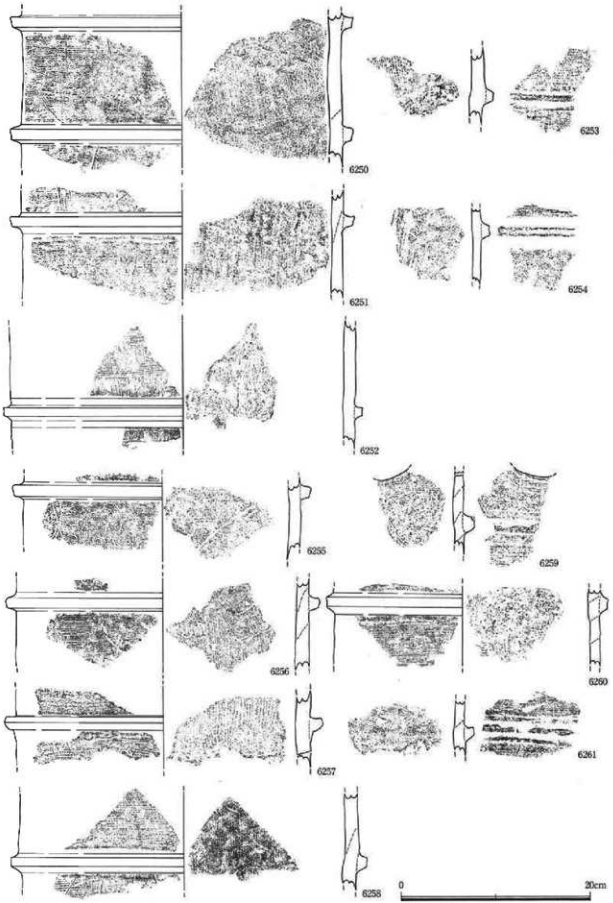


図273　古墳時代埴輪実測図－14（99－5区：遺構・包含層出土）

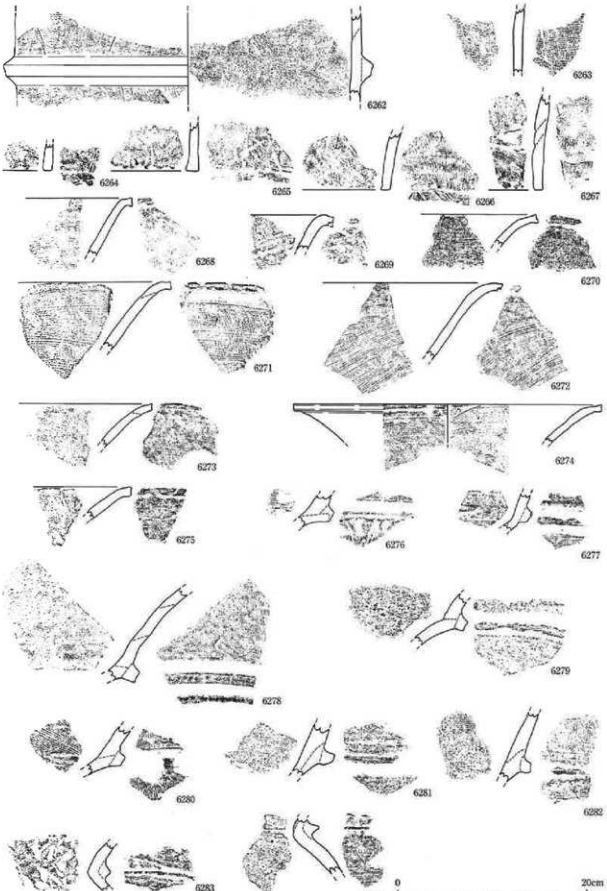


図274　古墳時代埴輪実測図－15（99－５区：遺構・包含層出土）

呈するものである。タガの突出率は0.4～0.6である。(6140～6147) はタガの形状がやや低い台形を呈するものである。タガの突出率は0.2～0.4である。

(6148～6153) は円筒埴輪底部片。(6148・6149) は底部端部が外反し、直線的に立ち上がる。(6150・6151) は底部が直線的に立ち上がるもの。(6152・6153) は底部が外反気味に立ち上がる。(6154・6155) は朝顔形埴輪口縁部付近片。タガの形状は台形である。

〔99－5区出土〕　99－5区は調査区の中で最も多く埴輪が出土した地区である。なかでも東半の中世期の溝S05010やそれに隣接する土坑S05090から多く出土した。

(6156～6179) は円筒埴輪口縁部片。(6156～6168) は、口縁端部を外側に折り曲げ、端面を外側にもつ。(6169～6175) は口縁が直線的に立ち上がり、端面を上端にもつもの。(6176～6178) は口縁が直線的に立ち上がり、端面を外側にもつ。(6179) は口縁がやや外反しながら立ち上がり、端面を外側にもつ。

(6180～6263) は円筒埴輪胴部片。当調査区においては、出土した円筒埴輪胴部片の中に胎土が異なる個体が含まれていた。そのため、胎土の違いから、①胎土の色調が赤褐色で白色砂礫を含むもの、②橙色で白色砂礫を多く含むもの、③黄灰白色で胎土に砂礫をあまり含まないもの、④淡黄白色で胎土が密であまり砂礫を含まないもの、の4種類に分類した。以下、分類ごとに円筒埴輪をみていきたい。

(6180～6203) は、①胎土の色調が赤褐色のものである。径を復原できるものは直径32cm以上の大形品である。(6180・6181) はタガの形状が長方形に近い台形で、タガの突出率が0.6～0.7と高いものである。他の埴輪に比べ焼成が良く硬質である。(6182～6196) はタガの形状が台形であり、タガの突出率は0.4～0.6である。(6197～6202) タガの形状がやや低い台形であり、タガの突帯率が0.3～0.4である。(6203) はスカシ孔のはいった胴部破片である。

(6204～6215) は、②胎土の色調が橙色を呈するものである。径を復原できたものはすべて直径32cm以上の大形品である。(6204・6205) はタガの形状がM字に近く、タガ上端を少しつまみ上げて成形している。タガの突出率は0.5である。(6206～6215) はタガの形状が台形のものである。(6206～6209) はタガの上面が胴部に対して垂直につくものであり、タガの突出率は0.4～0.6である。(6210～6212) は台形タガにおいて、タガの突出率が0.9と極めて高い個体である。(6213～6215) はタガ上面が胴部に対してやや下降気味につくものである。タガの突出率は0.3～0.6である。

(6216～6247) は、③黄灰白色の胎土を有する円筒埴輪胴部片である。径が復原可能なものには直径が32cm～40cm前後の大形品が多いが、20cm前後の小形のものも数は少ないが存在する。(6216～6226) はタガの形状が台形であるが、M字に近いものであり、タガの突出率も0.4～0.6と高い。中でも (6225・6226) は焼成が極めて良く、タガ及び器壁調整が大変丁寧に施されており器壁の厚さもほぼ一定となっている。(6227～6231) はタガの形状が台形であり、突出率が0.4～0.5のものである。(6232～6237) はタガの形状が台形であるが断面が長方形に近く、突出率が0.5～0.8と高い一群である。(6238・6239) はタガの形状がやや低い台形であるが、しっかりした作りのタガをもつ。タガの突出率は0.4～0.5である。(6240～6244) はタガの形状が低い台形で、突出率も0.2～0.4と低いものである。タガの取り付け方も粗いものが多い。(6246・6247) はタガの形状が三角形のものである。タガの突出率は0.5～0.8である。

(6248～6258) は、④胎土の色調が淡黄白色のものである。径の復原可能個体は、32cm～40cm前後の大形品のみである。(6248～6251) はややM字に近い台形のタガをもつものである。タガの突出率は0.4

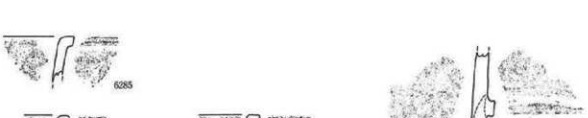


図275　古墳時代埴輪実測図－16（99－６・７区：遺構・包含層出土）

～0.5である。タガが２段残っている個体である（6250）のタガ間隔は10cmである。（6252～6258）は、タガの形状が台形のものである。タガの突出率は0.4～0.5である。

（6259～6263）は、上記以外の須恵質のものである。（6259～6262）は台形のタガをもち、タガの突出率は0.3～0.7である。（6259）にはスカシ孔を囲むように円形の線刻が加えられる。（6263）は三角形とみられる線刻がある個体である。

（6264～6267）は円筒埴輪底部片。（6264・6265）は底部が直線的に立ち上がる。（6266・6267）は底部がやや外反しながら立ち上がるものである。

（6268～6284）は朝顔形埴輪片。（6268～6275）は朝顔形埴輪口縁部片である。（6268・6269）のように口縁端部を折り曲げて成形するものと、（6270～6275）のように口縁を外反させるだけのものがみられる。（6276～6282）は朝顔形埴輪口縁部付近のタガ部分の破片である。いずれもタガの形状は台形で、しっかりとした作りである。（6283・6284）は朝顔形埴輪頸部の破片である。タガの形状は三角形である。

〔99－６区・７区出土〕　（6285・6286）は99－６区から出土。（6285）は円筒埴輪口縁部片である。口縁は直線的に立ち上がり、端部を外側に折り曲げて端面を外側にもつ。（6286）は円筒埴輪胴部片である。突出率の低い台形のタガをもつ。

（6287・6288）は99－７区から出土。円筒埴輪口縁部片である。いずれも、口縁が垂直に立ち上がり、口縁端部を外側に折り曲げ、端面を外側にもつものである。

c．形象埴輪（6289～6304）

今回の発掘調査において、99－２区～５区からそれぞれ形象埴輪が出土した。

（6289）は99－２区出土。外面にはハケメが施されている。器種は不明である。

（6290）は99－３区出土。外面に、２ヶ所、断面が半円形を呈する幅４㎜ほどの凹線がはいっている。器種は不明である。

（6291・6292）は99－４区出土。（6291）は外面が平坦にナデで丁寧に成形され、内面はU字形に湾曲している。家形埴輪の部材の一部かと考えられる。（6292）は鶏形埴輪の頭部である。埴輪集積遺構S04001から出土したものである。頭部には鶏冠の部分が剥離した痕跡がみられる。頸部はハケ調整で成形された後、斜めに等間隔で線刻が施されている。外面には、赤色顔料が付着している。内部は中空であり、粘土紐により頭部が作成されている。

（6293～6304）は99－５区から出土。（6293・6294）はともに外面上部が湾曲し、ナデ調整ののちタテに線刻が施され、突帯がつく。内面は緩やかに湾曲している。器種は不明であるが、水鳥形埴輪の台部の可能性が考えられる。

(6295) は外面が下部で内側に折り曲げられ、下部外側にも面をもつ。外面全体は板状工具による丁寧なナデを施されている。家形埴輪の一部である可能性がある。

(6296・6297) は破片の上部がやや内側に湾曲し、下部に端面をもっている。外面にはナデ調整ののち、(6296) には左上から右下に斜めに、(6297) はやや右上がりに線刻が施されている。内面はともにナデ調整である。鳥形埴輪の羽の一部や武人埴輪の甲冑の肩部の可能性もある。

(6298) は各3条の線刻が施され、直角に接している。器壁の厚みが一定であることなどから、盾形埴輪の破片であると考えられる。

(6299) は外面に縦横に交差する突帯をもち、内面は指によるナデが施されている。馬形埴輪の胴体あるいは人物埴輪の一部かと考えられる。

(6300) は外面を丁寧なナデで成形し、上部を「く」の字に折り曲げて面をもたせている。内面には指ナデを施しているが粘土の接合痕などが残っており、家形埴輪の部材かと考えられる。(6301) は全体がやや緩やかなカーブをもつ破片である。外面は丁寧にナデが施されているが、内面は指押さえなどが残る。人物埴輪か動物埴輪の目もしくは口の部分にあたると考えられる。(6302～6304) は外面には横方向に綾杉文が施されている。内面はいずれもナデ調整である。武人埴輪の草摺の一部であると考えられる。

d、小結

今回の調査で出土した埴輪は、タガの形状・調整・胎土に違いが見られるものの、大半の埴輪が2次調整としてＢｂ種横ハケが突帯間を2周めぐらしており、口縁の形状などから時期は川西編年のⅣ期の範疇でおさまるものと考えられる（ただし、一部Ⅴ期に含まれる個体もあり）。

そのなかで、細かい時期差をみていくと、埴輪片が大量に出土した99－3区～5区におけるタガの突出率では、99－5区の埴輪の突出率が一番高く、ついで99－4区・99－3区となる。やや古手の円筒埴輪が5区において多く出土し、99－3区・4区の埴輪ではタガの形状や突出率を同じくする埴輪が出土している。このことから、99－3区・4区の出土品については、同じ古墳もしくは相互に関連した古墳に用いられた埴輪である可能性が高いと考えられる。

それに対して、99－5区の埴輪については、他の地区から出土した埴輪と異なり、胎土が明確に異なる4種類の円筒埴輪が存在し、いくつかの埴輪の生産集団から埴輪が供給された可能性が高い。また大半が直径30cmを超える大形の円筒埴輪の破片であることから、ある程度の規模を持つ古墳に用いられたものと考えられる。

99－5区の埴輪については、すべて中世の遺構や包含層等からの出土であり、遺物の原位置は不明である。しかし、調査中の検出状況からして、遠く離れた地から埴輪を持ち込んだとは考えられない。この近辺にあったであろう古墳の埴輪列を、中世の段階で農地の開墾や土地開発により破壊し廃棄したものであると考えられる。つまり、99－5区近辺に99－3区・4区の埴輪をもつ古墳とは異なるⅣ期の中規模な古墳の存在を想定できるのではなかろうか。

瓜生堂遺跡においては、過去の調査においても埴輪片出土が比較的多く確認でき、河内平野低地部における古墳群の存在が想定されている。しかし、遺構としては不明確な点が多いことから、明らかにされていない点が多い。

今回出土した埴輪片が今後の河内平野における埋没古墳群の研究に役立てれば幸いである。

（池谷・川瀬）

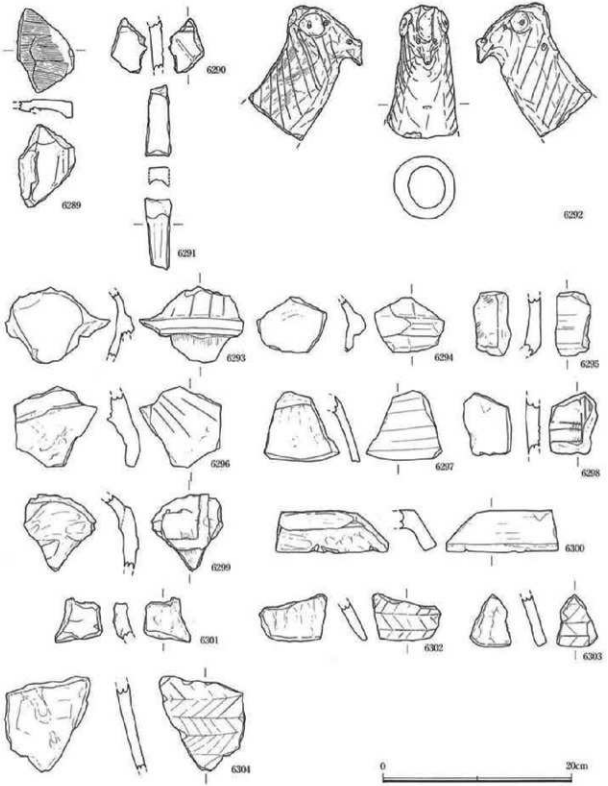


図276　古墳時代埴輪実測図―17（99－2～5区：遺構・包含層出土）

表16　古墳時代埴輪観察表

＊1ータガの形状を表す(1/2/3/4)　＊2ータガの突出率を表す(タガ高/タガ幅)　＊3ーハケメの単位(本数/1cm)

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土遺構・層位	器種	タガ 形状*1	タガ 突出率*2	色調	調整 内面	調整 外面(1次/2次)	ハケメ*3	焼成	黒斑	胎土	備考
	260	6043	99-1	側溝	円筒	3	0.5	橙色	ナデ	ヨコハケ	7	良	無	密	
	260	6044	99-1	第4-3面間	円筒			橙色	ナデ	ヨコハケ		良	無	密	
131	260	6045	99-2	第4-3面間	朝顔			赤褐色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ		良	無	密	
	260	6046	99-3	第3-2面間	円筒			淡橙色	ナデ	ナデ		良	無	密	
	260	6047	99-3	S03008	円筒			赤褐色	ヨコハケ	ヨコハケ		硬	無	密	
	260	6048	99-3	S03063	円筒			黄白色	ハケ	左上がりのハケ	7	良	無	密	
	260	6049	99-3	第1面精査	円筒			淡橙色	ナデ	ナデ		良	無	密	
	260	6050	99-3	S03100	円筒			淡橙色	ナデ	左上がりのハケ	不明	良	無	密	
	260	6051	99-3	側溝	円筒			淡橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	密	
129	260	6052	99-3	第4-3面間	円筒	2	0.5	淡黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	不明	良	無	1mm大の小礫多	
	260	6053	99-3	S03100	円筒	2	0.4	茶灰色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	不明	良	無	1mm大の小礫含、金雲母多含	
	260	6054	99-3	GL+0.8～1m	円筒	2	0.5	赤褐色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	不明	良	無	1mm大の小礫	
	260	6055	99-3	S03005	円筒	3	0.4	赤褐色	ナデ	タテハケのみ	不明	硬	無	1mm大の小白礫多含	
	260	6056	99-3	植物遺体層上面	円筒	3	0.4	淡橙色	ナデ	不明/ヨコハケ	5	硬	無	密	
129	260	6057	99-3	S03100	円筒	3	0.4	茶灰色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	1mm大の小礫含、金雲母多含	
129	260	6058	99-3	S03100	円筒	3	0.3	淡橙色	ナデ	タテハケのみ	7	良	無	1mm大の小礫多含	
	260	6059	99-3	S03100	円筒	3	0.3	赤褐色	ナデ	タテハケのみ	6	良	無	密	
	260	6060	99-3	S03100	円筒	3	0.3	赤褐色	ナデ	左上がりのハケ	6	良	無	密	
	260	6061	99-3	S03100	円筒	3	0.3	淡橙色	ナデ	ヨコハケ/ナデ	6	良	無	1mm大の小礫多含	
	260	6062	99-3	S03100	円筒	4	0.4	淡橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	3mm大の小礫多含	
	260	6063	99-3	S03100	円筒	4	0.2	赤褐色	ナデ	左上がりのハケ	不明	良	無	2mm大の小礫多含	
	260	6064	99-3	S03100	円筒	―		茶灰色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1mm大の小礫含、金雲母多含	
	260	6065	99-3	側溝	円筒	―		赤褐色	ナデ	タテハケのみ	8	硬	無	1mm大の小白礫多含	
	261	6066	99-3	側溝	円筒			赤褐色	ナデ	ナデ		良	無	1mm大の小礫多含	
	261	6067	99-3	第4-3面間	円筒			赤褐色	ナデ	左上がりのハケ	不明	軟	無	1mm大の小礫多含	
	261	6068	99-3	S03100	円筒			赤褐色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6/横	硬	無	1mm大の小礫多含	須恵質
131	261	6069	99-3	S03100	円筒			赤褐色	ナデ	左上がりのハケ	7	軟	無	1mm大の小礫多含	
	261	6070	99-3	S03008	円筒			赤褐色	ナデ	左上がりのハケ	8	良	無	1mm大の小礫多含	
131	261	6071	99-3	S03100	円筒	―		赤褐色	ナデ	タテハケ	不明	軟	無	1mm大の小礫多含	
	261	6072	99-3	第1面精査	朝顔			淡橙色	左上がりのハケ	タテハケ	5	良	無	密	
	261	6073	99-3	S03074	朝顔			淡橙色	タテハケ/ヨコハケ	左上がりのハケ	8	良	無	1mm大の小礫多含	
	261	6074	99-3	S03100	朝顔			淡橙色	ヨコハケ	不明(剥離激しい)		良	無	1mm大の小礫	
	261	6075	99-3	S03100	朝顔			赤褐色	ナデ	タテハケ	8	良	無	密	
131	261	6076	99-3	側溝	朝顔			淡橙色	ナデ	ハケ	不明	良	無	1mm大の小礫多含	
131	261	6077	99-3	S03100	朝顔			淡橙色	ナデ	左上がりのハケ	7	良	無	1～2mm大の小礫多含、チャート混じる	タガより下部に赤付着
128	262	6078	99-4	S04001	円筒	2	0.4	黄褐色	タテハケ/ヨコハケ	不明/ヨコハケ	6	良	無	2cm以下のチャート・白色粒・雲母片少量混じる	
128	262	6079	99-4	S04001	円筒	2	0.3	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	やや硬	無	1～3mm大の小礫含	
128	262	6080	99-4	S04001	円筒	2	0.4	橙色	タテハケのちナデ	不明/ヨコハケ	6	良	無	1～5mm大の小礫やや多含	
129	262	6081	99-4	S04001	円筒	2	0.4	橙色	ナデのちヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	7	硬	無	2mm大の小礫多含	
	262	6082	99-4	S04001	円筒	2	0.4	赤褐色	左上がりのハケ、口縁部はナデ	タテハケ/ナデ	7	硬	無	2mm大の小礫多含	半須恵質
	262	6083	99-4	S04001	円筒	―	―	淡橙色	左上がりのハケ、口縁部はナデ	タテハケ/ナデ	6	硬	無	2mm大の小礫多含	
129	262	6084	99-4	S04001	円筒	―	―	赤褐色	ヨコハケ	タテハケ/ナデ	7	硬	無	2mm大の小礫多含	半須恵質
	262	6085	99-4	S04001	円筒	―	―	青灰色	ヨコハケのちナデ	タテハケ/ナデ	6	硬	無	1～3mm大の小礫多含	須恵質
129	262	6086	99-4	S04001	円筒	―	―	淡橙色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	硬	無	2mm大の小礫多含	
	262	6087	99-4	S04001	円筒	―	―	青灰色	ナデ	不明/ナデ	―	硬	無	2mm大の小礫多含	
	262	6088	99-4	S04001	円筒	―	―	淡橙色	ナデ	タテハケ/ナデ		良	無	1mm大の小礫多含	
	262	6089	99-4	S04001	円筒	―	―	黄灰色	ナデ	タテハケ/ナデ		良	無	1mm大の小礫多含	
129	263	6090	99-4	S04001	円筒	―	―	青灰色	タテハケ/ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	8	硬	無	1mm大の小礫多含	半須恵質
	263	6091	99-4	S04001	円筒	―	―	淡橙色	ナデ	タテハケ/ナデ		硬	無	2mm大の小礫多含	
	263	6092	99-4	S04001	円筒	―	―	淡橙色	ナデ	タテハケ/ナデ		良	無	1mm大の小礫多含	
129	263	6093	99-4	S04001	円筒	2	0.3	黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	2mm大の小礫多含	線刻有り
	263	6094	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	263	6095	99-4	S04001	円筒	3	0.3	黄白色	タテハケのちナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	263	6096	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	2mm大の小礫多含	
130	263	6097	99-4	S04001	円筒	3	0.3	黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	263	6098	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	タテハケのみ	4	良	無	1mm大の小礫多含	
	263	6099	99-4	S04001	円筒	3	0.3	黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～3mm大の小礫多含	

＊1ータガの形状を表す(1/2/3/4)　＊2ータガの染出率を表す(タガ高/タガ幅)　＊3ーハケメの最低(本数/1cm)

図版番号	棟図番号	遺物番号	調査区	出土遺構・層位	器種	タガ 形状*1	タガ 染出率*2	色調	調整 内面	調整 外面(1次/2次)	ハケメ*3	横成	底部	胎土	備考
	263	6100	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	タテハケのみ	3	良	無	1mm大の砂多含	
	263	6101	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ	4	良	無	1〜5mm大の砂多含	
	263	6102	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ		良	無	1〜5mm大の砂多含	
129	263	6103	99-4	S04001	円筒	4	0.3	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	2〜3mm大の砂多含	
	263	6104	99-4	S04001	円筒	4	—	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	1〜3mm大の砂多含	
	263	6105	99-4	S04001	円筒	4	0.2	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ		良	無	1〜3mm大の砂少含	
	264	6106	99-4	S04001	円筒	2	0.4	黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	硬	無	1〜3mm大の砂多含	
130	264	6107	99-4	S04001	円筒	2	0.4	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	硬	無	1〜3mm大の砂多含	
129	264	6108	99-4	S04001	円筒	2	0.4	橙色	タテハケ	タテハケのもナデ	5	硬	無	1〜3mm大の砂多含	6112・6113と同一か
	264	6109	99-4	S04001	円筒	2	0.4	橙色	ナデ	タテハケのみ	6	良	無	2mm大の砂多含	
	264	6110	99-4	S04001	円筒	3	0.3	橙色	ナデ	タテハケのみ	6	良	無	2mm大の砂多含	
	264	6111	99-4	S04001	円筒	3	0.1	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ		硬	無	密	
129	264	6112	99-4	S04001	円筒	—	—	橙色	ヨコハケ	タテハケ/ナデ	5	硬	無	2mm大の砂多含	線刻有り
	264	6113	99-4	S04001	円筒	—	—	橙色	ヨコハケ	タテハケ/ナデ	5	硬	無	2mm大の砂多含	6108・6114と同一か
130	264	6114	99-4	S04001	円筒	3	0.2	橙色	ナデ	タテハケのみ	4	良	無	1〜3mm大の砂多含	
	264	6115	99-4	S04001	円筒	2	0.5	青灰色	ナデ	不明/ナデ	—	硬	無	2〜4mm大の砂多含	頭部質
	264	6116	99-4	S04001	円筒	2	0.5	灰色	ヨコハケのもナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	硬	無	2〜3mm大の砂多含	頭部質
	264	6117	99-4	S04001	円筒	2	0.4	灰色	ハケのもナデ	不明/ヨコハケ	7	硬	無	2〜3mm大の砂多含	頭部質
	264	6118	99-4	S04001	円筒	2	0.3	赤灰色	ハケのもナデ	タテハケ	6	硬	無	2mm大の砂多含	頭部質
	264	6119	99-4	S04001	円筒	—	—	赤灰色	ハケ	タテハケのみ		硬	無	2mm大の砂多含	頭部質
	264	6120	99-4	S04001	円筒	—	—	赤灰色	ナデ	タテハケのみ	7	硬	無	2mm大の砂多含	頭部質
128	264	6121	99-4	S04001	円筒	4	0.2	橙色	ナデ	タテハケ/ナデ	4	良	無	1〜4mm大の砂多含	
128	264	6122	99-4	S04001	円筒	2	0.3	黄白色	ナデ	タテハケのち 底部付近ナデ	6	良	無	1〜2mm大の砂少含	
	265	6123	99-4	S04001	円筒	—	—	赤褐色	ナデ	ナデ	—	良	無	密	
	265	6124	99-4	S04001	円筒	—	—	黄白色	ナデ	タテハケ	3	良	無	2mm大の砂多含	
	265	6125	99-4	S04001	円筒	3	0.2	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	1〜5mm大の砂多含	
131	265	6126	99-4	S04001	円筒	3	0.4	赤褐色	ナデ	タテハケ	6	硬	無	2mm大の砂多含	半頭恵質
131	265	6127	99-4	S04001	円筒	—	—	赤褐色	ナデ	タテハケ	5	良	無	2〜3mm大の砂多含	
131	265	6128	99-4	S04001	円筒	—	—	黄白色	タテハケのち 底部付近ふるナデ	タテハケのみ	6	良	無	密	
131	265	6129	99-4	S04001	円筒	—	—	黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	密	
	265	6130	99-4	S04001	鉢蓋	—	—	橙色	ハケ	ハケ		良	無	2mm大の砂多含	
	266	6131	99-4	S04040	円筒	—	—	赤褐色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	硬	無	密	
	266	6132	99-4	S04040	円筒	—	—	灰色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	8	硬	無	密	頭部質
	266	6133	99-4	S04040	円筒	—	—	橙色	ナデ	ヨコハケ/ナデ		良	無	密	頭部質
	266	6134	99-4	S04040	円筒		—	橙色	左上がりハケ	不明/右上がりハケ	4	良	無	密	頭部質
	266	6135	99-4	S04040	円筒	1	0.6	黄灰色	タテハケ/ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	2〜5mm大の砂多含	
	266	6136	99-4	S04040	円筒	1	0.6	黄灰色	ナデ	ナデ	—	良	無	1mm大の砂多含	
	266	6137	99-4	S04040	円筒	2	0.4	黄灰色	ナデ	ナデ		良	無	密	
	266	6138	99-4	S04040	円筒	2	0.5	黄灰色	ヨコハケのもナデ	タテハケのちナデ	—	良	無	2mm大の砂多含	
	266	6139	99-4	S04040	円筒	2	—	黄灰色	ナデ	不明/ヨコハケ	—	良	無	2mm大の砂多含	
	266	6140	99-4	S04040	円筒	3	0.4	黄灰色	ナデ	タテハケのみ	6	良	無	1〜5mm大の砂多含	
	266	6141	99-4	S04040	円筒	3	0.3	橙色	ナデ	左上がりハケ	7	良	無	1〜5mm大の砂多含	
	266	6142	99-4	第2・1面間	円筒	3	0.3	灰白色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	9	良	無	2mm大の砂多含	半頭恵質
	266	6143	99-4	S04040	円筒	3	0.2	黄灰色	ナデ	不明(刺羽激しい)	—	良	無	1〜2mm大の砂多含	
	266	6144	99-4	S04040	円筒	3	0.3	赤褐色	ヨコハケのもナデ	不明/ヨコハケ	—	硬	無	2mm大の砂多含	
	266	6145	99-4	S04053	円筒	3	0.4	青灰色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ		硬	無	2mm大の砂多含	頭恵質
	266	6146	99-4	S04040	円筒	3	0.3	黄灰色	ナデ	不明/ヨコハケ	—	良	無	2mm大の砂多含	
	266	6147	99-4	S04040	円筒	3	0.3	赤褐色	ハケのもナデ	不明/ヨコハケ	7	良	無	1mm大の砂多含	
131	266	6148	99-4	S04053	円筒	—	—	黄灰色	ナデ	タテハケ/ナデ	4	良	無	密	
	266	6149	99-4	S04050	円筒	—	—	黄白色	ナデ	ナデ	—	良	無	密	
131	266	6150	99-4		円筒	—	—	橙色	ヨコハケのもナデ	タテハケのち 底部付近ナデ	6	硬	無	1mm大の白色粒多含	半頭恵質
	266	6151	99-4	第3・2面間	円筒	—	—	黄白色	ナデ	ハケ/ナデ	5	良	無	1mm大の砂多含	
	266	6152	99-4	第3・4面間	円筒	—	—	黄白色	ナデ	ヨコハケ/ナデ	—	良	無	1〜3mm大の白色粒少含	
131	266	6153	99-4	S04040	円筒	—	—	黄灰色	ナデ	左上がりハケ	6	良	無	密	
	266	6154	99-4	S04040	鉢蓋	—	—	赤褐色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	—	硬	無	1mm大の砂多含	
	266	6155	99-4	S04040	鉢蓋	—	—	赤褐色	ナデ	不明/ヨコハケ	6	硬	無	1mm大の砂多含	
	267	6156	99-5	第2・1面間	円筒	—	—	黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ	—	良	無	1mm大の砂多含	
	267	6157	99-5	S05010	円筒	—	—	黄白色	ナデ	タテハケ	4	良	無	1〜3mm大の砂多含	
	267	6158	99-5	S05020	円筒	—	—	赤褐色	ナデ	ナデ	—	良	無	1〜3mm大の砂多含	頭恵質
	267	6159	99-5	S05022	円筒	—	—	黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	7	良	無	密	

＊1…タガの形状を表す(1/2/3/4)　＊2…タガの突出率を表す(タガ高/タガ幅)　＊3…ハケメの単位(本数/1cm)

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土遺構・層位	器種	タガ		色調	調整		ハケメ＊3	焼成	黒斑	胎土	備考
						形状＊1	突出率＊2		内面	外面(1次/2次)					
129	267	6160	99-5	側溝	円筒	－	－	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	267	6161	99-5	S05030	円筒	－	－	赤褐色	ナデ	ナデ	－	良	無	1mm大の小礫少含	
	267	6162	99-5	S05010	円筒	－	－	黄白色	ヨコハケ	ナデ	－	良	無	1mm大の小礫多含	
	267	6163	99-5	第2・1面間	円筒	－	－	黄白色	ヨコハケ	タテハケ	5	良	無	1mm大の小礫多含	
	267	6164	99-5	S05010	円筒	－	－	黄白色	ヨコハケ	タテハケ	5	良	無	1mm大の小礫多含	
129	267	6165	99-5	S05102	円筒	－	－	赤褐色	ハケ	タテハケ/ナデ	5	良	無	2mm大の小礫多含	
129	267	6166	99-5	S05010	円筒	－	－	黄白色	ナデ	ナデ	－	良	無	2mm大の小礫多含	外面に鹿の角のような線刻有り
	267	6167	99-5	側溝	円筒	－	－	橙色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	267	6168	99-5	側溝	円筒	－	－	黄白色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	267	6169	99-5	S05030	円筒	－	－	黄白色	ナデ	ナデ	－	良	無	1mm大の小礫多含	
	267	6170	99-5	S05072	円筒	－	－	橙色	ハケ	タテハケのみ	9	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	267	6171	99-5	3面	円筒	－	－	黄白色	ハケ	タテハケ/ナデ	－	良	無	1～3mm大の小礫少含	
	267	6172	99-5	S05090	円筒	－	－	黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ	－	良	無	1～3mm大の小礫多含	
129	267	6173	99-5	S05085	円筒	－	－	橙色	ハケ	タテハケ/ナデ	－	良	無	2mm大の小礫多含	
	267	6174	99-5	S05001	円筒	－	－	赤褐色	ハケ	タテハケ/ナデ	－	良	無	1mm大の小礫多含	
	267	6175	99-5	S05085	円筒	－	－	黄白色	ヨコハケ	タテハケ/ナデ	－	良	無	1mm大の小礫多含	赤彩有り
	267	6176	99-5	S05070	円筒	－	－	青灰色	ナデ	タテハケ/ナデ	5	硬	無	2mm大の小礫多含	
	267	6177	99-5	側溝	円筒	－	－	黄白色	タテハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	密	赤彩有り?
	267	6178	99-5	S05010	円筒	－	－	黄白色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	不明	良	無	1mm大の小礫く含	
	267	6179	99-5	S05090	円筒	－	－	橙色	ナデ	タテハケ/ナデ	－	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	267	6180	99-5	S05102	円筒	2	0.7	赤褐色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	267	6181	99-5	S05010	円筒	2	0.6	赤褐色	ヨコハケ/ナデ	不明/ヨコハケ	6	良	無	1～6mm大の小礫多含	
	268	6182	99-5	S05090	円筒	2	0.4	赤褐色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	2mm大の小礫多含	
	268	6183	99-5	S05010	円筒	2	0.4	赤褐色	ヨコハケ/ナデ	タテハケ/ナデ	11	良	無	1～4mm大の小礫多含	
	268	6184	99-5	S05010	円筒	2	0.4	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	268	6185	99-5	S05010	円筒	2	0.5	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	2mm大の小礫多含	
130	268	6186	99-5	S05010	円筒	2	0.5	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	2mm大の小礫多含	
	268	6187	99-5	S05010	円筒	2	0.5	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	268	6188	99-5	S05010	円筒	2	0.5	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	268	6189	99-5	S05030	円筒	2	0.8	赤褐色	タテハケ	不明/ヨコハケ	3	良	無	1mm大の小礫多含	
	268	6190	99-5	南壁	円筒	2	0.4	赤褐色	タテハケ	不明/ヨコハケ	8	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	268	6191	99-5	S05090	円筒	2	0.6	赤褐色	タテハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	12	良	無	2mm大の小礫多含	
	268	6192	99-5	S05001	円筒	2	0.5	赤褐色	ヨコハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	1～4mm大の小礫多含	
	268	6193	99-5	S05001	円筒	2	0.4	赤褐色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	1～2mm大の小礫多含	内面に線刻有り
	268	6194	99-5	S05076	円筒	2	0.5	赤褐色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	3	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	268	6195	99-5	S05010	円筒	2	0.5	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	268	6196	99-5	S03008	円筒	2	0.4	赤褐色	ナデ	不明/ヨコハケ	不明	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	268	6197	99-5	側溝	円筒	3	0.4	赤褐色	ヨコハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	268	6198	99-5	S05090	円筒	3	0.3	赤褐色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	9	良	無	2mm大の小礫多含	
	269	6199	99-5	側溝	円筒	3	0.4	赤褐色	ヨコハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	硬	無	2mm大の小礫多含	
	269	6200	99-5	S05076	円筒	3	0.3	赤褐色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1mm大の小礫少量含	
	269	6201	99-5	側溝	円筒	3	0.4	赤褐色	ハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	269	6202	99-5	側溝	円筒	3	0.4	赤褐色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	9	硬	無	1mm大の小礫含	
	269	6203	99-5	S05010	円筒	－	－	赤褐色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	269	6204	99-5	S05010	円筒	1	0.5	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	11	良	無	1～3mm大の小礫多含	
130	269	6205	99-5	側溝	円筒	2	0.5	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	12	良	無	1mm大の小礫多含	
	269	6206	99-5	S05090	円筒	2	0.6	橙色	ハケ	不明/ヨコハケ	5	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	269	6207	99-5	S05090	円筒	2	0.5	橙色	タテハケ/ナデ	不明/ヨコハケ	細	良	無	1mm大の小礫多含	
	269	6208	99-5	S05090	円筒	2	0.4	橙色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫多含	
130	270	6209	99-5	S05090	円筒	2	0.4	橙色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	270	6210	99-5	S05090	円筒	2	0.9	橙色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	6	良	無	2mm大の小礫多含	
	270	6211	99-5	S05010	円筒	2	0.9	橙色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	6	良	無	2mm大の小礫多含	
	270	6212	99-5	S05010	円筒	2	0.9	橙色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	7	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	270	6213	99-5	S05102	円筒	2	0.3	橙色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	10	良	無	2mm大の小礫多含	
	270	6214	99-5	第3・2面間	円筒	2	0.6	橙色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	2mm大の小礫多含	
	270	6215	99-5	側溝	円筒	2	0.5	橙色	ハケ	不明/ヨコハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	270	6216	99-5	S05090	円筒	2	0.5	黄灰白色	タテハケ	不明/ヨコハケ	8	良	無	1mm大の小礫含	
	270	6217	99-5	S05100	円筒	2	0.6	黄灰白色	ナデ	タテハケ	5	良	無	1mm大の小礫含	
	270	6218	99-5	S05001	円筒	2	0.4	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫含	
	270	6219	99-5	S05001	円筒	2	0.4	黄灰白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	1mm大の小礫含	
	270	6220	99-5	S05090	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫含	

＊1ータガの形状を表す(1/2/3/4)　＊2ータガの突出率を表す(タガ高/タガ幅)　＊3ーハケメの単位(本数/10cm)

遺跡番号	検出番号	遺物番号	調査区	出土道路・層位	器種	タガ 形状*1	タガ 突出率*2	色調	調整 内面	調整 外面(1次/2次)	ハケメ*3	焼成	風化	胎土	備考
	270	6221	99-5	第3・2面間	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	1～4mm大の小礫含	
	270	6222	99-5	側溝	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	不明/ナデ	―	良	無	1mm大の小礫含	
	271	6223	99-5	S05010	円筒	2	0.5	黄灰白色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	2mm大の小礫含	
	271	6224	99-5	S05090	円筒	2	0.6	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫含	
	271	6225	99-5	S05010	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	ヨコハケ/ナデ	―	良	無	2mm大の小礫含	
130	271	6226	99-5	S050108	円筒	2	0.6	黄灰白色	ナデ	ヨコハケ/ナデ	―	良	無	1～2mm大の小礫含	
	271	6227	99-5	S05102	円筒	2	0.4	黄灰白色	タテハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1mm大の小礫含	
	271	6228	99-5	S05010	円筒	2	0.5	黄灰白色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	2mm大の小礫含	
	271	6229	99-5	S05001	円筒	2	0.4	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	1～3mm大の小礫含	
	271	6230	99-5	S05010	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～3mm大の小礫含	
	271	6231	99-5	側溝	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	上6/下8	良	無	2mm大の小礫含	
	271	6232	99-5	S05010	円筒	2	0.8	黄灰白色	ヨコハケ	不明/ヨコハケ	7	良	無	1～5mm大の小礫含	
	271	6233	99-5	第4・3面間	円筒	2	0.6	黄灰白色	タテハケ	不明/ヨコハケ	5	良	無	1～4mm大の小礫含	
	271	6234	99-5	S05090	円筒	2	0.5	黄灰白色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	2～3mm大の小礫含	
	272	6235	99-5	第4・3面間	円筒	2	0.6	黄灰白色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	3	良	無	1～3mm大の小礫含	
	272	6236	99-5	S05090	円筒	2	0.5	黄灰白色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	2～3mm大の小礫含	
	272	6237	99-5	S05010	円筒	2	0.5	黄灰白色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1mm大の小礫含	
	272	6238	99-5	S05090	円筒	3	0.4	黄灰白色	ヨコハケ/ナデ	タテハケ/ヨコハケ	上4/下7	良	無	2mm大の小礫含	
	272	6239	99-5	S05010	円筒	3	0.5	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	1mm大の小礫含	
	272	6240	99-5	側溝	円筒	3	0.3	黄灰白色	ナデ	ヨコハケ/ナデ	―	良	無	2mm大の小礫含	
	272	6241	99-5	S05070	円筒	3	0.4	黄灰白色	ナデ	タテハケ	不明	良	無	1～5mm大の小礫含	
	272	6242	99-5	第3・2面間	円筒	3	0.2	黄灰白色	ナデ	タテハケ	10	良	無	1～2mm大の小礫含	
	272	6243	99-5	S05102	円筒	―	―	黄灰白色	ナデ	ナデ	―	良	無	密	
	272	6244	99-5	第5・4面間	円筒	―	―	黄灰白色	タテハケ/ナデ	タテハケ/ナデ	―	良	無	密	
	272	6245	99-5	S05010	円筒	3	0.3	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	10	良	無	1～2mm大の小礫含	
	272	6246	99-5	側溝	円筒	2	0.5	黄灰白色	ナデ	不明/ヨコハケ	不明	良	無	1～3mm大の小礫含	
	272	6247	99-5	第2・1面間	円筒	4	0.8	黄灰白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	2～3mm大の小礫含	
	272	6248	99-5	S05090	円筒	1	0.5	黄灰白色	ハケのちナデ	不明/ヨコハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫含	
	272	6249	99-5	S05090	円筒	1	0.4	黄灰白色	ハケのちナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	1～4mm大の小礫含	
130	273	6250	99-5	S05102	円筒	1	0.5	黄灰白色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	7	良	無	1～3mm大の小礫含	
130	273	6251	99-5	S05090	円筒	1	0.6	黄灰白色	タテハケのちナデ	不明/ヨコハケ	7	良	無	2～3mm大の小礫含	
	273	6252	99-5	S05010	円筒	2	0.4	淡黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	6	良	無	2mm大の小礫含	
	273	6253	99-5	S05010	円筒	2	0.4	淡黄白色	タテハケのちナデ	不明/ヨコハケ	4	良	無	1mm大の小礫含	
	273	6254	99-5	第3・2面間	円筒	2	0.4	淡黄白色	タテハケのちナデ	タテハケ/ヨコハケ	8	良	無	1mm大の小礫含	
	273	6255	99-5	S05010	円筒	2	0.5	淡黄白色	ナデ	不明/ヨコハケ	不明	良	無	1～3mm大の小礫含	
	273	6256	99-5	S05010	円筒	2	0.5	淡黄白色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1mm大の小礫含	
	273	6257	99-5	S05010	円筒	2	0.5	淡黄白色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	2mm大の小礫含	
	273	6258	99-5	S05010	円筒	2	0.5	淡黄白色	タテハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～2mm大の小礫含	
129	273	6259	99-5	S05010	円筒	2	0.8	赤褐色	ハケ	不明/ヨコハケ	5	良	無	1mm大の小礫多含	線刻有り，頂恵質
	273	6260	99-5	側溝	円筒	2	0.3	青灰色	タテハケのちナデ	タテハケ/ヨコハケ	8	硬	無	2mm大の小礫多含	頂恵質
	273	6261	99-5	側溝	円筒	2	0.7	淡黄白色	ハケ	不明/ヨコハケ	8	軟	無	1mm大の小礫多含	頂恵質
	274	6262	99-5	S05030	円筒	2	0.4	橙色	ヨコハケ/ナデ	不明/ヨコハケ	7	良	無	1～4mm大の小礫多含	頂恵質
129	274	6263	99-5	第3・2面間	円筒	―	―	赤褐色	ハケ	タテハケ/ヨコハケ	5	硬	無	1～4mm大の小礫多含	線刻有り
	274	6264	99-5	第3・2面間	円筒	―	―	淡黄白色	ナデ	ナデ	―	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	274	6265	99-5	S05030	円筒	―	―	淡黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ	不明	良	無	1mm大の小礫多含	
	274	6266	99-5	第4・3面間	円筒	―	―	淡黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ	不明	良	無	1～3mm大の小礫多含	
	274	6267	99-5	S05030	円筒	―	―	淡黄白色	ナデ	タテハケ/ナデ	6	良	無	1mm大の小礫多含	
	274	6268	99-5	S05010	朝顔	―	―	淡黄白色	ヨコハケ	タテハケ	4	良	無	1mm大の小礫多含	
	274	6269	99-5	S05010	朝顔	―	―	赤褐色	ヨコハケ/ナデ	ヨコハケ	不明	硬	無	1～2mm大の小礫多含	
	274	6270	99-5	S05010	朝顔	―	―	橙色	ナデ	タテハケ/ナデ	不明	硬	無	1mm大の小礫多含	
131	274	6271	99-5	側溝	朝顔	―	―	淡黄白色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	4	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	274	6272	99-5	S05010	朝顔	―	―	暗褐色	ヨコハケ	ヨコハケ	5	硬	無	密	頂恵質
	274	6273	99-5	側溝	朝顔	―	―	淡黄白色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	6	軟	無	1mm大の小礫多含	
131	274	6274	99-5	S05010	朝顔	―	―	淡黄白色	ヨコハケ	タテハケ/ヨコハケ	7	軟	無	1mm大の小礫多含	
	274	6275	99-5	S05010	朝顔	―	―	淡黄白色	ナデ	ナデ	―	良	無	1mm大の小礫多含	
	274	6276	99-5	S05010	朝顔	―	―	淡黄白色	ヨコハケ	タテハケ	5	良	無	密	赤彩有り
	274	6277	99-5	S05010	朝顔	―	―	赤褐色	ナデ	ヨコハケ	6	良	無	1mm大の小礫多含	
131	274	6278	99-5	S05010	朝顔	―	―	暗灰色	ナデ	タテハケ	7	硬	無	1mm大の小礫多含	頂恵質
	274	6279	99-5	S05010	朝顔	―	―	暗灰色	ナデ	タテハケ	5	硬	無	1～3mm大の小礫多含	頂恵質
	274	6280	99-5	S05010	朝顔	―	―	淡黄白色	ヨコハケ	タテハケ	4	良	無	1mm大の小礫多含	赤彩有り
	274	6281	99-5	S05102	朝顔	―	―	赤褐色	ヨコハケ	タテハケ	6	良	無	1～3mm大の小礫多含	

＊1…タガの形状を表す(1/2/3/4)　＊2…タガの突出率を表す(タガ高/タガ幅)　＊3…ハケメの単位(本数/1cm)

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土遺構・層位	器種	タガ		色調	調整		ハケメ[3]	焼成	黒斑	胎土	備考
						形状[1]	突出率[2]		内面	外面(1次/2次)					
131	274	6282	99-5	第4・3面間	鍋鼎	―	―	暗褐色	ヨコハケ	タテハケ	5	良	無	2mm大の小礫多含	須恵質
	274	6283	99-5	S05090	鍋鼎	―	―	淡黄白色	ナデ	ナデ	―	良	無	1～3mm大の小礫多含	
131	274	6284	99-5	S05010	鍋鼎	―	―	赤褐色	ハケ	ヨコハケ	6	良	無	2mm大の小礫多含	
	275	6285	99-6	S06430	円筒	―	―	赤褐色	ナデ	タテハケ/ナデ	―	良	無	1～3mm大の白色粒多含	半須恵質
	275	6286	99-6	S06020	円筒	3	―	黄白色	ナデ	タテハケ/ヨコハケ	5	良	無	1～2mm大の小礫多含	
	275	6287	99-7	側溝	円筒	―	―	橙色	ナデ	摩耗がはげしく調整不明	―	良	無	1mm大の砂粒多含、胎土粗い	
	275	6288	99-7	第4・3面間	円筒	―	―	橙色	ナデ	摩耗がはげしく調整不明	―	良	無	1～4mm大の砂礫多含、胎土粗い	
132	276	6289	99-2	S02100	形象										
132	276	6290	99-3	S03047	形象										
132	276	6291	99-4	S04040	形象										
128	276	6292	99-4	S04001	形象										
132	276	6293	99-5	S05020	形象										
132	276	6294	99-5	S05010	形象										
132	276	6295	99-5	側溝	形象										
132	276	6296	99-5	側溝	形象										
132	276	6297	99-5	S05010	形象										
132	276	6298	99-5	S05010	形象										
132	276	6299	99-5	S05090	形象										
132	276	6300	99-5	側溝	形象										
132	276	6301	99-5	S05010	形象										
132	276	6302	99-5	第8面	形象										
132	276	6303	99-5	S05100	形象										
132	276	6304	99-5	S06090	形象										

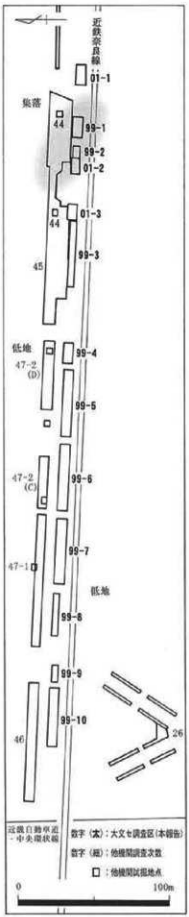


図277　古代遺構面全体図

第７節　古代の様相

１．遺構面と遺構（図277～279）

（１）概要

調査区東半の01－１区から99－３区にかけては、古墳時代に旧大和川の瓜生堂分流路の氾濫によって、相当量の砂礫の堆積がもたらされた。その結果、それまで最も標高が低かった01－２区から99－２区にかけての地表高がT.P.2.0m程度まで一気に上昇する地形の逆転現象が起きる。高いところと低いところとでは１m前後の標高差が生じる。全区を通じて01－２区、99－２区が最も高く、そこから東西にむかってそれぞれに徐々に低くなっていく地形をとる。

古墳時代以降は大きな氾濫や土砂の流失はなく、堆積が安定したようである。長期間にわたって連続した土地利用がなされるため、古墳時代から中世までの遺構が同一遺構面で検出できる。

複数時期の遺構が同一遺構面に存在するため、古代の遺構は包含層や盛土の厚い箇所を除いては、中世以降における後世の削平・改変を受けたと考えられる。

今回の調査では、古代の遺構は当時における地表高の高い99－１区と01－２区に部分的にみられるだけである。他の調査区では遺物は認められるが遺構は検出できず、遺物の含有量もわずかである。

その一方で、当初から古代の遺構が希薄だったとも言えるだろう。99－１区、01－２区の北側に位置する（財）東大阪市文化財協会45－２次調査区で、９世紀から10世紀後半に属する井戸や土坑などで形成される集落を検出している。遺物も土師器、須恵器、黒色土器Ａ・Ｂ類の他、灰釉陶器、緑釉陶器や製塩土器、金銅製帯金具が出土している（東大阪市文化財協会1999c）。ただし、ここでみられる集落も小規模なもので、広がりをもたない。これより西の地区では古代の遺構・遺物の検出例はわずかであり、古代の遺構はごく局所的に存在したと考えられる。

（２）各区の様相

１）99－１区

本調査区で古代に相当する遺構面は１面だった。

ａ．第９面

平均遺構面高T.P.16～1.7mで検出した（図278）。大きく広がる落ち込み状の土坑とその他土坑数基を検出した。この第９面には古代と中世の遺構が混在し、東側は中世の土坑・ピットや根石や

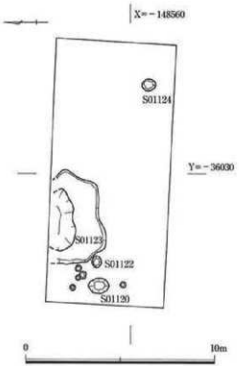


図278　古代遺構面平面図（99－1区：第9面）

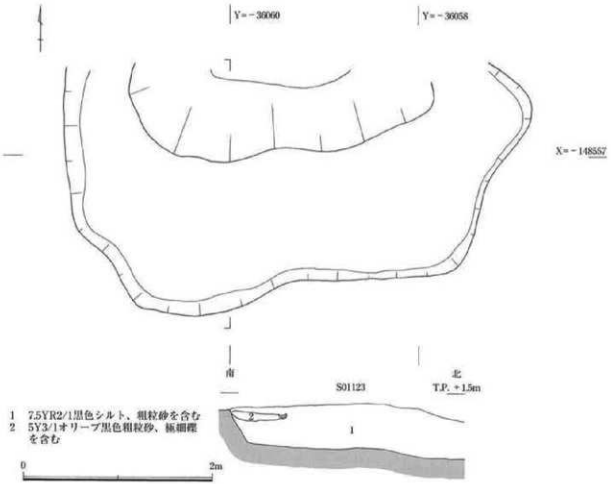


図279　99－1区第9面土坑S01123平面図・断面図

礎盤をもつ柱穴などを検出した。西に沿って低く落ち込んでいく。西側の中世遺構面の客土を除去した部分から古代の遺構面を検出した。

このうちで古代と限定できる遺構は落ち込みS01123のみである。

〔土坑S01123〕　調査区の北西部で検出した。直径5m、深さ約0.5mをはかる浅く広がる落ち込み状の土坑である（図279）。

掘り込みは急角度で、埋土には砂礫や石を多く含む。9世紀代の緑釉陶器片、灰釉陶器片、須恵器片などを含む（図280）。この遺構の機能は不明である。

その他、第9・8面間やその前後の包含層からも土師器甕片などの古代の遺物が出土した。

遺物の時期から、当遺構面はおよそ9世紀代と考えられる。99－1区で検出した遺構は、前述の（財）東大阪市文化財協会が検出した古代の集落の続きとみなせる。

2）01－2区

第8面の調査区西側における当時の盛土部分で、わずかに古代の遺物を包含層中より検出した。顕著な遺構はみられなかった。

（3）小結

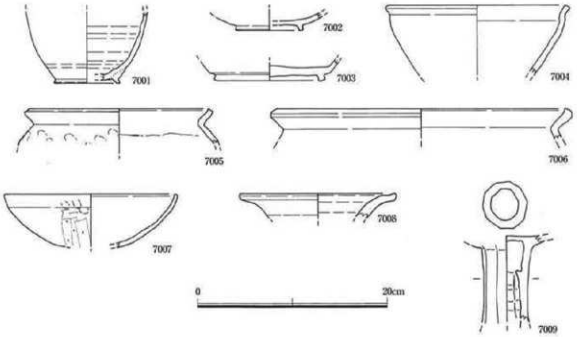
99－1区を除いては、顕著な遺構を検出できなかった。

瓜生堂遺跡北東部の古代の遺構の中心部は、当調査区より北側の、（財）東大阪市文化財協会45次調査区の近辺にあったと考えられる。（川瀬）

2．遺物

（1）土器　（図280、写真図版102）

1）各調査区の出土品



99－1区　第9面〔S01123（7001・7002）、S01150（7006）〕、第3・2面（7003）、第7・2面（7004）、第9・8面（7005）、99－2区　第5面〔S02150（7007）〕、99－4区　第3面〔S04040（7008）〕、99－5区　第2面〔S05010（7009）〕

図280　古代土器実測図（99－1・2・4・5区：遺構・包含層出土）

a．出土状況ほか

遺構に伴って遺物が出土したのは、99－1区の土坑S01123のみであり、ほとんどは包含層や上層の溝、流路に巻き上げられて出土した遺物である。その分布範囲は99－1区から99－5区に限られ、それより西では出土しない。

b．99－1区遺構・包含層出土

〔第9面土坑S01123〕(7001・7002)　(7001)は須恵器壺Lの体部下半から底部。底部内外面にわずかに自然釉が付着する。(7002)は緑釉陶器碗の底部。輪高台を有する。

〔包含層〕(7003～7005)　(7003)は須恵器杯Bの底部。8世紀代の遺物である。(7004)は須恵器鉢Dである。9世紀代の遺物である。(7005)は土師器甕の口縁部。内外面ともナデを施す。

〔第9面自然流路1（S01150)〕(7006)　99－1区の古墳時代の自然流路1中の最終堆積層中から出土した遺物である。(7005)に似た土師器甕口縁部である。

c．99－2区遺構出土

〔第5面自然流路1（S02150)〕(7007)　これも99－2区の古墳時代の自然流路1の最終堆積中から出土した遺物である。土師器椀A。外面にケズリを施す。9世紀前半頃のものである。

d．99－4区上層遺構出土

〔第3面溝S04040〕(7008)　99－4区の中世の溝からの出土である。須恵器壺の口縁部。内面に自然釉が付着する。

e．99－5区上層遺構出土

〔第2面溝S05010〕(7009)　99－5区の中世の溝からの出土である。土師器高杯の脚柱部。10面に面取りを施す。

f．小結

今回の調査において、古代の遺物は遺構ともども希薄である。(財)東大阪市文化財協会45－2次調査で検出した古代の集落の南端が99－1区まで広がると考えられる。よって、その影響が99－1区から99－5区周辺まで及んで微量ながら土器が出土するのであろう。　(川瀬)

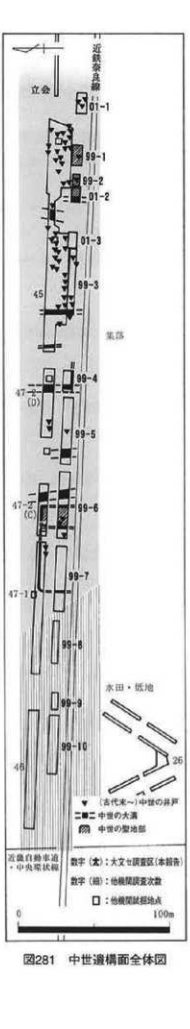


図281　中世遺構面全体図

第８節　中世以降の様相

１．遺構面と遺構（図281～333、写真図版38～53）

（１）概要

古代において限られた箇所でしか認められなかった遺構が、中世に入ると徐々に広がりをみせるようになる。

01－１区から99－10区までの中世遺構面の全体像を図281に示した。模式化して捉えるため、集落を象徴する井戸を点として示し、一定の幅の大きな溝を加えた。北接する（財）東大阪市文化財協会45－１・２調査区、東大阪市教育委員会46、47－１・２調査区についても併せて図示した。これをみるといくつかの特徴が読みとれる。

まず第一は集落の密度が濃いのは01－１区から99－６区までで、99－７区のコの字状の溝以西は全くみられない。第二に南北の溝は同規模、同方向で等間隔に存在する。また、集落は01－１区から99－３区周辺までを中心として密度が濃く、西にいくとやや疎らとなる。

ただ図281は時期的変遷は考慮せず中世の遺構を一括して図示しているので詳細はまとめの章に譲るとして、以下に簡単に時期別の変化の様相を記す。

古代遺構の検出域である、99－１区と01－２区にはさまれた地域と、99－６区の西半部で11～12世紀前半代に整地が行われる。これらの地区では２～３層に客土された様子が断面観察でもうかがえる。この若干高くなった地域にまず、小規模の集落が形成される。

その後12～13世紀に集落の範囲は徐々に広がり、13世紀代に全盛を迎え、01－１区から99－７区東端まで範囲を拡大する。集落域は99－７区のＹ＝－36200付近を西限とするようで、99－７区の溝Ｓ07005、土坑Ｓ07013より西では99－８区で畦畔の痕跡をみる以外は遺構はみられず、集落を形成するには不適当な湿潤な環境だったといえる。集落域はいくつかの群を形成し、遺構密度が高い部分と低い部分がみられる。東にいくと全体に広がって集落遺構がみられる。これは、北東部に接する岩田遺跡では中世遺構が顕著であり、これに連続する遺構と考えられる。

14世紀代にはいると集落の範囲が狭まり、集落域は消滅する。15世紀では南北方向の大溝が99－３区、01－２区、99－４区～６区などで形成される。いずれも幅４～５ｍ、深さ１～２ｍ程度の大きな溝で、各々の溝が40から50ｍのほぼ等間隔に並び、何らかの規則性をもつようである。溝の存続期間は15世紀から16世紀初めである。ただ、この溝に伴う集落に関連する遺構は検出されず、大溝が集落

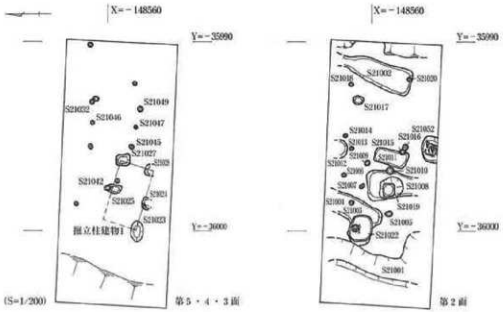


図282　中世遺構面平面図－1
(01－1区：第5・4・3面、第2面)

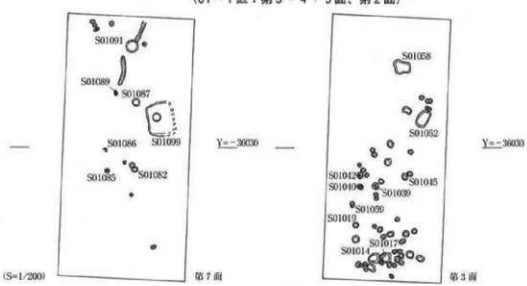


図283　中世遺構面平面図－2
(99－1区：第7面、第3面)

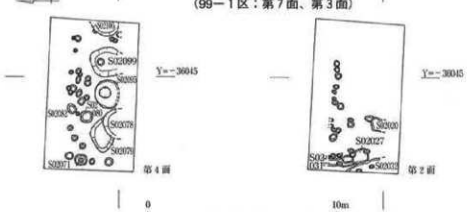


図284　中世遺構面平面図－3
(99－2区：第4面、第2面)

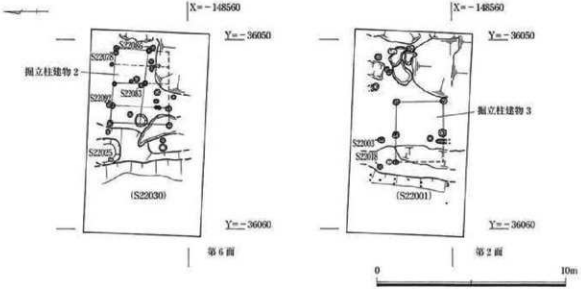


図285　中世遺構面平面図－４
（01－２区：第６面、第２面）

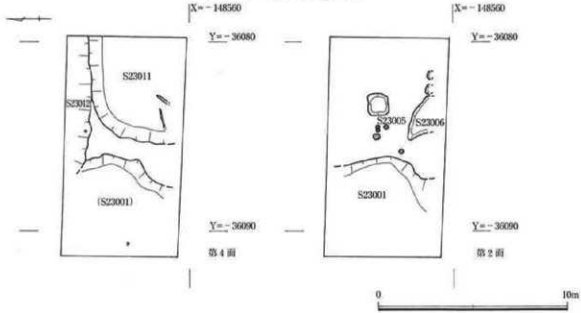


図286　中世遺構面平面図－５
（01－３区：第４面、第２面）

を区画する役割を果たしたとは考えがたい。

個々の調査区の遺構の詳細については、東から西の調査区へとみていきたい。

（２）集落域の様相

１）01－１区

本調査区では計４面の遺構面を検出した。ただし、第１面は機械掘削終了直後の近世以降の包含層下面と考えられる。また、第５面から第３面は大きな時期差はみられず、ほぼ同一期の遺構面を３回にわたって確認したと考える。よって、中世の遺構面としては２面を数える。

ａ．第５～３面

第５面から第３面は、図では同時に表した（図282）。T.P.1.9～2.0ｍが平均遺構面高である。やや大形の長円形か隅丸方形の柱穴５基からなる掘立柱建物１棟と小形の円形土坑10数基を検出した。

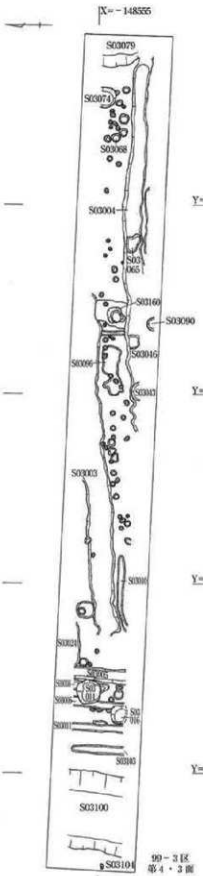


図287　中世遺構面平面図－6
（99－3区：第4・3面）

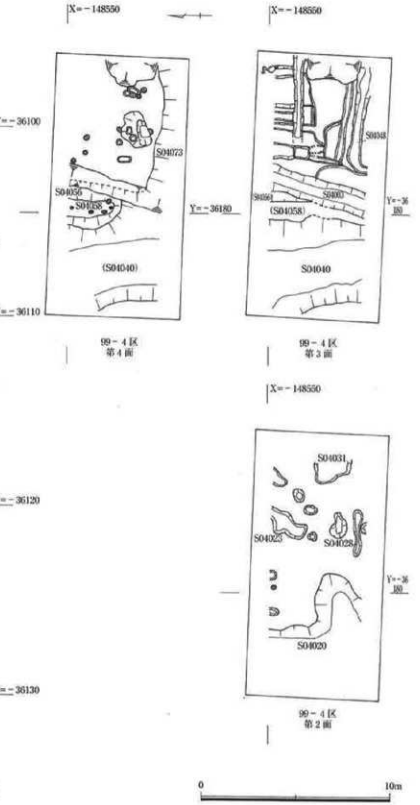


図288　中世遺構面平面図－7
（99－4区：第4面、第3面、第2面）

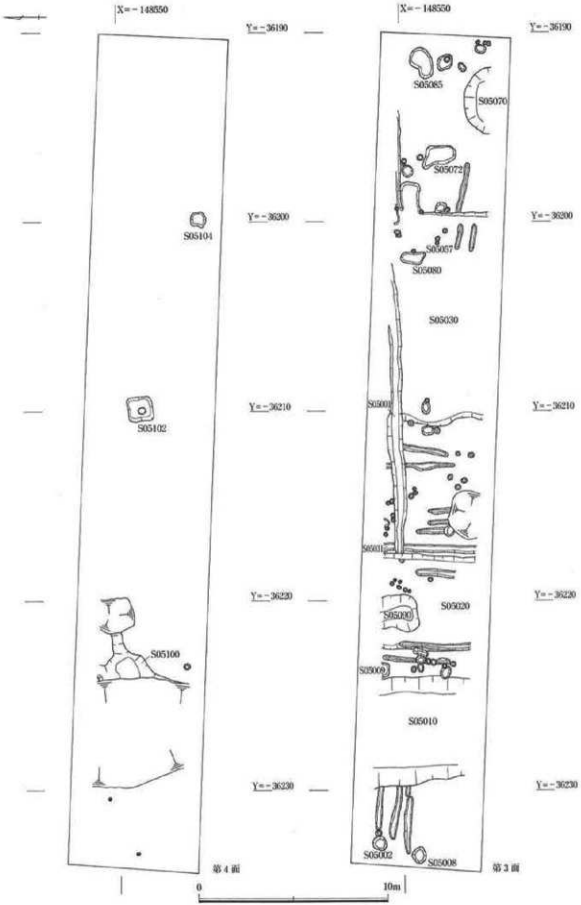


図289　中世遺構面平面図－8（99－5区：第4面、第3面）

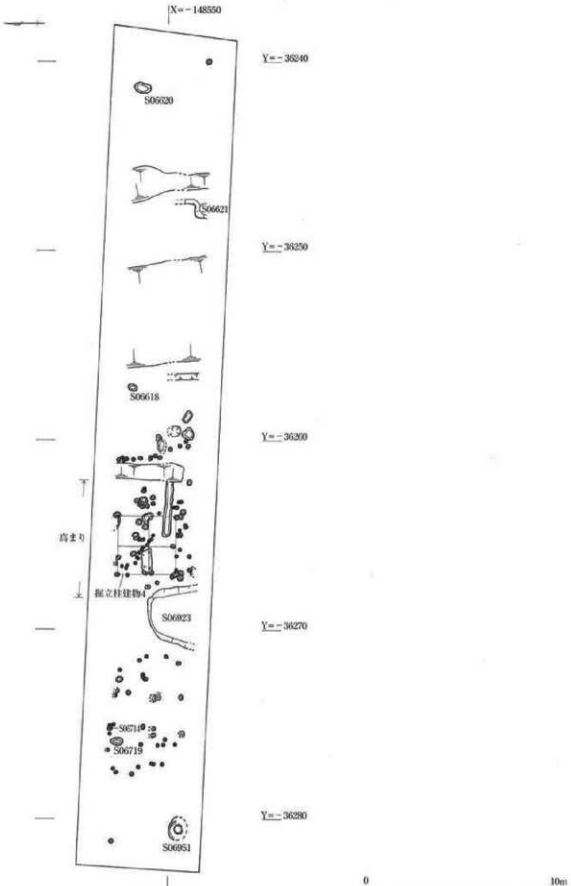


図290　中世遺構面平面図－9（99－6区：第5・4面）

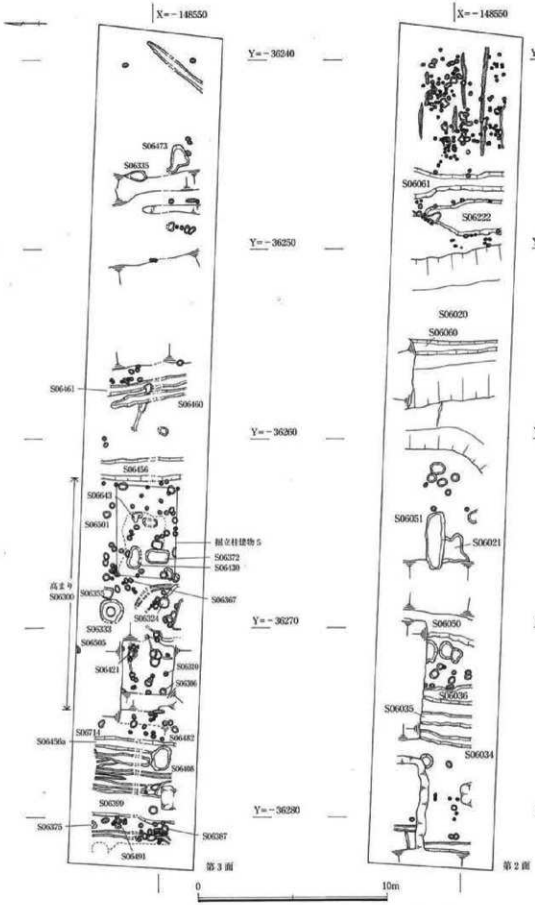


図291　中世遺構面平面図－10（99－6区：第3面、第2面）

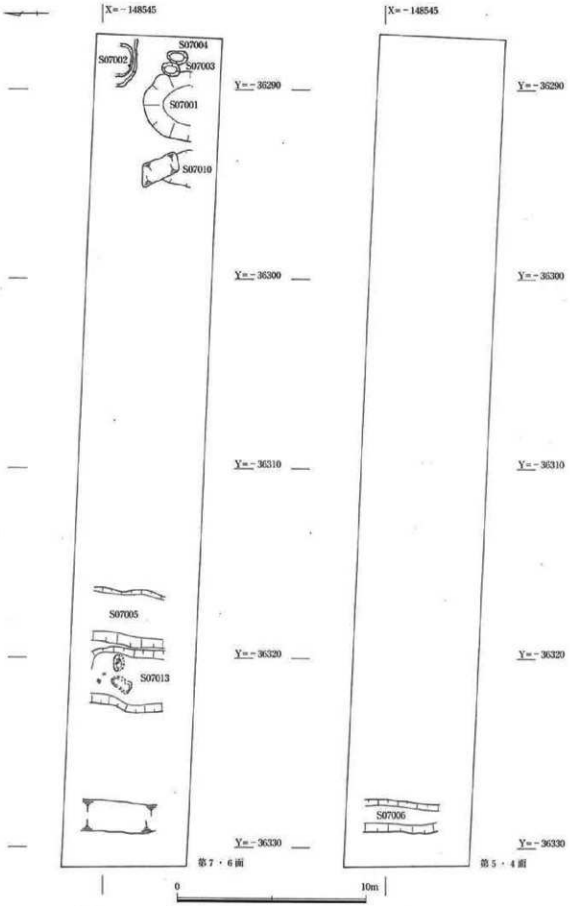


図292　中世遺構面平面図－11（99－7区：第7・6面、第5・4面）

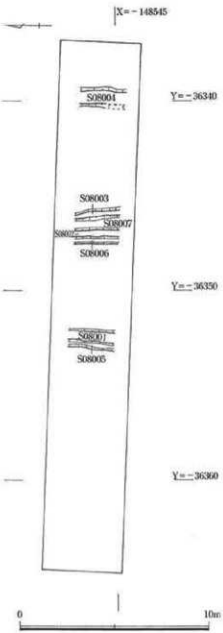


図293　中世遺構面平面図－12
（99－8区：第2面）

写真6　99－6区・東大阪市教育委員会47－2次C地区遺景

写真7　99－6区高まりS06300

写真8　99－6区溝S06456検出状況

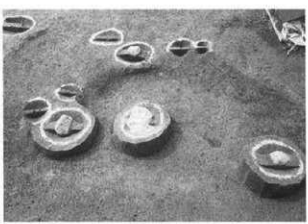


写真9　99－1区柱穴検出状況

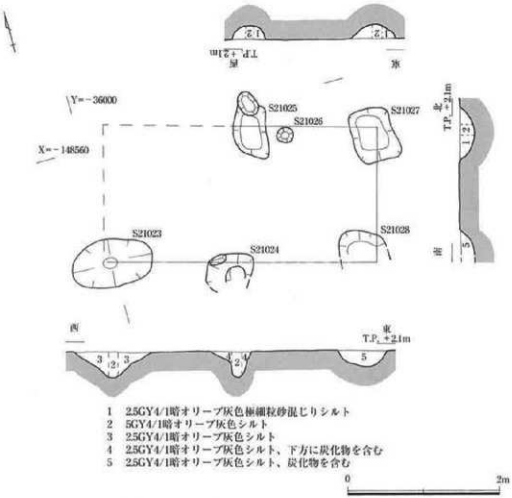


図294　01－1区第5面掘立柱建物1平面図・断面図

〔掘立柱建物1〕　大形柱穴は東西2列に平行に並ぶ。柱穴間の間隔が東西南北とも1間1.8mに揃い、南北軸と東西軸が垂直に交わることから掘立柱建物1が復原できる（図294）。柱穴の一つS21024からは、埋土上層より根石の一部として使われていたと思われる石が出土しており、他の柱穴にも柱根跡が識別できる。柱穴の掘方は短辺20cm、長辺30cm程度の隅丸方形か長円形であり、柱根跡は直径10cm、深さは第5面検出時で10～20cmであるので実際はもっと深かったと思われる。掘立柱建物1の北西端に柱穴はないが、上層の第2面で検出した井戸S21022がちょうどここに位置するので、本来はここにあった柱穴が、後世の遺構である井戸S21022によって攪乱され、消滅したと考えられる。

掘立柱建物1は桁行2間、梁間1間の建物として復原したが、建物の南側は調査区南端に位置しており、実際は更に南に柱穴が延びることも想定される。また、周辺では東西方向に等間隔に並び、建物の一部や柵列になる可能性のみられる遺構があるが、掘立柱建物1の柱列とは主軸が異なるため同一の建物の柱穴でないと判断した。

第5面から第3面は、検出した柱穴や包含層の出土遺物から12～13世紀代の遺構面と考える。

b．第2面

T.P.2.1～2.2mが平均遺構面高である。青灰色の極細砂～シルトをベース土とする。西端で大きな溝、以東では不整形や長方形の大形土坑、溝、柱穴、井戸3基などを検出した（図282）。南北方向の溝や長方形の大形土坑はいずれも主軸が真南北よりやや東にふる。遺構面が第5～3面より約20cm上昇してい

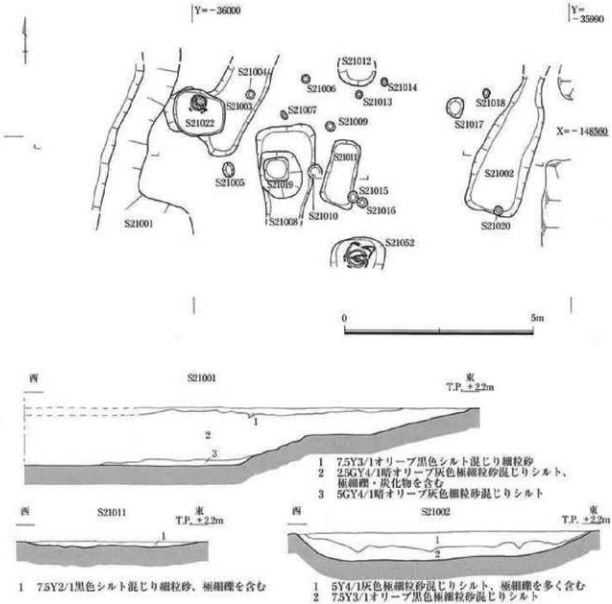


図295　01－1区第2面遺構平面図・断面図

る。井戸などの出土遺物から第2面は14世紀初め以降の遺構面と考える。柱穴は柱根跡等を断面で確認できたものもあるが、建物は復原できなかった。井戸は素掘りが1基、曲物転用井筒が2基である。

〔溝S21001〕　現存幅2.4m、深さ0.3mをはかる。南北溝で、南北とも調査区外へさらにのびる。溝の西肩は調査区外であるが、深さは0.3mで最底部までを検出した。推定幅4～5mである。出土遺物が少なく時期を特定できないが、01－1区より西でみられる中世後半期の大溝と規模が近似するので、15世紀以降に造営された溝と推測する（図295）。

〔溝S21002〕　幅1.6m、深さ0.2mの浅く緩やかに広がる溝で断面形が皿状をなす。北側は幅が半分に狭まる（図295）。

〔溝S21003〕　遺構の規模、主軸の方向が溝S21002と似ており、一対の溝の可能性がある。

〔井戸S21019〕　1.1m×1.2mの長方形の内部に一辺約0.6m方形を呈する2段掘りの掘方をもつ井戸である。下部掘方内に曲物、桶などの木片や羽釜などの井筒枠が認められなかったため、素掘

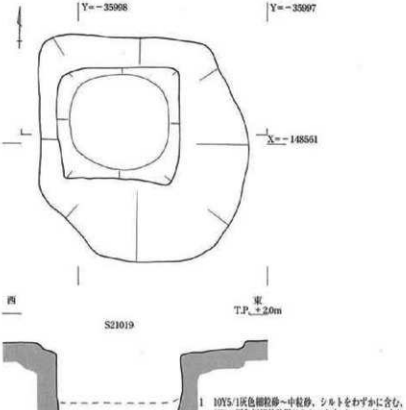


図296　01－1区第2面井戸S21019平面図・断面図

りの井戸と判断した。深さは0.6m程度と浅いが、遺構面上層が近現代の攪乱を受けて削平されており、この井戸自体はさらに上層から掘り込まれていた。和泉Ⅲ型式後半の瓦器椀や瓦器皿、白磁碗などが出土しており、14世紀初以降の遺構である（図296）。

〔井戸S21022〕　一辺約1.3mの掘方をもつ。最下層から曲物転用の井筒2段を検出した。これも上層は攪乱を受けていたため井戸と確認できたのが途中からとなった。現存の深さは0.85mをはかる。曲物井筒内外に板状木製品の破損したものが出土しており、後述の井戸S21052と同じく曲物井筒の外側を方形の木組で囲んでいた可能性が高い（図297）。曲物井筒は直径40cm、高さ20cmの側板を2段に積み重ねており、上段の曲物は廻し板をもつ。

和泉Ⅲ型式初めからⅣ型式初段階の瓦器椀や土師器皿が出土しており（図349）、時期幅があるが井戸S21019より使用開始時期が若干早く、14世紀初めに廃絶した井戸と考える。

〔井戸S21052〕　調査区南端で検出した。南側は矢板で遮られており、掘方の北半分のみを検出した。掘方は推定径1.4mである。中心の井筒は曲物が2組積み重なった状態で検出した。曲物井筒の外周を一辺0.55mの方形木組が取り囲む。木組は幅8cmほどの板を一辺に7、8枚並べたものだが、最下部10cmほどを残して上は欠損している。曲物は直径50cmと40cmで、高さ10cmの側板3段1組として構成され、2組（6段）が積み重ねられている（図298）。13世紀後半代の遺物を含む（図349）。図示し得なかったが井筒内からは東播系のこね鉢片やこれより新しい時期の遺物も出土している。井戸の構造からも01－1区で検出した他の井戸と同時期の14世紀前半を廃絶時期と考える。

2）99－1区

本調査区では計6面の遺構面を検出した。これも01－1区同様に盛り土の単位を一層ずつ除去して調査した面数が6面を数えたもので、遺構面の時期としては2～3時期に区分できる。主要な遺構面となる第7面、第3面、第2面について記述する（図283）。

a．第7面

平均遺構面高はT.P.1.9mをはかる。99－1区中世遺構面の最古面であり、北西部では中世の遺物包含

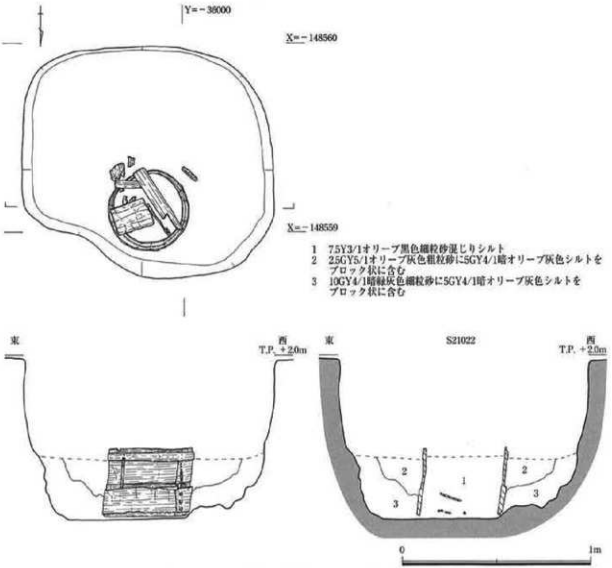


図297　01－1区第2面井戸S21022平面図・断面図

層が薄くなり、そこでは古代の遺構面と同一面となる。土坑、溝、井戸などを検出した。

〔井戸S01099〕 1.4×1.8mの長方形の掘方をもつ井戸である（図299）。掘方検出面からの深さは0.3mで、最下層より曲物の井筒を1段検出した。曲物井筒の直径は約40cmである。おそらくもっと上層から掘り込まれた井戸であるが、掘方が明瞭でなかったため、最下層に達するまで井戸と断定できなかった。

井戸以外の遺構については、機能や性格を決定できるものはなかった。土師器皿や椀底部が出土している（図334）。11世紀末から12世紀初めの遺構である。

b．第3面

平均遺構面高はT.P.2.0～2.3mである。主に調査区の西半で多数の土坑、ピットを検出した（図283）。このうち土坑のいくつかの底面から平らな石を検出した。おそらく建物柱の根石としていたもので、1.6m間隔に並ぶ土坑も認められたり、土坑が切り合い関係をもって一カ所にかたまることから、これらの土坑は柱穴となって掘立柱建物が存在していたと考えられる。しかし、いずれの柱穴も削平を受けて形骸化し、具体的に掘立柱建物を復原するには至らなかった。

S01045出土の土師器皿など、古代末から中世初めの特徴を示す遺物が出土している。

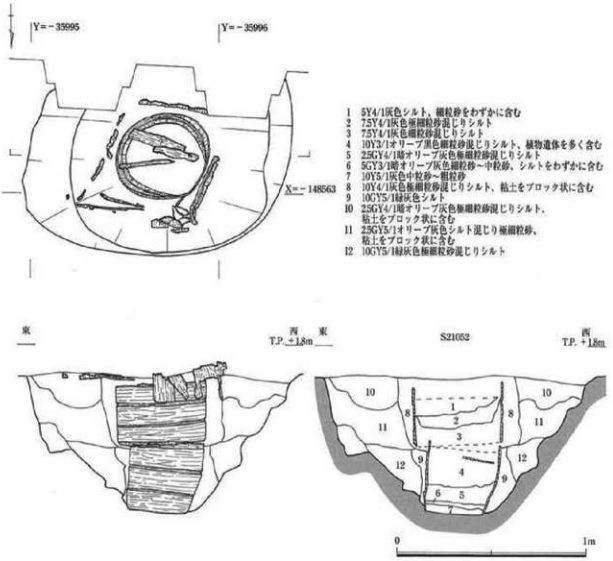


図298　01－1区第2面井戸S21052平面図・断面図

c．第2面

第2面は全体図を図示していない。土坑状の遺構S01006より土師器皿の集積が出土している。

〔土師器皿集積遺構S01006〕　長方形の浅い土坑のコーナーから土師器皿が5枚重ね合わされ、裏をむけた状態で出土した。地鎮祭祀などに関する遺構と考えられ、中世期に多数検出される。99－6区の第3面でも同様の土師器皿集積がみられた。いずれの土師器皿も14世紀前半のものである。

その他の遺構からは国産陶器なども出土しており、第2面は14世紀から15世紀の遺構面と考えられる。

99－1区の中世遺構面は遺物の出土量が少ないため明確な決め手を欠くが、最も古い遺構面が12世紀初め、最新遺構面が14世紀前半と考えられる。01－1区と同様に集落が継続して営まれていたといえる。

3）99－2区

本調査区では計4面の遺構面を検出した。99－1区同様数層の客土が行われていた。調査区全域に土坑、柱穴、井戸などを検出した（図284）。

a．第4面

平均遺構面高はT.P.2.2～2.3mである。柱穴、溝以外に大形の土坑を数基検出した。

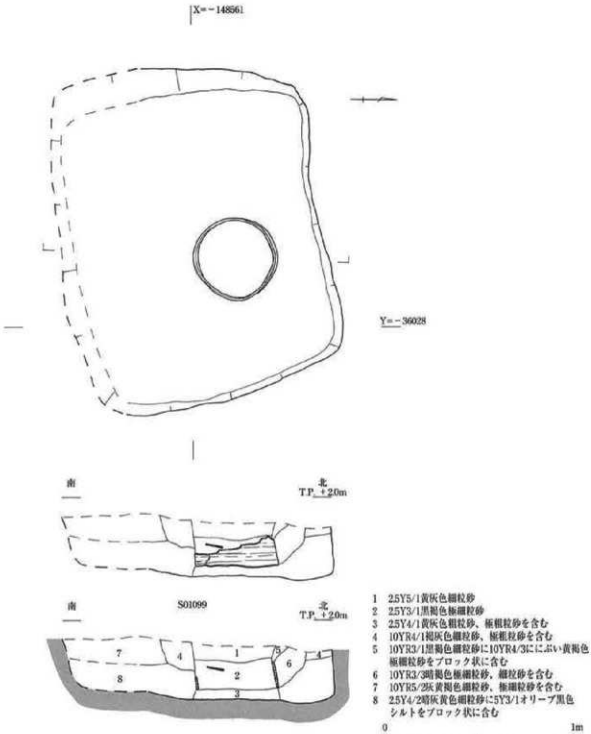


図299　99－１区第５面井戸Ｓ01099平面図・断面図

〔井戸Ｓ02095〕　第５面では井戸Ｓ02119として検出したが、同一遺構とみなして第４面Ｓ02095という表現に統一した。直径1.3～1.5mのやや長円形の掘方をもつ。深さは約1.0m。礫混じりの砂層を掘り抜いてつくられている。最下層水溜部に曲物井筒が１段、その上段にも曲物側板がわずかに出土しており、最低２段の曲物井筒があったことがうかがえる（図300）。

井筒内の最底部からほぼ完形の瓦器椀と土師器皿が重なって、上向けの状態で出土した。それ以外に、土師器小皿、瓦器皿なども出土している。瓦器椀は見込みに格子状ミガキをもつ和泉Ⅱ－１～Ⅱ－２型

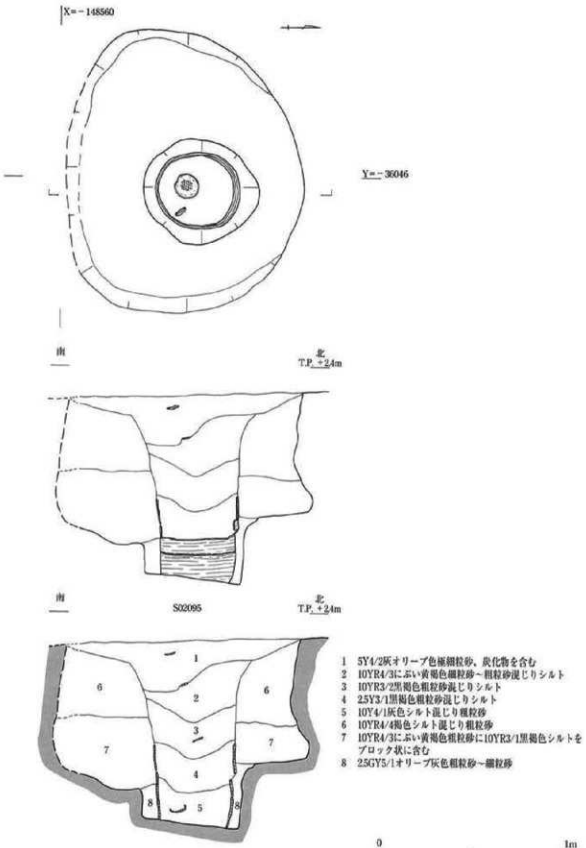


図300　99－2区第4面井戸S02095平面図・断面図

式のものである。瓦器皿など他の出土土器も一括性が高い同時期の資料であり、およそ12世紀前半代の井戸と特定できる。井戸Ｓ02095のように瓦器椀と皿を組み合わせて投棄する例は、古代から中世の井戸で多数報告されており、何らかの地鎮祭祀に関係すると思われる。

〔井戸Ｓ02099〕　井戸Ｓ02095の東側で検出した、掘方の直径３～４ｍをはかる素掘りの井戸である（図284）。土師器皿や瓦器皿が出土した。

第４面は12世紀前半代の遺構面として捉えてよかろう。

ｂ．第２面

平均遺構面高はT.P.2.5ｍ前後である。第４面と同じく柱穴、土坑、溝などを検出したが、下面の第５・４面に比べ遺構密度は希薄である。等間隔（1.8ｍ、1.6ｍ）に並ぶ柱穴を確認したが、建物を復原できなかった（図284）。12世紀代の遺構面と考えられる。

99－２調査区の遺構面はすべて12世紀におさまり、近接した時期を示す。01－１区、99－１区に連なる初現段階の集落の一群があったと思われる。

４）01－２区

本調査区では計６面の遺構面を検出した。01－２区でも、第２面から第６面の中世期において客土がなされており、客土の一層毎の時間経過は短期間である。建物が何時期かにわたり構築される。

ａ．第６面

01－２区中世遺構面の最下面である（図285）。平均遺構面高はT.P.2.1～2.2ｍである。調査区西側1/3を占める大溝Ｓ22030とそれに東接する大形の円形土坑Ｓ22025は、第４面で検出した上層遺構であるが、中世遺構面下位面として第６面から第４面を一括して説明する。

〔溝Ｓ22030〕　現存幅4.5ｍ、深さ0.9ｍをはかり南北に軸をとる溝である。軸の方向は正南北よりやや西にふる。溝の西肩は調査区よりさらに西に位置し、未検出である。溝の東肩から最底部までが約４ｍの水平距離をはかるので、溝Ｓ22030の推定幅は８ｍ程度になる。断面Ｕ字状をなす（図301）。

なお、本溝の埋土を切る上位面相当の溝Ｓ22001は、自然の流路でなく人為的に作られた溝であることは疑いないが、中世後半期の集落居館を区画する堀とは考えがたいものである。というのは、第６面でみられる土坑や柱穴は12～13世紀のものであり、むしろこれらの集落が廃絶後、この溝が作られたと考えるのが自然である。また、この溝Ｓ22001と溝Ｓ22030埋土との境界付近では、溝Ｓ22030東肩から約２ｍ離れたところに、護岸機能を果たすための土留めの板が杭を打ち込んだ間に横に差し込まれていた（後述のＳ22002）。ただこの板は溝Ｓ22030底までは到達せず、一次堆積の後に構築されたものである。

この最底部から土留めの板の間の溝堆積に含まれる遺物は瓦質土器・陶器等があり、主に15世紀代を示す。土留めの板が打ち込まれた後は幅を縮小しながらも溝として引き続き機能していたようであるが、自然と埋没した様子がうかがえる。縮小した第二次段階の溝の堆積には15世紀以降近世までの遺物が含まれるので、第二次段階の溝の改築、造成は15世紀以降と推定される。第一次段階の溝を溝Ｓ22030、第二次段階の溝を溝Ｓ22001とした。溝Ｓ22001上層は関西電力の鉄塔が埋設されていたために大きく攪乱を受けており、埋没の時期は不明である。

〔土坑Ｓ22025〕　溝Ｓ22030に西を接するほぼ円形の大形土坑である。直径3.0ｍ、深さ0.9ｍをはかり、掘込みは急角をなす（図301）。埋土の上層南西部で建物の根石に使われるような人頭大の平らな石を検出したが、この石は原位置を保っていないので用途は不明である。土坑Ｓ22025は井戸であった可能性もあるが、井筒等の井戸に関係する施設を検出しておらず、機能を限定し得なかった。時期についても遺

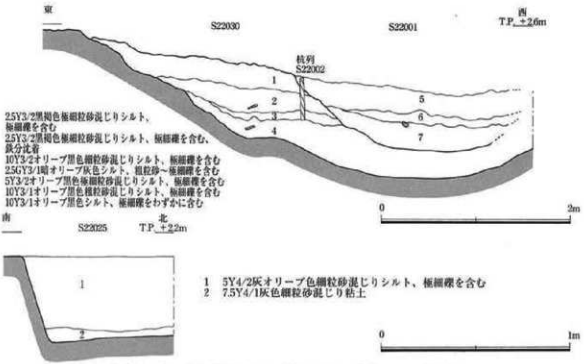


図301　01－2区溝S22001・溝S22030・土坑S22025断面図

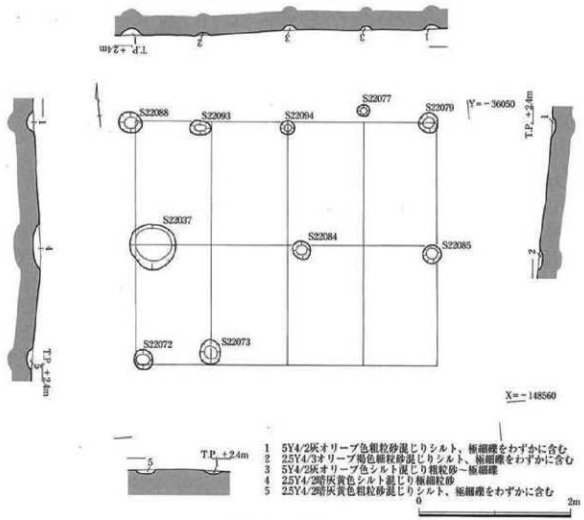


図302　01－2区第6面掘立柱建物2平面図・断面図

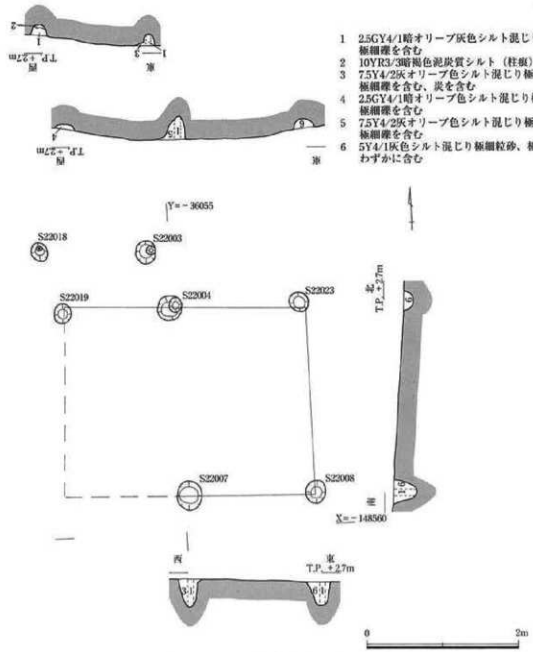


図303　01－2区第2面掘立柱建物3平面図・断面図

物が少ないが、12世紀から13世紀の遺構と考える。

〔掘立柱建物2〕　他に、調査区東半のほぼ平坦な遺構面から建物柱穴、土坑を多数検出した。この中で等間隔、同じ規模の柱穴を結んで掘立柱建物2を復原した（図302）。梁間2間×桁行4間の建物としたが、柱間の間隔は梁間が1.5m、桁行が1.0mと異なる。東西を棟とする総柱建物であるが、南東側は柱穴が攪乱等によって失われている。

b．第2面

平均遺構面高はT.P.2.5～2.6mである。第6面以降第2面まで数度にわたって客土されており、10cmから20cmの単位で土が盛られている様子が断面で観察できた。溝、土坑、柱穴などを検出した（図285）。

第6面でも述べた溝S22030の上層遺構溝S22001はこの面に相当するものである（図301）。

〔溝S22001〕　調査区西側1/3を占める大溝S22001は下位遺構の溝S22030が途中まで埋没したとこ

ろを再利用してつくられている。溝幅を溝Ｓ22030の4.5mから2.5mに狭めている。深さは1.0m。特筆すべきは溝の肩部に杭列Ｓ22002を検出したことにある。

杭列Ｓ22002は、杭を千鳥状に交互に並べて打ちこみ、杭と杭の間には横板を渡していた。土砂の流失を防ぐ土留めの役割を果たすこの横板の残存状態は悪い。溝Ｓ22001は15世紀以降近世まで存続した溝と考えられる。

〔掘立柱建物３〕　第２面ではそれ以外に土坑や柱穴10数基を検出した。そのうち深さがあって柱根跡も観察できる柱穴をつないだところ、掘立柱建物３が復原できた（図303）。現状では、柱間隔が桁行1.6m、梁間2.5mの東西を棟とする１間×２間の建物である。ただし、遺構面の東部が攪乱で大きく削平されていて、柱穴の存在も不明であり、また建物の南側は調査区よりさらにのびる可能性がある。実際は２間×３間ないしは２間×４間程度の建物だったと推定する。また、柱穴Ｓ22004・Ｓ22019の北に約１m離れて、柱穴Ｓ22018・Ｓ22003が建物柱穴のＳ22004・Ｓ22019と同じ1.6m間隔で並ぶので、この建物は庇をもっていた可能性も若干考えられる。

第２面に関しても、Ｓ22001以外の掘立柱建物や土坑は13世紀を中心とする年代を示す。

本区では、時期の異なる遺構を同一遺構面で検出し、その状態で報告してきたためわかりにくくなったが、ここで出土遺物類を勘案して再整理しておくと次のようになる。第６面は、土坑Ｓ22025等が12世紀から13世紀と推定できるので、その時期の遺構面と判断できる。また、第２面の年代は13世紀と捉える。したがってこの時期に属する集落が廃絶された後に、第６面として提示した溝Ｓ22030（15世紀）、さらに第２面とした溝Ｓ22001（15世紀～近世）がつくられたといえる。

５）01－３区

本調査区では計４面の遺構面を検出した。01－３区では第２面から第４面では検出面のレベル差がほとんどなく、きわめて近接した時期の所産を３回に分けて調査したが、便宜上調査時のまま第２面から第４面の呼称を踏襲する。これらの面は、すべて中世末期から近世にかけての遺構と考える（図286）。

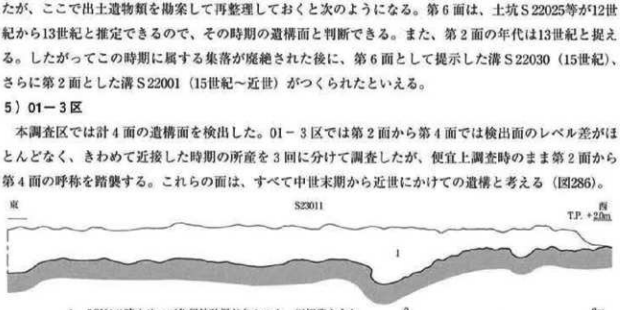


図304　01－３区第４面池Ｓ23011断面図

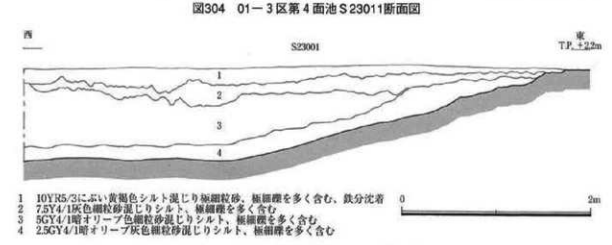


図305　01－３区第２面溝Ｓ23001断面図

a．第4面

遺構面の平均高はT.P.1.8～1.9mである。中世後半以降の遺構面で、東半では池Ｓ23011、調査区北端では東西方向にのびる溝Ｓ23012を検出した。

〔池Ｓ23011〕　現存東西長6.3m、深さ0.6mをはかる（図304）。北西角だけが検出できたにすぎず、南と東にさらに拡張するので、実際の遺構は調査区で検出されている数倍の面積をもつと推定する。池内から、中世にはさかのぼらないと判断できる柱や梁に使ったと思われる角材の建築部材が出土した。13～4世紀代の土師質羽釜も出土する。

〔溝Ｓ23012〕　そのほとんどが調査区外であり、南肩を検出したにすぎない。現存長7.0mをはかる。土師器皿が出土。

遺構や包含層に13世紀から14世紀の遺物が含まれることから、元来は当該期の遺構面が形成されていたのが、後世の池や溝の造成によって削平、消滅したと推測する。

b．第2面

遺構面の平均高はT.P.1.9～2.0mである。機械掘削を終えた直後に検出した面で、中世後半よりむしろ近世の所産である。調査区西半で南北方向の溝Ｓ23001、東半で大形方形土坑、不定形の土坑などを確認した。

〔溝Ｓ23001〕　幅5.7m以上、深さ1.0mをはかる（図305）。調査区西半を占めて不定形に広がる南北方向の溝である。Ｓ23011と同じく池とした方がよいかもしれない。中世の土師質羽釜が出土するが、それ以外には近世以降の陶磁器や連珠文軒平瓦などをふくみ明らかに近世の所産である。

溝Ｓ23001以外には、大形の方形土坑Ｓ23005等がみられるが、性格は明らかでない。

01－３区にほど近い（財）東大阪市文化財協会の45－２次調査区では、近世の遺構として平坦面に溝や灌漑用の井戸を検出している。遺構の連続性は追えないが、近世にはこの周辺一帯は畑などの生産域として利用されていたといえる。

6）99－３区

99－３区は長さが東西約50mにも及ぶ細長い調査区である。本調査区では計３面の遺構面を検出した。

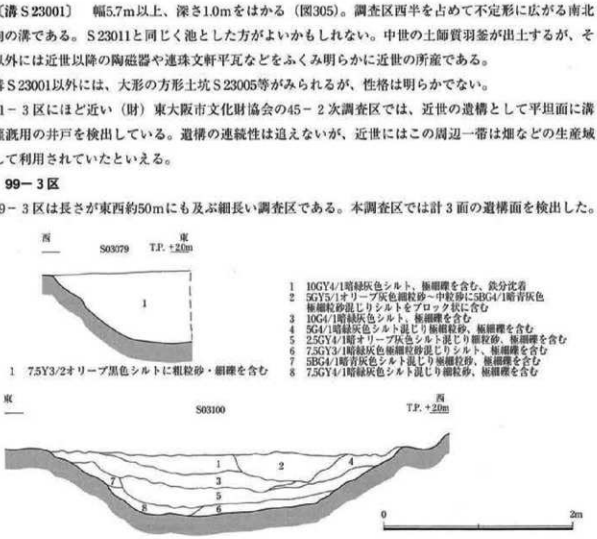


図306　99－３区第３面溝Ｓ03100・溝Ｓ03079断面図

99－３区は中世前期以降、地面が安定していたようで洪水などの浸食を受けることなく、中世前期から近世までの遺構が同一遺構面で検出できる。平均遺構面高はT.P.1.7～1.8mである。

a．第４・３面

第３面で主たる遺構を検出したが、第４面はその確認調査を行った面で、同一遺構面として図示した（図287）。

〔溝Ｓ03003・溝Ｓ03004〕　東西方向約20mの長さをもつ２条の溝である。瓦質土器や18世紀後半代の国産染付磁器を含むことから、近世にできた溝であろう。溝Ｓ03003と溝Ｓ03004ともに機能・用途は不明だが規模が似ており、対をなす溝と考える。この溝以外にも99－３区全域で磁器の他に土人形や寛永通寶、キセルや足袋のこはぜなどの近世に属する遺物が出土している。18世紀後半以降に形成された集落が存在したといえる。この集落は近世以降の岩田村に続く集落と考えられる。

中世期の遺構は南北方向の溝Ｓ03100や溝Ｓ03079その他のいくつかの南北溝、井戸敷基と土坑、柱穴などを検出した。

〔溝Ｓ03079〕　調査区の東端で検出した南北溝である。東端は調査区外で未検出である。現存幅1.5m、深さ0.8mをはかる（図306）。01－２区で検出された溝Ｓ22001・Ｓ22030からの距離は約30mである。99－３区西端で検出した溝Ｓ03100との距離も約37mで、大溝間の距離は一定の規則性があるといえる。Ⅲ～Ⅳ型式の瓦器椀の他に染付碗片なども含む。時期比定が難しいが、14世紀以降の溝とする。

〔溝Ｓ03100〕　99－３区西端に位置する。幅4.0m、深さ1.0mをはかる大溝である。断面Ｕ字状で埋土は人為的な埋め戻しは認められない。自然堆積を示し、何層かに分層できる（図306）。埋土の上下層ともに軒丸瓦や、埴輪、14世紀前半の瓦器や土師器皿、15～16世紀の瓦質土器、陶器などの大量の遺物を含む。溝Ｓ03100の使用時期も15世紀を中心とする年代と考える。

溝Ｓ03100以外にも99－３区の広範囲にわたって埴輪片が出土している。出土量では西側の99－４区から99－６区に比べ少量で、５世紀末～６世紀前半の時期を示す。99－４区から99－６区の出土埴輪より

表17　瓜生堂遺跡井戸一覧表

遺構番号	地区名	遺構面	分類	木組		井側			掘方			時期	備考
				内法寸法(cm)	形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	形状		
S21019	01-1	2	曲物?	－	－	東西65 南北60	－	方形	55			13世紀	
S21022	01-1	2	曲物積上	－	－	径40	22+15	円形	東西124 南北125	85	隅丸方形	13～14世紀	2段、上に桶の底部
S21052	01-1	2	曲物積上	W55×55	方形	径43	33+37	円形	東西140 南北ヤ	64	近円形	13世紀	2段
S01099	99-1	7	曲物積上	－	－	径45	18	円形	東西140 南北160	30	隅丸方形	11世紀後半～12世紀前	
S02995 (S直線でS2502119)	99-2	4	曲物積上	－	－	径45	48	円形	東西130 南北150	100	近円形	12世紀初～前半	瓦器・瓦器椀出土
S03015	99-3	3	曲物積上	－	－	径40	9	円形	径80×100	74	近円形	12世紀初～前半	
S03014	99-3	3	曲物積上	－	－	径40	21+33+10		径130×140	120	近円形	12世紀前半～中葉	3段
S03104	99-3	3	土師器羽釜積上	－	－	径30	40		－	－		12世紀後半～14世紀	2または3段
S03160	99-3	3	桶側積上	－	－	径50	20		径80	28	近円形	12世紀～	
S03090	99-3	3	桶側積上	－	－	径55	128	円形	径200	130	円形	15世紀後半～	2段
S05102	99-5	4	曲物積上	－	－	径35	67(25+210+20)	円形	径110×130	85	隅丸方形	14世紀前半	3段
S05079	99-5	3	桶側積上	－	－	径70～80	480 (50+90+90+80+110+90+90)	円形	径340	490	近円形	近世	補修6段、最上段に井戸瓦
S06333	99-6	3	曲物積上	－	－	径40	65(23+21+24)	円形	径120	125	円形	12世紀前半	3段
S06951	99-6	3	曲物積上	－	－	径44	38(12+14+14)	円形	径110	62	近円形	－	上に桶の底部、3段
S06505	99-6	3	曲物積上	－	－	径50	30		－	－		－	2段？

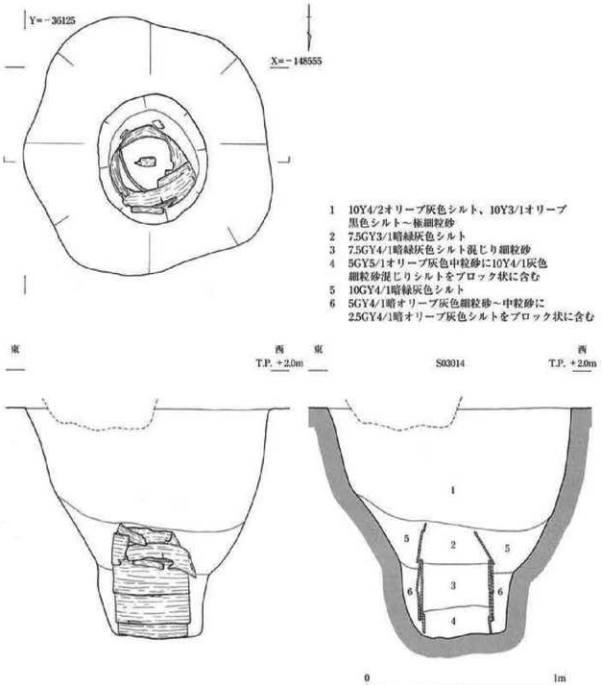


図307　99－３区第３面井戸Ｓ03014平面図・断面図

若干新しく、この周辺での複数あるいは複数時期の埋没・削平古墳の存在が示唆される。

溝Ｓ03100の東側にも南北方向の細い溝が４条等間隔に並ぶ。溝Ｓ03100と平行するので同時期の関係する溝とも考えられる。後述の井戸Ｓ03014との切り合い関係からみると井戸Ｓ03014より古い。井戸Ｓ03014は13世紀末から14世紀初めの遺構であるので、それ以前につくられた溝になる。14世紀代から南北方向を意識した溝が作られていたといえる。

井戸を数基検出した。井戸は調査区西半の南北溝群の東側に位置するものが多いが、それ以外の場所にも点在する。円形の掘方で井筒は曲物を転用したものが多い。

〔井戸Ｓ03014〕　溝Ｓ03100の東側、溝Ｓ03005と溝Ｓ03006の間に位置する。井戸Ｓ03014は99－３区

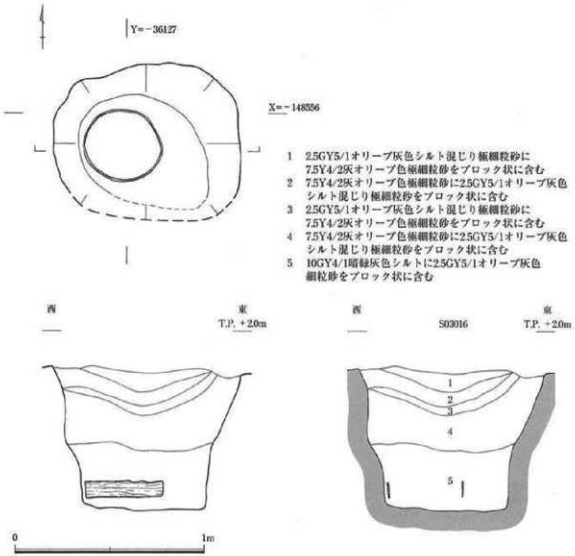


図308　99－３区第３面井戸Ｓ03016平面図・断面図

で検出した井戸の中では最も残存状況がよい。直径約1.4m、深さ1.2mの円形の掘方内に３段の曲物を積み重ねて井筒とする（図307）。曲物の直径は約40cm、曲物３段を積み重ねた高さは0.6mである。掘方の下部は曲物の直径にあわせた形状だが、上部はすり鉢状に開く。出土した瓦器椀や土師器皿の型式から13世紀末から14世紀初めの遺構といえる。

〔井戸Ｓ03016〕　直径１mの円形掘方をもつ曲物井戸で、井戸Ｓ03041の南側、調査区西南部で検出した（図308）。深さが0.7mと浅いのは、上部が後世の削平を受けているためで、最下層に直径約40cmの井筒に転用された曲物が１段のみ出土した。曲物の残存状況は悪く、側板が部分的に認められるのみである。曲物の現存高10cm。和泉Ⅱ型式前半の瓦器椀と同時期の土師器皿が出土しており、12世紀前半代の遺構である。第４・３面で検出した遺構中で最古段階に属する。

〔井戸Ｓ03104〕　調査区の西端で検出したが矢板が打設された際に掘方の半分以上が欠損しており、土師質羽釜を転用した井筒を部分的に検出した（図309）。土師質羽釜は最低４個体あり、いずれも上向きに積み重なった状態であったが、半分以上が欠損する。羽釜の形態から13世紀後半から14世紀代の井戸であろう。今回の調査で検出した、羽釜を積み重ねて井筒とする井戸は、これのみである。13世紀以降、羽釜積み上げ井戸は河内地域でよくみられるものであるが、今回検出例は全調査区で２基と比率的

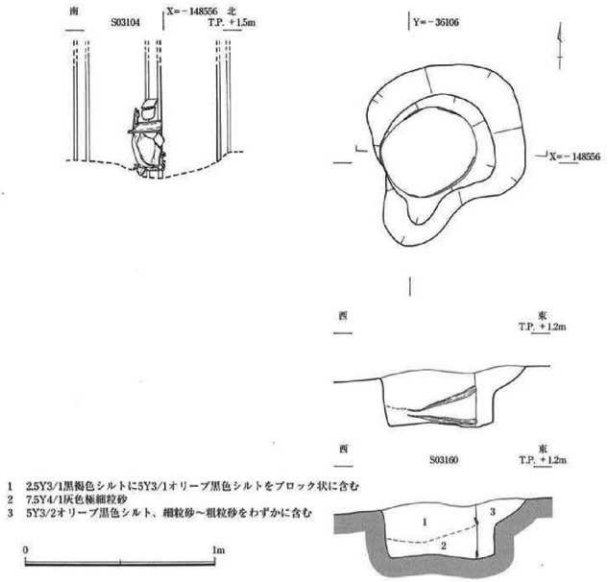
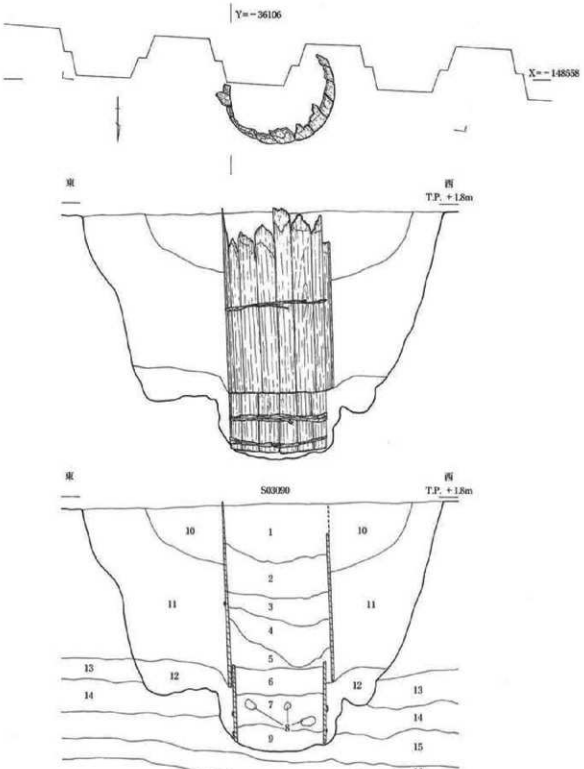


図309　99－3区第3面井戸S03104・井戸S03160平面図・断面図

に少ない。ただし、(財) 東大阪市文化財協会45－2次調査区では瓦質羽釜の積み上げ井戸が多数報告されており（東大阪市文化財協会1999c)、13世紀後半遺構の集落の中心が北側に移っていったと考えるのが妥当であろう。

〔井戸S03160〕　調査区東半で検出した。近世の溝S03003・S03004の間に位置し、後世の削平をかなりうけているため、最底部にあたる深さ30cmしか残存しない。遺存状況はきわめて悪く、井筒も円形に木片がわずかにみられることから曲物井筒と推定できるのみである。井筒の直径50cm、掘方の現存径が0.8mである（図309)。出土遺物が少ないが、13世紀以降の遺構であろう。

〔井戸S03090〕　調査区の南壁中で検出したため、掘方は推定でしかはかれないが直径2.0mの円形である。深さ約1.3mで、桶側板を2段に重ねたものを井筒とする（図310)。上段の桶上部は欠損しており、更に上にも桶材が重なっていたと推測できる。桶側板は幅10cmの板15～20枚をたがで結わえたものである。板の幅は上下段とも同じであるが長さは上段の板が1.0mあるが、下段は0.4mと異なる。桶は上段の直径が55cm、下段の直径が45cm。桶は転用品でなく、初めから井筒用に作られたものか。曲物積み上げ井戸よりも桶を重ねて井筒とする形式の井戸は形態的に新しいものであり、近世に多くみられる。出



1　2.5Y3/1黒褐色極細砂混じりシルト、植物遺体（種子？）・炭化物を含む
2　2.5Y2/1黒色シルト、礫状砂をわずかに含む
3　2.5Y2/1黒色シルト、細礫を含む
4　2.5Y3/1黒褐色極細砂混じりシルトに10Y5/1灰色極細砂をブロック状に含む
5　7.5GY5/1暗緑灰色シルト混じり細砂
6　10Y4/1灰色極細砂混じりシルトに2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土をブロック状に含む
7　7.5Y5/1灰色細砂～中砂、極細砂礫を含む
8　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土をブロック状に含む
9　10Y4/1灰色極細砂
10　7.5Y4/1灰色シルト混じり極細砂に7.5GY4/1暗緑灰色極細砂をブロック状に含む、2～5mmの礫が混じる
11　7.5GY3/1暗緑灰色シルトに10GY4/1暗緑灰色シルトをブロック状に含む、細砂砂が混じる
12　7.5GY4/1暗緑灰色細砂に5Y3/1オリーブ黒色細砂混じりシルトをブロック状に含む
13　7.5GY4/1暗緑灰色極細砂混じりシルト、ラミナあり
14　10Y5/1灰色細砂～中砂、ラミナあり
15　5Y3/1オリーブ黒色細砂～粗砂、ラミナあり
16　10Y4/1灰色極細砂～細砂、植物遺体を大量に含む

0　1m

図310　99－3区第2面井戸S03090平面図・断面図

土遺物も確実な近世所産品はなかったが、瓦質の甕や羽釜などであり、15世紀後半以降、16世紀代以降に入る遺構である。99－3区で検出の井戸の中で最も新しい。

また、調査区中央より東で柱穴を多数検出したが、調査区の南北範囲が狭く、また、後出する溝S03003と溝S03004が広く占めているため、建物を検出し得なかった。柱穴に含まれる遺物の多くが、S03090以外の井戸と同時期の13世紀後半代から14世紀前半代を示す。

従って、第4・3面に現れる遺構は、まず12世紀代に井戸を伴う小規模な建物群で構成される集落が14世紀まで形成されるが、集落の中心は次第に99－3区外のより北側に移動していったと考えられる。その後いったん断絶を経て、18世紀後半に入って再び集落として土地利用されたのだろう。

7）99－4区

本調査区では計3面の遺構面を検出した。古墳時代の大きな流路の氾濫堆積によって、地表が2m近く上昇する。その後は地盤が安定し、99－3区と同様に古墳時代から中世後半、近世初頭までの遺構が、同一遺構面で検出された。客土は見られない。

a．第4面

中世の遺構は南北から東西へL字状に曲がる大溝S04040・S04073やそれに付随する築地状の遺構S04058がある（図288）。L字状の溝のうち南北方向を溝S04040、東西方向をS04073と別個の遺構名称を与えて調査した。また、北東部の浅い窪みに古墳時代中期の円筒埴輪や須恵器が集積した状態で検出されている（埴輪集積遺構S04001）。この溝状の窪みは古墳時代の遺構ではなく中世期のものである可能性もあるが、中世期の遺物を全く含んでいなかったので、先述のように本遺構で唯一の古墳時代遺構と判断した。従って、同じ99－4区第4面とした遺構面平面図（図250・288）では、古墳時代と中世に分けて図示している。

表18　瓜生堂遺跡大溝一覧表

単位：（ ）は推定復原

遺構番号	地区名	遺構面	規模			方向	時期	備考
			検出長(m)	幅(m)	深さ(m)			
S21001	91-1	2	(4)	(2.4)	0.3	南北	－	
S22001	91-2	2	(4)	(2.5)	0.6	南北	14世紀前半～15世紀	S22030を利用して土層にS22001が形成される
S22030	91-2	3	(4)	(4.5)	0.9	南北	15世紀後半	
S23001	91-3	2	(4.5)	(5.7)	1.0	南北	13世紀後半	
S23100	99-2	3	(4.5)	4.0	1.0	南北	14世紀代廃絶	
S03029	99-4	3		(1.5)	0.8	南北	12世紀～近世	S03100と対
S04040	99-4	3	(7.0)	4.6	1.6	南北	15世紀後半以降	S04003と(平面)に連なる
S04020	99-4	2	(7.0)	(3.8)	－	南北	－	
S04073	99-4	4	8.0	(2.0)	1.0	東西	?	
S04003	99-4	3	(7.5)	2.4	0.7	南北東	近世	
S05010	99-5	3	(7.0)	6.0	1.7	南北	15世紀後半以降	
S05001	99-5	4	(13.0)	0.6	0.2	東西	14世紀前半	
S06456	99-6	3	(6.8)	1.2	0.5	南北	－	高まりを区画する溝
S06456a	99-6	3	(6.8)	0.6	0.37	南北	－	高まりを区画する溝
S06020	99-6	2	(6.7)	10.5	1.0	南北	15世紀後半以降	
S06061	99-6	2	(6.8)	0.9	0.2	南北	15世紀	
S06050	99-6	2	(0.4)	(0.8)	0.1	南北	13世紀後半	
S06460	99-6	3	(5.5)	0.5	0.1	南北	－	
S06461	99-6	3	(6.8)	0.4	0.1	南北	－	
S07005	99-7	7-5	(6.6)	3.0	1.0	南北	12世紀後半～13世紀前半	

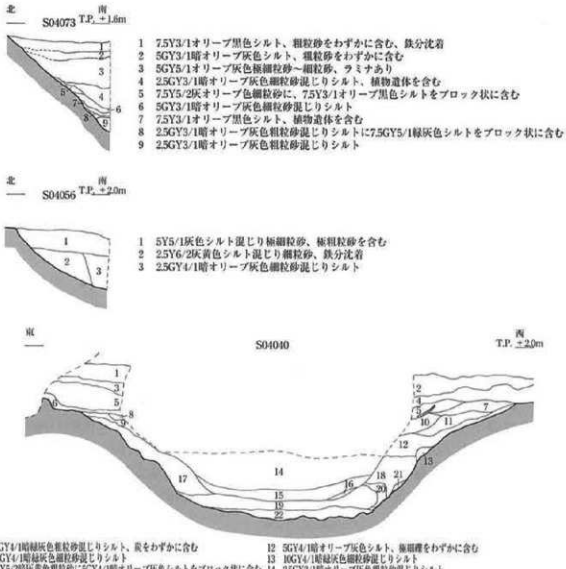
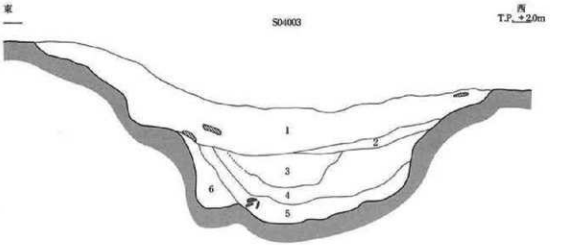


図311　99－4区第4面溝S04073・S04056、第3面溝S04040断面図

〔溝S04073〕　調査区南端を東西にはしる溝である（図311）。北端のみの検出となった。断面はV字もしくはU字状をなす。下部の堆積層が薄く、上部の堆積層が厚いことから、排水溝として機能していたが、ある時期に一挙に埋没したと考えられる。推定幅2.0m、深さは1.0mである。南北の大溝S04040にとりついて集落を区画する役割を果たしていたと考える。溝S04040は上層の第3面で検出した溝だが、次に述べる築地状遺構S04058の存在から第4面時にも同様の南北区画溝が造営されていたと推測する。この溝S04073の造営時期は出土遺物がほとんどなかったことから不明である。

〔溝S04056〕　築地状遺構S04058の東肩の凹部分にあたる南北溝であり、S04058を挟んで溝S04040と平行する南北溝であるが、上層の溝によって切られているためわずかの検出にとどまった(図311)。



1　2.5GY2/1黒色シルトに5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂をブロック状に含む、焼土塊・炭・瓦・木片を多く含む
2　7.5GY4/1暗緑灰色シルト混じり極細粒砂
3　10G4/1暗緑灰色シルト、焼土塊・炭を含む
4　5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト、焼土塊・炭を含む
5　5Y2/1黒色シルト混じり細粒砂、焼土塊・炭を含む
6　10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルトに10GY5/1緑灰色極細粒砂をブロック状に含む

図312　99－4区第3面溝S04003断面図

実際は東西の溝S04073まで延伸していたと考える。

〔**築地状遺構S04058**〕　溝S04040と溝S04056に挟まれた、断面台形状に土盛りした遺構である。おそらく両岸の溝を掘削した土を土台とし、さらに盛土して土塁状に築いている。調査区北端から続いており、北端から南に2.4mの長さで終わる。上部は幅1mで、高さ約0.5mをはかる。西側では、溝S04040の肩に沿って南北に柵（杭）を打設した跡と想定される柱穴を数基検出した（図313）。土塁を築きさらに柵を巡らすことや、上記の溝S04073・S04040のL字溝の存在は、溝・築地状遺構内側の集落を区画したり、防御する役割をもっていたと想定できる。

第4面は明確な年代決定の決め手を欠くが、およそ14世紀代の遺構と考える。

b．第3面

平均遺構面高はT.P.1.8mである。 中世後半期の遺構面と考える。大溝S04040やその上に切り合う溝S04003、東西方向の溝数条が主な遺構である（図288）。

〔**溝S04040**〕　調査区の西側に位置する。幅4.6m、深さ1.6mをはかる、南北方向の大溝であり、集落を区画する役割を果たすと考える。断面形状は緩やかなU字状をとる（図311）。溝の両肩部分には護岸のために粘土を貼った様子が部分的に観察できたところもある。土層断面や出土遺物からも埋没の過程に何段階の時間経過があったようで、長期間存続した溝と考えられる。大量の瓦質土器を主とする土器、陶磁器や瓦、埴輪片などの遺物を含む。遺物の主要な年代は14世紀前半から16世紀であるが一部に近世初期までの遺物を含むので、200～300年存続したようである。埴輪を多く含むのは、調査区北東部にみられた埴輪集積遺構や古墳等が中世期までは存続していたのが、大溝S04040使用期間のある時期に破壊され、投棄されたことを示唆する。

この溝から出土した特筆すべき遺物として、上層で出土した茶臼の上臼がある。全体の約半分が残存し、摺り目が円周を八分画する臼である。茶は平安時代には中国から伝来したが、当初ごく一部の間でしか流布しなかった。その後15世紀後半に日本でも薬用として寺院などで使用され、やがて茶道の普及とともに広まった。この茶臼は溝の他の出土遺物の時期から16世紀代に下ると考えられるが、この時期

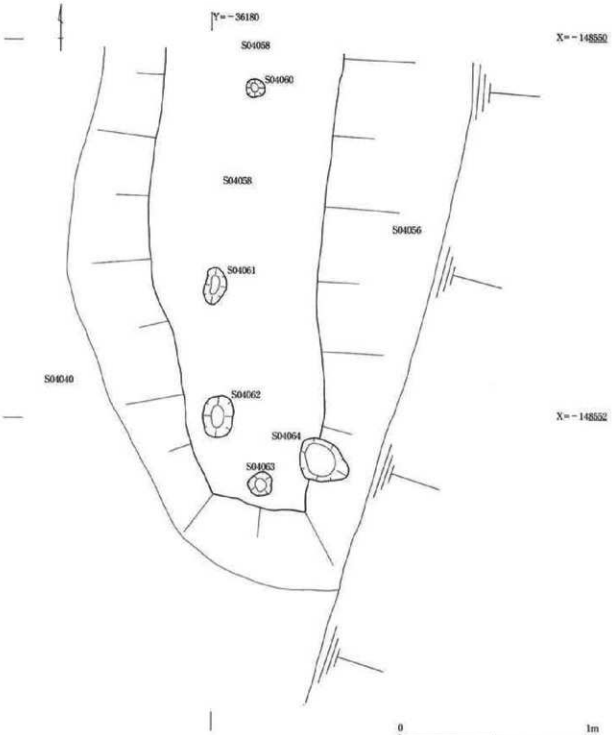


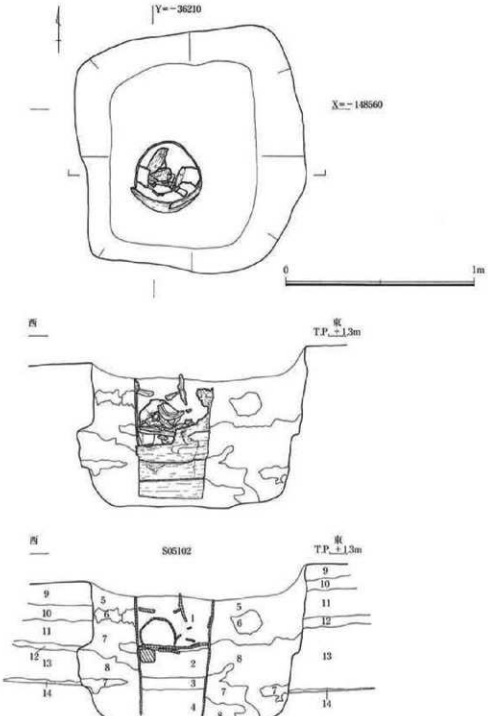
図313　99－4区第4・3面築地状遺構S04058平面図

に喫茶の習慣が一般階級に浸透していたわけでなく、茶臼は寺院や居館などの限られた場所にしかみられない。この集落住民の階層、性格を決める上で重要な資料である。

〔溝S04003〕　築地状遺構S04058を切る溝で、溝S04040・S04056より、北でやや東にふる。幅2.4m、深さ0.7mをはかる（図312）。出土遺物より本溝だけは近世初頭の遺構と考えられる。

第3面は15世紀を中心とし、近世初頭までの遺構面と考える。

c．第2面



1　10G3/1暗緑灰色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混じりシルトをブロック状に含む、粗粒砂をわずかに含む
2　10G3/1暗緑灰色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混じりシルトをブロック状に含む、粗粒砂をわずかに含む
　　7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂をブロック状に含む
3　7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂
4　2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、細粒砂をわずかに含む
5　7.5GY5/1緑灰色細粒砂混じりシルトに5G4/1暗緑灰色シルトをブロック状に含む
6　7.5GY4/1暗緑灰色シルト
7　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂～細粒砂、植物遺体を含む
8　2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、植物遺体を含む
9　5G4/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂、ラミナあり、管根あり
10　5GY4/1暗オリーブ灰色シルトに10Y5/1灰色細粒砂を含む、植物遺体をラミナ状に含む
11　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト
12　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、植物遺体をラミナ状に含む
13　2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト、下層に植物遺体をラミナ状に含む
14　7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～粗粒砂（上方細粒化）

図314　99－5区第4面井戸S05102平面図・断面図

溝Ｓ04040と同じ位置に、そのたわみに影響されたような溝Ｓ04020と、不定形の土坑数基を検出した（図288）。16世紀以降の遺構面と考える。

8）99－5区

99－4区の西端で検出した大溝よりさらに西にあたる99－5区では、遺構面高が次第に低くなる。本調査区では計4面の遺構面を検出したが、第3面を除いては遺構の密度は希薄である。

a．第4面

井戸Ｓ05102や大形の土坑Ｓ05104などを検出した（図289）。調査区全体の遺構の密度は希薄であり、井戸Ｓ05102以外は顕著な遺構は認められない。平均遺構面高はT.P.1.3～1.4mである。

〔井戸Ｓ05102〕　調査区中央に位置する、隅丸方形の掘方をもつ井戸である（図314）。掘方は一辺1.2～1.3mのほぼ正方形で、深さは0.85mである。掘方の中心より南西寄りに曲物を3段積み重ねた井筒を検出した。井筒の直径は約35cm、高さは70cmである。井筒内からは青磁碗底部、土師器皿、東播系須恵器こね鉢などが投棄されたように出土している。土器以外に、面取りした石、平瓦などが出土している。14世紀前半の遺構と考える。

〔土坑Ｓ05104〕　調査区の東南部で検出した。詳細な時期は不明である。

井戸の遺物より、第4面はおよそ14世紀代の遺構面と考える。井戸以外の柱穴などがみられず、この時期99－5区は集落としてあまり開発されていなかったといえる。

b．第3面

調査区の全域で遺構を検出した。平均遺構面高はT.P.1.4～1.5mである。南北方向の溝として溝Ｓ05010、溝Ｓ05020、溝Ｓ05030がある。このうち規模、深さ、立地から判断して、溝Ｓ05010が東側調査区で検出したものと同種の大溝であろう。その他に東西方向の長い溝Ｓ05001や鋤溝、柱穴、土坑などを検出した（図289）。

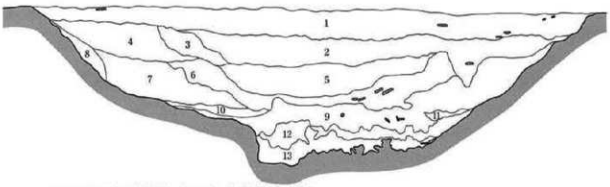
〔溝Ｓ05001〕　東西に長くのびる溝で、検出長16mで調査区北東にさらに延伸する。99－5区で東西方向の溝は他にみられず、切り合い関係から新しい溝と考えられる。幅0.6m、深さ0.2mをはかる（図316）。和泉Ⅳ型式の最終段階の瓦器椀が出土する。

〔溝Ｓ05010〕　幅6.0m、深さ1.7mをはかる。溝の西肩の堆積状況などから何段階かの埋没、規模縮小を経ながら長期間存続した溝と推測できる（図315）。調査区の西端に位置し、99－4区の大溝Ｓ04040との距離は40m強であり、01－2区、99－3区、99－4区の溝と相関する溝と考える。多量の土器、埴輪、瓦、木製品などを含む。特に羽釜、茶釜、火鉢、鉢、甕などの瓦質土器を多く含み、15世紀代を中心とする溝であることも一連の大溝と時期を一にする。溝の東肩に土坑や柱穴を何基か検出しており、これらは溝に伴う柵や柱列の杭穴と推測する。

〔溝Ｓ05020・溝Ｓ05030〕　溝Ｓ05010に平行する南北方向の溝として検出したが、深さが浅く、溝というよりは地表面の凹凸の窪み部分と考えた方がよい。13世紀末から14世紀初めの遺物が出土する。

〔土坑Ｓ05090〕　溝Ｓ05020部の内側に位置する。長方形状をなす土坑で、幅1.7m、深さ0.8mをはかる。断面は逆台形状をなす（図316）。白磁碗や土師器皿が出土し、溝Ｓ05010と同時期か若干古い時期の遺構である。機能は不明だが、溝Ｓ05010と関連する遺構の可能性がある。

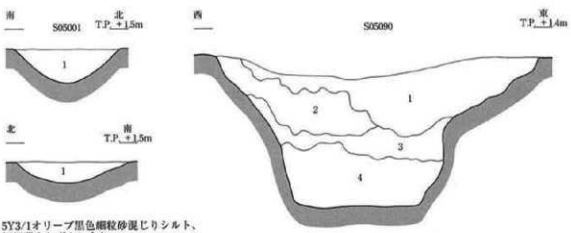
〔井戸Ｓ05070〕　調査区の南東端で掘方の約半分を検出した。直径2.0m、深さは4mにも及ぶ。掘方内に井筒が完存する。最上段には井戸瓦を上下2段円筒状に組んで井筒とし、その下に桶枠を4段に積み重ねた井筒をもつ。さらにその下に方形の板を組み合わせた箱状の枠の井筒、その下層に再び桶板



1 10G4/1暗緑灰色細粒砂混じりシルト、極細礫を多く含む
2 7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂混じりシルト、極細礫を多く含む、鉄分沈着、管根あり
3 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、極細礫をわずかに含む、鉄分沈着、管根あり
4 7.5Y4/1灰色細粒砂混じりシルト、極細礫を多く含む、鉄分沈着、管根あり
5 5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混じりシルト、極細礫をわずかに含む
6 5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混じりシルト、極細礫を多く含む
7 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルト、極細礫をわずかに含む
8 5GY5/1オリーブ灰色細粒砂に2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルトをブロック状に含む
9 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルト、極細礫を含む
10 5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂
11 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂
12 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂、礫礫を含む
13 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂、礫礫をわずかに含む

0 2m

図315　99－5区第3面溝S05010断面図



1 5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混じりシルト、極細礫をわずかに含む

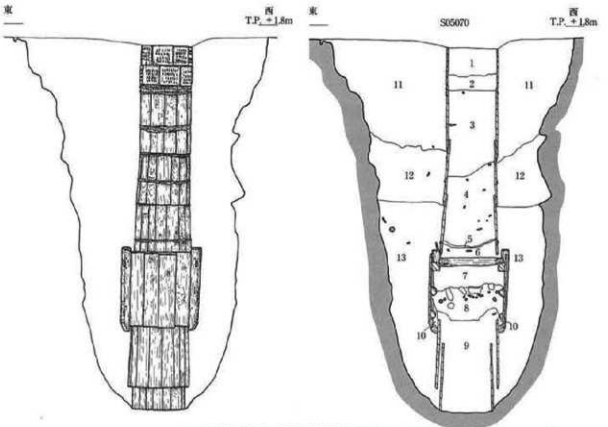
1 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂、極細礫を多く含む
2 10GY4/1暗緑灰色シルト、鉄分沈着
3 5Y4/1灰色シルト混じり細粒砂に、7.5GY5/1緑灰色極細粒砂をブロック状に含む、極細礫を含む
4 5Y4/1灰色細粒砂混じりシルトに10GY5/1緑灰色シルトをブロック状に含む

0 1m

図316　99－5区第4面溝S05001・土坑S05090断面図

表19　瓜生堂遺跡建物一覧表

遺構番号	地区名	遺構面	桁行			梁間			面積(㎡)	棟方向	柱形式	備考
			間数	全長(m)	柱間(m、西から)	間数	全長(m)	柱間(m)				
掘立柱建物1	01-1	5	2	3.6	1.7, 1.7	1	1.8	1.8	6.48	東西	総柱	
掘立柱建物2	01-2	6	4	4.0	1.0, 1.1, 1.0, 0.9	2	3.2	1.7, 1.5	12.8	東西	総柱	
掘立柱建物3	01-2	2	2	3.3	1.5, 1.7	1	2.5	2.5	8.25	東西	総柱	
掘立柱建物4	99-6	4	2	3.2	1.6, 1.6	2	3.0	1.5, 1.5	9.6	東西	総柱	
掘立柱建物5	99-6	3	4	4.8	1.4, 1.2, 1.0, 1.2	2	3.3	1.6, 1.7	15.84	東西	総柱	



1 2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂混じりシルト、5mm～3cmの礫を含む
2 10GY4/1暗緑灰色細粒砂混じりシルト、5mm～3cmの礫を含む
3 5GY3/1暗緑灰色細粒砂混じりシルト、植物遺体を含む、5mm～3cmの礫をわずかに含む
4 10Y3/1オリーブ黒色礫混じりシルト、5cm大の礫を含む、植物遺体を含む
5 10Y5/2オリーブ灰色粘土
6 10Y3/2オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト、5cm～10cm大の礫を含む
7 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト、粗粒砂をわずかに含む
8 10Y6/1灰色砂粒砂～粗粒砂に2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルトをブロック状に含む、10cm～20cm大の礫を含む
9 10GY6/1緑灰色粗粒砂に2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトをブロック状に含む
10 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂混じりシルト
11 10Y3/1オリーブ黒色シルト混じり細粒砂に5GY4/1暗緑灰色シルトをブロック状に含む
12 10GY5/1緑灰色細粒砂に5GY4/1暗緑灰色シルトをブロック状に含む
13 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂～中粒砂に5Y3/1オリーブ黒色～2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトをブロック状に含む

図317　99－5区第2面井戸S05070立面図・断面図

を2段重ねる複雑な組み合わせ式の井戸である（図317）。方形の板枠の組み合わせには、横桟やほぞを用い精巧な作りである。青磁碗の破片以外に瓦質の火鉢や蓋などの遺物が出土することからも、また構造上からも近世以降の井戸と考える。なお、99－3区から99－5区にかけては包含層中にも磁器碗や土人形が一定量含まれており、近世の集落が広がっていたと分かる。

〔その他の遺構〕　調査区の東側、溝S05030の東付近に位置する柱穴・土坑群（S05057、S05072ほか）は間隔が南北1.1m、東西1.2～1.3mで並び掘立柱建物を構成する確率が高いが、柱数が不十分なために建物を復原し得なかった。可能性の域にとどめておく。

その他、調査区東側では鋤溝状の細い溝等を検出した。大溝より東側でみられる遺構群は14世紀初めの時期を示すものが多く、大溝の時期との関きがある。99－5区の集落域の廃絶後に大溝とそれに伴う遺構が造営されたと考えるのが自然である。

以上のように、第3面では14世紀初め、15世紀以降、近世以降の異なる3時期の遺構を検出したことになる。

また、99－5区では埴輪片が多く遺構、包含層から出土した。なかでも溝S05010・S05001などから最も多く出土する。埴輪はいずれも原形、原位置をとどめては出土していない。99－5区で出土する埴

輪は99－4区で出土する埴輪よりも型式的に新しいものが大勢を占めるので、99－4区周辺の古墳とは別の埋没古墳の可能性を示唆できる。

9）99－6区

本調査区では計6面の遺構面を検出した。もっとも、この6面とは調査区中央から西の高まり部分の分層単位を1面と数えた結果である。低位部分では2ないし3面にしか分層できない。時期としても2～3時期に区分できるのみなので、遺構面としては2ないし3面と考えるべきだが、便宜上、調査時の呼称のまま表現している。

99－6区は中世遺構が全調査区中最も密にみられるので、当区が中世集落城の中心だったといえる。調査区内は東半がやや微低地となるのに対して、西半は東と西の南北溝に挟まれた、10～20cm単位の版築のような幾層にもわたる盛り土が広範囲にみられ、東半部に比べると壇状に高くなる。特にその高まり部に柱穴や井戸が集中しており、生活痕跡が濃厚である。この高まり部分及びこれに付随する2条の南北溝は、北接する東大阪市教育委員会第47－2次調査区でもその延長位置にみられるので、99－6区よりさらに北にまで広がっていたといえる。

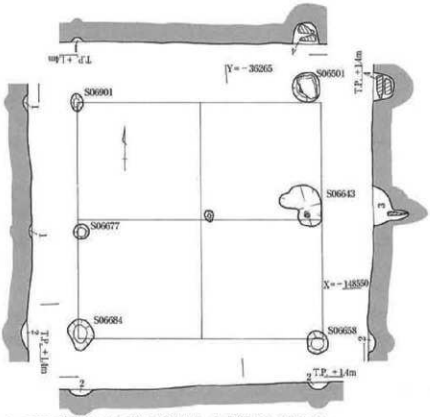
a．第5・4面

第3面の高まりを20～30cm下げたところ、中世最古の遺構面となる第5・4面を検出した（図290）。この段階で土を盛り上げた高まり部が調査区中央につくられる。検出される遺構もここに集中する。井戸、柱穴、土坑などを検出した。東側の低い部分でも井戸S06951などを検出した。高まり部分の柱穴群から1棟の掘立柱建物を復原した。

〔掘立柱建物4〕　高まり内の東側で検出した。桁行2間×梁間2間の建物で、梁間、桁行とも柱間は1.5mでほぼ等間隔である。総柱建物で、底部に根石をもつ柱穴も含まれる（図318）。

また、掘立柱建物4の西側には柱穴が並ぶが、残存状況が悪く建物を復原するに至らなかった。建物の東には小さい柱穴が等間隔に並び、柵列とも考えられる。

高まり部をはずれると



1　2.5Y3/2黒褐色シルト混じり極細粒砂、極細粒礫をわずかに含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり極細粒砂、極細粒礫をわずかに含む
3　10Y4/1灰色シルト混じり極細粒砂、極細粒礫をわずかに含む、鉄分沈着、炭を含む
4　5Y4/2灰オリーブ色シルト混じり極細粒砂、極細粒礫をわずかに含む、鉄分沈着

図318　99－6区第4面掘立柱建物4平面図・断面図

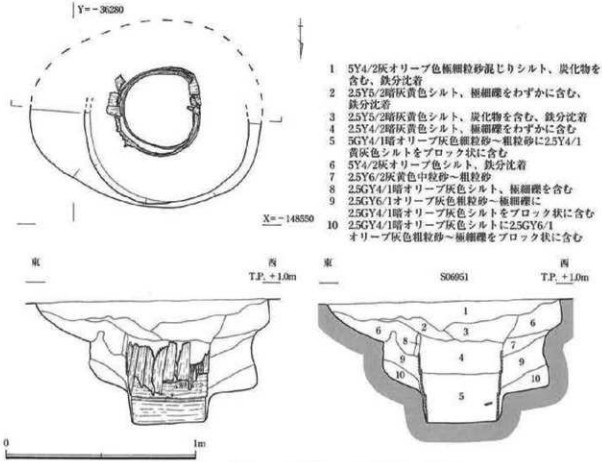


図319　99－6区第5・4面井戸S06951平面図・断面図

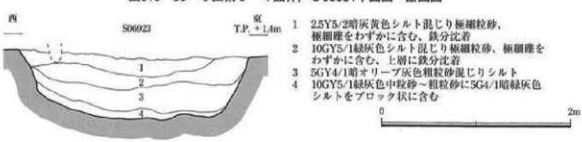


図320　99－6区第5面土坑S06923断面図

井戸S06951と土坑数基を検出したのみである。

〔井戸S06951〕　調査区南西隅で検出した。直径1.1mの円形掘方を有する井戸で、検出レベルからの深さは0.62mをはかる（図319）。

上部は後世の削平で失われており、井筒の最下層のみの検出となった。最下層に曲物を3段おくが、最上層の曲物の外周には、板状木片が上部を破損した状態で出土するので、曲物の上段には桶枠ないし木組みがあり、検出面より上層から掘り込まれていた井戸と推測できる。

〔土坑S06923〕　調査区西側で検出した土坑である。直径1.2m、深さ30cmをはかる（図320）。

第5・4面は正確な時期比定が難しいが、他の地区同様、集落の初現期である12世紀前半の遺構面と考えられる。

b．第3面

第3面の遺構面平均高はT.P.1.4mである。調査区の西側では畦溝と想定する南北溝数条、その東から中央にかけては同規模の南北溝に挟まれた高まり部分が広がり、その中では柱穴などの集落遺構が密に

検出される。それより東では溝や土坑がみられるが、遺構密度は希薄となる(図291)。

〔溝S06456〕　高まりを区画する東側の溝である。幅1.2m、深さ0.5mをはかる。遺物を含まず、正確な時期は不明である。西側の溝S06456aと対をなす溝になるか不明である。

〔高まりS06300〕　南北の二つの溝S06456・S06456aに挟まれた東西幅16mの範囲で存在する。第5・4面の高まりにさらに盛り土を重ねて形成される。高まりは溝が掘削されている地表のレベルからは、客土されて平均50cm高くなっている。高まり部分は断面観察で4層に分層でき、それぞれの時期に遺構が検出される。短い期間で建て替え、盛り土が繰り返され、2～3時期にわたって集落が形成されていたと考えられる。

高まり上には、井戸や多数の柱穴、掘建柱建物を検出した。柱穴は柱の抜き取りが確認できるもののほか、瓦器椀を埋納したものや、最底部に根石をいれたものも多くみられた(図328)。根石は平らな結晶片岩などが選ばれており、上下2段に置かれたものもある。柱材片もわずかだが残存する。

〔溝S06456a〕　高まりの西側の溝であるが、後世の溝に切られているため溝の全容は不明である。現存幅1.5m、深さ0.2mをはかる。溝S06456aから溝S06399までの間は南北方向の溝が数条並ぶ。これらの溝はいずれも中世末期から近世の溝であるので、高まりの形成期とは時期がずれ、高まりを区画する機能をもっていたかは定かでない。溝S06399の西側では柱穴S06375・S06481・S06387がおおむね一直線に並び、柵状の遺構であった可能性がある。

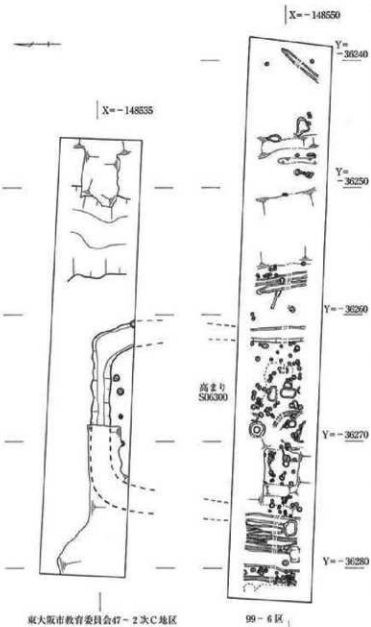


図321　99－6区第3面高まりS06300合成平面図

この2条の区画溝及び高まり部分の続きは、北に接する東大阪市教育委員会47－2次調査C地区にもみられる。C地区の調査結果では溝S06456は西に曲がり、西の溝S06456aとつながってコの字状となり、高まりの北限を画する。言い換えると、区画溝で囲まれる高まりは北から99－6区南端まで約15m

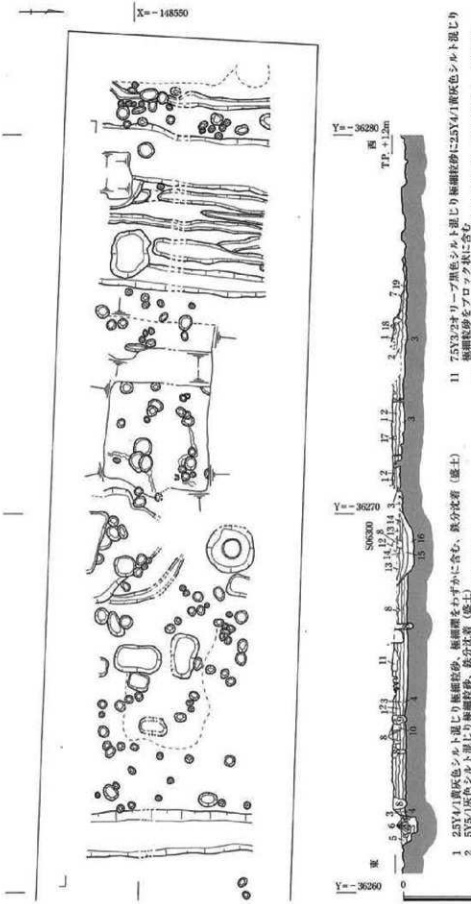


図322　99－6区第3面高まりS06300平面図・断面図

続き、それ以上も南に延伸する可能性がある。99－6区の溝と東大阪市教育委員会C地区の溝の位置関係を図321に示した。

調査報告者の福永信雄氏は、この造成された高まり部分を寺院関係の建物があった区画“瓜生堂廃寺”の基壇部と想定している。C地区の基壇に1次と2次の2時期を想定し、各々の築造時期を13世紀代、13～14世紀代と考える〔東大阪市教育委員会2002〕。

しかし、99－6区の高まり部で検出された柱穴に埋納された瓦器椀の土器型式は11世紀末から12世紀前半代を主とし、高まり部の遺構の時期は12世紀から13世紀代である。これは福永氏の考える瓜生堂廃寺築造年代とはずれがある。このように、両地区にまたがる構築物は復原できない。南側の99－6区が古い時期に使用され、より北側に移行した可能性はある。

また、溝と高まりが同一時期に造営されたかは、先述の通り溝の正確な時期比定ができないため不明である。むしろ、高まり部があって後世その両端に溝が造営された可能性が高い。

〔掘立柱建物5〕　高まりS06300上で1棟の掘立柱建物を復原した。東西を棟とする推定総柱建物で、

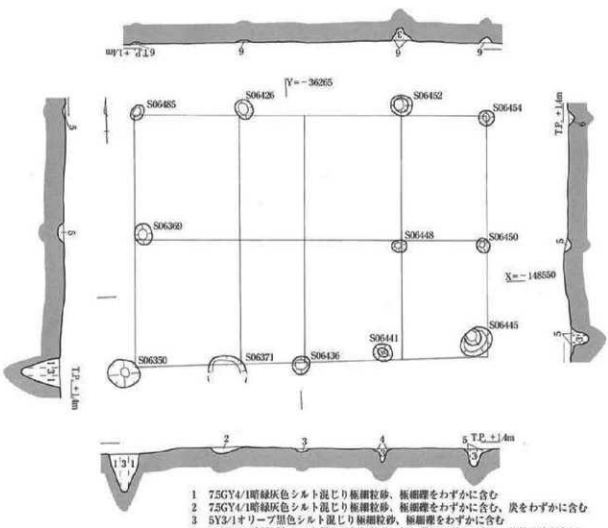


図323　99－6区第3面掘立柱建物5平面図・断面図

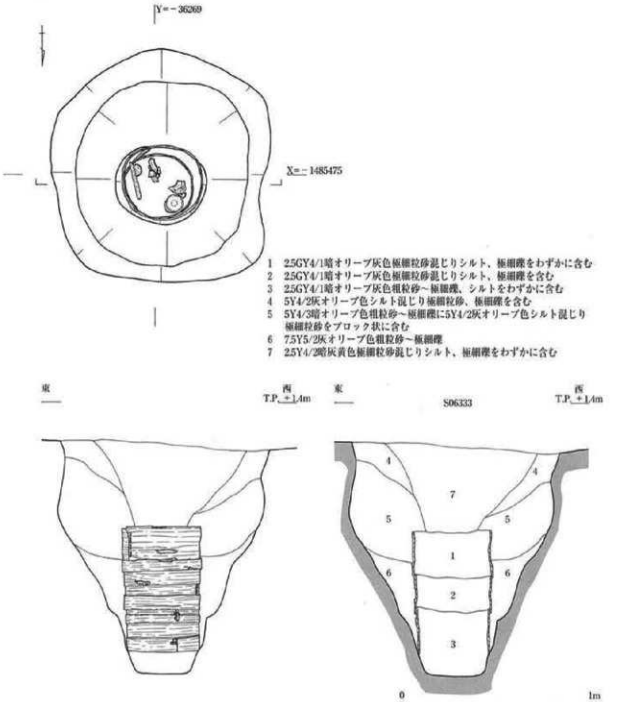
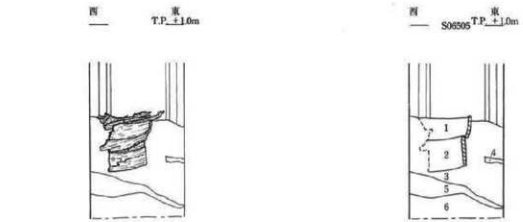


図324　99－6区第3面井戸S06333平面図・断面図

梁間2間、桁行4間である（図323）。桁の間隔が1.0から1.4mとやや狭く、多様である。さらに南、北あるいは西に続く可能性がある。

また、掘立柱建物5内からは1.2m×0.7mの長方形の浅い土坑S06430・S06372が検出されている（図291）。両遺構とも埋土に炭化物や焼土を多く含む。これらの土坑の周辺で土師器皿を数枚上向きに積み重ねた集積が検出された。建物の柱穴に含まれる遺物の時期の多くは、12世紀後半以降13世紀代を示すことから、第3面は12～13世紀代の遺構面と考えられる。土器埋納土坑以外にも根石や柱木の残る柱穴が検出されている。柱穴は直径30cm、深さ50cm程度のものが多い。



1　5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂混じりシルト、極細礫をわずかに含む
2　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり細粒砂～粗粒砂
3　10GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂
4　2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混じり極細粒砂
5　7.5Y4/1灰色極細粒砂混じりシルト
6　10GY6/1緑灰色粗粒砂～極細礫

0　1m

図325　99－6区第3面井戸S06505平面図・断面図

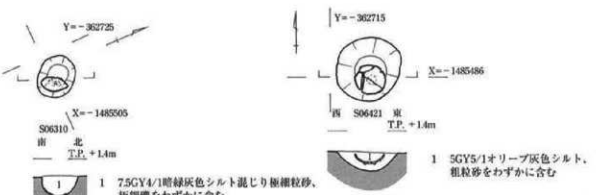


図326　99－6区第3面瓦器椀埋納土坑S06310・S06421平面図・断面図

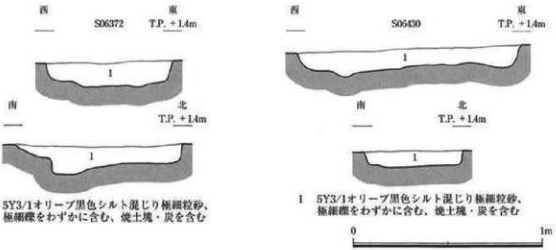


図327　99－6区第3面土坑S06372・S06430断面図

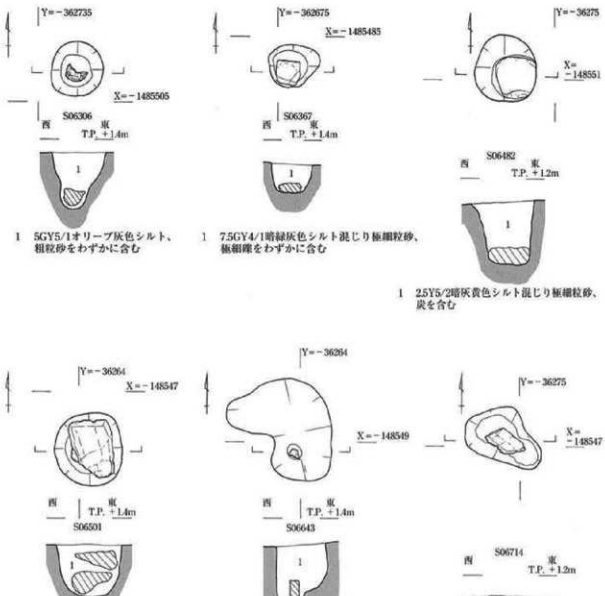


図328　99－6区第3面礎石・柱痕存柱穴平面図・断面図

掘立柱建物以外の高まり部で検出した遺構をみていく。

〔井戸S06333〕　高まり部分の中央、北端に位置する。ベース土が砂質の強いところに立地するため、湧水層には到達しやすいが崩れやすく、使用期間も短かったと推測する。常時水にさらされていたためか、曲物井筒の残存状況は良好であった。掘方は直径約1.2mのやや方形状の円形土坑で、深さ1.2mをはかる。曲物を3段積み重ねて井筒とする（図324）。曲物の直径は40cmで、3段を積み重ねた深さは65cmである。曲物は上下方ともに廻し板をもつ。井筒内からは12世紀前半代の瓦器椀、瓦器皿、土師器皿や木製品が出土している。資料は一括性が高く12世紀前半に廃絶した井戸である。

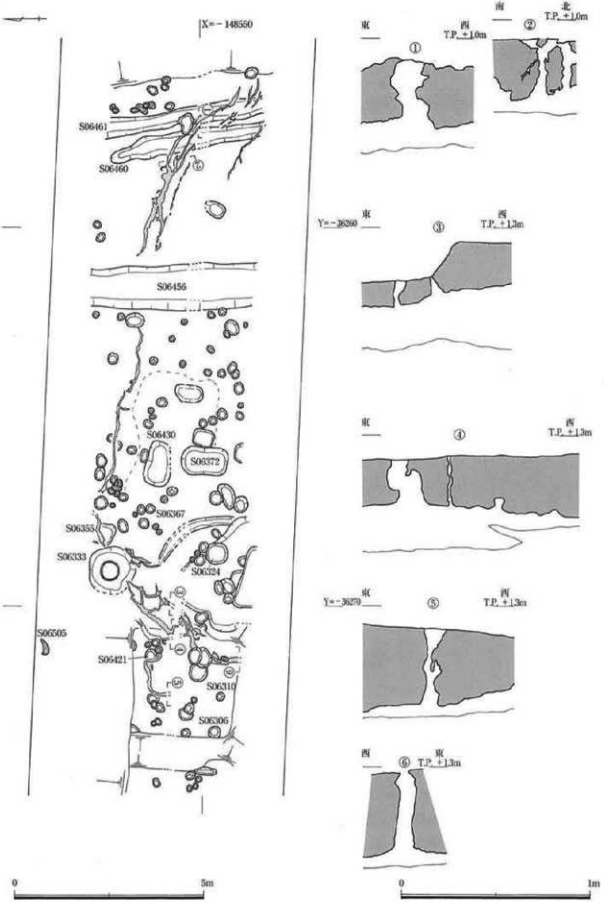


図329　99－6区第3面噴砂平面図・断面図

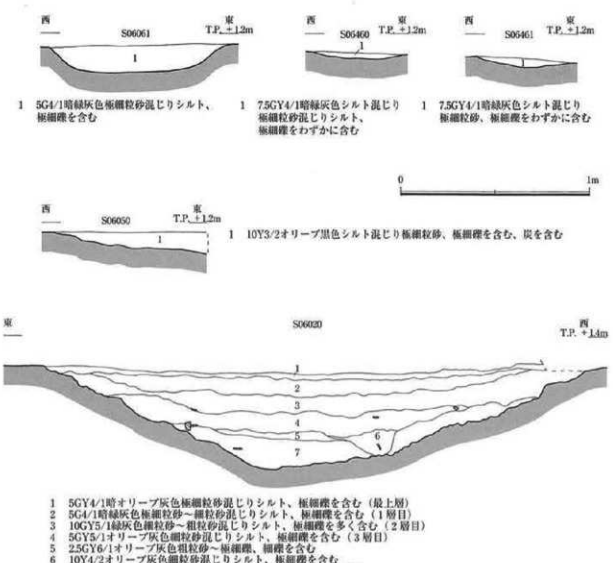


図330　99－6区第2面溝S06020・溝S06061・S06050・第3面溝S06460・S06461断面図

〔井戸S06505〕　調査区西半の北端で検出した曲物井筒の井戸である（図325）。ほとんどを鋼矢板によって切断され、南側わずかの検出となった。

〔瓦器椀埋納土坑S06310・S06421〕　瓦器椀埋納土坑S06310は高まりS06300の中央南半で検出した（図326）。直径20cm、深さ10cmをはかる。半裁した和泉型瓦器椀が底に上向きに埋納されていた。同じく瓦器椀埋納土坑S06421は高まりS06300の中央北半で検出した。直径30cm、深さ10cmをはかる。ほぼ完形の和泉型瓦器椀が上向きに埋納されていた（図326）。瓦器椀を埋納する土坑以外で、礎石や礎盤をもつ柱穴については図328に示した。

〔溝S06460〕　高まりを区画する溝S06456より東に位置する南北溝である。幅1.0m、深さ0.1mをはかる（図330）。

〔溝S06461〕　溝S06460に東接する南北溝である。幅1.0m、深さ0.1mをはかる（図330）。

また、地震による噴砂の痕跡が99－6区第3面の広い範囲で認められた（図329）。一例をあげると、噴砂が瓦器椀を埋納する土坑S06421を切っているものがあり、この瓦器椀の型式が11世紀末から12世紀初めに相当するので、これ以後の地震だといえる。さらにこの噴砂を切る遺構も存在し、地震発生時期

をかなりしぼれる様相を示した。独立行政法人産業技術総合研究所の寒川旭氏の現地調査指導の結果、この噴砂に相当するのは1099年の南海大地震ではないかと教示いただいた（第８章第８節参照）。

c．第２面

調査区中央より東に広がる溝Ｓ06020を境にして東西で遺構の状況が大きく分かれる。

溝より東では、青灰色シルトをベースとする地表に東西方向の細い溝数列やピットがみられる。ピットは溝と平行して、あるいは直交して並ぶ。直径が10cm程度で深さ10cm未満である。掘立柱建物柱穴になる可能性が大きいが、建物を復原し得なかった。溝より西では、やや大形の土坑や南北方向の溝を検出した（図291）。平均遺構面高はT.P.1.1～1.2mである。

〔溝Ｓ06061〕　溝Ｓ06020の東に位置する南北溝である。幅1.9m、深さ約0.2mをはかる（図330）。溝Ｓ06061の東周に柱穴が並ぶのは、溝Ｓ06061より東の集落域の門あるいは柵の機能を持つ遺構があったと推定する。また、溝Ｓ06061とその西側のＳ06222の間にも柱穴が並び北側の杭と直交するので、柵や垣根があったと想定する。瓦器椀や土師器皿の型式から14世紀前半の遺構である。

〔溝Ｓ06050〕　調査区の西側に位置する南北溝である。大量の瓦器椀や土師器皿が出土した。14世紀から15世紀の溝である。現存幅1.7m、深さ0.1mをはかる（図330）。

〔溝Ｓ06020〕　幅5.8m、深さ1.0mの大溝である。中世後半の瓦質土器（羽釜・すり鉢・甕）や青磁、白磁などの陶磁器、瓦などを含む。15世紀後半以降の溝である。時期や規模から考えて溝Ｓ06020は、99－６区より東の調査区でもみられた、規則的につくられた溝と同種の遺構といえよう。99－５区の大

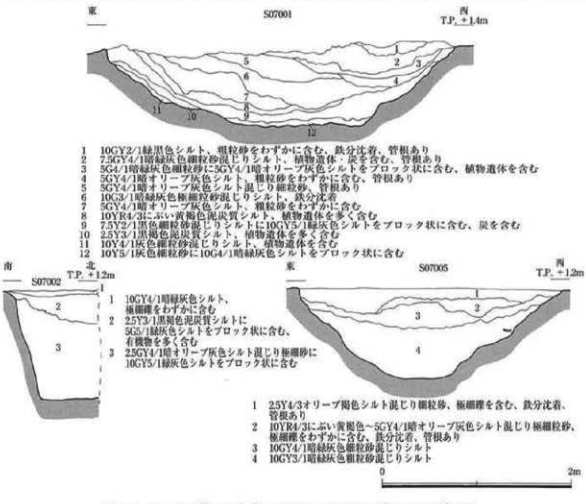


図331　99－７区第６面土坑Ｓ07001・Ｓ07002・溝Ｓ07005断面図

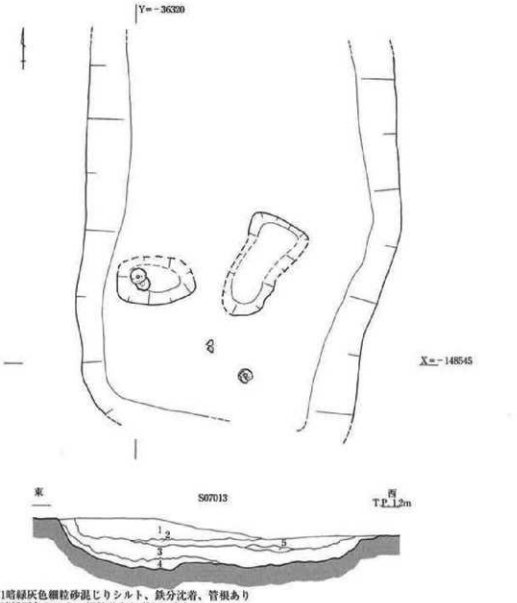


図332　99－7区第6面土坑S07013平面図・断面図

溝S05010との距離は約20mである。

10）99－7区

本調査区では計4面の遺構面を検出した。主に遺構がみられたのは第6面である。

a．第7・6面

平均遺構面高はT.P.1.1m前後となり、01－1区から次第に下がってきた遺構面高が99－7区で最低位となる。調査区の東端で大形の土坑2基と小形の土坑2基、中央より西で南北方向の溝とそれに隣接する土坑（落ち込み）を検出した（図292）。大形土坑S07001・S07002と溝S07005からは瓦器椀などが出土している。この99－7区の溝から西では包含層にも遺物を含まなくなり、遺構がみられなくなるので、この溝が瓜生堂遺跡の中世集落域の西端に位置するといえる。

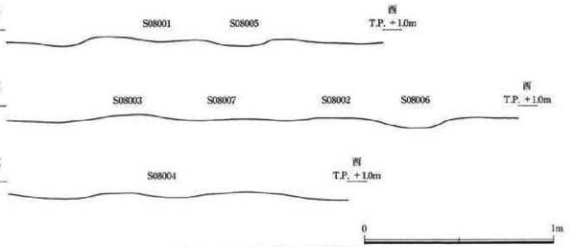


図333　99－8区第2面畦畔断面図

〔土坑S07001〕　推定直径3.7m、深さ0.8mの大形の円形土坑である（図331）。調査区内では北半部を検出したにすぎない。溝の底部から大量の瓦器や土師器などの中世土器、木製品などが出土した。規模から素掘りの井戸とも考えたが、埋土がブロック状であること、埋土に大量の炭化した植物遺体や種子、籾殻のような有機遺物を含むことから、土器や有機遺物の廃棄土坑であり、廃棄後に燃やされたものと考える。他の調査区ではみられない大和型Ⅱ－B～Ⅲ－A型式瓦器椀を始め和泉Ⅱ－3～Ⅲ－2型式の瓦器椀・瓦器皿や土師器皿が大量に出土した。12世紀中頃以降の遺構と考える。

〔土坑S07002〕　推定直径2m、深さ0.6mをはかる円形土坑だが、北側半分は側溝によって失われている。掘り込みは急角度をなし（図331）、上層からは瓦器椀が出土する。瓦器椀の型式から土坑S07001と同時期と考えられる。

〔溝S07005〕　幅2.7m、深さ1.0mをはかる南北溝である（図331）。中層から瓦器が出土した。

〔溝S07013〕　溝S07005に接して続く、浅い溝である（図332）。自然の落ちのようにもみえるが、埋土に炭化物やブロック土を含むことから、人為的な埋め戻しがあったと思われる。底部の窪んだ部分から完形に復原できる瓦器椀や土師器皿などが出土する。

その他の遺構の時期もすべて12世紀の時期幅におさまるものである。よって、第6面は12世紀後半から13世紀初めの遺構面と考えられる。第6面でみられる遺構は時期的に古く、本遺跡における中世集落の初現期にあたる。また、集落の中心部というより、集落のはずれにつくられた遺構の様相を示す。

b．第5・4面

調査区の西端で南北方向の溝S07006を検出した（図292）。他に遺構は認められなかった。

〔溝S07006〕　幅1.6mをはかる南北方向の溝である。遺物を含まず、時期や機能は不明である。埋土や付近の土壌の状態からも、水田などの生産域で利用されていたものだろう。

（3）水田域の様相

1）99－8区

本調査区では1面の遺構面を検出した。

a．第2面

平均遺構面高はT.P.1.0m前後である（図293）。99－7区より西にいくと徐々に遺構面高が低くなり、低湿な環境となって集落は形成されなくなる。無人化した様相を呈するが、99－8区で畦畔とみられる南北方向の遺構とその間にみられる溝、各数条を検出した（図333）。

畦畔は１本もしくは２本が平行して南北方向にのび、畦畔間を浅い溝が走る。畦畔、溝とも高さ、深さが数cm以内で断面でも識別が難しく、平面で痕跡を検出したにすぎない。畦畔と断定するのがやや躊躇されるところもあるが、畦畔であればこの周辺に生産域が広がっていたことを裏付ける証拠となる。今後、プラント・オパールなどの自然科学分析を行うことでこの説を補強したい。

（４）小結

99－８区および99－９区・10区を除く広範囲で集落を確認できた。その集落も初現期は東側に多くみられ、客土した高まりに掘立柱建物などがつくられる。

集落は時期が経るに従い全体に広がる。13～14世紀に最盛期を迎え、14世紀代には廃絶する。その後15世紀後半以降、再び大規模な土地開発が行われ、南北方向の規格的な大溝が掘削配置されるが、集落跡は検出されず、違った土地利用のあり方だったと考えられる。（川瀬）

２．遺物

（１）土器（図334～352、写真図版103～109）

１）各調査区の出土品

ａ．出土状況ほか

中世の土器類は中世遺構のみられる01－１区から99－７区までの広い範囲で出土した。遺構・包含層ともに一定量の遺物を含み、総量はコンテナ約70箱である。各区の出土量は遺構の密集度に比例して、01－１区と99－３区から99－６区にかけて多い。ただし、99－７区は遺構数は少ないが土坑、溝に大量の土器がまとまって出土しており、廃棄土坑などの可能性が強い。

一括性のある井戸出土資料と大量に土器やその他の遺物を含む南北大溝の資料を中心に掲載し、それ以外は最低限必要なものにとどめた。また遺構の記述は東の01－１区から西の調査区へと行ったが、遺物の記述は99－１区から99－10区、01－１区から01－３区の順で行った。

土器型式の区分は、大和型瓦器は川越編年（川越1983）、和泉型瓦器は尾上編年（尾上1983）、楠葉型瓦器は橋本編年（橋本1977・1980）、輸入陶磁器に関しては森田編年（横田・森田1978）によった。

ｂ．99－１区遺構・包含層ほか出土

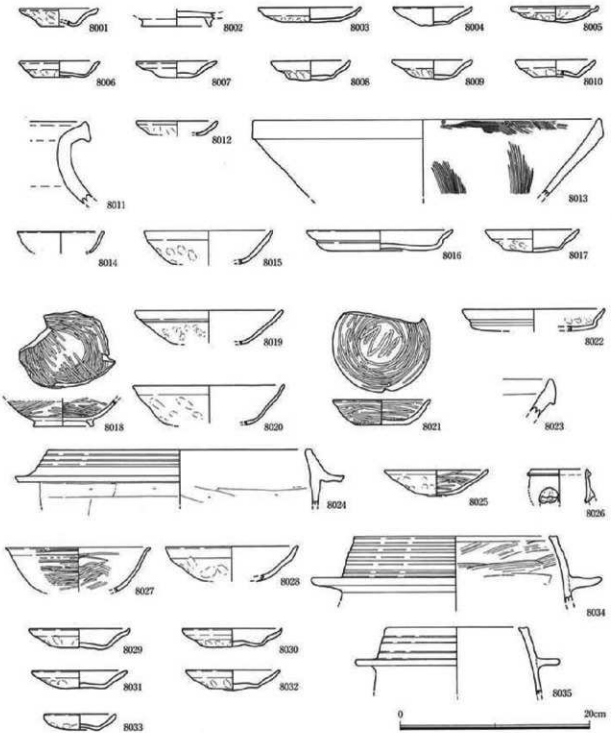
〔自然流路１（Ｓ01150）〕(8001)　古墳時代の自然流路１の最上面から検出した遺物である。土師器皿で底部が盛り上がった、いわゆるヘソ皿の様相を呈する。

〔第７面井戸Ｓ01099〕(8002・8003)　99－１区の南西で検出した曲物井筒の井戸より出土した。(8002）は土師質椀底部。黒色化処理されていないが黒色土器Ａ類の焼成不良品であろう。(8003）は土師器大皿。(8002・8003）は99－１区出土の遺物中では古代末から中世初期の古い時期を示す。

〔第７面土坑Ｓ01089〕(8004)　土師器皿で内面底部と体部の境に棒状工具の強い押圧による凹みがある。

〔第３面土坑Ｓ01045〕(8005)　土師器皿だが、口縁端部を巻き込んだ「て」の字状口縁の皿である。

〔第２面土師器皿集積遺構Ｓ01006〕(8006～8010)　５枚の土師皿が重なった状態で出土した、地鎮祭祀と関連する土師皿集積遺構の遺物である。底部の指オサエの差によりやや器形に違いを生じるが、いずれも口縁が外反する器形をとる。口径、高さともほぼ同じである。淡橙色から淡褐色を呈する。14世紀の資料である。



第９面〔Ｓ01150（8001）〕、第７面〔Ｓ01099（8002・8003）、Ｓ01089（8004）〕、第３面〔Ｓ01045（8005）〕、
第２面〔Ｓ01006（8006～8010）、Ｓ01005（8011・8012）〕、第９・８面（8013～8017）、第７・２面（8018～8024）、
第２・１面（8025・8026）、側溝（8027～8035）

図334　中世土器実測図－１（99－１区：遺構・包含層出土）

〔第２面Ｓ01005〕（8011・8012）　（8011）は陶器甕の口縁部。自然釉がかかる。信楽産。（8012）は土師器皿で15世紀以降の遺物と思われる。

〔包含層ほか〕（8013～8035）　（8013～8017）は第９・８面間で出土。（8013）は瓦質土器すり鉢。口径36.4cm。（8014～8017）は土師器の杯もしくは皿である。

（8018～8024）は第７～２面間からの出土。（8018・8021）の瓦器椀・皿はいずれも12世紀前半の資料。

内面底部までミガキがはいり、見込みには平行線もしくはジグザグの暗文がはいる。(8023) は東播系須恵器こね鉢の口縁部。(8024) は瓦質土器羽釜で、口縁部に3段の段をもつ。それ以外は土師器である。12世紀から15世紀の遺物が混在する。

(8025・8026) は第2・1面間からの出土。(8025) は和泉型瓦器椀Ⅳ－2～3型式。(8026) はミニチュアの瓦質三足羽釜である。

(8027～8035) は側溝出土の資料で、第9面～第2面間の遺物に相当する。瓦器椀、土師器皿、瓦質土器羽釜である。瓦器椀 (8027) は12世紀代の資料であろう、深い椀形をなし、外面のミガキも密にはいる。瓦質の羽釜 (8034・8035) は口縁部外面に3～4段の段を有し、やや内傾しながらも口縁端部から鍔までの距離が長くなるなど、15世紀後半から16世紀までの型式を示す。土師器皿はすべてほぼ15世紀後半の範疇に含まれる。

c．99－2区遺構・包含層出土

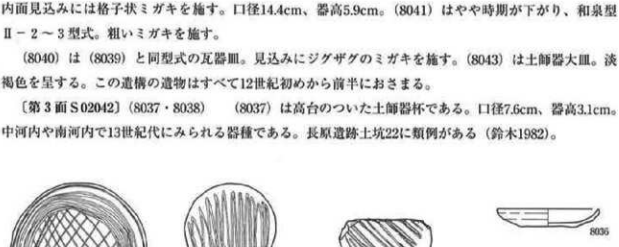
〔第4面井戸S02099〕(8036・8042)　(8036) は土師器皿である。口縁部に2段ナデを施す。(8042) は瓦器皿。

〔第4面井戸S02095〕(8039～8041・8043)　曲物井筒の最底部より出土した。(8039・8040) はほぼ完形で、重なって出土したことからも同時に投棄されたと考えられる一括性の高い資料である。

(8039) は和泉型Ⅱ－1型式瓦器椀。高台の断面は三角形をなす。外面にはミガキの分割性がみられ、内面見込みには格子状ミガキを施す。口径14.4cm、器高5.9cm。(8041) はやや時期が下がり、和泉型Ⅱ－2～3型式。粗いミガキを施す。

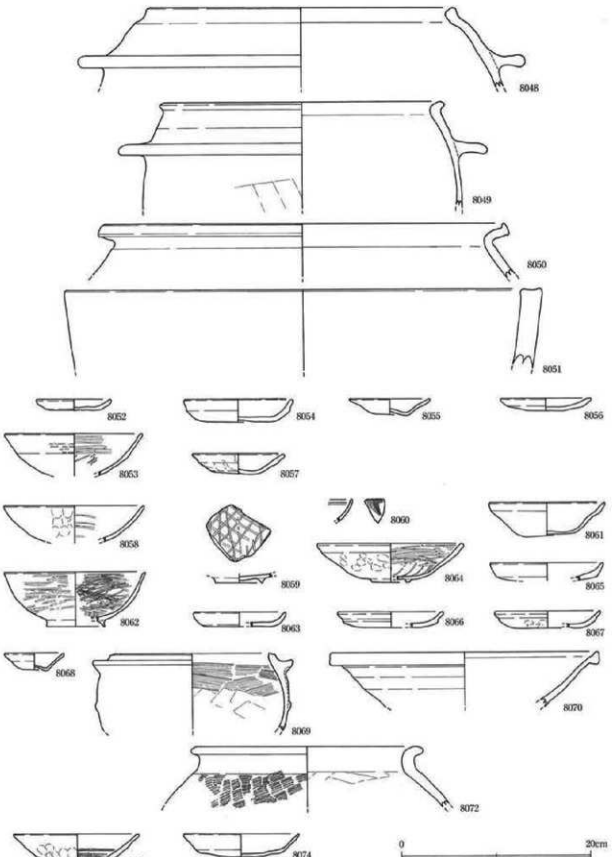
(8040) は (8039) と同型式の瓦器皿。見込みにジグザグのミガキを施す。(8043) は土師器大皿。淡褐色を呈する。この遺構の遺物はすべて12世紀初めから前半におさまる。

〔第3面S02042〕(8037・8038)　(8037) は高台のついた土師器杯である。口径7.6cm、器高3.1cm。中河内や南河内で13世紀代にみられる器種である。長原遺跡土坑22に類例がある (鈴木1982)。



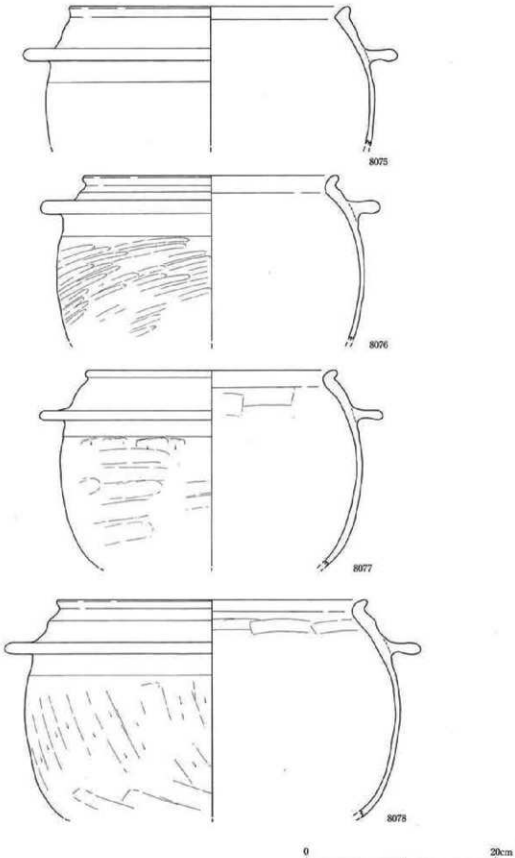
第4面〔S02099 (8036・8042)、S02095 (8039～8041・8043)〕、第3面〔S02042 (8037・8038)〕、第3・2面 (8044～8046)、第2・1面 (8047)

図335　中世土器実測図－2 (99－2区：遺構・包含層出土)



第５面〔Ｓ03150（8048～8051）〕、第３面〔Ｓ03160（8052）、Ｓ03100（8053～8057）、Ｓ03079（8058～8060）、Ｓ03068（8061）、Ｓ03016（8062・8063）、Ｓ03014（8064～8067）〕、第２面〔Ｓ03090（8068～8070・8072）、Ｓ03008（8073）、Ｓ03002（8074）〕

図336　中世土器実測図－３（99－３区：遺構出土）



第4面〔S03104（8075～8078）〕
図337　中世土器実測図－4（99－3区：遺構出土）

(8038) は土師器皿で裏面に粘土の接合痕が残る。

〔包含層ほか〕(8044～8047)　(8044～8046) は第３・２面間からの出土。(8044) は和泉型Ⅱ－２～３型式瓦器椀。見込みにらせん状ミガキを施す。(8045) は鎬蓮弁文青磁椀。龍泉窯系と思われる。(8046) は土師器皿で体部と底部の境界に、板などでなでた際についたと思われる幅１㎜の沈線がはいる。

(8047) は瓦器で高台がつくので椀としたが、通常規格の椀より口径がかなり小さい。口径7.2cm、器高2.8cm。器壁が厚く、見込みに２条のミガキを施す。

ｄ．99－３区遺構出土

〔自然流路１（Ｓ03150)〕(8048～8051)　古墳時代の自然流路の最上部で検出した遺物である。

(8048・8049) は土師質羽釜。口縁端部を短く終わらせたもの (8049) と丸く肥厚したもの (8048) の違いはあるが、いずれも14世紀前半までにおさまる。(8050) は陶器甕の口縁部。常滑など東海系のものである。(8051) は土師質だが瓦質の焼成不良品とも考えられる。円柱形の容器となる。火鉢であろうか。

〔第３面井戸Ｓ03160〕(8052)　調査区東端で検出した井戸からの出土である。土師器皿。

〔第３面溝Ｓ03100〕(8053～8057)　西端で検出した南北方向の大溝からの出土である。

(8053) は和泉型Ⅳ型式初段階の瓦器椀。(8054～8057) の土師器皿は時期的にばらつきがあるが、14世紀代を上限とする。

〔第３面溝Ｓ03079〕(8058～8060)　調査区東端で検出した南北溝からの出土である。本溝は溝Ｓ03100と相関性をもつ溝と考えられる。

(8058・8059) は瓦器椀で、(8058) は (8053) と同時期のものである。(8059) は底部のみだが、格子状ミガキがあるので和泉型Ⅱ型式まで遡る。(8060) は国産染付磁器碗で、何らかの事情で上層近世期層から混入した遺物と考える。

〔第３面土坑Ｓ03068〕(8061)　土師器の杯である。

〔第３面井戸Ｓ03016〕(8062・8063)　調査区西南部で検出した曲物井筒の井戸からの出土である。

(8062) は和泉型Ⅱ－１～２型式瓦器椀。(8063) は土師器皿。

〔第３面井戸Ｓ03014〕(8064～8067)　溝Ｓ03100に近接する井戸からの出土である。

(8064) はかなりひずんでいるが和泉型Ⅲ－３型式の瓦器椀。(8065～8067) の土師器皿も体部と底部の境界につよいナデによって生じた段をもつ、13世紀前半から中葉の資料である。

〔第２面井戸Ｓ03090〕(8068～8072)　調査区南壁中で検出した植枠転用の井戸からの出土である。

(8068) は土師器皿で、ヘソ皿と呼ばれる15世紀以降の形態をとる。(8069) は瓦質土器羽釜で体部下半から底部を失う。脚のつく三足羽釜とも考えられる。(8070) は東播系須恵器こね鉢。口縁部形態より14世紀代のものである。(8072) は瓦質土器甕の口縁部から肩部である。外面にタタキを施す。

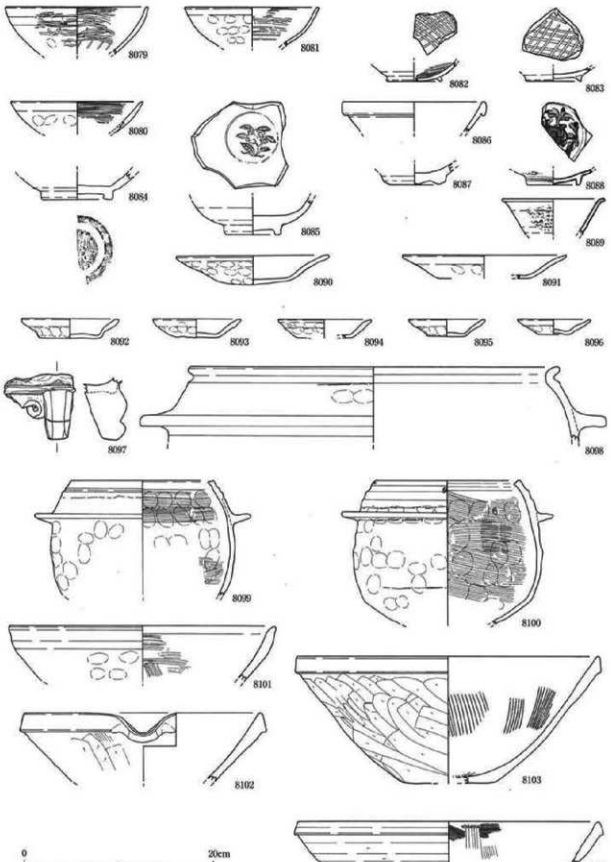
〔第２面溝Ｓ03008〕(8073)　調査区東側で検出した南北の溝からの出土である。

瓦器椀で器高が浅く、外面にミガキを施さない。和泉型瓦器椀Ⅳ－１～２型式。

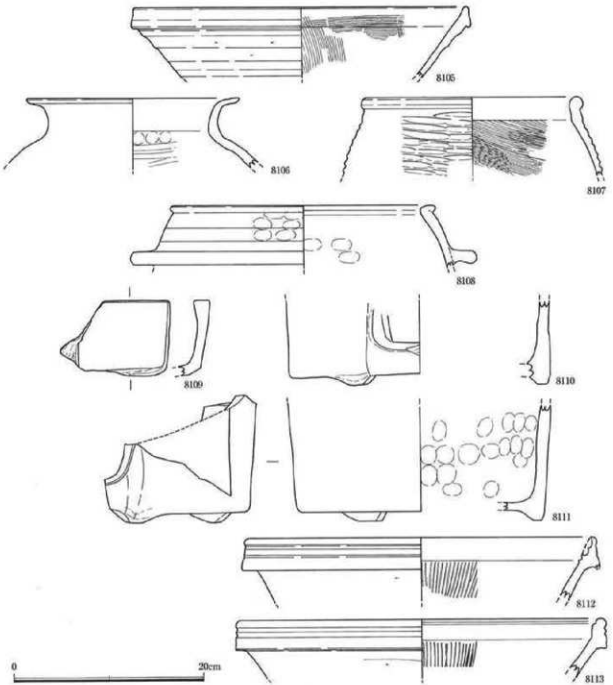
〔第２面土坑Ｓ03002〕(8074)　調査区西側で検出した大形の土坑からの出土である。

大型の土師器皿である。

〔第４面井戸Ｓ03104〕(8075～8078)　井戸Ｓ03104は調査区西端で検出した土師器羽釜を井筒に転用した井戸である。従って、(8075～8078) はいずれも井筒枠として使用された羽釜で、底部は穿たれるが、口縁部から体部は原形をとどめて出土した。(8078) は体部外面は上下方向のケズリ、下方は左右のケズ



第3面〔S04040（8079～8104）〕
図338　中世土器実測図－5（99－4区：遺構出土）



第3面〔S04040（8105～8107）〕S04048（8108）、S04003（8109～8113）〕
図339　中世土器実測図－6（99－4区：遺構出土）

リが施されている。（8076・8077）は体部外面は工具を使ってタテケズリののち横方向に磨かれている。内面はナデ、（8077・8078）は口縁部付近の一部に板状工具のナデ痕跡が残る。いずれも口縁部は短くつまみ上げ、外反する。13世紀中頃から後半の資料である。口径26～32cm、残存高14～23cmにおさまる。

e．99－4区遺構出土

〔第3面溝S04040〕（8079～8107）　99－4区は古墳時代から中世、近世の遺構が同一遺構面で検出

された。中世の顕著な遺構としてはこの南北方向の溝S04040があり、埋土より埴輪や茶臼とともに大量の中世土器が出土した。

(8079～8083) は瓦器椀である。(8079～8081) は和泉型Ⅲ－２～３型式。(8082・8083) は底部のみだが、見込みに格子ミガキをもち、高台が残ることから、(8079～8081) よりは若干古くなる。

(8084～8089) は陶磁器である。(8084) は国産陶器碗の底部で、底部外面は糸切りされる。内面は淡緑色の釉がかかる。瀬戸系の陶器である。(8085) は青磁碗の体部下半から底部である。内面見込みには圏線とその中に花文が陰刻される。底部外面は鉄釉で赤褐色を呈する。全体に淡緑色の釉薬がかかり、龍泉窯系青磁碗と思われる。(8086) は白磁碗Ⅳ類の口縁部。(8087) も白磁碗の底部。(8088・8089) は磁器で、(8088) は碗の底部。見込みに二重の圏線と草花文をコバルトで描く。体部にもわずかに文様がみられる。青花碗（輸入磁器）と考える。(8089) は壺の口縁部か。細かな波状文を５・６段コバルトで描く。産地は不明である。

(8090～8096) は土師器皿である。口径が16～17cmの大型と８～10cmの小型の２種に分かれるが、いずれも口縁部が大きく外に開く15世紀後半以降の器形をとる。(8093) は口縁端部に煤が一周付着する。

(8098) は土師質羽釜である。口縁部を短くつまみ上げる。

(8097・8099～8105・8107) は瓦質土器である。

(8097) は火鉢の脚部である。面取りされた獣足状の脚部で、唐草状の装飾をもつ。

(8099・8100) は瓦質土器羽釜で、両鍔体とも鍔から上が内傾し体部は球形となる。器形、大きさとも似る。(8100) は口縁部の３ヶ所に焼成後の外側からの穿孔がみられる。いずれも内外面ともに指頭圧痕が強く残り、内面はヨコのハケメを施す。

(8101) は大和型のすり鉢である。(8102～8105) は和泉型のすり鉢である。(8103) はほぼ完存するが、内面のスリ目は摩耗しており、かなり使用されていたことが分かる。いずれも外面はタテ方向に粗くヘラケズりあるいは回転ヘラケズり、内面はハケメを施す。

(8107) は瓦質土器甕で、外面にタタキ、内面にハケメを施す。

(8106) は陶器甕の口縁部で常滑窯産と思われる。

〔第３面溝Ｓ04048〕(8108)　調査区南端をはしる東西溝からの出土である。土師質の羽釜である。

〔第３面溝Ｓ04003〕(8109～8113)　調査区中央をはしる南北溝からの出土である。切り合い関係からも近世遺構出土と考えられる。以下の遺物もすべて近世に属するものである。

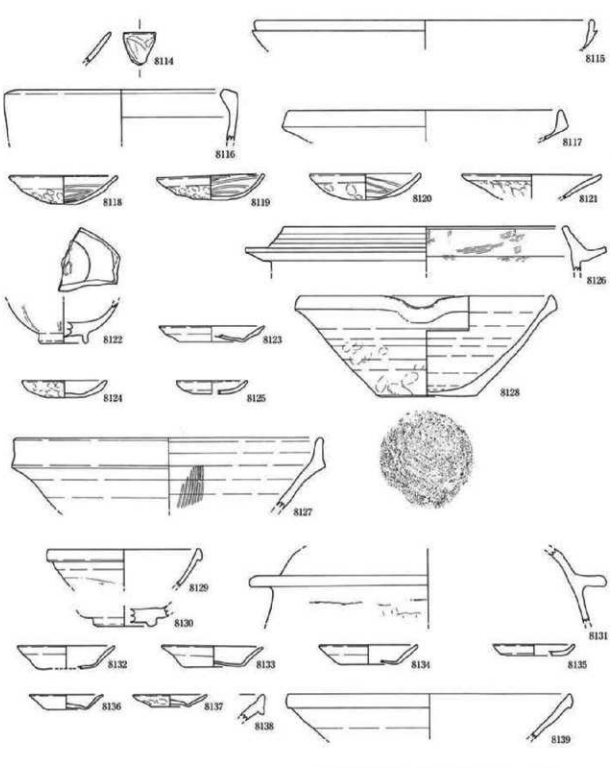
(8109～8111) はいずれも土師質で、円柱形をなし、底部３ヶ所に足をもつ容器である。(8110・8111) は切り取り窓をもつ。いずれも風炉もしくは火鉢と考えられる。

(8112・8113) は備前焼のすり鉢である。明赤褐色を呈し、胎土も精良で近世以降の大量生産品である。16世紀以降近世期には、備前焼のすり鉢が畿内にも広く流通した。

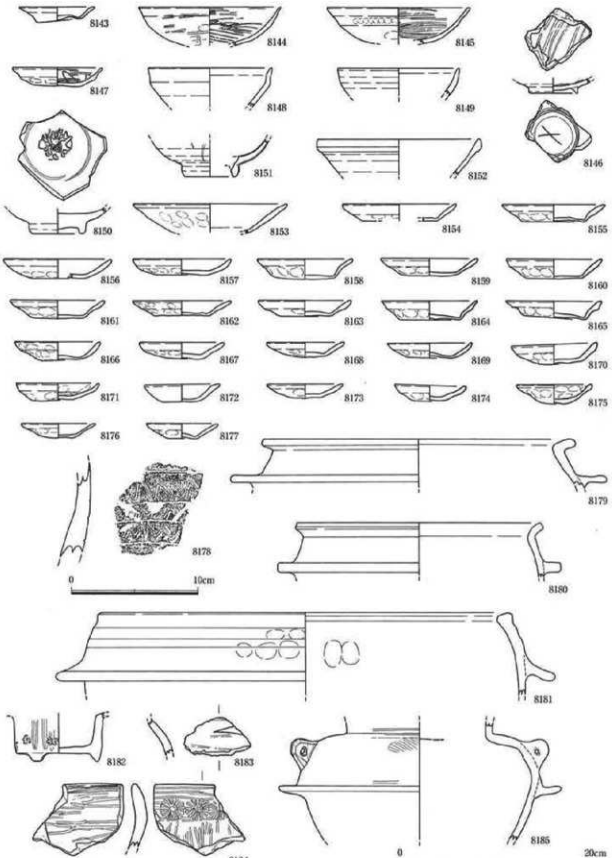
ｆ．99－５区遺構出土

〔第４面井戸Ｓ05102〕(8118～8128)　調査区中央で検出した曲物井筒の井戸からの出土である。

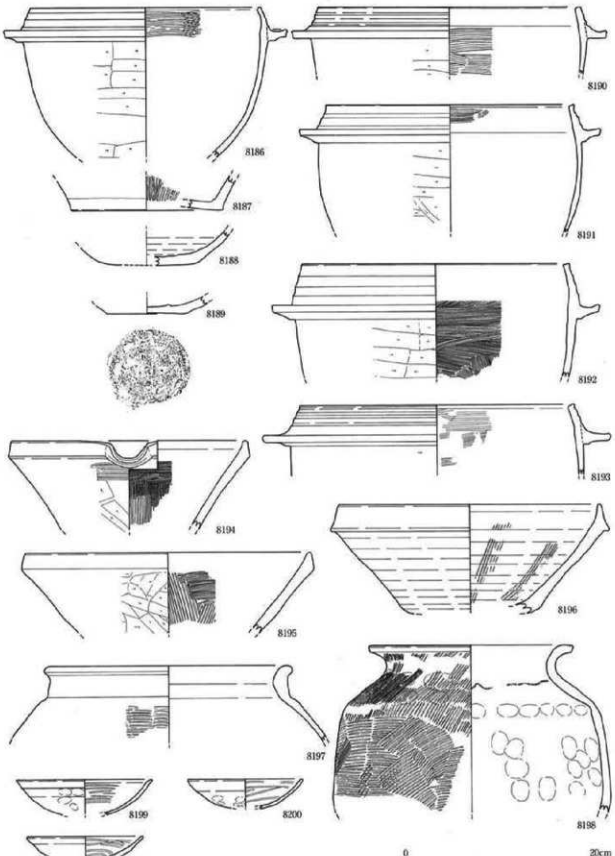
(8118～8120) は瓦器椀だが、いずれも終末期の様相を呈する。(8122) は青磁碗の底部である。内面見込みに陰刻された花文がわずかに残る。鎬蓮弁文碗である。(8121・8123～8125) は土師器皿である。(8126) は瓦質土器羽釜。(8127) は備前焼のすり鉢である。14世紀でも後半の時期を示す。(8128) は東播系須恵器こね鉢である。ほぼ完存する。口縁端部形態から13世紀後半から14世紀初めの時期を示す。井戸Ｓ05102の出土遺物は14世紀を中心とする年代として捉えられる。



第4面〔S05102（8118～8128）〕、第3面〔S05070（8114～8117）、S05090（8129～8139）、S05030（8140～8142）〕
図340　中世土器実測図－7（99－5区：遺構出土）



第3面〔S05020（8143）、S05010（8144～8185）〕
図341　中世土器実測図－8（99－5区：遺構出土）



第３面〔Ｓ05010（8186～8198）、Ｓ05001（8199～8201）〕
図342　中世土器実測図－９（99－５区：遺構出土）

〔第３面井戸Ｓ05070〕（8114～8117）　調査区の南東端で検出した桶枠井筒の井戸からの出土である。井戸の構造からも中世後半以降、近世の遺構と考えられる。

（8114）は青磁碗の口縁部片。鎬蓮弁文である。

（8115～8117）は瓦質土器だが、用途不明品である。（8116）は（8109～811）のような風炉か火鉢の可能性がある。（8115・8117）は外面に煤が付着する。焙烙のような容器か。

〔第３面土坑Ｓ05090〕（8129～8139）　溝Ｓ05010の東側で検出した大形の土坑からの出土である。

（8129・8130）は白磁碗の口縁部、底部。口縁部を玉縁状に折り曲げる。（8131）は土師質羽釜の体部。（8132～8137）は土師器皿。口径10cm前後と７～８cmの２種の大きさに分かれる。15世紀後半以降の器形である。（8138・8139）は東播系須恵器こね鉢。

〔第３面溝Ｓ05030〕（8140～8142）　調査区東半で検出した幅広で浅い溝からの出土である。

（8140）は内面の沈線や見込みの細いらせんミガキ、外面にも分割ミガキがみられるなどの特徴から、楠葉型Ⅱ型式前半の瓦器椀である。（8141・8142）は土師質土器で、（8141）は壺の底部か。（8142）は羽釜の口縁から鍔部。

〔第３面溝Ｓ05020〕（8143）　調査区西半で検出した溝からの出土である。

（8143）は土師器皿で底部が内側に盛り上がる。15世紀後半以降の器形である。

〔第３面溝Ｓ05010〕（8144～8198）　調査区の西寄りで検出した南北方向の大溝からの出土である。大量の遺物を包含する。

（8144～8146）は瓦器椀で、（8144・8145）は和泉型Ⅲ－２型式。（8146）はそれより古く、底部外面に「×」の線刻をもつ。（8147）は瓦器皿で瓦器椀と同時期のものである。

（8148・8149）は国産の天目茶碗である。（8148）は口縁部を外側から強くおさえるため、体部から直線的に屈曲する。

（8150～8152）は輸入磁器類。（8150・8151）は青磁碗の底部で、（8150）は内面見込みに圏線をめぐらせ、その中に花文を陰刻する。（8152）は白磁碗Ⅳ類。

（8153～8177）は土師器皿である。直径約16cmの大型品（8153）と中型品（8154～8165）、小型品（8166～8177）の３種がある。いずれも15世紀後半以降のものである。土師器皿はこの数倍の実測可能遺物が出土している。（8179～8181）は土師質羽釜。各々時期差があり、（8181）が口縁端部が肥厚し最も新しい型式をとる。

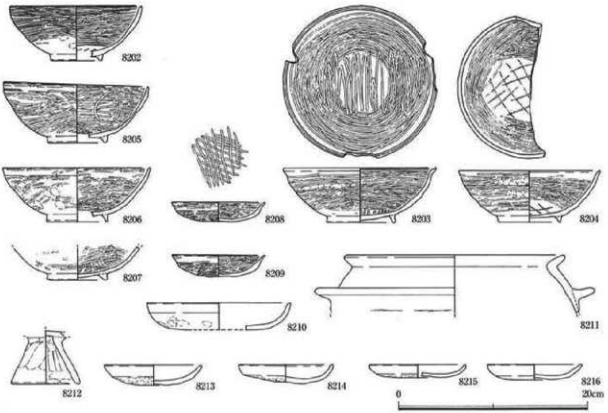
（8178・8182～8186・8190～8195・8197・8198）は瓦質土器である。（8178）は用途不明品だが、甕など大型品の体部片と思われる。４条の直線の間にロクロによって須恵器のような波状文をめぐらす。（8182）は香炉。体部下半に印花文を施す。（8183）は小型の壺の肩部と思われる。松葉状の線刻を施す。（8184）は火舎口縁部。菊花文を印刻する。（8185）は茶釜。体肩部の左右に２つの紐孔をもつ。

（8186・8190～8193）は瓦質土器羽釜である。いずれも体部外面は横方向にヘラケズリ、内面もヨコハケメを施す。（8186・8190・8191）は口縁部が短かくなっている。

（8194・8195）は瓦質土器すり鉢で、いずれも外面に粗いヘラケズリの痕が残る。内面はハケメののち、スリ目をつける。（8194）は片口部分が残る。

（8197・8198）は瓦質土器甕の口縁部から体部。体部外面に水平あるいは右上がりのタタキを施す。

（8187）は陶器すり鉢の底部。（8188・8189）は須恵器の甕もしくはこね鉢の底部。（8189）は底部糸切り痕が残る。（8196）は備前焼のすり鉢である。



第３面〔Ｓ06421（8203）、Ｓ06310（8204）、Ｓ06333（8205～8216）〕、その他（8202）

図343　中世土器実測図－10（99－６区：遺構・包含層出土）

溝Ｓ05010の遺物は13世紀代のものと15世紀後半のものが混在しているが、遺構の中心時期は15世紀後半といえる。

〔第３面溝Ｓ05001〕（8199～8201）　調査区北側で検出された東西に長い溝からの出土である。瓦器椀以外に埴輪を多量に含んでいた。

（8199～8201）はいずれも瓦器椀で和泉Ⅲ－３～Ⅳ－１型式相当。

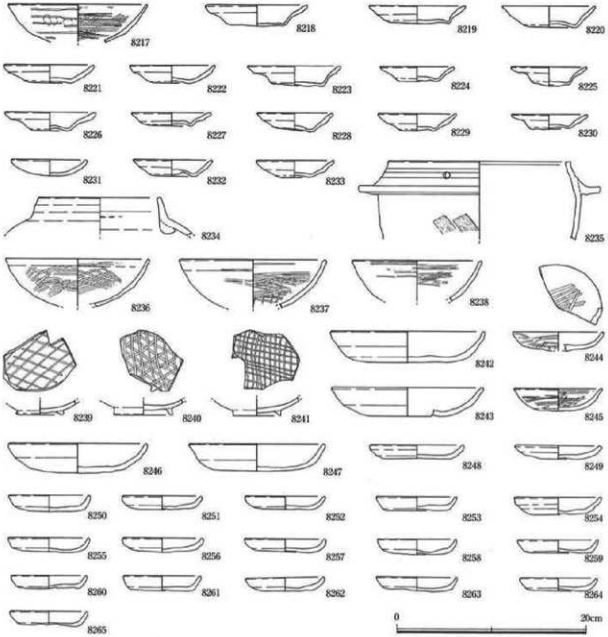
ｇ．99－６区遺構・包含層出土

〔第３面瓦器椀埋納土坑Ｓ06421〕（8203）　掘立柱建物の柱穴となる可能性もある遺構の最底部より、ほぼ完形の瓦器椀が出土した。楠葉型の瓦器椀でⅠ－Ｃ型式。内外面ともにミガキを密にめぐらし、見込みには平行線ミガキを施す。

〔第３面瓦器椀埋納土坑Ｓ06310〕（8204）　掘建柱建物の柱穴となる可能性もある遺構の最底部より、約半分残存する瓦器椀が出土した。和泉型Ⅰ－３型式。上記の（8203）に比べややミガキが疎らになるもの、底部外面までミガキがはいり、見込みには格子状ミガキを施す。

〔第３面井戸Ｓ06333〕（8205～8216）　高まりＳ06300の北端で検出した曲物を積み重ねた井戸からの出土である。遺構の残存状況がよく、遺物を多く含む。

（8205～8207）は和泉型瓦器椀でⅠ－２～３型式。見込みには粗い平行ミガキを施す。（8205）は体部内面に横方向のミガキの後らせん状のミガキを施す。（8208・8209）は和泉型の瓦器皿である。ミガキが密で、瓦器椀と同時期を示す。



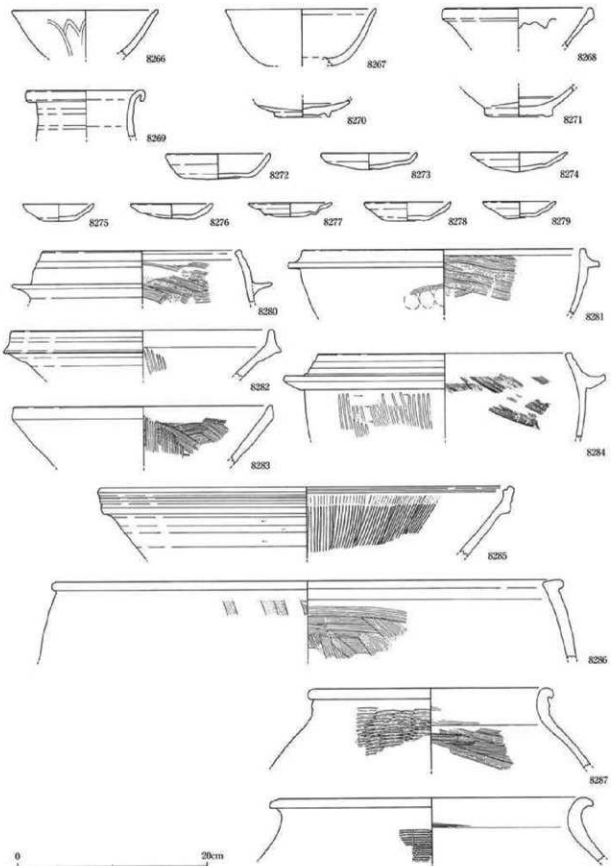
第２面〔Ｓ06061（8217～8235）、Ｓ06050（8236～8265）〕
図34　中世土器実測図－11（99－６区：遺構出土）

（8211）は土師質羽釜。（8212）は土師質の製品で、高杯状の器種の脚部と思われる。（8210・8213～8216）は土師器皿で11世紀末から12世紀前半の様相を示す。

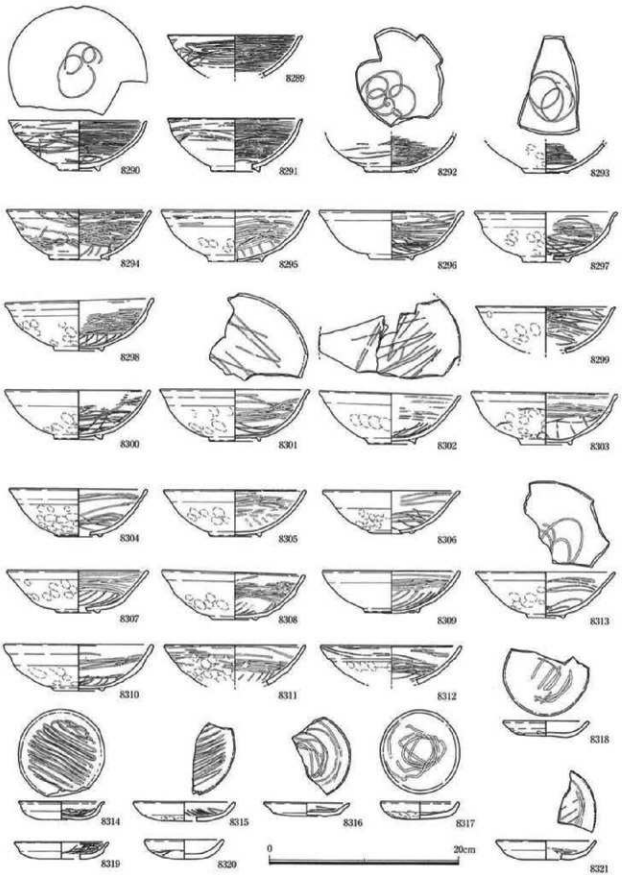
高まり部で検出された上記の３遺構からの出土遺物は、いずれも11世紀末から12世紀前半代という、今回調査した中世遺物の中では最古の時期を示す。

〔その他〕（8202）　高まり部分Ｓ06300の下層包含層中より出土した。楠葉型瓦器椀Ⅱ－Ａ型式。口径13.8cm、器高5.8cmと小ぶりである。

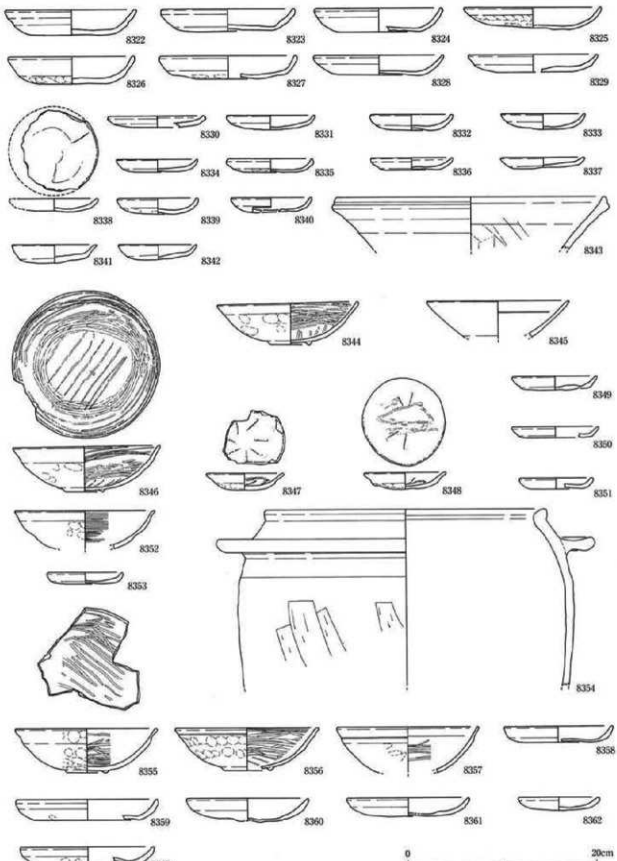
〔第２面溝Ｓ06061〕（8217～8235）　調査区東側、溝Ｓ06020の東で検出した南北溝からの出土である。（8217）は和泉型瓦器椀Ⅳ型式。（8218～8233）は土師器皿で大小２種の規格がある。掲載した数倍の



第2面〔S06020（8266～8288）〕
図345　中世土器実測図－12（99－6区：遺構出土）



第6面〔S07001（8289～8321）〕
図346　中世土器実測図－13（99－7区：遺構出土）



第6面〔S07001（8322～8343）、S07002（8344～8351）、S07003（8352～8354）、S07004（8355～8363）〕
図347　中世土器実測図－14（99－7区：遺構出土）

実測可能な土師器皿が出土している。(8234) は瓦質土器だが用途不明である。筒部に環状の羽をつけた様な形態である。五徳状のものか。(8235) は瓦質羽釜で鍔部に焼成後の穿孔をもつ。

〔第2面溝S06050〕(8236～8265)　調査区西側で検出した南北の大溝からの出土である。

(8236～8241) は瓦器椀で和泉型Ⅲ－2～3型式。底部片 (8239～8241) は若干古くなる。(8244・8245) の瓦器皿も同時期を示す。

(8242・8243) は土師器大皿。(8246・8247) は土師器中皿。(8248～8265) は土師器小皿。土師器皿は掲載した遺物の数倍実測可能な遺物が出土した。この遺構の遺物はすべて13世紀前半の範疇におさまる。

〔第2面溝S06020〕(8266～8288)　調査区中央で検出した南北の浅い溝からの出土である。

(8266～8271) は陶磁器類である。(8266) は蓮弁文青磁碗。(8267) も青磁碗である。(8269) は青磁壺の口縁部。(8270) も青磁で皿もしくは碗の底部である。(8268・8271) は白磁碗の口縁部、底部。(8272～8279) は土師器皿で、(8272) は杯と呼ぶ方がふさわしい深い器形をとる。(8280～8284・8286～8288) は瓦質土器である。(8280・8281・8284) は羽釜と鍋、(8282・8283) はすり鉢、(8286～8288) は甕である。(8285) は備前焼のすり鉢である。

溝S06020の遺物は、15世紀以降近世までのものを含む。

h．99－7区遺構・包含層出土

〔第6面土坑S07001〕(8289～8343)　調査区東端で検出した大形土坑からの出土である。本遺構は、大量の土器や炭化した自然遺物が投棄されていたことから廃棄土坑であったと考えられる。掲載した以外にも多量の瓦器や土師器を含む。

(8289～8313) は瓦器椀である。このうち大和型は (8289～8293)。すべて見込みにらせんミガキを施し、Ⅲ－A型式。(8294～8313) は和泉型だが、時期幅があり、Ⅲ－1～3型式相当。見込みに格子もしくは平行線ミガキを施す。(8314～8321) は瓦器皿ですべて和泉型。Ⅲ型式前半。

(8322～8342) は土師器皿で、口径14cm前後の大型と9cm前後の小型の2種に分かれる。(8338) は内面に粘土板の接合痕が残る。(8343) は東播系須恵器こね鉢。

〔第6面土坑S07002〕(8344～8351)　調査区北東端で検出した大形土坑からの出土である。

(8344・8346) は和泉型瓦器椀でⅢ－2～3型式。(8345) は白磁碗Ⅸ類。(8347・8348) は瓦器皿で内面に放射状に板状工具の痕跡が残る。(8349～8351) は土師器皿。

〔第6面土坑S07003〕(8352～8354)　土坑S07001に近接して調査区東端で検出した、長円形の土坑からの出土である。

(8352) の瓦器椀、(8353) の土師器皿とも上記遺構と同時期である。(8354) は土師質羽釜。

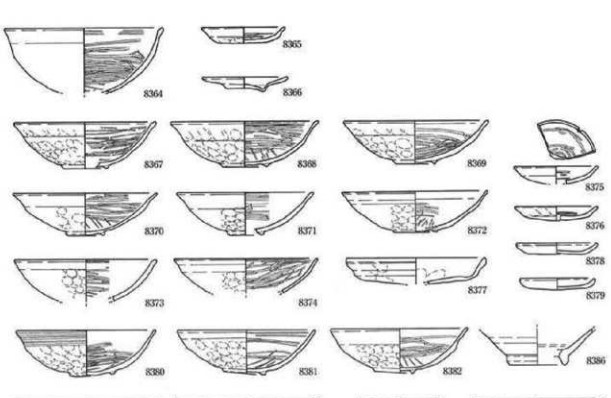
〔第6面土坑S07004〕(8355～8363)　土坑S07001に近接して調査区東端で検出した、長円形の土坑からの出土である。

(8355～8357) は和泉型瓦器椀でⅢ－2～3型式。(8358～8363) は土師器皿だが大型のものが多い。

〔第6面溝S07005〕(8364～8366)　調査区の西側で検出した南北方向の浅い溝からの出土である。本遺構は西で溝S07013と接する。

(8364) の瓦器椀は口径16.4cm、器高6.8cmとやや大型で深い椀形をとる。(8365) は瓦器皿、(8366) は土師器皿で、これのみ時期的に新しいことから何らかの事情による上層からの混入と考える。

〔第6面土坑S07010〕(8367～8379)　調査区の東側で検出した土坑からの出土である。(8367～8374)



第6面〔S07005（8364～8366）、S07010（8367～8379）、S07013（8380～8389）〕、第4・3面間（8390）
図348　中世土器実測図－15（99－7区：遺構・包含層出土）

の瓦器椀は和泉型Ⅲ－1～3型式。（8375・8376）は瓦器皿、（8377～8379）は土師器皿。

〔第6面溝S07013〕（8380～8389）　調査区の西側で検出した南北溝からの出土である。

（8380～8384）の瓦器椀は和泉型Ⅲ－1～2型式。（8385）は瓦器皿、（8386）は白磁碗の底部。（8387～8389）は土師器皿で大小2種ある。

〔第4・3面間〕（8390）　第4・3面間の包含層より出土した。小型の天目茶碗で、鉄釉がかかる。国産で、闘茶用かミニチュアと考えられる。

99－7区で出土した遺物は、（8366）を除いては13世紀前半代に限定され、短期間の使用の後に廃棄されたものであるといえる。

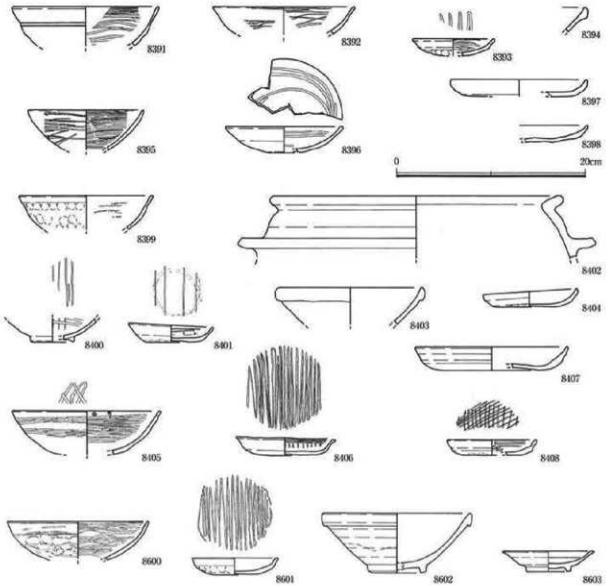
i．01－1区遺構・包含層出土

〔第2面井戸S21052〕（8391～8394）　調査区の中央南壁中で検出した曲物を井筒とし、方形井側をもつ井戸からの出土である。

（8391・8392）の瓦器椀は小破片であるが、和泉型Ⅲ～Ⅳ型式。（8393）は瓦器皿で同Ⅲ型式。（8394）は白磁碗の口縁部。

〔第2面井戸S21022〕（8395～8398）　調査区の北西部で検出した曲物井戸からの出土である。

（8395）は小ぶりの小椀で、口縁に沈線をもつ大和型瓦器椀。（8397・8398）は口径14cm前後の大型



第２面〔Ｓ21052（8391～8394）、Ｓ21022（8395～8398）、Ｓ21019（8399～8403）〕、その他（8404～8408、8600～8603）
図349　中世土器実測図－16（01－１区：遺構・包含層出土）

の土師器皿である。

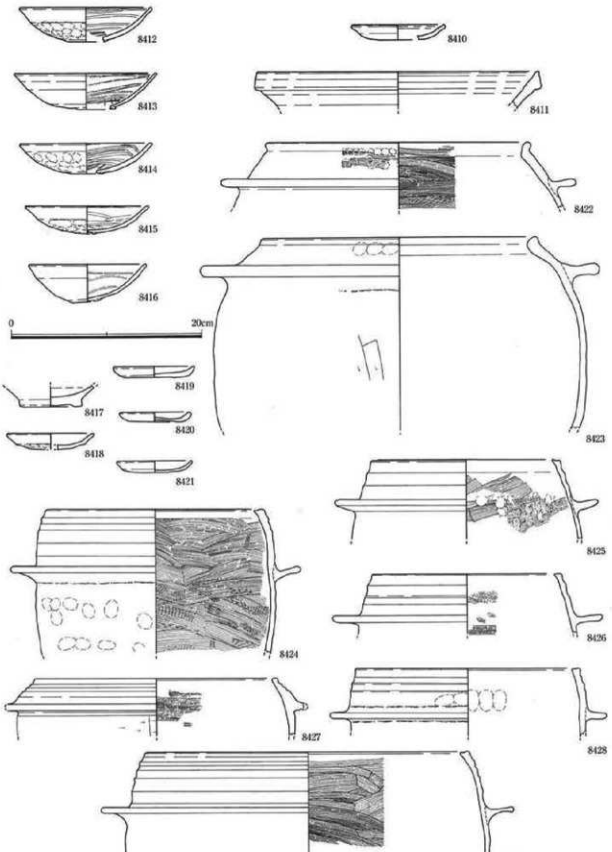
〔第２面井戸Ｓ21019〕（8399～8403）　調査区中央で検出した素掘り井戸からの出土である。

（8399・8400）は瓦器椀で和泉型Ⅲ型式後半段階。（8401）は瓦器皿。（8402）は土師質の羽釜。（8403）は白磁碗の口縁部。井戸Ｓ21019の遺物は、井戸Ｓ21052と同じく13世紀代に属する。

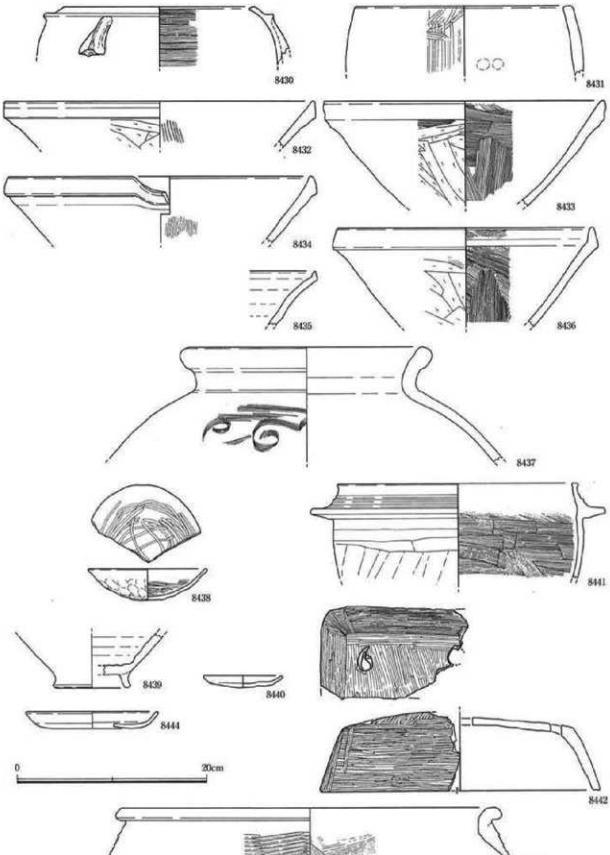
〔その他〕（8404～8408、8600～8603）　（8404）は溝Ｓ21001の遺物になる可能性をもつ土師器皿。（8405～8407）は井戸Ｓ21052の遺物である可能性が高いが、南壁中で出土したため本項に含めた。

（8405）は口縁部の近接した２ヶ所に穿孔をもつ瓦器椀である。和泉型Ⅲ－３型式。（8406）の瓦器皿も同時期。細いジグザグ状ミガキを施す。（8407）は大型の土師器皿。（8408）は第２面直上で出土した瓦器皿である。見込みに格子状ミガキを施す。（8600～8603）は南壁中の井戸の可能性ある遺構から出土。（8602・8603）は白磁碗、白磁皿。

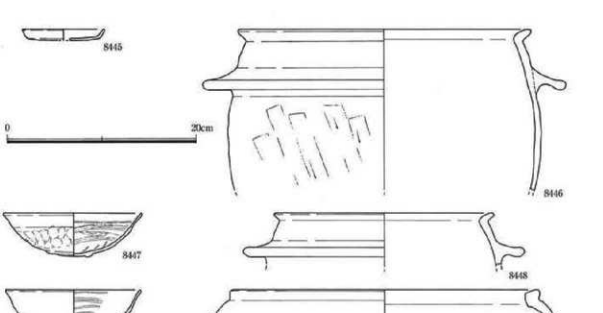
ｊ．01－２区遺構出土



第5面〔S22036（8410・8411）〕、第4面〔S22030（8412～8429）〕
図350　中世土器実測図－17（01－2区：遺構出土）



第４面〔Ｓ22030（8430～8437）、Ｓ22001（8438～8443）、Ｓ22013（8444）〕
図351　中世土器実測図－18（01－２区：遺構出土）



第４面〔Ｓ23011〕(8445・8446)、第２面〔Ｓ23001〕(8447～8449)、第４・３面間（8450・8451）
図352　中世土器実測図－19（01－３区：遺構出土）

〔第５面Ｓ22036〕(8410・8411)　(8410) は土師器皿で12世紀前半の形態のものである。(8411) は東播系須恵器こね鉢。

〔第４面溝Ｓ22030〕(8412～8437)　調査区西側に位置する南北の大溝からの出土である。

(8412～8416) は和泉型瓦器椀でⅣ－１～３型式。14世紀前半に属する。(8417) は白磁碗の底部。(8418～8421) は土師器皿。(8422・8423) は土師質羽釜で、口縁端部を折り曲げた (8422) と口縁端部が肥厚した (8423) とがある。

(8424～8434・8436) は瓦質土器。(8424～8429) は羽釜で、口縁部が内傾するものと直立するものとがある。(8430) は三足付羽釜。(8431) は火鉢か。外面をみがく。(8437) は陶器壺で、肩部分に線彫りの文様がはいる。溝Ｓ22030の遺物は、14世紀前半代のものと15世紀後半のものが混在する。

〔第４面溝Ｓ22001〕(8438～8443)　第４～２面の溝からの出土である。(8438) は瓦器椀。(8439) は陶器壺の底部。常滑産と思われる。(8440) は土師器皿。(8441) は瓦質羽釜。(8442) は瓦質の長方形の容器で、蓋か。外面を密にみがく。底部が中央に向かうにつれふくらむため蓋とした。中心に円形、隅に勾玉形の焼成前の穿孔をもつ。(8443) は瓦質土器甕の口縁部。

〔第４面土坑Ｓ22013〕(8444)　第４面土坑からの出土である。大型の土師器皿である。

ｋ．01－３区遺構出土

〔第４面池Ｓ23011〕(8445・8446)　調査区東半を占める池からの出土である。

(8445) は土師器皿で薄く、口縁部は直線的にたち上がる。(8446) は土師質羽釜。外面をヘラケズリする。これ以外に近世の磁器などを含む。

〔第２面溝Ｓ23001〕(8447～8449)　調査区西半を占める南北方向の大溝からの出土である。

(8447) は瓦器椀で和泉型Ⅲ型式後半。(8448・8449) は土師質羽釜。

〔第4・3面間〕(8450・8451)　第4・3面間の包含層からの出土である。(8450) は瓦器椀で和泉型Ⅲ型式前半か。(8451) は土師器皿。

1．小結

以上の出土した中世土器は何時期かに小区分できる。

11世紀末から12世紀前半段階のものは、99－6区や、01－1区から99－2区の客土された地域に多くみられる。その後は13～14世紀前半の土器が連続的に広範囲で出土する。それからしばらくの断絶の後、15世紀後半から近世に至る遺物が出土する。その多くは南北の大溝やそれに付随する遺構からであり、柱穴などにこの時期の遺物は含まれない。これは中世後期には集落形成されないという、瓜生堂遺跡の集落のあり方を考える上で重要となる。

また、大和産の土器は12世紀初めの瓦器椀に少量含まれるが、以降は瓦質すり鉢などがわずかにあるのみである。全体比率を算出していないが、生駒山西麓に位置する中世遺跡、西ノ辻・水走遺跡などからの出土量に比べると格段に少ない。これは地理的な要因と時期的な要因とが考えられる。つまり、当遺跡が上述のような12世紀前半までは遺跡の範囲が小さく、13世紀から14世紀を主流とする遺跡であるため、この頃には河内において大和産の土器の搬入が減少化するという、一般的傾向と合致する。

輸入陶磁器の割合も少なく、遺物からみた瓜生堂遺跡の中世期の集落は、当時一般的な集落の規模・性格と位置づけることができる。　(川瀬)

(2) 土製品 (図353～356、写真図版112)

1) 各調査区の出土品

a．出土状況ほか

99－1区・3区～6区および01－1区・2区から、土錘、土器片転用円盤、焼粘土塊などの土製品が出土した。中世後半から近世の溝、土坑、井戸あるいは包含層に含まれているものがほとんどである。焼粘土塊の出土が多いが、特定の遺構にかたまっていることはなく、広範囲に出土している。

b．各区出土

〔土錘〕(8452～8454)　管状土錘である。(8452・8453) は特殊な扁平品だが、本項に入れた。

(8452) は99－4区から出土した。長方形で中心よりやや外寄りに穴が貫通する。調整は不明瞭で、重量は123gである。

(8453) は99－6区から出土した。2枚の粘土板の中心に棒を挟んで成形したものか、表裏に接合痕が残る。表面はナデが施されている。重量は108gである。

(8454) は99－7区から出土した。表面はケズリが施されている。重量は62gである。管状土錘は (8454) のような中央が膨らむ形状が一般的である。(8452・8453) のような扁平で、断面が楕円形で、貫通する穴も中心より偏る土錘は珍しい。土錘以外で使用された可能性も考えられる。

〔その他〕(8455～8457)　不明土製品である。用途や原形が不明なものの一群である。

(8455) は99－7区から出土した。直径が2.1cm、重量は2gの球玉である。表面はケズリが施されている。(8456) は99－6区から出土した。直径2.0cmのやや楕円の球玉で、重量は3gである。表面はケズリが施されている。

(8457) は99－3区から出土した。上面は丸く盛りあがるが下面は平らで、半球形をなす。上面に線刻がわずかに残り、土人形の一部か泥面子と思われる。直径1.8cm、厚さは0.7cmである。上部と底部に

表20　中世以降土製品分類表

	地区	種類								計
		土錘	土製紡錘車	土器片転用有孔円盤	土器片転用円盤	焼結土塊	球玉	土人形	その他、不明	
検測遺物	99-1	1								1
	99-3					3			2	5
	99-4					4		3	1	8
	99-5				2			1		3
	99-6	1			1	9	1	1		13
	99-7						1	2		3
	01-1					2				2
	01-2					1				1
非検測遺物	99-3					26				26
	99-4					55				55
	99-5					17				17
	99-6					53				53
	99-7					1				1
	01-2					1				1
計		2			3	172	2	7	3	189

表21　中世以降土製品観察表

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土遺構・層位	器種	法量					備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	直径(cm)	重量(g)	
112	353	8452	99-4	第3面SD04049	土錘	9.8	4.2	2.2		120～129	
112	353	8453	99-6	第2面SD06020	土錘	9.1	4.1	1.8		105～110	板状に伸ばした粘土2枚で棒のようなものを挟み合わせて成形か
112	353	8454	99-1	第9・8面間	土錘	7.1	3.1	1.3	2.85	60～62	
112	353	8455	99-7	第7面SD7013	球玉	2.1	2.1		2.1	2	
112	353	8456	99-6	第2・1面間	球玉	2.0	1.7		1.7	3	
112	353	8457	99-3	第3・2面間	土人形？			0.7	1.8	1	底部はケズリを施される
—	353	8458	99-3	第3・2面間	不明	6	4	0.8			磁器　直径0.5cmの孔が外→内に穿たれている
112	353	8459	99-5	第3面SD05010	土器片転用円盤	0.9	4.2	1.3			瓦質土器または瓦を転用
112	353	8460	99-6	第2面SD06020	土器片転用円盤	4.5	4.15	0.9			瓦質土器の転用品
112	353	8461	99-5	第3・2面間	土器片転用円盤	3	3.15	0.75			瓦質土器（羽釜）などの転用品（内面ハケメがみられる）
—	354	8462	99-3	側溝	焼結土塊	10.3	8.7	7.1			
—	354	8463	99-6	第2面SD06050	焼結土塊	7	4.5	3.4			スサ入り
—	354	8464	99-3	第1面SD03007	焼結土塊	7.95	5.55	3.7			
—	354	8465	99-6	第2面SD06020	焼結土塊	7.5	5.25	3.0			
—	354	8466	99-4	第3面SD04003	焼結土塊	6.6	5.7	2.3			
—	355	8467	99-4	第3面SD04003	焼結土塊	5.9	4.2	1.55			
—	355	8468	99-6	第2面SD06020	焼結土塊	5.7	3.4	2.9			
—	355	8469	01-2	T.P.+2.5～2.0m	焼結土塊	4.2	4.9	4.0			
—	355	8470	99-4	第3面SD04003	焼結土塊	4.9	3.35	2.6			
—	355	8471	99-6	第3面SD06333	焼結土塊	4.3	3.1	1.85			
—	355	8472	99-4	第2・1面間	焼結土塊	3.4	3.2	1.9			
—	355	8473	01-1	第2面SD21019	焼結土塊	3.1	3.3	1.7			スサ入り
—	355	8474	01-1	第2面SD21019	焼結土塊	2.9	3.3	2.0			
—	355	8475	99-6	第3面SD06372	焼結土塊	3.4	3.3	1.7			
—	355	8476	99-6	第3面SD06333	焼結土塊	3.0	2.5	1.85			
—	355	8477	99-6	第2面SD06100	焼結土塊	3.6	2.4	2.6			
—	355	8478	99-6	第2面SD06021	焼結土塊	3.1	2.6	1.8			
—	355	8479	99-6	第2面SD06020	焼結土塊	3.2	2.5	2.5			
—	355	8480	99-3	第3・2面間	焼結土塊	3.0	2.1	1.7			
112	356	8481	99-7	第4・3面間	土人形	3.7	2.1	1.0			
112	356	8482	99-7	第4・3面間	土人形	2.6	6.0	2.1			
112	356	8483	99-6	第3・2面間 SD6020	土人形	5.1	3.6	2.1			布袋、開取、歯無僧か
112	356	8484	99-5	第3面SD5070	土人形	3.4	6.0	2.0			鶏
112	356	8485	99-4	第2面SD4028	土人形	4.6	3.9	2.4			猿(言わ猿)
112	356	8486	99-4	第2・1面間	土人形	3.1	5.6	2.7			天神が乗るタイプの牛か
112	356	8487	99-4	第2面SD4023	土人形	2.7	3.2	1.6			天神座像または内裏雛か

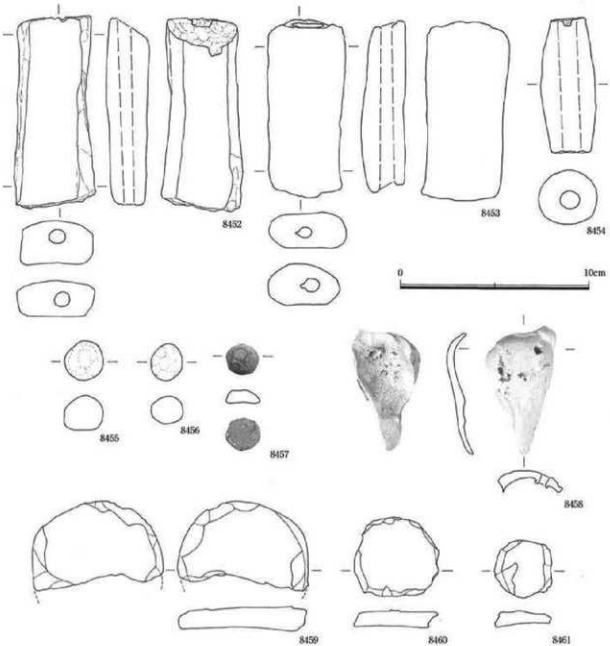


図353　中世以降土製品実測図－1（99－1・3・5・6・7区：遺構・包含層出土）

ケズリが施されている。

（8458）も99－3区から出土した。磁器で、青白色を呈する。直径0.5cmの穴が表面から内側に向かって穿孔されている。薄く、中空になっている。水滴か、水注の一部の可能性もあろう。近世以降の遺物である。

〔土器片転用円盤〕（8459～8461）　いずれも中心に穿孔をもたない。出土した遺構や共伴した遺物から、時期はいずれも中世と考えられる。

（8459）は99－5区から出土した。表面はヘラミガキ、裏面はケズリを施している。瓦質土器もしくは瓦を転用したものである。（8460）は99－6区から出土した。両面ともナデが施されている。瓦質土器を転用して製作されている。（8461）は99－5区から出土した。表面にナデ、裏面にハケが施されている。

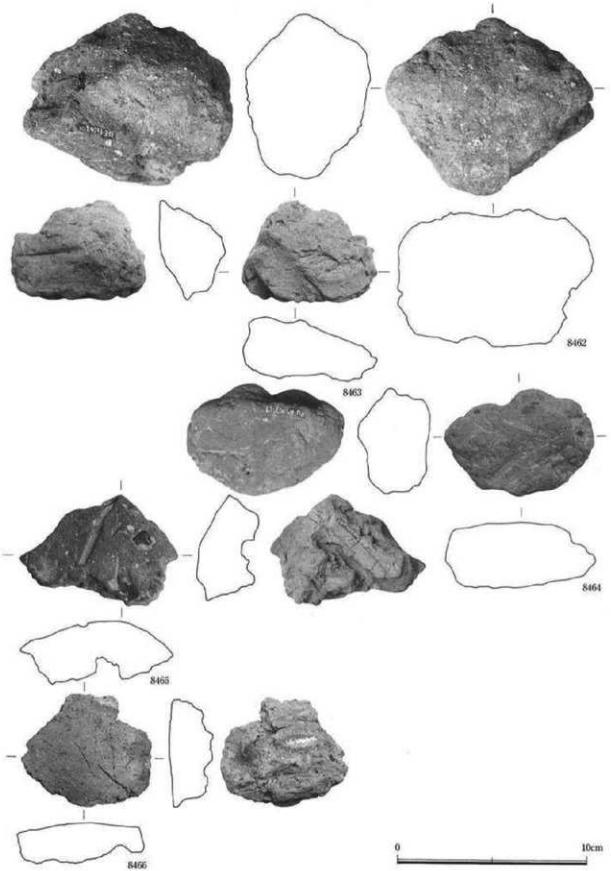


図354　中世以降土製品実測図－2（99－3・4・6区：遺構・包含層出土）

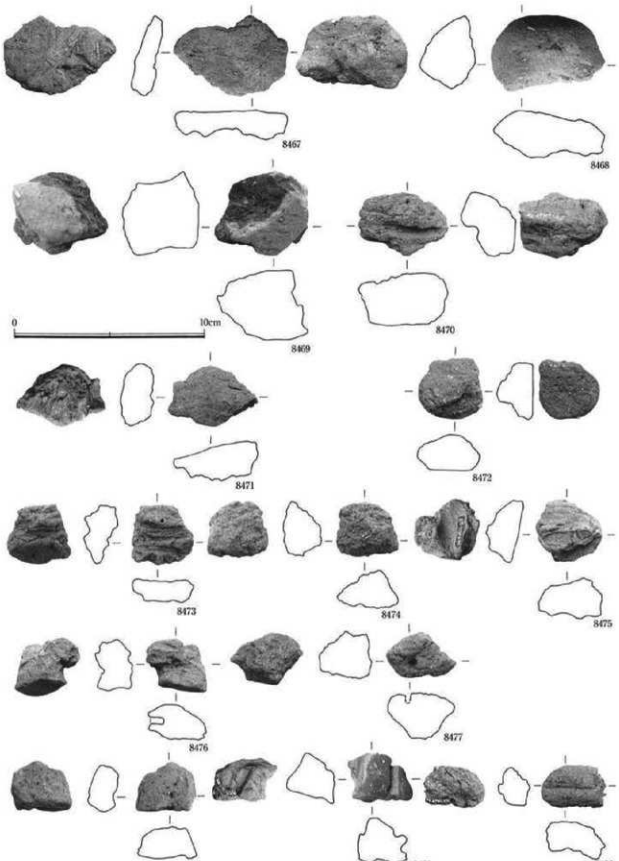


図355　中世以降土製品実測図－３（99－３・４・６、01－２区：遺構・包含層出土）

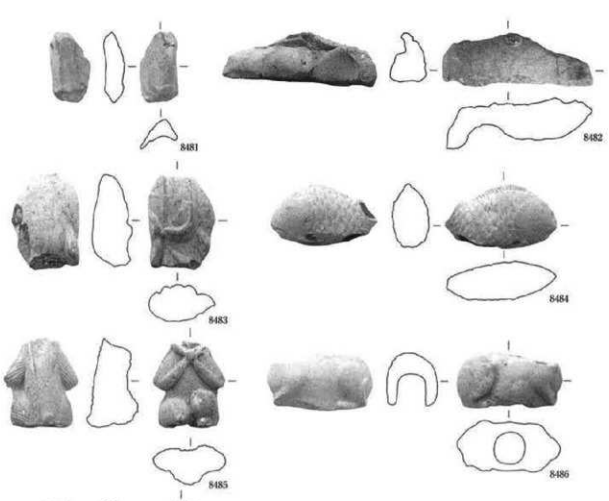


図356　中世以降土製品実測図－4（99－4・5・6・7区：遺構・包含層出土）

やはり瓦質土器を転用して製作されている。

〔**焼粘土塊**〕（8462～8480）　図示したのは19点であるが、出土総数は172点と他の時期と比べて最も多い。99－3区から99－6区に集中して出土する。他の時期のものと比較すると大きいものが多く、（8476・8477）のような人為的な窪みがみられるのが特徴である。

（8471・8476）は99－6区から出土した。棒状の工具で押圧した凹みが4ヶ所ある。（8480）は99－3区から出土した。何らかの突帯の一部かとも考えられる。出土した遺構や共伴した遺物から、（8463・8464・8467・8471～8473・8476～8480）は中世、（8462・8465・8466・8468～8470・8474・8475）は近世の遺物と考えられる。

〔**土人形**〕（8481～8487）　伏見人形の流れを汲んだと考えられる土人形は、99－4区～7区で集中して検出された。土人形は京都の伏見深草を発祥の地として作られたとされる型作りの人形で、素焼きし、胡紛をかけた後に泥絵の具で彩色される。始源は諸説あるが、文献に登場するのは江戸時代元禄期以降で、明治・大正時代まで全国各地で盛んに製作された。江戸中期に殖産興業の代表例として奨励され各

地に広まった。初期は信仰に結びついた、でんぼ、つぼつぼ、鈴、狐などを模したものが多いが、後に縁起や教訓に基づく人形や動物など多種類にわたるものが製作され、玩具的意味合いが強くなる。また、大きさも一尺（30cm）以上のものもあれば、10cm未満の小形品など様々である。

遺跡からの出土品としては、大坂城跡などの近世遺跡で散見される。

今回の調査で出土した土人形は、いずれも素焼きで着色された痕跡がない。また、すべての遺物が顔や頭、尾など細い部分から先を欠損する。大きさは現存高が3～5cm、推定高でも5～7cmと一定の大きさにおさまる小形品である。

（8481・8482）は99－7区で、包含層から出土した。どちらも原形は不明であるが、（8482）は（8486）同様動物の体部とも考えられる。

（8483）は頭部を失うが、裂裟状の着衣をまとった人物立像である。布袋か、おぼこ、お高祖頭巾女と思われる。99－6区の溝から出土した。

（8484）は鯛である。尻尾を欠損する。表裏面ともに鱗や背・胸鰭が表現してある。99－5区で中世後半から近世に相当する井戸から出土した。

（8485～8487）は99－4区で近世の時期と考えられる遺構から出土した。（8485）はいわゆる三猿の内の“言わ猿”と考えられる。（8486）は牛の座像、もしくは寝牛と思われる。あるいは天神座像が乗った牛かも知れない。（8487）は天神座像もしくは内裏雛の男雛と考えられる。

天神や鯛、牛などは縁起物として土人形に多くみられるモチーフである。また、（財）東大阪市文化財協会45－2次調査区でも同様の小形の土人形や土鈴が数点出土している。

c．小結

焼粘土塊以外は中世の上層部、中世後半から近世の遺構や層順からの出土遺物であるといえる。また、（8457）や（8481～8487）のような玩具が多く出土したことも注目される。（宮田・川瀬）

（3）木製品（図357、写真図版117・118）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

木製品として最も多く出土したのは、井戸の井筒に転用された曲物の側板である。その多くが直径40～50cm、高さ30cm前後で、一つの井戸に最低2～3段積み上げられているため、総数としては数十個体出土した。ただし、検出時から破損がひどく脆弱で取り上げの際にも破損を生じたため、完全な状態で保存できたのは10点弱である。諸般の事情から図示し得なかったが、遺存状態の良いものを写真で示した（写真図版118）。

それ以外にも大溝の土留めに使われた杭などが出土しているが、図示し得なかった。挿図であげた木製品は、井戸の中などから検出されたものが多い。

b．各区出土

〔**服飾品**〕（8488・8492）　（8488）は、足がのる台と歯を一木で作り出す連歯下駄の一部である。残存長11.6cm、残存幅4.5cmをはかり、表面には台とほぼ同じ幅で高さ1.0cm前後の歯が残る。01－3区第4面出土。

（8492）は、残存長2.8cm、残存幅4.5cmをはかる横櫛の一部である。肩の張る形状で全体的には長方形に近い形になると思われる。現状で歯は37枚確認でき、歯と脊の境界に1条の沈線が走る。脊の断面形は五角形を呈する。01－1区井戸S21022の井筒1・2段目内出土。

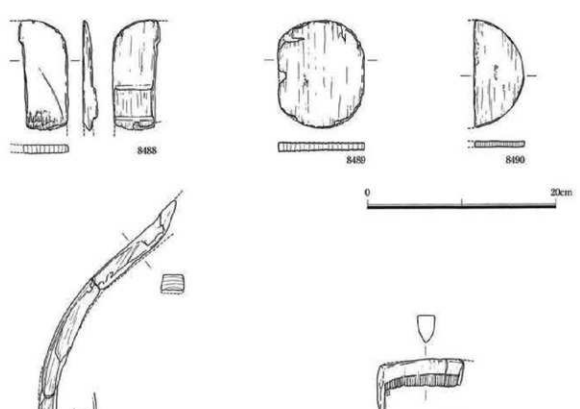


図357　中世以降木製品実測図（99－4、01－1・3区；遺構出土）

〔容器〕（8489・8490）　（8489）は、曲物の底板である。現状では長径11.3cm、短径9.1cmの楕円形を呈するが、本来は円形であった可能性もある。厚さは1.0cm前後である。99－4区溝S04003出土。

（8490）も、曲物の底板である。現状では半円形であるが、本来は径11.3cm前後の円形を呈していたと考えられる。厚さは（8489）よりもやや薄く0.5cm程度である。99－4区溝S04003出土。（8489・8490）とも木釘穴は観察できなかった。

〔用途不明品〕（8491）　残存長30.7cm、幅2.6cmをはかる湾曲した棒状の木製品である。削ることにより断面が長方形に加工されている。端部には段が作られ、柄のような形状となっている。端部付近に長方形の穴をもつ。この穴に別の部品を刺し通していたとも考えられるが、該当する木製品は出土していない。01－1区井戸S21052の枠1段目内出土。

c．小結

中世の木製品は井戸枠に利用された曲物を除けば非常に少ないが、その少ない遺物の多くが井戸枠内から出土していることが注目される。これは井戸の中が浸水状態で木製品の保存に適していた為ともいえるが、（8489～8491）の遺物は柄杓や鈎瓶など水を汲む行為において使用された容器の一部とも考えられるので、その結果、自然とこれらの遺構からの出土が多いともいえる。

また、中世では櫛を井戸に投げ込むという祭祀的な行為が行われていたともいわれる。しかし、今回の調査で櫛が出土した井戸の中からは瓦器椀なども大量に投げ込まれており、祭祀的な行為の結果投げ込まれた櫛かどうかは不明である。（中川・川瀬）

（4）**石製品**（図358～361、表22、写真図版126・127）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

中世以降の石製品は、主に99－1区から99－6区にかけて多く出土した。なかでも99－4区から99－6区での出土量が多い。出土地は中世後半以降の大溝や井戸からの出土が大半で、総じて中世でも後期の遺物が主流を占める。種類は砥石が最も多い。

b．各区出土

中世以降の石製品としては、硯、石臼（茶臼）、砥石などが出土している。ここではその主なものを図示する。出土位置等の詳細については観察表（表22）を参照されたい。

〔硯〕（8493～8496）　硯はいずれも使用痕跡が著しい。（8493～8495）は方形硯である。

（8493）は陸部に一定の間隔を有する横方向の刻み痕が認められる。墨の付着もみられる。

（8494）は陸部が非常に磨耗し、船底形状に窪んでいることから繰り返し使用されたものと考えられる。裏面左下部には「ち」の線刻がみられる。

（8495）は流紋岩製であり、他のものとは材質が異なるうえ、やや大形である。海部を欠損している。

（8496）は大部分を欠損するため、本来の形状などその詳細は不明である。海部が少なくとも3面確認でき、その形状は他とは異なるうえ、非常に小形である。

〔**石臼ほか生活用品等**〕（8497～8500）　（8497）は茶臼。臼目には15本と12本がみられる。左が右を切るかたちで施条されている。残存する部分の目の残り方から8分画の臼と復原できる。その多くの部分を欠損しており、被熱の痕跡が認められる。

（8498）は温石。石鍋の鍔部分を転用したものである。非常に磨耗している。

（8499）は碁石か。円形を呈し、ほぼ均一な厚さを有していることから、ここでは碁石として取り上げた。

（8500）は非常に扁平な自然礫である。ただし、上部およびそれと対になる下部に凹みが認められることから石錘の可能性も考えられる。

〔**砥石**〕（8501～8532）　その石質により、推定として、仕上げ砥（8501～8510）、中砥（8511～8524）、荒砥（8525～8530）に区分できる。多数の砥石には被熱の痕跡が認められ破損している。

では、個別にみていこう。

（8501・8502）は非常に類似した形態を示す。両者とも扁平であり、表裏面および側面の一部が平滑となっている。この面を砥面として使用したものと考えられる。

（8503）は表面および両側面が非常に平滑になっている。なにか鋭利なものを研いだような線条痕が顕著に認められることから、金属器用砥石と考えられる。

（8504）は下部を欠損するが、それ以外の各面には顕著な擦痕が認められる。その平面形は正方形を呈する。

（8505～8507）は表裏および側面が平滑であり、砥面として用いられている。

（8508・8509）はやや石材が異なる。（8507）は表裏面に砥面が認められる。とくに表面は凹形を呈している。（8509）は表裏面および左側面には擦痕がみられる。

（8510）は一部に砥面が残置するが、ほとんど原形をとどめていないものと考えられる。

（8511～8521）は多孔質の頁岩もしくは流紋岩である。（8511～8514）はやや扁平、（8516・8517）は

直方体を呈する。それぞれ欠損する部分はみられるが、表裏面および側面に砥面が設けられている。いずれも小形であることから手持ちであったと考えられる。(8515・8518～8521) は立方体を呈する。(8515) の石質はやや緻密である。上下端をのぞく4面に砥面がみとめられる。表面には数条の浅い溝状の凹みがみとめられる。その他の面は非常に平滑となっている。(8518) は出土したなかで最大の砥石である。上端以外の各面は平滑な砥面となっている。また、表面の中央付近は線条痕が顕著であり、一部は溝状を呈している。さらに敲打痕がみとめられることから、叩石としても用いられたと考えられる。また、左側面には3つの穴が穿たれており、砥石以外の用途に用いられていたことが看取できる。(8519～8521) は直方体を呈している。(8520) は表裏・左右・上下の6面すべてが砥面となっている。とくに、上下面は顕著な凹面をなしている。(8519・8521) は上端を欠損するがそれ以外は砥面となっており、非常に平坦である。(8523・8524) は流紋岩である。(8523) は欠損する部分が多くみられるため、本来の形状は不明であるが、表裏面は平滑になっていることから砥面として用いられていたと推定される。(8524) は直方体を呈する。上下面が折損しているが、それ以外の面は非常に平滑である。各面とも線状

表22　中世以降石製品観察表

図版番号	挿図番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
126	358	8493	99－4	南壁中央 溝S04003	硯	11.4	4.3	2.0	203.4	頁岩	
126	358	8494	99－4	第3・2面	硯	11.7	5.4	1.4	154.8	頁岩	裏面に「ち」の線刻有
126	358	8495	99－4	第1面S04008	硯	12.2	6.7	2.6	423.7	流紋岩	
126	358	8496	99－5	第3面S05010	硯	7.8	7.4	1.7	42.2	頁岩	
126	358	8497	99－4	第3面S04040	茶臼	11.9	18.6	11.8	2740.0	砂岩	被熱
126	358	8498	99－3	第3面S03100下層	温石	2.5	6.4	1.6	24.9	絹雲母岩(流紋岩の変成岩か)	
－	358	8499	99－5	第3面S05010	碁石？	2.0	1.6	0.5	2.0	頁岩	
－	358	8500	99－7	第4・3面	石錘？	5.3	3.9	0.7	23.1	流紋岩？	
127	359	8501	99－4	第3面S04040	砥石	9.2	5.5	0.8	50.6	菫青石ホルンフェルス	
127	359	8502	99－5	第3面S05102	砥石	8.9	4.5	0.8	40.0	ホルンフェルス	
127	359	8503	99－5	第3面S05055	砥石	5.2	3.9	0.5	16.0	流紋岩	被熱？
127	359	8504	99－1	第7～2面	砥石	3.3	3.3	1.0	15.9	流紋岩	被熱？
127	359	8505	99－1	第7～2面	砥石	6.8	3.2	1.3	30.5	流紋岩	被熱
－	359	8506	99－3	第3面S03100	砥石	4.4	3.1	0.8	11.4	流紋岩	被熱？
－	359	8507	99－6	第2面S06020	砥石	5.0	2.7	0.6	10.7	流紋岩	被熱
127	359	8508	99－6	第3・2面間/第2面S06060	砥石	7.4	6.3	2.2	123.2	頁岩	被熱？
－	359	8509	99－3	第1面検出途中 T.P.＋1.8m	砥石	3.7	4.3	1.1	19.7	頁岩	
－	359	8510	99－3	第3面S03009	砥石	5.85	2.1	6.5	61.2	頁岩	
－	359	8511	99－4	第3面	砥石	7.1	5.1	2.6	77.3	流紋岩	被熱
127	359	8512	99－1	側溝	砥石	7.5	5.2	2.1	73.9	ホルンフェルス	被熱
－	359	8513	99－4	第3面S04040	砥石	5.1	3.8	1.5	24.7	？	被熱
－	359	8514	99－4	第4面S04073B上層	砥石	3.9	4.7	1.6	37.2	流紋岩	
127	359	8515	99－5	第3面S05010	砥石	12.2	5.7	4.8	407.0	流紋岩	被熱
127	359	8516	99－1	第8・7面	砥石	5.4	5.0	3.2	125.1	流紋岩	被熱
－	359	8517	99－5	第4面S05102	砥石	3.4	4.3	3.1	66.1	流紋岩	被熱
127	360	8518	99－5	第4面S05102	砥石	14.7	9.2	9.5	1840.0	流紋岩	
127	360	8519	99－6	第2面S06020	砥石	7.0	4.5	4.7	143.3	流紋岩	
127	360	8520	99－5	第3面S05090	砥石	4.8	6.0	4.0	128.3	流紋岩	
127	360	8521	99－5	第4面S05102	砥石	8.1	4.3	3.5	174.4	流紋岩	
－	360	8522	99－6	第2面S06020	砥石	3.5	4.0	3.4	50.9	流紋岩	
－	360	8523	99－6	第2面S06020	砥石	8.8	6.7	5.5	356.9	流紋岩	被熱
127	360	8524	99－3	第5面S03150	砥石	14.2	7.0	3.9	516.7	流紋岩	被熱
127	361	8525	99－1	排土(第9・8面)	砥石	10.4	10.35	5.1	495.3	砂岩	被熱
－	361	8526	99－4	第3面S04040	砥石	6.6	4.9	2.6	137.0	砂岩	被熱
－	361	8527	99－4	第3面S04040	砥石	7.0	4.9	3.1	165.8	流紋岩	被熱
－	361	8528	99－3	第3面S03009	砥石	3.5	2.7	1.1	14.2	砂岩ホルンフェルス	被熱？
127	361	8529	99－4	第3面S04040	砥石	5.6	5.2	4.8	224.0	流紋岩	被熱
127	361	8530	99－3	第3面S03100	砥石	7.7	4.4	3.3	160.4	砂岩	敲打痕有
－	361	8531	99－5	第3面S05090	砥石	7.6	6.1	2.7	154.2	緑色片岩	
－	361	8532	99－5	第3面S05010	砥石	7.6	7.9	4.5	281.0	砂岩ホルンフェルス	被熱
－	361	8533	99－6	第2・1面	研磨品	5.9	9.3	2.8	115.5	砂岩	被熱
－	361	8534	99－6	第2面S06020	研磨品	11.6	8.0	3.2	403.7	斑レイ岩	被熱
－	361	8535	99－6	第3面S06333	凝灰岩	9.4	12.1	12.2	830.0	軽石	被熱
－	361	8536	99－6	第2面S06050	凝灰岩	6.7	9.1	8.2	249.4	軽石	被熱
－	361	8537	99－6	W-4面S06897	凝灰岩	4.0	5.3	3.2	36.0	軽石	被熱

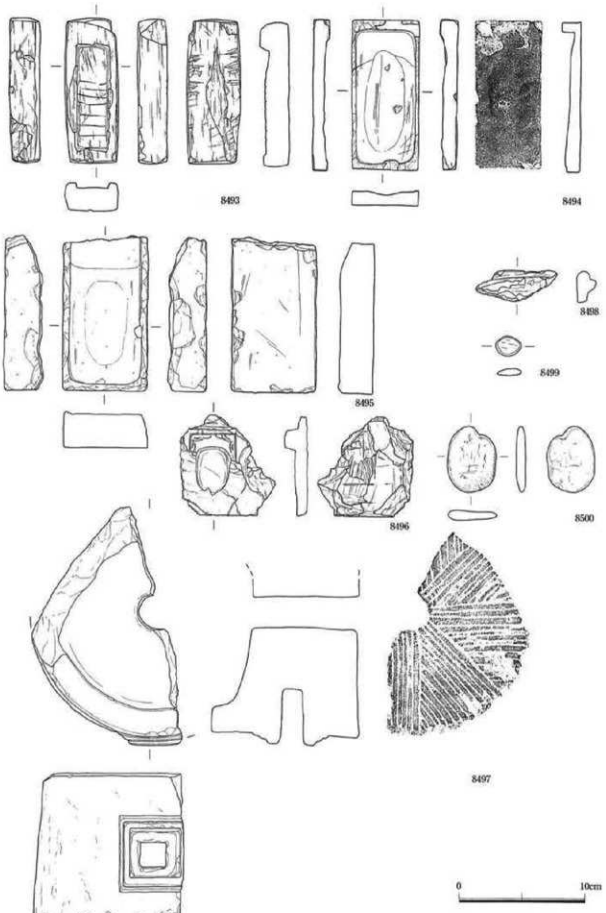


図358　中世以降石製品実測図－1
(99－3～5・7区：遺構・包含層出土)

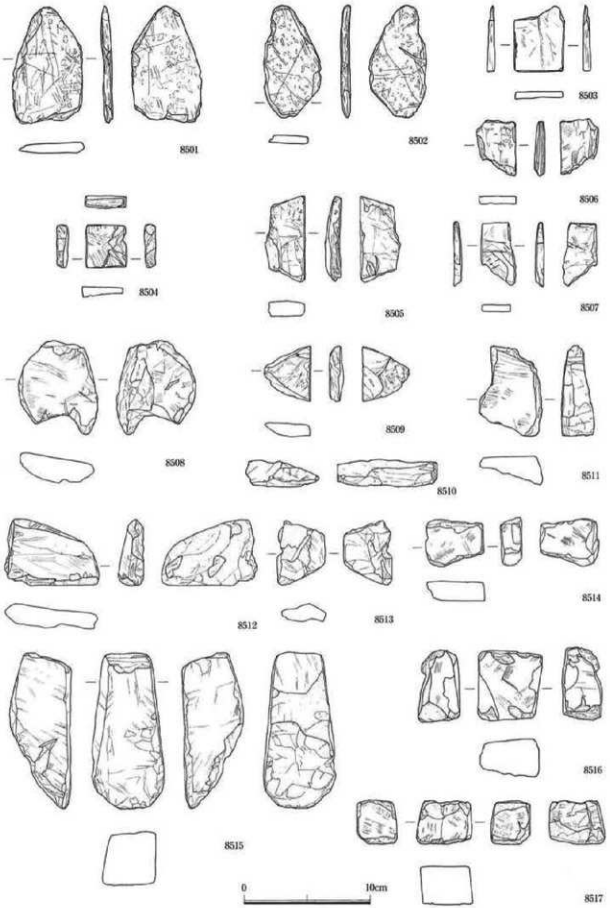


図359　中世以降石製品実測図－2（99－1・3～6区：遺構・包含層出土）

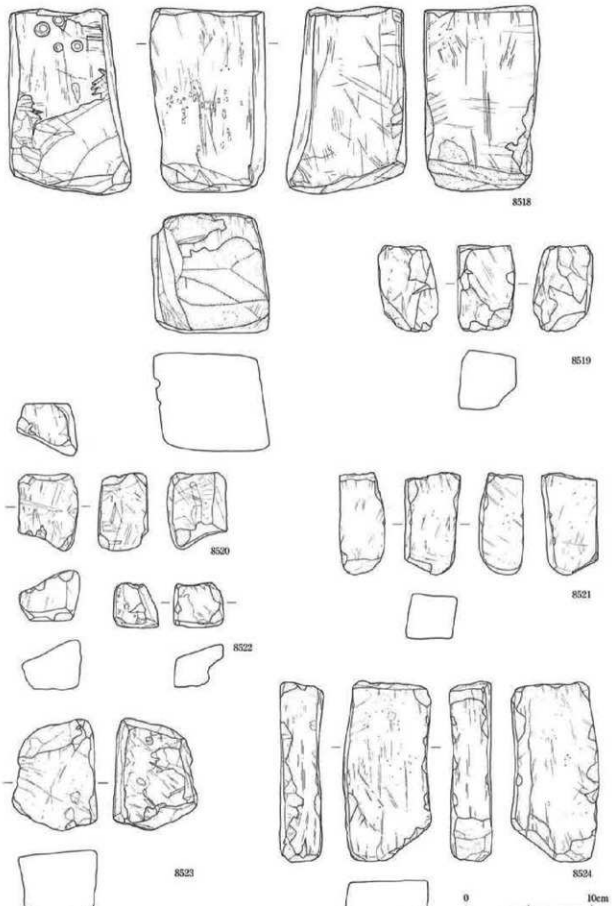


図360　中世以降石製品実測図－3（99－3・5・6区：遺構出土）

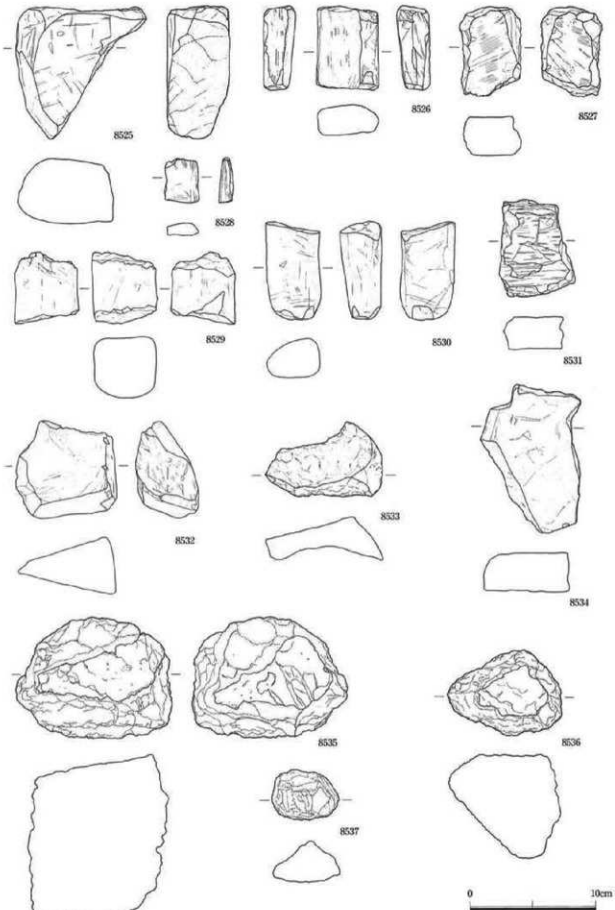


図361　中世以降石製品実測図－4
(99－1・3・4～6区：遺構・包含層出土)

痕が顕著にみとめられる。また、被熱のため亀裂が生じている。

（8525～8530）は、石質が粗く硬質なことから荒砥と考えられる。（8525）は半分以上を欠損するが、本来は表裏面とも砥面として用いられていたものと考えられる。（8526・8527）は扁平な形態を示す。（8528～8530）は河原石を素材とする。なかでも（8529・8530）は、やや縦長の自然礫を利用したものである。欠損部以外には擦痕がみとめられる。

（8531）は片岩片である。擦痕がみとめられることから砥石として取り上げた。

（8532）は、（8501・8502）と同一の石材のものである。一部の平滑面残しその大部分を欠損する。残置する砥面は非常に平滑であり、擦痕も顕著にみとめられる。

〔その他〕（8533～8537）　（8533・8534）は礫の一部を研磨している様相は看取できるが、本来の形状など詳細は不明である。

（8535～8537）は凝灰岩片（ただし、岩石鑑定では軽石に分類される）。（8535）では一部に平坦面を備える。他面はいずれもその多くを欠損するが、本来は面取りされていたことも考えられようか。被熱の痕跡がみられる。今回の調査では埴輪片が多く出土していることから、これらは古墳時代の石棺材の一部である可能性も考えられる。しかし、埴輪出土地区とはやや離れているので、積極的には肯定できない。中世段階の何らかの施設に伴ったものとすべきであろうか。なお、これらの出土地99－6区の北側は、東大阪市教育委員会の調査で「瓜生堂廃寺」とされる箇所に相当する。

c．小結

以上、石製品について概観してきた。出土した砥石の多くには被熱の痕跡がみとめられ、これにより破損したものも少なくない。また、石臼（茶臼）も被熱を受けている。被熱を受けた遺物は広範囲から出土しており特定の遺構に偏らないことから、広範囲あるいは頻発した火災の発生が想定されるかもしれない。　このうち99－4区の溝S04040上層から出土した茶臼（上臼）は15世紀後半から16世紀代のものである。喫茶の習慣が一般に広まったのは中世末から近世にかけてのことであり、挽き茶の臼を有していたことはこの集落の住民の性格を考えるうえで興味深い。

砥石のなかには、荒砥、中砥、仕上げ砥の3種類がみとめられ、なかでも仕上げ砥の割合が多くみられる。仕上げ砥とされるものは、小型であり手持ち用の提砥と考えられる。対する荒砥には大型・小型の双方がみとめられることから、置砥・提砥の双方に用いられたのであろう。　（手島・川瀬・秋山）

（5）瓦（図362～365、写真図版133・134）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

今回の発掘調査において、99－1区・3区～6区・10区、01－2区・3区から平安時代後半以降の瓦が出土している。しかし瓦に関しては土器同様、瓦器椀出現以降の遺構を中世遺構面として捉え報告した関係上、中世以降の瓦としてこの節で一括して掲載した。従って一部古代末の瓦も含まれる。

出土量は総数で30コンテナ強である。そのうち99－4区が8コンテナ、99－5区が12コンテナ、99－6区が3コンテナと全体の3分の2を占める。瓦は、溝などの遺構から出土したものと包含層から出土したものがあるが、軒瓦の多くは瓦当部付近のみしか残っていない。また、当遺跡においては瓦自体が再利用されている可能性が高いと考えられている。出土地点については必要と思われるもののみ記載した。以下、出土した瓦を軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦と丸瓦・平瓦・その他とに分け、さらにそのなかで時代毎にみていく。

b．軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦

〔平安時代後半の瓦〕（8538～8541）　（8538・8539）は唐草文軒平瓦である。（8538）は全体的に二次焼成を受け遺存状態が悪く、瓦当部の成形も粗雑であるが、蓮子唐草文と思われる。（財）東大阪市文化財協会45－2次調査区で同型式の瓦が出土している。今回の発掘調査における最古の瓦である。時期は平安時代後半である。出土したのは99－5区の中世後半期の大溝S05100でからある。（8539）は瓦当の残存部分が少ないため詳細は不明であるが、顎形態から（8538）と同時期のものと考えられる。（8539）は99－4区中世後半以降の溝S04020からの出土である。

（8540・8541）は素弁蓮華文軒丸瓦である。（8540）は99－6区よりの出土。全体的に二次焼成を受け遺存状態が悪い。瓦当外縁の高さ0.8cm、幅1.6cmである。（8541）は99－3区よりの出土。瓦当の残りが悪いため詳細は不明であるが、（8540）と同型式の瓦であると考えられる。瓦当外縁の高さ0.7cm、幅1.5cmである。時期はともに平安時代後半にあたると考えられる。

〔平安時代末～鎌倉時代の瓦〕（8542～8547）　（8542～8545）は連珠文軒丸瓦である。99－3区・4区の大溝S03100・S04040より出土。瓦当部の成形には、いずれも顎貼り付け技法が用いられている。文様をみると、（8542・8543）には圏線がめぐっており、（8544・8545）には圏線が施されていないという違いがみられる。珠文をみるといずれも大きいが、隆起は小さい。これらのことから、時期はいずれも平安時代末から鎌倉時代初頭にあたると考えられる。

（8546）も（8541・8542・8545）と同じ99－3区の大溝S03100からの出土である。剣頭文軒平瓦である。瓦当の成形には、瓦当貼り付け技法が用いられている。同氾とみられる瓦が若江遺跡でも出土していることから、若江寺関係の瓦である可能性が高い。時期は13世紀前半と考えられる。

（8547）は巴文軒丸瓦である。瓦当の残りが悪いため詳細は不明である。瓦当外縁の高さ0.6cm、幅0.6cm。珠文は大きく、断面が四角形状を呈している。時期は、平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる。

〔室町時代の瓦〕（8548～8559）　（8548～8551）は均整唐草文軒平瓦である。瓦当の成形には、瓦当貼り付け技法が用いられており、瓦当面には離砂が付着している。（8548・8549）は顎部裏面にタテナデが施され、凹型台圧痕が残る。同氾とみられる瓦が若江遺跡から出土しており、これらは若江寺関係の瓦であると考えられる。（8550）は顎部裏面にタテナデのちヨコナデを施す。時期は室町時代前半である。

（8552～8557）は巴文軒丸瓦である。（8552）は瓦当部の珠文帯区と外縁の接合部が剥離している。内区接合部には刻み目が施されている。文様をみると、巴文は巴頭部がやや尖り、尾が長く伸びている。珠文は断面が半円形で大きく、珠文の外側にも圏線が廻っている。（8553）は外縁の高さ1.1cm、幅1.5cm。文様の隆起は大きいが、珠文の大きさはやや小さい。（8552・8553）は99－3区の大溝S03100からの出土であり、時期は室町時代前半である。（8553）はやや時期が遡るかもしれない。

（8554）は外縁の高さ0.7cm、幅1.2cm。珠文は小さく、瓦当面に離砂が付着している。（8555）は外縁の高さ0.9cm、幅1.8cm。珠文は小さく、隆起も低い。（8553・8554）は99－5区の大溝S05010からの出土であり、（8554）の時期は室町時代中期である。（8554）も室町時代に含めたが、市本芳三氏の指摘によると、13世紀初頭まで遡る可能性がある。

（8556）は外縁の高さ0.8cm、幅0.9cm。珠文も小さく、隆起も低い。時期は室町時代中期である。（8557）は外縁の高さ0.5cm、高さ1.7cm。外縁にはナデ調整が施されている。珠文は半円形で、隆起が

低い。99－4区の大溝S04040からの出土である。時期は室町時代後半である。

（8558）は鬼瓦の破片であるが、文様については鬼以外のものである可能性がある。99－1区の包含層中からの出土。厚みがあることや文様の形状から時期は室町時代後半と考えられる。

〔近世の瓦〕（8559～8567）　（8559）は連珠文軒平瓦である。珠文が大きく、圏線を廻らす。01－3区からの出土である。

（8560）は唐草文軒平瓦である。外縁の高さ0.8cm、幅0.7cm。外縁はナデ調整がなされ、瓦当面には離れ砂が付着している。

（8561～8563）は桟瓦である。（8561・8562）は同一個体の可能性が高く、（8562）の右脇区には「西堤　瓦己」という刻印が入っている。いずれも01－2区からの出土である。

（8564～8567）は巴文軒丸瓦である。（8564）は外縁の高さ0.5cm、幅2.0cm。巴頭部は丸くくびれがあり、珠文も大きく、文様の隆起は低い。瓦当面には離れ砂が付着している。（8565）は外縁の高さ0.4cm、幅1.9cm。巴頭部は丸く、くびれており、珠文は小さい。文様の隆起は低い。（8566）は外縁の高さ0.4cm、幅1.9cm。外縁にはナデ調整がなされている。文様の隆起は低い。（8567）は外縁の高さ0.4cm、幅2.0cm。外縁にはナデ調整がなされ、外縁下端部には面取りが施されている。99－4区・5区からの出土である。

c．丸瓦・平瓦・その他

丸瓦・平瓦は大量に出土した。総量はコンテナ30箱弱である。ただし、軒丸瓦・軒平瓦と同じくそのほとんどが破片での出土であり、出土状況も溝の埋土や包含層中に含まれるもので、当該期の遺構に伴わない。出土は広範囲に及ぶが、特に99－4区から99－6区に集中してみられる。このうちで特に残りの良いものを数点抽出して実測し報告する。

（8568）は平瓦片もしくは面戸瓦である。現存長13.5cm、最大幅24.0cm、厚さ2.3cm。凹型台を用いた痕跡が認められる。凸面には縄タタキ痕が、凹面には布目痕が部分的に残る。また、凹凸面ともに離れ砂の痕跡が残る。現状の形態からして道具瓦（熨斗瓦）に用いられた可能性もあろうか。

（8569）は平瓦である。ほぼ形をとどめる。長さ32.0cm、推定最大幅23.8cm、厚さ2.0cm。凹面には布目とナデの痕跡が認められる。また、粘土板を糸切りした痕跡も残る。凹型台圧痕が残り、凸面は銀化する。

（8570）は丸瓦である。筒部のみで玉縁部は失われている。現存長13.0cm、現存幅12.2cm、最大厚1.6cm。凸面には縄タタキ痕が、凹面には布目、糸切痕、凸型台圧痕が一部残るが、両面ともナデ消されている。側面は面取りされている。凹面には二次焼成の跡が見受けられる。

（8568～8570）は99－5区の井戸S05102の曲物井筒内からの出土で、時期は鎌倉時代中頃から室町時代前半のものである。

（8571）は丸瓦である。玉縁部は失われている。現存長18.8cm、推定幅13.4cm、厚さ1.5cm。凸面には幅0.5mm～1.2cmのミガキがはいる。凹面には布目をナデ消した痕跡及びヘラ状の工具痕も残る。広端部と両側縁を面取りする。

（8572）は平瓦である。ほぼ完存する。凸面には糸切痕と平行タタキ、それらをナデ消すためのナデが認められる。また、離れ砂の痕跡も残る。凹面は布目をていねいなミガキによりナデ消してある。凹面の約半分に煤が付着する。

（8571・8572）は99－4区の溝S04020からの出土である。時期は室町時代にあたると思われる。

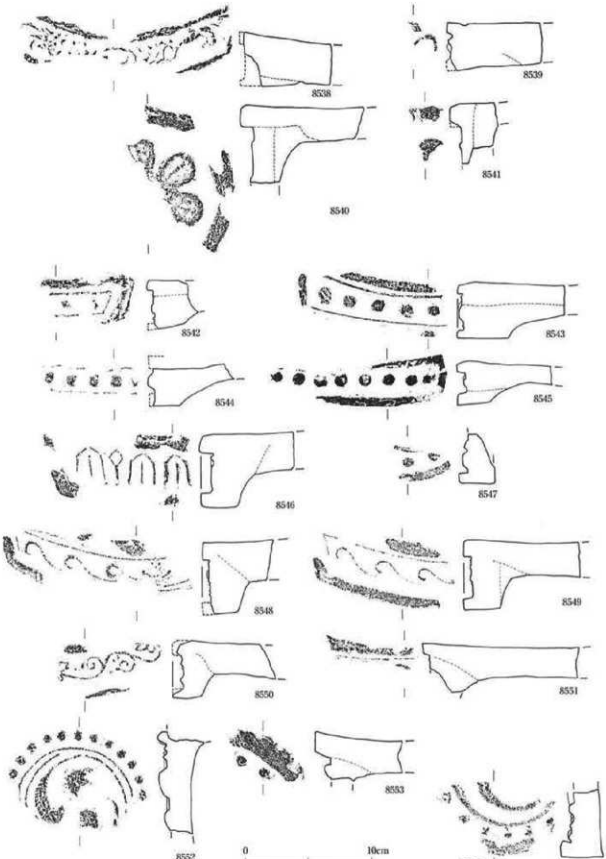


図362　中世以降瓦実測図－１（99－３～６区：遺構・包含層出土）

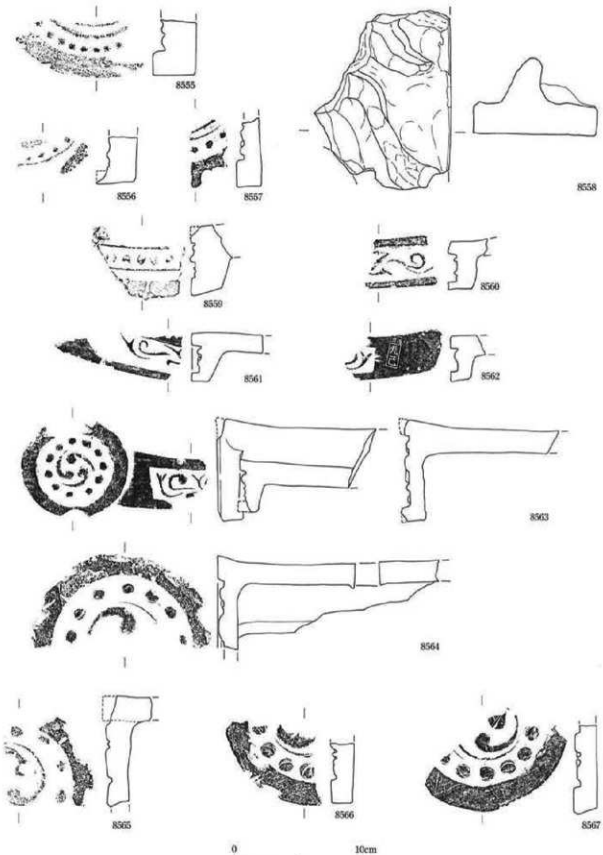


図363　中世以降瓦実測図－2（99－1・4～6・10、01－2・3区；遺構・包含層出土）

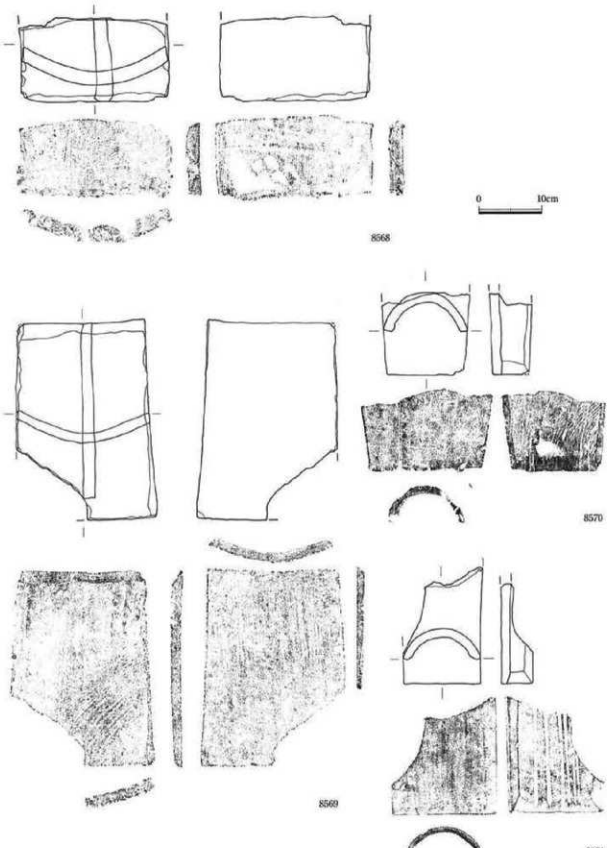


図364　中世以降瓦実測図－3（99－4・5区：遺構出土）

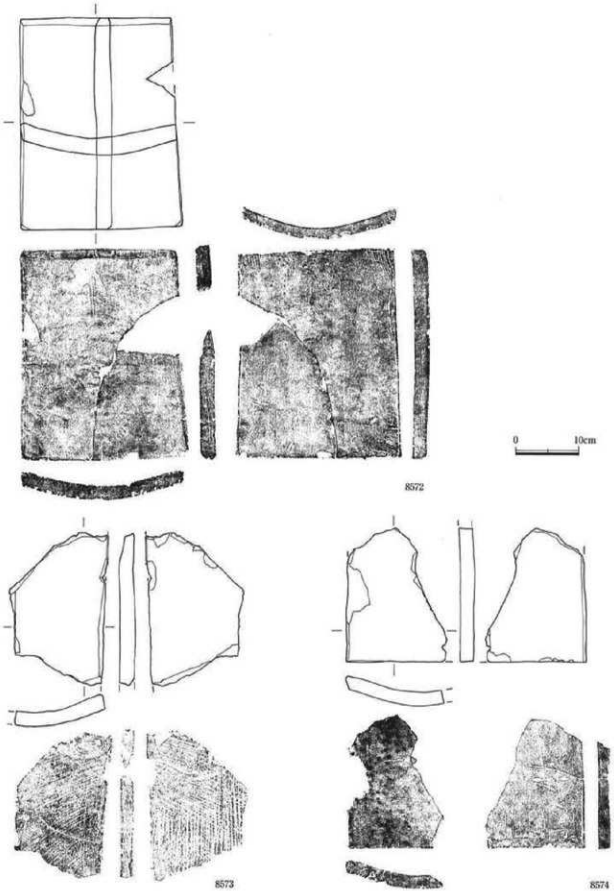


図365　中世以降瓦実測図－4（99－4区：遺構出土）

(8573) は平瓦である。現存長24.5cm、現存幅15.9cm、厚さ2.5cm。凹凸面ともに縦方向と斜め方向の糸切痕が残る。凸面には縄タタキと凹型台圧痕が明瞭に残る。凹面には細かな布目痕と二次焼成を受けた煤痕が認められる。現状の形態からして、道具瓦（面戸瓦）に用いられた可能性もあろうか。

(8574) は平瓦である。現存長21.5cm、幅15.9cm、厚さ2.3cm。凹面は非常に丁寧になでられているが、多量の煤が付着する。凹型台の圧痕、ナデの跡が残る。凹凸面ともに離れ砂を用いた痕跡が認められる。

(8573・8574) とも99－4区の溝S04040からの出土で、時期は室町時代後半と思われる。

d．小結

今回出土した瓦についての特徴をあげると、古代末から中世初期の瓦を若干含むことである。中世の瓦については、巴文軒丸瓦と連珠文もしくは唐草文軒平瓦をセットとする一般的なもので特異性はない。ただし、上向きの剣頭文軒平瓦は珍しく、若江寺との関連が考えられる。

時期的には平安時代後半から鎌倉時代前半（13世紀前半）、室町時代（14世紀～16世紀）、近世と、やや断絶する期間をもちながらも続いていく。これは土器など他の出土遺物と同様の傾向であり、つまりは中世以降遺構面の時期をそのまま反映している。

また、平瓦・丸瓦の量に比して軒丸瓦・軒平瓦の量が少なく、時代毎に分けると小規模な建物1棟分にも満たない。出土遺物の多くが15、16世紀の大溝から出土しており、二次焼成を受けたものも多く含まれる。

これらのことを考えあわせると、瓜生堂遺跡99・01調査区の近隣に瓦葺き建物が数時期にわたってあったが、焼失や廃絶の後に大溝に廃棄されたり、流失して多量に混入したと考えるのが妥当である。

（池谷・川瀬）

（6）金属製品（図366・367、写真図版135）

1）各調査区の出土品

a．出土状況ほか

金属製品は01－1区から99－7区において出土した。その多くが中世後半から近世の溝・池からか、中世後半から近現代までの包含層中からの出土である。出土量では（8581）のような犬釘が最も多く、その他のものも含めて鉄道関係の品目が半数近くを占める。調査区付近は近畿日本鉄道の前進である大阪電気軌道の頃の電車車庫・工場が存在しており、鉄道に関連する金属製品が多数確認されるのもその証ともいえる。

b．各区出土

中世以降の金属器は計50点が出土している。ここでは、その主なもの25点を図示する。

(8575～8577) は煙管。(8575・8576) は雁首・吸管・吸口部分が一体となっている「述べ煙管」である。両者とも火皿が小型化しており、その付け根の角度が直角に近いことから20世紀以降の可能性が高い。材質は、(8575) は不明、(8576) は真鍮製。(8577) は煙管の雁首。(8575・8576) とは異なり、雁首と吸口を別個に製作した「羅宇煙管」と考えられる。

(8578・8579) は小鉤である。

(8580) は鑿。上端を欠損する。

(8581) は犬釘。レールに枕木を固定させるものである。このほかにも多数（13点）の犬釘を確認している。

(8582・8583) は鎹。両者とも片爪を欠損している。(8583) はやや歪んでいるが、両者ともほぼ同一規格であると考えられる。

(8584) はコの字状を呈する鉄製品。下部に孔が貫通している。

(8585) は、「大阪工作所」の銘入りの金属票。裏面には「組一18」の文字がみられ、上部には孔が穿たれている。

(8586) は糸鋸である。先端を欠損するが本来小形のものと考えられる。

(8587) は銅製の匙。柄の部分が捩れている。

(8588～8594) は用途不明の鉄製品である。以下、個別にみていく。

(8588) は断面S字状に折り曲げられた鉄板である。(8589) は平面円形を呈しており、直径12㎜と非常に小形である。断面は片側にやや盛り上がる饅頭形であり、平坦面に穴がみとめられる。(8590) は上部に穿孔がみられる鉄板である。下端部を欠損する。(8591) はやや厚手のへら状を呈する。上下端を欠損しているため、本来の形状は不明である。(8592) は下部が幅広の鉄製品。両側縁は鋭角に折れ曲っている。(8593) は木葉形の鉄板。(8594) は棒状を呈しており、ゆるやかにカーブを描く。把手のようなものであろうか。

c．小結

以上、各遺物について概観してきた。ここでは、それぞれの時期について若干述べることとする。

出土状況から、明らかに中世に属すると考えられるものは、鉄製品7点 (8588～8594) であるが、いずれも用途不明であり、その様相は明らかでない。(8588・8591・8592) は99－4区の第3面溝S04040、(8589・8590・8594) は99－4区第3面溝S04003、(8592) は99－7区中世包含層からの出土。

それ以外は、近世以降の所産となる。また、鑿、犬釘、鎹などは鉄道関係の遺品であり、近代以降における当地域の特殊な利用状況の一つを示している品目と考え、あえて報告しておいた。

(手島・川瀬・秋山)

(7) 銭貨 (図368、写真図版135)

1) 各調査区の出土品

a．各区出土

(8595～8599) は銭貨。

(8595) は元豊通寶で、初鋳年は1078年。最も多く出土する北宋銭の一つである。01－2区の溝S22030からの出土である。

(8596) は寛永通寶。99－3区の中世後半以降包含層 (第3・2面間) からの出土である。

(8597) は大型竜一銭銅貨。明治6～同21年に鋳造されたものである。なかでも、この明治10年銘のものはもっとも発行枚数が多い。(8598) は大正8年の銘の小型桐一銭銅貨。大正5～昭和13年まで鋳造された。(8597・8598) は02－4区の中世以降～近現代までの遺物包含層からの出土である。

(8599) は鳩五銭錫貨。本例は昭和20年発行品であるが、昭和20・21年の2年間に2,000万枚以上発行されている。99－4区の第2・1面間からの出土である。第2次大戦終結時およびその直後の銭貨が最も材質が劣り小形であるという事実は、社会情勢がこの種の物的遺品にも敏感に反映されており興味深い。

(手島・秋山)

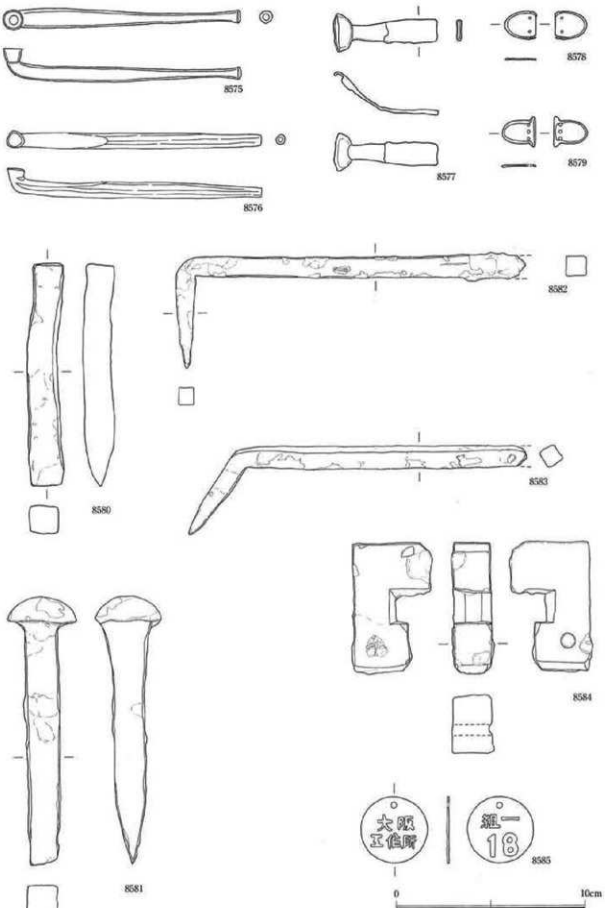


図366　中世以降金属製品実測図－1（99－3～7区：遺構・包含層出土）

8586

8588

8587

8589

8590

8591

8592

8593

8594

0 10cm

図367　中世以降金属製品実測図－２（99－３～５・７区：遺構・包含層出土）

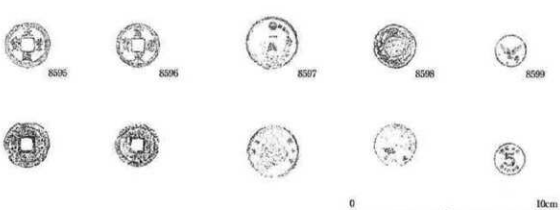


図368　中世以降銭貨実測図

第６章　02年度確認調査の成果

第１節　基本層序と99・01区遺構面との対応関係

１．調査の経緯

1999・2001年度の発掘調査成果によって、瓜生堂遺跡で最北東部にあたる地域にも、弥生時代から中世に至る遺構・遺物が存在することが明らかになった。特に99・01調査区の最東部（01－１区～３区）の調査を整理すると、以下のことが判明した。弥生時代前期では、01－３区で近畿地方で最古に属する弥生時代前期中葉の水田畦畔を検出し、01－２区でも弥生時代前期の遺構を確認した。また、弥生時代中期後半ではやはり、01－３区で99－３区東端で検出していた方形周溝墓がさらに東に伸びることを確認し、主体部を検出した。01－３区より東の01－１区でも弥生時代中期の溝などの遺構を検出した。01－１区では弥生時代後期から庄内式期においても畦畔で区切られた水田区画が確認された。中世は01－２区より東で大溝や土坑を検出した。01－１区は実質的には岩田遺跡の範囲に入っているようではあるが、今回の調査でも井戸や溝などの集落跡を検出し、遺跡がさらに北東にのびる可能性を示唆した。

01－１区より東側についてはこれまでに（財）東大阪市文化財協会が確認調査を行っているが、その結果は中世の池や沼地状の遺構を検出したにすぎず、中世以前の層位については遺構・遺物を検出し得なかったか、調査が行われていない。

そこで、2002年度に瓜生堂遺跡の範囲を確定する等の目的で、当センターで確認調査を行うこととなった。01調査区のさらに東に位置する近鉄奈良線橋脚予定部３カ所の一部に調査区を設定し、東から02－４区、02－２区、02－３区の名称を与えた。02－４区は若江岩田駅に道路を隔てて近接する。また、今回調査区の北側が（財）東大阪市文化財協会瓜生堂44次調査区試掘Ｃ・Ｄトレンチに相当する。今回のいずれの調査区も南北４ｍ×東西12ｍの面積48㎡で、掘削深度は現地表から約５ｍである（図369）。2002年11月１日より機械掘削を開始し、その後続けて人力掘削を行った。2003年２月末日まで現地で発掘調査を行い、それ以降は中部調査事務所において整理作業を行った。

02年度確認調査での99・01年度調査との変更点は、2002年度より測量に世界測地系が採用されたことがある。世界測地系と従来の日本測地系では座標値にずれが生じてくる。その結果、一連の調査を表記するのに、調査年度によって同一点を示す際でも基準となる座標値が異なることになってしまった。そこで調査区の配置図、遺構平面図には新旧の座標値を入れて表した。（図370～385）。また、99・01調査区との対比位置を表したり、検出した遺構のつながりを表す際には従来の座標値を用ることとしたが、02年度の調査成果を第２節以降で述べるのには世界測地系に準拠した座標値を用いてある。

２．基本層序（図371）

今回の調査では、現地表高T.P.3.4～2.8ｍから掘削を開始し、約T.P.－１.8～－2.4ｍまで行った。その結果、調査した02－２区～４区の範囲において、ほぼ連続的に層序を把握できた。また、当調査区西側で実施した99－１区～10区・01－１区～３区などの既往の調査成果もあわせ、当遺跡の東西方向における層序を広範囲に捉えることができた。以下では当調査区の主要な層序を述べていく。

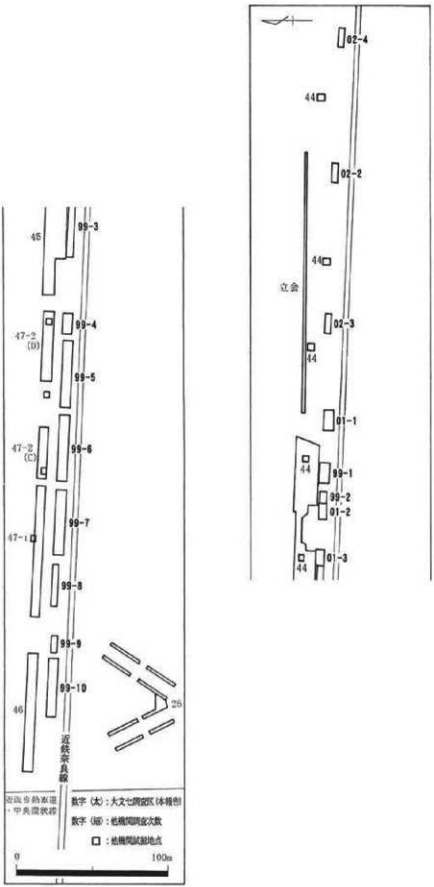
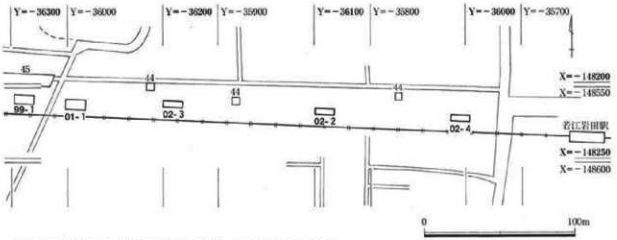


図369　99・01・02区配置図



太明朝は世界測地系、細明朝は日本測地系の座標値（以下の図中すべて同じ）
数字<太>：大文七調査区
数字<細>：他数関調査次数

図370　調査区配置図

（1）弥生時代前期

〔下層：灰色シルト～オリーブ黒色シルト〕（以下、模式図：Ｆという形で表現）

02－２区～４区の全域で確認。検出レベルはT.P.約－2.0～－1.2mで、層厚は20～50cmをはかる。２層に分層可能。弥生時代前期包含層である。

〔上層：黒褐色シルト（粘土混じり）～黒色粘土〕

02－２区～４区の全域で確認。検出レベルはT.P.約－1.4～－0.8mで、層厚は５～15cmをはかる。層序の前後関係から弥生時代前期包含層と考えられる。人為的な遺構は上・下層とも認められない。

（2）弥生時代中期

〔灰色シルト〕

灰色シルト層をベースとする。その下層と弥生時代前期相当の黒色シルト層の間層に流路の氾濫によるとみられる細砂～粗砂層が20～50cm堆積する。02－２区～４区の全域で確認。検出レベルはT.P約－1.3～－0.5mで、層厚は10～30cmをはかる。植物遺体を多く含む。層序の前後関係から弥生時代中期相当と考えられる。

（3）弥生時代後期

〔黒褐色シルト～黒色シルト〕（模式図：Ｃ）

02－２区～４区の全域で確認。検出レベルはT.P.約0.8～－0.5mで、層厚は10～20cmをはかる。２層に分層可能。植物遺体を多く含む。弥生時代後期と弥生時代中期を分ける鍵層である。人為的な遺構は認められない。

（4）古墳時代

〔緑灰色微砂（シルト混じり）～灰色微砂（礫を含む）〕

02－２区～４区の全域で確認。検出レベルはT.P.約1.8～－0.5m、層厚は20～200cmをはかる。弥生時代後期～古墳時代にかけて当遺跡には大量の土砂がもたらされ、特に02－３区では99－１～３区で検出した旧大和川の「小阪合分流路」の分流路に相当すると思われる流路の東端を検出した。出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

（5）古代～中世

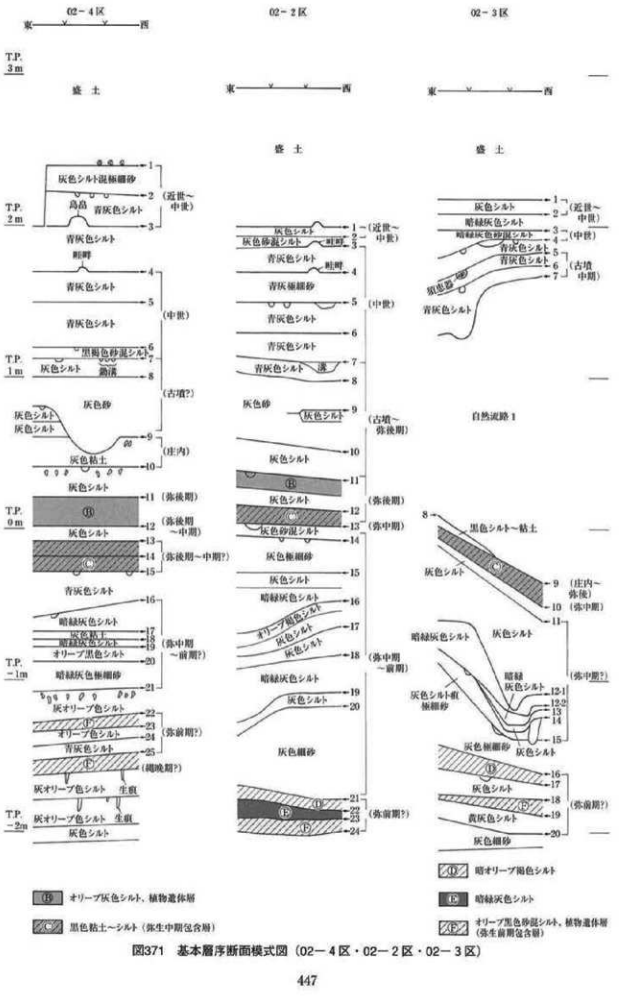


図371　基本層序断面模式図（02－4区・02－2区・02－3区）

〔暗オリーブ灰色シルト（鉄分沈着）〕

02－2区～4区の全域で確認。検出レベルはT.P.約1.2～1.9m、層厚は10～20cmをはかる。畦畔や鋤溝が数層にわたって検出されており、出土遺物からも平安時代から中世にかけて、近くで集落が営まれていたと思われる。このことは既往の99・01の各調査区で判明した古代～中世の集落の存在を、生産遺構の側から裏付けるものと考えられる。

3．99・01区遺構面との対応関係

99・01調査区の遺構面との対応関係を決定した根拠は、主に上に述べた層位関係や土層の特質によった。図371と図4～9で対応する層を同じトーンで表現してある。

第2節　弥生時代前期の様相

1．遺構面と遺構（図372～374、写真図版136）

（1）概要

最終掘削深度がT.P.－2.4m付近であったため、縄文時代晩期以前の調査は地層の断面観察にとどまった。縄文時代晩期以前については灰白色シルト層に生痕や生物擾乱が認められるのみで、遺構や遺物は検出されなかった。

弥生時代前期については、各区とも弥生時代前期相当層である黒色粘土層が2層から3層存在する。このうちの最上層を従来の99・01調査区で畦畔・溝・竪穴住居などの弥生時代前期遺構を検出した面と同一であると層序の関係から判断した。

（2）各区の様相

1）02－4区

a．第22面

黒色粘土層上面（第22面）の北西部で溝状の遺構S34110を検出した（図373）。これはやや蛇行しながら南北方向にのび溝状を呈するが、深さ5cm程度と浅く、人為的な遺構ではない可能性が高い。S34111も自然の窪みであろう（図374）。

第23・22面を形成する黒色粘土層は既往の99・01区全域から連続するものであり、各区の検出高を比較すると99・01区から東にいくほど次第に低くなり、02－2区で最も低く、その東の02－4区で再び上昇する地形をとる。つまり、02－2区を最低とする谷状の地形が東西に広がっていたことになる。02－4区は弥生時代前期水田を検出した01－3区とほぼ同じ標高の微高地（T.P.－1.3m前後）になっており、

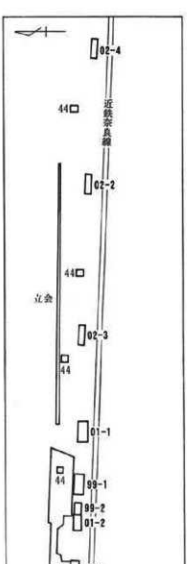


図372　02調査区遺構面全体図

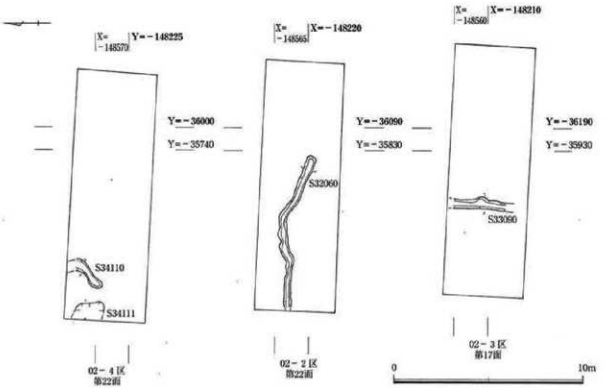


図373　弥生時代前期遺構面平面図
（02－4区：第22面、02－2区：第22面、02－3区：第17面）

谷状地形の両肩付近に水田が広がっていたとすれば、ここでも水田として利用されていた可能性がある。当区で畦畔などは検出されなかったが、土壌分析などを行うことで、耕地利用されていたことが判明するかもしれない（現在、未実施）。

2）02－2区

a．第22面

弥生時代前期相当層（黒色粘土層下面）で東西方向の溝S32060を検出した（図373）。

〔溝S32060〕　幅40cm、長さは8mに及び、緩やかに湾曲しながら西から東へとのびる。埋土は上層の土が自然に埋没したもので、自然の窪みの可能性が考えられる（図374）。

3）02－3区

a．第17面

同じく弥生時代前期相当層の黒色粘土層上層下面で南北方向の溝S33090を検出した（図373）。

〔溝S33090〕　幅35cm、深さ8cmをはかる（図374）。これも埋土や形状から人為的なものでない可能性が高いと判断した。

（3）小結

02－2～4区を通して、遺物は02－4区の包含層中でわずかに認められたにすぎない。また、遺構も断面形状や埋土から明らかに人為と判断できるものはなかった。しかし、堆積状況や地形から考慮すると、02－2区から02－3区にかけて湿地状になっていた土地が02－4区では再び土壌化しており、人間の痕跡がうかがえる。瓜生堂遺跡の最東端にあたる02－4区は、99－3・4区で検出した集落とは別の一群が形成されていた可能性もあろうか。

瓜生堂遺跡より北東に位置する弥生時代前期の遺跡としては稲葉遺跡等があり、また本遺跡内北東部

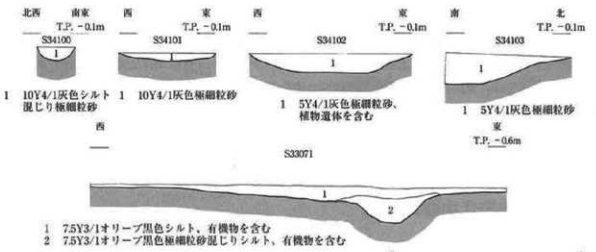


図377　02－4・3区弥生時代中期遺構断面図

T.P.－0.3m前後で弥生時代中期相当面を検出した（図376）。02－4区は東にむかって低くなるが傾斜は緩やかで、高低差は小さい。南北を主軸として湾曲する溝や土坑を検出したが、いずれの遺構も遺物を含まなかった。

〔溝S34100〕　北東から南西に環状に巡る細い溝である。幅20cm、深さ10cmをはかる（図377）。上層の灰色シルトが陥没して埋土となる。

〔溝S34101〕　溝S34100とは逆に南北にのび南端がやや東にふる溝である。幅50cm、深さ5cmをはかる（図377）。土坑S34102に切られる。

〔土坑S34102〕　隅丸方形の土坑である。一辺約90cmである（図377）。

〔土坑S34103〕　長円形の大形の土坑だが、平面形は北半分しか検出し得なかった。直径90cm、深さ約20cmをはかる（図377）。いずれの遺構も用途・機能は不明である。

2）02－2区

a．第13面

T.P.約－0.9～0.8mで検出した。東にいくに従い低くなる。特に東端は溝状に落ち込む（図376）。遺構・遺物とも検出できなかった。全調査区中で最も低い標高となる。

2）02－3区

a．第14面

東半が一定の高さを保って高く、中央の溝S33070から西にかけて急激に谷状におちる。東半の平坦な部分で南北方向の2条の溝を検出した（図376）。東側の溝S33071と西側の溝S33070では溝S33071の方が一層上面から検出したので、溝S33070の方が一段階古い。

〔溝S33071〕　幅55cm、深さ15cmをはかる（図377）。断面V字状をなす溝だが、人為的な埋め戻しが行われた形跡はなかった。

〔溝S33070〕　幅30～40cmをはかる。谷と台地の境界に立地する。

（3）小結

02－4区第15面で検出した遺構が人為的な可能性がある以外は、顕著な遺構・遺物は認められない。

2．遺物

（1）土器（図375、写真図版142）

1）各調査区の出土品

a．02－3区遺構出土

弥生時代中期の遺物はプライマリーな遺構面に伴うものはなく、02－3区の古墳時代の自然流路S33100に混入した2点があるにすぎない。従って、02調査区の近隣の地区から運ばれてきた可能性が高い。

（9004）は壺の体部片で上方に3帯の櫛描き簾状文を施す。0.9cm幅に8条の施文である。弥生時代中期後半の遺物と考えられる。

（9005）は大形の甕の体部から底部。外面ヘラミガキ、内面はハケメの後に斜めに交差するミガキがはいる。生駒山西麓産の胎土。底径9.8cm。流路の遺物なので上流より混入したものであるが、このような大甕が存在することから、02調査区の周辺に方形周溝墓等の墓域があった可能性も示唆される。

第4節　弥生時代後期～庄内式期の様相

1．遺構面と遺構（図378～380、写真図版138・139）

（1）概要

植物遺体堆積層とシルト層の互層の上面に堆積した黒色シルト層～粘土層が弥生時代後期に広くこの地域にみられる鍵層であり、この層上面を弥生時代後期遺構面とした。既往の調査成果では99－5区から7区にかけて、これに相当する遺構面は、浸食や下層の弥生時代中期の方形周溝墓造営による人為的な隆起や削平の影響を受けて微高地が形成される。この微高地に土器や木・石が散乱してみられる。しかし、今回の調査では該当面からは遺構・遺物は検出できなかった。

この上層はさらに浸水状態にあったと思われる、細かい粒子の灰色シルト層が堆積していた。灰色シルトは何層かに分層可能であり、分層の境界は短い時間の経過があったためと考える。T.P.0.8～－1.3mで各区とも厚い砂の堆積に覆われる。この砂層には弥生時代中期から古墳時代の土器を含み、なかでも弥生時代後期から庄内式期の土器が最も多くみられる。堆積状況、堆積高の比較、遺物の時期からこの砂層を99・01調査区で広範囲にみられた瓜生堂分流路と判断し、02－4区でこの流路の東肩を検出した。この砂層に至るまでの層位・面を弥生時代後期～庄内式期層・遺構面として捉えた。

（2）各区の様相

1）02－4区

灰色シルト層の2面が間に砂を挟み、遺存状況がよかったため、溝状の遺構等や低いところでは人の足跡を検出した（図378）。

a．第10面

東南部が隆起して高くなり、そこから北西にいくにつれ低くなる地形をとる。最も低いところで不定形の土坑S34090を検出した。また、土坑S34090の北側では人の足跡を検出した。足跡の数は多くなく、ぬかるんだ地表面を歩行した痕跡と推測できる。

b．第9面

T.P.0.4m前後で検出した。第10面同様、浸水した灰色シルトの上面で人の足跡を検出した。第9面は中央を深さ30～40cmの自然流路が流れ、東西に微高地を形成する。東の微高地の北側で方形に巡る溝S34080と土坑S34081を検出した（図378・380）。

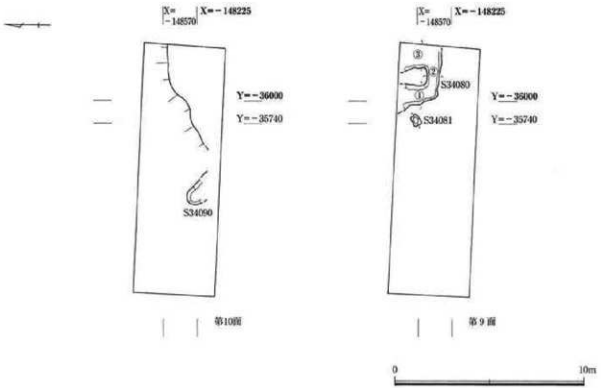


図378　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－1
（02－4区：第10面、第9面）

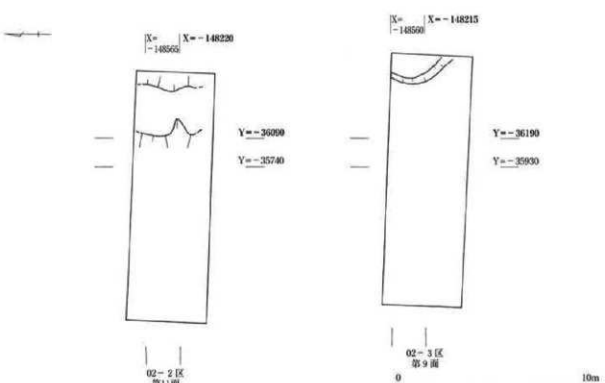


図379　弥生時代後期～庄内式期遺構面平面図－2
（02－2区：第11面、02－3区：第9面）

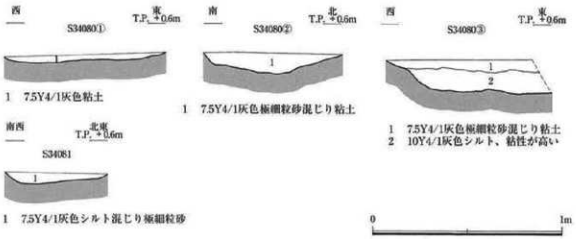


図380　02－4区第9面遺構断面図

〔溝S34080〕　幅0.8m、深さ10～20cm程度の溝で、コの字状に屈曲する（図380）。溝S34080及びこの遺構面包含層中から同一個体の庄内式の甕の破片が出土している。遺物の存在は足跡とともに付近で人間が生活していた可能性を示す。02－4区付近では弥生時代前期に続き集落の存在も考えられる。さらに東部の地域の様相が解明されるのを待ちたい。

2）02－2・02－3区

02－2区・02－3区とも同様に古墳時代の洪水砂を除去すると足跡と思われる痕跡や植物の根幹などを検出した。それ以外は地形のわずかな高低差や溝状の窪みを検出したにすぎない（図379）。

（3）小結

02－4区を除いては、弥生時代後期～庄内式期の生活痕跡は希薄といえる。

2．遺物

（1）土器（図375、写真図版142）

1）各区の出土品

a．02－4区遺構ほか出土

〔溝S34080〕　第9面の溝S34080及び包含層中より出土した庄内式期の甕の頸部から体部片が同一個体であった（9003）。

b．02－3区遺構出土

〔自然流路S33100〕　古墳時代の流路に当該期の土器とともに、混入と思われる弥生時代後期から庄内式期の遺物が一定量認められた（9006～9015）。このうち（9006・9007・9009・9013）は生駒山西麓産胎土。（9006）は高杯の脚部で、2段の透孔と刻目文と、直線文を施す。（9007）の小形甕は内部にヘラ状の工具痕が残る。（9008・9009）は壺の口縁部。（9010～9012）は庄内式期前後の甕の口縁部から体部。（9013

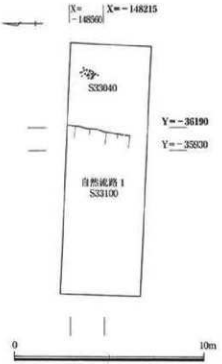


図381　古墳時代遺構面平面図
（02－3区：第5面）

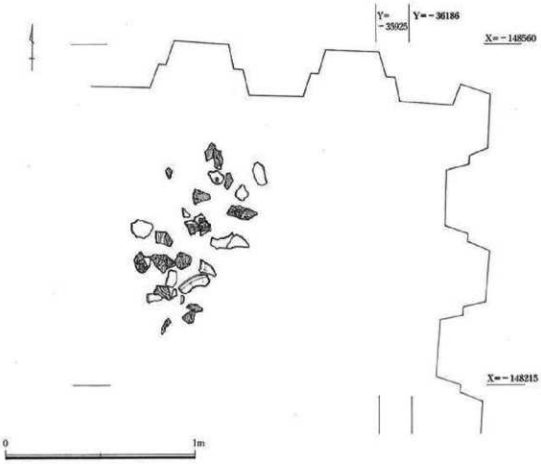


図382　02－３区第５面須恵器出土状況図

～9015）は甕か壺の底部であり、（9014）は底部に穿孔をもつ。

第５節　古墳時代の様相

１．遺構面と遺構（図381・382、写真図版139）

（１）概要

自然流路の氾濫による砂の堆積によって、弥生時代後期にはT.P.－0.2～0.1m前後だった地表が、一挙に２m近くT.P.2.0m付近まで上昇する。02－４・２区でも同様の洪水による砂の堆積がみられる。この砂層にはわずかに弥生時代中期の土器を含むが主に弥生時代後期から古墳時代中期までの遺物で占められるので、古墳時代中期以降の流路と考える。

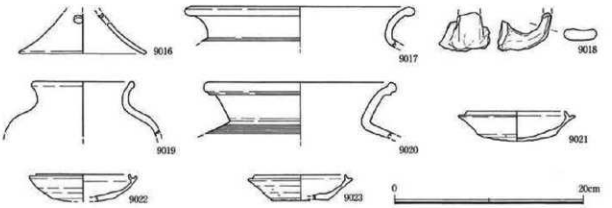
（２）各区の様相

１）02－３区

ａ．第５面

〔自然流路１（Ｓ33100）〕　流路の東端を検出した（図381）。

この流路とほぼ同時期の古墳時代の自然流路（自然流路１）をこれより西の01－１区から99－３区の範囲で検出している。同一の流路と考えるのが自然で、今回その東端が分かったことで流路の幅を東西約200mと確定した。時期や規模から考えて旧大和川の小阪合分流路の分岐流路に相当すると思われる。



第8面〔S33100（9016）〕、第5面〔S33040（9017・9018）〕、第5・4面〔（9019～9021）〕、第3・2面（9022）、第2面〔S33002（9023）〕

図383　古墳時代土器実測図（02－3区：遺構・包含層出土）

松田順一郎氏が（財）東大阪市文化財協会45次調査時に、この付近の自然堆積を東西幅200mにわたって連続的に観察し、考察している（東大阪市文化財協会1999c）。それによると瓜生堂遺跡でみられる流路は小阪合分流路から分岐した若江分流路がさらに北上して瓜生堂分流路と西岩田分流路に分岐するとあるが、当流路はこのうちの瓜生堂分流路にあたると考えられる。

〔須恵器集積S33040〕　自然流路1（S33100）の東岸では須恵器や土師器がまとまって一定量出土したが、出土状況から淀みにたまったものと思われる（図382）。

2）02－4区・02－2区

古墳時代の遺構・遺物とも検出されなかった。

（3）小結

古墳時代は、洪水の影響を受けた湿地状の環境だったため生活を営むには困難だったと想定される。

2．遺物（図383、写真図版142）

（1）土器

1）各調査区の出土品

a．02－3区遺構・包含層出土

遺物の多くは02－3区の自然流路1（S33100）かその付近の包含層で出土した。

〔自然流路1（S33100）〕　（9016）は土師器の高杯脚部である。

〔須恵器集積S33040〕　（9017・9018）は第5面の流路東端にあたる須恵器集積（図382）からの出土である。S33040からは6世紀後半代の須恵器の甕や壺が散乱して出土した。多くの甕片は（9017）の口縁部につながる同一個体と思われる体部片だが、器形を復原できなかった。出土状況も土坑などの掘方を確認できず、窪みに溜まったような状態であった。（9017）は須恵器甕口縁部で口径23.0cm。体部にカキメ痕を巡らす。（9018）は土師器甑の取っ手である。

〔包含層ほか出土〕　（9019～9022）は古墳時代から中世遺構面の包含層より出土した。（9023）は上層遺構面の浅い溝からの出土。（9021～9023）はいずれも杯身で、（9023）は外形が直線的である。

02－3区で出土した古墳時代の遺物はいずれも6世紀後半～7世紀初頭に属することより、自然流路1（S33100）はここではこの時期を下限とする可能性が高い。なお、99・01調査区の自然流路1は古墳

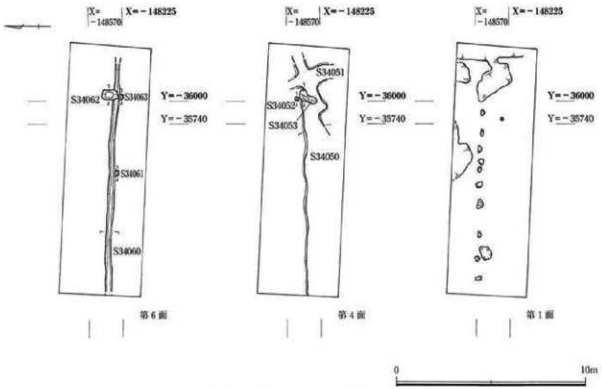


図384　中世遺構面平面図－1
（02－4区：第6面、第4面、第1面）

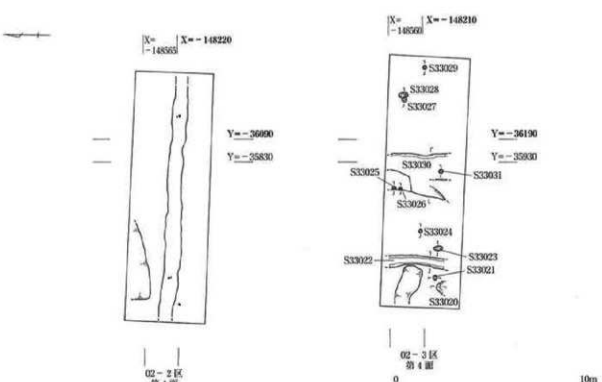


図385　中世遺構面平面図－2
（02－2区：第4面、02－3区：第4面）

時代前・中期が中心時期であるが、下限は一部古代にまで及んでいる可能性が考えられる。

第6節　古代・中世以降の様相

1．遺構面と遺構　（図384～386、写真図版140・141）

（1）概要

中世では、12世紀代以降の遺物を含む鋤溝や東西方向の畦畔・溝などが数面にわたって検出された。

（2）各区の様相

1）02－4区

a．第6面

02－4区の中世最古面ではほぼ真東西にのびる溝を1条検出した（図384・386）。

〔溝S34060〕　幅40cm、深さ10cmをはかる。遺物は認められなかった。この遺構面包含層は灰色のシルトで細かな粒土であり、水田などに利用されていた可能性が高い。とすると、この溝は区画・排水溝の機能をもつと考えられる。

b．第4面

やや南にふるが、やはり東西方向の大畦畔S34050を検出した（図384）。大畦畔にとりつく南北の支線畦畔S34051も若干残存する。

〔畦畔S34050〕　幅1.2m、高さ20～30cmをはかる。

第6面、第4面とも12～13世紀代の瓦器や瓦片などを含む。

c．第1面

中世後半以降近世に近い遺構面と考えられるが、近代以降の攪乱により時期を特定することができなかった。整地されており、住居など生活区域として利用されていたといえる。柱穴などは検出されなかったが、東西方向にほぼ半間（0.9m）の等間隔に並ぶ石列を検出した。石は長辺が40～50cm程度の大きさで、花崗岩質である。加工はされておらず自然石であるが平らな面を上にして据えられていた。石の下に掘方などは確認できなかった。よって、この石の上に柱木をおいた礎石としたものか、あるいは通行するための敷石としたかなどは不明である（図384）。（財）東大阪市文化財協会45次調査でも同様の石列が検出されている。

2）02－2区

a．第4面

中世以降はほぼ同じ位置に東西方向の畦畔が踏襲される。畦畔は幅1mの大きなものである。13世紀後半から14世紀代の瓦器片や陶器・磁器などを含むが、遺物量はわずかである。02－2区は土質からも連綿として水田として利用されたことがうかがえる（図385）。

3）02－3区

b．第4面

他の調査区とは土質が異なり、整地が行われている。溝や土坑を検出したが、建物は復原できず、集落の区画や排水の溝や、建物柱穴と断定することはできなかった。遺構・包含層ともに瀬戸や常滑などの陶器片を含み、時期的にも14世紀以降の遺構面と考えられる（図385）。

（3）小結

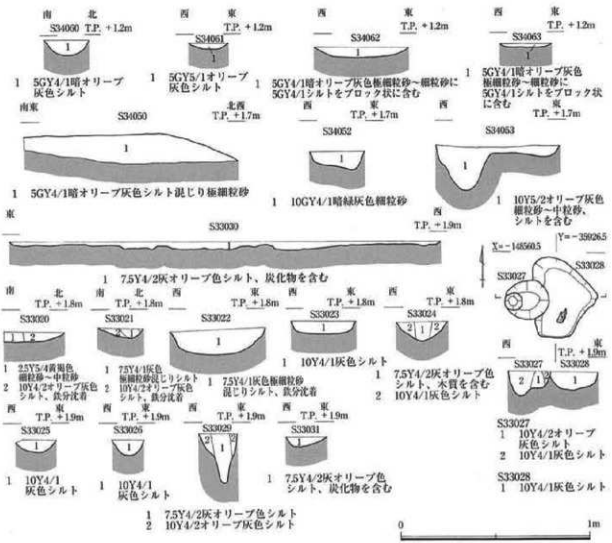
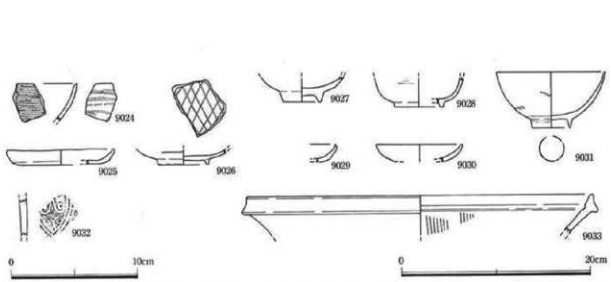


図386　02－4・3区中世遺構断面図



02－4区　第4・3面〔S34041（9024）〕、第2・1面（9025）、
02－2区　第5面〔S32010（9026・9029）〕、第4面（9027・9028）、第6面〔S32022（9030）〕
02－3区　第3・2面（9031・9033）、第2・1面（9032）

図387　中世土器実測図（02－4・2・3区：遺構・包含層出土）

01年度調査では02－３区より西の01－１区で井戸や柱穴などの集落に伴う遺構を検出したが、02年度調査では02－２区より東は主に生産域として利用されていたことが判明した。中世の集落の東限は01－１区から02－３区周辺だったと思われる。

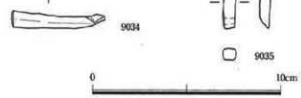


図388　中世以降金属製品実測図
（02－４・２区：遺構・包含層出土）

２．遺物（図387・388）

（１）土器

１）各調査区の出土品

ａ．02－４区遺構・包含層出土

（9024・9025）の２点である。いずれも小片だが、12世紀代の瓦器椀と、土師皿である。

ｂ．02－２区遺構出土

（9026～9030）中で、（9026・9027・9030）は02－４区とほぼ同時期の遺物であろう。（9027）は陶器の碗。（9028）は国産染付磁器碗で18世紀以降の近世のものである。

ｃ．02－３区包含層出土

図化し得たのはわずかである。（9031）は染付磁器碗で体部と高台内に線状の文様が描かれる。（9032）は瓦質の土器片で、外面に菱形あるいは桃核状の、区画内に蕨手の文様を線刻してある。時期や全体の器形は不明である。（9033）は備前焼のすり鉢口縁部である。（9031・9033）は近世の遺物である。

（２）金属製品

１）各調査区の出土品

02調査区からは数点の金属製品が出土した。そのうち２点を図示する。（9034）は煙管の吸口部である。吹管より先を欠損するが、おそらく「羅宇字管」の可能性が高い。（9035）は鉄釘。下部を欠損する。前者は02－４区の中世包含層から、後者は02－２区第４面からの出土。　（手島・川瀬）

第７節　まとめ

今回の確認調査では中世の水田畦畔など以外には、顕著な遺構・遺物を検出し得なかった。西側の99・01調査区に比べると遺構密度は希薄である。よって、瓜生堂遺跡の東端をほぼ限定できたといえる。

今回の調査成果を列挙すると以下の通りである。

①地形形状として、01－１区～３区で遺構面が形成された微高地は東にいくに従い次第に低く、02－２区で最低となる。この地形を反映して、02－２区は湿地状や沼地状で中世に至るまで遺構は形成されない。02－４区で再び地表高が上がり、地盤が安定する。そのため弥生時代前期～後期にはここまで人間の活動が及んでいた可能性があり、瓜生堂遺跡のさらに東に位置する遺跡群との関連も考えられる。

②古墳時代中期の小阪合分流路から分岐する瓜生堂分流路の東端を検出した。これによって、この流路の幅が東西約200mにわたることが判明した。

③岩田遺跡とも連なる中世の遺構については、01－１区辺りを東限とし、それより東は生産域であると判明した。これによって、中世の集落域の範囲もほぼ確定できた。　（第６節２－（２）以外は川瀬）

〈瓜生堂遺跡関係文献（発掘・試掘調査ほか）〉

文献略号	文献名
荻田1966	荻田昭次「大阪府河内市瓜生堂弥生遺跡に出土した銅利器片」『古代学研究』42・43、1966
荻田・藤井1966	荻田昭次・藤井直正「大阪府河内市瓜生堂遺跡」『日本考古学協会第32回総会研究発表要旨』1966
河内市教委 調査グループ1966	河内市教育委員会・瓜生堂遺跡調査グループ「瓜生堂遺跡」1966
府教委1967	大阪府教育委員会「東大阪市瓜生堂遺跡の調査」1967
花園高地歴部1970	大阪府立花園高校地歴部『河内古代遺跡の研究』1970
調査会1971	中央幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡－中央南幹線下水管渠築造工事に伴う遺跡調査概報』1971
調査会1972	瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡　資料編』1972
調査会1973	瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅱ』1973
大文セ1975	(財)大阪文化財センター『近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書』1975
芋本1975	芋本隆裕「大阪ガス中央幹線埋設に伴う調査」『東大阪市遺跡保護調査会ニュースNo.1』東大阪市遺跡保護調査会1975
市保護会1975a	東大阪市遺跡保護調査会「東大阪市遺跡保護調査会ニュースNo.2」1975
市保護会1976	東大阪市遺跡保護調査会『上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』1976
調査会1976	瓜生堂遺跡調査会『西岩田・瓜生堂遺跡試掘調査報告書』1976
市保護会1977a	東大阪市遺跡保護調査会「東大阪市遺跡保護調査会ニュースNo.7」1977
市保護会1977b	東大阪市遺跡保護調査会「東大阪市遺跡保護調査会ニュースNo.9」1977
市保護会1978	東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会ニュースNo.10』1978
府教委1978	大阪府教育委員会『瓜生堂遺跡発掘調査概要』1978
市教委1979	東大阪市教育委員会「瓜生堂上層遺跡・鬼池遺跡発掘調査報告」1979
大文セ1980	(財)大阪文化財センター『瓜生堂』1980
市教委1980	東大阪市教育委員会「瓜生堂遺跡東限部の試掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要1979年度』1980
市保護会1980	上野利明「西岩田遺跡出土の土師器について」『東大阪市遺跡保護調査会ニュース」16』1980
大文セ1981	(財)大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』1981
調査会1981	瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅲ』1981
府教委1982	大阪府教育委員会『瓜生堂遺跡説明資料』1982
大文セ1983	(財)大阪文化財センター「若江北」1983
大文セ1984	(財)大阪文化財センター『巨摩・若江北（その2）』1984
市協会1984	(財)東大阪市文化財協会「瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』1984
市協会1989	(財)東大阪市文化財協会「瓜生堂遺跡の調査」『(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度』1989
市教委1990	東大阪市教育委員会『山賀遺跡発掘調査概要－瓜生堂遺跡発掘調査概要－』1990
市協会1990a	(財)東大阪市文化財協会『(財)東大阪市文化財協会概報集1989年度』1990
市協会1990b	(財)東大阪市文化財協会「(財)東大阪市文化財協会ニュースVol.5－No.1」1990
大野1992	大野　薫「瓜生堂遺跡北東辺部の調査」『第25回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』1992
市協会1992a	金村浩一「瓜生堂遺跡第39次調査（その1）」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1991年度』1992
市協会1992b	金村浩一「巨摩廃寺遺跡第7次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1991年度』1992
大文セ1993a	(財)大阪文化財センター『巨摩・若江北（その3）発掘調査概要』1993
大文セ1993b	(財)大阪文化財センター『巨摩・若江北（その3）』1993
大文セ1994	(財)大阪文化財センター『瓜生堂遺跡発掘調査報告』1994
大文セ1995	(財)大阪文化財センター『巨摩・若江北発掘調査報告－第4次－』1995
大文セ1996	(財)大阪府文化財調査研究センター『巨摩・若江北発掘調査報告－第5次－』1996
市協会1996	井上伸一「瓜生堂遺跡第41次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1994年度』1996
市協会1996	(財)東大阪市文化財協会『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1994年度』1996
松宮1996	松宮昌樹「瓜生堂遺跡における方形周溝墓変遷の一例」『第33回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』1996
三好1996	三好孝一「東大阪市若江北遺跡の弥生時代集落」『第34回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』1996
市協会1997a	(財)東大阪市文化財協会『瓜生堂遺跡試掘調査報告』1997
市協会1997b	松宮昌樹「瓜生堂遺跡第42次調査概報」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度（1）－』1997
市協会1998	(財)東大阪市文化財協会『(財)東大阪市文化財協会概報集1997年度』1998
市教委1999	東大阪市教育委員会「瓜生堂遺跡第46次発掘調査資料」1999
曽我1999	曽我恭子「東大阪市瓜生堂遺跡の調査」『第39回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』1999
市協会1999a	(財)東大阪市文化財協会「瓜生堂遺跡第40次調査」『関西電力地中送電線埋設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』1999
市協会1999b	『瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告－電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告－』1999
市協会1999c	(財)東大阪市文化財協会　1999　「瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告」
大文セ2000a	(財)大阪府文化財調査研究センター「瓜生堂遺跡99発掘現場公開資料」2000
大文セ2000b	(財)大阪府文化財調査研究センター「瓜生堂遺跡99発掘現場公開資料－2」2000
市教委2000a	東大阪市教育委員会「瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書　平成11年度」2000
市教委2000b	東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報　平成11年度』2000
市教委2000c	東大阪市教育委員会『瓜生堂遺跡第49次発掘調査報告書』2000
福永2000	福永信雄「最近の瓜生堂遺跡における調査成果」『第40回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』2000
市教委2001	東大阪市教育委員会「瓜生堂遺跡第47次発掘調査中間報告書　平成12年度」2001
市教委2002	東大阪市教育委員会『瓜生堂遺跡第46次、第47－1・2次発掘調査報告書』2002
大文セ2002	(財)大阪府文化財センター「発掘現場公開資料　瓜生堂遺跡の調査」2002
大文セ2004	(財)大阪府文化財センター「瓜生堂遺跡2」2004
本報告書	本報告書

〈参考文献〉

秋山浩三 1989「山陽系土器について－山域地域－」『京都府弥生土器集成』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

1992「弥生前期土器」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社

1993「大足」の再検討」『考古学研究』40－3 考古学研究会

1995「各地域での弥生時代の始まり 吉備」『弥生文化の成立』（角川選書265）角川書店

1999「近畿における弥生化の体相」「論争 吉備」考古学研究会

2001「大阪府下腰帯具集成Ⅱ」「大阪文化財研究』20（財）大阪府文化財調査研究センター

2002 a「弥生の石棒」『日本考古学』14 日本考古学協会

2002 b「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』古代吉備研究会

2002 c「弥生開始期における土偶の意味」『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター

2002 d「河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって」「志紀遺跡（その２・３・５・６）」（財）大阪府文化財調査研究センター

2002 e「拱河泉の古墳系土器」「邪馬台国時代の吉備と大和」香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館

2002 f「大阪府の鈴 帯」「鈴 帯をめぐる諸問題」奈良文化財研究所

2003「弥生時代・徴内石庖丁の生産と流通」「道具の生産流通と地域関係の形成～縄文から古墳まで～」古代学協会中国四国支部

2004 a「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」「考古論集 河瀬正利先生退官記念論文集」河瀬正利先生退官記念事業会

2004 b『史跡池上曽根99』（財）大阪府文化財センター（編）

市本芳三 2001「大阪地域の平安時代後期瓦の様相」『第４回拱河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け－11・12世紀の寺院の考古学的研究－』

井藤暁子 1981「入門講座弥生土器－近畿Ⅰ－」「月刊考古学ジャーナル」195 ニューサイエンス社

瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡 Ⅰ（本文編）Ⅱ（図録編）』

大久保徹也 1990「下川津跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ 下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

1995「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」「上天神遺跡」香川県教育委員会ほか

大阪府教育委員会 1986『稲葉遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

1993『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅲ』

1994『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』

1996 a『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅴ』

1996 b『新庄遺跡』

1997『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅵ』

1998『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅶ』

1999『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ』

2000『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅸ』

（財）大阪文化財センターほか 1984『山賀（その３）』

1985『美園』

1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』

（財）大阪府文化財センター 2002「大坂城跡発掘調査報告Ⅰ」

（財）大阪府文化財調査研究センター 1992『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』

1993『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』

1996 a『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』

1996 b『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書－第５次－』

1997『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』

2001『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩⅧ』

2002a『大坂城址Ⅱ』

2002b『志紀遺跡（その２・３・５・６）』

大阪府立弥生文化博物館 2003「弥生創世記－検証・縄文から弥生へ－」

尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

奥村寛純（六代目丹嘉 大西重太郎監修）1976『伏見人形の原型』伏例舎

梶山彦太郎・市原 実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店

川越俊一 1983『大和出土の瓦器をめぐる二、三の問題』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』64－2 日本考古学会
小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 京都市埋蔵文化財研究所
佐原　真 1868「近畿地方」『弥生土器集成 本篇2』日本考古学協会
清水真一 1992『円頂を持つ祭祀用？木製品』『みずほ』5 大和弥生文化の会
鈴木秀典 1982『長原遺跡発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会
第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会 2003『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－発表要旨集』
田代克己 1986『石器・木器をつくるむら、つくらないむら』『弥生文化の研究』7 雄山閣出版
田畑直彦 1997『畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討』『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会
地学団体研究会大阪支部 1999『大地のおいたち』築地書館
中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
朝鮮人強制連行真相調査団 1993『朝鮮人強制連行調査の記録 大阪編』柏書房
寺沢　薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
中西靖人 1984「前期弥生ムラの二つのタイプ」『縄文から弥生へ』菅塚山考古学研究所
　1989『大阪府瓜生堂遺跡』『探訪 弥生の遺跡 畿内・東日本編』有斐閣
　1992『農耕文化の定着』『新版古代の日本 5 近畿Ⅰ』角川書店
西谷　彰 1999「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢』33 大阪大学大学院文学研究科
日本貨幣商協同組合1969『日本貨幣型録 1970年版』
橋本久和 1977「中世日常雑記類の分析」『大阪文化誌』第2巻第3号
　1980「高槻における中世土器の編年」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
春成秀爾 1991「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』35 国立歴史民俗博物館
東大阪市中学校社会科教育研究会 1991『わたしたちの東大阪』(第33版)
(財)東大阪市文化財協会 1983『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
(財)東大阪市文化財協会 1983『若江遺跡第25次発掘調査報告書』
(財)東大阪市文化財協会 1988『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ 遺物編 木製品』
福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32－1 考古学研究会
福永信雄 1989『若江寺若江城古瓦譜』(内部資料版)
　2001a「東大阪市鬼虎川遺跡について」(大阪府立弥生文化博物館 弥生サイト講座1資料)
　2001b「瓜生堂廃寺」第4回摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け－11・12世紀の寺院の考古学的研究－」
藤井直正 1983『東大阪の歴史』(大阪・市史双書2) 松籟社
松本武彦 1985「原始・古代における弓の発達」『待兼山論叢』18 大阪大学大学院文学研究科
松宮昌樹 1997「瓜生堂遺跡と周辺遺跡の動態」『大阪の弥生遺跡Ⅰ』大阪の弥生遺跡検討会
三好孝一 1987「生駒西麓型土器についての一視点」『花園史学』8 花園大学史学会
　2001a『手工業生産と集落』『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編 学生社
　2001b「河内湾東・南縁部における弥生文化の受容と定着」『みずほ』35 大和弥生文化の会
横田賢次郎・森田　勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
森田克行 1990「祇津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
若林邦彦 1997「中河内弥生中期土器にみる諸相－『生駒西麓型土器』のもつ意味－」『考古学研究』43－4 考古学研究会
　1999a「大阪平野における拠点集落の性格－河内平野遺跡群を中心として－」『みずほ』31 大和弥生文化の会
　1999b「中・四国～近畿地方弥生地域社会成立に関する基礎的考察－時間軸整備を中心に－」『調査研究報告』2 (財)大阪府文化財調査研究センター
　2000「河内潟沿岸地域における弥生文化成立期の様相」『第47回埋蔵文化財研究会 弥生文化の成立 各地における弥生文化成立期の具体像 発表要旨集』埋蔵文化財研究会
　2001「弥生時代大規模集落の評価－大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に－」『日本考古学』12 日本考古学協会

報告書抄録

ふりがな	うりゅうどういせき1
書名	瓜生堂遺跡1
副書名	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(財) 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ名	第106集
編著者名	川瀬貴子・秋山浩三 (編)
編集機関	(財) 大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市竹城台3丁21番4号　大阪府教育委員会文化財調査事務所内
発行年月日	2004年2月27日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
瓜生堂遺跡	大阪府(おおさかふ) 東大阪市(ひがしおおさかし) 岩田町(いわたちょう)・ 西岩田町地内(にしいわたちょうちない)	27227	95	34°39′47″	135°36′10″	2000.01.14 ～ 2004.03.31	2,056㎡	近畿日本鉄道 奈良線連続立体 交差事業に伴う

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
瓜生堂遺跡	集落・ 生産域	弥生時代前期	竪穴住居・溝・土坑・畦畔	土器・広鍬・磨製石斧・砥石・土製品・木製品	古い段階の弥生前期集落を明確化 近畿地方で最古に属する水田遺構を検出
	集落・ 墓域	弥生時代中期	方形周溝墓群・円形周溝墓・溝・土坑・井戸	組合式木棺・土器・土製品・木製品・石製品	集落と方形周溝墓群が遺跡の北東にも存在することをあらためて明確にした
	集落・ 流路	弥生時代後期～ 古墳時代	集石遺構・溝状土坑・畦畔・自然流路	埴輪・土器・自然木・木製品・自然石・石製品	「小阪合分流路」に相当する流路が東西幅約200mの範囲であることを特定した 周辺における埋没古墳の存在を示唆した
	集落	古代・中世以降	掘立柱建物・大溝・畦畔・鋤溝・池・溝・井戸・土坑	瓦・土師器・須恵器・瓦器・陶器・茶臼・土製品・木製品	東の岩田遺跡に繋がる平安時代末から中世における集落の形成・変遷の様子が窺え、当地周辺の中世村落を考える材料となる

(財) 大阪府文化財センター調査報告書　第106集

瓜 生 堂 遺 跡 1

－本文編－

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2004年2月27日

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号